

俺は主人公になれない ～ 〴〵ただの石ころ、が、誰かの 〴〵特別、に
なる物語～

岩重八八十

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【なろうでも公開中】

<https://ncode.syosetu.com/n6275gx/>

何の変哲もない道ばたに転がる石ころを摘まみ上げ、宝物にした事はないだろうか？

“主人公”にはなれない石ころの様にちっぽけな少年の “特別な日常” と戦いを描いた現代風魔法学園バトルコメディ

——その軌跡は、確かな “輝き” を持つだろう。

目次

プロローグ

1 話 “ファルマ” という人間は、特別な存在なんかじゃない。

2 話 破滅の魔女、ルクシエラ

外伝2・5 話 僕の事を『主人公』だ、なんて呼ぶヤツが居る。

15

第一部 俺は主人公になれない

3 話 校長って実は暇なんですか？

4 話 マジツククラフト工房

5 話 俗に言う“主人公席”ってヤツだ！

6 話 教科書忘れたあ……。

7 話 ご歓談くださいと言われても!!

8 話 打ち解けたって言えるかなあ!?

9 話 友達はできそう？

10 話 うおおおうぜえ……。

11 話 珍しい組み合わせになりましたね

12 話 3秒でお届け

13 話 俺は一体何と戦っているんだ……？

14 話 あーあ。もう滅茶苦茶ね。

15 話 ユウさんを助けなきゃ……!

16 話 やってやれツ主人公ツ!!

17 話 『願い』が意味を持つ不安定なこの世界

17・5 話 一応処女作

18 話 ユウさんが攫われた!?

101

97

92

86

80

75

69

65

61

56

50

46

40

34

29

25

20

9

1

19話 ただの石ころでしかない存在。 “ファルマ”に、そんな強
さなんてない

20話 ファルマ、ありがと

現時点のキャラクター紹介

21話 自分勝手な夢

22話 久しぶりだね

23話 “永久の森”

24話 これからも仲良くしようね？

25話 昔みたいに

25・3話 楽しい楽しいアルバイトの時間ですわ！

25・6話 何かありました？

25・9話 お、鬼だ……

26話 その粗末なモノは一体何かな……？

27話 そんなにハードル低いイベントなのかああ!!?

27・4話 私、ツールちゃん

27・8話 なんでこんな大繁盛してるんだよ!!

28話 “幸せ”だよね？

29話 そういう人間を貴方が集めたんですよ？

29・5話 二人ともギルティですわ！

30話 そんな現実なんてどうだって良いよね？

31話 お目が高いですねえ！

32話 無様で、醜いなあ

33話 “これからも友達でいよう”

34話 ……バカだ、俺。

35話 目が、覚めたんだ

36話 聞かないでください | 238

37話 // 大事な話がしたい" | 243

38話 // 悪しき願い" | 246

39話 私が甘い // 夢" を見せてあげるのに。 | 252

40話 『ナイトメア・ダークマインド』 | 257

41話 これが俺の、真正銘の全力だあッ!! | 265

42話 俺は主人公になれない | 270

43話 何があつたのかは聞かないよ | 278

44話 掛け替えの無い、一つのコメディ | 284

45話 友達居たんだ | 291

46話 俺はなんてモノを作りだしてしまつたんだ | 295

46・5話 『服だけ溶かすスライム』う!? | 300

47話 マジかけえッス | 305

48話 終わったあ……。 | 310

49話 忍者かよ | 314

50話 ルクシエラさんの椅子だった人 | 319

第2部 最弱の八天導師

51話 八天導師を再編する!! | 325

52話 人手がッ!! マジで足りんのじゃ!!! | 330

53話 俺は、弟子じゃ無いです | 337

53・5話 ストーカーではありませんっ! | 341

54話 助けてっハル君……!! | 346

55話 一緒に帰ろう | 351

56話 // 第四の賢者" | 355

57話 新入部員のアリシアさんです | 361

58話	好きになっちゃったんだからしょうが無い	365
58・1話	生き恥の様なものを感じています	369
58・2話	君が目指すべき魔導は、『決死の奥義』なんかじゃない	375
58・3話	……貴方一体何を企画したんですの？	380
58・4話	ヒーラーってどういうことだよ!?	384
58・5話	……改良の余地、有り	388
58・6話	『我が戦いの道は続く――』	392
59話	お、俺も遂に異能力者に……？	397
60話	……あ、社会的に死んだわ	402
61話	下級生に哀れまれてる!?	407
62話	子供の体力、無尽蔵かよ……	413
63話	俺は強くないけれど。	418
64話	八天導師の総帥アイル・フリーダムの日	424
65話	流石八天導師総帥っすね!	429
66話	ちび共が世話になってるみてーだから	435
67話	アイルは強くなったのね	439
68話	嫌われ者のエクレール	444
69話	ハルカとキータにお礼を用意しよう	449
70話	随分なご挨拶じゃねーか	454
71話	私は遂に“選ばれた”のだ!!	459
72話	何者二も縛られ又自由ヲ!!	463
73話	嫌な風を感じるのよ	469
74話	リーダーと同じ“八天導師”っすよね!?	475
75話	俺なんかには何ができるのか。細かい事は後で考えるツ!!	475

76話 僕達“八天導師”は個別戦力として遊撃って事か！

480

484

77話 こんなものが、キータの『願い』である筈が無いんだッ！！

78話 少し、昔話を聞いてくれないかしら

79話 今のアイルを救えるのは、貴方だけなの

80話 司どるは強欲な日常

81話 第二の切り札

82話 可愛そうなキータ君

83話 『エンデオブ・ダークゼロ』

84話 良いですか!? 良いですよね!!

85話 譲れない、たった一つの意地

86話 君は十二分に“特別”だと私は思うよ

87話 お前が“拒絶の闇”の正体か!?

88話 ちがいます。トーラちゃんが正しいのでーす

89話 この状況で匂いどころが判るのおかしいんじゃないか

なあッ!!?

90話 “最弱の八天導師”

91話 アンタの愛し方は、歪が過ぎるよッ!!

92話 どんな闇だって怖く無いんだッ!!

93話 いつもみたいに、笑ってくれよ

94話 だい、だい、だああああい好きでえすっ!!

外伝94.1話 俺はお前の為にも。そしてお前が愛する者の為

にも——お前を殺す

572

568

563

559

554

549

543

538

534

530

526

520

516

512

508

504

500

495

490

外伝9 4. 2話 こんなもの、そよ風のウチにも入らないわッ！

577

外伝9 4. 3話 面白い娘

外伝9 4. 4話 僕は、何も出来ないのか？

外伝9 4. 5話 僕に出来る全てをやる

外伝9 4. 6話 あいつの思い描く『主人公』であって見せようッ

！

外伝9 4. 7話 これが『世界の中心たる者』の力か

??話1 昔の記憶

??話2 ドライズとルクシエラさんが、来いって言ってくれたから。

??話3 ドライズ。ファルマ。私の弟子になってくれて、ありがとうございます

??話4 ホント、親子揃ってむちゃくちゃ言うなあ……

??話5 間違い無い。今まで見てきた魔法陣の中で、世界一すごい魔法陣だ……。

??話6 僕は君の魔法陣を見て——君の才能に嫉妬した

??話7 性癖歪み過ぎてて流石に私でも引く……

外伝9 4. 8話 哀れな存在でした。『初代異伝』は

??話8 弟子は、師匠に似るものじゃのう……

外伝9 4. 9話 君の名前は『シジアン』だ

??話9 お父様、でよろしいですか？

??話10 シジアンひょっとしてもう既に僕より有能なんじゃね？

??話11 これが、ボクの見つけた答えです

669

664

659

653

648

642

637

631

626

621

616

611

606

600

596

591

587

582

95話 ふあ、へ、は、ハル君!? | 675

外伝95・2話 様子がおかしい、という事ですか | 681

外伝95・4話 ボクがこの世界で「願う」事は。「フアルマ先

輩の幸せな生活」ただ一つ | 686

外伝95・6話 「永久の森」へ向かいましたよ!! | 692

外伝95・8話 「先輩を見守る会」です。因みにですが会長の

席は譲りません | 698

96話 名付けて、『神殺（かみごろし）』ッ!! | 705

97話 それの何処が、張りぼての強さなのですか | 711

98話 貴方の作る道具は、貴方にしか作れない物です | 716

99話 俺は、十分に特別だったのか…… | 721

100話 平凡な俺の非凡な日常（コメディ）はこれからも続い

ていく……。 | 725

幕間 戻って来た一時の日常

101話 それじゃあ——クサさん、で良いつすか? | 730

102話 マジすんませんでしたアツー!! | 735

103話 「究極のイーヴィル」を産み出す!?! | 740

104話 そしてもう一つは—— | 745

105話 僕の何かしらの権利が侵害されてる気がする | 749

106話 僕にも人権はあるんだからね!?! | 753

107話 この学園は僕も大好きなんです、絶対守って見せます!

108話 ドライズのモノでもねえよッ!!!? | 758

109話 今度こそ向き合う時が来たのだろう | 763

外伝109・5話 相談、乗ろうか? | 772

110話 ——あの頃のハル君も、こんな気持ちだったのかな

779

111話 違うもんツ!!

112話 ハル君——好きだよ

113話 いや、この一晩で何があったし

114話 ……デートとか、行かないの?

115話 “アリスと付き合い始めた”という事実

116話 それってデートのお誘いだよね?

117話 “普段通り”

118話 わからない!! デートなのかデートじゃ無いのか!?

819

119話 これでもう何も怖くないよね……ツ!?

120話 非日常を楽しもうぜ

121話 “k o k a”

122話 ズルいぜ、アリス……

122・5話 きつとこういう感覚が——幸せって言うんだろう。

123話 俺は“最弱の八天導師”だけど

第二部完結と休載のお知らせ

850 846 842

824

828

833

838

842

846

850

850

プロローグ

1話 “ファルマ” という人間は、特別な存在なんかじゃない。

昔は、自分が特別な存在だと思っていた。

いや、引かないで欲しい。本当に昔の、一桁くらいの年齢の頃の話だから。

当時から俺はアニメやゲームが好きで、そこに登場する主人公に憧れていた。

そして、なんの疑いもなく自分だってそんな『主人公』の一人なんだと思っていた。

でも、まあ、そんな都合の良い現実なんて何処にもないわけで。一年、また一年と過ごしていくうちに、気付く。

一つ一つの切っ掛けは本当にたいしたことが無い。

学級委員に立候補したら、多数決で圧倒的な大差を付けられて落選した、とか。

教員に冤罪で怒られて、弁明を聞いて貰えなかった、だとか。

すぐく仲が良かった幼馴染みがいて、意を決して告白してみたけどフラれたりとか。

まあ、なんていうか。

俺にとっては一つ一つが絶望の思い出なんだけど。後になって振り返ってみれば五万とある話。

でも、そういったありふれた失敗談の積み重ねは……。

自分は。

“ファルマ” という人間は、

特別な存在なんかじゃない。

ただの石ころみたいな人間だったんだって思い知るには十分だったんだ。

この世界は特別だ。

魔法を交えて文明は発達し、皆が快適な日常生活を送れる様になっている。街は人と活気に溢れ、技術は日々進歩している。

そんな世界で俺は数奇にも、特別じゃない人間でありながら特別な才能を持った選ばれし魔導士の卵達が集まる場所に身を置いている。

私立天導学園。

ルクシエラさんという俺の恩師のごり押しで思いつきりコネ全開の入学をってしまった。

この学園は六年制で、一から二年の初等部と三から四の中等部、最後に五、六年の高等部に別れている。

俺は四年生。筆記成績は下の上か中の下……八人しか居ないクラスの下から三番目だ。

その下に居る二人のクラスメイトも座学はこの調子だが実技・実戦ではトップクラスの活躍をしている脳筋派なので実質的には俺がクラスで一番劣っているという見解で間違い無い。

やはり、真に優秀な人間達と比べると俺の実力なんてこの程度のものだ。

……だから。

本当なら、こんな事するべきでは無かったのかも知れない。

なんてことは無い、いつも通りの放課後だった筈だ。

俺はルクシエラさんに使いつ走りを頼まれて学園を離れコンビニへとお使いに行っていた。

ご飯、スイーツ、日用品から簡単な魔法道具まで手軽に買い物できるから便利だ。

必要なモノを買いそろえ、綺麗な夕焼け空の下をのんびり歩いていたら。

突然悲鳴が聞こえたのだ。

気がついたら身体が動いていた。

駆けつけたのは、なんてことは無いとある公園。

声の主は尻餅を付いて、動けないで居る小さな子供。

俺はその子の前へ飛び出してマテリアライズという魔力から物質を精製する魔法によって作り出した槍を構えて防御の姿勢を取った。数秒後、鈍い衝撃を槍で受け止め、俺の身体が宙に舞う。

「あっ……!?!」

どさり、と地面に叩き付けられる。脳が揺れ、意識が朦朧とする。視界に映るのは、二つの影。

恐怖から、怯えた様子で未だに尻餅を付いたまま動けないで居る子供の姿と。

黒いもやのようなモノを身に纏った二足歩行の異形。目算三メートル、人型だが明らかに人間では無い異形。

謎多き化け物……「イーヴィル」の姿。

繰り返す。この世界は特別だ。

魔法なんていう未だ全容が解き明かされない神秘がある。

だからこそ魔法の源たる元素、魔力によって時に厄介な事件が起こるのだ。

俺は氣力を振り絞って、槍を杖代わりに立ち上がった。

「ぐ、何、してる……」

イーヴィルに対して俺は槍を投げ当てた。

歯は立たずに簡単にはじき返されるが不快と感じたのかイーヴィルの視線がこちらに向く。

「早く、逃げろッ!!」

イーヴィルからは視線を外さずに、俺は叫ぶ。

子供は、困惑しながらも立ち上がり走り去っていく。

ひとまず、当初の目的は達成出来た。

これからどうするべきか、俺はイーヴィルとにらみ合ったまま思案する。

未知の魔物、イーヴィル。

神出鬼没で、人に危害を加える魔物。

そして、今俺が対峙しているのは危険な大型イーヴィルだ。

一人で戦うなんて無謀過ぎる。

それでも、あそこで黙っているなんて出来なかった。

イーヴィルから一般市民を守る事は、まだ学生とは言え俺達『魔法使い』の役目なのだから。

『第二火炎魔法』!!」

右手を突き出し、魔法を発動する。右手を軸にポツリと炎が灯り、それはやがて巻き付くへビのようにうねる奔流へと成長し、伸びるようにイーヴィルに向かっていく!

縄のような炎に巻かれてイーヴィルは僅かに怯んだが、強く二、三回腕を振るうと炎は簡単にかき消されてしまった。

「効かない、か……」

判っていた事だ。

俺は特別じゃない。

颯爽と現れて、事件を鮮やかに解決していく、そんな主人公になんかなれない。

だけど、俺がそんなただの石ころであるとしても!

今、手の届く場所に目の前で傷つこうとしていた人が居て、見て見ぬ振りをするような人間にはなりたくなかった。

凡庸で、ちつぽけで、でも、そんな俺なんかでも信頼してくれる人が居る。

その想いに恥じるような人間にはなりたくなかった。

俺じゃ無くても良いのかも知れない。

他の誰かなら、もつと綺麗に、もつと簡単に、コイツを倒してしまえるのかもしれない。

でも、今この場所に居合わせたのは俺だったから。

だから、俺は『俺に出来る全てをやる』んだ。

「——か八か、アレをやってみるしかないかッ」

まだ、隠し球はある。

俺は走った。そして、転がっている槍を回収する。

そのまま槍の切っ先を地面に当て、引きずりながら走り続けた。

イーヴィルは俺を完全に排除対象と見なしたらしいその腕が迫っ

てくる。

筋骨隆々なその拳に当たってしまえばひとたまりも無いだろう。

「ッ」

槍の先端を地面から少し離して攻撃を回避した。

そしてすぐに体勢を立て直してまた槍を地面にこすりつける。

さっき俺が放ったのは火属性基礎魔法の第二階級。

学園の生徒なら専攻属性第二階級基礎魔法は三年生までに使えて当然というレベルの魔法だ。それが全く通じなかった。

ならば、もう一段階上の魔法を試すしか無い。

『『求むるは第三の叡智、制するは炎』——』

走りながら詠唱を唱える。

第三階級以上の基礎魔法は高等魔導に分類され、専攻の属性なら四年生で習得し詠唱や魔法陣無しでの発動は難しい。学年で言えば六年生となって漸く詠唱や魔法陣を省略して活用できる代物。

石ころみたいな俺に、詠唱破棄なんて背伸びした事は出来無い。

右手に神経を集中させる。『第二^{プロミネンス}火炎魔法』で発生する水流のような炎をグルグル束ねて球体にするイメージで、

「ゴアアアアア!!」

刹那、頬に鋭い痛みが走った。

遅れて状況を理解する。

詠唱をするという事は隙が生まれるという事。

魔法に集中するあまり回避行動が杜撰になり、イーヴィルの爪が頬を掠め肉を裂いたのだ。

「うあッ」

何とかかすり傷で済んだが、まともに喰らったら身体を貫かれかねない。

——集中しろッ!! カードを切る前に終わるつもりかよッ!!

自分自身を叱責し、改めて狙いを定める。

『『集いし業火は、煉獄の魔弾』』

詠唱と共に右手に集う火属性の魔力はごうごうと燃えさかる巨大な火球へと成長して。

大きく振りかぶって、魔法を発動した。

『第三火炎魔法』!!」

放たれた巨大な火球がイーヴィルへと向かう。

イーヴィルは回避しようとせず、飛来する火球を真っ向から見つめ、力強く拳を繰り出した。

イーヴィルの拳と火球が激突して、爆発が巻き起こる。

「嘘だろ!？」

避けようとしなかったという事は「避ける必要が無かった」という事だ。

炎の柱が立つが、イーヴィルの気配を確かに感じる……!

「なら、ダメ押しでどうだ!？」

立ち上る炎の柱に向けて、俺は槍を思い切り投擲した。

『弾ける、黒鉄の楔』ツ——『ヘビィ・ブラスター』!!」

槍が炎の柱に到達すると同時に、更なる大爆発を起こした。

これは俺個人が扱う「固有魔法」という代物で槍を触媒にして、金属と炎の反応により爆発を発生させるそこそこ威力のある魔法だ。規模として第二階級と第三階級の基礎魔法の中間程。

爆風が正面から吹きつけ、髪やローブが激しくはためく。

それだけ、威力は出た筈だ……!

「やったか……う？」

爆煙に巻かれ、視界が不明瞭になり俺は様子を伺った。

その、次の瞬間。

「グ、ガ、シャアア!!」

「なっ!？」

煙を突き破って、イーヴィルが突進してきた。

「ぐあッ」

そして俺の首を捕らえ、ギリギリと締め付け吊し上げる。

呼吸が詰まり、意識が朦朧としていく。

だが、霞む視界に映るイーヴィルは無傷などでは無かった。

——あと少し……! もう少しだけ食い縛れ……!!

途絶えそうな意識を必至に繋ぎ止め、両手でイーヴィルの拘束に抗

う。

本来であれば、この規模のイーヴィル。

俺なんか一人で倒すには無理がある。

だからこそ、無理も無茶も押し通して、俺の全てを懸けて最後まで戦う！

例え、ここで燃え尽きようとも構わない。それが“石ころ”なりの矜持だツ!!

「本当の、切り札……ッ」

何とか気道を確保し叫ぶ。

『求めるは第三の叡智、制するは光』!」

詠唱に呼応して、地面に刻みつけていた紋様が白い輝きを放つ!

『瞬け閃光、闇を斬り裂く白銀の裁き』!!」

これが、本命の隠し球。

詠唱と魔法陣双方を利用して出力を最大限まで高めた大魔導。

強力なエネルギーを持つ、光属性第三階級基礎魔法。

恩師ルクシエラさんに叩き込まれた、全8属性中最も威力が高い光

属性の魔法!!

『アルギクロス・レイ第三閃光魔法』!!」

輝く魔法陣に向けて、空から幾つもの光の筋が降り立った。

か細い光が、俺やイーヴィルの身体を照らす。

やがて、薄く差していた光の柱が強く輝き、

無数の熱線が魔法陣の中に降り注いだ!!

「ギャアアアアアア!!」

「ぐ、うああああ!!」

閃光は俺諸共イーヴィルを焼き払っていく。

幸いにも、俺を捉える為にイーヴィルが接近してくれたお陰で、魔法陣の中心に誘い込む形となった。

後は根比べだ。

「『エン、チャント』……!」

光に反する闇属性の魔力を自身に付与し、なんとか熱線を耐え忍ぶ。

更に閃光が更にその輝きを増すと、イーヴィルの身体が黒い霧と
なつて少しずつ崩壊していく。

やがて光の輝きが少しずつ収束してゆき、吊し上げられていた俺は
支えを失つてそのまま地面にべしやりと落下する。

「う、あ」

全身ボロボロで、呼吸をするのもやつとの状態ではあるが……。

それでも、どうにか。

「勝つ……た……」

俺じやなかつたら。もつと簡単に、もつと鮮やかに倒せたかも知れ
ない。

それでも、命を懸けてなんとか勝つことが出来た。

ちつぽけな石ころの、魂を燃やし尽くした全身全霊の全力。

最後は自らをも巻き込んだの攻撃と泥臭いことこの上ないが。

確かにこの手で掴み取った勝利に、拳を突き上げ天を仰いで、僅か
に笑つた。

そのとき。

夕陽が沈みかけ、紺とオレンジのグラデーションを描いていた空
に、強い光の筋が駆けていく。

流れ星だ。満身創痍の俺は、少しラッキーな気分になつて空を眺め
ていた。

けれど。

「……!?!」

流れ星を観測したその直後、ゾクリと強い寒気を感じた。

2話 破滅の魔女、ルクシエラ

本当なら縁起が良いと感じられる流れ星。けれどこの身に走るのは違和感と緊迫感。

「ぐ、……」

俺は違和感の正体を確かめる為に槍を杖代わりに、何とか立ち上がる。

息も絶え絶えに俺は周囲の様子を探った。

人気はない。騒動を察知して避難したか。

ドク、ドクとただでさえ強く脈拍していた心臓の鼓動がもっと早くなっていく。

俺なりに死力を尽くした。

限界を超えて戦った。

もうこれ以上、歩くことも難しい。

なのに。

今、まさに。虚空に黒い魔力が集まって、それは獣や人間の様な姿を形成していく。

「何が、起こってるんだ……」

気がつけば、十を超えるイーヴィルが俺の前に発生していた。

一体倒すだけでもあれ程苦労したのだ。

もう、戦う余力なんて何処にも残っていない。

イーヴィル達は俺を狙い、ジリジリと距離を詰めてきた。

——万事休すか……？

イーヴィルのウチ1体が飛びかかってきて、その爪が、俺の胸に突き立とうとした。

「……ッ」

最悪の事態を覚悟した、その瞬間。

細い白銀の閃光がイーヴィルの頭蓋を貫く。

空中で光に貫かれた犬型のイーヴィルは衝撃によって吹き飛ばされ、何度か地面で弾んだ後に霧散した。

「妙に帰りが遅いと思ったら。相変わらず、巻き込まれ体質ですわね」

感覚の長い、余裕を感じさせる足音と共に、背後から聞こえるなじみ深い声。

俺が槍を頼りに呆然と突き立っていると、すぐ横を女性が通る。まるで光の輝きそのものの様に白く美しい長髪。

年中身に纏う、実験用の白衣。

「けれど、私が来たからにはもう安心ですわ」

言葉と共に、わしゃつと乱暴に俺の頭を数回なでて。

彼女は更に前へと出た。

新たに現れた女性の様子を伺うイーヴィル達に、彼女は一言だけ告げる。

「失せなさい」

言語を理解している訳では無いだろう。

ただ、彼女の放つ凄まじい殺気を感じ取ったのか。

イーヴィル達は一瞬だけ怯み、まるで恐怖に抗うように彼女へ殺到しようとした。

『強度二・範囲タイプB』

あまりにも簡素な詠唱と共に、彼女は迫り来るイーヴィル達に手の平を向ける。

そして。

『ルクス・エクラ』

魔法が発動した。

手の平を軸として、放射状に真っ白な光が殺到する。

光の嵐は全てを照らし、視界を埋め尽くす。

数秒後、やがて光が収束すると彼女の前にはまるで巨大な何かに嚙り取られたかのようにごっそりとえぐり取られた地面だけがあった。

「クラス2程度の雑魚が、いくら束になろうとももの数ではありませんわ」

パンパン、と両手を打ち鳴らせながら言い捨てる。

クラスとはイーヴィルの脅威度の事でクラス2は三段評価の真ん中、本来なら十分脅威たり得るものだが。彼女にとっては取るに足らない存在。

多くの人は、彼女が持つ希有な魔力を恐れてこう呼ぶ。

「破滅の魔女」

あるいは、

「生ける天災」

と。

「ルクシ、エラ、さん……」

私立天導学園最上級生、次席ルクシエラ。

最高学年とはいえ学生ながら弟子を持ち、更に俺にまでその知識を叩き込んでくれた恩師にあたる先輩だ。

「別に、俺は、巻き込まれ体質なんて思ってませんけど……。それを言うなら相変わらずはお互い様じゃないですか……」

普通の魔導士には、何の前準備も無しにあんなに短い詠唱でこんな大規模な魔法なんて使えない。全てはルクシエラさんが「特別」であるが故になせる技だ。

「一体でもこんな苦戦したのに、アレだけの数を一瞬だなんて……俺が頑張った意味何一つ無かったですね……」

真正正銘の「選ばれし者」の力。どんなに手を伸ばしても、届かない光。

「なあに言ってますの。貴方が足止めしたから、被害が出なかったのでしょう？ 貴方にあるがとうと言付かっていますわ」

「どうやらあの子は無事に逃げられたらしい。」

ルクシエラさんはまた、俺の頭をわしゃわしゃと乱暴にかき回した。

「よく、頑張りましたね。流石は私の愛弟子です」

ルクシエラさんは俺と目を合わせ、にこりと微笑む。がきつだが、暖かい愛情を感じると同時に俺は胸が締め付けられるような気持ちになる。

「……俺は、弟子じゃ……ないです、よ……」

そう答えると同時に。残されていた最後の力が尽きて。

「今更何言ってますの。貴方はもうとつくに……ファルマ？ ファルマッ!!」

俺は意識を失って、倒れてしまうのであった……。

◇ ◇ ◇

魔法とは便利なもので。

俺はルクシエラさんに学園の保健室へ運び込まれて回復魔法をかけて貰ったようだ。

気がついたのは次の日だったが一晩寝ただけで全身の傷はすっかり治っていた。

魔導士の責務に魔物であるイーヴィルとの戦いがある以上、怪我は避けられない。そのため、この学園の保健室は機械も、魔導も、そこから辺の病院よりも優れた設備を有している。

「……どうすんだよこれ。いやッこれら」

俺は上半身だけ起こして、問題のブツを両手に抱えながらため息を吐く。

それは、網目状の様が入った大きな緑色の球体。

メロンだ。

お見舞いの定番。

メロンが。

五十個ほど、ベッドの上や周囲に転がっていた。ベッドの上は最早メロンに埋め尽くされていて寝心地が悪い事この上ない。

「食べるしかあ、無いねえ」

カーテンの隙間から子供としか思えないような体格の教師が入ってくる。

桜色のツインテールをした、年齢不詳性別不詳の保険医。

学園を牛耳る三賢者の一人。

ジン先生だ。

「一日一個食べても二ヶ月弱掛かるんですけど」

「君があ、フルーツ好きだって教えたらあ、ルクシエラちゃんがあ、差し入れたんだよお」

「だからってなんでメロンオンリー……しかもこの数」

「『高くて多い方が良いに決まっていますわ!!』ってえ」

是非ともルクシエラさんには、『過ぎたるはなお及ばざるが如し』という言葉を教えてあげたい。

「君達は本当にいい、あの子に愛されてるねえ」

「え。達？」

俺が疑問符を浮かべると、ジン先生は答えるようにシャツと横のカーテンを開いた。

「あ、おはようファルマ」

さらりと靡く水色の長い髪。中性的で整った美少年。俺のクラスメイトにしてルームメイト、さらにとても長い付き合いであるドライズがメロンを抱えて困った顔をしていた。

「どうしようか、このメロン」

「いや、それよりなんでお前まで此処に居るんだ？」

「え？ 昨日色々あってさ……」

「色々って、もしかしてお前もイーヴィルに絡まれたのか？」

「うん、まあ。なんか空を見てたら流れ星がこっちに落ちてきてさ。落下地点に行ったら女の子が倒れてて。とりあえず保護しようと思ったらイーヴィルが突然何体も現れたもんだから交戦したんだ。なんとか倒したけどもうヘトヘトだったよ」

「なんだそのムーブ。テンプレの主人公かよ」

「ごめん、何言ってるの？」

こっちは一体でも限界だったのに、とは言うまい。

ドライズは「主人公」だから。

ドライズこそが「生ける天才」大魔道士ルクシエラさんの一番弟子にして、「破滅の光」の後継者だ。俺なんかとは比べものにならない程、あの人の弟子に相応しい。

「で、お前の方にもひいふうみい——五十個あんな、メロン」

二人合わせて百個。多すぎる。あと値段想像しただけで眩暈がする。

「それえ、邪魔だからあ、責任を持ってえ、持って帰ってねえ」

「邪魔って言っちゃったよこの人。敢えて言わないようにしてたのに！」

まあ、なんと言うか。

ルクシエラさんは乱暴でがさつ、愛情表現が下手クソで。

お見舞いに高級メロン百個とか常識を置き去りにしたような人なんだけど。

誰もが認め恐れる特別な力を持ち、自信満々に胸を張って、他人の意見に曲げられない真っ直ぐすぎる生き方があまりにも眩く輝いていて。

その背中を追いかけずには居られない。

俺にとって。

誰よりも憧れる、大魔導士だ。

外伝2・5話 僕の事を『主人公』だ、なんて呼ぶやつが居る。

ここは私立天導学園。

校長兼理事長であるティアロ校長先生が完全に私情とその有り余るポケットマネーで作り上げた、『彼の手足たり得る優れた魔導士』を育成する為の学園——って聞いている。

こういう説明をするとなんだかティアロ先生が配下の育成を目論む悪の親玉か何かに見えるかもしれないけどちゃんと良い先生だ。

僕の名はドライブ。

今、この世界で三人しか使え無い「破滅の光」という魔力を継承した魔法使いで。本当の名前も、産まれた国も判らない。

僕は幼い頃、当代の「破滅の光」を身に宿す大魔道士ルクシエラ師匠に偶然拾われてドライブの名を与えられ、それ以来養子兼弟子として一緒に学園で生活をしている。

僕は自分でそんな風に思ってる訳じゃ無いけれど、そんな僕の事を『主人公』だ、なんて呼ぶやつが居る。

さて、全校生徒百人にも及ばないの少数精鋭の学院で、全寮制。

魔法というものは心、精神を由来とする力。

そのため、特に若年層においては精神の発達が早い女性の方が魔法を扱う適正に優れる事が多い。

その結果この学園も男女比は大体男：女で三：七。寮は三階建てで一階が男子層。二・三階が女子層となっている。

時間は朝の六時頃。漸く陽が昇り始め暗闇が消えていくこうとしている時間。

男子層の一室でいつもの様にカーテンを開けた。

すると、空からは朝を告げる「鳴き声」が聞こえて来る。

「イイイイイイヤツホオオオオオオ!!! フリイイイダアアアアアツンツムツ!!!」

箒をサーフボードのようにして奇声を発しながら空を縦横無尽に

駆け回る上級生。

窓を開けた僕は、そんな上級生を見上げていつものように深呼吸と共に伸びをする。

「うん、アイルさんは今日も元気だなあ、良い朝だ。さあ、僕も元気出していこう！」

天空駆ける奇人が発する早朝の雄叫びは、この寮に住む者達にとって鶏の鳴き声的な風物詩なんだ。

あの声のお陰で朝寝坊せずに起床できている生徒も少なくない。(余談だけどあんなのでもアイルさんは最上級生の主席の成績を持つ優秀な名生徒だ)

いつも通りの朝を迎え、身体を目覚めさせた僕はその腰まで伸びた水色の長い髪を後頭部で一つに括った。そして、朝食と昼用のお弁当を作るために自室の台所へ向かう。

その途中、一度ベッドによって下段で未だに熟睡している同居人の身体を揺すった。

「ファルマ〜朝だぞ〜。どうせ起きないのは知ってるけど」

「うう、ああ、あと五時間……」

「清々しいほど自分の欲求に素直だ。僕は起こしたからね〜？ 寝坊してもキミの責任だからね〜？」

僕はそのままキッチンで支度を始める。

料理が趣味なんだ。

だから、朝食とお弁当をこの時間に作ってしまったてる。

数時間後に自分で作った朝食を食べて、味わいつつ、反省点を考えて。

それから七時半には登校。

僕はいつも通り、時間ギリギリまで二段ベッドの下段で眠りこける親友を置いて、先に学校へ登校した。

一時間ほど経って八時頃。ここは第二校舎二階、四学年第一クラス、Aの教室。

僕はクラスメイトと談笑していた。

会話の相手は小柄で痩せた様子の子女子生徒。

クラス委員長のヴェルリーゼ。少しだけ長い名前なのでみんなは「リーゼ」と呼んでいる。

「それで、私が蹴躓いて転びそうになったところに颯爽とアイルが現れて。スライディングで私の転んだ先に割り込んできてそのまま掬い上げる様にお姫様だっこをして助けてくれたの」

「相変わらずアクロバティックな事するなああの人……」

アイルさんとリーゼとはある孤児院の出身で、アイルさんは同じ孤児院の生徒達に対して超過保護な事で有名だ。当然、リーゼもその一人である。

「で、その後小一時間ほどお説教したわ」

「まあいくらリーゼを助ける為とは言えアイルさん自身も危ないよね」

「いえ。そうではなく。転んだのが部屋のシャワールームだったから」

「マジで何やってんのあの人!!?」

「ま、私は別に良いんだけど。あの調子だと他の子がいる大浴場にまで乱入してきそうな気がしたから釘を刺しておいたわ」

「あの人ならやりかねないって思えちゃうのが凄いね……」

そんな感じで他愛のない話をする事数十分。

「あら?」

ふと、授業の準備をしていたリーゼが首を傾げた。

「なんかそこ、変な光が当たってるんだけど何かしら?」

と指差すのは教室前方、窓のすぐ側。なにやら紅い円形の光が床に現れていた。

僕は光の円へと近づき、上から見下ろす。

「え、これって確か師匠の『警告灯』? えっと仲間に魔法とか攻撃の攻撃範囲を教えるもので、『この枠内はあぶないですよ』っていう意味の——」

と、言う僕の言葉を聞いていたリーゼは何故か流れるように自然な動きでその場から距離を取っていた。

その次の瞬間。

ガツシヤアアアアアン!!!

突如空から飛来した謎の物体はガラスをぶち破って『警告通り』紅い円の中心に着弾。その後一度バウンドして近くにいた僕を巻き込む。

「ペグうッ!?!」

飛来した物体と僕はそのまま机を弾き飛ばしながら廊下側の壁に衝突した。

「先んじて離れておいて正解だったわ……」

やれやれと呆れた様子で、リーゼは吹き飛んでいった僕の元へ歩み寄ってくれる

「うきゆう……」

僕は目をグルグル巻きにしつつもなんとか意識だけは保っていて。

「うああ……」

僕を跳ね飛ばした『飛来物』の正体。布団でグルグル巻きに拘束されている人間。

その人物に、リーゼが語りかけた。

「おはよう、ファルマ。今日はまた大胆な登校なこと。全く、何があれば簀巻にされて飛んで来るのやら」

呆れながら布団とロープに手を伸ばすリーゼ。

「れ、冷静だね、リーゼ……」

僕はなんとか立ち直りながらそう零した。

この学園は色んな事が起こるけど、流星にさっきまで二段ベッドの下段で眠っていた親友が突然簀巻きにされた状態で窓から飛来してくるなんて思ってもみなかった。

「大体毎日こんな感じじゃない。この程度で一々驚いて居たらこのクラス委員長は務まらないわ」

そう言い捨てて、リーゼはファルマを縛る布団とロープを解いた。

「ッー」

拘束が解けた瞬間。ファルマは反射的に立ち上がり、

ガラス片を踏み砕きながら窓の方へ駆け出して虚空へ向けて叫ぶ。

「ギャグじゃなかったら死んだらわボケエエエツ!!!」

それが誰に向けられた言葉なのか、僕は反射的に理解した。

「ああ、また師匠に連れ去られて『アルバイト』させられてたんだね……」

ファルマは僕に並ぶ、ルクシエラ師匠の二番弟子。

———なんだけど、何故か本人はそれを認めようとしらない。

僕とファルマは兄弟弟子で、もうずっと、十年以上の付き合いだ。だからあいつが考えて居る事は少しくらい判る。

多分『平凡な自分が師匠の弟子を名乗ったら師匠の名に傷を付ける』とか思っ居るのだろう。

師匠はそんな事、一切気にとめない人柄なのはファルマも知ってるだろうに。

……ともあれ、朝っぱらから騒々しい学園なんだけど。

この学園では誰もが笑っていて、僕はそんなみんなの笑顔とこの学園が大好きだ。

第一部 俺は主人公になれない

3話 校長って実は暇なんですか？

この数日間は天国だった。

保健室での治療を終えた後、経過観察ということで数日寮室で安静にしておくように言われたのだ。

合法的に寝て過ごせる、なんと素晴らしい時間だったか。

しかし楽しい時間はすぐに過ぎ去り……今日から授業に復帰していた。

「おーい」

ぼーっとしていた所に、ペしっと走る衝撃。

「っツ」

どうやら、鼻先を弾かれたらしい。朦朧としていた意識が戻ってくる。

「いつまでぼんやりしてるつもりだい？」

何度か瞬きをして目を擦ると、目の前で水色ポニーテールの少年がクスクス笑っていた。

「んあ、ドライブ？ 今何時だ？」

「もう放課後だよ。もしかしてホームルーム中ずっと居眠りしてたの？」

「そんな訳ないだろ」

頭を掻きながら否定する。事實はハッキリしておかなければいけない。

「ホームルームよりずっと前から寝てたわ」

さっぱり目が覚めてすっきりした気持ちで、きっぱりと言ってやった。

「いやそんな堂々と言われても困るんだけど……」

「ここ連日、半日以上寝てたから身体のリズムが狂ってな」

「おかしいな。僕と全く同じ生活してきた筈なのに」

「昔からそうだけども、病み上がりのくせにフルスロットルで勉強に

集中できるお前の方がおかしいと思うぞ」

俺は愚痴りながら立ち上がり、伸びをした。

「む、昔の事は良いだろう!? それより、ほら、帰るよ全くもう」
そのまま二人揃って寮へ戻る。

この学園では放課後の時間に部活動や委員会活動を行うか、寮で自習をしなければならない。

俺とドライズは部活動を行っていない為必然的に自習をする事となる。

「今日も一日がんばりましたっ！」

「あれえ、おかしいな? 君ずっと寝てたとか言ってたっけ?」

俺は部屋に着くなり二段ベッドの下段に飛び込んだ。

「さーって今日はレアドロップ粘るぞー!」

俺は枕元に放置していた携帯ゲームを持ち上げて起動した。

「むう。ホントは自習の時間なんだよ? 何いきなり寛いじゃってるのさ」

「だってどうせ監督も何も無いんだぜ? サボってくださいと言ってるようなもんじゃないか」

「……ふふ、それはどうかな」

不意に、ドライズが不敵に笑う。

「は?」

ドライズの言葉に疑問を覚えるよりも早く。

バンツと鈍い音を鳴らして、ロッカーの扉が勢いよく開いた。

「うむ、現行犯じゃなッ!!」

窮屈そうにロッカーから現れたのは。

この学園の全てを牛耳る者、ティアロ校長その人であった。

俺は数秒掛けて現実を認識し、遅れて言葉を発する。

「……校長って実は暇なんですか?」

「暇ではない。お主が戻ってくる時間を計算して身を隠す時間を作ったのじゃ」

「たかだか一生徒のサボり検挙の為にそこまでします!? 校長が!」

「うむ。その機械仕掛けの玩具の使用自体は咎めぬが。時と場合とい

うモノを弁えねな」

「自習時間って言ってもどうせサボって一人でゲームしてるだけだろ？ 君はもつと友達を作るべきだよ。だから僕が先生に相談したのさ」

「お前は俺の母さんかよ!？」

「と、言う訳で。行くぞファルマ少年。部活動に入りなさい、これはもう決定事項じゃ」

「いゝやくだああああ!!」

俺はティアロ校長に首根っこを掴まれ、引きずられながら自室を後にした……。

「これが今ある部活動のリストじゃ。何処でも良いから今日中に決めなさい」

部活棟の前まで来ると、ティアロ校長に紙切れを渡された。流石に俺にばかり構っている暇は無いらしくそのまま何処かへ行ってしまったが。

「部活、かあ」

俺はため息を吐いた。この学園に入ってから、俺はドライブズと彼の師匠であるルクシエラさん以外との人間とは距離を取ってきた。

部活動に入って居ないのも、人付き合いが苦手だったからだ。

この学園の生徒はみな、何かしら“特別な才能”を持っている。

星のような輝きを持った人間が、集まっている。

対して俺には何にも無い。

ルクシエラさんにごり押しコネ入学させて貰った、一般人だ。

ただ学園で過ごしているだけで、嫌でも意識してしまう。

光り輝く星のような人達と、ただの石ころでしかない自分の差を。

そんな劣等感が、俺に壁を作らせていた。

でも、流石に校長に目を付けられては逃げ場が無い。

俺は諦めてリストに目を通す。

リストには部活動の名前と、それぞれ所属している人員数が記載されていた。

選ぶならば、できるだけ人数が少ない部活が良い。

この学園は全校生徒数が少ない事もあってか、部活動と名乗ることに人数の制約がない。きちんと活動内容を明示し活動報告をしていればたった一人であっても部として認められる。

因みに、魔法の学園だからといって「魔法魔法している」「部活が人気なのか」というとそうでもない。

上位は普通に球技など一般的な体育会系だ。

理由は単純で、みんな普段の授業で魔法というものに触れまくっている為わざわざ部活の時間まで魔法を扱いたいという人間が少ないのだ。

最も、魔法や魔導を使った模擬戦を主な活動とする「魔導決闘部」は「魔法魔法している」部活でありながら、かなりの人気を誇るイレギュラーであるが。

勿論、そんな華々しい部活なんて俺には似合わないので初めから考慮もしていない。

そんな事を考えながらリストに目をやっていると「大規模魔導研究室」という名前が目につく。

「研究室って……最早部じゃないけど良いのかよ」

人員は一名。名前までは記載されていないが、俺はその人物についてよく知っていた。

ドライズの師匠にして俺をこの学園に推薦した張本人、ルクシエラさんが管理している部活動だ。

「……いや、絶対入らないからな」

ただでさえ普段からこき使われているのに、こんな部活に入ったらどうなるか判らない。

『今日はオールナイトで実験ですわっ!! 後片付けよろしくですわ!!』

『今日「は」じゃなくて今日「も」でしょう!!? これで三日目ですよ!!』

「つてなるのが目に見えてるもんなあ」

俺は首を素早く左右に振るって、頭に浮かんだ光景を振り払う。

改めてリストを確認していつて。

「マジッククラフト工房」？」

ふと、その部活動に心惹かれた。

理由は判らない。

俺はマジッククラフトなんてしたことがない。

マジッククラフトとは様々な魔法を付与した道具を製作する事だ。

また、マテリアライズという魔力で物質を作り出す技術にも関わりがある。

人数の少ない順にリストを確認しているためこの部活動も人員は一名とされている。

「とりあえず見学だけしてみるか」

俺は部活動のリストをしまうと、マジッククラフト工房の部屋を探した。

部屋はすぐに見つかり、後はノックして中に居るであろうたった一人の活動員とコミュニケーションを取るだけだ。

……が、凄く気が重い。

そもそもなんて声を掛ければ良いのだろうか。

「サボりが摘発されて部活動に入る事になりました。とりあえず人が少ないところから適当に選んだのがここです☆」

なんて正直に言ったら、普通ブチ切られるだろう。

「うーん……」

かといって、人数がそこそこ居る部活は既に人間関係が出来上がっている筈だ。

そこに割り込んで行くだけの胆力は無い。

「……でもま、興味あるのは事実だしな」

適当とは言え心惹かれたのだ。

他に入りたいと思うような部活動はない。

「嘘は苦手だし正直言ってみよう。それで、ダメだったらもうルクシエラさんのところにお世話になるしかないな」

俺はそう決心してノックした。

4話 マジッククラフト工房

『……どちら様ですか?』

「あ、あのっ! 四年のファルマと申します。部活動の見学を希望したいのですが……」

胸がもの凄くドキドキする。昔はこんなに他人が苦手じゃ無かったんだけどな。この学園に居るとどうしても、余計な事を考えてしまうようになった。

俺の言葉に、中々返事が返ってこない。

ひよっとして自己紹介の時点でアウトだったのだろうか、なんて不安になっていると。

そつと扉が開いた。

そして、部屋の住民が入り口で俺を迎える。俺は同年代の中では背が低い方だ。しかし、そんな俺と比べても頭一つ低い身長。長く黒い髪は首元で一つにくくられていて、抱える程に大きな書籍を持って居るのが印象的だ。比較的中性的な容姿だが鼻の上になちよこんと乗せられたモノクルの縁に可愛らしい花の彫刻が見えたり、制服がスカートなので女子生徒だと推察できる。

「……っ」

少女は俺の顔を見上げるなり、ふっと視線を逸らした。

「あ、す、すみません、つい……」

慌てて、もう一度こちらを向き直して頭を下げる。

胸元のバッジが示す学年は、なんと一年生。突然見ず知らずの先輩が訊ねてきたら戸惑って当然だ。

けれど彼女は。

深呼吸の一つも無く。ただ、そつと胸に手を当て数秒目を閉じ。

「……落ち着きましたから。どうぞ、こちらへおかけください」

しっかりとした態度を作り上げ椅子を引く。

部屋は長方形で中心に長机があり両脇には道具棚が並んでいた。

「あ、どうも、失礼します……」

俺は差し出された椅子に腰掛ける。そして少女の方は俺に向かい

合うように座った。

「見学、という事ですがどうしてこの部活動に選ばれたのですか？」

聞かれて、俺は胸が痛くなった。俺がこの部活動を選んだ理由は適当も良いところだ。

だが。こうやって情けない理由で部活動を探すことになったのは俺自身の責任だ。

何より、嘘は吐かないとついさつき決めたのだ。

「……その、非常に申し上げにくいのですが」

俺はそう前置きした。
すると、

「敬語で無くて結構ですよ。先輩の方が随分と年上ですから」

「え、でも……いや、うん。お言葉に甘えさせて貰うよ。それで、見学の理由なんだけど……ごめんよ、特に深い理由は無いんだ。サボりがバレちゃって校長から部活動に入るように強制されてね。それで、何となく気になったのがここだったんだ」

俺は決意通り、正直に告げる。

「なるほど。つまり活動内容自体はどうでも良かった、ということですか」

確認されて、俺は思わず目線を下に逸らした。

けれど、続いてかけられた言葉は予想に反するモノだった。

「判りました、そういう事でしたらお力になれるかと思えます」

「え？」

「こちらが入部届になります。顧問はジン先生です」

「え、え、良いの!？」

驚いた。突っぱねられる覚悟を決めていたのに。

「はい。マジッククラフト工房は先輩を歓迎させていただけますから」

「でも、こんないい加減な理由で……本当に良いのかい？ 邪魔にならない？」

「邪魔なんてとんでもない！ 先輩さえ良ければですが、自由にしてください」

一年生ながらもたった一人でやりくりしている部活だ。強い拘りや信念を持って始めた事だろうと思われる。そこに、こんなちやらんぽらんなヤツが入り込む事を許すなんて、この子はなんて懐の広い人間なのだろうか。

「それじゃあ……お世話になります、部長」

「部長だなんて、くすぐったいですから。ボクの事はシジアンとお呼びください」

シジアン、という名前を聞いて不思議な気分になった。

オブシディアン、黒曜石から取ったのだろう。艶やかな黒髪の子にぴったりの名前だ。きつと、俺がこの子に名前を付けるとしてもシジアンと付けたかもしれない、なんて思うくらいにはしっくりきた。

「それじゃあ……これからよろしく、シジアン」

「はいっ！ 一緒に頑張りましょう、先輩！」

一瞬、呼吸が詰まった。

一年生とは思えないくらいに落ち着いた様子のシジアンだったが。今、この瞬間。とても明るい笑顔を見せたのだ。

そして、その笑顔に俺は——感動してしまった。

何故かこの子が「こんな表情をした」という事実胸を打たれてしまった。

「え……？ せ、先輩？」

ふと、シジアンの笑顔が曇る。

心配そうに俺の顔を覗く。

「あれ？」

気付けば、視界が霞んで居た。熱いものが頬を伝う。

「なんで、泣いてるんだろ……」

慌てて俺は目を拭った。なんだかおかしい。自分の身体が、心が、自分のモノでは無いみたいだ。

「す、すみません、少し外しますから」

気を遣って、シジアンが部屋から出て行く。本来この部屋の主は彼女の筈なのに。

というか、初対面でいきなり泣き出すとかどういう印象を持たれるんだろう。

涙はすぐに止まった。でも、胸の中は落ち着かない、ざわざわした感じが残る。

でも……それは決して、嫌なモノでは無かった。今流れた涙は、哀しみの感情がこぼれ落ちたモノでは無い。

「俺……何をそんなに、泣くほど喜んでるんだ……？」

自分でも訳が判らない。結局この日はシジアンが気を遣ってくれて、ひとまず入部手続きだけを済ませ活動は後日からという事になった。

5話 俗に言う “主人公席” ってヤツだ!

この学園は、校長兼理事長であるティアロ先生が “相応しい” と判断した人員が集められている。一応入学式はあるが実体としての生徒の入学タイミングはバラバラだ。

そんな訳でこの学園では編入やら転入は日常茶飯事なのだが。

「え、えっと、ユウです。それ以外の事は良く覚えて居ません……でも、校長先生達が、私をここで保護してくれるという事になりました……魔法についても全然何も知らないのですが、仲良くしてくれると助かります……」

教壇に立って、自己紹介。そしてペこりとお辞儀をする少女。

頭頂部から毛先に駆けて、白金から黒にグラデーションしている珍しい髪色。星が映り込んでいるような妙にキラキラした瞳が特徴的だ。

「ゆ、ユウさん!!? 編入するの!!?」

俺の隣でガタツと思わず席から立ち上がったのは、俺の親友ドライブだ。

このリアクションから色々察した。少し前、ドライブは流れ星が落ちた場所で女の子を保護したと言っていた。それがこの子なのだろう。

「あっ……ドライブ君!」

ユウと名乗った編入生は立ち上がったドライブと目を合わせ、嬉しそうに微笑む。

さつきまではいかにも不安です、と言いたそうな顔色だったのに。なんとというか、流石主人公。何かしらの物語が始まりそうな展開だ。

が。

俺には関係の無いこと。編入生にワイキヤイする性格でもない。

「それでは自己紹介を終わります。B組の方々は教室に戻ってください
い」

ユウさんの自己紹介の為に教室の後方で立っていたB組の面々が

帰っていく。

「さて、ユウさんの座席を決めないといけませんね」

自己紹介の次は座席決めか。まあ俺には関係無い話だし、別に早く終われなんて急かす気持ちも無い。窓から差し込む柔らかな朝日に照らされ、のんびり過ごそう。

そう思っただきな欠伸をしていたら。

「ユウさん、何処か希望の場所がありますか？」

「えっと、ドライブ君の横が良いです」

聞き捨てならない言葉が聞こえて来た。

このクラスはユウさんを除いて八人だ。それを縦三×三横の九座席から最後尾だけ二席にした八席で座っている。そして真面目なドライブは今、最前列中央に座っていて。

その隣というのは左側、窓際に俺が。そして右側廊下の方に学級委員長のリゼが座っている。ドライブの隣を所望するという事は俺かリゼのどちらかが移動しなければならないという事だ。

「ふむ、なるほど……ドライブ君の隣というと、ふむふむ。ファルマ君とヴェルリゼさんですね」

俺は祈った。

変わるならリゼ、変わるならリゼ、変わるならリゼでお願いしますと。流れ星を見たのは数日前の話だが三回、心の中で反復する。

どうしてこんなに慌てているのかというと。

……俺は、ドライブの他にこのクラスに友達が居ない。強いて言えば学級委員のリゼがそんな俺を心配して多少世話を焼いてくるとか、その程度だ。つまり、ドライブの横というこの場所を離れると教科書とか忘れた時に詰む訳である。

そして、審判が下される。

「では、こうしましょう。ドライブ君、席を一つ左に移動してファルマ君の席に座ってください。そして、今ドライブ君が座っている席にユウさんが座ってください。最後にファルマ君が最後尾に三個目の席を作って完成です」

まあ、そうなりますよね!!

俺の祈りは天に届かなかったようだ。

「ドライブ君と、それから学級委員長のヴェルリーゼさん。二人でユウさんのサポートをお願いします」

「はい、わかりました」

「よろしくね、ユウさん」

「うん! 二人ともよろしく!」

ユウさんは嬉しそうにドライブやリーゼに笑顔を向けていた。

一方俺は……。

「ん? ファルマ君、どうかしましたか?」

重い足取りで教室の後ろの方へ向かっていた。

「ひよつとして、席の移動に何か不都合が? 希望の場所がありますか?」

先生はそう言ってくれるが、俺が死守したかった条件はドライブの横だ。後ろでも前でも意味が無い。いや、ドライブは最前列に居るので前は無いけど。

「お構いなく……」

最早何処に配置されようと状況は一緒だ。俺は諦めて足を引かずった。

最後尾左端の窓際。あ、この場所覚えがあるぞ! 俗に言う“主人公席”ってヤツだ!

わーい主人公になったみたい!

「……はあ」

自分を誤魔化すにも限度がある。

俺は空白となっっている窓際最後尾に辿り着くと、ポケットから魔石を取り出した。

『マテリアライズ』

俺が魔法を発動すると、魔石が輝き、一瞬にして椅子と机が出現する。

「おや驚きました。私が作ろうと思って居ましたが、素材の魔石を常に持ち歩いているので?」

「ええ、まあ、何かと必要なので」

マテリアライズとは魔力から物質を生成する魔法だ。俺は、何処かの誰かさんがぶっ壊した公共物の修理をよくやらされる為、素材となる魔力を溜めた魔石を幾つか常備している。

気付くと先生は俺のすぐ側に来ていた。そして、俺が生成した机と椅子をマジマジと見つめ、コンコンとノックを試してみたりする。

「ふむふむ。よく出来ています。マテリアライズ実習に加点しておきましょう」

マテリアライズは俺の数少ない得意科目の一つだ。

……バイトという名目で日常から散々使わされているので上手くて当然だろう。何も特別なことは無い。

しかし、参った。

新しい席に着くなり、俺は頭を抱えた。

この位置だと隣になるのは一人だけ。

誰が相手でも俺は他人が怖い。

でも怖い中でも難易度の大小というものがあるだろう。

そんな俺が思う難易度の中で、新しく隣になった生徒は……。

薄く開かれた瞳。むっと閉じられた口。リング状にまとめられた二つ結び。

難易度MAX、喋っている所すら殆ど見た事が無い女子クラスメイ
ト。

水属性専攻、レン。

常に無表情で、口数も極端に少なく、けれど成績優秀。俺が知っている情報はこれくらいだ。とてもじゃないが気安く話しかけられる人物では無い。

というか……俺がこのクラスで苦手な人間トップ2に入る……。

前途の多難さを感じて、俺は深いため息を吐く。

俺は肝に銘じた。

絶対に教科書を忘れないようにしよう、と。

今までは「ま、最悪ドライブが居るしな」で割と適当に管理してきた。

でも、レンさんはヤバイ。

普通に挨拶する事すら億劫なのに、『教科書見せてください』なんてとてもじゃないが頼めない。

もう、絶対に忘れ物はしない。絶対に！

6話 教科書忘れたあ……。

翌日

教科書忘れたあ……。

無策だった訳じゃ無い。絶対に忘れてはいけないと思い、寝る前に鞆の中身を何度も再確認したのだ。一つ一つ手に取って。その結果再確認しすぎて、鞆にしまい忘れたモノがあったらしい……。

やはり慣れない事を急にしようとするものじゃない……。
ど、どど、ど、ど、どうする??

最悪、教科書無しでノートだけ写して乗り切るしか……。

「では、46ページの三行目から。ファルマ君、読み上げてみてください」

ああ！　こういう時に限って教科書必須のイベントが挟まりますよね!!

「あ、えっと……」

俺は先生から目を逸らす。

「おや？　どうなさいました？」

「その……教科書、忘れました」

次の瞬間。

「ダメですよ、マナト君」

担任であるセレナ先生がビシツとスティック状の杖を差す。

「ッ」

教科書を忘れたのは俺なのに何故にここでマナトが注意されたのかと、みんなの視線が一齐に先生の杖の先へと集まった。

するとそこには、いつの間にか天井に張り付いて教室の出口に手をかけていたクラスメイトの姿があった。

忍者かアイツは。

「流石は先生です。完璧に気配を消したつもりでしたが……」

マナトは渋々、貼り付いていた天井から降りた。

だから忍者かよ。

アイツ、何しようとしていたんだろう。

「授業中に無断で教室から出ようなんて、真面目な貴方らしくも無い。何が目的ですか？」

「……サボろうかと思ひまして」

マナトは視線を逸らして、そう言った。誰がどう見ても嘘だと判る。すると、彼と親しいクラスメイトであるナギが声をあげる。

「マナトは教科書を忘れたファルマ殿へ、秘密裏に教科書を届けようとしたと思われます」

マジか!? 人助けが趣味の変わったヤツだとは思ってて居たが、特に仲良くも無い俺の為に嘘まで吐いてそんな事しようとしたのか!?

聖人か!?

「人助けとは素晴らしい事です。けれど、過ちを無かったことには出来ません。この度はファルマ君のミス。その償いはファルマ君自身がするモノです。席に戻りなさい」

「……判りました」

マナトは素直に席へと戻った。

「と、言うわけでファルマ君。ペナルティで課題プリント増量です」

「うへえ……」

「それでは、今日は隣のレンさんに教科書を見せて貰ってください」
課題が増えたのは残念だが、これは僥倖だ。先生の指示ともあらば、無碍にはできまい。

「よろしくお願いします」

俺はレンさんにペコりと頭を下げる。

そして机を寄せようとして。

ふと、レンさんの顔を伺ったら。

ものっ凄い嫌そうな顔をしていた。

——あつ心折れそう……。

昔、よく使っていた口癖が思わず脳裏に蘇る。

「えっと、あの……すみません」

俺は恐る恐る机を付けた。

いくら否定的とはいえ先生の指示だから向こうも見せない訳には

いかない。

レンさんは僅かに手を振るわせながらそーっと教科書を机の境目に差し出して。

——そんなに嫌ですか。勘弁してくださいそろそろ泣きますよ？

と俺は涙を堪えつつ教科書に目を落とした。

……そして、悟る。レンさんがどうしてこんなに嫌がっていたのか、その理由を。

教科書が落書きまみれだったのだ。

これは確かに見せたくない。

余白なんて見あたらないくらい隅々に幾何学的な模様が書き込まれている。成績は優秀だし、真面目なイメージがあっただけに意外だ。

「では、ファルマ君。読み上げてください」

「え？ あ、はい!!」

そういえば元はそんな指示だった。完全に忘れていた俺はとりあえず教科書の文面を読み進める。

『襲名魔法』とは中世発祥の『固有魔法』の様式である。中世では現代の様に『基礎魔法』というものが定められて居なかった為どのような个性的な『固有魔法』を扱えるか、が魔導師の評価に繋がっていた。自作した魔法に自らの名前を付ける、あるいはなぞらえた名称を付ける事で魔導師として名前を世間に売り込んで居たのである。そして、優れた『襲名魔法』を持つ魔導師の元には門下生が集まり、師に認められた者が『襲名魔法』を受け継いでいった」

へー。ルクシエラさんの『ルクス・エクラ』って妙に名前と似てるなって思ってたけどつまりあれが『襲名魔法』って事か。

「朗読、ご苦労様です。さて、この『襲名魔法』は当時の魔導師達にとっては顔同然の物でした。より多くの人間に自分の『襲名魔法』を使つて貰える事を目標に当時の魔導師達は日々研鑽していったのです」

……。

一瞬、自分が『ルクス・エクラ』を使う姿を想像してしまう。そして、そんな自分を鼻で笑った。

俺は弟子じゃない。

そんな器じゃないんだ。

俺みたいな凡人なんか弟子を名乗ってしまうと、ルクシエラさんの評判が下がってしまう。

俺のせいでルクシエラさんに迷惑がかかること、それだけは嫌だった。

「現代においては師弟間で継承していく、という一面よりも単に『自信作の魔導に自分の名前を準えて命名する』といった一面だけが風習として残り……」

授業は進んでいく。

で、教科書を見せて貰ってにおいてこんな事を想うのは甚だ失礼な事なのだが。

落書きが多すぎてとても読みづらい。つい視線が落書きに行ってしまう。

円形を基本とし、円の内側に複雑な幾何学模様が書き込まれている。俺はその落書きを見て「魔法陣」だと悟った。しかし、一般的な魔法陣よりも密度が何倍も濃い。

けど、何故だかどこか見覚えがあるような……。

気付けば俺はレンさんの落書きに見入っていた。

そして。

突如、頭の中に記号の羅列が浮かび上がる。

授業で習ったこともない公式や、文字が記憶の底から湧き出るように頭に浮かんできて。

同時に、その一つ一つがレンの落書きに対応したモノである事を直感した。

俺は知らぬ間にレンの落書きの解読を始め、一つ一つ、パズルのピースがカチャリとはまり込んでいくような感触を感じつつ。

やがて。

「ああー！ 凄いなこれ。三個の魔法陣が重ねてあるのか」

俺は、パズルが解けた気持ちになってしまい思わずそう呟いてしまった。

「あつ——」

ヤバイと思つてすぐに口を押さえたがそんな事をしても言つてしまつた事は取り消せない。

バツとレンさんが凄い反射神経でこちらの方を向いた事を感じる。教科書を見せて貰つておいて、勝手に落書きの解読なんてされても嬉しくは無いだろう。

機嫌を損ねたかもしれない……。

大量の冷や汗が流れていく。

レンさんの方を見る事も出来ず硬直していると、ボソリ、と小さな声が聞こえてきた。

「……なんで、判つたの?」

「え?」

何かしら怒られると思つていただけに予想外の言葉で、俺は戸惑いレンさんの方を見た。

レンさんは目をやや大きく開き、驚いて居るように見える。

怒っている訳では無いらしい。

そして、そんなレンさんが更に続ける。

「……普通、一つしか見えない」

確かに、描かれているものは一つの凶形として完成している。けれど、

「法則に従つて線を取捨選択すると別の凶形が浮かび上がるんじゃないのか?」

読み解いた答えを聞いてみる。

「……何故、法則を知つてるの?」

言われてみて、首を傾げた。

俺は一目しただけでこの魔法陣の“解き方”を直感したのだ。

確かに不思議な話である。

「えつと……勘?」

俺がそう答えるとレンさんは。

「……ふーん」

俺の答えが気に入らずに呆れたのか。

それとも興味を失ったのか。一言、そう零すと元の無表情に戻り、黙ってしまった。

7話 ご歓談くださいと言われても!!

教科書を忘れたのは一科目だけ。後の時間は平穩に過ぎていく。しかし怖かった。いや、勝手に落書きを解読した俺が圧倒的に悪いので自業自得なのだ。

やはりレンさんは苦手だ……。何を考えているのか判らない。気を取り直して、放課後。

「さて……気合い入れるか」

昨日は部活動がない日だったのでいよいよ今日から本格的に部活動が始まる。流れで入った部活だが、たった二人の部活動。今後の人間関係を考えるとシジアンの心証を悪くしてはいけない。そもそも、シジアンにはこんな流れ者を拾って貰った恩義がある。

迷惑はかけられない。

活動は真面目に取り組もうと決めていた。

そして部室の前でもう一度気合いを入れて。

「たのもー!! 今日からよろしくお願いしまーっす!!」

意気揚々と扉を開いた。

すると部屋の中から二つの視線が俺に向かう。

一人は当然、この部屋の主たる部長のシジアンだ。

「お疲れさまです、先輩」

優しく迎え入れてくれるような微笑みが暖かい。

が、問題はもう一つ。

部屋の中にもう一人。

何故かレンさんが居た。

『テンション高いなこいつ』と言わんばかりの冷たい視線が突き刺さる。

「……」

俺はそーっと扉を閉じた。

「先輩!!」

幻覚でも見ているんじゃないかと思い、深呼吸をした後扉を開き直す事数回。

俺はいい加減現実を受け入れて部屋に入った。

そして、とりあえずシジアン横に座る。

「えっと……どういふ状況？」

俺は恐る恐るシジアンに聞いてみた。

「マジッククラフトは様々な道具に魔法的效果を付加する技術です。付加する方法は色々ありますが安定的、持続的に効果をするには魔法陣の存在が不可欠となります」

「それは判るけど……」

「そこで、レンさんが運営している『魔法陣研究会』と提携して魔法陣を提供していただいているのです」

魔法陣研究会。確か、部活リストの人員が一名の欄で見かけた記憶がある。

「そして完成したマジックアイテムの複製品をレンさんに提供する事で双方の部活動による成果物として提出していました」

なるほど、人員が少ない部活同士持ちつ持たれつの関係で活動している。

……つまり、今後部活動を行う上でレンさんと関わっていくのは不可避であると。

気づいたら頭を抱えていた。

「ど、どうかしましたか？」

「いや、なんでもない……なんでも……」

ここで『レンさんとうまくやっていけるか自信がない』なんて言えない。

レンさんは相変わらずの無表情で、何を考えているのか判らない。そして、ちらりとレンさんが僅かに首と瞳を動かして俺の方をみる。そして、改めてシジアンの方へ視線を向けて、僅かに首を傾けた。

シジアンはその動作の意図をくみ取ったようだ。

「ファルマ先輩は先日からの部活動に参加する事になりました」

「……ふーん」

レンさんの言葉数は少ない。

今、何を思っているのだろうか。

『昼間の失礼な奴と協力しなきゃいけないの？ 最悪ね』とか思っ
ていないだろうか……。

あ、でも。無理に俺がレンさんと関わる必要は無いのかもしれない。今だって対応しているのはシジアンだし、基本的なやりとりを任せ
せてしまえば……。

「と、言うわけで。今後はファルマ先輩が注文する魔法陣を制作して
いただきたいと思っています」

え？

「細やかな仕様など発注内容に関しては都度ファルマ先輩と相談して
貰えれば」

まってまってまってまってまって!!? 何言ってるのシジアンさあん!!?

「お二人の素晴らしい連携を是非、部活動でも発揮していただきたい
と思っております」

何言ってるの!!? まるで『部活以外でも連携してる』みたいに言っ
てますけど俺、レンさんと一度も組んだ事ないよ!!?

「……連携?」

どうやら、混乱しているのは俺だけでは無かったようだ。

レンさんがやや大きく首を傾げた。

「……え?」

シジアンは俺とレンさんを交互に見比べ。俺たちが明らかに困惑
している事を確認して。

「……あれ?」

想定外と言わんばかりに目を点にした。冷静で大人びた彼女らし
くない、年相応の可愛らしい声だった。

イーヴィルという神出鬼没の魔物を倒す事は魔導師の責務である。
そしてその卵である学園生も実習として危険度の低いモノではあ
るがイーヴィルを討伐している。

対象となるのは四年生以上。つまり、俺たちもすでに何度か実践経
験を積んでは居る。

が。

俺はドライズ以外のクラスメイトとチームを組んで戦った事はな

い。

「す、すみません。早とちりをしてしまっ

そう説明すると、シジアンは慌てて頭を下げた。

「お二人とも同じクラスだったので、てつきりもつと関わりが深いものかと思っていました」

まあクラスが同じなのは確かだしリーゼの指揮次第では組む機会があってもおかしくはなかった。とはいえ、『素晴らしい連携』をしているとまで想像するのは行き過ぎだと思いが……。

俺、クラスにドライブ以外の友達居ないんですよ……。

「ともあれ、今後活動する上で協力していく事は必要不可欠です。お二人には是非親密になっていただきたいです」

親密、かあ。全く自信がない。

「あ、そうだ。折角の機会です。このまま少し交流会という事でお茶にしませんか?」

え?!

「レン先輩、お時間は大丈夫ですか?」

シジアンの問いかけに、レンさんはこくりと小さく頷いた

「では、お茶とお菓子を用意しますので、しばしご歓談ください」

ちよ、ちよつと待ってえ!?

ご歓談くださいと言われても!!

シジアンは席を立ち部室の奥の方へ行ってしまう。

「……」

「……」

沈黙が狭い部室を支配する。

俺は冷や汗をたらたら流しながら床のシミの数を数え始めた。

「……ねえ」

沈黙を破り、投げかけられる言葉。

ひいつ、と声に出さなかったただけ褒めてほしい。

「……昼の事なんだけど」

やっぱり怒っていらっしやる!!?

目を合わせることはできないまま、けれど逸らしたままなのも不自

然なので。俺は顔だけレンさんの方を向いてレンさんの背後にあった道具棚を見つめた。

「な、なんでしようか」

「……あれ、ホント?」

言葉の意味が分からない。アレってなんだ?

「あのう……アレとは一体何の事ですか?」

恐る恐る、聞いてみる。

すると。レンさんは身を乗り出して。

「……凄い、って言った」

「え?」

俺が疑問符を浮かべると更に身を乗り出して。

「……魔法陣」

と、真剣な目を向けてくる。

「え、えっと」

俺は気圧されながら意図を把握する。

「どうやら俺が、レンさんの魔法陣をどう思っているか聞きたいらしい。」

俺は深くは考えず、思った事をそのまま口に出した。

「レンの魔法陣は世界一凄イと思ってるよ」

「ななな、何が起こった!?!?!」

「え、今の俺が言ったの!?!?!」

突然のタメ口!! 呼び捨て!! 我ながらきもい!!

「……は?」

「……は?」

そりやそういう反応になりますよね!!

俺は慌てて口を押さえる。

「す、すすす、すみません!! なんか口が勝手に! 今の忘れてください!!」

「い!!」

いきなり馴れ馴れしい上に機嫌取りに調子の良いこと言ってるようにしか聞こえない!!

レンさんは眉間に皺を寄せた。

もう俺はレンさんとまともに人間関係を構築できないかも知れない……。

そうやって半ば諦めかけた……が。

「……不思議。前にも一度、聞いた気がする」

レンさんはただ、言葉の通り不思議そうに首を傾げる。

そして。

「……世界一、か」

言葉の意味を噛みしめるように繰り返し……表情に乏しい彼女にしては、珍しく。

明確に頬をゆるませた。

「……悪い気はしない」

どうやら機嫌を損ねた訳では無いようだ。

少しだけ安心する。

しかし何だったんだ今のは……。

まるで普段から言っただけの居たみたいにするりと零れ出た言葉。けれど、決して嘘偽りは無かった。

反芻して、やはり思う。

あの魔法陣は「世界一のモノ」だったと。

同時に——そんな「世界一」と言える才能を持つレンさんに仄かな嫉妬心を抱いてしまう自分が居た。

——やめろ。俺はどうせ石ころだ。どんなに焦がれたって届きはしない……。

そうやって俺は、心の中でくすぶる炎を必死に埋め立てた。

8話 打ち解けたって言えるかなあ!?

程なくしてシジアンが戻ってきて。

「粗茶ですが」

俺とレンさんの前に湯飲みと小皿を置いた。

出されたのは緑茶と最中が二つ。

「ありがとう、シジアン」

お礼を言って、最中を口に運ぶ。

レンさんの方は何も言わなかったが、シジアンに対して少しだけ頭を下げたように見えた。

「……」

「……」

黙々と最中を食べる俺達。

「あ、あの……」

歓談とは一体何なのか。黙りこくって菓子を食べる俺達二人にシジアンがおろおろしていると、

「……ごちそうさま」

レンさんはあつと言う間に最中を食べ終えた。好物だったのだろうか。

「……」

一方俺の方はまだ一つ目。最中の味わいに感動していた。

「つて、先輩、なんで泣いてるんですか？」

「ごめん……久しぶりにメロン以外の甘味を食べたから……」

ルクシエラさんのせいで俺とドライズはメロンの処理に困っていた。ドライズは友人や先輩に配りまくってどうにかしているようだが俺にそんな人脈はない。結果、現在俺の食生活は三食中二食がメロンまるまる一個となっていた。

そんなこんなで俺が最中を一つ一つ味わって食べていると、

じいっとレンさんがこちらを見つめていた。

な、何だろう。既に色々やらかしてしまっているがまだ何かあるのだろうか。

視線が痛い。嫌な汗が沸いてくる。

俺は耐えきれず、様子を伺うようにおずおずと問いかけた。

「あのう……レンさん？　どうかしましたか？」

「レンさんはその言葉を聞いて。」

顎に手を当てる。

そして首を傾げて。

何かに納得したようにこくりと頷いて。言った。

「……気持ち悪い」

一瞬、レンさんがボクシンググローブを付け助走を付けて体重を乗せた必殺パンチを繰り出す光景を幻視する。

俺はその直撃を顔面に受け、

吹き飛んだ。

「ぐばあっ!!」

実際に殴られた訳では無いが、頭から仰け反って椅子の背もたれに背中を叩き付け、がくりと項垂れた。

「せんばあああいい!!」

仰天したシジアンが俺の両肩を持つ。

「お気を確かに!!」

「心折れそう……」

自分でも判る。涙声だった。

遂に言われてしまった、ど真ん中ストライクの拒絶が心に重くめり込む。

もう、レンさんの顔を正面から見るのも怖い。

けど、これ以上機嫌を悪くしていないかも気になる。恐る、恐るレンさんの様子を伺うと……。

「……?」

『この人何してるの?』と言わんばかりにキョトンと首を傾げていた。あなたの爆弾発言に傷ついてるんですけど!!!　と言いたくなつたがこれまでの行動からどう考えても自業自得なので言い出せない。すると、シジアンがハツとした様子で。

「あ、あの、レン先輩。今の発言の意図を教えてくださいますか？」

と。レンさんに問いかける。

——え、ちよつとまつて下さい傷口に塩塗り込む気？

身構えていると、レンさんは少しだけ困った表情を作つてうーんと頭を抱えていた。

「……違和感」

「何に違和感を感じたのですか？」

「……喋り方」

「ファルマ先輩の喋り方に違和感を感じたのですね」

レンさんはこくりと頷いて続ける。

「……堅い。不自然。心地悪い。……だから、気持ち悪いと思った」

そこまで聞いて、俺は勘違いをしていたことに気付く。

レンさんは俺自身が気持ち悪いと言つたのでは無く。

俺の言動が気に入らず、その心地の悪さを気持ち悪いと表現したのだ。

「そ、そういう事ですか……」

俺は大きなため息を吐いた。

「……それ。嫌」

「先輩。ボクと話すように砕けた喋り方をしてみたらどうでしょうか」

シジアンに振られて、俺はおっかなびつくりな様子で口を開く。

「ほ、ホントにこんな感じで良いのか……？」

「……ん。理由不明。でもしっくりくる。あと“さん”も要らない」

レンさんはこれで納得したらしい。しかし、関わりの無かった同級生にタメ口か……。馴れ馴れしいって怒られそうで怖いんだけどな……。いや、本人がそうしてくれと言っているとは頭では判っているんだけども。

「これで、少し打ち解けましたね。交流会を開いた甲斐がありました」
シジアンは満足げだがこれって打ち解けたって言えるかなあ!?!
なんて思つて居ると、レンさんは。

「……今後ともよろしく」

ぽつり、とそう呟く。口の端が心なしか伸びている気がした。

その後はまた沈黙が訪れていたのだが。

「……そろそろ、帰る」

レンさん、もといレンはそう言うと言席を立ち、お茶とお菓子のお礼かシジアンにぺこりとお辞儀をしてから部屋を出て行った。

「ああ~~~~緊張した……」

もう色々ありすぎて緊張状態だった俺は全身の力を抜いてだらりと項垂れる。

そんな俺を、シジアンが意外そうに見つめる。

「先輩、レン先輩の事苦手なんですか？」

「いや、レンさんに限らずそもそも人付き合いが苦手なんだけど……」

俺がそう答えるとシジアンは目を丸くする。

「そうだったんですか。意外、です」

そして。

「あの、つかぬ事をお尋ねしますが」

「うん？」

「先輩は、ご友人はどれくらいおられるのでしょうか？」

今度はシジアンからボディブローのようにきつつい一撃を喰らった。

9話 友達はできそう？

「はは、友達、友達ねえ……」

俺は机の上で指をこねくり回しながら窓の外を眺めた。

「す、すみません！ 傷つけるつもりはなかったのですが!!」

シジアンはぺこぺこ頭を下げて謝るが、気にしないで欲しい。

悪いのは変に壁を作っている俺自身だと判っているから。

……この学園は特別な人間が集まる。それこそ、今日関わったレンだつてそうだ。

“落書き”であんなに精密な魔法陣を何個も作る事なんて普通はできない。

この学園の人間は皆、“特別な何か”を持っているんだ。

——俺は特別じゃ無い。

かといって別に、大きな挫折があつた訳でもない。

本当に、何の物語性も無い普通の……“その辺の石ころ”なのだ。

そう思うと、自分があまりにもちっぽけに感じてしまう。

良く無い物だと判つていても、劣等感を抑える事はできない。

みんな、あまりにも眩しすぎる。

それでも俺がこの学園に身を置くのは。こんな俺でも、この学園に導いてくれたルクシエラさんへの義理だ。

あの人は本当に自分勝手に。気がついたら入学させられていたのだからとんでもない。でも……その真っ直ぐすぎる親愛は俺にとつて掛け替えの無いものでもある。

「……先輩？」

ぼんやりと余計な事を考えすぎた。シジアンは本当に心配そうな眼差しを向けている。

「大丈夫、気にしなくて良いよ」

「は、はい」

「それより、そろそろ部活動の内容について教えてくれないか？」

「そ、そうですね！」

閑話休題。

シジアンに部活動について説明をして貰う。

「活動内容としては、『マジックアイテムを作る』の一言に集約されます」

部活動としては、制作したマジックアイテムを月に一つ校長に提出すれば良いらしい。

「種類や質は問いません。一般的なレシピにある物でも構いませんし、完全にオリジナルの作品でも問題ないです」

「月に一つ、種類や質は問わないって……マジックアイテムについては詳しくないけど、小規模な奴だったら属性除けのお守りとかだよな？ あれって二、三日で作れるんじゃない？」

「いえ、軽い付与効果を持った程度なら初心者の方でも数時間で完成させられるかと」

「ノルマ、低くね？」

やろうと思ったら適当なアクセサリを一日で作って、後は部室で適当にダラけていても問題ないという事だ。

「ティアロ様の意向としては、成果物そのものより活動や学生同士の交流などで放課後の時間を有意義に使うという課程を重視しているようです」

「サボりが摘発された身としては耳が痛いな……」

「ボクの方からも学園が課しているノルマ以上の活動を求めたりはしません。ですから、たとえば活動に関係の無いことでも自由になさって構いませんので」

シジアンから伝えられる魅力的な言葉。つまりやりようによっては単に場所が寮室から部室に変わったただけでダラけて過ごして良いと言うことだ。

けれど。

「自由にしているって事は、どんどん作って良いって事だよな？」

部活動には真面目に取り組むと決意して来たのだ。俺は腕をまくって、マジックアイテム制作に取り組むことにした。

とりあえず、初心者用のレシピを開く。流石初心者向けだけあつ

て内容は簡単だ。魔法効果を付与したい道具に、魔法陣を刻む。あとは魔力をチャージすれば出来上がり。

一番簡単な物は属性除けのお守りだ。

あらかじめある属性の魔力を込めておく事でその属性の加護を得る。ただ詰めただけの魔力では使用者に明確な効果を及ぼしはしないもののその属性が有利となる属性による魔法や魔導を受けた際に魔力を打ち消して被害を低減してくれる。

俺は早速、道具棚を物色し指輪を一つ取り出した。それから、大きめの用紙に刻む魔法陣を描き写す。あとはその用紙の上に指輪を乗せて、

『転写』っと」

つん、と指輪をつつくと指輪の表面に縮小された魔法陣が刻み込まれた。これは既に描いてある魔法陣を別の物質にコピーする汎用魔法だ。

「で、魔力を込めて……」

試しに指輪を握りしめ属性をチャージしてみる。
が。

作ったのは魔法の被弾時に効果を発揮する代物だ。魔力を込めただけでは動作確認にならない。

「シジアン、ちよつと闇属性の魔法撃つてくれない？」

「判りました。『第一暗黒魔法』」

シジアンは闇系の基礎魔法の中で最も威力の弱い物を発動した。小さな黒い球体が空中に現れ、指輪へと飛んでいく。

黒い玉が指輪にぶつかろうとすると、指輪がカツと白く輝いて黒い玉を消し去った。

「お。成功だ」

どうやら無事に制作できたらしい。

初めての割には妙に手際よく事が進んでしまった。

数時間どころか数分しか掛かっていない。

「なんか、めっちゃくちゃ早く終わっちゃったな」

肩すかしを喰らった気分で眩く。

「普通はまず魔法陣をレシピから描き写すのに時間が掛かります。それから、『転写』の際に魔法陣の縮小倍率などの感覚を掴むのに苦労する物なのですが……流石先輩です」

「おお、なんか知らないけど普通より凄いいことをしたらしい。」

「ひよつとして俺才能有る？」

「——なんて、な。そんな訳無いか。偶然の産物だろう。」

「この後練習として属性除けのお守りを何個か作ってから解散した。」

◇ ◇ ◇

「ただいま」

寮室に戻ると、香ばしい匂いが鼻腔をくすぐる。

「おかえりー！… ご飯丁度出来たところだよー！」

「ひよこつとエプロン姿のドライズが顔を見せた。」

「ドライズは料理が趣味であり、練習という事で夕食を提供して貰っている。」

「因みにその事をこの前リーゼに喋ってみたら、」

『あら。まるで彼女か新妻じゃない』

「と言われた。……いや、男同士なんだけど。俺にその気は無いから勘弁して欲しい」

「さて、奥へ入って行くと食卓にこんがり焼けたステーキ二人分が並んでいた。」

「え、なんで今日はこんな豪華なんだ？ なんかつたつけ？」

「俺が首を傾げると、ドライズはさも当然と言わんばかりに、」

「え？ 君が部活動を始めたお祝いだけど？」

「と言ってくるので呆れてしまう。」

「はあ？ わざわざそんな事で……」

「俺が座ると、ドライズも正面の方に座って。」

「それで？ どうだった？ 上手くやれそう？」

「と、捲し立ててくる。……前も思ったけどこれって彼女って言うより母親じゃないか？ いや、男なんだけど。」

「とりあえず俺は少しふざけて。」

「顔面パンチ喰らった後にボディブローされたな」

と言ってみた。

「……そんなバイオレンスな所に行ったの？」

「なんて、冗談に決まってるだろ。今のは俺が今日見た幻覚の話だよ」
「君、日常的に幻覚見てるの?? 頭大丈夫??」

違う意味で心配された。

その後、ステーキを食べながらも話は続く。

「友達はできそう?」

「別に、後輩が一人居るだけの小さいところだぞ。……あ、でもレンさん、もといレンとは今後関わっていくみたいだったな」

「そっか。まずは小さな一歩から、だね」

ドライズは自分の事のようにほっと安心した様子を見せた。

「なんでお前が一喜一憂してるんだよ。関係無いだろ、お前には」

バツが悪くてそっぽを向きながらそうぼやく。するとドライズはため息を吐いた。

「君がそんな事を言うのかい?」

「う……」

言葉が詰まる。

「あーあ。独りぼっちだった僕の心を強引に開いて来た君は何処へ行っちゃったのやら」

「あ、アレは若気の至りでだな……」

何年前の話だろうか。上手く思い出せないが。

「僕が何度突き放しても絡んで来たじゃ無いか。あの時の豪胆さはどうしちやったのさ」

「寧ろそれでメンタルポイントゴリゴリ使った感はあるんだけど」

「何そのポイント。無くなったらどうなるの?」

「泣く」

「代償やっす」

いつもの様に無駄話をしながら食事を続けた。

そして、後片付けをしていると。

「誰かの支えがあるから人は生きていける。人と繋がることの強さを僕に教えてくれたのは、君だ。そんな君が今は独りで居るんだから、

そりゃ心配もするさ」

俺は片付けを手伝いながら言葉を返す。

「昔は昔だったの。お前が変わったように、俺も変わったんだ」

「だとしたら……もう一度変わるべきだ。少なくとも今の君は、苦しそうに見える」

「……ま、善処はする」

俺は片付けを終えて、そのまま逃げるように二段ベッドの下段に潜り込んだ。

10話 うおおおうぜえ……。

休日の朝というのは何処までも自堕落になれるモノである。

ぼんやりした思考の中、何やら物音がして居る。

「どうやらドライブは出かける用事があるようで、小さく『行ってきます』と聞こえた。」

そのまま俺は眠気に身を任せ、日中を寝て過ごすつもりだった。

しかし、甘い微睡みの中を彷徨って居るとふとピリリと甲高い音が聞こえる。

枕元で携帯端末が震えていた。

正直応答するのは凄く面倒くさい。が、メールならともかく電話は取れるときに取っておかないと後が大変な時がある。俺は仕方なく携帯端末を手に取った。

「うーあー……もしもし」

『あ、先輩ですか。おはようございます』

聞こえてきたのは俺が入ったばかりの部活動の部長にして後輩、シジアンの声だ。

「どうかしたか？」

『いえ、今日が部活の活動日である事を伝え忘れていたので連絡を。急な話になってしまったので休まれても構いませんがどうしますか？』

俺は思わずうめき声を上げそうになったのを意地で堪える。

ぶつちやけ行きたくない。このまま昼まで寝ていたい。

しかし考えてみよう。俺はこの部活動に入ったばかり、かつたった二人だけの部活だ。あまりにもやる気の無い態度を見せてはシジアンに失礼だし、人間関係が行き詰まる可能性もある。

そして昨日の夜ドライブに言われた事を思い返した。

——もう一度変わるべき、か……。

シジアンとは良好な関係を築いて行きたい。

「いや、すぐに行くよ」

打算的な動機で少し自分が嫌になるが俺はそう返事をした。

『判りました。それではお待ちしております』

その言葉を聞いた後、通話を切ってベッドから降りる。

「さあつて、気合い入れていこう」

と、大きく伸びをして、身支度を始めた。

……とここでふと、思う。

「……そういやシジアンに端末の番号教えたっけ？」

……記憶には無い。が、現に電話が掛かってきているのだからシジアンは知っているという事で間違い無い。つまりはドライブスカルクシエラさんに聞いたって事だろう。うん。

部室前。

人間とは同じ過ちを繰り返す生き物だ。

「おつはようございまーつす！ 今日も一日がんばろーつ！」

元気たっぷりに意気揚々と、俺は部室の扉を開いた。

「え?」

……デジャブ、だろうか。部室にはシジアン以外にもう一人。

「マー君? マジで? なんかキャラ違くない!」

短めの金髪を太い二つ結びにした黄色いローブの少女。

「……」

例にもよって、俺は部室の扉をそつと閉じた。

「ちよ、まつ——」

……俺がこの学園の生徒に劣等感を抱いて壁を作ってしまったているのは良く無いことだと自覚しているが。

それはそれで置いておいて。

普通に苦手なヤツが居る。

俺は意を決して、もう一度部室の扉を開けた。

「おはよう、シジアン。良い朝だな」

努めて平静に振る舞い、シジアンに挨拶する。

「おはようございませす、先輩」

俺の扱いには慣れたのか、シジアンは特にリアクションも無く俺に合わせしてくれるが。

「いやいやいや！ 今のを無かった事にするのは不可能だよ!!」

触れて欲しくないところにごいごい突っ込んでくる黄色いヤツ。

クラスメイトの一人、エクレアという女子だ。

「完全に別人だったよ!?! いつも『俺に関わるんじゃないやねえ』っていう排他的なオーラは何処にいつちやったの!?!」

俺、普段そんなオーラ身に纏ってんのか。初めて知った。

「うるさいな……なんでコイツが居るんだ?」

俺は基本的に馴染みの無い人間には下手に出る。が、コイツことエクレアはあまりにも鬱陶しすぎてもうそんな事気にしないでぞんざいに扱う様になってしまった。

「わぁお冷たい! やっぱりいつものマー君だ。エクレアちゃん泣いちやうぞ?」

なんて、涙のなの字も見せないようなにやけ顔で言われても反応に困るだけだ。

「新聞部の取材だと言って先ほど突然やってきたのです」

「そんな予定があったのか」

「いえ、予定なんてありませんでした。先ほど急に突撃してきたのです」

はた迷惑な事この上ないが、エクレアはそういう事を平気でやるタイプだ。

「やれやれ。こういう時には事前にアポイントメントを取るもののように、常識がないのだから」

と、シジアンは呆れながら言い捨てる。

「げふつ!?!」

俺は流れ弾を喰らって吐血した。

「せ、先輩? どうしましたか?」

「いや、なんでもない……」

その昔、とある魔女の所へアポイントメントも無しに突撃したヤツが居たことを思いだしてしまった。

あはは、常識が無いか……ぐすん。

「まーまーそう言わずに!」

「はぁ。少しだけですからね?」

シジアンは面倒くさそうに眉間に皺を寄せつつ返答する。シジアンにしては珍しい対応だ。レンや俺とのやり取りでは丁寧で落ち着いた様子で振る舞っていたのに、エクレア相手には何処か砕けた雰囲気を感じる。

……それだけ、エクレアという人間のウザさレベルが半端ないという事か。

「一年生にして部活動を開設した若き天才マジッククラフターに迫る……！　なんてね」

メモ帳とペンを取り出してそう見出しを書くエクレア。しかし、「別にボク自身はマジッククラフトは大して得意でもありませんから。天才と称するのは辞めてください」

シジアンはきっぱりとそう言った。

「え、そうなんだ」

「え、そうなんだ」

やっべ。思わずエクレアと一言一句同じリアクション取ってしまふ。

「わっ今マー君とハモったね!!　以心伝心ってヤツ!!」

うおおおうぜえ……。エクレアの前では迂闊に思った事口に出れないな……。

「つとと、それはさておき……。じゃあ何でこの部活動を開設したの?」

「それは……」

ふと、シジアンは言い淀み視線がチラリとこちらに向く。

ひよっとして、俺に聞かれたく無い話だろうか。

「席外そうか?」

俺が訊ねると、シジアンは首を横に振った。

「いえ、すみません。大丈夫ですから」

そして、続ける。

「ボクにとつてとても大切な人が、マジッククラフトが得意だったのです。それで、憧れがあったので自分でも始めてみよう」と

「おお!　何々、大切な人って!!　ひよっとして初恋!!?」

「……これ以上は答えません。プライバシーの侵害ですから」

「うっ、ソレを言われると厳しいなあ……」

流星に引きどころは弁えているのか、エクレアはこの件についてはそれ以上深追いはせず、更に軽く幾つかの質問をして。

「ふむふむ、よーし、こんなものでいいかな。ご協力ありがとうございますー！」

満足げにメモ帳を閉じて、そそくさと去っていた。

「……嵐みたいなヤツだな、ったく」

「ええ、全く。でも、そこに少し可愛げがあります」

シジアンはくすりと笑って居た。なんと言うか、大人の余裕というか妹を見守る姉のような気配を感じてしまう。いや年齢的に立場逆だろうと思うが。

「さて、気を取り直して……部活動始めるかあ」

改めて、俺はマジックアイテム作成に取りかかる事にした。

11話 珍しい組み合わせになりましたね

この世界は魔法の力に満ちあふれているし、魔法によって成り立っている。だからこそ、魔法によって有害事象が巻き起こされる事は日常茶飯事だ。そんな有害事象の中で最も代表的かつ身近な存在……それが、「イーヴィル」である。

平日の午前中。教壇に立つのは教師ではなくクラス委員のリーゼことヴェルリーゼ。

年齢の割にとても小柄で身長はなんと130cm代でクラス内ダントツの最下位(因みにワースト次点は俺だ)、肉付きも悪い。新緑の髪もやや艶が無い様に見える。けれどしつかりものの姉御肌でクラスを纏めて引っ張っていくリーダーだ。そういつた特徴や性格はかつて孤児院で生活していた影響が大きいと聞く。

「今日の課題のミーティングを始めるわ」

魔法によって引き起こされた有害事象を処理出来るのは当然魔法に精通した魔導士だけである。故に、イーヴィルの処理も魔導士の仕事の一つ。イーヴィルと対峙し、実際に対処する事で経験を積む事を目的としてこの学校は課題として学生にもイーヴィル退治が指示されるのだ。

では、イーヴィルとは何か？

有り体に言えば「魔物」の一種である。或いは「悪しき魔導の成れの果て」、俗に「悪魔」とも呼ばれている。発生原因が溢れ出した魔力にある事以外あまり詳しい事は判っていない。

イーヴィルはその身に宿す保有魔力や危険性から現状1〜3の三つのクラスに分類される。数字が大きいほど危険であり、

クラス1は人間に子供の悪戯程度のささやかな被害をもたらし、放っておいても大した事は無いが無視も出来ない絶妙に鬱陶しい存在。

クラス2は等人間社会で言うところの犯罪に相当する行動を行う者や俺が最近対峙した理性の無い獣のようなモノなど放置出来ない、場合によっては死傷者が出る存在。

クラス3はその動向によって災害に等しい被害をもたらし、早急に討伐する事が求められる規模の存在。といった具合だ。

この中で戦闘を行っても比較的安全なクラス1が、4、5年生の生徒が課題で討伐する対象である。

そして、イーヴィルには種族や同型が存在するように仮に討伐しても全く同じ特徴、能力のイーヴィルが再出現する事も多い。

「今回の敵はいつも通り、クラス1。特に注意すべき点は無いか、だからこそ油断しないように。それから、正式にユウを交えた初の戦闘、つまりユウの初陣よ。ユウが組みやすいチームを模索する為に班分けを再編成して、戦闘毎にユウのサポートを変更していくからそのつもりで。今回に関しては私、ドライブ、ユウでチームを組むわ」
ユウと初めて出会い、この学校に案内したドライブとクラス委員のリーゼは共にユウの世話係であり初陣のサポートとしては適しているだろう。

「ど、ドライブ君、よろしく……おねがい、します」

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよユウさん」

口元に手を当て不安そうにするユウをなだめるドライブ。が、ここで一つ問題が生じた。ユウが来るまで、俺はドライブと二人でチームを組んでいたのだ。今まではクラスが8人で3、3、2に別れていた為である。

「え、お、おいリーゼ。じゃあ俺はどうなるんだ?」

「ファルマはナギ、マナトと組みなさい」

う、そりやそうなるよな……。ドライブ以外のクラスメイトとチームを組むのはこれが初めてになる。緊張してきた……。

「で残ったレン、エクレア、シャルネが最後の一組よ。出発は二時間後、目的地は第五火除地。いつもと違うチームだから、各々きちんと準備と打ち合わせをするようにね」

リーゼが全体のミーティングを切り上げると、教室内では自然にそれぞれ戦闘チームに別れて集まり始める。

俺はやや重い足取りでチームメンバーの元へ歩み寄った。普段とは違うチームでの戦い、上手くやれるだろうかと等と考えて居ると、

常に笑顔を絶やさず好感を持てる黒髪の少年、マナトが声をかけてくる。

「珍しい組み合わせになりましたね、ファルマ君」

そしてもう一人、

「色々ご迷惑をおかけすると思いますが、よろしくお願いします」

短い栗色の髪で長身スレンダーな少女ナギがこちらも丁寧な言葉で、スカートの裾を少しだけ持ち上げてお辞儀をした。

すると、マナトが距離を詰めてきて、

「ナギのフォローはホンツツツツツツに大変ですから、一緒に頑張りますよ」

と実感たっぷりな台詞と共に俺の手を取る。

「いつも感謝しています、マナト」

ナギはにこやかに笑って居た。

「普段の」ナギはこんな感じで、少し堅いが穏やかで真面目な少女だ。

「ナギはお願いですからもう少しだけ自分の身体を大事にしてください」

「はい。出来る限り最大限善処します」

「何故でしょうか。全然信用出来ません……」

丁寧ながらもお互いに強い信頼を感じさせる砕けたやり取りに挟まれてぽつんと会話に取り残される。

「仲良いよな、お前等」

マナトとナギは同郷で付き合いが長く共に死線を乗り越えた、なんて話を聞く。この二人はそこまで苦手ではないが既に人間関係が構築されている所に割り込んでいるようで、居心地が少し悪い。

ぶつちやけ付き合ってるだろこいつ等、と思ってる。

「とりあえず戦闘が始まったらナギから5メートル以上距離を取ること意識して下さい。下手をすると巻き込まれてしまいますので」

マナトの忠告に、俺は今更だと言わんばかりに苦笑いを浮かべた。

「いや、心配しなくてもあんな状態のナギさんに近づけるほどの胆力は持ってねえよ」

一緒にチームを組んだことが無くても、同じクラスで同じ戦線に立って居ればナギの戦いは嫌でも目に付く。そういう戦い方をするのだ。

「お恥ずかしい限りです……どうにも戦いになると昂ぶってしまっ
て」

ナギはこのクラスの中で間違い無く。

……『最強』なのだから。

12話 3秒でお届け

そして、規定の時間。クラスメイト9人がきっちり揃って校庭に出ている。

「人数よし、ね。さ、出発するわ！ レン、魔法陣の調子は？」

「……完璧」

しゃがみ込んで居たレンがにやりと僅かに笑みを見せて立ち上がる。その足元には巨大な幾何学模様的一端があった。

今回はレンが、自主製作の魔法陣を使って現場まで送り届けると提案したらしい。

ここ最近部活動で関わる様になってから判った事だが、どうやらレンは魔法陣というモノに並々ならぬ情熱を注いでいて、その結果がある教科書の落書きだったと言う訳だ。

最早「ただの魔法陣オタク」なのでは？ と思い始めて来た次第である。

とはいえその技術力は学生レベルには思えない。レンの持つ光り輝く才能だ。

眩しくて、直視できない時がある。

俺なんか、辛うじて見よう見まねにマジックアイテムへ落とし込むのが限界だ。あんな魔法陣、生み出せない。

……少し、憂鬱になっていると他のメンバーは既に魔法陣の中央で待機していた。そして、レンがとことこチームに合流して。

「……3秒でお届け」

ふんす、と胸を張って自信満々に言った。

「はっやっ!? 第五火除地って10kmくらい離れてるよね!? あたし達今から時速何キロで射出されんの!?!」

と、やいのやいのと狼狽えているのはエクレアだ。

「……限界に挑戦した」

「あたし絶叫系ダメなのがいい!!」

正直意外だ。完全にイメージで決めつけていたが、そういうの好きそうだったのに。

余談だが、魔法陣による高速移動、あるいは瞬間移動というのはまだ研究中の技術なので他の学年やクラスの者達は歩いて行ったり常識的な速度の魔法で飛んでいったりする。

「なんだか懐かしい感じがしてちょっとだけわくわくするかも」

普段おどおどしているユウさんだが、意外と楽しそうな素振りを見せていた。

まあ彼女は空からすごい勢いで落ちてきた事があるらしいので慣れているのだろう。

「大体マツハ十くらいか？ ルクシエラさんに射出された時と比べりや全然マシか」

アレはやばかった。体感では光の速さくらいあったんじゃないかと思う。

「師匠に振り回されてるところいうのも慣れちゃうよね」

「みんなおかしいって!? 安全性とか心配しよう!」

異常な日常に慣れている人達に常識を求めてはいけないと思うのだが。

「……ぬかりない」

きちんと配慮してあるという事か。レンは顔は無表情だがぐっと親指を立てる。

「はいはい、お喋りはそこまで！ 3秒で着くなら道中で支度する暇は無いわね。到着次第即座に戦闘開始になるだろうから、みんなここで武装展開しなさい」

「まってリンリン！ ホントにこれで行くの!? あたしだけ徒歩で――」

スツと魔法陣から逃げようとするエクレアをレンが背後から取り押さえる。

「……逃がさない」

「何でっ!? 良いじゃん一人くらい居なくなっただってどうとでもなるよ!!」

「……実験データは多い方が――こほん。訂正、戦力としてエクレアは必須」

「今ツルツと本音聞こえて来たよおっ!!?」

エクレアがだだをこねている間に、他のメンバーは各々戦闘用の装備をし終えていた。

「丁度良いわ、レン。ついでだからそのままエクレアの装備も強制的にマテリアライズしてあげて」

「……了解。『紋章術・強制起動』」

背後から腕を回して拘束しつつレンは右手を細やかに動かす。指先の軌跡はあつと言う間に手の平サイズの魔法陣を形成し藍色に輝いた。

「ああっ勝手に装備があっ!!」

黄色い光と共にエクレアの頭部にゴーグルが装着されクロスボウがコテンと足元に転がる。魔力を物質に変換する『マテリアライズ』だ。

魔導士達は各々の装備を構成する魔力を込めた魔石を持ち歩き、戦闘時に展開する事で装備品の嵩張りを避けている。複数の武器を使い分ける場合にも凄く便利だ。また、魔力構成さえキチンできれば日常においても壊れた物の修理等に役立て、爆発やら衝突やら消滅やらが日常茶飯事なこの街で暮らすにおいては非常に重要な魔法である。リーゼは転がっているクロスボウを拾い上げ、エクレアに押しつけて。

キリツと表情を引き締めて宣言した。

「4のA、出撃よっ!!」

そして俺達9人の少年少女の身体が一瞬だけふわりと浮かび上がると、次の瞬間には緑色球状の光に包まれて、凄まじい勢いで空へと放たれて行ったのであった。

「にやあああああああああああ!!!」

エクレアの悲鳴と共に。

◆ ◆ ◆
シジアン視点

イーヴィルと実際に戦闘するのは4年生以上の生徒だが、1〜3年

生も間接的に戦闘に関わってくる。具体的には、発見されたイーヴィルを火除地という火災対策に用意された広場に追い込んだり(戦闘するのに丁度良い広さなので度々イーヴィル退治に利用されている。最近では「魔除地」なんて呼ぶ人も居るとか)、一般市民を戦闘区域に近づけないように見回ったり戦闘終了後に壊れた町並みを修繕する等の片付けをしたり、だ。

そして、今回は偶然ボクの所属する1のBが担当だった。

「そろそろ先輩達が来る頃ですか。しかし瞬間転移魔法陣、とは。相変わらずレン先輩は革新的でいらつしやる」

ボクは1のBのリーダーであるため、あらかじめリーゼさんからレン先輩の新作魔法を試運転すると連絡を受け取っていた。

「興味深い事です。移動方法にもよりますが、目立たずに発動出来るような改造は可能なのでしょうか。上手くマジックアイテムに応用できれば、今後先輩のサポートに利用できるかもしれないのですが」
そう呟いていると、

「りくたく。リーゼちゃん達、もう着くから念のために離れてってよ」
眠たそうに欠伸をしながら目を擦るピンク色の髪の少女、クラスメイトのハルカさん。

そこそこ歳の離れた先輩であるリーゼさんをちゃん付けで呼ぶのは、同じ孤児院に所属していたかららしい。

「……つと、すみません。それではみなさん、退避を」
「判ったよ」

そしてボク達が離れて数秒後。

「……ああああああ!!」

少女の甲高い悲鳴が近づいてきたかと思うと、次の瞬間凄まじい衝撃音と共に火除地の中心に9人の少年少女達が着地していた。

着地した周囲に巨大な円形のクレーターを作って。

「あー……あれは、隠密行動には使えなさそうですね」

ボクは呆れてため息を吐いた。

13話 俺は一体何と戦っているんだ……？

「うきゆう……」

目的地には到着したものの、目をグルグル巻きにして倒れ伏すエクレアを始め、大体みんな尻餅や片膝を付いた状態だ。

「体勢を立て直し次第、各チームでイーヴィルに攻撃！ ドライズ、ユウ、続いて！」

「了解、リーゼ」

「ま、待ってえっ！」

まずリーゼ達のチームが前進する。続けて、紅い旋風がリーゼ達三人を追い越して広場左方へと駆け抜けた。

「ファルマ君、ナギがもう突出してしまいましたっ!! すぐに追いかけましょう!!」

「くっそ慌ただしいなあー」

慌てて紅い軌跡と化したナギを追いかける俺とマナト。

そして、着地点に取り残される三人。

完全にノックアウト状態のエクレアと、

地面に膝をついてクレーターを確認し、『衝撃波の対策はきちんとした筈だけど計算が間違っていた？ 細部の調整を改めて行うのと着地の方法ももう少し練った方がよさそう。とはいえ8割方は成功していたし流石私の魔法陣ね。とりあえずまずは空気抵抗の計算から……』と完全に任務を忘れてしまっているレン。

そんな二人の様子に嘆く最後の一人。

「待ってくれ!!? まともに戦えるの私だけなのか、このチーム!!?」

頭を抱える可哀想なクラスメイトを尻目に、俺は思った。

——ああ、あの組み合わせにならなくて良かった……。

苦手とかどうこう以前の問題で、そもそも戦闘になっていない。後でリーゼの雷が落ちることが容易に想像出来た。そして、ナギを追いかけて走りながらマナトからの要請が。

「ファルマ君！ デッキブラシをマテリアライズしてください!!」

「なんでやねんっ!!」

戦闘中に寄せられる内容とはとてもおもえず、俺は咄嗟に変な返事をしてしまう。

「見れば判ります!!」

マナトが指差す先。そこには……

「やはり、クラスーだと物足りないですね……」

切り落としたイーヴィルの首を片手に、手足からだらだら血を滴らせてため息を吐くナギの姿……。その周囲には、無数の血痕が散乱している。

「まだ敵の姿すら確認してないのにもう終わってるうっ?」

ナギはすっかり戦闘態勢に入っており、制服は全て脱ぎ捨て、最低限胸と股周りのみに小さな金属鎧が申し訳程度に備えられているような機動力に全てを賭けたほぼ全裸と言っても過言では無いほど露出の高い格好をしている。そして両手両足の先端は紅くひび割れて血液がだらだらこぼれ落ちており、その筋が幾つも肌の上を伝い地面に流れ落ちていた。

そんなナギの足元をビシツと指差すマナト。

「血痕は処理が遅れるほど落ちにくくなります! 急いで掃除しましょう!! 洗剤は常備してあります!!」

「戦闘と全く関係無くね?」

「ナギのフォローとはこういう物です!! 急がないとナギがまた――」

マナトがファルマに説明しようとしている間に。

新たなイーヴィル、小人型で小さな翼が映えた小悪魔のようなイーヴィルがナギに飛びかかり、ナギはそれをヒラリと躲し、得物である刀を振り下ろす。

すると、強く握り閉められたナギの手の平から血飛沫が跳ね、刃の軌跡にそって散乱する。

「ああっ言ってる側から次のイーヴィルがっ!! 急ぎましようファルマ君!!」

ナギが使う固有のエンハンス魔法『サクリファイスの刻印』は身体能力を異常な程強化する結果肉体を損傷させてしまう魔法。故に戦

闘中のナギの一挙一動は血痕を周囲にまき散らすのだ。

俺だってナギの戦い振りは知っていたが、言われてみれば今まで戦闘後そこまで血痕が散らかっていた思い出はない。つまり今まではマナトが賢明に後処理をしていたという事か。

男二人でデッキブラシをゴしゴしさせながら、俺は思う。

「俺は一体何と戦っているんだ……？」

敵の数は十以上居たがナギが一体ずつ首を跳ね飛ばして回っているのが気がつけば半分は居なくなっている。尚、倒したイーヴィルは霧の様に消えて無くなるので事イーヴィルに関してだけならばスプラッタな事にはならない。

謎の体液（恐らく凝縮した残留魔力だと思われる）は多少飛び散るが寧ろナギが血まみれの姿で暴れ回るその様子はホラー作品の殺人鬼と言われても頷けるほどの迫力で余程恐ろしい。

魔法と言うにはいささか脳筋過ぎるかもしれないが。これがナギさんの「クラス最強」たる所以——圧倒的強さ、飛び散る鮮血も紅く煌めく星の輝きに見える。

その強さが、妬ましい……。

「……はぁ」

俺はデッキブラシでナギが残した血痕をゴシゴシ落としながら視線を他所のチームへ向けた。

◆ ◆ ◆
ドライズ視点

「環境がいつもと違うだけにみんなてんやわんやね」

リーゼは呆れたように笑いながら、ナギさんから距離をとった場所に僕とユウさんを引き連れていた。そして、イーヴィルのウチ一本だけに牽制の魔法を放って注意を引く。

「討伐自体はナギが勝手にやってくれるから、こっちはこっちで戦闘の練習よ」

「そうだね。ユウさん、準備はいい？」

「う、うん！ 頑張る！」

「緊張を解す為に敢えて言うけれど、相手はクラス1だから基本的に

大した事はしてこないわ」

クラス1のイーヴィルがするのは子供のイタズラ程度の行為だ。迷惑だがそこまで明確な被害はない。

「だからもし上手く攻撃が当てられなくても怪我をすることは無い筈よ。だからこそ私達学生に討伐が任されているんだけれど」

「そっか」

「でも、もし取り逃したり接近を許したりしたら……」

ぐつと念を押しして脅すように詰め寄るリーゼに、ユウはゴクツと生唾を飲み込む。

「したら……?」

恐る恐る解答を待っていると、リーゼはニヤツと少々悪戯な笑みを浮かべて答えた。

「最悪セクハラされるわ」

「セクハラ!? どうしてっ!? 私何されちゃうの!?!」

「判りやすいヤツだとスカートめくりとか」

「変態じゃんっ!!」

バツと咄嗟にスカートを庇うユウさん。

僕は嘗てクラス1のイーヴィルに絡まれた時の事を思い返していた。

「イーヴィルって何故か半分くらいは変態だよ……」

「な、何があったのドライブ君?」

「聞かないで……」

「子供のイタズラって言ったでしょ? クラス1っていうのはそういう物よ。ちよつとおいたが過ぎる子供にお仕置きするつもりで戦うのが一番気楽だわ。弟妹達をしつけていた頃を思い出して私は寧ろ懐かしい気持ちになるわねえ」

リーゼは懐かしむように空を仰ぐ。

「とはいえイタズラも度が過ぎると危ないからね。無視も出来ないんだ」

「なんだろう……緊張してた私、なんだかバカみたい……」

「緊張しすぎず、緩みすぎず、適切な心持ちで戦える事も重要よ。クラ

ス1はこんなモノだけど、クラス2以降は普通に危ないから勘違いしないようにしなさい」

「判った」

ユウさんは改めて深呼吸をした。そして、目の前の小人型イーヴィルをきゅつと睨む。

そして、ピシツと指を差して魔法を唱えた。

「行きますー！ 『第一岩石魔法』！」

ユウさんの目の前の虚空に、手の平サイズの石ころが複数宙に浮きあがる。

そしてイーヴィルへ向けて飛んでいった。しかし今回の敵は的が小さく素早い。

石つぶてをひらりと回避して、ユウへと迫り来る！

「やああ!!? 外しちゃったああああ!!」

先ほど聞かされたリーゼの言葉を意識してしまっているみたい。

「はいそこ、早速パニックにならない」

リーゼがやれやれとユウさんの首根っこを掴んで一步後ろへ下がった。

大分身長差があるのでリーゼはつま先立ちで手を高く伸ばして漸くユウの首周りの服をつまめている。

リーゼはそのまま僕に視線を向けて無言の指示。

『『第一氷結魔法』』

僕は魔法を発動し、リーゼに引きずられ一步退いたユウさんの前に氷の障壁を産み出した。

イーヴィルは勢いのまま氷の障壁に衝突し、フラフラと目を回す。

「大丈夫、僕達がちゃんとフォローするから。魔法の命中精度を上げられるようにちよつとずつ練習していこう。もつと近づいてきたら剣で追い払うから」

ヒュツと右手を振るう。

僕の得物は水色の細剣だ。

刺突・切断双方に利用可能な他軽く扱いやすいので魔法陣を描く事も容易である。

「さ、練習練習。頑張りなさい」

リーゼが風の魔法でイーヴィルを吹き飛ばすと、ユウさんの背中をポンと叩いた。

「う、うん！ がんばる！」

ユウさんは意気込んでもう一度イーヴィルに狙いを付ける……。

14話 あーあ。もう滅茶苦茶ね。

俺はデツキブラシを地面に突き立て、柄に顎を乗せて呟いた。

「向こうは平和だな……」

チラリと視線を移してみれば、

「来ルナアアアア!!」

小人型のイーヴィルが後数cmでナギの射程に入る、という間隔を維持しながら全力で逃走している。

「ふふっ！ ちよつとは面白い方がいらつしやいましたねっ！ 逃走に特化しているようですが逃がしませんよっ！」

目をギラリと輝かせ顔を綻ばせてイーヴィルを追い立てるナギさん。

「アレもうどつちが悪者か判りやしないな」

最早イーヴィルが憐れに見えてくる。イーヴィルは獣の様に知能が無いタイプと、言語を介し僅かながら知能を持っている者も居る。

「血の処理は大変ですが、ナギが楽しそうでなによりです」

マナトはデツキブラシをゴシゴシしながら、ナギの姿をニコニコ見守っていた。

鬼ごっこのように火除け地を行ったり来たりするイーヴィルとナギ。

「モウ嫌ダアツ!! ドウセ戦ナラコンナ色気ノ欠片モ無イ姉チャンヨリ、アツチノ可愛ゲノアル方ガ良イ!!」

「すげえな、お前の彼女。ほぼ全裸に近いのに『色気の欠片も無い』とか言われてるぞ」

流石イーヴィル、欲望に忠実というか、判りやすいというか。

まあ今のナギは何処を見ても色気より血の気しか感じられないので真つ当な評価だろう。

「今は彼女じゃないですよ?」

「えっ!?!」

なんだかさらつと妙に引つかかる発言を拾った気がして思わ聞き返すが、

「って、そんな事気にしてる場合じゃねえっ！ ナギさん達向こうに行っちゃったぞ!？」

ナギから逃走するイーヴィルの軌道がユウさんチームの方へ向かう。このままでは混戦になってしまう。

「おくいドライブ！ 気をつけろ、ナギさんがそっちに向かってるっ!!」

俺は両手を筒状にして呼びかけ、ドライブは迫り来るナギさん+αの存在に気付いてギョツとした。

警告内容が『イーヴィルがそっちに向かってる』では無く『ナギさんが向かってる』である事に誰も違和感を感じない。

「うわっホントだっ!? ユウさん気をつけてっ!!」

「ふえ？ ええええええ!？」

小人型イーヴィルはここぞとばかりにぐんっと加速して猛追するナギを引き離す。

ユウさんが目を丸くしてあたふたしているうちに、イーヴィルはその小柄な体格を利用してユウさんの股下をスライディングでぐぐり抜けた。

一陣の風が吹き、ふわりとスカートが揺れるが捲れ上がる程では無い。

「シマッター！ チャンススタッターノニ!!」

イーヴィルが軽く舌打ちをする。

「惜しい」

ついでに俺も舌打ちした。

「あはは、後で怒られますよ？ ファルマ君」

「見えなかったのに怒られるのは理不尽じゃね？」

そしてイーヴィルがユウさんをぐぐり抜けた事でユウさんが壁となりナギさんの行く手を阻む構図になる。

ナギさんの方は相変わらず血まみれで地面に紅い足跡を刻みつつ刀を構えて迫る。

ユウさんは涙目になりながら両手を前に突き出し必至にぶんぶん左右に振って叫んだ。

「ま、待ってナギちゃん!! 私っ! 味方っ! お、美味しくないからあっ!!」

最早ナギさんは猛獣扱いである。

一方で逃げていたイーヴィルの方はユウの練習台となっていた別のイーヴィルと合流すると口論を始めていた。

「ヒトリダケ可愛イ子ト遊ビヤガツテ!」

「オマエ! ナンテモン連レテ来テンダ!」

「チョットハコツチノ苦勞ヲ知レ!」

所詮はクラス1の雑魚イーヴィル。下らない言い争いで足を止めてしまっている。

「ユウツ! 動かないでくださいっ!!」

ユウさんの目前に迫り着いたナギさんは鋭く言い放った。

「ひっ、ひゃいっ!」

ビクツと身体を跳ねさせ、戸惑っている格好のまま言われたとおりぴたっと動きを止めるユウさん。

するとナギさんはダンツと一際強く地面を蹴った。

そして空中へと飛び出し、身体を丸めユウの頭上をくるりと前へ回転しながら越える。

「エエエエエエエ!!」

イーヴィルは揃って驚愕するが魔法が当たり前にある世界、これくらいのも事で驚くのはまだ早いだろう。

現に俺は欠伸をしている。

放物線を描いて下降を始めたナギは改めて刀を大きく振り上げ、その魔力を解放した。

『鎌鼬かまいたち!』

魔力を込められた刀が、緑色に輝きを放ちつつ着地に伴い振り下ろされる。

その刃がイーヴィルに届いている訳では無い。

けれど、刀身から3つの風の刃が正面と左右に分かれて放たれた。

「ゲエエエ!!」

イーヴィル二体は血相を変えて散り散りに逃げ惑った。

「さあ……」

ナギはゆらり、とゆつくり立ち上がり。

「鬼ごっこは終わりにしましょう……?」

メインデイツシユの蓋を開けるような、

期待に満ちた様子で。

シユツと刀を今一度構え直し、

「窮鼠の意地を見せて下さいませ……っ!!」

楽しそうに頬を緩め、凶悪な笑みを浮かべて駆け出した。

一体に1つ、追尾してくる風の刃。

イーヴィル達は必至に動き回って逃れようとするがその先にナギさんが回り込む。

一体のイーヴィルが風の刃から逃げつつ、辛うじてナギさんの攻撃を回避するが攻撃を外したナギさんはそのままの勢いで切り返し、もう一体の方へ急接近する。

さらに、風の刃は1つだけ追尾せずに自由に漂っており、ナギさんの攻撃の隙を埋めるように追撃を行っていた。

風の刃とナギが何度も何度も縦横無尽に行き交い、イーヴィルを追い詰めていく。

一方で。

「いつもよりはしゃいめますね。『刻印』の代償が心配です」

ナギを案じながらもごしごしレンガの床を掃除するマナト。

「あーあ。もう滅茶苦茶ね。まあ、ユウも少しは練習出来た……かしら?」

頭を抱えるリーゼに、

「誰か褒めてくれ、私を!! 倒したぞ、三体も!! レンとエクレアを守りながら!!」

完全に戦力外になっていた2人を庇いつつイーヴィルを処理した事を遠くから訴えてくる可哀想なクラスメイトと、未だにぶつぶつ言いながらレンガの床にチョークで小さな魔法陣を描いたり消したりしているレンと目をグルグル巻きにしたまま動かないエクレア。

「普段のチームバラしたらここまでグダグダになるんだな、俺達のク

ラス……」

俺は苦笑いするしかなかった。

15話 ユウさんを助けなきや……!!

「ユウさくん、いつまで固まってるの〜?」

ドライブが手を筒状にして、ユウさんに声をかける。

「な、ナギちゃんが良いって言うまで……」

「ナギさんは多分もうユウさんに動くなつて言ったこと忘れてると思うよ〜」

「で、でも……! 動いたら斬られちゃうつ……!!」

対してユウさんは冷や汗を流し、ふるふる小刻みに震えつつも固まったままのポーズを維持していた。

そして、完全に消化試合ムードが漂っているのは俺達だけではない。

「モ、モウダメダ……」

「ココマデカ……」

イーヴィル達は全てを諦めた様な、あるいは何かを悟った様な表情を浮かべている。

「ダガツ!!」

ピタリ、とイーヴィル立ち止まった。

そしてスツとしゃがみ背後から迫っていた風の刃をやり過ぐす。

「サイゴノ願イクライハツ!!」

もう一体のイーヴィルは軽くジャンプすることで風の刃を飛び越え。

イーヴィル達は同時に、ダツと駆けだした。

虚を突かれたナギさんは刀を振り上げていたその脇の下をくぐり抜けられてしまう。

「何をっ……!?!」

振り上げた刀を咄嗟に地面に突き立て、刀を軸にくるりと空中で身体を捻って即座に方向を転換する。そして確認したイーヴィル達の向かう先……それは、硬直したままのユウさんだ。

「ユウツ!! 逃げてくださいっ!!」

駆け出すと同時にナギさんが叫ぶ。

3つの風の刃もナギさんに伴ってイーヴィルを追うが最後の力を振り絞って走り出したイーヴィルに追いつかない!

「え、ええ、ええええ!!」

動くな、と言われて凄く中途半端な体勢で固まっていた所に、突如逃げろと言われて咄嗟に動けるだろうか?

少なくとも、少々鈍くさいユウさんには無理な話だった。

逃げようとして、けれど足が纏れてポテツと尻餅をついてしまう。

「ウオオオオオ!!」

雄叫びと共に両腕を掲げ決死の表情で寄ってくる二体のイーヴィルの姿はある意味クラス3より恐ろしい。

その鬼気迫る叫びが耳に入り、流石に気になった様子で顔を上げたレンがボソツと呟いた。

「……え? ……何あれ気持ち悪っ」

あまり感情を表情に出さないレンが明確に顔を歪めるくらいには異様な光景だった。

「助けてえええ!!」

二匹のイーヴィルがユウの元へ辿り着こうとした、その瞬間。

目を閉じ身体を庇って縮こまるユウから光が放たれる。

「ユウさんっ!」

それは、漆黒の中にポツポツと青白い星のような輝きの混じった、異質な光。

光は球状に広がってユウさん自身と、迫っていた二匹のイーヴィルを飲み込んだ。

「総員緊急指令よッ! シャルネとレンはエクレアの護衛をお願い! それ以外のメンバーは今すぐ私の真下に集まりなさいっ! あの光の動向に注意を向けて、十分な距離を取りながら移動!!」

異常をすぐさま察知したりーゼが、箒に跨がって空に飛びクラスメイトに指示を飛ばす。

「なんだなんだ何事だ!」

俺は慌てて指令に従い、箒に跨がり空に浮かぶりーゼの真下へ向かってチームの二人と共に駆けた。

「ユウさあぁんっ!!」

謎の光に呼びかけるドライブだが、帰って来る言葉は無い。やがて光の氾濫が少しずつ小さくなり、視界が開けて行く。現れたのは、二匹の小悪魔と一人の少女などでは無い。

細く歪な二本の足とあばら骨のような無数の細い肉で構成された胴体。

こぢんまりした頭部は、箒に跨がり空中から様子を伺っていたリ―ゼと同じ高さにそなえられていた。

全体的に線が細い、歪で異形の巨人が雄叫びを上げる。

『オオオオオ!!』

その、無数の線か筋、或いは枝にも見える胴体の中央に。

まるで木々や縄に絡まれるかのように骨張った無数の腕がユウさんの全身を拘束して捕らえていた。

「うっそだろ!? イーヴィルが融合しやがったっ!」

「総員ツ周囲に警戒っ!!」

再び、空から降ってくるリーゼの号令。

「皆さん、足元にお気を付け下さいッ」

ナギさんの言葉を受けて、皆の視線が足元へと移る。するとそこでは、グルグルと黒い渦のようなものが沢山の場所で蠢いていた。

「な、なんなのだ、これは!!」

可哀想なクラスメイトが驚いて居ると渦から突如、痩せ細った骨のような腕が伸びてきて。横たわって気絶していたエクレアの身体に纏わり付く。

「なっ何をするっ、エクレア君にっ!!」

一つ、二つ、三つ、四つとまるで何処かへ引きずり込むように。

「失礼ッ」

刹那、ナギさんが赤い軌跡と血痕の足跡を残して駆け抜け、腕のよなものがまとめて両断された。

けれど、周囲のあちこちから次々に腕がわなわなと伸びる。

それはまるで、蜘蛛の糸に群がる地獄の亡者のようだ。

「1のBリーダー、聞こえるかしら!」 4のAはひとまず新たに出現

したイーヴィルと交戦するわ。そっちは学園へ急いで連絡して！
もしもの時は応援を——っ!？」

上空から仲間達の様子を伺いつつ端末を使って支援を担当している下級生に指示を出していたリーゼの元に、巨人の細い棒のような腕が振り下ろされる。

「きゃっ」

直撃は避けたものの、バランスを崩し、片手で箒にぶら下がるような体勢になってしまふ。そうして身動きを封じた所へもう片方の腕が迫り……

「リーゼさんっ手を離してくださいっ!!」

下方から聞こえるマナトの声に従い、リーゼはきゅつと目を閉じ決死の覚悟で手を離す。

落下してくる小さな身体をマナトがしっかりと受け止めた。

「いたた……ありがとう、マナト」

「いえ、お気になさらず」

巨人の腕は宙に残った箒だけを捉え、箒は強く叩き付けられて斜め下へ跳んでいく。

「ぼっ!？」

偶然落下位置に居た俺の後頭部に箒の穂の部分が直撃し、バサッと覆い被さった。

「ファルマっ！ 遊んでる場合じゃないよっ!! ユウさんを助けな
きゃっ!!」

ドライブが苛立たしげに箒をすっぽぬき、地面に叩き付ける。

「遊んでねえよ!？」

不慮の事故だと言うのに。

イーヴィルは更に動く。

本体の細い棒のような腕が一回を叩きつぶさんと振り下ろされて。

「お願いしますっ 『グリード』!!」

リーゼをお姫様抱っこで抱えたまま、マナトが叫ぶと腰に下げている真つ黒な剣が霧の様に崩壊する。そして霧は振り下ろされる腕の前に集まり、網縄のような形に変質して腕を受け止めた。

「結構重いですね……あ、すみません、リーゼさんの事ではありませんよ」

マナトは一瞬渋い顔を作るが、慌てて手元のリーゼに謝罪する。

「判ってるわよそれくらい」

そんなやり取りをしていると、ごうつと大気が動き、影が差す。

巨人が一同の上空を覆い被さるように身体をかがめた。そして、ユウさんを捕らえる胴体からは更にブチブチという不快な音を立てて骨張った細い腕が生えて、まるで捕らえる獲物を物色するかの様に見えるきわきと蠢く。

そして、巨人の口がゆっくりと開いた。

『欲シイ、欲シイ……欲シイッ!!』

「な、何言ってるんだアイツ……!?」

その様子は、先ほどまでナギさんに追いかけていた憐れな小悪魔とかけ離れている。

不意に、捕らわれていたユウさんの表情が悪夢にうなされるように歪んだ。

「うう、やめ、て……こんな“願い”なんて……だめ……」

か細く痛ましい声は、何か言っているという事だけは判るも内容までは俺達に届かない。

けれどユウさんが苦しんでいるらしい事だけは強く伝わってくる。

「ユウさんを助けなきゃ……!」

ドライブは

「これはどうです? 『鎌鼬』^{かまいたち}ッ!!」

地面から伸びて仲間群がる腕を切り落としながら、ナギさんは空へ向けて刀を振るう。

刀身から放たれた三つの風の刃は捕らわれたユウの正面で大きく軌道を変えて曲がり、ユウさんの身体へ食い込む様に纏わり付く腕だけを切り裂いた。

しかし、周囲から新たに生えていた他の腕が次々ユウに纏わり付き、更には切り裂かれた腕ももう一度再生してユウさんに纏わり付いてしまい結局拘束は解けない。

「ッ！ 効きませんか。仲間一人救えないとは、不甲斐ないッ」

ナギさんは苛立たしげにもう一度刀を振り下ろして血を強く払い飛ばし、ついでに近くの足元から生えていた腕を切り飛ばした。

「私もまだまだ、精進が足りません……」

そして、異形の巨人を睨む。先程までの楽しそうな表情から一転した鋭く明確な敵意を宿した瞳がギラリと輝く。

「元はと言えば融合前に脇を抜かれた私の不始末。責任を取りますッ！」

ナギさんは合流したクラスメイト達から離れ、単身異形の巨人へと駆け出す。

「敵の注意を引きつけますッリーゼさんはその間に策をッ」

「任せたわ、ナギッ！」

遅れて届いてきた言葉に、リーゼは信頼の籠もった言葉を返した。

16話 やってやれツ主人公ツ!!

ナギさんは迫り来る巨人の手を刀で真っ向から受け止める!

「ツ、ハアツ!!」

ぶわり、とナギさんの四肢から鮮血がほとぼしり、刀を振るって巨人の手を押し返した。

「ナギッ適当に置いておきますツ使って下さい!!」

マナトが叫ぶと、黒い霧と化したマナトの剣が空中で幾つかの小さな塊を形成する。

ナギさんは返事も無くその黒い塊を足場として飛び乗り、蹴っては空を駆けてゆき、

「急所は人体と同じでしょうか?」

巨人の顔の目の前へ飛び、その目と思われる部位に刀を突き立てた。

巨人は大きく仰け反り、悶え苦しむ。

ナギさんの攻撃により悶える巨人から俺達は距離を取る。

リーゼが思案している。

「ともかく、ユウの救出が急務ね」

「だが、ユウ君を拘束してるあの腕のような物体は斬ってもすぐに再生していたぞ?」

可哀想なクラスメイトこと、シャルネさんの指摘にドライズが声をあげた。

「多分、僕ならあれをどうにか出来る」

皆、その言葉に驚くが俺はハツとして確認した。

「もしかしてお前……もう『受け継いでる』のか?」

「うん。僕にも『破滅の光』が宿ってる」

ルクシエラさんを特別な人間たらしめている力。

原初の魔力の一つ『破滅の光』。

正当な弟子であり養子でもあるドライズならばいつから継承するものだとは思っていたが、もう既に受け継いでいたとは。

「でも、普通に使ったらユウさんを巻き込んだじゃう。剣にエンチャントして、直接拘束してる腕を攻撃しないと……」

「そのためには接近しないといけない、か……」

俺はもう一度、時間を稼いでいるナギさんの方を見た。

マナトが作り出した黒い足場を次々に蹴っては移動を繰り返し、空中を三次元的に駆け回る事で攪乱するナギさん。

巨人の方は、ナギさんを捉えようとその二つの腕を大きく振るい応戦している。相手がナギさんだからその攻撃を捌ききれているが……。

「刻印を使用したナギの素早さ、身のこなしは僕でも追いつくのが一杯です。他に真似できるクラスメイトは居ないと思われます。まずは相手の動きを制限するべきかと」

マナトの分析。

ドライズとマナトの言葉を、リーゼはかみ砕き、

「つまり、〴〵あの腕を無力化〴〵して、〴〵ユウの元へドライズを送り届ける〴〵必要があるという事ね」

そう言って作戦を整理し、顔を上げる。

「作戦が纏まったわ」

◇ ◇ ◇

「ナギツ、リーゼさんから指令です!! 腕を一本、無力化してください!!」

地上から、空のナギさんへ向けてマナトが叫ぶ。

「承知」

ナギさんは攪乱する動きをやめ、黒い足場の一つに留まった。

すう、と深く呼吸をして、

「ユウさんには申し訳ありませんが。私はこの状況を少しだけ、喜ばしく思っ居ます」

正面に立つ巨人を見据えて、言葉を続ける。

「嘗て対峙する事の無かった異形との戦い。沸き立つ心を抑えられませんか」

刀を構え直し、キツと巨人を睨んだ。巨人の方は、ナギさんが動き

を止めたことを好機と考えたのかその細い腕で拳を作って繰り出す。「私の武道が何処まで通じるものなのか……血の滾りを感じずにはいられない!!」

ドクン、とまるで心臓の鼓動の様な波動がナギさんから放たれた。濃厚な魔力を孕んだ紅いオーラがナギさんから立ちこめる。

「——そして、これが私のケジメです。我が血を以て、皆の活路を開きましよう」

紅いオーラを纏ったナギさんは再び刀を構えて、口を開いた。

『我が戦いの道はここへと至る。我が研鑽、我が生涯。その全ての結末を示しましょう』

詠唱と共に。迫り来る拳を真っ向から迎え撃つ!!

『神風』ツ!!」

大気すら切り裂かんと放たれた斬撃は、ナギさん自身より何倍もの体積を誇る巨人の片腕を。

文字通り、一刀両断にした。

「……っ」

一方のナギさんは、『刻印』の代償により全身に赤い亀裂の様な筋を走らせ、血をだらだらと流しながらゆらりと身体を傾けた。そのまま、黒い足場から落ちていく。

落下してきたナギさんを、マナトがしっかりと。

例にもよってお姫様抱っこの形で受け止めた。

「お疲れ様です。しっかりと休んで下さい」

マナトはナギさんに回復魔法をかけながら、そう伝えた。

ナギさんがイーヴィルの片腕を斬り捨てたのと同時に、俺は空へと飛び出した。

リーゼが乗っていた箒を借りて、サーフボードのように立ち乗りをして空を突き進む。

「ただの石ころだってなアツ!! 鉄砲玉ぐらいにはなるんだよオツ!!」

イーヴィルはそんな俺を叩き落とそうと残されたもう一方の腕をこちらへ向けて来て。

目前に巨大な拳が迫る。

俺はそのまま、得物である槍をマテリアライズした。

「喰らえッ!!」

俺は勢いに乗せて槍を投げ飛ばし。

俺が放った槍はそのまま、イーヴィルの拳に突き立つ。

しかし、相手の巨大さからみてみれば突き立った槍なんて爪楊枝の
ようなモノ。

無論、それだけでどうにかなるだなんて思っちゃ居ない!

『弾けるッ黒鉄の楔』!!』

俺の詠唱に呼応して、突き立った槍が赤熱し、ボコボコと形を変え、

『ヘビィ・ブラスター』!!』

槍はそのまま大爆発を起こした。

俺も爆風に巻き込まれて吹き飛ばされ箒から落下しそうになる。

しかしこの爆発だけで腕を消し飛ばす程の威力は無い。

石ころの様な俺に、ナギさんみたいに腕一本を簡単に潰せるだけの
力は無い。

それでも、一瞬怯めばそれでいい!

『求めるは第三の叡智、制するは炎、集いし業火は煉獄の魔弾』ッ
箒の上でバランスを崩しつつも重ねる詠唱。

石ころの鉄砲玉も、数を撃てば少しは効くはずだ!

『^{グレン・フレイム}第三火炎魔法ッ!!』

俺は俺に出来る最大限の魔法を放った。

『ヘヴィ・ブラスター』の爆発でややひるんだ腕に追撃で紅蓮の火球
がぶつかり、爆ぜる!

相乗する爆風が俺を完璧に箒から振り落とした。

ナギさんみたいに、強く鮮やかにはいかない。

けれど、この二連撃で残された片腕も確かに大きく怯んだッ!!
逆行していく景色。

落下しながら、すれ違う様に昇って行く影へ向けて。

鼓舞するように俺は拳を突き出す。

「やってやれッ主人公ッ!!」

落ちていく俺とは入れ違いに、幾何学模様で構成された翼を備えたドライズがイーヴィルに囚われたユウの元へと羽ばたいていく！

「ユウさん……いー！ 今助けるよ!!」

ドライズの翼の正体はレンの魔法陣とリーゼの風魔法を組み合わせた即席の飛翔魔法だ。

即席故に調整が甘い点を、レン・リーゼ・シャルネさんの三人がかりで制御している。

そして、ドライズはユウさんが囚われている巨人の胴体部分に到達した。

胴体からはユウさんを拘束している無数の骨張った腕と同じ物が更に生えてきて、わなわなと抵抗するように無造作に振るわれる。しかし、リーチも威力も足りていない無駄な足掻きだ。

ドライズは難なく腕の妨害を回避して、大きく剣を振り上げた。

「これで、終わりだあッ!!」

エンチャントにより「破滅の光」が纏われた剣を振り下ろし、ユウさんを拘束していた腕を切り裂いた。

光の軌跡が切り口に残り続ける。

ユウさんを拘束する腕が新たに生えようとするも、その滞留する光に触れると蒸発するように黒い霧となって、再生が妨害されてしまう。

やがて、支えがなくなったユウさんの身体が零れる様に落下していく。

ドライズはすぐに軌道を変えて、ユウの落ちる先へと回りこみしっかりと受け止めた。

「うう……ドライズ、君……?」

「ユウさん、もう少し待ってね」

ドライズはそのままゆっくりと優しく着地すると地面に優しくユウを寝せた。

その後改めてイーヴィルの方を向くと、イーヴィルは苦しむように呻いていて、あれ程巨大だったイーヴィルの身体が黒い魔力を放出させて凄まじい勢いで小さくなっていく。

ユウを引き離した事で何らかの影響が出たらしい。

巨人の肉体が完全になくなって元の小鬼型のイーヴィルが二体、力尽きたようにぐったりした姿で現れる。

「嬉しい誤算よっ！ ドライズ、トドメを差しなさい!!」

リーゼの指示に従って、ドライズは細剣を振り下ろした。

切り裂かれたイーヴィルは、黒い霧の様になって霧散する。

「……ふう。なんとかなった、かな」

ドライズが漸く、といった様子で一息吐くと。

今、まさに限界が来たと言わんばかりに。

キイインと高い音を立てて、ドライズが使って居た細剣の刀身がバラバラに砕け散ったのであった。

余談だが。

羽ばたいていくドライズと入れ違いになって落下し、一足先に地上に到達していた俺は。

「はい、ファルマ君もお疲れ様です」

例にもよってマナトにしっかりと受け止められていた。

……これまた例にもよって、お姫様抱っここの形で。

「……………お前、今日だけで何人お姫様抱っこしてんだ？ イケメンかよ」

ちよつと恥ずかしくてそんな冗談を言ってみたがマナトは、

「皆さんぐ(無事で何よりでした」

と、いつもの優しい笑顔を絶やさなかったとき。

17話 『願い』が意味を持つ不安定なこの世界

「……うくん。はっ!？」

ぱちぱちと何度が瞬いてエクレアが身体を起こした。頭のゴーグルは斜めにずれていて少々間抜けにみえる。

「あ、エクレアちゃんおはよう」

エクレアの横ではユウさんが座って休息を取っていた。

「リーゼちゃん、エクレアちゃんも起きたよ」

ユウさんが座ったまま声を張ると、

「あら? ……あく、エクレア。起きたのね」

リーゼが気の毒そうな顔をしてエクレアに歩み寄る。

その表情の意図がいまいち理解出来てなさそうに、エクレアは首を傾げた。

「うく。大分気を失ってたなあ。ねえリンリン、今どんな状況?」

すると、リーゼはとても言いにくそうに、一瞬だけ目を逸らして。

でも、言わなければと自分に言い聞かせるように目を伏せ首を数回横に振り、エクレアと目を合わせて言った。

「色々あったんだけどついさっき戦闘が終わって、漸く落ち着いたからこれから帰るところよ。——行きと同じ魔法陣で」

「……は?」

リーゼが視線を横へやると、レンがほんの僅かに口端を伸ばし自慢げに胸を張っていた。

「……改良完了。着地がふわっと」

どうやら着地の衝撃を克服したらしい。

が、それはつまり飛行速度は変化がないと言う事で。

「歩いて降ります」

エクレアは棒のような声色でそう言うときつくつと立ち上がり去ろうとする。

その首根っこをつま先立ちで背伸びしたリーゼが捕らえた。

「気の毒だけど、ダメ。午後の授業に遅れるわ」

学校まで十km強。完全な徒歩だと恐らく二時間以上かかる計算だ。

「離してっ!! 途中でタクシー拾ったりするから!!」

「無駄遣いは良く無いわよ」

「無駄じゃないもん!! 精神衛生を守る為に必要な出費だもん!!」

両手両足をばたばたさせてギャーギャー騒ぐエクレアに、リーゼは
やれやれとため息。

「しようがないわね……」

「リンリン判ってくれた!?!」

「誰かエクレアを昏倒させてくれる?」

「しようがないの方向性おかしいよねえええ!!?」

突然降り掛かる身の危険にギョツとして冷や汗を倍増させるエク
レア。

そしてその前にゆらりと一つの影。

「では、僭越ながら私の手刀で」

戦いの興奮冷めやらぬナギが血の滴る手腕をピンと張り紅い蒸気
を纏って呟いた。

リーゼがニコツとまるで慈母のようにとても優しい笑顔をエクレ
アに向ける。

「意識が無ければ怖く無いでしょ?」

「意識どころか命すら失いそうなんですけど?! 今はそっちの方が
怖いよっ!!」

「じゃあ腹パンにする?」

「『じゃあ』じゃ無いっそれも死ぬるからっ!!」

抗議するエクレアと、物理的な代替案しか出さないリーゼがやいの
やいのと言いつつ合おうので俺は、

「いや、魔法使いなんだから魔法で眠らせればいいだろ」

と言いつつながらドライズを連れて来た。

「はいはい、『第二鎮静魔法』」

ドライズの方は片手間にポツと人差し指を水色に光らせエクレア
の額をちよんと突く。

「んにゃっ!?! ……しゅう……」

エクレアは一瞬にして意識を失い、ぽてっと倒れ落ちそうになった

所へさりげなくマナトが手を伸ばして勢いを殺し、そつと魔法陣の上に横たえた。

「じゃ、帰投するわ。レン、お願い」

「……了解。今度こそ、完璧ー」

レンが魔法陣を起動する。

こうして、不測の事態はあったものの、なんとかイーヴィル討伐の任務は無事に終了したのであった。



シジアン視点

4のAの皆さんが去った後、荒れた火除け地の整備をボク達が行っていた。基本的に、壊れた部分をマテリアライズで復元していく作業だ。

「想定外の挙動でしたが、無事討伐できてなによりでした。流石は先輩のクラスです。ドライズ先輩は言うまでもありませんが、他にも優秀な方が多くいらっしやる」

慣れた手つきでマテリアライズによる修復をしつつ今回の戦いを思い返していた、その時。

「わきやあつ!？」

クラスメイトの悲鳴が耳に飛び込む。顔を上げると、その足元に灰色の濁った渦のような光がうねって絡みついていていた。

光は少しずつ集合してゆき、やがてクラスメイトの足首に絡みついた光は小さな腕の形を、そして続くように小鬼の上半身が形成されて。

『ヒトリ、クライハ……』

ぼうつと不気味に響いてくる声。上半身だけ再生された小悪魔のイーヴィルは生徒の両足首を拘束し下から見上げて呟いていた。

ボクはすぐに片膝を付いて自身の影に手を付いた。

『貫け、影の牙』

刹那、クラスメイトの影から湾曲した棘が1つ突き出し、イーヴィルを穿ち貫く。

『クツ!? オレンジ……シマ……』

そんな単語だけを残して、霧散していった。

手足に付いた砂埃を払いながら、ボクはクラスメイトに歩み寄る。

「ドルチェさん、無事ですか?」

「は、はいっす……ありがとうっす」

「皆さん、同じ事が起こらないとも限りません。気を抜かずに、複数人で纏まった状態で作業をするようにしてください」

号令をかけつつ、周囲を見渡す。

「再発生、ですか。本来想定される周期より異常に早いですがやはり……切っ掛けはユウさん、ですか」

戦闘中、ユウさんを取り込んだことにより異質な形態変化を見せたイーヴィルの様子を思い返しながら、一人ぶつぶつと呟く。

「未だ本人、周囲共に自覚は無いみたいですが。皆さんはこれから彼女と一体どう向き合っていくつもりでしょうか? 扱いを間違えれば、世界は大きく変わってしまう。『願い』が意味を持つ不安定なこの世界で、一体どのような未来を目指すのでしょうか?」

つい考え込んでしまったが、不意にクスリと笑いがこみ上げ顔を横に振るった。

「いえ、彼女や世界の扱いに関してはボクが考える事ではありませんね。先輩ならこう言うでしょう。——『そういう込み入った話は』^{ドライズ}主人公』に任せとけ』と」

ボクは何処か遠く、或いは未来か過去に思いを馳せるように空を見上げる。

「この世界の中心はボク達ではない。ボク達はあくまで、この世界を構成する無数の歯車の一つとして生きるだけです。——己の『願い』の為に」

胸元に手をやり、ギョツと拳を作る。服の内側に隠して身に付けているネックレスを握りこんで、決意を再確認するように頷く。

「さあ、世界の行く末などは当事者達に任せて、ボク達は自分の仕事を全うしましょうか」

ボクはその後、気を取り直して作業を再開した。

そう。世界の謎も、その行く末も、世界の中心以外の者達にとって

は気にしても仕方が無い事なのである。



そして――

「いよいよ、看過出来んな」

一連の様子を遠巻きに監視していた、赤黒いローブで身を隠す長身の影があった。

17. 5話 一応処女作

ある日の部活動時間。

「よしっと」

俺は額の汗を拭って頷いた。

「そこそこ掛かったけど、完成だ！」

俺は出来上がった「ソレ」を手取る。

「お疲れ様です、先輩」

部屋の奥、いつもの位置で読書をしていたシジアンの視線が俺と制作したアイテムに向いた。

「一応処女作って事になるのかな」

「そちらは一体何なのですか？ 棒のように見えますが」

俺はシジアンの疑問に答えるべく、手にしたそれを掲げて言った。

「これはな——『剣の柄』だ!!」

「剣の……柄？」

シジアンはキョトン、とした様子で俺が作ったアイテムを見つめていた。

「そう。持つところ」

「持つところ……だけですか？」

「そう驚いた顔するなって。刃が無いのにはちゃんと訳があるんだから」

俺は試運転も兼ねて、自身の魔力を柄に流し込む。

すると、

柄の先、鏢に当たる部分からぼうつと火柱が立った。

火柱は人の腕くらいの長さで燃え続ける。

「こいつは流し込んだ魔力を直接魔法として発動するんだ。今は火属性を流してるから、こうやってバーナーみたいになってるけど風属性を入れればドライヤーみたいになるし、実体がある氷や土属性の魔力を流せばちゃんとした刀身ができる」

「なるほど、魔力を刀身という魔法にできるのですね」

「そういう事だ」

「魔導機関の動力炉をそのまま小型化したようなもの、という事ですかね」

「あ、やっぱり似たようなモノが既にあるんだな」

俺の発想なんて凡庸だ。自分が天才発明家だなんて思っちゃ居ない。どうやらこのアイテムとそっくりな代物が既に世にあるらしい。

「しかし、先輩が扱う武器は槍ではありませんでしたか？」

「ああ、これ俺のじゃないからな」

俺は流し込んでいた火の魔力を止めて、アイテムを机に置いた。

「ところで、今月の提出物はこれのコピーにしようと思うんだけどいいかな？」

「はい、問題無いかと。ただ、提出するにあたって名前の登録が必要ですよ。何か考えておられますか？」

「あー……今考えるわ」

名前に関しては全く考えて無かった。

どうしようかな。

顎に手をあて、思いを巡らせる。

折角の処女作だ。どうせなら拘った名前にしたい。

あとは、コイツを使う奴のイメージも取り込んで……。

「よし、決めたぜ」

カツと目を見開き、俺は言った。

『『原初の魔剣ギヤラクシーライト氷燐飾剣零式』だ!!』
ひょうりんかざりつるぎせろしき

……この時の俺は、疲れていた……。

「げ、原初の魔剣ギヤラクシーライト氷燐飾剣零式ですか？」

「うんー！」

後になって考えると、余計なモノを詰め込みすぎた。ギヤラクシー要素はいつたい何処にあるというのか。

それから、零式は普通『れいしき』と読むのが正しいのではないか。というかそもそも兵器の類に『○○式』と付けるのならそれは年号から取るのが正しいのでは無いか。

“剣”って文字2回出てきてるし等々自分自身ですらツツコミどころ満載だ。

「せ、先輩がそれでよろしいのでしたら……」

この時シジアンはそう言っただけで何かの書類にこの名前をそのまま書いてくれたのだが、後になって見れば「止めてくれよ!!」と思うモノである。

ともあれ、俺の処女作はこうして銘打たれたのであった。

「さて、あとはアイツに渡すだけなんだけど」

俺は原初の魔剣ギヤラクシーライト氷燐飾剣零式を片手に校内を散策していた。

最初は寮に戻ったのだが珍しくそこにアイツの姿は無く、ならばルクシエラさんの所にでも言っているのかと部室棟に出戻りするもそこにも居ない。

「食材の買い出しにでも行っただか……?」

そうぼやきながら部室棟最上階の窓から外を見下ろした。すると、

「あ、居た」

眼下に漸く、水色ポニーテールの親友を見つける。

「ん?」

遠目だが目をこらしてよく見ると、険しい面持ちをして何処かを目指して走っている様だった。

「つたく、タイミングが良いんだか悪いんだか」

俺はすぐに部室棟を降りた。

「おーい、ドライズー!!」

アイツの背中を追いかけて、大声で呼ぶ。

「え、ファルマ!?!」

ドライズは困った顔を見せて振り返った。

「ごめん、今ちよつと忙しくて、用事なら後に——」

そう言っただけで去ろうとするドライズに向けて、俺は原初の魔剣ギヤラクシーライト氷燐飾剣零式を投げ付ける。

「わあ!?!」

ドライズはソレを咄嗟にキャッチした。

「え、何これ——うわあ!?!」

気を張っていたからだろうか？ ドライズから流れ込む氷の魔力を汲み取って、原初の魔剣ギヤラクシーライト氷燐飾剣零式は氷の刃を形成した。説明する手間が省けて丁度良い。

「要るだろ、剣！」

イーヴィルとの戦いでドライズの剣は壊れてしまった。あれからそう時間は経っていない。代替品を用意している暇も無かつただろう。

この剣は、そんなドライズの為に作り上げたのだ。

「ありがとうッ！ ファルマッ!!」

ドライズはそう言うと、そのまま何処かへ行ってしまった。

アイツが今、何の為に必死な顔で走っているのか俺には判らない。けれど、異常な日常が平常運転のこの学園で、あの剣は必ずアイツの助けになる筈だ。

剣を受け取って、礼を言ったのが何よりの証拠。

今日も今日とて、アイツは、アイツを必要とする誰かを助けてくるだろう。

「……行ってこい、主人公」

俺は特別じゃ無い。だからこそ。

少しでも、特別なアイツの助けになれば。

あの剣を作った甲斐があるつてものだ。

18話 ユウさんが攫われた!?

◆ ◆ ◆
「ユウの力の暴走——やはりイーヴィルとユウは深い関係がありそうじゃな」

校長室でティアアロは顎に手を当て考え込んでいた。

ドライズ曰く、空から降ってきた少女。この世界の根幹に関わる存在。その処遇をどうするべきか、悩んでいたそこへ。

「ッ！ 何者じゃ!?!」

突如現れたのは二つの人影。一人は赤いローブの長身、もう一人は水色ローブの小柄な人間。

顔はフードで隠されていて見えなくなっている。

そして、赤いローブの人間は深くお辞儀を言った。

「初めまして。——或いは、ご無沙汰しております、ティアアロ様」

◆ ◆ ◆
『ユウさんが攫われた!?!』

その言葉を受けたのは、ほんの十数分前だ。

『すまない。ルーシー達が出計らっているタイミングを狙われた。我ら三賢者が居ながら誠に不甲斐ない』

とティアアロ校長先生は頭を下げる。ルーシーとはルクシエラ師匠の愛称だ。

『相手の姿は、水色のローブに身を包んだ低身長の子と紅いローブに身を包んだ高身長の子の二人組だ』

記憶の中で繰り返される言葉。

『何でも、存在するだけでユウは危険な災いを引き起こすと言う。そして少女一人に数多の命が脅かされるのなら排除する必要がある。』

『決してその存在を許さない』と言い連れ去った』

ティアアロ先生の言葉を思い出す中でふっふつと怒りの感情が湧いてくる。

『ユウは、この世界の鍵を握る』重要な人物じゃ。それに、既に学園の生徒でもある。ワシは、どんなリスクを孕もうと生徒を見捨てる事

などしたくはない』

片膝を突きながら悔しそうにするティア口様の姿が痛々しかった。
『しかし現状学園内に残るの戦力でワシ等三賢者を含め救援に向かえる者が居ない』

『そんな!? 先生や先輩達ではダメなんですか!?!』

焦る僕の言葉に帰って来たのは意外な返事。

『その通りじゃ。言い方を少し変えよう。現状の学園に残された人員の中でお主以上の戦力が存在しない』のじゃ。即ち、ユウを救出できる可能性があるのは——“破滅の光”を継承した、ルーシーの一番弟子であるお主だけじゃ』

そう言われて、黙っていられる訳がなかった。

『相手方は二人。分が悪い戦いになるじやろう。それでも——戦えるか、ドライズ?』

僕は何の迷いも無く首を縦に振った。

そして、敵対者が逃げたという方角を目指して走っていた途中。

『要るだろ? 剣!』

と、ファルマから投げ渡されたのは柄のみが存在し、僕が送り込んだ魔力が刀身になる剣。

先の戦いで武器を失っていた僕にとってこれ以上無い選別だった。

ギョツと剣の柄を握る力が強くなる。

ああ。ファルマは何時だって、僕を支えてくれる。

今回だって、何が起こってるかなんて知らない筈だ。

このタイミングで剣をくれたのは全くの偶然だろう。

だけどあいつが居るから、僕は戦える。

相手が何人だろうと、怖く無い!!

◇ ◇ ◇

ユウさんは特徴的な魔力を持っていた。その痕跡を辿って街を越え、郊外に出て道なき道を進む。

ドンドン人気が減っていく。それだけ、仲間の加勢は期待できなくなる。
建物も木々も少ない、原っぱに出た時。そこには異様な光景が広

がっていた。

ただ広い原っぱに。透明な真つ白の板が階段状に続いていた。それは天を向かって並び続けている。

明らかに、尋常じゃない。

でも、ここで臆する訳にはいかない！

僕は階段に足を乗せる。重みや時間制限で崩れ去ると言った不安定さは感じ無かった。

後は全速力で階段を駆けていく。

景色が少しずつ、地上から空中へ変わり。

いつの間にか、空中から暗黒の中に無数の煌めきの灯る風景へと変わって居た。

それは夜空そのもの。

天を高く登り続けると昼でも夜空が見えるという。そしてその星空は『宇宙』と呼ばれる。

けれど、そんな歩いていける距離の話では無い筈だが今は気にしていられない。

階段の終わり。最後の一段を上ると、白く光る足場は巨大な広場を作っていた。

そして。その中央には水色のロープに身を包みユウさんの頭と腰を支えて抱きかかえる謎の人物の姿があった。ユウさんの意識は無いようだ。

魔法で眠らされているのだろう。

「お前がユウさんを攫った犯人か!!」

僕の問いかけにその人物は。

「そうだよ」

あっさりと、答える。

何かしらの魔法でも発動しているのだろう。

声色がジャギジャギとした金属の掠れるようなモノだった。

「ユウさんをどうするつもりだッ!!」

僕は周囲を警戒しつつ、問いかける。

話では敵対者は二人。もう一人がどこに居るのかを探っていた。

すると、水色小柄なローブの人間は言う。

「“封印”するのさ。この子はあまりにも危険な存在だからね。今、僕の相棒がその準備をしているところ」

と喋ってこちらに背を向け自身の背後を顎で差した。そこでは紅いローブを身に纏った長身の人間が魔法陣の中心に立ち、明らかに何かしらの魔法の準備をしていた。

「危険だって!? 何を根拠に!!」

激昂する僕の言葉に、小柄な水色ローブは律儀に答えてくれる。

「君だって見ただろう? この子が強大な魔物を産み出す媒介になった所を」

言われて、ついこの間ユウさんがイーヴィルに捕まってイーヴィルが異常な変化を行った光景を思い出した。

「ああいうの、困るんだよねえ。そっちの方で好き勝手やってくれる分には構わないけどさ、それが処理しきれずにこっちの方まで悪影響を及ぼし始めたらダメなの。僕達には僕達が守るべき世界があるからね」

敵対者の意図は判った。だけど、認めたくはない。

「だからってユウさん一人犠牲にして、平和を手に入れようって言うのか!? 自分の事も判らない、何も知らないまま世界に放り出され、ただ存在するだけで疎まれ封印される、そんな苛酷な運命をユウさんに押しつけるっていうのか!!」

彼の言い分が全く理解出来ない訳では無かった。

だとしても。

ユウさんを犠牲にした平和なんて僕は認めたくない。

「この子に苛酷な運命を押しつけるって言うけどさ。元はと言えば君が悪いんだよ、ドライブ」

名前を呼ばれ。しかも自分が悪いと言われ。

僕は目を見開き言葉を失った。

「君は “この世界の中心” だ。 “君の願い” が “この世界を作った” 。それは優しくて楽しそうな、美しい世界だけど。人間の清濁含めて映す、不安定な世界になった」

何を、言ってる居るのだろうか。僕が「世界の中心」？「世界を作った」？

「この子はあくまでそれに応える存在。巻き込んだのは、君だ」

この人間が言っている言葉が、半分も理解出来ない。

世界を作ったのが僕だとか、ユウさんはそれに応える存在だとか、全く、判らない。

「でも、君を倒す訳にはいかないんだ。君は「世界の中心」。君が居なくなると、世界がどうなるのか判らない。だから応える側——「世界の意志」であるこの子を封印する事にしたんだよ」

「世界の中心」「世界の意志」判らない。何も。

判らないけど——！

「アンタが言ってる事、全然判らない。もしかしたら、正しいことを言っているのかも知れない。もしかしたら、悪いのは僕なのかもしれない」

僕は一度深呼吸をして、剣を握り絞める。

「だけどツ!! 誰かを犠牲にした平和なんて僕は認めない!! そう言われて「はいそうですか」なんて引き下がったら、この剣をくれた僕の親友に顔向けが出来ない。僕はお前達の行いを否定する!!」

「ファルマは何時だって僕を信じてくれた。」「主人公」だ、なんて言って、何時だって支えてくれた。

僕は自分の事を「主人公」だって思ってる訳じゃ無いけど、こんな時ファルマが言う主人公ならきつと、ユウさんを犠牲なんてしたりしない!

「破滅の光の一番弟子」ドライズが、お前を討伐対象として認定する!! ユウさんは、僕が助ける!! あの楽しい学園生活へもう一度送り返してあげるんだ!!」

僕の気持ちに呼応して、三叉に別れた透明な氷の刃が剣の柄から生成された。

そんな僕の態度に。

「ま、君ならそう言うだろうね。そうだと思ってた」

小柄な水色ローブの男はそう言って。少し離れた場所にユウさん

を寝かせた。

「——そう、信じてた」

ぼそり、と何かささやいたようだが、聞き取れない。
だが。

「この子の危険性をその目にして尚、同じ事が言えるのかな？」

小柄な水色ローブの人間は横たわるユウさんに手を翳し。魔力を集める。

「ユウさんに何をするつもりだ!?!」

慌てて、僕『第一氷結魔法』を放った。放たれた氷の弾丸は、ぱしんと謎の人物の片手で弾き落とされてしまう。

「強いて言うなら、〃応えて貰うだけ〃。危害は加えないよ」

水色ローブの人間はそう言って、唱える。

『「遍く魔力、汝が力を手中に収めん」——』

次の瞬間、ユウさんの身体が一瞬だけ強く輝く!

『「アームズ・アーム」ツ!!』

謎の人物が魔法を唱えた。ユウさんに向けていた右の掌に、うなりを上げて魔力の渦が集っていく。

やがてソレは、〃片手剣〃の形をとった。

左右非対象で、細身。

円形の鏢から片方へ流れるように尾のような装飾が飛び出している。

白金と黒にグラデーションしたまるで彗星のような——ユウさんの髪みたいな、美しい剣だった。

『「マテリアライズ」』か。魔力を直接物質にだなんて便利な魔法だねえ。名付けるなら、『願いに応える彗星の剣』とか?」

剣を片手に、謎の人物はそう言った。

19話 ただの石ころでしかない存在。　「ファルマ」に、そんな強さなんてない

「何の材料も、媒介も無しに、剣をマテリアライズした!？」

マテリアライズは魔力を物質に変換する魔法だ。しかし、物質を作る為にはその魔力組成を記したレシピであり要石となる魔石と、材料になる魔力二つが必要だ。

だが見る限りこの謎の人物はそれら両方を無しにマテリアライズを行って見せた。

「君達の常識から外れた魔法だったかい？　だとすれば、それがこの子の力だっではつきり判ったんじや無いかな。　「望んだ願いを叶えてくれる世界の意志」ユウ・ウィツシユスター。僕達は、そう定義した」

「望んだ願いを叶える」？　そんな力を、ユウさんが秘めていると言うのか。

「その結果が、あの巨大な魔物って訳さ。魔物達の「このままじゃ終われない。もっと強くなって欲しいモノを手に入れたい」っていう「願い」を拾った」

荒唐無稽な話だ。しかし、実際にこの目で二度、その現象を目の当たりにしている以上否定は出来ない……。

「ね、危険でしょ？　悪用の方法はいくらでも思いつく。質が悪い事に力の発動にこの子の意識は関係無い。放っておけば無差別に願いが叶えられてしまう。今は、力の大半を君に向けてる現状だけど。こぼれ落ちた僅かな魔力は「悪しき願い」を産み出してしまう」

「悪しき願い」が具体的になんなのかは判らない。

ユウさんは本当に危険な存在なのかもしれない。

「それはやがて世界を巻き込む事件を起こすだろう。彼女が居る限り、何度でも」

剣の切っ先が、僕へと向く。

「やがてそれがこの世界の人々、キミ達の手になんなくなった時。僕

達の世界に被害が飛び火してしまうのさ。そんなの、ごめんだ」

ローブのフードから僅かに覗く瞳が、ギリリと輝いた気がした。

「それでも尚、この子を守るって言うのかい？ 多くの犠牲が出るかもしれないのに。沢山の人が苦しむかも知れないのに」

水色のローブを纏った謎の人物はそうやって揺さぶってくるけど、僕の心は変わらなかった。

「答えは一つだ!! 誰かを犠牲にした平和なんて認めない!! ユウさんが災いを呼ぶというのなら、僕がその災いを蹴散らしてやる!!」

きつとそれが、「主人公」の役目だから。

僕は構えた剣を振り上げた。

「言葉だけの理想なんて無意味だ」

彗星の剣が僕の剣を弾く。

二の太刀が僕の身体を斜めに切り裂こうとするが一步引いて辛うじて回避する。

服と皮膚の表面だけが僅かに切り裂かれ、ほんの少しだけ血が滴った。

「言っておくけど。僕は仲間内で『最弱』だよ。僕如きを倒せない様な実力じゃあ、災いを退けるどころか後ろで準備してる相棒の足下にも及ばない」

謎の人物はそうやって煽ってくる。その言葉に、僕の心は熱く燃え上がる。

「ならアンタを倒して、相棒とやらも倒して見せるッ!! 全部、全部僕が守って見せる!!」

僕の気持ちに呼応して、ファルマがくれた剣の刀身が更に巨大になった。

六方に広がる氷の結晶、その一片が剣になったようだ。

刀身が巨大になっても重みは全く感じ無い。僕の魔力が、そのまま剣になっているからか。

『彗星の剣』を受け止め、撃ち払う。今度は一撃、僕が謎の男に喰らわせる。

真一文字の軌跡が謎の男の腹を裂いた。

向こうだつて手練れのようにだ。

服は裂かれたけれど露出した皮膚に傷は無い。——僕より、1枚上手だ。

そして幾度か剣を交え、躲し、しかし、突然。

「やっぱり君は強いね」

謎の人物は僕を賞賛しはじめた。

一瞬、何かの罠かと思つたが。

戦つて居るウチに、気付く。

——こいつ……『受け』は上手いけど『攻め』はそこまでじゃない
!!

最初に喰らつた一撃から、相手の攻撃範囲、対応速度を改めて計算し直し、剣を振るうタイミングを調節するだけでこちらの被弾は一切無くなった。

一方でこちらの攻撃を紙一重で避けられ続けているのも事実だ。

戦いながら、謎の人物は言葉が続ける。

「君は強い。だから本当に『災い』なんて全部蹴散らせるかもしれないね」

「急に掌を返して、何を企んで居るのさッ!!」

相手の思惑が分からない。今も、まじめに戦っているようにも、適当にあしらっている様にも見える。突然褒めてくるし、何故かわからない親近感を感じるし正直敵か味方かわからなくなってきた。

でも、こいつらがユウさんを攫い、今まさに『封印』しようとしているのは事実だ。相手が誰であれ、そんなのは止めるしかない！

僕は戦いを終わらせるつもりで剣を敵の急所、首を狙つて振るつた。ただ、相手が人間である以上無用な殺生をするつもりはない。

氷の刀身の刃は潰して、鈍器として動けなくなる程度の衝撃を与えるつもりで振るつた。

しかしそんな渾身の攻撃を謎の人物は躲し、

「さあ、ここからが本番だよ！」

そう言つて『彗星の剣』を天へと掲げる。

『僕の願いに応えて、流れ星。僕も君達みたいに、輝ける星の様にッ！』

『彗星の剣』は水色ローブの人物の呼びかけに応える様に強く輝いた。

『アクセル・シューティングスター』!!』

そして白金の光が敵を包み、その背に二つ、翼のような白い魔力が現われる。

「さあ、これがこの子の——いや、この世界の『願いの力』だッ!!」

次の瞬間、先程までとは別次元の速度で『彗星の剣』が振るわれた。僕は咄嗟に氷の刃で攻撃を防ぐが——

「うわあああッ!!」

氷の刃ごと、身体を切り裂さかれる。幸い、氷の刃が大きく妨害してくれたおかげで皮膚の表面に線が入る程度の傷で済んだ。

僕は思わず片膝を突く。

「言った筈だ。僕は『最弱』。僕程度をどうにも出来ないようじゃあ『災い』なんかには勝てる筈も無い」

水色ローブの人物は僕に近寄り見下ろしてくるが、そこが狙い所だった。

「舐めるなッ!!」

膝を上げると共に逆袈裟斬りの形で反撃する。

傷の痛みは氷属性の魔法が得意とする『沈静』効果で誤魔化した。僕の不意打ちは功を奏したようで、『受け』の上手い相手も躲すのが僅かに遅れローブを切り裂き身体に初めて傷を付ける。

「おととつと、さっすが!」

フードに隠され表情は見えないがそれでも余裕の笑みを浮かべている事が伺い知れた。

対して、僕は軽傷ではあるものの傷が増え続けている。

——……強いッ! だとしても!

相手の力量は明白だった。それでも。

「負けない……。僕は、『特別』らしいからッ」

こうして共に戦い、この身を守ってくれた剣を強く握りしめ、思う。

何が特別で、何がそうでないのか僕には判らないけど。それでも、僕を信じて、支えてくれる人が居る！

『無垢の氷よ、光を灯し咲き誇れ』ツ！——『雪月華』ツ！！
氷の刃に、破滅の光を“宿し、大きく振う！

「なら僕も。氷は無いから自己流で——『朧月華』ツ！！」

水色フードの人物は『彗星の剣』に紫色、闇属性の魔力を込めて迎え撃つ！

二つの剣が強く交わり、甲高い音が響き渡る。

自分の魔法が、技が真似された事に最早驚いても居られない。

鏢迫り合いの形になりながら、僕はただ、力を込め続けるツ！！

「絶対に負けはしないツ！！」

強い意志に呼応して“破滅の光”が氷の刀身の中で強く輝くつ！

「ツやるじゃん……！でも、まだ、認める訳には——いかないなツ！」

ゴウ、と『彗星の剣』の背面、峰の部分から強く炎が噴き出した！
お互いの意志と力が拮抗する。

でも！

「僕は“主人公”なんだツ！誰も犠牲になんてしないツユウさんは、返して貰うツ！！」

僕はファルマに沢山助けられた。ファルマのお陰で、僕はこうして前を向いて生きる事ができる様になった。そんなファルマが、僕を“主人公”と呼ぶ。

ただの肩書きなのかもしれない。

ともすれば、驕り高ぶっているだけなのかもしれない。

だとしても。あいつが僕をそうやって信頼して、支えてくれるから。

あいつに恥じない“主人公”でありたいツ！！

“破滅の光”が更に輝き、闇と炎を纏った“彗星の剣”を押し返して。

「終わりだツ！！」

最後に跳ね上げるように剣を振り、『彗星の剣』を弾き飛ばした。

「なっ……！」

謎の人物は背中から倒れ込む。

受け身をとるがあれだけの競り合いに負けたのだ。

余波で数回、床の上で跳ねた。

そしてよろめきながら起き上がる。

「やっぱり、慣れない得物は使うモノじゃないなあ」

そして、フードから覗く視線を僕の目に突き刺したまま、続けた。

「君は強いから、こうやって何でも解決できるかもしれない。でも、果たして君の周りの人間はどうなのかな？」

謎の人物の言葉に、ファルマを筆頭とした僕の仲間たちの顔が浮かんできた。

「君は確かに“世界の中心”だけど、“世界は君だけが回してる訳じゃ無い”。君一人で災いの全てを解決するなんて不可能だ。君の大切な人達が“災い”に巻き込まれて。それでも君は手を出せない状況だった時、君はどうするつもりだい？」

愚問だった。僕の仲間たち。クラスメイトや、師匠であるルクシエラさんが“災い”なんかに負ける筈が無い。

「僕の仲間たちはみんな強い。そして、みんなが僕を支えてくれるし、僕もみんなを支える。だから、例え“災い”が起こったとしてもみんなが“災い”に負ける事なんて無い」

確信をもって放つ言葉。けれど。

「——それは、嘘だ。君の周りには一人だけ、明らかにちっぽけで弱いヤツが居る」

謎の男は今まで一番ドスを利かせた声を放つ。

思い当たる節が無い僕には、誰の事を言っているのか判らない。

それで黙っていると謎の人物は続けた。

「ちっぽけで何処にでもあるただの石ころでしかない存在。“ファルマ”に、そんな強さなんてない。あつという間に“災い”に飲み込まれて、キミ達の足を引っ張って、死んでしまうよ」

「……は？」

謎の人物の言葉を僕は理解出来なかった。

「ファルマが弱い？ 何にも知らない癖に、勝手に決めつけるなッ!!」
僕は半分怒り任せに、刃を潰した氷の剣を振るう。

謎の男は腕で守りの構えをとるが、吹き飛ばされて地面に倒れ伏した。

「うわあッ!!」

この戦いは僕の勝ちだ。

でも謎の人物は地面に這いつくばりながらも声を荒らげて言う。

「ぐ、あ、……知ってるさッ!! あいつは何の特別な力も持っていない、ただの一般人だ。才能も、能力もキミ達とは比べものにならない。悪い意味でね」

その言葉には、妙な説得力があった。

ファルマの事なんて1ミリも知らない人間が言っている言葉には思えなかった。

「きつと無駄に遠回りして、多くの人に沢山迷惑かけて、その果てに“災い”にとりこまれてお終いだ！ 結果として“災い”は更に増長し、世界を脅かす!! そんな未来が来たとき、君はどうするつもりだいつ!!」

声色は加工されているせいでイマイチ判らない。

だけど、何故か。この人の言葉を見ることができるような気持ちにはなれなかった。

もしかしたら、ファルマが常日頃から自分で言っていた事と多少なりとも一致するからかもしれない。

自分は特別じゃないとか、ただの石ころとか。

でも、僕は知っている。

「そんな未来なんて、訪れない」

それは、僕にとって揺るぎない事実だ。

20話 ファルマ、ありがとう

迷いも、ためらいもない僕の言葉に、謎の人物は一瞬だけ言葉を失った。

数秒してから、弱々しく、再び口を開く。

「どうして、そう言い切れるのさ」

「ファルマは、強い人間だからだよ」

「どこが？ 何の才能も、特別な力もない石ころの何が強いのか？」

「アンタを倒した『この剣』は、ファルマが作ったモノだ。ファルマが僕を支えてくれた証だ。ファルマが居たから、僕はアンタを倒せたんだ」

巨大な氷の刀身を持った剣を見せつけるように掲げ、言う。

「確かにファルマは特別な才能も、『原初の魔力』みたいな特異な能力も持っていないかもしれない。でも絶対にただの石ころなんかじゃない。僕や、ルクシエラさん。他にもクラスメイトのみんなに負けないう位強い人間だって僕は知っている」

ただ単なる戦闘力の話をしている訳じゃ無い。

「あいつは何時だって、本当に大変なとき『出来る全てをやる』人間だ。そうやって、必死に足掻いて、もがいて、生き残る人間だ。そして、その生き方は、僕達の——ううん。僕の支えとしてずっと、頼りにしてきた。あいつが居るから、僕は戦う事ができる。今までも、これからも」

ファルマと始めて出会った時の事を思い出す。友達になろうって差し伸べてきた手を。その頃の僕には余裕がなくて、はね除けた。

1回だけじゃ無い。何回も、何回も、それでもあいつは諦めなかった。遂には僕が根負けしてしまって、気がつけば一番の親友になっていた。

「アンタがファルマの何を、何処まで知っているのか判らないけれど。少なくともアンタよりよっぽど、僕はファルマを知っている。そして、その強さを知っている。あいつはただの石ころなんかじゃ無い。僕にとってとっても大切に『特別』な、光り輝く宝石だ。だから、あ

「いつが『災い』に負ける筈なんてない」

謎の人物は遂に黙り込んでしまった。

重い沈黙が、闇と星々の光だけが瞬く世界を包む。

長い、長い時間を経て次に謎の人物が言った言葉は。

「——あつそ」

呆れるほどに短くて、シンプルで、それでも、さつきみたいに何か恨みめいた重たい感情なんて感じさせないさっぱりした言葉だった。

「じゃあ、好きにしてみればいいや」

根負けしたのか謎の人物は両手を広げて、降参のポーズをとった。

「なら、ティアロ様の元へ来て貰うよアンタが何者なのか、徹底的調べさせて貰——」

と、謎の人物を拘束しようとして手を伸ばしたそのとき。

「悪いけど、そこまでだ」

突如、僕の手首が掴まれた。赤いローブ、長身の人間が僕と水色ローブの間に割って入ったのだ。

——しまった!!

戦闘やファルマの話に夢中で『相手が二人組』である事をすっかり忘れて居た!!

じとり、と冷や汗が落ちる。片腕の自由をとられた。不味い。このまま紅いローブの動き次第では形勢逆転もありうる!

と、考えて居たら。

「一部始終、見ていた。今回の作戦は中止だ、良いな?」

と僕の腕を掴みながら赤いローブの人物は這いつくばる水色ローブの人物に呼びかける。こちらも加工されていて、声色は判らない。

「この世界に関する一件の責任者は君だ。異論なんて無いよ」

倒れていた水色ローブの人物が起き上がる。

「そういう訳だから。今回、こちらは手を引く。ユウ殿も返してやる。それで矛を収めてくれないか、ドライズ少年」

そう言われて、僕は一瞬迷った。

この男の言葉に素直に従っても良いのだろうか? 信用に値するのだろうか? しかし、その考えはすぐに振り払われる。

現時点で片腕をとられ、一度戦闘不能にしたはいえもう一人仲間が居る彼らの方が圧倒的に有利なのだ。

敵対意思が残って居るのならこのまま黙って僕を攻撃してもおかしくない。

「……従うしか、無さそうだね」

僕は渋々了承した。

◇ ◇ ◇

僕は眠り続けるユウさんの頭と腰元を支えて抱える。

謎の人物たちは二人並んで、そんな僕の姿を見ていた。

「俺達がいては背後が気になるだろ？ 先に失礼させてもらう」

と、紅いローブの人物が言う。

「りようかーい。いやあ、負けた負けた、やっぱり僕は『最弱』だ」

と気楽な様子で水色ローブの人物もそういって、先に光の階段を降りていく。

そして、数段降りたところで紅いローブの人物が顔だけ振り向けて。

「二つだけ、忠告だ。今回のところは『経過観察』という事で処理をしておく。しかし、もし最悪の事態になった場合——つまり、ユウ殿が引き起こした『災い』があまりにも強大でお前たちの手に負えなくなつた場合は再び俺達が横やりを入れる。覚えておけよ」

紅いローブの人間の言葉に、僕は眉間に皺を寄せて言った。

「そんな事には、絶対にならない。僕だけじゃない、みんなだつてこの世界で必死に生きてるんだ。何処の誰だか知らないけど、僕達の問題は僕達で片付ける。どこか知らない世界の不審者さん」

彼らの数々の言動から、僕はこの人たちを別の世界の人間——世界というか、別の国の人間だと判断した。僕達のこの国で手に負えない『災い』が発生した時、その余波による被害を懸念した犯行だと判断したんだ。

僕の言葉に、二人は何も言い返さずその場を去って行った。

そして。

「う、ん………？」

恐らく魔法によって眠らされていたであろうユウさんが目を覚ます。

「あれ……ここは……？ ドライズ君……？」

僕の腕の中でユウさんはキョロキョロ周囲を見渡す。

「私、どうして……あれ、何があつたんだっけ……」

状況に混乱するユウさんに、僕は告げた。

「大丈夫。どんな災いも、僕達なら乗り越えられる。絶対君を犠牲にさせたりなんかしない」

決意を込めたその言葉に、ユウさんは。

「災い……？ 犠牲……？」

当然だけど、疑問を浮かべていた。

「深く考えなくて良いよ。ただ、何かあつたらすぐ呼んで。絶対、助けに来るから」

そう伝えるとユウさんは、

「……うん。ありがとう……信じてる……」

そう答えて再び眠りに落ちた。



「ただいまあ……」

あの後、僕はユウさんを学園に送り届け、ティアロ校長先生たちに一部始終を説明した。それが終わる頃にはすっかり夜も更けていて、心身疲労困憊になって寮室へ戻って来た。

「おかえり、ドライズ。昼間は忙しそうだったみたいだが、ホントに疲れてんのな」

二段ベッドの方からファルマの声が聞こえてきた。きつとベッドの中で電子ゲームを楽しんでるに違いない。僕はこんなに苦労したっていいのに良い身分な事だ。

——だけど。

「ファルマ、ありがとう」

僕は真っ先にお礼を言った。

「ん？ 何が？」

「くれた『剣』、早速役にたったよ」

そう伝えろと。

「お、そりや良かった。俺が作ったモノがお前の役に立つなんて光栄だ！」

と嬉しそうな返事が返ってくる。マジッククラフトだって、ファルマの強さの一つなんだ。ファルマが、ただの石ころな訳が無い。

——……って、あれ？　ファルマってマジッククラフト始めたばかりだったけ？　なんで僕はこんなに信頼してるんだろ？

と少し疑問に思ったが。でもまあ、今日は疲れた。さっさと眠ってしまいたい。

が、その前に。

最後に確かめたい事があった。

「ねえファルマ」

「んー？」

制服を部屋着に着替えながらファルマに問いかける。

「この『剣』、なんて名前なの？」

僕がそう言うのと。

「うっ!？」

突然ファルマはうめき声を上げて、電子ゲームのゲームオーバーの音が聞こえてきた。

「どうしたの？」

「いやーえっと、名前はーその、ま、まだ無いっていうか！」

顔は見えないが明らかに目を泳がして無さそうなファルマの言葉に、僕はぶうつと頬を膨らませて言った。

「この付き合いの長さでそんな嘘、僕に通じると思ってる？」

「……っちつくしよ！　面倒くせえな、幼なじみは!!」

ファルマは観念した様子で、恥ずかしそうに言った。

「げ、『原初の魔剣ギヤラクシー・ライト氷燐飾剣零式』ひょうりんかざりつるぎせろしき」

「……え？」

「ごめん、今なんて言った？」

思いの外長々しい文字列が聞こえてきた気がして一瞬混乱する。

「だから！　『原初の魔剣ギヤラクシー・ライト氷燐飾剣零式』だよッ

!!

とファルマはヤケクソ気味に叫ぶ。

そして。

「……あはっ、変な名前！」

僕は思わず笑ってしまった。

「俺だってテンション狂ってて付けちゃった名前だからどうかしたかったけどシジアンが土方のウチに正式に届けてしまってしばらくは名前の変更が出来ないんだよ!! 少なくとも数ヶ月後、新しく改良とか改造して新作として登録するまではな!!」

どうやらファルマも思わず咄嗟に付けたオモシロネームだったらしい。

「だけど——僕は気に入った。」

「だから改良する時はちゃんとした名前です——」

「ううん。改良するとしても、『原初の魔剣ギヤラクシーライト氷燐飾剣零式』からあんまり弄って欲しくないな。零式を『改』とかにする感じでお願いいい」

と言うと。

「えっなんで!? なんで人の黒歴史を残す方向性を示すの!?!」

とファルマは驚くが。

「だって、僕の新しい『相棒』なんだもん。今日だってお世話になつたし、もう思い入れができちゃった。名前、あんまり変えて欲しくない」

と伝えた。

「んな、バカな……」

ファルマは釈然としない様子だったが僕は、新たな相棒となった剣に。

「これからもよろしくね。『氷燐剣（中略）』」

と語りかけた。

「愛着湧いたとか言いながら早速略称作ってんじゃねえか!?!」

なんて、ファルマのツツコミは無視しましたとさ。

現時点のキャラクター紹介

現時点のキャラクター紹介

メイン

ファルマ

赤い短髪の少年。4年A組。物語の主要視点。特別な才能を持っておらず、自分は「主人公ではない」と思っている。義理堅く心優しい性格だが、クラスメイト達の才能に対する劣等感が小さな嫉妬の炎を灯している。

ドライズ

水色ポニーテールの中性的な少年。4年A組。ファルマの幼い頃からの親友。世界で三人しか使え無い特別な魔力、「破滅の光」を継承しており、更に「世界の中心」と呼ばれこの世界の根源に大きく関わる存在。

そのためファルマからは「主人公」と称されている。

ユウ

白から黒にグラデーションしているくせつ毛ロングの少女。4年A組。流れ星として空から降ってきた少女。記憶が無く、名簿に登録もされていないのに何故が私立天導学園の制服姿でドライズと出会う。やや精神年齢が幼く、純真無垢な性格。ドライズを強く慕っている。

ルクシエラ

白髪ロングの女性。6年A組。ドライズとファルマの師匠にして「破滅の光」の正当な後継者の一人。がさつで女子力皆無、傍若無人な性格だが家族や弟子を何より大切にしている、最低限の良識は持ち合わせている。尚胸は持ち合わせていない。

シジアン

少し長めの黒髪少女。1年B組、委員長。マジッククラフト部の部長で、ファルマの後輩にあたる。実はマジッククラフトにそこまで精通しておらず、マジッククラフト部を立ち上げた理由は「大切な人が得意だったから」。

レン

紺色の髪を輪っか状の二つ結びにした少女。4年A組。口数の少ないフアルマのクラスメイト。重度の魔法陣オタクで彼女の描く魔法陣は一般に普及しているモノの三倍は濃密に描かれている。本来ならば彼女以外解読不可能な代物だがフアルマには何故か解読が出来た。

サブ

ヴェルリーゼ

ふんわりした緑色の髪の少女。4年A組、委員長。平均よりかなり小柄で更に痩せ細っているが本人は面倒見の良いしつかり者。4年A組のメンバーをまとめ上げる司令塔。

孤児院の出身で同じ孤児院の仲間であるアイルに溺愛されている。

エクレア

金髪ショートツインテールの少女。4年A組。新聞部でいつでも賑やかに様々な人間に関わろうとするテンション高めのもードメーカー。尚成績はフアルマにギリ勝てる程度で低め。また、他人によく変なあだ名を付ける。

ナギ

茶髪をショートカットにした長身の少女。4年A組。戦闘になると四肢から血液を垂れ流しつつ暴れ回るバーサーカーと化すが普段は落ち着いた性格をしている。戦闘能力は高学年に迫る程だが流血のせいで適度にセルフ回復魔法をかけなければならぬ。

マナト

黒髪短髪の男子。4年A組。人助けが趣味の地味な少年。気配を消す事と人の視線から外れる事を得意とする他、天井に張り付く等のスキルを持っている為良く忍者と間違えられるが忍者とは全く関係が無い。戦闘能力はナギと同等だが実は座学の成績が学年最下位。

シャルネ

4年A組。可愛そうなクラスメイト。

アイル

ボサボサした緑髪の少年。6年A組。毎朝定刻に奇声を上げて

朝を告げる学園のモーニングコール。孤児院出身で孤児院の仲間達を何よりも大切に想っていて過保護な行動をとりがち。奇行が目立つが成績は六年生主席であり、根は真面目。

ティアロ

私立天導学園の校長兼理事長。学園を管理する三賢者と呼ばれる魔法使いの筆頭。

セレスティアル

4年A組担任教師。学園を管理する三賢者の一人。校長であるティアロの妻。

ジン

保険医。また、マジッククラフト部の顧問。ティアロと古馴染みであり学園を管理する三賢者の一人。

21話 自分勝手な夢



夢を見た。

今まで何度も見た事がある夢だ。この夢を見た日の朝は決まって涙を流し、起きてからは自己嫌悪が胸に突き刺さる。内容は、毎回多少異なるが趣旨は同じ。

一人の女の子が自分の元に駆け寄ってきて。にっこり微笑んで語りかけてくる。なんて言っているかは忘れてしまっけれど、それが“俺の望む言葉”だという事だけは判る。

そうやって幾つか言葉を交わして、女の子は俺の手を取るのだ。俺は何の疑問も無く、嬉しそうにその手に引かれて女の子の後を歩いていく……。

「……っ」



まだ日も昇らず、ドライズも目を覚ましていない早朝。頬を伝う涙が俺の意識を呼び戻す。

「……またかよ。クソ野郎が」

胸の中心を握り閉めるように押さえ込み、自分自身を罵倒する。最悪な朝だ。

心の奥底で、そんな“醜い願い”を持っているのかと自分自身に嫌気が差す。

今まで何度も同じ夢を見てきた。

その度に、自己嫌悪で胸が押し潰されそうになった。

「はぁ……起きるか」

随分と早い時間だが、二度寝なんてする気分にはとてもなれなかった。

それから、少しばかり時間が経って。

「わ、どうしたのファルマ。こんな時間に起きてるなんて」

いつもの時間に目を覚ましたドライズが欠伸混じりに驚く。

「今日は夢見が——」

「あつ!? まさか昨日から寝てないとか言わないよねっ!? 今日学校なんだよ!?!」

「人の話聞けよっ!」

俺が早朝起きていたらまず徹夜を疑われるらしい。

いや、実際こんな時間に起きているのは徹夜した時が殆どだが。

「ファルマが平日のまだアイルさんも鳴いてない時間に起きてるなんて事件だよ。雪でも降るんじゃないかな」

ドライズがそう言った直後に、

「イイイイイイヤツホオオオオオオ!!! フリイイイダアアアアアツンツムツ!!」

窓から最上級生主席の奇声が聞こえてきた。

日の出の時刻だ。

「……折角だから今日は早めに学校に行こうかな」

窓の外へ視線を向けて。

朝焼けの空を縦横無尽に飛行しながら奇声を上げ続けている上級生をぼんやりと眺めて、思い立つ。

気分、というのは大事なものだ。今日という一日は決して良い出だしでは無かった。

だからこそ気分転換にいつもと違う事をやってみようと思ったのだ。

「本当に今日は珍しい。いつもなら二度寝するのに」

「今寝たら、またあの夢の続きを見そうだから……」

「そんなに怖い夢を見たの?」

「怖いって言うか……嫌な夢だよ。本当に」

あの夢を見る度に自分という人間がどれだけ身勝手に矮小なのか
思い知らされる。

頬を伝う熱い涙も、目が覚めれば酷く冷たく感じてしまう。

「ドライブは……ルクシエラさんの部室を掃除する日か」

「うん。出る時間は早いけど教室に入るのはいつもより遅れると思
う。もしかしたら今日はファルマが一番乗りになるかもよ」

「一番乗りだからってなんになるんだよ……」

と、呆れた様に言うが少し口元がにやけていた。

何になるというわけでも無くとも、何故か惹かれるものを感じた。

「うわあ！ マジで誰もいねえ!! 静かで広いなっ!!」

教室に入るなり叫ぶ判りやすい子供が、そこには居た。

元より9人しか居ないクラスだがそれでもがらんとしていると普
段と違った趣を感じる。

「すごい！ 何の意味も無く側転したくなる!!!」

広々とした教室の後ろに広がる空間を突然側転で何度も往復する
十六歳。

こういう行動は大体後になって後悔するモノなんだけど。
今日に限ってはその瞬間はすぐに訪れた。

不意にぴかっと瞬く光。

俺はびくつとして光を感じた方へ視線を向ける。

視線の先には窓越しに廊下に立つ一人の黄色い少女。
数秒の沈黙。

片手に持ったカメラから、ペーっと写真が排出されて。

少女は出てきた写真をぴっと人差し指と中指二本で挟んでぺらぺ
らと弄ぶ。

俺は酷く真剣な面持ちになって、そちらへ近づき、ガラリと窓を開

けた。

窓が開くと同時に、ニコツとそれはもうとてもとても可憐な作り笑いと共に小首を傾げる黄色い少女へ。

俺は視線を逸らしつつ近づき、ポケットに手をつ込みながら言った。

「……で、いくらだ？」

「んー、千？」

「良心的な価格設定痛み入るよこんちくしょう」

流れるように一枚の紙幣と写真を交換した俺は、そのまま席に戻って頭を打つ勢いで机に突っ伏し。

対してエクレアも教室に入って自分の席——俺の前方にやってきて椅子は引かずに机の上に座り込んだ。

油断していた。

一番他人に見られたくないところをよりにもよってエクレアに見られるなんて。

恥ずかしくて顔を上げられない。

多分真っ赤になっている。

「なんで今日に限ってこんな朝早くから……」

と、俺は伏せたままぐもった声で抗議する。

「今日また編入生が入るらしくて。事前リサーチってヤツ？ とりあえず何かしら情報を掴めないかなって校内を走り回ってたら、偶然」

編入生、または転校生。この学園はティアロ校長を主とした三人の賢者によって運営されている。生徒の入学は基本的にティアロ校長が「必要だ」と思った魔導士のヘッドハンティングに近いらしい。

勿論選択権は選ばれた魔導士の方にあるがこういった事情のため、

編入、転校生というのは割と良くある話である。

「ユンユンがA組ウチに入ったから新しい子はBらしいよ」

エクレアは妙なあだ名を付けまくるのでわかり辛いのが、ユンユンとは空から降ってきた少女、ユウさんの事だ。

「そろそろうだな。はあ、それにしたって今日は嫌なことが続く」

結局、珍しく早朝に教室に来たかと思えばやる事は謎の側転をキめた醜態を撮影された挙げ句に余計な出費をはたいて机の上で二度寝するくらいのものだった。

それから小一時間ほど経過した。教室内がざわざわし始めるので嫌でも目は覚める。顔を上げて首を捻る。肩と首が痛い。

こんな事なら大人しくベッドで二度寝しておけば良かったかも知れない。

なんて考えつつクラスを見渡した。

気がつけばB組の面々が教室に居て、各々A組の友達と会話をしていた。

元より広い教室に対して少ない人数のため2クラス合わせても窮屈さは感じ無い。

そして、ざわめく教室に二人の教師が入って来た。A組担任のセラナ先生とB組担任のユウキ先生だ。

「静かにしろ」

ユウキ先生の低い声が響き、一瞬で教室は静まりかえる。煤けた白髪と眉間に皺の寄った少々気むずかしそうな雰囲気の特徴だ。

「テラが新しく生徒を迎え入れた。前回クラスAにユウが配属されたので今回は俺の受け持つクラスBに配属される。今朝はこの時間を使って編入生の紹介を行う」

そう事務的に告げた後、最後に一言廊下に向かって声を飛ばした。

「では、入って来い」

教室の入り口に集まる視線。

俺としてはB組配属の時点で接点など殆ど無いと考えている為軽く顔だけでも確認しようところか、程度の興味だった。

しかし。

教室に入ってきた新しい仲間の姿に、思わず目を剥いた。

ラベンダーのような薄紫の艶やかな髪は首の後ろの方で小さな尻尾のように纏められ、前髪は少しだけ長めに流れている。緊張を見せない、軟らかい笑顔を浮かべその深紅の瞳がちらり、と一瞬だけ俺に向く。

ドキリとして俺は思わず咄嗟に斜め下へ目を逸らしてしまった。

「アリシアです。強い属性は水と闇、主に癒しの魔法が得意かな。これからよろしくおねがいますね」

バクバク心臓が早鐘を打つ。

編入生が挨拶を終え、教師から軽く今日の伝達事項が述べられた後ホームルームは解散するが何一つ頭に入って来ない。

俺は頭を抱えながら、何度か深呼吸をして平静を取り戻そうとする。

別に、なんて事は無い。

知っている人物が転校してくる、そういう事もあるだろう。

けれどクラスが違えば、自分から近づこうとしない限り接点はかなり減らす事が出来る。

彼女には干渉しない。

改めてそう心に決めた。

22話 久しぶりだね

さて、編入生が入った日の放課後とは、大体みんな編入生の所に集まるものだ。

そのためA組の方はがらんと静かに。

教室に残ってるのは俺と、こういった事に差して興味を示さないレンの二人くらい。

俺に関しては今日一日中心ここにあらずといった感じだった。

「ねえファルマ」

静かな教室にドライズが戻って来て、声をかけてくる。

慌てて自我というものをたぐり寄せ、数秒遅れて返事。

「ど、どうした?」

ドライズの事だ、夕食のメニューでも相談に来たのだろう。

そう思っ居たら、あまりにも想定外の台詞が飛んで来た。

「アリシアさんと仲良いの?」

「ごふうっ!」

思わず空気の塊を吐き出し、胸を押さえ込む。

「あ。そのリアクション、本当に友達なんだ」

「ち、違、何を根拠に突然そんな事を言ってるんだ!」

「挨拶に行かなくて良いの?」

「良いか、ドライズ! 良く聞け!」

がっどドライズの両肩を掴み、真剣な眼差しを向けた。

「アリスは確かに知り合いだ。でも、知り合いだからって親しいとは限らないだろう? つまりそういう事なんだ。判るな?」

余りにも必死な俺の様子から、ドライズはある程度事情を察してくれたようで、

「……何かあったの?」

「まあ、うん色々な。だから、俺はこの件に関しては一切首は突っ込まない。向こうもそれを望んでるだろうし」

ひとまず、ドライズが状況を理解してくれた様でホッとす。

しかし……

「ん〜?」

ドライブはどこか納得がいかないように首を傾げていた。

「なんだよ?」

「でもアリシアさんはファルマの事件の良い友達だって言ってたよ?」

「……は?」

その言葉を聞いた瞬間、俺の思考回路はオーバーヒートを起こした。

“仲の良い友達”。

その表現は俺の認識とは大きく異なる。

——そんな、馬鹿な……。

困惑しているところに、うるさいヤツがやって来た。

「と、いう訳で隣の教室から颯爽と事情を聴きに来たエクレアちゃんだあ!! 一体何なの、幼馴染なんて聞いてないんだけど!!」

「うわあ……めんどくせえ……」

ズザーつと廊下を横滑りで移動し、教室に突っ込んで来るエクレアから目を逸らしたため息をつく。

「大体あんな朝早くからマー君が教室に居るなんておかしいと思ったんだ! 本当は初めから知ってたんでしょ!! 知ってて、もしかしたら幼馴染に一足早く会えるかも、とかなんとか思ってたんでしょお!!」

なんとという言いがかりか。

人を待つ人間が机に突っ伏して寝る訳がないのに。

どうせ二度寝するんだったらわざわざデコと頬と首と背中と腰と太もも痛めて両足を痺れさせてまで机で寝るより普通にベッドで二度寝したかったと後悔した程だ。

「俺も初耳だったわっ!!」

と、叫ぶように言い返してからハツとした。

「OK。幼馴染なのは否定しないっ」と

なんて小声で確認しつつメモを取るエクレア。

「ぐっ……!」

ちよつとした知り合いと幼馴染では、保有する情報量が全然違う。エクレアの目が完全にスナイパーか猟師のそれになっていた。

「さあ、洗いざらい吐いてもらうぜえー！」

ジリジリと距離を詰めてくる。

このままではまずい。

今日は週に一日だけ設けられている、部活動・自習を行わなくていい日だというのに。

貴重な放課後のフリータイムが奪い取られかねない。

「付き合ってられるかつ」

椅子を蹴飛ばし、横へ飛び込む。

床でくるりと体を回転させ、すぐ立ち上がりダツシュ。

「ちよ、何その動き!?!」

ルクシエラさんのバイトから逃れるために磨いた逃走術がこんなところで役に立つとは。

まあルクシエラさんに通用したことは一度も無いんだけど。

「じゃあなー！」

そのまま扉に向かい、後方のエクレアに手を振って教室から出ようとして。

「あつ、ファルマ。危な——」

ドライズの声が聞こえた時にはもう遅かった。

「え?..」

部屋や建物の出入り口を飛び出すのはやめよう。

何故なら、

「きゃんっ!?!」

高確率で通行人と衝突するからだ。

「うわっ!?!」

後ろを見ていたこともあってドンっと思いつきり正面衝突、尻餅をつく。

「マジでごめんっー！」

とりあえず反射的に謝りつつ、改めて前を向く。

俺と同じようにぶつかった衝撃で尻餅について居たのは。

「いたた……相変わらずはしやぎすぎじやないかな？」

「あつ……」

何故かA組に入室してこようとしていた、話題の編入生アリシアその人だった。

「よつ、とね」

アリスは立ち上がるとスカートをはたいて埃を落とし、衣服の皺を伸ばす。

そして、尻餅をついたまま茫然としてしまっている俺に手を差し伸べて、ニコツと笑った。

「改めて。久しぶりだね、ハル君」

俺は思わず目を逸らした。

けれど出された手を無視するのもバツが悪く恐る恐る自分の手を伸ばし、そのまま引つ張り上げられる。

「えっと、久しぶり」

何とか返事は出来たが、顔を直視することが出来ない。

「あれ？ アーりゃんコツチのクラスに何が用事？」

「うん。折角同じ学校になったのにちつとも来てくれないから、ハル君に会いに来ちゃった」

「なっ!? え、はあ!？」

耳を疑った。

自ら俺に会いに来た？ アリスが?!

「ハル君にちよつとしたお願いがあるんだけど、聞いてくれるかな？」

「それは、別に良いけど、でも、」

気持ちが状況について行けない。

アリスの方から俺にコンタクトを取ってくるなんてあり得ないと思っていたから。

「……許してくれるのか？ 俺を？」

掠れた声で、小さく、零れ出た言葉だった。

けれど、その言葉は誰にも届かなかっただらしい。

「ね、ハル君。来たばかりに何も判らないからこの学校について色々教えて欲しいな！」

アリスは俺の手を取り、身体を寄せる。

「教えてって……ホントに俺で良いのか？ もっと、そっちのクラスの友達とか出来ただろ？」

「だって、放課後の時間に付き合っつて貰うのは申し訳ないんだもん。その点ハル君なら気を遣わなくていいし、何より“友達”なんだからこういう時に頼つても良いでしょ？」

“友達”という単語が胸を抉ってくる。

そう言われれば俺にアリスの頼み事を断るなんてできやしない。

「そういうことなら、判つたよ」

俺は腹をくくって頷いた。

「じゃあ、まずあそこに行つてみたいかな！ “永久の森”!!」

すると改めてアリスは俺の手をぐいぐい引いて、歩き出す。

状況は飲み込めないが、俺は引きずられるように“永久の森”へと足を運ぶ事となった。

23話 “永久の森”

永久とこしえの森。それは、学校の敷地内にある広大な森だ。

その入り口を、てくてく歩く。

俺は今、とても困っていた。

ただでさえ感情と状況の整理がついていない状態なのに。

俺はぼつり、と呟く。

「……あのさ、アリス」

「なあに、ハル君？」

「なんでこんな事になったんだろうな……」

片手を額に当てる俺の姿に、アリスは苦笑した。

「私にも良くわからないかな」

「はあ」

俺は意を決して立ち止まり、くるつと後ろに振り返って叫ぶ。

「なんなんだよこの人数っ!!」

俺の声に、後ろに続いていた人々は思わずビクツと驚いて立ち止まった。

その数、四人。俺達二人を入れると計六人とそれなりに目立つ人数だ。

「いやいや、最近物騒だからさあ！ 人数は多い方が安心でしょお？」

なんて悪びれる気が一切無いエクレアと、

「とかなんとか言われて気がついていたら連行されてただけだ」

と、エクレアへ不満げな視線を送るドライブズに、

「……観察」

主語が全く無いので何を観察しに来たのかは不明だが何故か居るレン。

最後に、丸眼鏡と尋常じゃないくらい長い二つの三つ編みが特徴的な少女が目を逸らしつつ申し訳なさそうにおずおずと弁明する。

「ええつと、あのう、お邪魔してすいません……」

B組のクラス委員長にしてリーダー、土属性専攻のアーシエ。

クラスメイトでは無いがいくら交友関係が狭い俺でも、流石に知っ

ている人物だ。

「別に邪魔とは言わねえけど、たかだか学校案内に大仰過ぎるだろ……。ていうかなんでB組の委員長までこんな所に……」

「私の粹な計らいだ！ 思ってたより人数が増えちゃったから、一応監督役が居た方がいいと思ったんだけどリンリンが居なかつたんで急遽アーシエを連れてきたのです！」

エクレアは良い仕事をした、と言わんばかりに胸を張るが。

そもそもエクレアが着いてこなければこんな人数になる事も無かつたのでは？

なんて言っても多分受け流されるだけなのでぐつとその言葉を飲み込んだ。

すると何故かアーシエさんが困ったように頭を下げる。

「うちの子が迷惑をかけて本当にすみません……！」

「いや、もう慣れた——って、うちの子？」

「エクレアとは古い付き合いでして……」

そう言えばアーシエさんは、基本的に誰でも彼でも妙なあだ名で呼ぼうとするエクレアが珍しく本来の名前で呼んだ。

それが距離感の近さを感じさせる。

とにかく、この様子だと常日頃からエクレアに振り回されてような雰囲気を感じて呟いた。

「あー……なんていうか、ご愁傷様」

「根は、根は悪い子じゃ無いんですう……」

よよよ、とほろり零れる涙にハンカチを当てるアーシエさんの肩をドライブスがポンと叩いた。

「判るよ……。人付き合いに問題を抱えてるヤツと組んでるとフォローが大変だよね」

なんて共感を示す姿勢に俺は思わず声を漏らす。

「おいコラ、何が言いたい」

「反応するって事は自覚があるんじゃないの？」

「てめえっ！」

言い返そうとしたところで、ふとアリスが首を傾げた。

「あれ？ ハル君って人付き合いに問題があるのかな？」

「うっ……!!」

腹に強烈な一撃を食らったようなうめき声と共に身体が凍り付く。昔は、人懐っこくて誰にでも物怖じしない明るい感じで友達多かったよね？」

そんなアリスの言葉に、その場に居た一部の人間がギョツと驚きを隠せない様子で一斉に俺の方を向く。

反応しなかったのはドライブくらいだ。

「え、う、嘘でしょ？ マー君が人懐っこくて明るいとか想像できないんだケド」

「……不気味」

「てつきり気難しい方なんだとばかり……」

散々な言われようだが、それもこれも俺自身の自業自得なので仕方が無い。

「少し暗くなったかな〜つとは思ってたけどね」

「やっぱり判ります？ なんか最近急に捻くれちゃって……人と距離を取るようになったと言いますか」

「でもその割には教室で走り回ったり、やんちゃな所はそのまんまなんだね」

「無理して格好付けてるだけだから、簡単にボロが出るんです。だって初めから気にしなければ良いのになって思うんですけど」

「おいこら本人を前に好き勝手言うなっ」

恥ずかしくなってドライブをぐいっと押しつける。

「別にどうでも良いだろ俺の社交性なんて！」

保護者面談じゃ無いんだ。

自分の性格についてどうこう言われたくない。

「とりあえず、万年桜を目指すからなっ」

無理矢理話題を学校案内の方に切り替えて、俺は先頭を進んだ。

「万年桜って何かな？」

アリスの疑問に、ぬつとエクレアが現れ。

「ほい来た！ そういう訳でアーシエ、解説よろしくう！」

ずいつと後ろからアーシエさんを引きずってきて自身と立ち位置を入れ替える。

「割り込んで来た癖に自分で解説するんじゃないのかよ」

「万年桜とは、永久の森の中心にそびえる桜の巨木の事です。季節を問わず花を咲かせているのでそう呼ばれているんですよ……」

「そして委員長さんは当たり前前の様に解説を始めるんだね」

「こういう扱い、もう慣れちゃいましたので……」

アーシエはそのまま永久の森について詳しく語り始めた。

永久の森とは校舎の裏に裏庭を挟んで存在する広大な森で全てが学園の敷地だ。元々は土の魔力が強く生命豊かな森だったらしく、実習や演習の為に存在していたらしいが。

広すぎる土地に対して実際に利用していた部分が少なすぎた。

そこで――。

「全く、人間とは仕方の無いもので。とある先生が不老不死の研究をする箱庭にしてみました」

その結果、通常の何倍もの速度で生命サイクルを繰り返す植物が誕生。

それだけなら単に芽生えては枯れてを繰り返すだけなのだが、何の因果か魔法が暴発して植物が大増殖を開始。

更に動物レベルの知能を獲得してしまい最早イーヴィルと大差無いレベルの魔物と化して收拾が付なくなり、全校生徒全員で討伐する事に。

男女関係無く触手プレイ地獄に巻き込まれつつもどうにか事件は解決し、魔物化した植物は排除できた。

そして残ったのが、数週間単位というもの凄い高速で生命サイクルを繰り返す特殊な環境だ。

「反省した先生が、事件のお詫びを兼ねて植物をそれぞれ開花したり実を付ける時期が近い種類同士で分類して再配置、区切りを付けて、学園の生徒なら誰でも自由に採取を行っても良い公共空間として整理されたのが永久の森になります」

永久の森の環境は校長が配置した魔石により植物の生命サイクル

の速度に合わせた気候変動を行っており、一週間毎に四季が巡り約一ヶ月で一周するようになっていいる。

「採取できる素材は様々で、無機物有機物問わず魔力に馴染みやすく様々な魔法の材料や触媒になるんですよ。それと、普通に野菜や果実が群生している所もあります……」

「流石に成長速度が速すぎて管理しきれないから、きちんと管理して育てられた市場品と比べると幾らか不格好だけど、僕もよく料理に利用させて貰ってるよ」

余談だが。

人の手で管理できないなら魔法の出番だろう、と自立魔導を使った自動管理型の畑を森の中にこしらえた剛の者も居たりするとか聞く。

「確か、今週は秋だったか。来週には冬になるな」

「なるほどね。通りで、寒くなってきたなって思ってたんだよね」

アリスが二の腕をさする。

外の時期としては初夏に入りたてであり制服も夏服に切り替わったばかりだが現在永久の森は晩秋。そろそろ森の内部に入るので寒さを感じて当然だ。

「つと、迂闊だった。普通はマテリアライズで上着とか羽織るんだけど。まだ防寒着の魔石が支給されてないのか」

「そうなんだよねー。困ったな〜」

後ろを見てみれば、みんなローブを着たりコートを羽織ったりしている。

予め対策済みという訳だ。

「でもハル君は半袖のままなんだね。上着は持つて無いの？」

「ああ、いや。あるけどそもそも俺は火属性があるからな。エンチャントで暖を取れるから上着はよっぽど寒い時じゃないと使わない」

そう聞いて、アリスはポンツと手を打った。

「じゃあじゃあ、上着自体は持つてるんだね？」

「そうだけど」

「ならそれを貸して欲しいかな」

「ええ？ 別に良いけど」

特に深く考えずに俺はコートをマテリアライズしてアリスに渡した。

「わ、着た瞬間から暖かいね！」

「それ使う時は防寒が目的だからあらかじめ暖まった状態で行ってくるように設定してるんだ」

「わーい、ぽかぽか。でも、こう言うのって普通ぶかぶかになっちゃうモノだと思うけど、ハル君小っちゃいから割とギリギリだね」

「ほっといてくれませんか!? 悪かったな、昔から大して身長伸びて無くて!!」

「あはは、ごめんごめん怒らないでね」

漸く、今のアリスと話す事に慣れてきた気がする。

やがて景色が開けて巨大な桜の木が視界に映った。

24話 これからも仲良くしようね？



「え、普通に滅茶苦茶仲いいじゃんあの人達。もうこれ完全にデキちゃってるんじゃないの??」

エクレアは呆れた様子でアーシエと顔を見合わせた。

「や、やっぱりお邪魔なのは……」

「異性の幼馴染みの距離感って普通こんなもんなの？ あたしら同性だからわかんないよ！」

上着を借りるといふ行為はやはり、年頃の若者達にはそれなりに意味深に見えるモノだ。

「うーん？」

一方、ドライズはやや後方からファルマとアリシアを眺めつつ。今日一日中感じている違和感が増大していく事に頭を悩ませている。すると、

「……嫉妬？」

と、突然かけられる声。びくっと視線を声の方に向ければレンがじいつとドライズの方を見つめていた。

「え、僕が？ 誰に？」

「……取られて悔しい、とか」

レンが視線をファルマとアリシアの方に向ける。だがいまいち意味が判らない。というか主語が無いから本当にわかり辛い。ファルマに、アリシアを取られて悔しいから嫉妬していると思われるという事か？ と考えてドライズは困った様に答える。

「女好きじゃあるまいし転校したばかりの子にそんな風に思ったりしないよ?」

「……そうじゃない。でも、つまり意外と余裕と言う事?」

レンはドライズの回答に納得していない様だったが、ドライズは頭の上に浮かべるハテナの数を増やすばかりだ。

改めて、ドライズはファルマの事を心配そうに見つめた。

「アリシアさんの方は至って普通に見えるのにファルマのヤツ——何

をあんなに怯えてるんだらう?」

ファルマは教室で幼なじみだからと言って仲が良いとは限らない
と言って居たが、アリシアさんの言動は真逆だ。好意を隠さず全面的
に押し出している。

「あいつの性格なら、仲が良くないと思つてた友達が寄り添つてきた
ら照れはすれど喜びそうなものなのに」



森の中心に位置する場所、大きく開けた広場にそびえる巨大な桜の
木。

「着いた。ここが万年桜、永久の森の気候はさつきも言った通りすご
い勢いでコロコロ変わってるんだけど、この桜だけは季節の変化を問
わずにずっと花を咲かせ続けているんだ」

アリスは巨木に歩み寄り、見上げる。

「わあ! 凄いな! おつきい!」

麓に立てば、空の全てが桜色に埋まる。

はらりはらりと舞い散る花弁は不思議な事に決して尽きる事は無
い。

『万年桜』は永久の森の神秘性と異常性を象徴しているようだ。

「魔法つて感じがするね。転校してきた実感が湧いてきたかな」

ヒラヒラと舞い落ちる桜の花びらと戯れながら、アリスが笑う。

そんな彼女がチラリと視線だけこちらに向けて、

「はるばる、ハル君に会う為にこの学校へ来た甲斐があるってものだ
ね!」

その言葉に、凍り付いた。

「……え?」

——会いに来た? わざわざそのためだけに編入を?

一瞬頭が真っ白になりそうな程戸惑い、けれど。

「なくんちゃって! 真に受けたでしょ? 冗談だからね」

アリスはにひひ、と悪戯な笑みと共に呆然としていた俺のデコを弾
く。

「なっ、おま、」

よくよく考えてみれば当たり前前の事なのに、一瞬本気にしてしまった自分が恥ずかしい。

気がつけば、アリスのペースで弄ばれている気がする。でも、少しだけ安心している自分がいた。

アリスにはもう二度と、こんな風に笑いかけて貰えないだろうと思っていたから。

「ね、ハル君」

アリスは巨木の幹に背中を預け、様子を伺うような視線を俺に向ける。

×

「これからも仲良くしようね？」

×

「あ、ああ」

何だろう。今、大切な何かを忘れてしまったような。

胸の奥が、ざわざわする。

けれど、そんな不安染みた感情は。

×

「よろしくね、ハル君！」

アリスはこの日一番の笑顔を見せてくれると、あつと言う間に吹き飛んだ。

とても可憐で、美しく。

けれど、何処か蠱惑的に見えた。

◇ ◇ ◇

「ああ〜！ 疲れたあ……！」

俺は寮室に帰るなりすぐに自分のベッドへ飛び込む。

「もう、だらしないなあ。ちよつと歩いただけじゃないか」

ドライズはエプロンを手に取りつつ呆れた様に呟いた。

「いや、気疲れが……」

万年桜の広場で軽く休憩した後、簡単に校舎を回って施設の説明をして解散した。

何かしら特筆するような事も起こらず、エクレアは不満げだった

が。

「何でそんなにいつにも増して気を張ってるのさ？」

× × ×

問われて、疑問に思う。俺は何を悩んでいた？

× × ×

「色々あるんだよ、俺にも」

とりあえずドライブには適当に答えた。

「ふくん。あ、言っとくけど今日はもう時間無いし簡単なスープにしちやうから」

「大丈夫、食欲ねえし」

ドライブはそのままキッチンへと入る。

俺はベットに突っ伏しながら、今日一日の事を考えて居た。

「ははっ、どうなってるんだよ、ったく」

ごろんと寝返りをうち、低い天井を仰ぐ。二段ベッドの下段なので当然だ。

「突然幼馴染みが転校してきて親しげにしてくれるとか、都合の良いラブコメかよ」

偶然知り合いが転校、編入してくる事自体はそう不思議な事でも無いのだが……。

——ずっと、嫌われてると思ってたのに。

確かに、昔は仲が良かったのは間違い無い。

当時の学校には毎日一緒に登校していたし、お互いに家に遊びに行ったりもしていた。

だが、アリスとはある日を境に言葉を交わさなくなり、進学先も異なっていたためそのまま疎遠になっていたのだ。

だから、アリスが俺を「仲の良い友達」だと紹介していた事には酷く困惑した。

——……………あれ？

一体何があって、俺はアリスと疎遠になっていたんだっけ？

とても大切な事だった筈だ。

なのに、思い出せない。

× × ×

胸がもやもやするが、思い出せないモノは仕方が無い。

アリスは今日「友達として」頼ってきた。

その気持ちには誠実に答えなければいけない。

そんな、強い義務感が込み上げる。

「これからも仲良く、か」

何故だろう？

その言葉はとても、とても。

——涙が出るくらい嬉しい言葉だった。

なのに……。

「……？」

ちくり、と胸に何か突き刺さった様な違和感が拭えなかった。

25話 昔みたいに

また、夢を見た。

今まで何度も見た事がある夢だ。

この夢を見た日の朝は決まって涙を流し、自己嫌悪に押し潰されそうになる。

内容は、毎回多少異なるが趣旨は同じ。

——またかよ。

一人の女の子が自分の元に駆け寄ってきて。

にっこり微笑んで語りかけてくる。

なんて言っているかは忘れてしまいうけれど、それが // 俺の望む言葉 // だという事だけは判る。

——俺はどうして、受け入れるんだ。

そうやって幾つか言葉を交わして、女の子は俺の手を取るのだ。

俺は何の疑問も無く、嬉しそうにその手に引かれて女の子の後を着いていく……

——俺は何度、後悔するんだ。

× × ×

「……うっ、え？」

目が覚めた時、頬を涙が伝っていた。

悪い夢を見ていた気がする。

自分が嫌で嫌でたまらなくなるような、そんな夢を。でも、どんな夢だったのかいまいちハッキリしない。

「そうだ、たしかアリスが出てきたような……」

頭がぼーっとする。

時間を見てみれば、例にもよってまだ早朝だ。

「夢にまで見るなんて、浮かれてんのか？」

俗物というか、単純な自分が情けない。

「ふわぁ……眠い……」

寮を出てすぐのところまで大きな欠伸をする。

「また早起きなんかしちやって、ホントに昨日も今日もどうしちやったのさ」

ドライブがやれやれ、肩をすくめた。

「早起きは三文の得なんて言うが、俺的には損しか感じ無いな……」
そうぼやきながら歩いていると、

「あ、おはようハル君！」

ニコツと笑顔を浮かべてアリスが駆け寄ってくる。

「おわっ!? お、おはよう?」

思わずビクツと戸惑いながら返事をする、アリスは頬を膨らませた。

「むう。女の子に対して出会い頭に『おわっ』とか言うの失礼じゃ無いか?」

「え、あ、す、すいません」

「何で敬語なのかな?」

「いや、突然女子に声かけられるの慣れてないんだって」

「ねえファルマ。それ、すっごい哀しい台詞だって判ってる?」

とドライブに指摘されて自分が発した言葉の切なさを認識する。

「……俺も今気付いた所だからそつとしておいてくれないか?」

アリスは俺の顔を覗き込んでくすくすと笑った。

「欠伸したり驚いたり落ち込んだり、ハル君は朝から忙しそうだね」

「アリス、根本的に誰のせいなのか判ってるか?」

ジトツとした視線をアリスに向けて見る。

だが、寧ろ横に居たドライブはもつとこう何かを糾弾するような視線を俺に突き刺して。

「普段から社交性の無い自分のせいでしょ」

と、弾丸の様な発言を放った。

「ごはっ!?!」

「わあ。クリティカルヒットって感じだね」

「ドライブ……朝っぱらから親友虐めて楽しいか……?」

掠れるような声で訴えるがドライブは『じゃあ日頃の行いを改めればいいじゃん?』とでも言いたげだった。

そんなドライブの心の声に気付かないふりをして、アリスに話を振る。

「……それで、俺はもう瀕死な訳なんだけどなにか用？」

「用って程じゃ無いけどね。昔みたいと一緒に登校しようよ？」

「はいいつ!？」

「それじゃ、こんなところで立ち止まってないで歩こうね〜」

「待ってってば! 今のは了承の“はい”じゃないっ!!」

「ハル君、さつきから口調ブレブレじゃないかな？」

「精神的に錯乱してんの!!」

そうやって慌てふためいているとアリスは物憂げに視線を下へずらし。

「私と一緒に迷惑……かな？」

と、ゆっくり背を向ける。

「いや、えっと、そういう訳じゃないけど、でも、」

俺はしどろもどろになりながら挙動不審に周囲を見渡す。

とりあえず何かしらのフォローを求めてドライブに視線を向けるが。

「あ、そう言えば今朝は師匠に呼ばれてるんだった」

こいつは“丁度良い機会じゃん”と言わんばかりにあからさまな嘘をついて。

「悪いけど先に行くよ。それじゃ〜」

小走りで去って行く。

「あ〜……」

そして取り残された俺はアリスと二人っきり。

「俺は全然迷惑じゃ無いけど」

観念したように頭を掻いた。

「変な噂立っても知らないぞ? それに、自分で言うのもなんだけど俺友達少ないから、俺とばっか一緒に居ると友達作りづらいんじゃないか?」

すると、アリスはくるつと反転して再び俺の方を向き。

「なあんだ、私の心配してくれてたんだ。相変わらず優しいね」

と顔を綻ばせる。

さつきまでの物憂げな仕草はどうした。

「……もしこの一連のアリスの態度が演技だったら俺、人間不信になるからな」

「演技なんて失礼しちゃうかな。折角、仲良くしようねって言ったのに煙たがられて哀しかったのも、心配してくれて嬉しかったのも全部本当なんだから」

「け、煙たがってなんか……!」

否定しようとして、言葉に詰まる。

声をかけただけで驚き、慌てふためいた挙げ句に何だかんだ理由を付けて突き放そうとしていた今までの言動を振り返ってみれば、客観的に煙たがられてると感じて当然だった。

……故に自分がそんな事をしていたなんて気付くと酷く胸が痛んだ。

「——ほんとごめん。言い訳にしかないけど、そんなつもりは無かったんだ」

「気にしないよ。ハル君はハル君なりに気遣ってくれてたって判ったしね。それより早く行こうよ。何だかんだで結構話し込んじゃってるんじゃないかな?」

「……うん」

俺はまた少し自分の事が嫌いになりながらアリスと並んで歩き始める。

こうしていると本当に、懐かしい気分になる。

昔、まだ年齢も一桁くらいだった頃。

毎日こうして二人で登校した。

あの頃は無知で愚かだったけど、でも、楽しかったな。

25. 3話 楽しい楽しいアルバイトの時間ですわ！

◆ ◆ ◆
一度彼女が歩み出せば、人々は慌てて道を譲る。

そんな周囲の様子など気にもせず、彼女は胸を張りキビキビと進む。

月明かりを結晶化したような白く美しい輝きを放つ彼女の長髪がその背で自由気ままに揺れていた。

ある者は眉をひそめて彼女をこう呼ぶ。

『破滅の魔女』と。

また、ある者は恐れおののき彼女をこう呼ぶ。

『生ける天災』と。

そんな、例えこの学園の生徒で無くとも誰もが知っているような彼女の二つ名を知らぬ者がただ一人だけ存在した。

そこは、4年A組前の廊下。

「あれ？ なんだか急に廊下から人が減ったような？」

無垢な疑問の表情を浮かべる少女の姿を、彼女は捉える。

「もし、そこのお嬢さん」

「ふえい！ お、お嬢さんって私ですか？」

戸惑う少女に、彼女はとても優しい笑顔を見せた。

「貴女はこのクラスの生徒ですわね？ ファアルマという生徒が居ると思うのだけれど、彼に取り次いで貰えませんか？」

◆ ◆ ◆
「ふあゝあ」

俺は欠伸をしながら、授業が始まるまでまた目を閉じておこうかと考えていた。

ここ数日、睡眠不足が続いて疲れが溜まっている気がする。
その時。

「ファアルマ君、ちよつといい？」

聞こえてきたのは最近編入してきたユウという女子生徒の声。

「え、あ、う、俺?」

彼女との接点は殆ど無く、特に声をかけられる用件が思いつかない。

思わず戸惑ってしどろもどろになる。

「なんだかとっても綺麗で上品なお姉さんが君を呼んで欲しいって教室の前に来てるよ」

「綺麗で上品なお姉さん……?」

はて、俺にそんな知り合い居ただろうか。

俺の友好関係は自慢じゃ無いがとても狭い方だ。同級生ですら目を見て話せるのはドライズとリーゼくらい、お姉さんというからは上級生なんだろうが上級生で女性の知り合いなんてたった一人しか思い当たらない。

しかしその人物を知る人間からはとてもじゃないが綺麗だとか上品だとかいう言葉がでてくるなんて考えにくい……。

釈然としない様子の俺に、ユウさんは一言付け足すように言った。「えっと、『バイトの時間ですわ』って伝えれば判る筈だって」

俺はガタツと椅子を弾き飛ばして立ち上がる。

続いてダンツと力を込めて左足を踏み出し身体を窓の方へ向ける。

そしてガラツと窓を全力でスライドさせ、

ガツと右足を窓の枠にかけた!

「!!!?」

あとはこのまま大空へ羽ばたきただけだツツツ!!!

身体中を支配する震えを押さえ込み、今まさに跳び立とうとした。

……が。

「ちよ、ちよ、まっマー君いきなり何してんのお!!?」

「……………、三階。危険」

「アンタ風属性持って無いでしょ!? 何考えてるのよっ!!」

エクレア、レン、リーゼが凄まじい反射速度で服の裾をがっしり掴み、反対側に体重をかけて必死に制止していた。

「うあああああ!!! 頼む、離してくれッ!!」

ただでさえ疲れているのだ。今はアルバイトなんてしたくない！

「訳判らないって！ こんな所から飛び降りたら死んじゃうってばっ
!!」

「えっ、えっ……え……？」

「ユウ！ ぼうつとしてないでこのバカを取り押さえるの手伝って
!!」

「あ、う、うん……」

「四人がかりなんて卑怯だあああ！ うおお俺は屈しな
いいいいツ『強化魔法』!!」

俺は持てる全ての魔力を身体強化に注ぎ込み、引きずり返されてい
た身体を少しづつだが前に進める。

「こんな所居られるかッ俺は帰らせて貰うぜツ!!」

「……その台詞、多分使いどころ違う」

そして俺は四人を乱暴に振り払う。

「そこだああああ」

「良くわからないですが危なそうなので、僕も止めさせて貰いますよ
突如現れる気配、この声は……マナトかつ!?

シャツと流れるように窓が閉ざされる。しかし、最早そんなものど
うでもいい。

「ええいこなくそお!!」

俺は勢いに任せてタツクルをし、窓をぶち破った。

この世の全ての動きがスローモーションに見える。

舞い散るガラス片はキラキラと輝いて、

腕で顔を庇いながらも前方を確認した。

すると、緑色の制服を来て箒に跨がった男が視界に入る。

「ん?」

「へ?」

「……………」

互いを認識し、沈黙が走る。

俺が跳び出したその先で。

偶然箒に跨がり空をのんびり散歩していた最上級生、アイルさんと

蜂合ったのだ。

アイルさんの視線が

俺、

教室のリーゼ、

俺へと移動。

この間実に一秒以下。

次の瞬間、アイルさんはキョトンとしたまま、とりあえずと言わんばかりに、

「なんか知らんけど……オレはリーゼの味方なんでー」

と言ってくるつとその場でターン。すると箒の穂が弧を描いて俺の方に迫ってきて、

べしっ

「ほあがっ」

ものの見事に打ち返された。俺はそのまま教室に放り込まれ、幾つかの机に衝突してそれらを吹き飛ばす。身体能力を強化していたので幸い怪我はそれほどない。

「決まったああ!! マー君をゴオルにシユウウト!」

球技の実況風にはやし立てるエクレア。

「も、もう何がなんだか??」

ひたすら呆然とするユウ。

「教室が滅茶苦茶なただけど……」

頭を抱えるリーゼ。

そして――。

「あらあら、相変わらず元気が良いこと」

俺の前に、諸悪の根源が立ちはだかる。

「あ、ああ……」

近づいてくるその人物から逃げる為、俺は尻餅をついた体勢でかさかさ必死に後ろに下がるがやがて壁にぶつかってしまう。

彼が追い詰められた事を確認するとその人物はニツコリと一層凶悪な笑顔を見せた。

「さあ、今日は楽しい楽しいアルバイトの時間ですわ!」

全てを諦めがくりと項垂れる俺の首根っこを掴むと、俺はズリズリと引きずられて連行されてしまうのであった。

引きずられつつ視界に入った、マナトが残像も残さぬ素早さで教室を元通りに直していく様が妙に脳裏に焼き付いたのはバイトという現実から目を逸らそうとした自己防衛本能のせいなのかもしれない……。

25. 6話 何かありましたか？

『破滅の魔女』『生ける天災』

畏怖や忌避が込められた、この人の二つ名だ。

他には、

『光るまな板』

なんてちよつと酷いのもあったかな。

彼女の本来の名は、ルクシエラ。

人として異常なほど膨大な、そして極めて特異な光の魔力を有して生まれた天才——もとい天災魔導士だ。

「さ、今日はこの辺りの整備をして貰いますわ」

連れてこられたのは、辺り一面真っ平らな大地だった。

見渡す限り、遮蔽物など一つも無い。

動物も、植物すら存在しない究極の平面。

「はぁ」

「元の景色はこんな感じですよ。材料を受け取ってくださいまし」

ジャラジャラとトロッコに乗せられ運ばれてくる無数の魔石と、一枚の写真。

「授業どうするんですか、もう……」

「私のバイトはティル爺に言ってマテリアライズの実習の単位扱いにして貰ってますわ。気にすることはありません」

「いや一限目は一般教養の語学なんですが!?!」

マテリアライズの単位を貰えたところで語学の方は補填されないんだから意味が無い。

「別に一般教養なんて数回ばっくれようが問題有りませんわ。仮に単位が足りなくても後で補習なり追試なり受ければ良いだけの話ですし」

「それで休日潰されるの俺なんですけどおお!!」

「別に今に始まった事じゃないでしょう。とつとと始めなさいな」

「うう……」

俺に拒否権は無い。大人しくいつものバイトを始める事にする。

『マテリアライズ』

魔力を物質に変換する魔法、マテリアライズ。コレをつかって写真通りの風景を再現するのが俺のバイトの一つだ。他にはその他雑務を押しつけられたりもする。

魔石から魔力を取り出して、まずは写真に写る簡素な小屋を少しずつ組み上げていく。

「この辺りこの前も仕事した気がするんですが……」

「その通りですわ」

「じゃなんでまたこんな事を」

「それはあの後この辺り一帯に試作の魔導をぶっ放したからですわ」

ケロリと言つてのけるが、本来これほどの広範囲を更地にしてしまう程の魔力を持つ人間はそうそう存在しない。

少なくとも、ウチの学校では一般の教員ですら不可能だろう。できる可能性があるとしたら校長のティアロ先生を初めとする三賢者の先生くらいか。

「んで、失敗してこの様つて訳です……」

俺がため息と一緒に吐き出した台詞に、ルクシエラはきよとんと小首を傾げる。

「何を言っていますの？ 実験が大成功したからこうなったのですよ？」

「なんて物騒なもん作つてんだアンタツ!？」

無駄に広いウチの学校がすっぽり染々収まる程の空間を吹き飛ばす程の魔法なんてもう災害とかさう言う段じゃない。禁忌クラスの兵器だ。そんなもの学生が個人の研究で取り扱っていい許容を超えている。

「最近、イーヴィルが増えているのはご存じ？」

「まあ噂程度には聞いてますけど」

後は、ついこの間イーヴィルが謎の暴走をして巨大化したりもした。最近何かしらの異常事態が起こっている事は間違いないだろう。

「クラス3ならともかく、2以下の細々した小物をちまちま地道に一体ずつ処理しては面倒でしょう？ ですからまとめてぶっ飛ば

す魔法を考案しましたの」

ルクシエラさんは得意げに語るが、そんな『効率的でしょう?』と言いたげな顔で済ませて良いような規模では無い筈だ。使い方次第では街が1つ滅びてもおかしくない。

「これはどう考えてもやり過ぎだろ!? 技術流出したら戦争起こりますよ!」

「問題ありませんわ。この魔導は私の固有魔法『ルクス・エクラ』を友人の魔導機器や魔法陣で効果範囲を収束させるという原理ですから。機械だけ盗んだところで肝心の『破滅の光』が無くては無用の長物でしてよ」

「いや、でも、改造とかされたら……………」

「一点物ですし、いざって時は遠隔操作で自爆させますわ」

「ホント発想が乱暴だな…………」

「最近ファルマの物言いがどんどんぶしつけになって来てお姉さん哀しいですわ」

と、一ミリも気にして無さそうな棒読みで言うんだから、何処まで本気なのやら。

「そういう事はせめて表情くらいは哀しそうにしてから言っして下さい…………」

俺は呆れ気味にため息を1つ吐くと同時にクスリと笑った。

こき使われるのはいい気がしないものの、何だかんだで交友関係の狭い俺にとってはこうやって本音で話し合える人間というのは貴重な存在だからだ。

親友であるドライズの保護者であるという事を除いても、ルクシエラさんは尊敬できる先輩であった。

例え、世間からなんと呼ばれていようと。いや寧ろ、一部の世間から厳しい視線を向けられて尚己を貫く強い生き方こそが俺には眩しく輝いて見える。

——俺は、他人の視線を気にしてばっかりだな。

昔はこんな事も無かったのだが。

一体いつから、そうなってしまったのだろう。たしか切っ掛けが

あつたような……。

「ちよつと、手元が止まっていますわよ」

「つとと、すみません」

ルクシエラさんに指摘されて、慌てて作業を再開する。

このアルバイトは正直結構神経を使ってしんどいモノだ。

感覚で言うなら絵の模写に近い。

だから疲れているときにはやりたく無いのだが……。

「……ファルマ、何かありましたか？」

「え？ 何ですか、急に」

「いえ、いつもより仕事の精度が悪いので。体調でも崩してませんか？」

「……ルクシエラさんこそ、悪いものでも食べましたか？」

古典的なやり取りだが。お約束通り次の瞬間には関節技をキメラれていた。

「じよ、冗談、です」

「全く。人が折角心配してあげてるというのに」

ルクシエラさんも冗談のつもりだったのだろう。数秒後には解放してくれた。

「心配しなくても、ただ寝不足なだけですよ。最近夢見が悪くて」

「夢、ですか？」

俺の言葉に、ルクシエラさんは訝しげな顔をした。

「どうかしましたか？」

「——ファルマ、手を動かしながら聞きなさい」

「え？ まあ、良いですけど」

珍しく真面目な声色が聞こえてきたものだから言われた通り作業しつつも耳を傾ける。

「夢というモノは人が生きていく上で切って離せない存在です」

確かに、人によっては毎日必ず見る様なモノだ。

「古来より人は『夢』という現象に対して一種の信仰のようなモノを抱いてきました」

その話が、俺と何の関係があるのだろうか？

「そのため、夢に紐付く魔法も多く作られて来たのです」

夢に紐付く魔法？

「それが、単なる悪夢ならそれで構いません。ですが貴方も魔法使いであるならば。夢に干渉する魔法攻撃を受けている可能性がある事
忘れないようになさい」

言われて、ゾツとする

「な……魔法攻撃って、誰が何の為に俺なんかを狙うって言うんですか」

「あくまで可能性、心構えの話ですわ」

「……まあ、覚えておきますよ」

俺みたいな凡人を付け狙う理由なんて全く思いつかないのだが。

まあ覚えておいて損は無いだろう。

「何かあった時はすぐに頼りなさい。私に出来る事なら何でもしてあげますわ」

ルクシエラさんの言葉に又一つ、俺の気持ちは重たくなった。

「……ルクシエラさんは、俺に入れ込み過ぎですよ。お世話になってばかりで、俺、どうやってお返ししたら良いのか」

俺は数え切れない位の恩義をルクシエラさんから受けている。だから、いつかは返礼したいと考えて居るのだが借りは増えていく一方だ。

対して、ルクシエラさんの方はそんな俺の気持ちなんてお構いなしと言わんばかりに、

「私がやりたくてやるのです。見返りなんて要りませんわ」

なんて、優しい笑顔で言い放つ。

「そうは言っても……」

「ま、強いて言うならこのアルバイトをきちんと済ませて貰えればそれで結構ですわ」

「う、へーい」

結局そこに戻ってくる訳か。

俺は観念して作業を続けるのであった。

25. 9話 お、鬼だ……

「ああ、やっと終わった……」

「うんうん、速さ、質共に及第点ですわ」

ルクシエラさんは満足げな笑みを浮かべて広場の中央に設置されたプレハブ小屋に入って行く。

その間俺は周囲を見渡した。

マテリアライズによつて復元されたのは、中央のプレハブ小屋を中心に、大小様々な岩石が積み木のように組み上げられまとまりを作りそれが規則的に配置された空間。

一言で表すならストーンヘンジだ。

作業中は特に気にしていなかったがこうやって一望してみると、思うことがある。

「まさかあの人、文化の遺産的なものをイーヴィルごと吹き飛ばしてしまつたんじゃない」

なんて疑問に震えていると。

プレハブ小屋の天井がカバッと開く。

「ん？」

次の瞬間、キラキラ輝く何かがまるで噴水のように勢いよくプレハブ小屋から湧き出してきた！

「な、なんだあれ。……魔石とお金!？」

天へと高く舞い上がり落ちてくる金品に困惑していると、ルクシエラさんがプレハブ小屋から普通に出てきたので問い詰める。

「ちよ、これなんですか？」

こつん、こつんとちよいちよい魔石や小銭が頭に当たって痛い。

「うふふ、これから見物ですわよ。危ないので側を離れないようになさい」

「へ?..」

ルクシエラさんはずっと俺の腕をたぐり寄せる。

「来なさいな」

「うわっ」

俺の腕を引いて走り出す。何かと戸惑っていると、突如ざわざわとして喧噪近寄ってきて。

がさり、と広場を囲う木々から鳥、獣、人型様々な異形の存在が現れる！

「つてイーヴィルウウウ!!?」

いつの間にか四面楚歌になって焦るが、ルクシエラさんはつまらなさそうに小さくため息。

「やれやれ。またクラス2以下、しょうもないですわね。たまには3が来てくれないと新作の実験も出来ませんわ」

「え、今から戦うんですか!? 俺全く準備できてませんけど!」

「でしようね。けれどご安心なさい。アレを倒すのは私が押しつけられた仕事、寧ろノルマの関係上一匹たりとも貴方にあげる気はありませんわ」

ルクシエラさんは駆けながら、プレハブ小屋より噴出し落下してきた魔石を数個拾い上げる、ぽいっと放り投げる。

すると魔石が飛んだ先で石造りの巨大な螺旋階段を形成しごとつと落下。

「マテリアライズ? なんで階段なんか突然……」

と首を傾げながらも先行するルクシエラさんに引つ張られ階段を登る。

「こら、早く登らないとイーヴィルにもみくちやにされますわよ?」

そう注意されて、え、と思わず振り返ると。

もの凄い数のイーヴィルがこちらに向かって殺到している光景が見えた。

「いつの間にかめっちゃ増えてるうう!!」

ルクシエラさんはマテリアライズにより階段を螺旋状に伸ばしつづつどんどん上へ上へと登りファルマも必死についていくがイーヴィルの何体かは既に階段に到達して後を追ってきている。

普通に考えれば素材の魔石が尽きてこのまま追い詰められるのだが。

ルクシエラさんは別段取り乱すことも無く、階段を駆け上がりなが

ら横の方を指差した。

「ファルマ、走りながらあつちを見なさい」

「あつち?」

指差されたのは、未だに空へと魔石と小銭を吹き出し続けるプレハブ小屋。

よく見たらあつちの方にもイーヴィルが大量に群がっていた。

「イーヴィルについては不明な点も多いですが。私独自の研究で判ってきた事もあります」

「そんな事より追いつかれそうなんですけど!!」

気付けば数歩後ろに追っ手が迫っていた。

クラス2以下はルクシエラさん的には取るに足らない相手かも知れないが、俺としては一体倒すのにも苦勞する相手だ。

怯えるなど言う方が無理な話。

「じゃあ高さも丁度良いしこの辺りにしましょう」

懐に手をいれ、取り出すのは緑色と褐色2つの魔石。

それをぽいっと放り投げると同時にルクシエラさんが叫ぶ。

「跳びなさいっ!!」

「はいっ!?!」

内容を理解するよりも早く、途中で途切れた螺旋階段の端っこから跳びだしたルクシエラさんと、手を引かれているからついて行かざるをえず跳躍。

そのまま二人とも宙に放り出されるが身体の落下が始まるとほぼ同時に二人の真下へ平たいタイル上の足場が空中に生成され、そこに着地した。

当然全てを計算しているルクシエラさんはすとつと軽やかに。

当然何も知らされていない俺はゴチンと床にデコをぶつけて。

ルクシエラさんはくるりと踵を返してにやりと凄く嗜虐的な笑みを浮かべる。

「うふふ、楽しい楽しいアトラクションですわ!」

そして、パチンと指を1つ鳴らすと……同時にさつきまで登っていた螺旋階段のマテリアライズが解除され、消滅した。

結果、二人の後を追って階段を登っていたイーヴィル達は突如足場を失う事に。当然イーヴィル達がどんどん地面へ落ちていく。

その様子を満足そうに眺めながらルクシエラさんは呟いた。

「結構数が居ましたね。盛大な紐無しバンジー大会ですわ」

「お、鬼だ……ここに鬼が居る……」

「さて、ファルマ。落ちていくイーヴィル達をよく見なさい」

「俺にはそんな猟奇的な趣味はありません」

引き気味に答える俺の首根っこをガシッと掴まえて、

「良いから、確認なさい」

と頭を足場からはみ出るまで引っ張り。

「うわ、危ないな!」

「私達の後を追ってきたのは人型のイーヴィルが大半です。対して向こうの小屋には獣型や鳥型が多く集まっているでしょう? ま、

中には数匹ずつひねくれ者も居ますけど」

「それが一体?」

「イーヴィルが何処からやってくるのか、何が原因で発生するのかわからない事ではないのですけれど。イーヴィルの特性、貴方もご存じでしょうか?」

「あー、えっと、直情的といふかなんというか」

「具体的に言えば、金、魔力、女に目がありません」

「もっとオブラートに包んでっ!!」

「大体鳥型は金品を狙います。対して獣型は殆どが魔石、或いは魔力を豊富に蓄えた生物を襲うことが多いです。そして人型は金品や人間そのものを狙うことが半々と言った所。このようにイーヴィルは欲望と煩惱の塊なのです」

「そ、そうですね……」

「そんな訳で、この絶世の美女である私が周囲に目立つモノも何も無い開けた土地で、魔力とはした金をばらまけば必然的にイーヴィルが集まってくるのです」

自分で美女とか言い出してる所には突っ込まないのが最早伝統だろう。

「そろそろ頃合いですわね」

ルクシエラさんが下を見ながら呟く。

気がつけば、眼下の区画にはイーヴィルが大量に集まりひしめき合っていた。流石に千は行かないだろうが数百くらいは居そうだ。

そして、そうやってルクシエラさんに吊られて下を見たことで漸く、今までマテリアライズしてきたこの区画のストーンヘンジ的建造物の意味を理解する。

「ここ一体が巨大な魔法陣!? でも随分簡素な……」

それは、魔法陣と呼ぶには余りにもシンプルすぎる図形。

円形の中にたった3つの記号が設置され、それぞれの内容も、魔法に書いて学んだことがあれば子供でも判るような余りにも簡素もの。属性、効果時間、範囲それぞれ一言だけで指定された魔法陣。果たしてこの図形に関して魔法陣オタクのレンがどのような見解を示すのか気になるところである。

「さあ行きますわよ!・これが『破滅の光』『強度5範囲タイプA』——」

これまた簡素な詠唱を唱え、かの大魔導が発動された。

「ルクス・エクラ!!!」

両腕を広げて放たれるのは、真っ白な光の氾濫。全てを押し流す津波のようにうねりながら、光線はプレハブ小屋の上空へと直進。

そしてプレハブ小屋の真上に到達したところで光は球体となって一端宙に留まり、方向を変更したように真下へと放出される。

巨大な魔法陣によって誘導され、放射された光の波動がやがて地面に対してドーム上に広がってゆき。群がっていたイーヴィル達を飲み込んでいった。

範囲タイプAは地面から上に向けてドーム状に魔力を放出する形式だ。

「うわぁ……相変わらずすげえ規模と火力」

俺がぺたっと足場に正座するように座り込んで地面を見下ろし感嘆していると、徐々に光のドームが広がってこちらの方まで迫ってきて——。

「つて、余波がっ！ 余波がこっちまで来てるんですけど!!」

慌ててルクシエラさんに訴えるが、ルクシエラはからかう様に笑った。

「全く、男の子ならもうちょつとどっしり構えなさい。きちんと距離を計算しています。ここに届く頃には威力も減衰して人体を害するほどの魔力は残っていません」

「あ、そうなんですか……びっくりしたあ」

俺がホッと胸をなで下ろしたその時。

「でも」

と後出しじゃんけんのようにひとつだけ、ルクシエラさんが付け加えた。

「『破滅の光』の特性上魔法は掻き消されるので、受け身の準備はしていた方がよろしくてよ」

「は?」

耳に入り込んだ情報を脳が処理する。

『破滅の光』

原初の魔力と呼ばれる特異体質の一つ。

他の魔法・魔導と競合した時、それを魔力レベルまで分解し、魔法としての構成を破壊してしまう。

脳内でそんな情報の整理整頓を追えた頃には既に、土の魔力で構成され風の魔力で浮遊していた足場は、すっかり消えて無くなっていて。

「あああああああ!!」

結局俺も紐無しバンジーに甘んじる事となるのであった。

ボスツと音を立てて、地面に俺の型ができる。

かなり軟らかい地面で助かったがそれでも痛いものは痛い。

対してルクシエラさんの方はマテリアライズの時に使った魔石に魔力を残していたのかふわふわと優雅にゆっくり降りてきて。

「ちゃんと受け身を取ればギリギリ骨折しないくらいの高さとしても計算しますわ」

「さ、さいですか……」

ぐいっと引っ張り上げられる首。

視界には辺り一面綺麗さっぱりつるぺたになった円形の空間。

イーヴィルも、ストーンヘンジ状の魔法陣も全て破滅の光が分解した様だ。

本来魔力とはそれ単体では「魔法という現象の素材」でしかなく、それそのものに何かしらの現象を引き起こす程の影響力は無い。

例えば、炎の魔力が濃い空間でも一定量・配分の魔力が一点集中することで漸く「炎が起こるといふ現象が成立」する。

そのためどんなに濃い炎の魔力であったとしてもそれそのものには熱などもなく、触れたり包まれたりしても火傷することは無い。

だが、原初の魔力は魔力そのものに特殊な現象を引き起こす作用があるのだ。

「破滅の光」の場合はそれが魔法の分解である。

そして原初の魔力を用いられた構成された魔法にもまた、原初の魔力が持つ能力が付与される。

「お掃除完了、ですわ」

ルクシエラさんはさっぱりした様子で周囲を見渡した。

一段落ついた、と俺は時計を確認してみる。

「あー。結局午前全部さぼっちゃったな……」

と、その場を去ろうとした。

——が。

「あら、何をおっしゃっていますの?」

がっとな肩を押さええられられ。

「え?」

どうということかと振り返るとルクシエラさんはここにこ笑って親指を突き立ててていくいつと自身の背後を差す。

「……………え?」

周囲を見ると言う事か? そんな事を言われても、もうこの辺り一帯は来た時みたく綺麗さっぱり何も残ってな——

「あ」

気付く。

僅かな間を置いて、好きを伺い手を振り解いてすかさずダツシユ！
「甘いですわ」

ルクシエラさんはポケットから何かを握り込み、拳の中からピンつと親指で握り込んだ何かを放つ。

転がったのは小さな魔石。

魔石は俺の進行方向に転がって、小さな、それでも決して無視は出来ない小石へと変化して。

「がっ、もっ!!」

俺は見事に蹴躓いて顔面から地面に叩き付けられた。

軟らかい土で本当に良かった。

「もう一回働けますわ♪」

「いゝゝやゝゝだああああゝゝゝ!!!」

嫌がる俺の足を背負うように抱え上げ、中央の方へずりずり引きずるルクシエラさん。

俺のバイトは、まだまだ終わりそうにない……。

26話 その粗末なモノは一体何かな……？

ある日の正午、昼休み。俺は思わずため息を吐く。

「げ、雨かよ……」

そういえば聞き流していた朝のニュースで昼過ぎから天候が崩れるとかどうか言ってた様な気がする。それはさておき、俺は普段裏庭の木陰でのんびり軽食を摂っている。だがこの空模様ではそれはできない。

あと1時間だけ待ってくれよ天気の様。

参った。さあ昼食は何処で食べよう……。

折角今日は、やつとこさメロンから解放されていつもの食事が摂れる様になったというのに！

ざつと教室を見渡す。たった九人しか居ないクラス、ドライズは自前の弁当をルクシエラさんに届けるついでに一緒に食べてくるので教室には居ない。

シャルネさんとナギさん、マナトは学食。教室に残るのはレン、リーゼ、ユウさん、エクレア、そして俺。女子四人に男一人取り残され。更に連中は四人向かい合って仲良く食事。そう、それが普段の光景なのだ。こんな空間に居てたまるか気まず過ぎるわ！

俺が普段裏庭で食事を摂っている理由はそれだ。つまり教室は使えない……。なら学食に行けよと思うかも知れないがそこは人が多すぎて五月蠅いし一人じゃ辛い。

ただ、のんびり考えても居られない。女子達が談笑を始める前にこの空間を脱出しなければ。俺は行き先も決めぬまま教室を出た。

そして顎に手をあて唸りながら廊下を歩く。

——軽食だし、もういつそこのまま校内を歩きながら食べてしまおうか。いや、十中八九教師に説教される。もう、ドライズが居るルクシエラ先輩の部室に転がり込むか？ いやそれは凄まじくリスク이다。絶対食事だけで終わらない。ルクシエラさんに厄介事を押しつけられる未来が簡単に想像出来てしまう。

「……あ。そうか。部室だ」

ふと、気付く。そうだよ、部室だ。今は俺にも部室があるじゃないか！

紆余曲折あって無理矢理部活に入れられた時は辟易としたものだが、案外メリツトもあるものだ。俺は軽い足取りで部室に向かった。とうかこれならこれからもわざわざ今後外で食べる必要は無いかもしれない。ぶっちゃけ夏場は暑い上に虫が寄ってきて不快だし冬場は寒くて指先が凍えて困っていたんだ。

良い事に気付いたモノだ、と妙にテンションが上がり。丁度廊下に人気もなかった事からはるるん気分ですわらずリズムカルに口ずさむ。

「わくわく！ ゴっはん、ゴっはん♪ ふっふふくん」

さて、完全に浮かれきっていた俺は。前方ばかりに気を取られ、この時、背後に追跡者が居た事に全く気がついていなかった。

「到着うっ！」

部室に到着し、さあ扉を開けようとしたその時。

「マジッククラフト工房」。ここがハル君が入ってる部活なのかな？」

突如背後から聞こえて来た声に、身体がビクウツと跳ねた。

「なっ、えっ!？」

バツと振り返ると。首の後ろで小さく纏められたラベンダーのような紫色の髪をふわりと靡かせて、アリスがにっこりと笑った。

「あ、アリス!? なんでここにっ……!？」

「たまたま見かけたから着いて来ちゃった」

「来ちゃったって、え？ ま、まさかとは思うけどここに来るまでずっと……?」

言葉を失う。え、何？ さっきのスキップとかハミングとか全部見られてた……!？」

「雰囲気変わったなああって思ってたけど、ドライブさんの言うとおり中身は変わってないみたいでちょっと安心しちゃったかな」

「ああああ!!」

俺は思わず頭を抱えてしゃがみ込んだ。穴があるなら入りたい気

分である。

他人には絶対に見られたくなかったのに!!

アリスはそんな俺を放っておいて、扉に手をかける。

「つて、入るの!? 一体何の用だよ!」

慌てて立ち上がった。

「折角だから見学してみようかなつて。……だめ?」

「だめでは無いだろうけど……でも別に今から活動とかしないぞ?

俺はただ昼食を摂るためだけにここに来たんだし」

「え、そうなの? お昼ご飯なら教室か食堂で食べればいいじゃないかな?」

「ぐっそ、それは……こつちにも事情があるんだよ!」

事情。ぼっち。以上。

「とりあえず、お邪魔します」

アリスは部屋に入ると、軽く全体を見渡す。細長い間取りの部屋の中央に長机が一つ設置され、壁には棚が並べられている。机が部屋の半分以上を占拠しているので、机の両脇はそれぞれ辛うじて一人通れるくらいのスペースしかない。

「おや、貴女は……」

長机の最奥に座っていた黒髪の下級生が、手元の馬鹿でかい本から入り口へ視線を移す。

「あ、居たのか。シジアン」

「ハル君、この子は?」

「この部長。まさか昼休みも部室に居るなんて思わなかった」

「部長さんなのに呼び捨て?」

シジアンが立ち上がってお辞儀をする。

「シジアンと申します。個人的な要望にて魔導工作部を設立させていただき部長の任に着いています。若輩者の身ですので後輩として接して下さるようこちらからお願いしているのです」

「一応見学希望……らしいんだけど」

「そうでしたか。大した物はお見せできませんが歓迎致します。ひとまずこちらへおかけになって下さい」

といってシジアンが座っていた向かいの席に回り椅子を引く。その丁寧な応対にアリスはきよんとんとして、二、三回瞬いたあと俺に言う。

「なんか、ハル君より随分大人っぽいね」

「なあそれ、暗に俺がガキっぽいってデイスってない？」

三つ下と比較される十六歳が居るらしい。

「あ、ご、ごめんね！　そういうつもりじゃなくて、えっと……えへへ」
笑って誤魔化された……。

「まあ、自覚はしてるけどさあ」

俺は自分の定位置に座るとだばつと机に突つ伏す。

「ドライブやつ酷いんだぜ？　君、最近寧ろ退行してないかい？
“つて”

何の拍子でそんな話題になったのか覚えては居ないが。

「短所と長所は紙一重だからね。気にしすぎることはないんじゃないかな」

アリスが俺の肩をそつと数回叩く。

「そうやって慰めてくれるのはアリスだけだよ……」

「噂には聞いていましたが、本当に先輩と仲がよろしいんですね」

狭いので机の向かい側から、俺達二人の前にお茶を差し出すシジア
ン。

「うんっ幼馴染みだからね！」

嬉しそうに明るく答えるアリス。

幼馴染みだから仲が良い。うん、何も不思議な事は無い。

その筈なのに、何故か少し違和感を感じた。

「先輩？　どうかなさいましたか？」

突然、シジアンに声をかけられて驚いた。

「え、いや、別に何も」

「ところで、普段お昼休みにはいらつしやらないのに今日はどうした
んですか？」

うっ。シジアンから投げかけられる当然の疑問。

答えづらいが、良い誤魔化し方も思いつかない。

「え、えっと、いや、昼飯を食べる場所が無くてだな」

伝えてみると、シジアン視線に憐れみの感情が加わったのを感じた。

「……先輩、もっとご友人を増やしましょうよ」

「ぐう……」

とうとう後輩にまで心配されるようになった!!

「ん? どういうことかな?」

「一緒に食事を摂る友人が居ないから教室や食堂では食事がし辛い、と仰っているのです」

「あ、事情ってそういう事だったんだ! 漸く意味が判ったかな」

「俺の事なんてどうでもいいだろ……勝手に飯食うからなっ」

俺はぶいっつとそっぽを向いて、携帯しているバックパックを漁り始めた。

「あらら、拗ねちゃったね」

「では、見学ということですし折角ですからマジックアイテムの基本であるアクセサリを何か作りましょうか。短時間で付与出来る魔法効果としてはこの辺りがありますが、何か欲しいアイテムはありますか?」

「わあ、沢山あるんだね! ん、あつ、これ! 気配を遮断するアクセサリって便利そうだね! 私、戦闘じゃ後方支援だからあるとありがたいかな!」

小さな見学会を始める二人を他所に、俺ははあつとため息を吐いた。

「ふう……色々あったけど、漸くありつけるな」

そして、昼食を一つずつ目の前に並べる。ぽて、とき、こて、つと。

「それでは、材料をこちらの棚から——え?」

「あれ? どうしたの——か、な?」

偶然視線を俺が居る方に向けたシジアンが絶句した。続いてシジアンの異変に気がつき視線を追ったアリスも言葉を失っていた。

「いただきま——ん? えっ!? なんてそんな虚ろな目でこっち見てんだよ!」

さあ今からご飯を食べようとしたら、その事に気がつき、戸惑う。

「は、ハル君……」

アリスが重そうに口を開くと、震えた声が聞こえてきた。

「その粗末なモノは一体何かな……?」

ビーフジャーキー二枚。

栄養バー一本。

マルチビタミンジュース一つ。

「俺の昼食ですけどおおおお!!?!」

昼食を粗末な物扱いされて流石に憤慨した。

「いや、え、だって、ハル君……それ、ねえ?」

「タンパク質ー(ビーフジャーキー)！ カロリー(栄養バー)、ビタミン(マルチビタミンジュース)きちんとバランス良く考えられた理想的な食事だろ!?!」

「貴方はデイストピアにでも住んでいるのですか?!?!」

普段大声を出さない筈のシジアンの叫びが狭い室内に木霊したのであった。

27話 そんなにハードル低いイベントなのかあああ!!?

シジアンは眉間に皺を寄せて額に手を当てる。

「てつきり昼食もドライズ先輩に用意して貰っているものとはばかり思っていましたか」

そんなシジアンの呟きにアリスは首を傾げた。

「どういう事かな?」

「先輩はドライズ先輩に毎晩食事を提供して貰っているのです」

「え、仲良いね」

少し待って欲しい。

「なんでそれをシジアンが知ってるんだ?」

「え、あ、風の噂に聞きました」

俺の食生活なんてどうたって良いだろうに。

一体何処からどんな噂が流れているんだ……?」

少し不安になる。

「ドライズ先輩がお弁当をルクシエラ先輩の研究室へ持って行ってらっしゃるのを何度か見かけていたので、てつきり先輩もそうだとばかり」

「いや、まあなんつーか。流石に男からお弁当作って貰うのはちよつとな」

夕食に関してはドライズからの要望でもあるから良いとして。

「しかしその食事内容はどうかと思いますが? 新鮮なモノが何一つ無いじゃないですか」

「何言ってるんだ? それが良いところじゃないか」

「と、言いますと?」

「このメニューならどれも数ヶ月は保つからな。食べ逃しても有事の際に非常食になる」

お弁当とかと違って温度管理などに気を遣わなくて良いのも利点だ。

「普段から一体何を想定して生活なされているのですか……」

文字通り非常に三食分は常に持ち歩いて居るのだが、そんなにかしい事だろうか？

「ハル君って美味しいご飯にあんまり興味ないのかな？」

「別にそういう訳じゃ無いけど」

「それじゃあ、もし私がお弁当作ってあげたら食べてくれるかな？」

「そりゃあ、好意でくれるってモノを無下にする程無神経じゃな——え？」

時が、止まる。

俺は、自分の耳に入ってきた音声情報が飲み込めずに数回口をパクパクさせた挙げ句に呻くように呟いた。

「……ごめん、何だって？」

「私がお弁当作ってきてあげるね」

再び、思考が停止。耳に入ってきた言葉を脳へと伝達させ。

「あれ？ ハル君？」

その言葉を数回反復。聞き間違い、意味の取り違えを8回ずつほど確認して。

数十秒経ったのちに、俺はガタつと立ち上がった。

「うええええええええ!!? ちょ、何言ってるのっ!!?」

「わっ!!? びっくりするから急に叫ばないで欲しいかな!!?」

「いや、だって、そんな、ええええ!!? いくらなんでもそれは、その、

いや、ちよつと待ってよ!!?」

「先輩、取り乱しすぎです。大丈夫ですか？」

シジアンに指摘され、俺はハツとする。

「……ッ!!? 大丈夫じゃ無いっ!!? 何が起こってる!!?」

「だ〜か〜ら〜、お弁当作ってきてあげるって言ってるだけかな」

『『『』で済ませる事か!!? 俺の認識の方がおかしいのか!!? 異性にお弁当作って貰うってそんなにハードル低いイベントなのかあああ!!?』』』

そんな俺の魂の叫びに、アリスは。少し頬を赤らめて視線をそらし、

「ハードル低いわけないよ。こんな事するのハル君だけだからね？」
もじもじしながらそう言った。

かなり核心に迫ったあざとい言葉に、俺は三度凍結する。

「なっ……えっ……」

そして、間の悪いことに昼休み終了を知らせる鐘の音が鳴り始めた。

「あ、もうこんな時間か。帰らないといけないね。……ハル君、大丈夫？」

チャイムの音が遠くに聞こえる。俺は驚愕の表情を浮かべたまま、呆然と突っ立っていた。

そんな俺にシジアンはチラツと横目を向けて、やれやれ首を振りため息を吐く。

「先輩のことはこちらでどうにかしておきますので、先にお戻り下さい。編入早々遅刻などとしては居心地も悪くなるでしょう？」

「そうだね。それじゃあハル君、聞こえてるか判らないけど明日は楽しみにしててねっ！」

アリスは煌めく笑顔と共にそう言い残すと、ふわりとラベンダーの髪を靡かせて部室を去って行く。

その後数分が経過した。

俺は漸く正気を取り戻し、脳の再起動が終了させて、どきつと崩れ落ちるように椅子に座って机に突っ伏す。

「いくらなんであり得ねえ……」

シジアンは頬杖を突きながら呆れた様に問いかけた。

「次の授業は大丈夫なんですか？」

「自習だから問題無い」

「そうですか」

俺は顔を上げて答えた。

「そんなに、戸惑うことなんですか？ もっと素直に喜べば良いのでは？」

シジアンは改めて本を開き、読書をしながら声を投げかけてくる。
「アリスが何を考えてるのかまるで判らない……」

本からは目を離さずに、シジアンは言葉を重ねる。

「誰だって人の心なんて判らないものです。誰かにとって理解出来ないような感情や考えでもその当人にとっては揺るぎない意志があったりする。自分の尺度だけであり得ないと判断する事は早計ではないですか?」

シジアンの言葉が、俺の脳をぐちゃぐちゃにかき混ぜていく。

「それでも、おかしいんだ。ああやって微笑みかけてくれるだけでも、俺には信じられない事なんだ。それなのにあんな事言われたら……俺は、どうすれば良いんだ?」

まるで、霧の中で必死に道を探す彷徨い人にでもなったかのような。

「……アリシアさんと何か、あつたんですか?」

シジアンの問いかけに、答える事が出来ない。

どうして俺はアリスの好意を正面から受け止める事が出来ないんだ?

× × ×

「うっ」

考えると、胸が疼く。

「先輩?」

「判らない……何も」

「……助けが、必要でしょうか?」

本に向けられていたシジアンの瞳が、俺を捉える。真剣に俺の事を慮ってくれている事が伝わってくる真っ直ぐとした眼差しだった。けれど。

「……いや、大丈夫だ」

自分の感情すら整理がつかない。

だと言うのに何故か。

「何も判らないけど……俺自身が向き合わなくちゃいけない気がする」

その気持ちだけは確かだった。

「……左様ですか」

俺の言葉を聞くと、シジアンはパタンとその大きな本を閉じた。

「先輩」

シジアンは本を片手に俺の方へ寄ってくる。

「ん？」

「この本の表紙を少しだけ触って貰えますか？」

「え？ 別に良いけど……」

言われるがままに、表紙を人差し指でちよいとつついてみる。

すると、本の表紙が一瞬だけ赤く光った。

「ありがとうございます。それから、すみませんでした」

シジアンは深々と頭を下げた。

「お、おう？」

何に対して謝罪されているのやら。

「どうか、後悔だけはなさりませんように。気持ちの向くまま、お進み下さい。ボクは、例えそれがどんな道であろうとも応援しています」

シジアンはそう言い残して先に部屋を去って行った。

27. 4話 私、トールちゃん

とある休日。時間は、十五時頃。この日は部活動を早めに切り上げたので残りは自由時間だ。俺は、折角だから野暮用——ていうかゲームの課金を済ませる為に市街地に出ていた。

その帰り道の事である。

「おいしいおいしいアイスクリームはいかがですか〜！ 色んなフルーツ味やヨーグルト味なんかもありますよ〜！」

ふいに耳に入る、心引かれるワード。

時期は初夏。だいぶ暑くなってきて冷たいモノが美味しい季節。

時間は丁度おやつ時。良い感じに小腹が減っている。

実際に買う気が無かったとしても、ついそちらの方に目が行ってしまふのは必然。

しかし、俺は少し疑問に感じた。なんか、売り子の声どっかで聞いた事があるような気がする。ちよつと高めの、なんか無理してる感じだけどもまあ聞き苦しくはない透き通った声。

そして目に入ったのは。頭をツインテールにしてミニスカートのフリフリしたウエイトレス衣装を身に付けた姿でせつせと働く親友

ドライブの姿だった。

「いらっしやいませ〜☆ はい、2つですね！ ありがとうございます
まあすっ！」

一言で表すと。//女装してバイトしてる//

余りの衝撃に俺は言語機能を一時消失した。

……拝啓、親愛なるルクシエラ先輩へ。俺の親友で貴方の義理の息子兼弟子がミニスカツインテールでアルバイトしている所に遭遇してしまいました。俺は一体どうしたらいいですか……？

元々ドライブは中性的な容姿だったし髪も長い。正直割と似合っ
ては居る。が、それを受け止められるかどうかはまた別問題だ。

「キミ可愛いね」

一般男性がドライブに呼びかけているのが聞こえた。

「えっ、そ、そんな事言われても……困っちゃいますぅ☆」

……なんかキャラ作ってるっ!!? 結構ウザめのキャラ作ってるうっ!!

さてさて親友のとんでもない姿をみて困惑していたところ、ドライズの元に一人の少女が歩み寄ってきて。

「あれ? もしかしてドライズ……君?」

白金から黒にグラデーションしている髪の色は一瞬みただけでも人物特定が容易い。最近空から降ってきて記憶喪失になり、ドライズが世話をしているクラスメイト、ユウさんだ。

ドライズの笑顔が固まった。

「……あ、あれ? 固まっちゃった? だ、大丈夫……?」

一時シャツトダウン。再起動。数十秒のローディング。まるで電子機器のように、狂った思考回路をなんとか稼働させているのだろうと想像がつく。

「えっと、どちらさまですか?」

アイツは何食わぬ顔で首を傾げた。

なるほど、確かに現時点でアイツは自身が“ドライズである”だなんて認めちゃいない。そして、こう言うのは失礼かもしれないがユウさんは非常に流されやすいタイプだ。

このまま、ドライズ自身とは全くベクトルの違う性格を演じきる事で誤魔化すつもりなのだろう。

ヤツはキラッキラ再び営業スマイルを作って、更に声を高めにして言う。

「初めまして! 私、ツールちゃんって言います☆」

「え!!? あ、あれ? ドライズ君、じゃないの……?」

「万月商店の看板娘だぞっ☆」

片手で横ピースしながらウインク。あいつ、一体何を参考にしてあんな痛々しい演技を思いついたのだろうか……。

「と、ツールちゃん?」

「美味しい美味しいヨーグルト味のアイスクリーム! これさえあれば暑い日差しも怖く無いっ! 今ならたつくさんサービスしちゃう

ぞっ☆」

勢いあるなあ。ユウさんは相当劣勢に立っている。このまま押し切れそうだ。

「え、えっと……」

「トールちゃんの愛情がたっぷり詰まった特製アイス！ お一ついかが？」

「あ、はい、頂きます……」

金属箱から専用の器具でアイスクリームをすくい取り、紙で出来たカップに盛りつけてユウさんに手渡す。そしてお金を受け取ると、ここでダメ押しの一手と言わんばかりにアイツは更なる行動を起こした。

「それじゃあおまじないをかけますねっ」

「へ、おまじない？」

「美味しくなれ、美味しくなれ、トールちゃんばわああ注入っ☆」

僕は両手でハートを象って渡したアイスに向かって突き出す。

うわあ……。

変な笑いが込み上げてきて、仕方が無かった。

「えと……」

ユウさんはトールちゃんの目論見通り何がなにやら混乱している様子だ。

そこでトールちゃんはユウさんが手に持っているアイスからプラスチックスプーンを持ち上げて、

「はい、アーン♪」

とユウさんの口へとスプーンを運んだ。ユウさんはされるがままにアイスをパクリと口に含み、

「あ、爽やかでさっぱりしてて美味しい……」

「またのご来店お待ちしてるねっ☆」

そのまま、ユウさんはアイスクリームを堪能しながら去って行く。今頃トールちゃんは内心で力強くガッツポーズをしている事だろう。

——いいよおっしやあああっ!! 凌ぎきったアアッ!!

と、澄んだイケメンボイスが余裕で脳内再生できた。
が、くいくいつとトールちゃんのエプロンの裾を何者かに引っ張られる。

「ん？」

そちらの方向を向くと、小さな女の子が僕を見上げていた。

「わたしにもあいすくりーむ一つくださいー！」

「わあ、ありがとうー！ はい、零さないように気をつけてねっ！」

とアイスを手渡し小銭を受ける。

けれど、少女はなにやら不満そうにアイスクリームを見つめて。

トールちゃんは理由が判らず困っている様子だ。俺も遠巻きに眺めながら首を傾げる。

そして、女の子は痺れを切らしたように訴えてきた。

「おまじない、してくれないの？」

「えっ」

俺は思わず吹き出した。いや、面白すぎる。

「えつと……」

トールちゃんが言い淀むと、少女は哀しそうな顔をして今にも泣き出しそうになる。

さあ。どうするトールちゃん？

墓穴を掘るとはまさにこのこと、子供の事なんて放っておいて保身に走るか？

それとも——子供の笑顔の為にあの痛々しい演技をもう一度行うか？

……いや、初めから答えは判っていた。

「美味しくなれ、美味しくなれ、トールちゃんばわああ注入っ☆」
ここで子供を裏切るようなヤツは主人公じゃ無い!!

アイツならやってくれると信じていた!!

偉いぞ、トールちゃん!!

少女はばああつと笑顔になって、

「ありがとうー！ あいすのおねえちゃん！」

と、うきうきしながら駆けていった。

子供の夢を守った、勇気ある決断だった。流石は我らが主人公。
まあ俺は爆笑させて貰っているけどね。

27. 8話　なんでこんな大繁盛してるんだよ!!

ああ、どうしてこんな事になったのだろう。恥じ入ることは無い、
勇気ある決断をしたはずだ。なのに、自分の中の大切な何かがすり
減っていつてる気がする。

元はといえばあの店長のせいだ！　僕は嫌だって言ったのに!!
内心で闇を深めていたその時。

「おねーさん！　アイスクリームくださいな！」

また、別の。今度は少年に呼び止められてしまった。

まさかと思つて周囲を見渡してみると、同じ帽子を被った少年少女
の団体が公園全体を行ったり来たりしている。……どう考えても幼
稚園の遠足的なヤツだこれ。

あはは。買い食いOKなんだね……。

「はい、どーぞ。慌てて食べて、お腹壊しちゃダメだぞっ☆」

とりあえずお金を受け取つてアイスクリームを渡して。

「……あれ？　おまじないは？」

やっぱやらないとダメだよねー！　そうだよねえ!!

「美味しくなれ、美味しくなれ、ツールちゃんぱわああ注入っ☆」

あの子が将来、変な趣味に目覚めませんように。

僕はそんな願いを込めてツールちゃんぱわあを注入した。

「っ」

ふと。何か息が詰まっているような声。もうこれ以上何が起
こつても動じない自信がついてきたけど。僕はその声の方を向いて
みる。そこでは――

「くくっ、ふっ、はあ、はあ、ふふふっ、はは、あはは」

どっかで見た事ある赤髪低身長 of 学生が腹を抱えて地面を殴りつ
けながら必死に声押し殺しつつ笑い転げていた。

……ファルマに見られてたーッ!!

雷に撃たれたような衝撃。この醜態を知り合いに見られてしまつ
ているという事実が、封印していた羞恥心を呼び覚ます。顔が暑い、
早くこの場から立ち去りたい。

でも。

「あいすくりーむくださいー！」

哀しいことに商売が軌道に乗ってしまったている!!

「はあい、少しだけ待ってねー！」

僕はすぐに営業モードに切り替えて、アイスを掬って手渡す。

「頭がきーんってしたら、おでこにカップを当てると良いかもしれな
いぞっ☆」

そして、もう言われる前にいつもの儀式をやっていく。

「美味しくなれ、美味しくなれ、トルちゃんぱわああ注入っ☆」
満足そうに去っていく子供と。

「っ！ くく、はは、ひい……ひい……ぶふっ！」

口に手を当てしやがみ込んで、それでも笑いを止められない赤いヤツ。なんか、恥ずかしさが一周回って逆に冷静になってきた。今のアイツ完全に変な人なただけど。子供達から避けられてるんだけど自覚あるのかなあれ。

とにかく堪えろ、我慢だ、僕。ここで反応したら僕がドライズだと認める事になってしまう。ファルマにバレたのはこの際もう仕方が無い。けど、まだ近くにユウさんが居る筈だ。迂闊な行動はできない！ ここはトルちゃんになりきっておくんだ……！

握り拳をぐつと強く握りこんで自分を抑える僕。

「あいすくりーむ一つー！」

それはそうとなんでこんなに子供に人気なの!? 引率の先生!

お願いだから止めて！ 僕怒らないから 〃こんな人から買い物しちやいけません!!” って言ってる!!

「あの、すみません」

僕の願いが届いたのか、両腕を子供達に引っ張られた若い女性が近づいて来る。

よしー!

〃子供達に悪影響が出るので他所に行って下さい” って言われれば不自然なくこの場から撤収出来るぞ!!

「アイスを五個ください」

なんでだよ!!

なんでこんな大繁盛してるんだよ!! どうして止めないの!?! 女装少年の痛々しいパフォーマンスをどうして止めてくれないの!?!

と心では叫びつつ、一つずつアイスを手渡して、

期待を込められた無垢でキラキラした瞳を一身に受けて……、

「美味しくなくれ、美味しくなくれ、ツールちゃんばわあ注入っ☆」
を四回繰り返す。

ああ、こぼれ落ちていく。僕の中の何かがほろほろと、崩れ去るよ
うに。僕、どうしてこんな事やってるんだっけ……? ?

そして最後に引率の先生に子供達の数だけのアイスを渡すと、ぼそ
りと耳打ちで、

「あ、私にはおまじないしなくていいので
と。そして、

「大変でしょうがお仕事、頑張ってください」

応援されてしまった……。

「あははは!! く、かはつ、くぐ、あははは!!」

もう赤いのは我慢出来ずに大爆笑してるし。子供達の引率の先生、
〃しつ、みんな近づいちゃダメよ。見つめてもダメ、ああいうのには
関わらないように〃って注意してるし。

公園で一人爆笑してる不審人物には警戒してるあたり、良識的な判
断力はあるに違いない。その上で、僕はセーフと判定されてる訳で。

あれえ、でもそれってもしかして……。

僕、普通に〃売り子の女の子〃って思われてる……? ?

男が女装して媚びたパフォーマンスしてるなんて露とも思われて
ない……? ?

子供に合わせて柔軟な対応してるいたいけなアルバイトか何かだ
と思われてるう!?!

「あっはっはっは!! ひい、ひい、くく、かははは!!」

それはそうと。いい加減腹が立ってきた。とはいえ今僕は大変不
本意ながら注目の的となっている。下手な動きは出来ない。子供に
トラウマを植え付けかねないからね。

「よおし、良い子のみんなの為にツールちゃんとおき魔法を見せちゃうぞ☆」

そう、これは暴力ではない。あくまで、演出の一環としての魔法だ！

がやがやと集まってくる子供達。期待が高まっていくのを感じる。そして僕は人差し指を立ててビシツと空を指差して叫んだ。

「あつ空に奇声を発しながら箒を乗り回す謎の魔法使いがっ!!」

こんな所に本当にアイルさんが居る訳じゃないけれど。僕の振るまいと言葉に、子供達の視線が一瞬だけ空へと移る。

この僅かな瞬間を逃しはしないっ!!

強く地面を強く蹴り出し、一瞬で赤いものとの間合いを詰める。

そして右手に魔力をかき集め、腹を抱えて蹲ってるヤツの頭部を鷲掴みにした。

「がっ!？」

『アブソリユート・ゼロ』!!』

僕の詠唱と同時に氷の魔力が解き放たれ、次の瞬間には真っ白な氷像が完成していた。

『第三氷結魔法（ニブルアイス）』は、氷の礫を相手にぶつけ、その後氷の魔力を展開し対象を少しずつ凍らせて身動きを取れなくする攻撃と拘束一体の魔法だ。しかし欠点として凍り付くまでの時間が長いという遅効性が上げられていた。この『アブソリユート・ゼロ』はその欠点を改善した、僕の固有魔法！

代償として射程をほぼ完全に捨て去りゼロ距離の相手にしか発動できないがこの速効性は他の追随を許さない！

僕は氷像を持ち上げ、何事も無かったかのように子供達の前に戻る。

そしてドスンと敢えて大きな音を立てて氷像を横へ降ろした。

「じゃじゃくん！ ツールちゃん奥義、『フレンドリーアイス』!! 氷のお友達を召喚したぞっ☆」

正確には、お友達を氷にしたんだけどね!!!

音と気配で、子供達の視線が戻ってくる。

「おおおお!!」

沸く歓声。よかった、誤魔化したようだ。

まさか戦闘用に作った魔法をこんな使い方するなんて思わなかった!
た!

折角だから僕はこのまま、氷の像となったお友達を光魔法で七色に発光させたりして子供達へのパフォーマンスを行ってみたところこれまた大盛況で。

何だかんだで子供達にも楽しんで貰えたようで良かった。

……でも次は絶対に断ろう。

僕の心のなかでだけ涙を流した。

28話 “幸せ” だよね？

夢を見た。今まで何度も見た事がある夢だ。
女の子が自分の元に駆け寄ってきて。
他愛のない会話。下らないやり取り。
その子は全てを受け入れて、笑ってくれる。
何も特別な事は無い、ありきたりな――。

『“幸せ” だよね？』

× ×

ぼうつとした意識のまま、俺は身体を起こす。

「眠……何時だ今……」

目を擦って腕時計を確認。午前4時、相変わらず日の出前。

「……起きるか」

ベッドから降りて伸びをする。

「ん……。こういう時って『良い朝だ』とか言うのがお約束だよな」
誰に話しているでもなく、しようもない独り言を呟きながらストレッチをして。

「まあでも真っ暗だし良くも悪くも無い普通の朝だと思うけど」

寝癖を整えに洗面台へ。鏡で自分の姿を確認し、苦笑。

短めに切られた紅毛が、それこそ焚火みたいにちりぢりに跳ねていた。

「うっわひっつでえ寝癖……そして冴えねえ顔」

何故か妙に早朝に目が覚めた以外はいつも通りの朝が過ぎていく。
頭から水を被り、顔を洗って寝癖を直し。欠伸を一つした。

「ふぁ……っ!？」

ふと、胸がトクツと疼き僅かな痛みを感じる。

「……っ？」

しかし、痛みは中々消えない。まるで何かを警告するように、疼き続けた。

「おはよう。今日も早起きかい？」

二段ベッドの梯子を降りながらドライズがカーテンに顔を突っ込

んでくる。

「ああ、なんか目が覚めちまって」

ゲーム画面から目を離さずに答える。

大してドライブはからかう様に笑った。

「やつぱり子供だなあ」

「朝つぱらからなんでデイスられてんの俺？」

俺は抗議するように顔を上げた。

ドライブは梯子を降りきった後、その長い髪をまとめながら言葉を続ける。

「どうせ、今日の社会科見学が楽しみで眠れなかった、とかじゃないのかい？」

「そこまでガキじゃねえよ!!」

電子ゲームをスリープモードに変えてベッドから出る。

「ていうか完全に忘れてたわ。今日は一日それだったか」

「なあんだ違ったんだ、ごめんよ。でもじゃあなんで早起きなの？」

「いや、なんか目が覚めて」

「また悪夢かい？」

× × ×

ドライブの言葉に、疑問を感じた。今朝見た夢は、悪夢だっただろうか？

「ん？ どうだったかな——良い夢だったような気がしたんだけど」

「そっか」

今日もまた、いつも通りの日常が始まっていく。

「ハル君、おはよう！」

寮の入り口で投げかけられる明るい声。

「おはよう、アリス」

アリスはこのごろ毎日、こうして寮の入り口で待っていて流石の俺も声をかけられることに慣れた。最近、ドライブは気を遣っているのか登校時間をずらしているの、ほぼ毎日アリスと二人だけで登校している。

「今日は天気も良いし気温も快適、良い朝だね！」

「良い朝でも俺は相も変わらず寝不足だけだな」

俺は歩きながらふわあと口を大きく開いてあくびをした。

「あ、今日は社会科見学だからワクワクして眠れなかったのかな？」

「それも言うわれた。そして違うから」

「そうなの？ 昔はこういうイベントすつごくはしゃいでたよね」

「昔の事は言うなって。思い出したくない事ばっかなんだからさ」

「嫌な思い出だつたんだ、ごめんね」

寮から校舎、教室まで同じ敷地内にあるから本当に短い距離しかない。そんな数分程度の僅かな時間だがこうやってアリシアと二人で登校する事に慣れてくると妙に心地よく感じてくる。

「社会科見学だけど、全校生徒合同だしハル君と一緒に見て回れないかな。あ、今日のお弁当は気合い入ってるからね！」

デイストピアの食事だと指摘された翌日から。アリスは毎日のようにお弁当を用意してくれるようになった。因みに昼食を食べる場所は天気にかかわらず部室になり、シジアンだけのけ者にするのは可哀想だとアリスは三人分弁当を持つてくる。

「いつも気合い入ってると思うんだけど」

「そう言ってくれるのはうれしいかな！ 期待しててね！」

初めはあれ程戸惑っていた俺も、今やこうした日々を当たり前の日常だと受け入れるようになっていた。

「それじゃあ、また後でね〜」

アリスは手を振りながらB組へと入って行く。

「ああ、それじゃ」

俺はぼんやりした様子で自身の教室に入り、席に着いた。頬杖を突いて窓の外を眺める。鳥たちがちゅんちゅん鳴きながら横切って。

「平和だ……」

そう漏らした言葉とは裏腹に。

俺の胸に走る小さな痛みは疼き続ける。けれど寝不足も相まって、うつらうつらと意識が朦朧として。気がつけば痛みも甘い睡魔に溶けて消えゆき。少しの間だけ意識が飛んだ。

ゆさゆさと揺れを感じる。

「もうっ、早起きしても居眠りしてたんじや意味無いじゃないか」
投げかけられる、聞き慣れた声。

「ん……ドライブ？」

「もう時間だよ、ほら起きて」

「ああ……」

ここ最近、眠くて仕方が無い。それに良い夢を見るモノだからふとした拍子につい睡魔に負けてしまう。

「君、元々よく寝る方だったけど最近は何よりも以上に眠そうだよ。疲れたりしてる？」

「え、いや……別に……」

特に心当たりは無い……気がする。

「とにかく、早く校庭に行かないと置いて行かれちゃうよ」

意識を懸命にたぐり寄せる。そう言えば、今日はホームルーム無しで授業開始時間に合わせて全校性が校庭に一端集合しなければならぬのだ。

「さ、行くよー」

俺はドライブに引きずられるように校庭へと向かう。

校庭には各学年の生徒がそれぞれクラス別に並んで立っていた。最も、皆列は崩さずとも各々談笑しており騒然としているが。四年A組の列に並ぶ。すると当然横にはB組が並んでいる訳で。ふと、少し前方の方に居たアリスがチラリとこちらを向いた。気配を感じたのだろうか。そして、目が合うと言葉はなくニコツと微笑んで小首を傾げる。

「っ……」

俺は咄嗟に視線を逸らした。

……って、なんで目逸らしてんだ俺？ 何照れてんだか。

自分に呆れながら頭を掻いた。

……そっぽ向いてるみたいでアリスに失礼じゃねえか。……あれ、でも前もこんなことがあったような……。

ふと頭に過る違和感。

……確か編入してきた時……アリスの顔、見れなかったんだよな。

でも、なんで？

つい最近の事なのに記憶が朧気で、当時の心情を思い返せない。

疑問と共に少しずつ胸の痛みが大きくなっていく。

× × × ×

何か大切な事を忘れている様な気がして気持ちが悪い。そうやって頭を悩ませていると、キーンとハウリングが鳴り意識をそちらに持って行かれる。視線を向ければ一人の教師が校庭の壇上に上がっていた。

29話　　そういう人間を貴方が集めたんですよ？

くすんだ茶髪と眉間に皺を寄せた気難しそうな表情を常にしている長身の男性。年齢は大体四十代くらいに見えるが、実際はその数倍を優に超えるらしい。所々に魔石が装飾された土色のローブと自身の身丈ほどある大きな杖を突いているのが印象的な教師。

この学園を運営し、管理する者。

大地の賢者という異名を持つ、紛れもない大魔導士。

校長兼理事長のティアロ先生だ。

「生徒諸君、良く集まってくれた」

重みのある低い声が拡声器によって校庭中に響く。

「今日は私の研究の成果たる魔石技術の基礎に触れるという名目で原石採掘場の見学と魔石製作の実習を行って貰う。魔石に関する技術はあらゆる魔導に応用ができ、非常に重要なものじゃ。みな真剣に取り組んで欲しい」

お約束とも言える、校長独自の堅苦しい前置きが耳に入ってくるが果たしてここに集った百人弱の生徒のうち果たして何人が真面目に内容を聞き入れているだろうか。

「移動には四年生のレンが考案した瞬間転移魔法陣をルーシーが大人数用に調整したモノを使う。新しい技術じゃが安全性は確認しているし、念のために魔法障壁も展開するので安心してくれ。それから、現地に到着してからの注意事項じゃが――」

なんて話ぐどぐどと続いているが。そもそも生徒達には校長の話を聞くどころではない理由があった。

「おい、テイル爺。アレをいつまでも放置するつもりか。迷惑なんだから」

壇の下から一人の上級生がティアロ校長に声をかけつつ指で差すその先には。

「魔石の採掘場になんかうちの子は誰一人連れて行かせないからなーっ!!」

毎朝日の出と共に奇声を発しながら空を飛行しては生徒達の目覚

まし時計代わりとして重宝され親しまれている最上級生主席の生徒、アイルさんが複数名の生徒を抱き締めるように側へたぐり寄せ、ノーマア・採掘場!!”とかかれたハチマキを締め “反対” と書かれた旗を掲げて猛抗議している様子だった。

尚、アイルさんが抱き締めている生徒の中にはリーゼも混じっている。

「は、離してアイル！ 授業のボイコットなんてだめよ!! ベベ、別に今更どうって事無いわ！」

と、リーゼ自身はアイルさんの行動に否定的だ。だが遠目で見るほどに全身を震えさせていて、立って居るのもやつのように窺えた。

「リーゼって確か閉所恐怖症、暗所恐怖症だもんな……そりや過保護なアイルさんなら全力で止めにかかるわ」

と俺としては非常に納得のいく光景だった。どうやらリーゼだけでなく、アイルさん達が所属していた孤児院出身の生徒達は皆同じく洞窟の類が苦手らしい。リーゼの様に、参加すること自体には前向きでも身体が全然伴っていないかったり、怯えて縮こまっていたりする子供達もいる。

それに対してティアロ校長はあー……と困った様に呻いて言葉を続けた。

「魔導士として、非常に有意義な研修になると思うのじゃが……。無理強いをするつもりはない。この学園の生徒達は私にとってすべからく皆孫子のように思っ居る。洞窟の類にトラウマがある者達は、採掘場見学の際は施設で待機し、魔石製作実習から加わる様にするといい」

校長がそう言うと、アイルさんは思案顔をして抱え込んでいた下級生達に耳打ちで確認する。そして、それくらいなら……と渋々了承した。

「さて、問題は片付いたな。事前の配慮が足りずにすまなかった……」

と小さく頭を下げるティアロ校長にここで伸びる一つの手。

「あのう……」

「どうした、アーシエ」

ティアロが指名するとB組の列先頭に並んでいたアーシエはこちら列を向いておらずおすと問いかける。

「何故エクレアが縛られているのでしょうか……」

視線の先。俺は列の最後尾に居て、前にマナトやナギさんを挟んでいるので確認するために身を乗り出すと。A組の列前方では何故かエクレアが目隠しと猿ぐつわを嵌められた状態で虜囚のように縄で拘束されていた。

「んゝつ!! んゝつ!!」

何か呻いているが当然の如く全く理解出来ない。

「レンの仕業じゃな……手荒な真似はよさんか」

校長は今、エクレアが縛られている事に気がついた様子で頭を抱えた。更に、言葉の通りよく見るとエクレアを縛っている縄はそのままレンの手元まで続いている。

「……脱走犯」

レンは例え校長相手だろうといつも通りの言葉足らずでぼそりと解答した。

「魔法陣での移動を嫌がったのじゃな……」

「いや、だったらあんな捕縛なんてしなくても前みたいに気絶させれば良いだろ……」

俺は後ろの方で呆れてそう零した。すると、レンはくるつと振り返って。

「……身体に悪い」

と、反論してきた。殆ど独り言のつもりだった自分の呟きを拾われた事に困惑していたら、

「んぐつ、ぶはっ! こんな状態で空に投げ出されたら心身両方に悪いっ!!」

どうにか藻掻いて猿ぐつわを口からズラしたエクレアが全力で叫んだ。

「ではやはり手刀で……」

ずいっとナギが半歩前に出て袖を捲り指をピンと伸ばす。

「それはもう良いってば!!!」

何処かで見たとようなやり取りが繰り返されようとしている。このままではA組は悪目立ちしてしまい他の生徒達から悪評を買いかねない。

すると、一年生の方の列から一人歩み寄って来て。

「やれやれ。世話のかかる。ティアロ様、ここはボクに任せていただきませんか?」

「し、シジアンさん!?!」

何故かシジアンをさん付けで呼ぶアーシエさんに首を傾げた。

——アイツ等知り合いなのか。

名乗りを上げたシジアンはバサツと百科事典のような分厚い本を取り出す。彼女が普段から読み込んでいるモノだ。そして、頁を捲り誰にも聞き取れないような声で小さく何かを呟く。

「開け、『異伝の七十五章 〃幻惑の魔導士〃』」

そして指先から小さな光の球を放った。光の玉はゆっくり進むとエクレアの目前でパチンと弾けるように消える。すると、エクレアは突然ゆらゆらと上体を揺らし初めて。

「ほへえ……お花畑が見えるう……」

もう、完全に素面ではない様子だった。

「え、エクレアあああ!!」

親友の異変にアーシエさんが絶叫するがシジアンはなだめるように説明した。

「安心しなさい。少し幻を見ているだけです。今なら体性感覚もマヒしているので移動の浮遊感なども感じないでしょう。というか、今まさに浮遊感を感じているかもしれません」

「あはあ……天使になったきぶうん……」

「本当に大丈夫なんですかあこれえ!?!」

「ほつとけば治りますから」

果たして、それは気絶させられて運送される事や目隠し猿ぐつわに縄で捕縛されたまま高速で空中に射出されるのと比べて 〃身体に良い〃と断言できるもののだろうか。と疑問に思ったがこの一件が

これ以上拗れても仕方が無いので黙っていた。

それとどうでも良い事だが基本的に誰を相手にしても礼儀正しいシジアンが何故かアーシェさんとエクレア相手にだけはどこか扱いがぞんざいな気がするのは何故なのだろうか……。

「ともかく、これで問題は——」

「テラあく！ ごめえくん!! またやっちゃったあく」

校長が言い切る前に。永久の森の方からトテトテ走ってくる人影の音が新しい問題呼び込んだ。

「今日はみんな居ないからあ。のんびり自分の研究に没頭できるなあって思って好き放題調子に乗ったらあ、調整間違えちゃったあ☆」

桜色の髪をツーサイドアップにした、幼女にしか見えない教員がてへつと舌先をちらつかせながら小首を傾げる。

「何故ただ実習に出かけるだけなのに次から次へと問題が発生するんじゃないの学園は!!」

そういう人間を貴方が集めたんですよ? という言葉を多くの教師生徒が飲み込んだ事は言うまでも無い。

29. 5話 二人ともギルティですわ!

「改めて収集した『不朽型』のデータを参考に弄ってみたら魔法的加護が強く効き過ぎちゃってえ、前よりすっごい事になっちゃったよお……」

俺は視線をジン先生のから、その後方である永久の森へと移して。「うっわジン先生またやりやがったああ!!」

叫んだ。またやった、というのはアレである。以前に話に出た『永久の森の植物を異常生長させてしまった』という事だ。ここはグラウンドで永久の森の入り口は近い。その入り口から既にウネウネと触手めいた異常植物が溢れ出そうとしているのだ。

「アレは我々で処理をする! 生徒諸君は下級生から順に魔法陣に入りなさい!」

校長が突いていた杖を差し向けて異常植物の方へ土の魔法を放ちながら指示を出した。校長先生の魔法により異常植物が大地の牙によって大きく削り取られる。

「ティアツ! 転移先での生徒の管理を頼むツ他の教員とルーシー、イクスはこつちの手を貸してくれ!」

その際に、教員達やルクシエラさん達へも呼びかける。

だがもう既に触手めいた異常植物が超再生を果たし、何本かグラウンドに侵入してきて生徒達に迫っており、生徒達、特に戦闘経験の少ない下級生は殆ど恐慌状態で悲鳴を上げながら巨大魔法陣へ向かっていく。

「ま、待って下さいい〜! エクレアは今まともに動ける状況では……」

酔っ払ったように夢見心地でふわふわ身体を揺らしているエクレアの側でアーシエさんが泣きそうになっていたが。

「では、失礼して」

ナギがひよいっと片手でエクレアの身体を持ち上げ、米俵のように抱え上げる。

「全力で走りますので血痕が付着する事にはご容赦ください」

※ナギの全力疾走は残像が残るレベルです。

「では、参りますっ!!」

「ほわああああ!!!?」

エクレアの悲鳴でドツブラー効果を残しながら、文字通り目にも留まらぬ速さでナギはかけていった。

「慌てず急げー! 絶対に、前の人を押しのかたりするなよー!!」

また、あるところではアイルさんが箒に足をかけて空へと舞い上がり先ほど抗議に使って居た旗を、魔法陣の方へぶんぶん振り回して誘導するも、

「〃反対〃と書かれた旗を進行方向に振るなアホウが。みんなが混乱する」

と、跳び上がった一人の上級生がアイルさんの後頭部を強打。

「ごっ!!」

アイルさんはそのまま箒からたたき落とされ、グラウンドに激突。

アイルさんはすぐさま起き上がって、自身のすぐ横に着地した同級生に詰め寄った。

「何しやがるーっ!! イクリプスウーっ!!」

が。この時放棄した旗が地面に広がってしまう。この混乱した状況でそんなモノが転がれば必然――

「うわあっ!?!」

逃げていた生徒の一人が足を取られ、転倒。それに巻き込まれドミノ倒しように次々生徒が倒れていく。

「む、しまった……」

イクリプスさんは僅かに冷や汗を浮かべる。

「きやつ!?!」

「アリスっ!!」

そのままアリスまでもが巻き込まれ、咄嗟に手を伸ばした。

「あ、ありがとハル君」

「礼を言ってる場合じゃねえって! 走れっ!!」

俺はそう言って退去方向とは反対方向に身を乗り出す。

アリスのすぐ後ろにまで異常植物の蔓……もはや触手と形容して

も過言では無い何かの一つ迫っていたのだ。

「このっ!!」

俺はアリスの前に出てマテリアライズした槍を横に薙いで触手を切り飛ばす。

だが、切られた触手断面から新たに蔓が成長し伸びる!

「嘘だろ!」

そのまま俺は触手に掴まり宙づりにされてしまった。

「ああもうっ! 格好付けといて君が捕まっちゃ世話ないでしょっ!!」

刹那、青白い閃光が走る。

ドライブスが氷で出来た白く輝く細剣を片手に触手とすれ違い、再び両断したのだ。

解放された俺は地面に受け身を取って落下し、体勢を立て直す。

じとつと切り落とされた植物を見つめて納得いかない様子で漏らした。

「流石 “破滅の光” 万能過ぎる。俺がやった事の意味とは一体……」

以前似たような事があった時は再生なんてしなかったのに、と不貞腐れる。

「愚痴って居ないで、早く立ちなさいな」

気がついたらルクシエラが横に立っていて肩をすくめて呆れていた。

「わあっ!?! いつの間にも!?!」

「ウチの愚弟が余計な事をしたせいで二次被害が起こったので尻拭いに来ましたわ」

「根本的な問題はアイルにあると思うんだが……悪いとは思っていない」

星の輝きのような光沢を持つ特徴的な黒髪。薄く開かれた瞼から覗く瞳は宵闇のような漆黒の中に鋭い輝きを宿す最上級生。ルクシエラさんの双子の弟であるイクリップスさんがルクシエラさんに対して不満げに呟いていた。

「お前が叩き落としたからこうなったんだろっ!?!」

その後ろでアイルさんが未だに文句を言っている。

「だったら貴方達二人ともギルティですわ！ とつと働きなさいなっ!!」

ルクシエラさんは腰に両腕を当て少し前屈みになり、二人を叱り飛ばすように言った。

「下級生に迷惑をかけたのは本意ではない。埋め合わせはするつもりだったがな」

イクリプスさんはそう言うで大剣を一つマテリアライズして蠢く異常植物の山に飛び込み、重さを感じさせないほど軽やかに、片腕で大剣を振るう。

『我が名は凶兆。破滅を告げる厄災の剣』——」

大剣の軌跡は、直視出来ない程の眩い閃光を残して弧を描く！

『ダイヤモンドリング』

刹那、無数の植物が輪切りになったかと思うと氾濫する光が周囲を球状に飲み込んだ。

やがて光がゆつくりと収まっていくとうねる植物の群れの中に綺麗にぽっかりと丸い空白が生まれる。言うなれば、剣技版『ルクス・エクラ』。攻撃規模が収束している分その輝きは一層眩く輝いて見えた。

「僕もお供します!!」

ドライズも剣を片手に、イクリプスさんの後へと続く。

「じゃあオレは誘導の続きを——」

と旗を拾い上げようとするアイルさん。

するとその背後に小さな影が忍び寄り、ぴよんっと軽くジャンプしながら頭をはたいた。

「だからそれは混乱するから辞めなさいって言われたでしょ!」

「てっ!? リーゼまで叩くこたねーだろー!?!」

「私達は空から『エンハンス魔法』を使ってみんなが混乱しない程度に脚力へ補助をかけるわよ!」

リーゼはそういうとアイルさんの襟首を掴んだまま歩き始める。

「ちよ、わ、判ったー! 判ったから離してくれよー! リーゼ小っ

ちえーから体勢がひでー事に——」

今にも倒れそうな程身体を反らせつつリーゼに引きずられるように去って行く。

「やれやれですわ」

ルクシエラさんは呆れた様に呟くと、くるりと俺の方に向いた。

30話 そんな現実なんてどうだつて良いよね？

「ここは私達と、ドライズで食い止めておきますわ。貴方は先に逃げなさい」

「あ、はい……」

俺は頷いたがその言葉に何処か寂しきを感じた。確かにここに残ったところで足手まといも良いところだ、それは理解している。だからこそドライズやルクシエラさんという特別な存在と自分という平凡な存在に大きな隔たりを感じたのだ。本当は力になりたい。並び立ちたいのに。そんな気持ちがそれが顔に出ていたのだろうか。

「人には役割というモノがあります。決して貴方を蔑ろにしてる訳ではありませんわ」

ルクシエラさんはそう付け加える。

「な、そ、そんな風に思つて無いですよ！」

ルクシエラさんに気を遣わせてしまった様で慌てて取り繕った。

ふと、植物の蔦が地面からせり上がりルクシエラに向かう。

「ああもう鬱陶しいですわねっ!!」

ルクシエラは蔦に片腕をかざし手の平から光の波動を放ちこれを片手間で軽く凌いだ。

「なんで地面から……あっ！ さっき俺が切った触手の落ちた方が再生したのか!?!」

「もう、とつとと片付けてやりますわ！ 私今回の実習楽しみにしていたというのに！ 自分好みの魔石を原石から見繕つて好き放題コーデイナート出来る機会なんて早々ありませんから!!」

ルクシエラは吹っ切れたように上着を投げ捨てた。マテリアライズ性だったのか捨てられた白衣は地面に落ちる前に消滅する。

「ともかく、今貴方がやるべき事はすっかり孤立してしまつたこの場からその子を連れてさっさと退避する事ですわ！ 一度格好付けて守ろうとしたんですから責任もつて最後までやりなさい!!」

「え？ その子……?」

ルクシエラさんの台詞に疑問を感じ振り向くと、そこにはアリスが居て、バツが悪そうに目を逸らした。

「ちょ、アリス!? 走れって言ったのに何でまだ居るんだよ!」

「だ、だって、ハル君が捕まっちゃって助けなきやって思ったら、今度は色んな人が来ちやうし、なんかもう状況がころころ変わりすぎてどうすれば良いのか判らなくなっちゃってね……。しかも気が付いたら包围されちゃってどうしようにもなくなっちゃった」

「え、包围? うわっホントだ!」

確認すると、周りはすっかり異常植物に囲まれてしまっていた。どうも時間を経る毎に増殖力が増しているらしい。そりゃこんな戦闘地帯真っ直中で長話をしていたら囲まれるというモノである。

「さあ、道は開きますわっ!!」

ルクシエラさんはそう言うときスイカほどの大きさの光の玉を生成しがむしやらに叩き付けるように投げつけた。光の玉は地面に衝突すると共に小爆発を起こし、周囲の異常植物だけを嚙り取る様に消滅させる。

「行こっハル君!!」

アリスは俺の手を引いた。

「あ、ああ」

後ろ髪を引かれる思いでその場を退避する。

けれど、そんな自分に嫌気が差した。ドライズやルクシエラさん達の実力は一番良く理解しているつもりだ。ここで二人を心配する必要など一切無い。それが判っていて心残りを感ずるのはただ単に自分も横に並びたかったという我が儘に過ぎない。

「気にする必要は無いんじゃないかな」

「え?」

不意に、アリスが優しく言葉を投げかけてきた。足は止めず、走り続けているが周囲の情報の全てが遮断されたような心地を感じる。アリスしか視界に入らず、ただ次の言葉を待つような、そんな感覚に支配された。

「現実なんて思うように行かないものだもん。ハル君は悪く無いよ、

あの人達が特別なだけなんだから」

「アリス？ 何を言ってる……」

× × × × × ×

手を引き先を走るアリスの顔が、緩やかにこちらを向く。慈愛に満ちた包み込む様な微笑みを浮かべ、けれど何処か蠱惑的な視線に乗せて言葉を紡ぐ。

「そんな現実なんてどうだって良いよね？ 代わりに、貴方が望む“幸せ”を……私があげるからね」

「っ……う？」

言葉が、詰まる。思考が、鈍る。そう、まるで……夢見心地の様に。「だから一緒に行こう？ 私はずっと、待ってるから……！」

胸を何かに貫かれるような、そんな感覚。五感が鈍り、手足が痺れ、けれど決して不快ではない。ただ、バクバクと心音だけが高鳴っていった。

何もかも判らなくなってしまう。アリス以外の全てが、認識出来なくなってしまう。けれど、それで良いと思える。

そうだ、これこそずっと、ずっと望んで居た――

× × × × × ×

「先輩！」

呼びかけられ、ハッと気がつく。

「あれ……？ シジアン？」

気がつけば転移魔法陣の目の前に、すぐ目の前でシジアンがこちらを見上げていた。

「……ご無事なようで何よりです」

「あ、ああ……」

なんだか、ぼんやりしている。何だか、少しだけ意識が飛んでいたような。

白昼夢の中に居たような……。

と、ぼーっとしていると、

「ほら、呆けてないでシャキッとしなきゃ！ 魔法陣起動しちゃうかな!!」

と、アリスが俺の背中を押した。

「わ、判ったから押すなって!!」

混乱するままに魔法陣へ押し込められ、そのまま転移魔法が発動した。

少しの浮遊感と共に景色は一瞬にして流れていく。そして、あつと言う間に木々立ちこめる山中に作られた広場へと到着していた。先に退避していた下級生やクラスメイトも居る。

「あつファルマさん、アリシアさん!! ええと、これで残りの四年生はリーゼさんとドライブさんだけですね?」

早速アーシャさんが迎えてくれる。が、何処か落ち着きがなく忙しない様子だ。とりあえず名前が出た二人について知っている事を伝える事にした。

「ドライブはルクシエラさん達と合流して植物と交戦。リーゼはアイルさんと連携して凝りの生徒の支援をしてたぜ。あの様子じゃ向こうが落ち着くまではこっちに来れないだろうな。ま、リーゼはそもそも残るつもりだったみてえだけど」

「で、伝達ありがとうございますっ!」

やや強ばった様子でアーシャさんが礼をし、首を傾げる。

「なんでそんなに緊張してんだ?」

「リーゼさんが不在だから私がA組も含めて四年生全体の指揮統括を行う事に……。こんな非常事態なので責任が重くてえ……」

「あー……とことんツいてないな」

「というか、こんな大変な事になってるのに当たり前の様に行事を進行するんだね。普通中止とか延期するんじゃないかな?」

アリスが真つ当な指摘をするが、それに対してはファルマが答えた。

「いやあ……ウチの学園、この程度の事で一々行事潰してたら何も出来なくなっちゃうからな……」

幸いながら? 残念ながら?

ともかく、学園の生徒にとってはこの程度の非常事態は日常茶飯事だ。唐突な事態に多少の混乱はしてもその後の対応は慣れたモノで

ある。

「責任は感じますけど、魔石製作は私の得意分野だから四年生のみんなにはコツとか色々伝授しちゃいますよ！」

異様に長い三つ編みを揺らして張り切るアーシエさんに感心する。魔石製作は先の説明の通りティアロ校長が作り出した技術体系で、まだ比較的新しい技術だ。それに、内容もそれなりに難しい。だからこそこうして実習が開かれている訳なのだが、学生の時点で魔石の製作が出来るだけでも十分評価に値する。なのに、あの控えめなアーシエさんが得意とまで言うのだこれは余程の実力だろう。

——やっぱウチの学園、そういう人達が集まってるんだよなあ。

今日は特に、自分の凡庸さを痛感している気がする。

「ふわあ……」

ふと、欠伸が出た。強い眠気を感じる。

「これから実習だって言うのに……」

そして、無事……とは言いがたい出だしだったが社会科見学は滞りなく進行していったのであった。

31話 お目が高いですねえ!

さて、波瀾万丈の出発を迎えた魔石実習も無事全生徒達が現地集合して予定通り進行する。リーゼを初めとする洞窟恐怖症の孤児院組は鉱山前の施設に待機し、俺達は鉱山内部へと入っていった。

じつとりした冷たい空気、独特な鈍い匂い。

ライトの付いたヘルメットを装備して、鉱山を進んでいく。

「坑道の環境はある程度管理されていますが外部より気温が低いです。寒ければ各自自己判断で防寒具のマテリアライズをしてください」

引率のセレスティアル先生がそう言う。

ただでさえ全校生徒100人に達さない学園で、一部の生徒が待機している状態だ。列は作りつつも全学年ごちゃ混ぜで歩いていった。

そして、俺の横を歩くアリスが両二の腕を擦りながらにつこり微笑みを浮かべて。

「はーるーくーん?」

と、明らかに何かを期待する眼差しと声色で呼びかけてきた。

「はいよ」

察した俺は防寒用のコートをマテリアライズしてアリスに羽織らせる。

「温度調整できるから、暑くなりすぎないようにしろよ?」

俺がそう言うのと、アリスは。

「うん! ありがとね、ぽかぽかだ!」

と嬉しそうにコートの袖を頬に擦り付けて笑い。その仕草に思わずドキツとして。少しでも幸福感を感じたのに、またチクリと胸に痛みが走って思わず目を逸らした。

——まただ……。なんで、胸が痛い? なんで目を逸らす?」

疑問に思いつつも、やがて坑道は過ぎ開けた場所に出る。

「到着です」

そこは、神秘的な光景が広がっていた。

赤、青、緑、紫、様々な色の鉱石が壁や地面から突出していて煌び

やかで。

まるでイルミネーションされた空間のように美しい。

「既に目視出来ているモノもありますが、色の付いた石は全て宝石の原石です。これらから各自で自由に採掘して構いません。ただし、量は配布した籠に入るまでにしてください」

セレスティアル先生の通りやすい声が鉱山に反響する。

「各種宝石には付与しやすい魔力が異なったり魔石としての適正の違いなど様々あります。ですがここでは敢えて教えません。自分の感覚で幾つか選び出してみましよう。それを後に魔石化する際に特性の説明などを解説・学習します」

と、伝えられ。

「それでは定刻になったらこの場所に集合して下さい。採掘出来る場所は広いので迷子にならないように。迷ったらすぐに緊急回線を私の携帯端末に繋げるように。以上、解散です」

セレスティアル先生の説明が終わると、生徒達はわーっと散り散りになって各々目当ての宝石を探しに行き始める。

「ハル君、私編入したばかりだからまだまだ魔法について詳しく無いんだよね。ついて行ってもいいかな？」

アリスの提案を俺は。

「勿論、構わないぜ」

二つ返事で了承する。そして二人で鉱山内を探索し……、

「どんな魔石を作るかで適正なサイズが決まってくる。マテリアライズ用の魔石みたいな〃単体で魔法を発動する〃ための魔石だと少なくとも4cmから6cm大きさは欲しいな。要するに掌サイズだ。原石のままでも魔石に出来なくは無いかツティングされたモノの方が込められる魔力が高くなる。それも踏まえると拳一つ分くらいのクラストーを探した方が良い」

魔石はマジッククラフト・マテリアライズ共に必要不可欠な代物だ。俺にもそれなりの知識がある。

「基本的に宝石として有名且つ高価な鉱石ほど魔石としてのポテンシャルは高い。……けど、この鉱山、すごいな」

「何が凄いのかな？」

「にわかのも俺でも判るくらい、有名からマイナーまで多種多様の宝石が見え隠れしてる。今回は実習だから適当に選んで良いだろうけど作った魔石を貰えるらしいから出来るだけ良いモノを採りたいよな」俺はそう言っただけで近場にひかる紫色の鉱石に触れた。

「例えばこれはアメジスト。大きなクラスターが採れ易くて比較的安価な宝石だがその分メジャーで魔石としてのポテンシャルはそこそこ良い。そして紫色は闇属性の魔力を宿しやすいからアリスにはぴったりだと思うぜ」

そう説明するとアリスは、

「ホント!? それじゃあそれ採掘してみようかな!」

と、支給された採掘道具を両手に突出している鉱石の周りを掘り始めた。

「それじゃあ俺も——」

適当に周囲を見渡し、俺の火属性の魔力と相性が良い赤色の鉱石を探して。

キラリと遠くにほのかな輝きを見出した。

「アリス、俺向こうの方掘ってくるわ」

「わ、判った! 私は採掘の続きを——石を傷つけずに掘るのって結構難しいね……」

アリスは初めての採掘に悪戦苦闘している様子だ。

俺は少しだけ離れて、壁を掘る。

そして発掘した。拳サイズの紅い原石。

「これは——」

それは初めてみるモノ。

しかし、魔力の吸収性が良く魔石の適正の高さを感じる。

基本的に有名な宝石ほど優秀な魔石になるだけに見知らぬ鉱石がこれほど高品質である事に違和感を覚えていると、

「お目が高いですねえ!」

不意に横から声をかけられたビクツとする。

「わっ、あ、アーシエさん!」

そこには、目を輝かせた4年B組委員長アーシエさんの姿があった。

「それはバーナライトという鉱石です。龍脈と呼ばれる特殊な魔力が根付いた土地でしか採れない貴重な一品！ 色合いなどの美しさはルビー等に劣る為宝石としての価値や知名度はかなり低いですが魔石原料としては最上級品ですよ！」

普段大人しくて控えめな印象を持つアーシエさんは舞うように身振りしながら饒舌に語る。

「そ、そうなんだ。文字通り『掘り出し物』を見つけちゃったな……」
ただでさえ普段は絡みの無いアーシエさんが、いつもと違うテンションでいるモノものだからややドギマギして応対する。

「はいっ！ 火属性のマジックアイテムを作るならこれ以上無い特別な原石ですよ！ 運がいいですね、よろしければ魔石化の際にはお声をかけてください！ 私が特上の一品に仕上げて見せますよ！」
「あ、ああ、よろしく……」

やがてアーシエさんは宝石よりもキラキラした瞳を向けて、ふんすと意気込んで他の生徒達の元へいく。そう言えば、実習が始まる直前にアーシエさん張り切ってたっけ。

再びアーシエさんが魔石製作技術という特別な才能を持っている事を意識してしまった。

そんな事を思い返していると、
「なんとか発掘できたあ。でも少し削れちゃった。初めてだから仕方ないよね？」

とアリスが掌サイズのアメジスト鉱石を手に近寄ってきて。

「あ、ハル君も収穫あったんだね！」

と、俺の掌の上で淡く紅い光を見せる魔石を見つめる。俺も釣られてもう一度自分が手にした原石に視線を落とし。

「……特別な原石、か」

その言葉の響きから不意に、自分がちっぽけな石ころである事を思い出してしまう。

そして、モノにすら劣等感を覚えている自分が愚かしく、浅ましく

感じた。

そんな俺の意識を。

「ねーねハル君！ まだ少し籠に余裕があるからもつと採掘手伝って欲しいな！」

とアリスが腕を引つ張って引きずり戻す。

「え、あ、うん。判った」

俺はアリスの為に彼女の属性、水と闇にあつた藍色と紫色の鉱石を探す。

ふと、ぼそり。

× × × × × ×

「……辛くて、悲しくて、理不尽な現実なんて、忘れちゃえば良いんだ。そうでしょ、ね？ だから『夢』の中においで。私、待ってるから」

× × × × × ×

アリスが何か呟いた気がする。

「ん、アリス何か言ったか？」

「ううん、なんでもない！」

一瞬、強い眠気と共に温かく心地の良い何か心の中に流れ込んで来た気がする。しかし、今はなんともない。

その後実習は滞り無く進み、俺は偶然手にした最上級の火属性魔石を手にして学園に戻る事となった。

そして――

その日の夜は驚くほどすんなりと、深い深い眠りに落ちた。

32話 無様で、醜いなあ

× × × × × × × ×

俺は×を――

アリスが笑って居る。

今まで何度も――

言葉を交わし、自分も笑う。

この×を見た日は――

ありきたりだが確かな「幸せ」の形。

――……幸せ……？

『ねえハル君』

――……声が聞こえる……。

『嫌な事は忘れちゃおう？』

ドクン。眠っている中で心臓が強く鳴った。

『貴方が望む言葉を言ってあげるね』

優しく、暖かい筈の言葉が、胸に突き刺さってくる。

『貴方が望む全てを見せてあげるね』

――………つ。

『私が貴方を……』

どうしようにも無い程――

『“幸せ”にしてあげる………！』

――………苦しい!!!

「ツはあ!!」

乱暴に上体を起こす。視界は暗闇。部屋は静寂。頬に幾つも伝う

冷たい感触。

心臓がバクバク鳴り続ける。両手が震えて、吐き気がする。

「なんだこれ……」

片手で胸ぐらをぎゅうと握り潰して、もう片方の腕に付けた時計を

確認。

午前三時。夜明けは遠い。

「……良い夢、見てた筈なのに」

夢の内容は思い出せない。ただ、心地よい睡魔の中に、甘く幸せな世界が広がっていた気がする。だというのに、最悪の目覚めだ。

「うう……」

よろめきながら、俺はベットから出る。

「薬……貰えるかな……」

何かの病気かも知れない。

幸い、意識は鮮明。動けない程でも無い。重体、重傷という感覚はなかった。だから騒ぎ立ててドライズや他の寮生を起こすのは気が咎める。ふらつきながら部屋の扉に手をかけて、寮の廊下へ。

男子生徒が住まうのは一階。同じ階の端に寮を管理している教員の部屋がある。

片腕で胸を押さえつけつつ壁に手を付きながら、引きずるように足を進めた。

すると。廊下の真ん中に、ぽつんと一つ。暗闇に紛れる、人影。

「すいません……」

誰だか判らないが、ただ、邪魔にならないように。頭を下げて、壁に貼り付くように動いて道を譲ろうとする。

けれど。

すれ違い様の事だった。

「無様で、醜いなあ」

「……は？」

それが、自分へ向けられた暴言であるという事は理解出来た。

だが、何故こんな夜中に寮の夜中で、良くもわからない人物に罵倒されるのが理解出来ない。回

らない頭のまま、視線を横に並んだ人物に向ける。

暗くてよく見えないが、青系統のローブに身を包みフードを深く被った同じ背丈くらいの人物。胸の痛みや吐き気によってマヒしていた思考回路が漸く動き出し、警告する。

おかしい。こんな時間に、こんな場所に、こんなあからさまに怪しい人物が居るなんて。

「あんだ……一体……」

胸を抑えていた腕を謎の人物へ伸ばし、フードを降ろそうとした瞬間。

謎の人物は俺の胸ぐらを掴み上げ、締め上げるように掲げた。

「がつ!？」

未だ半ば朦朧としている俺には抵抗なんて出来ない。

宙に吊り上げられ、俺は力無く足をばたつかせる。

「目の前に広がる『幻想』に浸るのは気持ち良いかもしれないけどさ」

謎の人物はそのまま、床に投げ捨てる。

「ぐっ、あっ………!」

強かに身体を打ち付け、空気の塊を吐き出した。

何もかも理解出来ないが、今自分が危険に晒されていることだけは判る。

半ば本能的に、槍をマテリアライズする。

「てめえ……っ!」

そして殆どがむしやらに、一矢報いらんと槍を突き出した。

けれど。

「自分さえ『幸せ』だったらそれで良いとでも?」

謎の人物は片腕一つで俺の槍を弾き飛ばした。

「なっ!？」

そして、よろめく俺の腹部を思い切り蹴り飛ばす。

「あっ………!？」

うめき声すら上げられず、俺は床に叩き伏せられて。

揺らぐ視界、霞んでいく思考の中で謎の人物の声だけが耳と……胸に突き刺さる。

「自分が何をしたのか。自分に何が出来なかったのか。何もかも全部忘れちゃって、ただお前にとって『都合が良い』世界の中でヘラヘラ笑うつもりかい?」

謎の人物は足元に転がる槍をつま先で蹴り上げて。浮かび上がった槍を片手で掴み取り、慣れた手つきでグルグル振り回しながら槍を

握る位置を調整し、仰向けで倒れる俺の前へ歩み寄り。

槍の切っ先が俺へ向いた。

直感する。

——殺されるツ!!

思わず目を伏した、次の瞬間。

鋭い痛みを想像した。

「……………?」

深夜の廊下は変わらず静寂に包まれていて。

俺はゆつくりと目を開いた。槍の刃がすぐ目の前まで迫っている。しかし切っ先に黒い魔力の塊が纏わり付いていて槍の進行を止めていた。

明らかに外部からの干渉を受けている。

その事実謎の人物は対して驚きもせず。

「……………蓼食う虫も好き好き、か」

ポツリとそう呟いて。くだらなさそうに、まるでゴミでも捨てるかのように槍を放り投げるとカランカランと乾いた虚しい音が廊下に木霊する。

「もしも、お前がこれ以上醜く堕ち果てると言うのなら。僕はもう二度とお前の事を許さない」

危機が去った為だろうか。それとも、死を覚悟した為だろうか。俺の思考は自分自身驚く程鮮明に澄み渡っていた。

「その時は、僕がこの手でお前を殺してやるよ」

遠く離れていく謎の人物が残した言葉。声色に聞き覚えは全く無い。ただ、その口調だけは……………聞き馴染んだ親友のものに、酷く似ていた。

そして謎の人物が自分へ突きつけた言葉が、今になって波のように押し寄せる。

——……………幻想? ……都合の良い世界?

仰向けに倒れ込んだまま、透き通った思考がぐるぐる回り出す。

まるで、霞の中に取り込まれ、消えゆこうとしていた記憶が。

忘れたくても忘れられなかった記憶が。

ずっと後悔し続けた、自分の……余りにも情けなく、醜い記憶が、鮮明に蘇る。

33話 “これからも友達でいよう”

随分と昔、幼い頃の話だ。場所は、俺の自宅。

『大事な話がしたいんだ』

俺はアリスを自室に招いていた。その行為自体は特別な事も無く幼いことから繰り返していたのだが、この日は違った。

『……その、噂で知ってるかもしれないけど。僕、別に学校に行くことになっただんだ』

当時の。今よりも、もっと子供っぽい口調で。

『そっか。寂しくなっちゃうね』

『向こうの寮に住むことになるから色々都合が合わなくなるだろうし、今までみたいにくこうやって気軽に会う事はできなくなると思うから。……だから行く前に、一つだけ伝えたい事があって』

一大決心をしていた。が、何も特別な事は無い。もう、この状況ならその内容なんて分かりきっているだろう。あまりにもありきたりな展開だ。

『ずっと、ずっと昔から……君の事が好きだった』

近所に住む幼馴染み。家族ぐるみで付き合ってきて、良く言葉も交わした。互いの家に遊びに行き、漫画やゲームを交換して貸しあったり、外に出て遊んだり。楽しい日々だった。単純で純真無垢な少年が恋に落ちるのは十分すぎた。

——……本当に良くある話だ。

『付き合ってください』

だが。……これもまた、ありきたりな話だ。

俺の言葉に、アリスは少しだけ何かを考えた後、困った様に笑った。

『ごめんね』

それが、現実だ。

『私、まだ恋愛とかそういう事、良くわからないんだ』

続く言葉が、俺を傷つけないために選ばれた言葉である事くらいは理解出来た。

『……そっか』

『だから、ハル君と付き合う事はできないかな……』

申し訳なさそうに、アリスは目を逸らす。こうなる事も、考えて居なかった訳じゃ無い。アリスが、他の誰かが好きであるという噂を聞いた事もあったから。

だからだろうか。自分で思っ居たほど、その時の俺は落ち込む事も無かった。

ただ。

思っただ。

——……やっぱ、自分なんてこんなものか。

幼馴染みだからといって漫画やゲームのように上手くいく訳では無い。

当たり前ではあるが、幼く愚かな当時の俺にはこの時漸く、それが身に染みて判った。

けれど。それは別に構わないのだ。

自分で納得もした。自分に魅力が無い事。自分に何も出来ない事。それに比べて、キラキラ輝くような人間が居る事。それに、届かない事。それを恨んだり、疎んだりはしない。自分は特別でも何でも無いのだ、なんでも思い通りに行く訳がない。

初恋が叶わないなんて、本当に良くある、物語にもならないようなありふれた話じゃないか。

納得、出来たのだ。
でも。

本当に後悔したのは。

何度も、何度もやり直したいと思っただ。

この後の事だった。

俺は、全て受け入れ、この件を丸く収めなければいけないと思っただ。

『……あはは、断るならもつと遠慮しなくて良かったんだよ？』勘弁してくれないかな？』とかさ』

なんておどけてみせて。アリスもその様子にホツとしたのか少しだけ安心したようで。

『流星にそこまで言わないよ』

と、言つて笑つた。この時の俺は知らない。俺の弱さ故に、これが最後に見るアリスの笑顔になるという事を。

『今日は話、聞いてくれてありがとう』

決して俺が言うべきで無かつた言葉を。

覚悟も何もなく、脆く弱い俺が絶対に言つてはいけなかつた言葉を。

俺は言つた。

『これからも友達でいよう』

取つて付けた言葉だつた。決して俺自身が自分で考えて、自分で紡いだ言葉では無かつた。『こういう時は、こう言うものなんだ』と。他所から借りてきた偽物の言葉だつた。

『うん。それじゃあ、また明日……学校で会おうね?』

別の学校へ行くと言つても、何もこの翌日からという訳では無い。数ヶ月後の話だつたのだ。だから、これからもまだアリスと会う機会はあつた。

しかし……。

次の日、その瞬間を迎えるまでは。俺自身変化に気づくことが無かつた。

当たり前のように生活し、当たり前のように登校し、そして……当たり前のようにアリスへ挨拶しようとして……言葉に、詰まつた。

ドクンと心臓が一つ脈打ち、呼吸が苦しくなつて、言葉が出てこない。俺は思わずその場から逃げるように立ち去り、自分の机で呼吸を整える。

自分でも訳が判らなかつた。自分なりにうまくまとめたつもりだ。望み通りには行かなかつたが、これからここを去るまで数ヶ月はこれまでと変わらずに過ぎていく筈だつた。

流星に、いくら納得したとしても昨日の今日では無意識下に戸惑いがあるのだろう。

大丈夫、明日からは普通だ。なんて事はない。

そう自分に言い聞かせ、けれど。

次の日も。

そのまた次の日も。

アリスとは言葉を交わせないまま。時間だけが過ぎていく。何で？

どうして？

どうしてこんなにも……『怖い』んだ？

遂に、アリスの顔も見ることができなくなるまでそう時間はかからなかった。俺はいつの間にかアリスを避けるようになっていた。それは全くもって『友達』を相手にするような態度では無い。友達で居ようと自分で言っておいて、あからさまに距離をとる自分の行動に罪悪感が募る。当時はただ、自分の感情すら理解できず。

アリスと向き合うことはいつまで経っても出来ないまま。日に日に募っていく『恐怖』と『罪悪感』に押しつぶされそうになって。

怖くて、苦しくて、ただ時間だけが過ぎてゆき。俺は逃げるように転校した。

随分後になって漸く、俺は己の弱さを理解する。

子供の頃の俺は、何でもできると思っていた。

子供らしい、無邪気で純粋な、何処にも根拠がない自信が背中を押して。班でリーダー役をかって出たり、委員会に進んで立候補してみたり。

でも。少しずつ、現実というモノが判ってくる。

他の人間をまとめることが出来ず、リーダーとしての器ではないと気づいて。

立候補した委員会では、競合相手へ多数決にて圧倒的な大差を見せつけられ辞退して。

それでも頑張ろうと、食いしばってみれば。

冤罪を被り、教師は他の子の発言を絶対として俺の言い分を何一つ信じてくれない。

所詮、子供の話だ。今にしてみれば一つ一つはくだらない出来事積み重ね。

幼少期の班をまとめられなかったからといってなんなのか。

委員会一つ、認められなかったからと言ってなんなのか。

冤罪だって、学校に不要なモノを誰が持ち込んだかなんていう本当
にちっぽけな内容だ。

大なり小なり、誰だって直面しうる当たり前の日常だ。
それでも。

幼少期の俺が、自分の無力さを思い知るには十分だった。

背中を押していた根拠のない自信は、失敗を重ねるごとに少しずつ
壊れていく。

そして、失恋は最後のきっかけだった。

俺は全てに納得がいったと思っただがそれと同時に自分が余りにも
ちっぽけな存在であると気づかされた。そして……『自分が特別でな
い』という現実を受け入れるだけの強さが無かったのだ。

だから、怖くなった。

自分が今まで積み重ね来た行為。それが全て滑稽で無意味なモノ
に思えて。

自分が今まで誇らしく思ってきたモノは何もかもちっぽけに見え
て。

そんな自分を、他人がどう見ているのか。どうしようにもなく怖く
なってしまった。

——…他人が、怖くなってしまった。

アリスが今まで仲良くしてくれたのは、単に長い付き合いだったか
ら気にかけてくれていただけだったのかもしれない。本当は自分の
事なんて邪魔だとか面倒だとか思っていたのかも知れない。

そんな考えが、少しずつ心を浸食する。

今まで自分を支えていたもの、それがいつの間にか無くなっていた
から。

言葉に反しアリスを避けるその振る舞いは彼女を傷つけてしまっ
たかもしれない。もしそうならば、アリスともう一度向き合ったと
き。

言葉を交わしたとき。その時に続く言葉が、拒絶の言葉だったら。
否定の言葉だったら。『もしかしたら』そんな、不毛な疑心暗鬼を打ち
消すだけの自信が何処にも残っていなかった。

どんな顔をして会えば良いのか判らない。
怖くて、前を向けない……。

そんな弱い俺なのに。あの時、後先考えずあんな言葉を口してしまっただ。

“これからも友達でいよう”

それは、自分で考えた言葉じゃない。定型文のように、何処からか借りてきた偽物の言葉。そんなものを軽々しく使ってしまったからこそ。

その責任を、果たすことが出来なかった。

小さな自分を受け入れ、そこから一步踏み出すだけの強さが無かったから。

胸に抱いた恐怖を受け入れ、責任を果たすだけの勇気が無かったから。

俺は自分からアリスを避けていたのだ。それは、逃げでしかない。余りにも酷い裏切り行為だ。

後はもう、悪循環だった。

怖くて顔を合わせる事が出来ない。そんな自分がアリスにどう思われているのか。日が経てば経つ程に、罪悪感と拒絶される恐怖は増していく。

やり直したい。こんな、アリスを裏切るような終わりなんて。

でも……。

いつしか、アリスの方から目を反らすようになった時。

——…ああ、本当に嫌われたんだな……。

そう、理解した。

当然の結末だ。

自分の言葉に責任も持てず。その弱さから勝手に怯え、約束を反故するよう逃げ出したのだ。

俺は後悔し続けた。

あの時強さがあれば、勇気があれば、もう一度アリスと向き合えた筈だ。

もつと綺麗に終わらせることが出来た筈なのに……。

けれど、どれだけ後悔しようとも。過去が変わる事なんてない。忘れる事なんてできなかった。そんな過去を、まるで『無かったこと』にでもしたいかのように。俺は『都合の良い夢』を見る様になっ
てしまったのだから。

アリスと再会し、言葉を交わす。内容なんてどうでも良い。ただ、言葉を交わした果てに過去を清算し和解する。そして、昔のように笑い合う……そんな、都合の良い夢。

夢を見ているとき、俺はそれが夢だと気付くことが出来ず。いつも……いつも、文字通り『泣くほど喜ぶ』のだ。ずっと謝りたかったと。漸くそれが出来たと。

そして、目が覚めて……夢だと気がつく。全てが妄想だと気がつく。

その度に。過去の失敗を、まるで無かった事にしようとする自分の自分勝手さとしつぽけさを思い知る……。そんな『悪夢』を、ずっと繰り返してきた筈だったのだ……。

34話 ……バカだ、俺。

「……ああ……」

思い出した。どうして忘れてしまっていたんだろう？

ずっと、ずっと、ずっとずっと後悔していた筈なのに!!

「……バカだ、俺。自分がバカだって事すら忘れてたんだから」

仲のいい幼馴染み？ そんなの、過去の話だ。

あんな終わり方を迎えて。

あれだけの事をしておいて。

アリスが、何一つ過去を糾弾しようともせず。

ずっと側に居て、微笑みかけてくれるだと？

「ふざけんなっ!!」

気がつけば天井に向かって叫んでいた。

涙が、止め処なく溢れる。

黒く淀んだ感情がどんどん膨れあがっていく。

そして、漸く気付いた。

「そっか……だから、胸が痛かったんだ……」

アリスと共に過ぎ、笑うほどに感じてきた胸の疼き。

どんどん膨れあがっていったその正体は、どうしようにも無い程の

“自己嫌悪”だった。

「本当のアリスが……笑ってくれる筈が無い。そんな当たり前の事に、どうして気がつかない？ おかしいと思っていながら、どうして受け入れてきた？」

そんな自分への問いかけも、答えなんか分かりきっていた。

あんな事をしたのに。

あんな最後を迎えたのに。

自分にそんな資格なんて無いと、思っただけなのに。

それでも……アリスの事が好きだった。

後悔で黒く潰れた初恋を。自分が悪いと理解して、自分が愚かだと理解して。それでも尚、諦める事が出来ないその弱さに嫌気が差した。

あり得る訳がないのに。

心の何処かですっと、アリスに受け入れて貰いたいなんて思ってた。

そんな資格が、何処にあるというのだ。

「アリスが微笑みかけてくれる」 アリスと一緒に居られる”そんなの、俺の幻想でしかないんだ。それも、弱くて、醜い、自分勝手な妄執なんだっ!!!」

俺は現実を、漸く思い出せた。

跳び上がるように起きる。

……なんで忘れてた!?

胸の痛みは、もう無い。

無性に走り出したくなって、そのまま寮の外へと飛び出した。

何処へ向かうでもない。

……向き合わなければいけないって、そう思った筈なのに!!

ただ、猛然と。全てを振り払うように走って。

走って、走って。

大して進んでも居ない、グラウンドの中央で。

力尽き、倒れた。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

自分がバカだとか、そんな判りきっている事はどうでも良い。

走り抜けて、無駄な力が抜けた。頭も冷えた。

今考えなければならぬ事。その整理が付く。

俺は改めて冷静に考える。

仮に。本当にアリスがああ過去の過去を寛大な心で許してくれて。この不慣れた環境に適応するために俺を頼ったとしよう。それ自体はあり得なくもない話だ。

だが、やはりあの露骨なまでに好意を示すような仕草は納得がいかない。

考えられるなら、嫌々、仕方なく接触してくるか、或いは過去の一切適切を無かった事にしてそれこそ”友達”のように振る舞うかだろう。

少なくとも『好意』と取れるような行動を何の意図も無く行うなんて考えにくい。

つまり、

「あのアリスの行動には何かしらの『意図』がある筈……」

だが、意図とは何だ？ 俺を誘惑して一体何の得があると言うのだ。

仮説。何者かが俺の過去を暴いた上で、アリスになりすます事で俺に近づこうとしている。そして何らかの目的に俺を利用する。

「何らかの目的ってなんだよ……俺は一般人だぞ？」

何も特別な事は無い。俺を突いたところで出てくるのは情けない悲鳴と僅かばかりの金品だけだろう。強いて思いつくなら……世間にその名を轟かせる大魔導師、ルクシエラさんとコネクションがある事、とかか。

「ルクシエラさんは敵も多い。俺を陥れて、誘拐とか拷問とかして揺さぶりをかける、とかか？ ……んな訳ねえだろ」

いくら面識があるとは言え俺は所詮ルクシエラさんに取っては他人なのだ。ルクシエラさんを揺さぶるにはあまりにも回りくどい。俺を狙うくらいなら、血のつながりはなくとも養子縁組をしているドライズを狙う方がよっぽど合理的である。

「そもそもあのアリスは本物なのか？」

改めて考えてみる。自分に好意を向ける事以外でアリスの言動に違和感を感じる事は無かった。それに、過去の俺の話を良く引き合いに出していたし、俺とアリスの二人だけしか知らないような事を知っていた。なりすましてそこまで演じる事が出来るのだろうか？ 仮に出来たとして、そこまでしてアリスを演じ俺に接触して何になると言うのだろうか。

「……確証はねえけど、俺にはあのアリスが偽物だなんて思えねえ」

だが、もしもアリスが本人だとするならば。尚更困った事になる。他人が何らかの目的でアリスになりすまして俺に好意を向ける振りをするならまだ説明もしやすいが。アリスが本人の意志で俺に近づく意図とは？

話は戻るが、例えば大魔導士であるルクシエラさんに取り次ぐ為の足がかりにする、とか？

「でも今までルクシエラさんを紹介してくれだなんて一言も言われなかったし、あの社会科見学の日、アリスはルクシエラさんに対して特別な人だから、って距離を取ってる感じだった」

俺は今まさに、過去を思い出すまで。完全に幻想に飲み込まれ自分に好意を向けるアリスの事を受け入れてしまっていた。取り入る、付け入るなら絶好の機会だった筈だ。なのに、アリス側からこれといって目立つアクションはない。

……いや、本当に何もなかったのだろうか？

「……夢？」

最近、アリスの夢ばかり見ていた気がする。自分が浮かれているせいでと思って納得してしまっていたが。あるいは、無意識の内に異常性を受け入れようとしていたのか。

同じような夢をそう、毎日毎日何度も見る事が普通か？

ルクシエラさんの言葉を思い出す。『夢』に干渉する魔法攻撃を受けていた……？

「でも、あの夢は昔から見ていたヤツだしな……」

後悔はずっと引きずっていた。アリスと再び出会い、和解する夢は時々、思い出すように見ていた。俺に取って都合の良い、醜い幻想そのものを体現した悪夢だった。だからこそ見る度に自己嫌悪に襲われたのだ。

「……あれ？ 今日見た夢は、本当にいつもの『あの夢』だったか？」
胸の痛みと吐き気によって飛び起きて、霧散してしまった夢の内容を記憶の底から必至にたぐり寄せる。

たしか、アリスが笑って居た。それはいつもの通りだった。

でも続く言葉が、いつもよりもずっと、甘く、絡みついてきたような。
な。

ずっと眠っていても良いと思える程に、魅入られていた様な……。

「……『幸せ』？」

ズキン、と頭に亀裂が走ったかのような痛みが広がる。

「ぐっ……」

夢の中で、全ての過去を、そして俺の心を塗りつぶす様にアリスが並べた言葉を、思い出す。

『私が貴方を、幸せにしてあげる……！』

それこそが……アリスの意図？

「意味が判らねえ。俺を“幸せ”にして、アリスに一体何の得があるっていうんだ」

浮かび上がった答えに。いまいち納得がいかない。動機がさっぱり不明だ。寧ろ恨まれて然るべきだと思ふのに。

「まだだ……あと少し、何かに辿り着いてない……」

アリスが俺を幸せにする。

それで一体誰が得をするんだ？

誰が一体そんな事を望むんだ？

近づいていく。

「……え？」

余りにも荒唐無稽で、けれど。妙に確信めいた推察に。

もしも。もしもその予想が当たっていたら。

「……嘘だろ、そんなの」

そんな現実、認めたくない。

だが。

……ここは魔法も、神秘も、謎もある特別な世界で。特別な人々が集まる場所だ。

その、最悪な答えが真実であるという可能性を——否定する事はできない。

どんな奇跡も、起こってしまえば一つの“魔法”。理論は、理屈は、後から付いてくる。

「……ははっ」

俺は力無く笑った。呆れ、嘲笑を込めて。

「……本当に。そうだとしたら」

思い過ぎしであって欲しい。飛躍した妄想で。何かの間違いで。もつと、それらしい、本当の答えがあって欲しい。

「……たればで良い。見当外れだったってんなら、それが一番だ」
でも。

心の何処かで、納得してしまった。辿り着いた、その答えこそが真実である。

証拠なんて何処にもない。何処にもないが……。

手が震える。バクバクと再び心臓が高鳴って行く。

顔が、怒りにゆがんでいくのを感じた。歯がカチカチとぶつかつて。

俺はめい一杯、最大限の声で、吠えた。

「ふざけるなアツ!!」

その言葉は、二回目だ。何度言っても、言い足りない。

手にしたその答え。間違いであって欲しいその答えを潰すように拳を強く。爪が手の平に食い込み、血が流れるほどに強く握り込む。

荒げた呼吸と整えるべく息を深く吸い込んだ。

そして立ち上がろうとした時。

俺の視界に、今更のように映り込む。

「あ……」

空に輝く、満天の星々。

一つ一つが眩いほどに煌めいて、俺を見下ろす。広大なグラウンドに突っ伏して、一人であーだこーだと悩み、惑い、苦しむ自分がどれ程ちっぽけな存在か。それを、思い知らされる。あの星々はみな、特別なのだ。

夜空の闇には、輝くことの出来ない星が、幾つも、幾つも隠れて居る。

俺は徐に手を動かした。そして指先にコツンと当たる。

手にしたのは、石ころだ。

何の変哲も無い、ただ、グラウンドに転がっていた石ころだ。

特別でも何でも無い、石ころだ。

それを天に向かって放り投げた。

石ころは空を目指して真っ直ぐ飛んで行き。

進んで、進んで。

けれど空へは届かず、やがて勢いを失い。

墮ちる。呆気なく、当たり前の様に。

石ころは、俺のすぐ側に転がった。

石ころを空へ向かって投げたところで星になれる訳がない。

判りきっていた事だ。

石ころは石ころだ。何も特別な事なんて無い。それが石ころの限界だ。

でも。そうだとしても、やらずにはいられなかった。

俺は立ち上がる。

そして、自分が投げた石ころをもう一度拾い上げた。

石ころをローブのポケットに仕舞い込み、決意する。

「俺に出来る、全てをやる」

思い過ぎなら。考えすぎならそれでいい。でも、万が一この答えが真実であった時の為に。俺は覚悟を決めた。

「そうじゃないと、俺は、もう、二度と——」

続く言葉を噛み殺し、向かう先は永久の森。まずは、素材を調達しなければならぬ。

もう、都合の良い幻想に惑わされたりはしない。

向き合うんだ。己の弱さに。

35話 目が、覚めたんだ

「ふあゝあ。あれ？」

朝、ドライズが欠伸混じりに身体を起こしたのを感じる。

ベッドのカーテンがズラされ、梯子を降りてくる音。

「わ!? ファアルマ、何やってるの!？」

背後から、驚きの声が聞こえてきた。俺は勉強機のライトを付けて、定規と筆記用具、大きな白紙を広げて作業をしていた所だ。

「見りや判るだろ。マジックアイテムを作ってるんだよ」

正確には、今はその設計図を思案している段階だ。俺の机には他に、永久の森から採取してきたと植物や土、動物の骨、そして万年桜の枝などを置いていた。

「部活かい？」

「まあ、そんなとこ」

ひとまずドライズは洗面台の方へ行き、顔を洗って歯を磨く。

「それにしたってこんな朝早くから活動するなんて珍しいじゃないか」

長い髪を後頭部で縛り上げ、支度を整えたドライズが設計図を覗き込んできた。

そんなドライズに、答える。

「目が、覚めたんだ」

ドライズはその言葉をそのまま受け取って、呆れ笑いを作る。

「また早起き？ 最近どうしちゃったのさ」

「ま、色々な。でも多分これが最後になるから」

「え、そうなの？ 勿体ない。折角真人間に戻るチャンスなのに」

「うるせえ。あ、ドライズ。今度教えて欲しい魔法があるんだけどいいか？」

「ん、良いよ。でもファアルマが勉強なんて本当に珍しいじゃないか」

「勉強って訳じゃねーよ」

いつもの調子で軽口を言い合う。

そして。

「……良かった。やっといつもの調子だ」

ドライズがぼそりと何かを言った様だったがよく聞き取れなかった。

恐らくは独り言だろう。俺は作業に集中した。

時間は流れて登校時間。この日ドライズはルクシエラの部屋を掃除する日なので登校時間がずれる。俺は別れる前に一つ、ドライズに頼み事をした。

「ドライズ！ 数日中の近いうちにルクシエラさんの所に行くつもりだから、そう伝えといてくれるか」

「ん〜？ 判った〜」

その後寮の部屋を出て。廊下を過ぎ玄関先、気持ちを切り替えて寮を出る。

「おはよう、アリス」

ドアを抜けると同時に、声をかけ。いつもの場所で待っていたアリスの方は少しだけ目を大きくした。

「お、おはよ」

「なんだよ、鳩が豆鉄砲喰らった様な顔して」

「だって、ハル君の方から声かけてくるなんて珍しいから、びっくりしちゃったかな」

「挨拶しただけで驚かれる俺って一体……」

今、俺は来たるべき日に向けて準備を進めている。

だから現状アリスと問題を起こすわけにはいかない。そう思って不自然にならないよう気をつけた筈なのに。

「あれ？」

ふと、アリスは俺の前方に回り込み、俺の顔を覗き込む。

「な、なんだよ」

「なんだか今日のハル君、綺麗な目をしているね」

「突然何言ってるの!？」

瞳を覗き込まれてそんな事を面と向かって言われて照れない人物は居るだろうか。顔が熱い。視線を逸らして仰け反った。

「ていうか、俺の目は普段は濁ってるとでも言いたいのかよ!？」

「ノーコメントかなあ」

「おいっ!？」

アリスは誤魔化す様にニコツと微笑んで先に進む。

「さ、ハル君。学校、行く？ ね？」

「……ああ」

アリスが意味深な事を言っ、思わずドギマギして、結局、いつも通りだ。

——……結果オーライ、か。

俺は内心でホツとした。

けれど、やはりどうも客観的に見て自分の様子が変わっているらしい。感づかれるのも時間の問題かも知れない。準備を急がなくては。

いつもの様に、二人でのんびり校舎までの短い道のりを歩く。

「暑いねえ」

時期は初夏の終わりかけ……つまりはこれから夏本番と言った所。

もう早朝の時点から暑苦しい季節だ。

「冬が恋しいな」

「そうだねー。あつ、冬と言えばハル君。あれ覚えてるかな？」

「あれ？」

「小さかった頃、冬場に一緒につららを見つけて遊んでたよね」

「ああ……あつたな、そんなの」

子供って言うのは本当に無邪気で純粹だ。

ただのつらら一つで大いに盛り上がるし、はしゃげてしまうのだから。

確かに昔、アリスと一緒につららを探し回って遊んだ記憶がある。

「なつかしいなー」

「つららと言えば、たまに永久の森の温度設定がバグって氷河期みたいになるんだよな。その時この世のモノとは思えない程馬鹿でかいつららが出来てたりするぜ」

「何それ面白そうだね。……ところで『バグって』ってどういう意味かな？」

他愛の無いやり取りを続けながら、俺は思った。

——やっぱり、このアリスが偽物だなんて思えない……。

未だに残る淡い期待……僅かな逃げ道を自ら封鎖する。俺が考え得る、最悪のシナリオ。それを前提として立ち向かうと腹をくくるのであった。

さて、事が起こる前に済ませなければならぬ用事がある。

しかも、後の全てに関わる最優先事項だ。

昼休みが始まると同時に俺はレンの席へと向かった。

「レンっごめん！」

そして、頭を下げる。

「……？」

突然の出来事に戸惑うのはレンだけではない。まだ授業が午前の終わったばかりで教室に残っていた他のクラスメイト達もざわめき始めた。

またファルマが何かやらかしたのか、とか聞こえてくるし何やら視界の隅に黄色い影がちらつくが気にしている場合ではない。

っていうか“また”って何だよ。

このクラスでやらかしてる率なら俺よりナギとかもっと色々居ると思うんだけど!!

……と、いう言葉はぐつと飲み込んで。

「本当に、突然で迷惑なものも判ってる。無茶苦茶言ってるも判ってる。それを承知の上でお願いしたいんだ。この仕様書の魔法陣を作ってくれないか？」

そう言っただけ俺は一枚の紙をレンの机に広げた。

レンはその紙に視線を落とし、静かに持ち上げ内容を目で追う。

「後でどんな埋め合わせもするから!!」

俺はもう一度頭を下げる。言葉の内容や様子から、周囲のクラスメイトは部活動のマジックアイテム絡みだろうと予想を付けて、納得したような様子で興味を失っていった。対してレンは多くを語らない。

ただ、仕様書を読み込み、顎に手を当てて、尋ねる。

「……期限は？」

その言葉に、もの凄く答えづらい。けれど、嘘や誤魔化しは出来ない

いと観念して答えた。

「あ、明日の昼……」

「明日あつ!?!」

あの寡黙なレンが。珍しく声を荒げて戸惑った。

仕様書に書かれた内容は魔法陣の専門家であるレンでも『骨が折れる』と感じる程挑戦的なモノだという事だ。俺はそれを判つてて提示した。

「言い訳になるけど、正直、本当の意味での期限がいつになるのか判らねえんだ。ただ、数日中に俺にとつて大事なことが起こる。それまでに間に合わないといけない。だから、早ければ早い方が良い……魔法陣に関して、こんな無茶お願い出来るのはこの学園中を探してもレンしか居ないんだ！ だから、頼むっ!!」

もう一度深く頭を下げた。

レンの描く魔法陣は教師すら凌駕すると認識している。レンの力がどうしても必要だった。だから初めから頭を下げてお願いするか無かった。

「……そう」

俺の様子から、レンもただ事ではないという事を察する。少なくとも、普段の活動やら趣味やら、そういう次元の話では無いと。

レンは何やら思索して、口を開いた。

「……断ったら、どうする?」

俺は頭を下げたまま、考える。その可能性を考慮していない訳ではない。

これは、俺に取っては大切な事かも知れないが他の人間からしたら下らない拘りにしか過ぎず、知った事ではないと言われればそれまでの事なのだ。

だから、その時は……。

「困る」

その一言に尽きた。それ以上の事を言えば、自分を人質に取った脅迫になる。ここで力を借りる事が出来ないのならば、その先に自分自身がどうなろうとそれは身から出た錆である、他人は巻き込まない、

と覚悟を決めていた。

「……」

レンはもう一度仕様書に目を落とし。瞬き。

仕様書を机の隅に置いた。

鞆から描画用の白紙を取りだして、魔法陣を描くため専用の筆箱を取り出す。

そして、ペンを構え、俺に一言だけ告げる。

「……お礼、期待してる」

その言葉に、顔を上げる。

「ああ!! 俺に出来る事は何だっする!! 頼んだぜ!!」
そう言い残して俺は席に戻った。

36話 聞かないでください

放課後、俺は部室で尚も精力的にマジックアイテム製作に取り組んでいた。

「先輩、どうぞ」

シジアンがそつとお茶を差し入れてくれる。

「さんきゅーシジアン」

お礼を言うとシジアンは更に、

「作業は順調ですか？ 何か必要なモノはありますか？」

と、凄く気を遣ってくれるのだが、俺は少し後ろめたい気持ちになつた。

「あーその、気を遣ってくれるのはありがたいんだけど、今作ってるアイテム、完全に私用の為に作ってて提出とかはするつもりは無くてだな……」

そんな俺の言葉に、シジアンは優しい笑みを返してくる。

「良いんじゃないですか？ 活動は活動なんですから」

「そうか？」

「はい。それで、ボクにお手伝い出来る事は何かありませんか？」

「あー……。じゃあさ、ちよつと聞きたいんだけど。アーシエさんと知り合いなのか？」

「え？ ああ、はい。この部活で使う魔石の大半は彼女に発注して製作して貰っているんですよ。彼女はティアロ様が一目を置くほど優秀な魔石制作者ですから」

「やっぱり、そういう事か」

他クラスとはいえアーシエさんが土属性専攻でかつ、魔石製作が得意であるという事は先の社会科見学で把握している。

「早急に魔石を注文したいんだけど、出来ると思うか？」

「普通は一週間程度前から注文しておくモノですが……ボクが取りなしましょう」

「いや、迷惑をかけるつもりは……」

レンの時と同じだ。これはあくまで俺の拘り……叶わなかったら、

それで仕方ないと納得出来る。しかしシジアンは。

「部長としては、部員の精力的な活動にはきちんと支援するべきかと思えます」

理由や、目的は一切聞かない。あくまで部長という立場を建前にして、助力をしてくれると言ってくれた。

「……ありがとな」

「気にしないで下さい」

「組み込む魔法陣は明日の昼に間に合わせてくれるってレンが言っていた。使う石は——」

魔石製作は細かい打ち合わせを済ませ、俺はアイテムの作成を続ける。

夜も自室で製作の続きをして。

「さあ、残りは俺自身の仕事だ」

時間が過ぎるのが早く感じる。でも、焦って台無しにする訳にはいかない。

集中力を切らさぬよう、途中何度も自分の頬を叩いて気合いを入れた。

夜は、更けていく。

やがて、力尽きるように机に突っ伏して意識を落とした。

◇ ◇ ◇

数日後、俺は宣言通りルクシエラさんの元に訪れた。

扉をノックして、入室するとルクシエラさんは難しい顔をしているた。

俺は深々と頭を下げ、告げる。

「以前、頼って良いって言ってくれましたよね。今、貴女の力を借りたくてここへやって来ました」

「貴方がここまで大きにしますので。貴方が欲しいものは大体判っているつもりです」

全てお見通しだと言わんばかりの様子だ。

「器を出さない。用意しているのでしょうか？」

「はっ」

俺は懷に忍ばせていた「ソレ」をルクシエラさんに手渡した。ルクシエラさんは手を目の前に引き戻し、拳の中に渡された物体を確認して、僅かに目を大きくする。

「……」

それは、余りにも粗末な物体だ。俺が「ソレ」を選んだ理由を……見透かされた気がした。やがて、何かを思うようにその物体をもう一度握り込んだまま数分、ルクシエラさんは沈黙し。その後、握っていたモノを俺の方へ投げ渡す。

「これで良いのでしょうか？」

「あ、ありがとうございます！」

投げ渡されたモノを掴みとる。だがその後に予想通りの言葉が続いた。

「それを、一体何に使うつもりですか？」

その言葉への回答は決めてある。

「聞かないでください」

ルクシエラさんは目を丸くした。

「……そうですか？」

ルクシエラさんも、それ以上は追及してこない。

目的は果たせたので部屋を後にしようとする。

が、扉に手をかけたところで。もう一つだけ残っていた頼み毎を口にしようとした。

「あの、最後に一つだけいいですか？」

その言葉に、ルクシエラさんの耳がピクリと動く。

「もしも——」

俺の口が次の言葉を紡ごうとした瞬間。

ルクシエラさんはがたつと椅子を蹴り飛ばし立ち上がって。俺を睨み付けて叫ぶ。

「聞きたくありませんッ!!!」

ルクシエラさんは感情的な人間だが。ここまで怒りを露わにした様子を見た事が無かった。

「す、すみません……」

思わず俯き、萎縮する。

ルクシエラさんはハツとした様子で。

「謝って欲しい訳でもありませんわっ」

取り繕うようにぶいっとそっぽを向く。

「ええ……ならどうすれば……」

ルクシエラさんがいつも我が儘を通そうとする時と同じ気配を感じ取り少しだけホツとしつつ問いかける。

ルクシエラさんは不貞腐れた顔を作ったまま、何かを考え天井を見上げ。頭を抱えたかと思うと首を振り、やがて真剣な眼差しを向けて来た。

「まだ聞いて欲しい願いがあるとと言うのならいくらでも聞き受けましょう。けれど、一度に一つまでです。ですから、また何か頼みたいのでしたらもう一度ここに訪れなさい」

俺は目を見開く。

別れ際に思い出した用件を「最後に」と付け足して話す事なんてそんなに珍しい事でも無いはずだ。少なくとも、ごく自然に受け取ればそう重大な内容でも無いし、軽く受け流してくれるだろうと思っていた。けれどルクシエラさんの様子は異常だった。

……まるで「最後」と言った言葉が暗に「最期」という意味を含ませていた事を見抜かれているとしか思えない程に、過剰な反応だと感じた。

解答に、困る。

そんな約束、取り付けることは出来ない。

場合によっては、これが本当に最後の別れになっても構わないと考えていたから。

ルクシエラさんに頼みたかったのは……その時の後始末であったから。

考えて、俺は手をかけていたドアノブを動かした。

「待ちなさいっ！ どうして何も言わないのですか!!」

自分にできない事を口にするなんて、そんな同じ過ちを繰り返したくは無い。それがルクシエラさん相手なら尚更だ。

俺は深く、深く息を吸う。めい一杯、限界まで肺を膨らませて。
「ありがとうございましたッ!!」
投げつけるように言い捨てて、俺は部屋を後にした。

37話 “大事な話がしたい”

俺が準備をしている間、幸いにもアリスの方に目立った動きはなかった。いつも通り一緒に登校したり、どうでも良い話で笑い合ったり、食事を一緒に摂ったり、そう、幻想的な“幸せ”を演じる。幻想に浸れば浸るほどふとした瞬間に“何もかも思い過ぎじゃないかな”なんていう感情に飲み込まれそうになった。

しかしその度にあの夜、謎の人物に突きつけられた槍の矛先を思い出した。

……結局、アレが何者だったのか判らない。乱暴だったがわざわざ自分に警告をしてくれたのだ。身内の誰か、若しくはそれに雇われた何者かと言うのが妥当な線だが。

一つ、荒唐無稽な仮説がある。どんなに荒唐無稽な話も、この世界ではあり得ないと言い切ることは出来ない。だが、今それはどうでも良い、後で考えるべきことだ。

今向き合うべきは、アリスなのだから。

必要なモノは全て揃った。

俺は駆け出していた。

今日は部活動が無い日。普段通りならアリスは——
部室棟から本棟に戻って。

息を切らせながら玄関に向かうと。

そこでは、オレンジの日に照らされて佇む少女の姿があった。

「あ、ハル君」

俺は放課後になってルクシエラさんの部屋に寄っていたので他の生徒達はもう帰ってしまっていて。そんな中律儀に俺を待っていたらしい。

「ごめん、用事があった。待たせちゃったな」

「ううん。全然気にしてないよ。それじゃあ今日も、一緒に帰ろ？」

アリスと共にいつも通り、ほんの僅かな道のりを歩み出す。

そして。

俺は、切り出した。

「なあ、アリス」

「なあに、ハル君」

「この後、忙しいか？」

「ううん。特に用事はないけど……どうしたのかな？」

「〃大事な話がしたい〃」

アリスは目を丸くした。この言葉は、かつてと全く同じ。

「誰の邪魔も入らないところでな」

アリスはその言葉を受け止めるように。いつもの、可憐で柔らかい笑顔を浮かべる。

「うん、いいよ。でも、何処に行くのかな？」

「それが問題なんだよな……」

本当に誰にも邪魔されたくない俺としては誰も寄りつかないような場所にしたいのだが、この切り出してそんな場所を提案するのは流石にあまりにも怪しい。というか、普通にヤバイ奴であろう。客観的に見て襲おうとしているようにしか見えない。

「例えば、裏庭とか体育館裏とか言ったらドン引きされそうな気がする」

「うわあ、怪しいね。そんな所に連れこんで何をするつもりなのかな？」

アリスは冗談交じりに半歩退き、からかう様にやつくが、俺は真顔で答えた。

「真面目な話だよ、ホントに」

その様子に、アリスはは少しだけ寂しそうに、

「……そっか」

と呟いた後——笑顔の種類を変えた。

明るく、優しい、朗らかな笑顔から。

どこか妖しさを感じる、艶めかしい意味ありげな笑顔へ……。

「じゃあ〃永久の森〃とか、人が来ないんじゃないかな？」

続く言葉に、ゾクリと悪寒を感じる。違和感、危険を承知でそれでも何故か惹き付けられるような、蠱惑的な気配。

「えっ、いや、お前……あそこあんな事あつたばかりなんだぞ？」

「だからこそ、今なら誰も来ないんじゃないかな？ 二人つきりで、じっくりお話ができると思うよ……」

確かにアリスの言う通りで、正直な所“永久の森”というのは邪魔が入らないという点と十分な広さがあるという二点で以上無い好条件だ。だが、アリスの様子明らかに不自然で、俺の意図を全て見透かされてしまったように感じる。俺は狼狽を悟られないように取り繕って、アリスに背を向けた。

「まあ、アリスが良いならそれでいいよ」

すると、アリスは軽やかなステップで俺の前に躍り出て。

「なら、私は先に行って待ってるね」

「え？」

俺が戸惑っているうちに、またステップを踏むように背後に回ってきて、慌てて振り返ってももう姿が無い。

『急いで追いかけて来ないと、何処かに行っちゃうかも知れないから

——急いだ方が良いよ、ハル君♪』

頭の中に響く言葉。

切り出したのは俺の筈なのに、いつの間にか俺の方が誘い込まれるような形になっている。緊張が増し、冷や汗が伝った。

俺が行動を起こすことによって警戒される可能性というのは考えて居たが、これは最早警戒というか『受けて立つ』と言わんばかりの挑発……。

自然を装い、俺の意表を突くことだって出来ただろうに今まで、表向きは目立った行動を起こしてこなかったアリスがここまであからさまな態度を取ると言う事は、

アリスもまた『これで終わりにする』と覚悟を決めたのだろうか。

「君の言うとおりだ。現実って本当に思うようにいかねえよな」

俺は覚悟を決めて、永久の森へと向かった。

38話 “悪しき願い”

永久の森の環境は一週間毎に移り変わる。アリスと再会して、気がつけば一ヶ月ほど経過していた。丁度一周して、出会った頃の気候に戻っている。

……まだ、一ヶ月しか経っていない事を自覚して、驚いた。もうずっと、何ヶ月もアリスと一緒に居たような気がしていた。

繰り返しあの夢を見る度に時間の感覚が無くなっていった。

現実と夢の境界が曖昧になり、

けれど変わらず、すぐ側でアリスが笑って居る。

それだけで全てがどうでも良くなつて。

……間違い無く“幸せ”だった。

紅葉した木々に囲まれて、それでも尚満開の桜吹雪を散らせる万年桜は相変わらず浮いていた。その麓で大きな幹に背中を預け手を後ろで組み俺を待つ一人の少女は。

「ねえハル君」

俺の姿を確認すると同時に囁く。

「先に少しだけ、私の話を聞いてくれないかな？」

俺はこくりと頷いた。

「昔は、私達も色々あったよね」

続くアリスの言葉を俺は静かに受け止める。

「昔はね、私にも色々事情があったの。だから無責任な事は言えなかった。でも今は違う」

——もう、辞めてくれ……。

自分の顔が歪むのを感じる。悔しさに、目尻に涙が浮かぶ。

「ハル君の事、嫌いだった訳じゃないよ。だからこうしてもう一度会えて本当に嬉しかった。あの時傷つけたんじゃ無いかなってずっと後悔してたから」

——……もう、それ以上…… “聞きたかった言葉” を並べないでくれっ!!

そう、叫びたかった。けれど。判っている。自分にそんな事を言う

資格なんて何処にも無いと。俺に出来るのはただ、一つ一つが鋭利な刃物のように胸に食い込んでくるその言葉を黙って受け止めるしかない。

「ハル君……大好き。……私からはそれだけ」

胸が張り裂けそうだ。もう、消えてしまいたい。もしも、もしも過去に戻れるのなら。

その時の自分に槍を突きつけて、串刺しにしてやりたい。

自己嫌悪でどうにかなってしまいたいそうさ。

でも、言わないといけない。

俺は必死に言葉を絞り出した。

「ごめんよ……アリス……」

溢れきった涙が頬を伝う。

「俺には、謝る事しかできない……」

アリスは哀しそうに、或いは憐れそうに俺の顔を覗き込む。

「どうしてそんなに哀しい顔をするのかな？ どうして受け入れてくれないのかな？ 君が私の手を取れば、それが一番幸せな筈なのに。何度でも、幾つでも、君が望む言葉を、君が欲しいものを、送ってあげられるのに！」

俺は涙を絞り落とした。そして、力強く眼を開く。どんなに醜くて、どんなに愚かしくとも。自分自身で「夢」を終わらせなければならぬと誓ったのだ。ケジメを、付けなければならぬのだ。

「君は……俺が生み出した『悪しき願』だから」

アリスは恐らく偽物なんかじゃ無く本人だろう、と推察した。すると、アリスの言動に違和感が生じる。ならば、『何者かが何らかの意図で』アリスの心を歪めた——洗脳したと考えるのが妥当だ。

ならば、それは誰なのか？

アリスが俺に幸せを与えてくれる。それで誰が得をするのか？

自分自身しかいない、と俺は結論づけた。

全ては自分の弱さから始まったのだと。俺が、『アリスというイーヴィルを産み出してしまったのだ』と、考えた。イーヴィルがどんな存在なのかは判っていない部分が多い。だから、根拠なんて殆ど無

い。推理というよりは、妄想に近い。

だが、

「ハル君……」

何をバカな事を、と笑い飛ばして欲しかった。

これが真相だとしたらあまりにも醜く、馬鹿馬鹿しい。

初恋をいつまでも引きずって、その挙げ句に当の本人を歪めて。

「自分に都合の良い」世界に浸っていた？

人一人の人格を、人生をねじ曲げて、染め上げて、それだけの罪を犯して。

ヘラヘラ、笑っていた？

……最低も、良いところだ。

「やつぱり、そこまで気付いてたんだね。おかしいと思ったんだ。突然、私の『夢』を見てくれなくなったんだもん」

観念したように、けれどとても寂しそうに、哀しそうにアリスはため息を吐く。

「哀しいね。私は君の願いのものなんだよ？　なんで否定しようとするの？　誰だって人を好きになるもの。誰だってあの子と一緒にになりたいとか、あの子を手に入れたいとか思うもの。その願い、その想いは決して悪いものなんかじゃないよね？」

「そうだとしても、他人の心をねじ曲げてまで叶えて良い願いなんてありはしない。そんなの、ただの洗脳じゃないか……」

過去は変わらない。

あの失敗も、後悔も無かった事にはなりはしない。ただ、そんな現実から目を逸らして都合の良い夢を見続けるなんて事はできない。

「俺は自分が嫌いだ。弱い自分が、醜い自分が、特別になれない、ちっほけな自分が嫌いだ。それでもそんな自分と折り合いを付けて生きてるんだ。自分自身の、人生だから」

「どれだけ否定したって自分からは逃げられない。だから、どんなに嫌でもどうにか自分を受け入れていくしかない。」

「なのに、そんな自分が他人の自由や権利を犯してまで自分勝手な現実逃避を受け入れるなんていうんなら、そんなクス野郎にまで成り下

がってしまおうって言うのなら」

俺はアリスと距離をとり、腕を掲げる。手の平に赤い光が集まってゆき、やがて炎と共に真つ赤な槍が。先端に幅広い斧状の刃が備えられた槍が生成される。ハルベルト、或いはハルバードと呼ばれる形状の槍だ。

「俺はもう二度と、俺の事を許せなくなる」

やろうとしている事は、ただの清算だ。何も高尚な事はない。自分で撒いた種を刈り取る。マイナスをなんとかゼロにしようと足掻くだけ。なんとも情けなくて、格好悪い。

「私と、戦うつもり？」

「君から、イーヴィルとしての魔力を消し去る」

「たった一人で？」

「自分が引き起こしたんだ。俺の弱さが、醜さが君をこんな下らない事件に巻き込んでしまったんだ！俺がこの手で何とかしなくちゃ余りにも無責任じゃねえか……！」

同時に、爛々と紅く輝くローブを身に纏う。俺の戦装束、けれど今までとは違う。槍も、ローブも、新しく魔石や魔法陣が追加されていた。己の全てを賭けて作り出した最高傑作だ。

「私は、ハル君を苦しめたい訳じゃ無いから。だから、戦いたくないな。でも、ハル君が私の邪魔をしようって言うのなら、仕方ないよね？」

突如、目の前に居たはずのアリスが、闇を纏うようにして姿を消す。

「なっ!？」

警戒、気配はすぐ背後に現れた。耳元に囁かれる言葉。

「少しでも訂正してあげるね。ハル君の答えは……まあ、五〇点って所かな」

振り向き様に槍を振るう。しかしそこにはもう、アリスの姿は無い。慌てて周囲を見渡すが何処にも気配が無く。

「確かに、私は貴方達がイーヴィルと呼ぶ存在。でも、キミだけが生み出した訳じゃ無い」

夕陽が少しずつ沈んでゆき、黄昏に染まる世界で直接頭に響いてく

る声。

「言ったでしよ？ 誰かを好きになる事。誰かを欲しいと思うことは当たり前前の感情。人は誰しも人と結ばれる幸福を願う。でも、みんながみんな上手くいく訳じゃ無いよね。願いは虚しく伸ばした手は空を切って何も得られなかった。そんな人は数え切れない位居る」

再び現れる気配。ただ。影が差す。

堕ちようとしている夕陽の光を遮る何かが、空に現れた。

「そして人々は『夢』に希望を抱く。現実ではどんなに手が届かない願いも、『夢』の中なら自由に出来るから。自分の思い通りの世界。自分にとって都合の良い世界。そんな素敵な『夢』を見る事は、何も不思議な事じゃ無いよね？」

空を見上げた。

良く見知った筈の少女はその背から四つの真つ黒な翼を広げて。胸と局部だけが黒い渦のような模様様の薄布で隠され、不敵に八重歯を除かせ笑う、まさしく『悪魔』のような姿。

「そこかっ!!」

俺は槍を、空に漂うアリスに向けて投げる。紅い槍は軌跡の中で炎に包まれその形を無くし、炎の塊が二つ、砲弾の様にアリスに向かった。対してアリスはふわりと手をかざすと翼から真つ黒な魔力が帯のように流れてきて、前方集合し盾の様に炎を防ぐ。

すると黒い盾はパリンと高い音を立てて割れ、ぽろぽろと無数の石ころが弱々しく落下していった。

「へえ。私の魔力に無理矢理干渉してマテリアライズしたんだ。器用だね。私の『イーヴィル』としての魔力を消し去る”ってこういう事？」

アリスはクスクスとイタズラに笑った。

「無茶だと思っけどねえ……」

彼女は誇らしげに自分の翼の一つを撫でて。

「私は人々の願い。数多の想いが私の翼。翼を得たのが『私』だったのは、たまたま『世界の中心』にハル君が近かったから、ただそれだけ。私は君だけの悪魔じゃ無い。『私を願った』全ての人々の悪魔。」

私は、君が思っているよりもずっと大きくて、凄いの。ハル君一人の魔力じゃ、全然足りないと思うけどね」

「憐れむように、或いは諦めてくれとお願いするようにアリスは言うが。」

俺は手を掲げた。

すると、先ほど炎の弾丸として投げ放ち、消え去った筈の槍がもう一度生成される。

「判ってるさ。だからキミを倒す為に『とっておきの切り札』を用意したんだ」

そしてもう一度、思い切り振りかぶって。

『二連朱槍』ツ!!」

槍は先ほどのモノとは比べものにならない程、大きな二つの炎弾として放たれた。先ほどの炎は、本当にアリスが防げるのか。魔力を奪うマテリアライズが本当に成功するのか様子見した攻撃だ。

そして、炎の弾丸となって消えた筈の槍は三度俺の手の中で生成される。

「……その槍だけで、本当に勝てると思ってるのかな?」

けれどももう一度炎を事も無げに防いで、アリスはため息を吐く。

「勝てる勝てないじゃない。何もしないなんて、あまりにも無責任だ。動けなくなるまで戦うんだ。俺の、全てを賭けて。その先に、自分がどうなろうと、終わりまで止まる訳にはいかないっ!! それが、落とし前だろっ!!!」

俺の全てを尽くした戦いが、始まった。

39話 私が甘い“夢”を見せてあげるのに。

『二連朱槍』!!』

投擲した槍を二つの炎に変換し、火炎と爆撃で攻撃する俺の固有魔法。槍の改良によって底上げされた威力は第二階級の基礎魔法をやや上回るくらいとまちまちだが、槍を投げるだけで発動でき、連射力に優れる。その連射力に任せて手当たり次第に放つ。

『第二流水魔法』

アリスは空中で足を組み、黒い板のようなモノで炎を防いだり魔法陣を描いて水属性の基礎魔法で応戦していた。お互い、相手の出方を伺っているような状況だ。

けれど俺に比べて、アリスの方が余裕綽々といった様子である。「言ったよね? 私の魔力は私を願ったみんなのモノ。持久戦なら私が勝つからね。もっと激しくした方が良いんじゃないかな?」

アリスはにやりと怪しく笑うとパチンと指を鳴らした。

すると、防御用とは別にアリスの周囲に黒い板が4つ生成される。

『ミラーズ・ミラーージュ』

四つの黒い板の表面がキラリと輝いた。すると、板には炎の弾丸が映り込む。

「なっ!?!」

炎の弾丸は板から飛び出して来て、俺へと殺到した。これは紛れもなく俺が放った『二連朱槍』である。

「嘘だろっ!?!」

慌てて横へ飛び込むように緊急回避する。……が。

「うん、嘘なんだよね〜♪」

と、アリスはイタズラに笑った。俺が立って居た場所に殺到した炎の弾丸は地面に着弾すると同時にすうっと消えてしまう。受け身を取って起き上がろうとしていた俺がしまった、とアリスに視線を向けるがもう遅い。

「本命は、こっちかなっ!」

アリスは体勢を立て直そうとしていた俺を指差すと、炎の弾丸を吐

き出した四つの黒い板が角度を変え、飛来した。角度を変えた鏡は最早刃と遜色ない。一度回避行動を取った直後の隙を突かれたのだ、身体がついてこない。

「くっ……」

俺は咄嗟にハルベルトを大きく薙ぎ払い、正面から迫る黒い板の二枚を叩き割った。しかし脇から飛んで来た残り二枚は処理しきれず頬と脇腹を掠めて通り抜ける。

鋭利な刃に服と皮膚が引き裂かれ、鮮血が迸った。

『ミラーズ・ミラージュ』

重ねられる詠唱。再び現れる四つの黒鏡。次に放たれたのはうねる水流、水属性の基礎魔法『第二流水魔法（ウェイブ）』の幻が連続で四つ。

「幻だって判ってたら怖くねえよ！」

水流を無視して飛来する前に黒鏡を処理しようとする、そのまま幻の水流を正面から突き進む。

しかし、

「素直で可愛いね♪ でも、残念」

「なっ……がバあ!？」

つ目の水流を正面から無抵抗に受け止め、大きく仰け反る幻影の中に潜まされた現実が俺の身体を押し流し、体勢を崩し、そこにまた黒鏡が刃の様に襲いかかってきて。

「うああっ……いー」

せいぜい出来たのは、頭を下げ腕で急所を庇う事だけ。目の前で組んだ腕に四つの黒鏡が食い込む。乱暴に腕を払って、突き立った鏡をふるい落とした。

『ミラーズ・ミラージュ』！

ダメ押しと言わんばかりに三度生成される黒鏡。今度は何の幻影も生み出さず、即座に角度を変えて。すぐに攻撃が来る事は読める。しかし服が水を吸い、腕に走る鋭い痛みが感覚を鈍らせる。ここで直撃を受ければ致命傷は免れない。

『弾けるッ黒鉄の楔』——『ヘビィ・ブラスター』!!

苦肉の策に、決断する。槍を触媒に炎の弾丸では無く爆発を巻き起こすもう一つの魔法。当然、発動すれば俺自身も巻き込まれる位置関係だが、四つの刃に急所を切り刻まれる事と比べれば多少の火傷の方がマシだと咄嗟に判断したのだ。

しかし。

「……やっぱり、もう辞めようよハル君。ね？ 今からでも遅くないと思うな」

心の底から俺を案じるような、アリスの暗い声が聞こえると共に。飛来する黒鏡が空中で跡形も無く姿を消した。

「っ!!」

結局、無意味な爆発が俺の身体を吹き飛ばした。

地面に叩き付けられ思考が揺らぐ。

「くそ……」

完全に相手のペースだ。俺の判断、行動は全て裏目に出ている。いや、そう誘導されてしまっている。

身体中が痛い。腕からは血。全身に軽い火傷。装備は水によって機動性を奪われ。

戦いは始まったばかりだというのに、もう既に満身創痍である。俺は槍を杖のように地面に突いて何とか立ち上がったが視線の先にアリスは居ない。

「アリスっ!?!」

慌てて周囲を探ろうとしたとき、背後からふわりと感じる温もり。腕を回され、抱き締められたとすぐに察する。

心地よい筈なのに、冷や汗が止まらない。

「瞳を閉じて。深く呼吸して。身体を委ねてくれれば、私が甘い『夢』を見せてあげるのに。ずっとずっと『幸せ』にしてあげるのに」
アリスは耳元で囁く。吐息が耳や首筋に触れ、ゾクリと悪寒が走った。

「君の『夢』は確かに幸せだった。でも……紛れもなく、悪夢だった!!」

俺はアリスを振り払い、一步前へ。勢いを付けて槍を振るい反転。

ハルベルトの先端、斧状の刃をアリスの首筋に突き出した。アリスの首に刃が触れる瞬間、その形状が崩れ柔らかかな炎へと変質する。そして炎からポロポロと少しずつ小さな石ころがマテリアライズされては転げ落ちていく。

凶器を首に差し向けられたというのにアリスは一切動じなかった。今のハルベルトに物理的脅威は無いと理解していた様だ。そしてその上で、魔力干渉によるマテリアライズなど大した効果なんて無いと言わんばかりに、

「……そうやってちまちまと私の魔力を削って、いつまで戦うつもりなのかな？」

憐憫の色を滲ませた視線を俺に向けた。

「言つただろ。終わりまで、止まらないって!!」

俺は槍を大きく薙ぐように振るう。

魔力の刃はアリスの胴へと向かったが、刃が触れる瞬間アリスの姿は闇へと溶けて消え去った。

「なっ!？」

『健気で可愛いけどね、私は手加減なんて出来ないんだ。言つたでしよ？ 私は君だけの悪魔じゃ無い。私は沢山の、本当に沢山の人の願いを背負ってる。だから私が彼らを——そして君を“幸せ”にしてあげなくちゃいけないの』

声だけが、黄昏れる森に怪しく響く。

何かを諦めた様に。或いは覚悟を決めた様に。

言葉が降ってくる。

『痛いよね？ 苦しいよね？ ほんの少し戦っただけなのに、そんな姿になって。それでも諦めてくれないんだね？ このままどんなに傷つこうとも倒れちゃうまで戦うつもりなんだね？ そんなの……そんな酷い“現実”なんておかしいよ』

アリスは敵対者を説き伏せるような口調では無く。あくまで味方や仲間を必死に説得するような口振りで言葉を重ねる。

短絡的で、意志が殆ど無い低級のイーヴィル達とは格がまるで違った。

彼女には明確に意志がある。自分が「人々の願い」であるという自覚と矜持。

気配を感じた。

アリスがいつの間にか、万年桜の前に浮遊していた。

「本当はもつと自然に、安らかに眠って欲しかったな。私を願ったのはハル君自身なんだから、絶対受け入れてくれると思ったんだけどな」

アリシアは切なそうに涙を零す。

「でも、もう終わりにするからね」

突如、大気がざわめく。

「なんだっ!？」

周囲の木々が、万年桜が激しく揺れ、木の葉と桜の花弁が黄昏の中に舞い散って。

アリシアの翼から闇が……闇としか形容出来ない黒い何かは滲み出す！

「私の全てを見せてあげるね」

球状に広がる闇の中心でアリシアは翼と両腕を大きく広げた。

40話 『ナイトメア・ダークマインド』

四つの翼を広げたアリスから、黒い魔力が溢れ、零れる様に流れて広がっていく。

彼女は、唱える。

『司るは性欲の夢』

アリスアが宿したイーヴイルとしての権能。

『全ての“現実”を隠してあげるね。幸せな“夢”を見せてあげるね』

数多の集いし願いが生み出した異質な魔導。

『甘い甘い悪夢の世界で、私が“願い”を叶えてあげるッ!!』

ダムが決壊したように。彼女から零れていた闇が奔流となって全てを飲み込み、その魔導が発動する!!

『ナイトメア・ダークマインド』!!』

黄金の空は閉ざされ、全ての光が遮られた。

鎮座していた筈の万年桜も、闇に吞まれて姿が見えない。

何も無い真つ暗な世界。しかし、何故か胸に走るのは安堵の感情。

安らぎ、憩い、そんな穏やかな感情が心を支配しようとする。

瞼が重くなつて、意識が優しい眠りの中へ沈もうとする。

「っー」

不幸中の幸いか。俺が意識を保つ事が出来たのは、直前の戦闘で負った傷の痛みのお陰だった。

アリスの姿は無い。ただ、見渡す限りの闇が広がる。だというのに何故か足元や自分自身の姿がハッキリと見える。

完全にアリスの魔導に取り込まれた。

ここはもう彼女の領域だ。

「ハッル君♪」

不意に聞こえる明るい声。槍と共にそちらを向けば、そこに居るのは制服を着たアリスの姿。戦闘の真つ直中だった筈だ。このアリス

は幻影だ！

『二連——』

牽制の為に俺が槍を投げようと構えたその時。そつと槍を持つ腕が引かれる。

「なっ」

視線を移せばそこにもアリスの姿。

「えへへ〜えいっ〜」

二人目のアリスが腕に抱きつくように絡みついてきて。その重みで槍を持つ腕が下がる。

バランスを崩しそうになり、思わず槍を取りこぼして。

「こっちが本体かッ 『第一閃光——』」

何とか振り解こうと反対と手で光属性の基礎魔法を放とうとする。

「そりゃっ〜」

だが、その腕もまた、重みによって引き下げられた。

「えっ……」

右を見れば、更にもう一人アリスの姿……。しかも、触れた感覚、重み、暖かさを感じ、とても幻影とは思えない。

「わ〜い〜」

そして、最初に発見し正面に捉えていたアリスが駆け込んできて。

飛びつくように抱きついてきた。

「わぷっ!?!」

既に両サイドから拘束されている状態だ。俺はそのまま押し倒され。れ。

「!?!」

強かに背面を打ち付ける事を想起して身構えたが、背中に感じたのはふわりと弾む感触。気がつけば、ベッドの上だ。三人のアリス全てに実体があり、絡まれ、身動きを封じられた状態で。

「どうかな、ハル君。『現実』じゃこんな体験出来ないよね？」

「何をしたって良いんだよ。誰にも迷惑なんてかけないからね」

「私が——私達が君を愛してあげるっ!!」

三人のアリスが、俺の頬に、俺の頬に、胸に、背中に手を伸ばしなで回しながら

ら囁く甘い言葉。ふわりと漂う甘いシャンプーの香り。嫌でも心臓が高鳴り、頬が紅潮していく。けれど。胸の疼き、自己嫌悪だけが俺の意志を繋ぎ止める。

「こんな『夢』だけは、認められねえんだよおツ!!」

拘束された状態で出来る抵抗なんてそう多くは無い。

『ヘビィ・ブラスター』!!」

俺は躊躇無く再びの自爆を選んだ。取りこぼし、すぐ側に転がっていた槍が爆発を引き起こす。炎が弾けて、俺に取りついていたら三人のアリスが霞のように姿を消す。彼女たちが居た場所に僅かばかりの水晶を残して。

焼ける肌。煤けた服。黒い煙の塊を口から吐き出して、俺は何とか起き上がった。

「分身なんて大魔導、聞いた事ねえぞ……」

散らばる水晶を拾い上げて、ぼやく。干渉マテリアライズが成功したという事はあれは紛れもなく魔法であったという証明に他ならない。

だが、魔法で人体を複製するなんて芸当は前代未聞の大魔導だ。いくらアリスが高位のイーヴイルと化したからといっても信じがたい光景だった。

爆発した槍を再びマテリアライズし、構えたところで響く声。

「『現実』じゃ無いからね。『夢』の中なら何だってできるもん」
翼を背負った悪魔の姿をしたアリスが笑いながら現れて。

「『夢』を『現実』にする魔法だとしても言うつもりか!？」

俺が漏らした推察に対して、アリスは正解と言わんばかりに笑った。

「ねえ、ハル君。次はどんな『夢』が見たい？ 美味しいモノでも一緒に食べる？ 何処かに遊びに行く？ どんな事も叶えてあげるからね。さあ……君の『幸せ』を教えて？」

暗闇に広がる、幻の景色。

左を向けば元の、万年桜の広場では到底考えられない程広大なアミューズメント施設の入り口が。右を向けば肉、魚、果実が並び、奥

には無数のテーブルとその上に盛り付けられた料理の数々。漂っていくる香ばしい匂いに思わず喉を鳴らしていそうになる。

「あ、こんなのもどうかかな?」

アリシアの言葉と共に足元の質感が瞬時に変化する。軟らかい土だったはずの地面が、乾いた紙や金属へと変化し。視線を落とせば広がるのは無数の紙幣、硬貨、宝石。

「でもでも、何でも思い通りになるのならお金なんて必要無かったかな?」

アリスは愉快そうに、いとも容易く世界の悉くを塗り替えていく。

一目見て「夢」だと判るような異様な光景。けれど、幻だなんて思えない。確かな感触、感覚。『現実』を塗り替える『夢』。何処まで続く悪夢の檻。

己のちっぽけさを痛感するには十分過ぎる程の、圧力。

「ッ」

歯を食い縛る。

もう既にアリスの術中に居るのだ。これ以上彼女に飲み込まれる訳にはいかない。

『『二連朱槍』ッ!!』

右へ、左へ、正面へ。槍は炎の弾丸へと昇華し幻想を焼き貫いていく。

建物には穴が空き、料理は焦げ落ち、紙幣は炎を灯して燃え広がる。やがてそれらは小石では無く水晶の様なモノをマテリアライズすると共に消え去っていく。先ほどからアリスがもたらす魔力の質が上がっている。考えるまでも無く向こうはまだ余力十分に思えた。

「そんなことしても無駄じゃないかな?」

アリスがパチンと、指を鳴らすだけで幻影の欠けた部分があつと言う間に復活する。

「まだ判ってくれないのかな? 君の『幸せ』は此処にあるんだよ?」

言葉と共に、翼で己を包むとアリシアの姿は闇へと溶けて消えていく。

『ミラーズ・ミラーージュ』

暗闇に囁かれる言葉。ファルマの周囲、八方向を完全に囲う様に黒鏡が出現しその一つの鏡面に星形の黒い何かが映る。

『ナイトメア・パレット』

何処からとも無く声が聞こえてくると、球技に使う様なボールくらいの大きさを星形の何かが一つ鏡から跳び出しファルマ目掛けて飛んでいく。

「っ!？」

悪寒が走り慌てて回避すると星形の何かは対面の鏡の中へと消えていく。

「なんだ今の感覚……当たったらどうなるんだ……？」

とにかく危険な事だけは本能が訴えていた。

「ねえ。『現実』はこんなにも無情で、辛いんだよ？」

刹那、ファルマを取り囲む全ての鏡面に星形の黒い塊が映る。

「嘘だろ……」

鏡を破壊しようとする暇もない。包囲された鏡から順に黒い魔力が放たれる！

『第一閃——』

攻撃を闇属性の魔法と判断して反属性の魔法で打ち消そうとするが、間に合わない。

「くそっ!!」

詠唱を中断し槍を振りかぶって走る。進行方向の鏡を、ハルベルト特有の斧状の刃で叩き壊し道を開き、鏡の包囲陣から脱出した。次の攻撃を警戒し、すぐさま転回すると鏡の包囲陣が黒い弾幕に飲み込まれたの目視する。

その直後。

「……はあ!？」

突如鏡の殆どが消え去り、俺のやや遠い前方に一つだけ取り残された。

意味が無いわけが無い。何かが来る、と身構えた次の瞬間。

一枚だけ残った鏡から殺到した黒い星の弾丸が連続で発射される

！

「どうなってるんだ!？」

直線上の攻撃、回避は容易い。ただ、横に避ければ良い。けれど。

『ダークマインド・リフレクション』

追加される詠唱。俺を逃し虚空を駆け抜ける弾丸の目前に出現する黒鏡。

弾丸は角度を付けて反射され、俺を追尾する。

「っ」

俺は槍を地面に引きずったまま走って逃げ回る。もう一度回避すればもう一度鏡が現れ、弾丸の連鎖は執拗に俺を追いかけて。既に手負いの俺に持久力は期待出来ない。根負けし弾丸に飲み込まれるのは時間の問題だ。

——もうこれ以上凌ぐのは無理があるか!？」

見切りを付けた俺は足を止め、振り返り。

「ならっ『ヘビィ・ブラスター』ッ!!」

更にもう一度黒い魔力を回避すると同時にその進行方向へ槍を投げた。槍は炎へと転じ現れた鏡に激突し、大爆発を起こす。『二連朱槍』なら弾かれたかもしれないがこの爆発には黒い鏡も耐えきれず粉々に砕け散った。そして反射される予定だった無数の弾は虚空へと消えていく。

しかし。

「っ!？」

ぞくり、と悪寒を感じ本能的に振り返る。そこに迫っていたのは、黒い星の形をした連弾。認識はできても最早回避行動は間に合わない。頭から血の気が引いていく。魔力が叩き付けられるまでの僅かな時間、視線が移ろい状況を把握する。連弾の奥に、黒い鏡。それが俺の死角に何力所にも設置され。追尾していた連弾は、囷だった。無数に放たれた弾丸の全てが追尾していたと思込んでいた。実際は、追尾していたのは一部だけ。残りは別の角度に反射され俺の死角で反射を繰り返して回りこんでいたのだ。

「ウアアアアアッ!!」

弾丸が俺の身体にぶつかり、溶けていく。

一つ受け止める度に、全身に痛みと倦怠感が走り、それが幾つもの度でも叩き付けられる。痛い、辛い、眠い。弾丸の連鎖が尽きた後も、地に伏しのたうち回った。余りの苦しみに歯を食い縛り強く目を閉じると少しだけ痛みが和らいで。

この苦痛から逃げ出すには意識を放棄してしまえば良いと無意識に訴えかけられるようだ。現実を、無限に続くとも思えてしまう『悪夢』のような苦痛へと塗り替える魔法。『現実』を否定させ『夢』へと逃げ込ませる様に誘導する魔法。それが攻撃の正体だと悟る。

「ああ……どうして？ 判ってるよね？」

宙に現れたアリシアは困惑するように、或いは憐れむように問いかける。

「う、ぐ……！ くうっ……!!」

今、鏡を見たら酷いしかめっ面が映るだろう。俺は薄く目を開き。何度目かも判らないが、槍を地面について無理矢理身体を起こし支える。

「眠れば楽になれるのに。なんで苦しもうとするのかな？ 頑固すぎるよ、ハル君。私は君のそんな姿なんて見たくない。本当はこんな事したくないのに……！」

その言葉に偽りは無いのだろう。アリスは辛そうに視線を逸らす。「もう気力も魔力も風前の灯火だよね!? それでどうして立ち上がるのかな!? この期に及んでまだ勝てると思ってるのかな!?」

必死に俺を説得するように訴えかけるアリスに。

ボロボロになったつぎはぎの言葉で答える。

「まだ……オレはまだ、出し尽くしちやいな……やりきっちゃいな
い」

槍を引きずり、地面をなぞる。その仕草に、アリスは気付いた様だ。硬貨や紙幣で埋め尽くされた地面の表面に淡く光る筋が残されていた事に。俺が逃げながら魔法陣を描こうとしていた事に。

「……なら、全部見せて」

アリスが表情を険しくする。

「私が全部受け止めてツ全部否定してツ 現実〃なんて上手くいかな
いって教えてあげるからツ!!」

アリシアはそう言い放ち、弱々しく魔法陣を描く俺を妨害もせず見
下ろす。

——…もう、限界だな……なら、ここから先は止まらないツ!!

俺は決心する。仕込みは十分だ。これ以上は俺の心身が持たない。
潰えそうになる意志に炎を灯して。

俺は最後の気力を振り絞った。

41話 これが俺の、正真正銘の全力だあッ!!

己に残る全ての力を引きずり出し、槍を大きく振るって持ち上げる。

『求めるは第四の叡智、制するは炎』ッ!!』

地面に刻まれた紅い光の筋は一つに繋がりを構成。そして紅い軌跡を空中に残しながら槍を縦横無尽に回転、回旋させていく。

『原初の炎を宿す者。擬えうるは人智の極致』ッ』

地面の赤い円の内側に紅い光の紋様を幾重にも折重ねて。

『蜷局を巻きて悉くを滅却せよ』ッ』

言葉と共に、仕上げと言わんばかりに槍を強く地面に突き立てる!

『第四火炎魔法』ッ!!』

槍の切っ先が魔法陣を突き破ると同時に槍の柄やローブに取り付けられた魔石が強く輝いて。闇を赤熱で照らす炎の龍が俺に巻き付くように現れた!

基礎魔法は様々な使用者を想定し一から四の階級が設けられ、保有する魔力量や魔導に対する習熟度によって推奨される階級が異なる。

学生ならば三年生で第二階級まで使えば上等、第三階級は専攻ならば卒業までには詠唱・魔法陣の省略での発動が目標と評される魔導である。

第四階級というのはさらにその上に行く段階。その道の専門家レベルの技術であり自在に操れるとすればその属性に関しては教員と同等以上の実力と見なされるだろう。

「最高位の基礎魔法……素直にすごいね、ハル君」

嫌味は感じ無かった。魔力制御の技術や総魔力が基準に足りていなければそもそも魔法としての発動すら起こらないのだ。

詠唱、魔法陣だけに留まらず高品質の魔石も利用し、事前に準備したマジックアイテムであるローブとハルベルトを触媒にして、そんな本来よりもよっぽど手間暇かけた大量の事前準備が必要だったが曲がりなりにも最高位の基礎魔法を起動出来た事はそれだけでも、俺にとっては相当な背伸びだった。アリスは素直に感嘆したようだ。

「ぐっ……！」

額に脂汗が浮かぶ。身の丈に合わない魔法の使用は心身に大きな負担をかける。ただでさえ既に身体も心もボロボロで、その上所詮は背伸びして手を出した付け焼き刃の魔法。安定した運用には程遠い。

「焼き、払えッ……!!」

重たい槍をアリスに突きつけると同時に、蜷局を巻いていた炎の龍はその身体をうねらせ「夢」の世界を駆け抜ける！ 闇を裂き炎の道と無数の水晶を残してアリスを飲み込まんと猛進していく！

「こんな隠し球があつたんだね」

アリスは翼をはためかせ宙へと舞い上がって炎の龍を回避する。

『第二水流魔法』ッ！

そしてその脇腹にカウンターで水の基礎魔法を叩き付けるが龍を形取る炎は僅かにその輪郭を細めただけで変わらず燃え盛り、炎の龍はアリスとすれ違ったところでその頭を持ち上げ、追って空へと昇る。

「……確かに厄介だけど、でも！」

アリスは翼を強く打って炎の龍を大きく引き離れた。

そしてくるりと振り返って待ち受ける。

「ここはもう私の領域。『夢』を広げる前なら対処も難しかったけど——ここではそうもいかないからねッ！」

人差し指を立てて右腕を掲げ、まるで何か重いモノを引きずりながら投げつけるように大きく振りかぶって腕を振り下ろした。

『虚像・第四水流魔法』ッ！

アリスの背後に突如大瀑布が現れたかと思うと、空を昇り行こうとする炎の龍を大津波のように上から飲み込んだ。魔法陣の展開も無く、魔石の補助も無く、ただ指先一つで俺と同等の基礎魔法を放ったアリスは自慢げに語る。

「言ったでしょ？ 『夢』の中なら何でもできるって！ 構築、起動、詠唱、制御、あらゆる工程を無視して魔法の『効果』だけを呼び出しちゃうからね！」

魔力が干渉し、赤と藍の水晶のようなモノをマテリアライズしながら

ら霧散し炎の龍も大瀑布も少しづつ消えていく。

その気になれば、初めからこの大津波を俺に直接ぶつける事も出来た筈だ。俺が隠し球を用意していた様に、アリスもまだまだこの「夢」を支配する力の底を見せては居ないと誇示する様に、

「これで消えちやえっ！ 『虚像・第四水流魔法』!!」

更にもう一度大津波を発生させ、衝突する二つの魔法をまとめて飲み込んだ。

拮抗していた二つの魔法はあつと言う間にアリスの優勢へ傾いて、炎の龍は完全に水に飲み込まれてしまう。

まるで喰らいつかれ胃袋の中で消化されていく小動物の様に、水の中で呆気なく、どんどんその姿を小さくしていく。

「残念だけど、この魔法は私には届かないかなっ！」
しかし。

「でも。足止めには、なった……だろ？」

槍を杖代わりに身体を支え。全身ポロポロで今にも倒れそうにもなりながら。俺は不適に笑ってみせた。

「『燃料』は蓄えたぜ……アリスッ!!」

手元には、更なる魔法陣が既に描かれている。

「『第三暗黒魔法』っ！」

魔法陣の中央から小さな黒い魔力を発射した。アリスが警戒し、その場を退避しようとするより僅かに速く、黒い魔力は口を開くように巨大な渦へと変貌し、周囲の物体を飲み込む重力を発生させる！

「わわっ!? 何かと思えばっ！ 詠唱破棄なんて、私の真似かな？」

第四階級の後に第三階級の基礎魔法を見せられたって見劣りするだけじゃないかなっ！」

重力に逆らうように羽ばたき、何とか体勢を立て直したアリス。

「『虚像・第三閃光魔法』!!」

そして同じように反属性となる基礎魔法を発動した。アリスの四枚の翼が白い光を放ち、無数の筋として幾つも重力球に降り注ぎすぎさま掻き消す。

アリスが本来所有する属性は水と闇。魔力の転成によって生成出

来るのは氷と土。光属性は魔石などの外部的な補助が無ければアリスには使えない魔法である筈だ。

「ふふんっ、この翼がある限り今の私に扱えない魔法なんて無いんだよねっ!!」

アリスは勝ち誇った様に胸を張った。だが、直後に気付く。重力球を消滅させると同時にジャラジャラと宙に舞う何か。

重力球が捉えたのはアリスでは無い。今まで散々マテリアライズしてきた小石や水晶であったという事に。

「『不屈の炎を翼に変えて。天へと羽ばたけ、何度でもッ』」

俺は最後の力を振り絞ってハルベルトを構える。

「『その名は、不死槍ハルベルト』ッ!!」

詠唱と共に放たれた槍は、炎に包まれ宙に舞う石ころや水晶を飲み込んで。

「なっ!?!」

炎の翼は五つの方向に帯として拡散し。アリスを一瞬で包围して尚、燃えさかる。アリスは咄嗟に翼で自分の身体を庇うが先ほどの『ルーブ・プロミネンス第四火炎魔法』で生み出された炎の龍など比較にならない程の炎と熱が彼女を飲み込んでいく。

「そんな!?! 何なのこれ!?! こんな量の魔力なんてハル君には無い筈なのに一体何処から——あっ!?!」

俺が言い放った言葉、『燃料』という単語。そして、わざわざ足元に引き寄せられた小石の山。アリスは答えに辿り着いた様だ。この魔力の正体は——アリスから奪った魔力。

マテリアライズという形でアリスの魔力へ干渉し、俺の魔力とアリスの魔力双方を使って作成された小石。それは一見、ただの石ころに見えてもその内部に二人分の魔力が秘められている。

マテリアライズとは魔力を緻密に、重厚に構成しその性質を変化させて物質の成分を再現することで物質を精製する技術であるので、元の魔力という形へと還元される。というのは本来ならば失敗にあたる。だが俺は敢えてその失敗を利用した。

俺が作り上げた、俺だけの魔法。

俺に出来うる全てを詰め込んだ魔法。

『フレアレッド・クラストー』ッ!!』

詠唱と共に炎は更に五芒星へと姿を変え、その中心にアリスを据える。更に五芒星の頂点にあたる五つの点からドーム状に炎が広がって球体のようにアリスの全方位を取り囲んだ。

翼から絶えず黒い魔力が溢れ、アリスの身体を守る。だがその魔力は炎に飲み込まれて小石をマテリアライズし打ち消される。そしてマテリアライズされた小石はそのまま炎へと飲み込まれ炎は絶えず燃え続ける。アリスの魔力が尽きるまで、アリス自身の魔力を薪に燃え続ける炎がこの魔法の正体だった。

「これが俺の、正真正銘の全力だあッ!!」

アリスは翼で身体を守りながら納得したように頷き、炎の封印に包まれ姿を隠していく。これだけの規模ならば確かに一人でも相応のイーヴィルを倒しうる大魔導。

「これが本当の切り札だったんだね……凄いや、ハル君……」

ここまでの防戦は全て、この魔法を始動する際に発生する炎の規模を大きくする為の『燃料』稼ぎに過ぎず。俺は初めからのこの魔法による一手詰みを狙っていた。

「はあ……はあ……」

へたり、とその場に座り込む。立って居るのもやとだったのに支えとなっていた槍はこの魔法を発動する触媒にしてしまった。あの炎が燃え尽きるまでハルベルトは再生成できない。

俺は座り込んだまま、空を見上げる。

闇に閉ざされた『夢』の空間。

その中央で炎の塊は赤々と輝き、闇を照らす。

まるで、夜の終わりを告げる朝日のように。

限界を超えて、めい一杯背伸びをして、成し遂げた大魔導。

——けれど。

太陽にも見えたその炎は。

……次の瞬間に黒く染まった。

42話 俺は主人公になれない

……初めから判っていた。

黒く染まった炎は闇と同化するように消えていく。

炎の中から、四枚の翼をピンと強く張ったアリスの姿が現れる。

「ここは『夢』と『現実』の境界。ここでも私には『夢』を『現実』にする事が出来る」

分身や、空間の創造。何度も見せつけられた、驚異的な魔導。今更説明されるまでもない。ゆっくりと地面に降り立つアリスは、優しげに微笑んでいた。

「同じようにね、私はこの空間なら——どんな『現実』も『夢』へと変える事が出来る」

到底あり得ない、夢のような光景を簡単に呼び出す事も出来れば……その逆。あり得てしまった、どうしようにも無い現実を『夢』の中に閉じ込める事もできる……。

『リバース・リアリティ』、私の——切り札」

最後に、僅かばかりに残った蠟燭の灯火にも満たない小さな炎を振り払うように、アリスは翼をはためかせた。黒い羽根がふわりと無数に散っていく。

「勿論、限度はあるからね。『現実』を私の中に取り込んで、魔力を使って無かった事にするのは『夢』を『現実』にするよりも、何倍も力を使う。それがこれだけの大魔導なら尚更、ね。ほら、私の自慢の翼が一枚持つて行かれちゃった」

言葉と共に、アリスの四枚の翼のうち一枚がハラハラと砂のように崩れ去った。

「とつても頑張ったね。この翼一枚一枚には私を構成する無数の願いが……人々の魔力が詰まってる。何百、何千、本当に、数え切れない位の魔導士達の願いが。ハル君はそんな彼らを一人で倒したのと同じ。誇って良いよ。私は、本当に凄いなと思う」

パチパチとささやかな拍手の音色が静寂の世界に響いた。

「でもね——私の翼は、まだ後三枚残ってる」

アリスは優しく愛でるように自分の翼へ手を伸ばし、残った三枚の翼を優しく撫で。

確かめるように首を傾げる。

「ねえ、ハル君……」

それは、俺へ宛てた勝利宣言にも等しい言葉。

「今の魔法——『あと三回』、使えるかな？」

薄く開かれた瞳から、涙が滲んで零れ堕ちた。今の魔法は、俺が自分を限界まで追い詰めて、本当に全てを出し尽くして放った渾身の一撃だ。同じ魔法をもう一度放つどころか最早基礎魔法一つ扱う事も叶わない。

「おしまい……だね？」

アリスの言葉に、俺は了承するかのように項垂れた。

俺は断じて、強い人間では無い。限界などとうの昔に超えている。それでもここまで戦って来たのは『自分の起こした不始末くらい、自分の力で解決しなければいけない』という責任——悪く言えば、意地を張っていた。

この世界には特別な人間というものがある。確かに存在して。そんな人々はこの学園に何人も集まっています。きっと——そんな『主人公』の誰かなら。こんな無様な結末では無く、もっと鮮やかに、そして綺麗な終わり方でアリスを救ってくれただろう。俺が何もしなくても、この事件はいずれ解決され、世界は変わらず周りを続けるだろう。だが、そうだとしても。

自分に特別な力が無いとしても、自分の考える全ての手段を用いて。

自分に出せる全てを賭けて、正面からぶつかる。

それで、もしも。もしも奇跡が起こってアリスを元に戻す事が出来たなら。それが一番理想的な展開だと。仮に万に一つもあり得ない、希望と呼ぶには儂すぎる幻想だったとしても『自分』が行動を起こさなければいけなかった……。そうでなければ、『自分』という存在を認める事が出来なかった。

「もう、満足したよね？　もう、苦しまなくて良いからね」

アリスは、ボロボロの姿でへたり込む俺へ手を差し伸べる。

——自分の過ち一つ、自分の力だけで償う事もできやしない。
初めから判っていた。

自分が特別でも何でも無い事なんて。

「ここまで頑張ったのに、それでも思うようにならない。『現実』なんて要らないよね？」

初めから判っていた。

ちつぽけな自分が全てを出し尽くした所で、届きやしないのだと。

「『夢』^{わたし}の中で、ずっとずっと、幸せに過ごして。キミが望んだ幸せを、キミが望んだ世界を、噛みしめて」

初めから判っていた。

石ころが何をやっても決して星にはなれないのだと。

——全部、全部……初めから判っていた事なんだ……。

「私はこれから、もっともっと沢山の人達に『幸せ』を与える。ハル君は私の一部になって、私と一緒に沢山の『幸せ』を作っていくんだよ。それってとっても素敵だよね？」

この手を取る事は紛れもなく、一つの救済だろう。

例えばそれが、いつか『主人公』達に討伐されるような泡沫の夢であつたとしても。

絶対に手に入れる事の出来ない『幸せ』を手にする事が出来るのだから。

もう二度とアリスを裏切らず、今度は最後まで一緒に居ることが出来るのだから。

それを願ったのは……他ならぬ俺自身なのだから。

俺は重たい右腕を持ち上げた。

「さあ、ハル君。今度こそ、応えて？」

アリスの指先に、俺の指先が近づいていく。

「一緒に行くこう？」

あと少しで潰えてしまうような、薄れ行く意識の中で。

俺は。

ただ、敗北感と無力感に沈みながら。
判りきっていた事実を、口にする。

「やっぱり——俺は主人公になれない」

俺の指先はアリスの手の平をすり抜けて。その手首をがっしりと掴みとった。

「……………え？」

刹那の出来事だ。ボロボロになった俺のローブから。コロコロと一粒の石ころが零れ落ちる。それは、今まで散々マテリアライズしてきた石ころなどでは無い。

石ころからは闇を切り裂く光条が溢れんばかりに広がっていく!!

「な、何?！」

気がつけば、魔法陣が展開されアリスと俺を中心に捉えていた。

戸惑うアリスに、俺は告げる。

その瞳に……………悲壮な光を宿して。

「俺はハルベルトが切り札だなんて、一言も言っていないよ」

戦う直前に宣言した、アリスを倒すとしておきの切り札。

その正体は“不死槍ハルベルト”等では無く、この石ころ。

『強度N、範囲タイプA』

全ての闇を切り裂いて、万年桜の下に正しい夜が姿を現す。

「っ?! 嘘ッ私の……………私の翼がッ!？」

戦い始めた時は夕方だったが、すっかり日も暮れてしまったらしい。

そして、煌々と輝く魔法陣の中央でアリスに残る三枚の翼のうち一枚があつと言う間に散っていく。

「俺じゃあアリスを救えない。そんな事、判りきってたんだ……………だから、用意していた。キミを救う為の力を」

「ツクうー! 『リバーズ・リアリテイ』……………ッ」

額に汗を滲ませて、アシアは残った二枚の翼をピンと張る。先ほどと同じように、この魔法を“夢”の中に取り込もうとする。しかし。

「あぁっ……………!? この、魔法……………は……………」

闇が光を飲み込もうとすると同時に、内側から分解されるようにアリシアの翼が更に一枚散った。二人を包むこの光魔法の正体。それは学園で生活した事がある人間なら誰しもが知っている魔法。

『破魔のルクスエクラ』

「破滅の光」!! ルクシエラさんの、魔力……!!」

「あらゆる魔法、魔導を魔力レベルに分解し、無効化する特異魔力。魔力によって構成されるこの世界の全ての物質を分解しうる大魔導。これは、そんな『特別な力』を限界まで『希釈』した魔法だ」

高出力の『破滅の光』は人体すら分解しうる。だが、逆に言えば低出力なら人体や物体など魔力密度が高いものは分解し得ない。

ならば、どんな魔法を消し去るのか。

「『エンハンス』や『エンチャント』といった、魔力を用いて対象に付与効果をもたらすような魔法……『形の無い魔法』だけをこの魔法は消滅させる」

アリスというイーヴィルの根源。背に備えられた翼は恐らく、何らかの要因によって外部から『与えられた魔力』である筈。

「原理や仕組みなんて見当が付かなくても。キミが『何らかの魔力』によって特異な力を得たり、精神への干渉を受けているとするならそれはきつと『エンチャント』魔法の様な何かだろうと思っただけ。この魔法を思いついた」

破滅の光は、世界に選ばれた人間が宿す特異魔力。保存するだけでも課題が付きまとうこの魔力を押し込める『魔石(うつわ)』を用意出来る技術。そして、魔法を分解する魔力なんていうただでさえ扱いにくい代物を『破綻無く魔法として』制御する魔法陣技術。

「これは断じて俺なんかの魔法じゃ無い。魔力も、魔石も、魔法陣も、全て借り物。真正正銘『選ばれた者達』が作り出した大魔導。『特別な人間』の『特別な力』の集約。これなら、キミにも届くだろう？」

全てを聞いたアリスは、哀しげに、表情を歪めながら。

「逃げ……なきや……」

心身共に、膨大な魔力に影響を受けていたせいだろうか。力無く這

いつくばって魔法から逃れようとする。

「もう遅いよ。この魔法は徐々に魔力を奪っていく魔法だ。蟻地獄と一緒に。逃げ出すのに手間取れば手間取る程に、脱出に必要な魔力は奪われていく。もしもキミが万全な状況だったら。或いはこの魔法の外縁部に居たのなら、脱出は出来たかも知れない。でも戦いの中で少なからずキミも消耗していた。そして、この魔法は中央でキミを捉えた」

やがて、アリスは膝で立つことすら出来ずに俯せに伏した。

「これが、本当の狙い……?」

弱々しいアリスの言葉に対して、俺は答えに詰まる。

「……自分の力でキミを救えるなら、それが一番良いと。そうじゃなきゃ無責任だと本当に思っていたよ。だから俺はこの瞬間まで、自分の力だけで戦った。——でもさ。俺は主人公じゃ無い。主人公にはなれない。きつと、命を賭けたから、全てを出し切ったから無事キミを救えた。なんて綺麗な展開にはならないだろうなって、思ってた」
諦めきった、自分自身に失望したような悲壮な面持ちで言葉を続ける。

「結局は他人の力に頼って、それもだまし討ちみたいな形で発動したんだ。俺とキミの戦いは間違い無く、キミの完全勝利だったよ。……俺はキミには届かなかった」

この魔法は、俺の「敗北宣言」である。

自分じゃどうにも出来なかった。

自分じゃ解決出来なかった。

その証明である。

「他の誰でも良かったのかも知れない。俺がこんな事しなくても、それこそルクシエラさんやドライズが少し頑張れば、もっと綺麗で、鮮やかに解決したのかも知れない。俺がこうしてやったことは何もかも無意味なのかもしれない——それでも」

例えばそれが、自分の無力さを証明するような事になっても。

例えばそれが、世界にとって何の意味も無かったとしても。

「そうだったとしても、この手でキミを元に戻さなくちゃいけない」

て。そう、思っただ」

そうでなければ前に進めないと。そうでなければもう二度と、自分は自分で居られなくなると。どんなに苦しみ、どんなに情けなくとも、こうすることこそがケジメであり、責任であると。もしもそんな責任すら果たせないのならば。自分自身がどのような結末を迎えようと構わない。

この「切り札」すら通用しなかった時は、潔く命の終わりを迎える覚悟をしてアリスの前に立ったのだ。

「……ハル君……」

アリスは哀しそうに。尚も慈愛の籠もった視線を俺に向ける。「イーヴィルとしての魔力」が彼女に与えた影響は根が深いモノだっただろう。今までの数々の行動、言葉から。アリスは「本当に」俺へ好意を抱いていたのだろう。

「……私……なら……」

何度も重ねられてきた言葉。「こんな哀しい現実なんて否定して、幸せにしてあげられるのに」もう、そんな慰めすら口に出す余力は無いようだ。

「あの日、あの時。自分で言った言葉すら守れなくて。君を裏切るように逃げてしまって、本当にごめんよ……」

ずっと伝えたかった言葉を、漸く、紡ぐ。

「それどころか醜い願いをいつまでも引きずって、こんな結果を招いてしまって、本当にごめんよ……」

それで許されようと思っっている訳じゃ無い。それでも、何度でも言葉を重ねる。

「いっぱい、いっぱい迷惑をかけて……本当に、ごめんよ……」

やがて光が少しずつ衰え、消えて無くなるまで。

俺はただ、謝り続けた。

戦いは終わった。俺は、眠るアリスへマテリアライズした上着を被せて、万年桜に背もたれながら、夜空を見上げる。

「……もしもし」

片手には端末。最後の始末を付ける。

『ん〜ファルマ君かあい？ こんな時間に、一体なあに？』

通話相手は、間延びした口調が特徴の教師。学校の保険医であり、俺の部活動の顧問であるジン・

ギシン先生。

「……永久の森、でイーヴィルと交戦して。今まで戦ってました……。なんとか撃退はしましたが、一緒に居たアリシアは気を失って、俺もそろそろ……。やばいです……」

アリスがイーヴィル化していたと知れたらどんな扱いを受けるか判らない。俺は敢えて言葉足らずに事実を説明する。

『……判ったあ。すぐに救助に行くねえ』

了承の言葉に、張り詰めていた緊張の糸が解けたのか。

「場所は……万年……さく——」

最後まで言い切る事無く端末を取りこぼし、俺もまた、眠りに落ちるのであった。

43話 何があったのかは聞かないよ

気がついたら。目に映ったのは低い木の天井。

見慣れた光景だ、それが自分の寢床、二段ベッドの下だと言う事に簡単に気付く。

臆気な意識のまま腕を持ち上げるも普段備えてる筈の腕時計が無い。

何とか首を回して横を向くと、すぐ側に自分の端末が置いてあった。

起動すると画面に時刻と日付が表示される。

——…丸三日、眠ってたのか。

ぼんやりとする思考で計算すると、放り投げるように腕を戻した。まだ、腕のあちこちがジンジンと痛む。先ほどチラリと目に映ったが包帯でグルグル巻きにされていたのと、点滴のケーブルが見えた。不意に、ベッドのカーテンが開かれる。

「ファルマっ!! 目が覚めたんだ!？」

部屋の明かりが直接差し込み、思わず顔をしかめた。声の主は、同室の友人。

「良かった……。ジン先生は、外傷は大した事無いし呼吸も安定してるから部屋で寝かせておけばそのうち起きるだろうなんて言ってたけど心配したよ」

病室で世話してくれよなんて思わなくも無いが。

戦いが常の環境だ。こうして生徒が昏睡状態になる事は、珍しく無いとまでは言わないが起こりえない事では無い。

ジン先生も寮に住み込んでいるし寮にはいざという時は回復魔法などを総動員できる緊急処置室もある。だから、特殊な機器などが不要な場合は自室に寝かされる事が多い。

「……ごめん、迷惑、かけたな」

看病は同室の人間と医療スタッフが情報交換しながら行うのが基本だ。二日も眠っていれば相当ドライブに世話をかけただろうと思っただけで真つ先にそう言う。

「ほんと、突然でびっくりしたよ！でも、無事ならそれで良いから」
「……なあ、アリスは、どうだった？」

次に、アリスの容態を聞くとドライズは俺を安心させるような笑顔で答える。

「アリスさんは君以上に外傷とか全くなくて、ただ疲労困憊してるだけだったらしいから半日くらいで目を覚まして今はもう普通に学校に行ってるよ」

「そっか、よかった……」

この上更に数日間も自由を奪うような迷惑をかけていない事を知れてよかった。安堵のため息を吐く。

「君は流石に眠り過ぎで体力も落ちてるだろうから、暫くは大人しくしてるんだよ？療養食作ってあげるから、いつもみたいに好き嫌いしないでちゃんと食べる事。いい？」

「……………ああ」

なんか、急に耳に痛い言葉が飛んで来た。

「今めっちゃ間があった。野菜もちゃんと食べるんだよ!? 判った!?!」

「……判った」

「ゲームもしちゃダメだから！まあ、僕が隠してるからそもそも出れないだろうけど」

「……判ったって」

心配してくれるのは嬉しいけど、お母さんじゃ無いんだからさ、なんて思いつつ。

「……まだ本調子じゃないでしょ？ゆっくりしてな。僕はすぐそこで勉強しておくから、何かあったら言うんだよ?」

「……」

やり取りをしている内に、再び睡魔が俺を襲う。聞きたい情報は聞けたのだ。もう少しだけ、眠る事にした。

——当然だが。もう、あの夢を見る事はない。



一瞬だけ目を覚まして、再び眠りに落ちた親友の様子を見て。ドラ

イズは漸くホツと胸をなで下ろした。

「良かった……意識が戻って。やっとな師匠も落ち着いてくれるかな……」

ファルマが眠っていた三日間。ドライブも勿論相応に心配していたがルクシエラのそれはもう比較にならない程だった。

いくらジン先生が大した事は無いと言っても全く聞く耳を持つともせず、今にも私財をつぎ込んで派手な医療と回復魔導を手配する勢いで。それをテラ校長やらが複数人がかりで何とか抑え込んでいたのだ。勿論その中の一人にはドライブも含まれていた。

そして、もう一度眠るファルマに視線を落として、

「何があったのかは聞かないよ。キミが、自分から話してくれるまでは。でも——」

ドライブは先ほど一瞬だけファルマが見せた、安堵の表情を思い出して。

「お疲れ様。目的は果たせたみたいだね？ ……どんな理由でどんな無茶したのは知らないけれど、無事帰ってきてくれたのならそれでいい」

ドライブは朗らかに笑って、彼の看病を続ける。

そして、勝ち誇った様な笑みを作り。

「ほら見た事か。『災い』なんかに負けなかつただろ？ 凄いなぞ、ファルマは」

と、いつか出会った異邦の者達を思い浮かべ一人呟いて居た。



結局、俺が活動できるようになったのは更に二日後である。

「はあ。やっとな自由の身だ」

療養中、とにかくドライブが五月蠅かった。やれ食事は残すなだのやれ身体を動かさせだのやれ早く寝ろだの……こちらを氣遣つての事だし、迷惑をかけている自覚はあったので文句が言えないのも辛かった。

「でもそれも全部終わりだ！ 今日からはいつも通り、完全復活だぜ！」

と、暗い寮室の中央で万歳していたら。

「むにや、ファルマ……うるさい」

と二段ベッド上から注意された。

それはそうだろう。時間は午前四時。寝続けていた俺はこんな時間に目が覚めたが普通の生活をしてきたドライズにとっては迷惑以外のなにものでもない。

「あ、ごめん……」

しゅんと小さくなり大人しく陽が昇るまで自分のベッドに籠もる事にした。

登校時間。今日はルクシエラさんの部屋を掃除する日で、本来ならドライズが先に出るのだが俺が一人で登校する事に心配して入り口で粘っていた。

「本当に大丈夫？」

「ただ疲れて寝ただけなんだから心配しすぎだって言ってるだろう？」

「でも——」「良いから早く行けつてば！」

俺は痺れを切らし、半ば押し出すようにドライズを部屋の外へ追い出した。

「あ、もうっ、……判ったよ。じゃ、またね」

尾を引かれるような顔でドライズが離れていった。

「やっと思った……心配性だなああいつ」

昔は俺の方が、ドライズが過労で倒れないように散々気を遣っていたので。立場が逆転しているようでどこか可笑しく感じた。

そして、定刻になると俺は改めて部屋を出る。

何も特別な事は無い。

俺が眠っている間も、世界には何の影響も与えず当たり前前の日常が過ぎていた。……それもそうだ。俺は主人公では無い。俺が居ようが居まいが世界にとっては何も関係が無いのだ。当たり前前の事である。

ただ、俺に取っては間違い無く。今日からの日々は変化を感じるだろう。

アリスのイーヴィルとしての力は取り除いた。今の彼女はもう何者にも影響され居ないありのままの彼女である筈だ。

つまり——俺とは疎遠になった、もう関わりも殆ど無い幼馴染みというあるべき姿に戻っただろう。

全ては正しい形に戻った。

アリスが事件の事を何処まで覚えて居るのかは判らない。

何も覚えて居ないのなら、俺に出来る事は、きちんと「隣のクラスメイト」としての距離感を保って付き合う事。仮に事件の一部か、全てを覚えて居るとしたら。糾弾されても、否定されても、逃げてはいけない。ただ、彼女が満足するまで償い徹するだけだ。

どちらにせよ、この一ヶ月のように楽しく会話しながら登校する——だなんて「夢」はもう終わった。

自分が悪いと判りきった上で、もう逃げないと覚悟した上で、それでも傷つく事、否定されること、拒絶されることに怯え、身体が竦む弱い自分に嫌気が差す。

だが、引き返す訳にはいかない。

俺は気合いを入れて、寮から出た。もうアリスが自分を待つ義理も理由も無い。

次に彼女と会うタイミングがあるとしたらクラス合同授業の時とかになるだろうな。

そんな事を考えつつ、かかどが引つかかった靴を、地面を蹴ることで調整していると。

「おはようっハル君!! やつと元気になったんだねっ!!」

という明るい声と同時に衝撃を感じた。

「どういっ!!」

俺はよろめきつつ、何とか体勢を立て直す。

そして、アリスに抱きつかれたという事に気がつく困った様に引き離れた。

「アリス……病み上がりなんだからもっと優しく——」

当たり前の様に言葉を続けておいて、遅れること数秒。

その異常性に気がついた俺は思わず、

「つて、ええええええええええええ!!?!」

絶叫した。

「わあっ?!? いっぴにない声量……それだけ元気ならもう心配は要らないね?」

両耳を人差し指で塞ぎながらアリスは嬉しそうに笑う。

「あ、アリ、な、なんで!?!」

「なんでつて、何に対する疑問なのかな?」

戸惑う俺に、アリスはキョトンと首を傾げる。

「いや、だつて……!?! え、覚えてないのか!?!」

「ハル君、落ち着いて。主語が良くわからないから」

アリスに窘められ、深呼吸する。

だが、どんな結果であれアリスの方からこうして声をかけられるなどもう無いと思っただけに全く落ち着けない。

「その、イーヴィルになつてた事、とか……?」

もしかしたら聞くべきでは無いのかも知れないと思いつつながら恐る

恐る尋ねると――

「バツチリ全部覚えてるけど?」

アリスはけろつとそう答えた。

「ええええええええええええ!?!」

再び、叫ぶ。もう意味が判らなかつた。

44話 掛け替えの無い、一つのコメディ

自分勝手な願いのせいであれだけの事件に巻き込まれたのだ。全て覚えて居るといふのなら関わりたくも無いと考えるのが普通では？

「何をそんなに驚いてるのかな？ 冷静に考えて見てよね。ハル君が吹き飛ばしたのは私に『付与』されてたイーヴイルとしての魔力だよ。確かに、あの翼から色々影響は受けてたけどそれがすっぱり無くなったからって、影響を受けなくなるだけなんだから私の記憶が無くなったりする訳ないじゃない」

そう言われてみればその通りかも知れない。

「もう、みんなを『幸せ』にく、なんて言ったりしないよ。そんな力も残ってないしね」

「でも、だとしてもなんで俺の心配なんかするんだ!? あんな事に巻き込んだのに俺の事憎んでないのかよ!？」

俺の言葉にアリスは人差し指を顎に当てて困った様に空を見上げた。

「ん〜。そりゃあ、まあ。何も思っていない訳じゃ無いよ。すつごい大変だったのはたしかなんだし?」

その言葉に、思わず仰け反って呻いた。

「ぐうッ」

自分から聞き出しておいて傷ついていたら世話は無い。アリスは構わず話を続ける。

「でもね。あの翼は、あの『^{イー}悪^{スイ}しき^{ヴァイ}願い^ル』を願った全ての魔導士の思いが込められていた。戦った時も言ったけど『私』が選ばれたのは単なる偶然なんだよね」

俺は固まった表情のまま、話を聞きつつ片足を引く。

「あの翼は沢山の願いのせいで生まれたのであってハル君が悪意をもって、やろうと思っただけでやった訳じゃない事だって誰よりも判ってるし」

アリスが一つずつ並べていく言葉を、俺はただ呆然と受け入れるし

かない。

「ハル君は責任をもつて私からあの翼を奪ってくれたでしょ？ そう
いう事を色々考えたら、ハル君の事を悪くは思えないかなあって」
そして。アリスは更に言葉を続けていく。

「それでね。その、さ、なんで心配するのかって話にんだけど
……………。えっと、人の感情が変化するにはきっかけているのが
必要だよ、ね？」

少し俺から視線を逸らして、やや頬を赤らめつて。何か思うところ
があるようだ。

とりあえず俺はアリスの言葉を一生懸命解釈する。

「切っ掛け…………」

例えば、特に名前も知らず、意識していなかった人がふと、ポイ捨
てされたゴミを拾う瞬間を目撃すれば、大抵の人間はその人に対して
良い感情を持つだろう。

例え名前を知らなくても、さっきまで無関心であった人物に対して
“あの人はいい人だ”と感情が変化する筈だ。

その逆もしかり、悪い面を見れば“あの人は嫌な人だ”と悪い感情
へ傾く筈だ。そして、そうやって抱いた感情は新たな何かしらの切っ
掛けがあるまである程度固定される。

もう一度の人物を見たとき、その時に何もしていなくても“あの人
はいい人だ” “あの人は嫌な人だ”と勝手に判断してしまうように。
「私がハル君を好きになってしまったのは、間違い無く翼が切っ掛け
だよ。翼のせいで、好きになった…………それまでは、昔振った幼馴染
みって認識だったからね」

「そ、そうですね」

俺の脳ではもう処理と理解が追いつかない。アリスの言葉を待つ
しかできない。

「それで、そんな感情を持ったままそれなりに過ごしてから翼が無く
なった訳なんだけど。翼が切っ掛けで君を好きだって気持ちが生ま
れたけどね、それはあくまで切っ掛けだから別に“翼が無くなっても
”関係無いよね？」

「…………え?」

一瞬、完全に思考停止する。そして懸命にアリスの言葉を頭の中で解釈する。

人の感情が変化するには切っ掛けが必要。俺に好意を抱いてしまった事に関しては、翼が切っ掛けであり、原因。でもそれは切っ掛けなので翼が無くなっても一度好意に傾いた感情が変わる事が無く……。

「…………え…………」

愕然とする。

言葉の通りに受け取るなら、アリスはまだ――。

慌てて、言葉を重ねる。

「い、いや、でも、ほら!　つまり俺の事恨んだり憎んだりするような切っ掛けがあれば嫌いになるって事だろ!?!　あんな自分勝手な事件に巻き込んだんだからそれが十分切っ掛けにツ――」

「私、この事件に関してハル君の事悪く思えないって言ったよね?」

アリスはこの一件に関して、俺を糾弾する気は無いという。

「だから。なんで心配するのって言われても……………そりゃ心配するよ」

そして、アリスは頬を赤らめ少し恥ずかしそうに目線を逸らして、言いにくそうにぼそりと付け加えた。

「だって私――まだハル君の事好きだからね」

もう、耐えられなかった。

気がついたら身体が勝手に動いていた。

両膝を折り頭と手を地面に付けて。

「本ツ当にすみませんでしたあーツ!!!」

とりあえず、頭を下げないと気が済まなかった。

「な、なんで突然土下座してるのかな??」

アリスは戸惑っている様だが。

あんな事件に巻き込んだだけで無く。

やっとの思いで、理想的な形ではなくてもなんとか解決出来たと思つたら。思い切り問題が残つてしまっているのだ。

それも「自分に好意を向けさせてしまった」「他人の心を自分の都合が良いように歪めてしまった」という一番自分を許せなかった部分が、残つてしまった。

最悪じゃないか。

思えば。俺は主人公では無いが故に、初めから、「鮮やかに事件を解決する」事が出来る様な器じゃなかった。問題が何かしら残ってしまう事は必然だったのかもしれない。

土下座どころか穴に埋まって消え入りたくて仕方が無かった。

「や、辞めてよハル君。目立ってるってば!」

アリスは慌てて俺の身体を引き上げる。

「もういつそ殺してくれ……」

思わずそう言うと、アリスは哀しげに目を伏せる。

「……やっぱ、私が居ると迷惑かな?」

その言葉を、慌てて否定した。

「ち、違うよ!! そういう事じゃ無い!! ただ、俺は……! いつまでも過ぎた事を引きずって、その拳げ句に君を洗脳紛いの事に巻き込んでしまった事を後悔して……だから、この手で君を元に戻さなきゃって思ったのに結局それすらできてなくて……迷惑とかじゃ無い、ただただ、君に申し訳が立たないんだ……俺がやった事って、何の意味も無かったんじゃないかって……」

「……ハル君」

後悔する俺の前に、アリスは改めて真面目な顔をして立つ。

「アリス……?」

俺の両手を握り、その目を見据えて。

「こんな事私が自分で言うのもなんだけど……感情つていうのは揺れ動いていくものだから。これから先、何かの理由で私がハル君の事好きじゃ無くなったり、他の人を好きになったりする事はあり得るんだし……この事を気にする事はないよ!」

その曇りない目が、美しかった。

「そして……あの翼は、もう存在しない。君が消し去った。こんな事はもう起こりっこない。あの『悪しき願い（イーヴィル）』を抱いてしまった他の人達がこういう目に遭うことはもう無いの。それに私も、あの翼から解放された。もうハル君や、他の人を『幸せ』にするって言うって無理矢理『夢』に取り込もうとしたり傷つけたりだなんてしないで済む。それもこれも、全部ハル君が頑張ったからだよ。意味が無かったなんて事はない」

糾弾される覚悟を決めていた筈だ。

これから先、アリシアに嫌われても仕方が無いと、もう目を背けないと決意して寮を出たはずだ。それが、何の因果かそんな想像の通りにはならず。それどころか、責められて当然だと思っていた筈のアリスの口から自分の行いを認めて貰えた。

……情けない事に、涙が零れる。本当はアリスを救わなければいけなかったのに結局一番救われたのは自分だっただど？

俺は思う。

例え主人公で無くても、このままで良い訳が無いと。

「……アリスっ!!」

「ひゃっ!? な、何かな!」

俺はアリスの手を強く握り返した。

「今度こそ、俺に言わせて欲しい言葉がある」

「……は、ハル君?」

俺は強い意志を秘めた真摯な視線をアリスに向ける。突然の事にアリスはどぎまぎしている様子だった。

「一杯迷惑をかけた。今だって問題を残してしまった。俺達、本当に色々な事があった。でも、約束する! これからは君のため出来る全ての事をやる。君のためなら何だとしてしてみせる。だから——」

後に退く訳にはいかない。覚悟を決めた。

「もう一度ちゃんと、『友達』としてやり直そう!!」

俺は、償い続けるしか無いのだ。

そんな俺の言葉にアリスは。

「……えー」

何故かあんまり乗り気じゃ無い様子だった……。

「えっ、あ、すいません……やっぱり俺なんか友達だと迷惑でしょうか……」

急に自信が無くなってしゅん、と身がすくむ。

「そういう事じゃ無くて……むう」

アリスは何やら納得いかない様子なのだが最早俺にはアリスが何を考えているかなんて全く判らない。彼女は少し考え込んだ後、

「……うん。ハル君がそうしたいのなら、とりあえず。『友達』って事で良いよ」

何か結論を出したようで。そう言ってくれた。

どうやら辛うじて『友達』で居てくれるようだ。

につこり微笑むアリスの笑顔が眩しい。この顔をもう二度と見ることはない無いだろうと思っていただけに。とても眩しく、尊いものを感じられる。

「何か困った事があったら何でも言ってくれ。絶対に力を貸すから」
本当に、紆余曲折あった。

何度も自分の事が嫌いになったし、結局問題だつて残ってしまった。

でも。

やっと、少しだけ進めた気がする。



……そして、幾数秒かの間が過ぎた後に。アリシアはハツと思い出したかのように端末を取りだして。

「つてハル君っ!! 時間!!」

「え? ……うわっ!? 始業五分前だ!!」

「まああれだけ懇々と話合ってたら当然だよね!? 走ろっ!!」

彼は、長い時を経て漸く一步、前へと進む事が出来た。

「ああー!」

その歩みは、何処か綺麗とは言えず。

「ところでハル君。私の為に何でもしてくれるって、『友達』としては重すぎるとか思わなかったの?」

「ええ!? いや、でも、俺としてはそれくらいの覚悟を持つてるって事で、そんな重荷とかになるつもりは——」

まだ少しだけふらついているようにも。歪なようにも見える。

「あはは、冗談だよ。言い出したのは君だからね? 言質は取ったし、これから覚悟しておくといいね!!」

「ええっ……あの、お手柔らかに頼みます……」

彼は主人公では無いが故に。彼を取り巻く一連の事件は、決して綺麗な終わりを迎えることは出来なかったが……。

この物語は、“彼”にとっては確かに必要だった。

どんな無茶をしたところで。石ころは決して星にはなれない。それは当然の摂理だ。

けれど。

石ころだって、ほんの少しくらいなら——輝ける。

それを“無意味”だと評する事を否定はしない。

けれど……そんな、“無意味”に見える輝きでも。

“大切だ”と思ってくれる人達が居る。

だからそれは決して“無価値”などでは無いのだ。

例え主人公にはなれないとしても。

そんな彼でも受け入れ、支えてくれる人達が居るから。

彼は、輝ける。

これは、特別な世界で特別な環境の中、特別にはなれない少年の物語。

彼は明日もまた、彼なりの日常を生きていく。

思うようにはいかない現実も……掛け替えの無い、一つの日常（コメディ）だ。

45話 友達居たんだ

部室棟の最上階。俺はその一室に足を運んだ。

トントントントンと三回ノックして。

「失礼しまーす」

そこまで気負わずに扉を開いて。

「うえっ!？」

俺はぎよつとして思わず情けない声を零す。

「あら、ごきげんよう」

部屋の主、ルクシエラさんは何事も無いかのような普段の様子で座っていて。

「え、えつと。あの、この前言われたヤツの提出に来ました……」

とりあえず俺は用件を済ませることにした。

ルクシエラさんから直々に、実験用のマジックアイテムを注文されていたのだ。

魔石を幾つか取りだして、渡す。

「あら早い仕事なこと。体調はもう大丈夫そうね」

ルクシエラさんは少し嬉しそうに言う。

「いや、まあ、あれから結構経ちましたし」

「あ、そうですね。折角ですからお茶でも出しましょうか?」

「えっ」

普段ならなんて事は無い誘いなのだが、戸惑った。

この状況でなんでこの人はここまで平然としていられるのだろうか……。

「そこにかけてお待ちなさい」

断るのも忍びないので俺は言われるがままに近くの座席に腰掛け。

——そして、否応なしに視線を下に向けてしまう。

暫くして、ルクシエラさんがお茶とお茶請けを持ってきて。

「うふふ、お茶もお菓子も貴方が好きなモノを用意しておきましたわ」

ルクシエラさんは和やかに微笑んで俺の前にお茶とお菓子差し出した後。

もう一度「ソレ」に座った。

「うツ!!」

うめき声の一つあがる。

俺はお茶を一口啜って、言うべきがどうか迷ったが、決心をして。

「あの……」

「ん、どうかしまして?」

「いや、その——そういうの、やるなら人目につかない所でした方が良いですよ」

俺の視線の先では。見知らぬ女子生徒が四つん這いになってルクシエラさんの「椅子」にされていた……。

「ぐおおお!! 下級生に憐れまれているツこの屈辱忘れないぞルウウシィィ!!」

俺の事を下級生、というからには五年生か六年生なのだろう。

「一体どうしてそんな事してるんですか……イジメですか?」

「失敬な」

ルクシエラさんは澄まし顔でそう言う。

イタズラを思いついた子供の様に悪辣な笑顔を浮かべて。

「ほら、イズナ。私の可愛い愛弟子が疑問を抱いています。どうしてこうなったのか教えてあげなさいな」

と、自分が座っている女子生徒の頭を優しく撫でながら告げて。

「いや、俺は弟子じゃ無いですって」

いつもの流れて否定するがこれまたいつも通りスルーされ。

イズナと呼ばれた女子生徒は。

一瞬唇を嚙んだかと思うと俯き。

「……た」

か細い声で、ボソリ、と何か呟いて。

「んんん? 聞こえませんか。もっとハッキリ仰いなさい?」

ルクシエラさんにはここにこの笑顔で催促し。

「……負けたのだ」

イズナさんが次に呟いた言葉は何とか聞き取れたが。

「誰が? 何をして負けたのかしらあ? ちゃんとやわなきや判りま

せんわあ」

ルクシエラさんは大変愉快そうに追い打ちをかけて。観念したのか、イズナさんは声を張り上げる。

「私はッ！ ルーシーと勝負してッ！ 負けた罰ゲームで椅子にされたのだアアッ!!」

説明されてもいまいち状況が把握出来なかった。

「ルクシエラさんと何の勝負をしたんですか？」

「普通にボードゲームだッ!!」

「あ、てつきり決闘か何かだと思いました」

「普通だ」なんて貴女が言います？ 普通だから罰ゲーム有りでやろう!!」と言い出したのは自分でしょうに」

あれ、それって自業自得というヤツでは……。

「私としては食事を奢るとかそういうモノを想像していたんだッ!! それがなんだこの仕打ちは!! 君は悪魔か!!」

と抗議するイズナさんを。

「敗者は良い声で鳴きますわねえ」

ルクシエラさんは容赦なく煽る。

「うおおおおッ!!」

イズナさんは、椅子にされている疲れからなのか羞恥からなのか怒りからなのか判らないが、顔を真っ赤にして悶えていた。

そんな様子を見て。

「ふっ」

俺は思わず笑いを零してしまい。

「笑ったなッ!? 君今私を笑ったな!!」

とイズナさんに怒られるが。

「ああ、いや、すみません。貴女を笑った訳じゃなくて、ちよつと微笑ましいなと思つて」

「何処がだ!? この状況の何処が微笑ましいのだ!? 師匠がドSなら弟子まで価値観が狂っているのか!」

と、俺まで価値観が狂つてるように思われた様なので訂正する。

「いや、そういう事じゃなくて。ていうか弟子じゃ無いですつて。元

はといえば普通にボードゲームをしようという話からこうなったんでしょ?」

「まあそうですね」

「ルクシエラさんに『遊び相手になってくれる友達』居たんだ、と思ってる」

「張り倒しますわよ?」

ルクシエラさんは天上天下唯我独尊というか……ぶっちゃけ交友関係については俺と同類だと思っていたのに友達が居ると知って正直驚いた。

「イズナとは長い付き合いですわ。これでも大事なお友達です」

と。湯飲みを片手にその『大事なお友達の上に座って』のたまうルクシエラさんに。

「私は今まさにルーシーとの友情を疑っている真つ最中なのだ!!」

イズナさんはそう言うが。

ぶっちゃけた話、本当に嫌なら従う必要は無い。ルクシエラさんは横暴な人間だが、流石にたかだか遊びの罰ゲームのために権力や暴力を振りかざすような人では無い。

イズナさん自身、『自分が言い出した手前』というのもあって引けなかったのかもしれないが、まあルクシエラさん的にはこの行動はじゃれ合いに近いものだろう。

「悔しかったら次は勝てば良いのです。私が負けたときは潔く貴女の指示に従いますわ」

その言葉はきつと建前などではない。

「言質は取ったからなツ!! 覚えてろおお!!」

こういう遠慮無いやり取りが出来るのは一つの美德だ。

——……まあ、画ヅラが酷い有様なのは確かなんだけど。

46話 俺はなんてモノを作りだしてしまったんだ

「ふふふ……」

早朝の事だ。俺は部屋の電気を付けず机のスタンドライトだけを灯して何処か壊れたように不自然な笑みを浮かべていた。

「イイイイイヤツホオオオオオ!! フリイイイダアアアアツンツムツ!!」

日の出を告げる先輩の鳴き声が、仄暗い寮室にまで聞こえてくる。他に、ざあざあと大雨が叩き付ける音が聞こえていた。雨の日でも律儀に鳴き叫ぶのだからアイルさんは案外真面目な人なのかもしれない。ピシヤン、と稲妻が閃く。

一瞬だけ窓ガラスに俺の顔が怪しく映った。目の下にクマが出来ている。当然だ。眠らずにぶっ通しで作業していたのだから。

「遂に完成してしまった……!」

思い立ったのは二日前の夜。連休直前の事である。

折角の連休なのだから大がかりな事をしてみようかと思いついた。

道具を広げてマジックアイテム製作に悪戦苦闘する事……三十六時間。

気がつけば徹で没頭してしまっていた。

途中からテンションがおかしくなっていた。

「俺、天才かもしれねえ……」

多大な労力と情熱をかけて作り上げたアイテム。

それは……!

『服だけ溶かすスライム』だツ!!!」

今度は2回、雷が落ちた。

ここまで長い道のりだった。

元はといえば、「破滅の光」を有効活用したアイテムを作れないかという考察から始まり。考えに考え抜いた末に辿り着いた答え!

その濃度によってあらゆる魔導を分解する「破滅の光」を適度な濃度に制御する事で人体に危害を加えず、特定の物質——即ち服だけを崩壊させる事に成功した!

思春期男子の夢(?!)

『服だけ溶かすスライム』を実現させたのだ!!

「ふふふ、ハアーツハハハ!!」

俺の高笑いに合わせて、今度は3回稲光が迸った。

……。

「ハツハツハ……」

……。

「……」

パチン、と部屋の電気を付ける。

そして、もう一度机の前に戻り。

「……」

見下ろす。机の上にちよこん、と置かれたピンク色のぷよぷよした塊を。

「……」

夢から覚めるように、ぼんやりとしていた思考がすうっと冴えてゆき。

思った。

「俺はなんてモノを作りだしてしまったんだああああ?!?!」

作って三分で後悔が洪水の様に押し寄せてきた。冷静になつて考えてみると多方面からドン引きされてやむなしな事をしでかしたのでは?。

「ああ深夜テンションって怖えー」

手の平でぐしやりと前髪を掻き分け頭を抱える。

この一日半、ストッパー役となるドライズが不在だった事も原因の一つだろう。

「と、とにかく、誰かに見つかる前に処分してしまおう……」

こんなモノを作ってしまったなんてバレたらどうなる事やら。特に女子からはもう人間扱いして貰えなくなる気がする……。

俺は机の上でぷるぷる穏やかに揺れるスライムに手をかざし。

「……っ」

迷った。

別に、『折角作ったんだから使ってみたい!』なんていう煩惱丸出しの理由などでは無い。断じて。これを壊すという事は……俺の休日三十六時間をただただ無意味な時間にしてしまうということになつてしまう。それが引つかかった。

「……………」

あれ、涙が滲んできた……。

「俺、貴重な休みを一日半も使って何してんだろう……」

その果てで出来たモノがこれって。もつと有意義なモノを作れば良かったのに……。

「だが、だがッ!! お前の存在は必ず災いを招く!! 今ここで、無かつた事にしなければならなんだッ!!」

涙を呑み覚悟を決めて改めて、魔力を右手にかき集め。

『第二火炎魔法(プロミネンス)!!』

割と強めの炎魔法を、机の上のスライムに向けて放つ。炎の帯が腕を軸に迸り、机へと向かい。

スライムを包み込んで焼却しようとした。

が。

びよい、とスライムが横に飛び跳ねた。

「……………」

外れた火炎魔法机の上で渦になつてうねるがスライムはその炎から怯えるように距離を取る。

「……………」

混乱した。

「……………」

落ち着いて、深呼吸をする。とりあえず机の上で燃えさかっている炎の事は後回しにして、俺はハルベルトをマテリアライズする。

両手で刃の近くを短めに持つて、大きく振りかぶり、

「ていつ」

スライム目掛けて突き下ろす!

びよい。

また、スライムは軽快な動きで俺の攻撃を回避した。

槍の切っ先が乾いた音を立てて机に突き立つ。
俺は、愕然とした。

——こいつ……意志を持ってやがるツ!!?
そんな馬鹿な。人工知能機能なんて俺は組み込んでいない。
なのに、こちらの攻撃に対して明確な回避行動を取るのだ。

「こ、このっ！」

何度槍を振り下ろしても、結果は同じ。そもそも寝不足な徹夜の疲労で俺の動作もキレが悪い。顔なんて無いのだがスライムが余裕綽々にどや顔でこちらを見つめている様な感覚に支配される。

「……貴様ツ創造物の分際で創造主であるこの俺に刃向かおうとでも言うのかツ!!」

気がついたらゲームの悪役みたいな事を口走っていた。

俺の殺気を感じ取ったのか。スライムはビクウつと一瞬身体を跳ねさせるとそそくさと身体を引きずって机から逃げ出す。

「ふはははっ!! 何処へ行くこうとも無駄だツ!!」

俺はハルベルトを片手に、照準を定めるように逃げ惑うスライムを目で追った。

「この部屋は今、密室状態にあるツ」

そして、スライムが僅かに動きを止めた瞬間。

「そこだアツ『二連朱槍』ツ!!」

俺は槍を投げた。※室内です。

槍は二つの火炎弾へと変貌し、スライムへと向かい。

着弾点である俺とドライズの二段ベツトが爆破四散した。

寸でのところで直撃を躲したスライムが、爆風に吹き飛ばされて転がる。

「しづとい奴め……だが!!」

本能で俺から距離を取ろうとするスライム。しかし、ヤツが逃げた先は部屋の入り口。

玄関は堅く閉ざされている。

「都合良くドライズが帰って来ない限りはお前に逃げ場など——」
「ただいまー」

「バカヤロオオオオオオ!!!」

あまりにもタイミング良く玄関の扉が開かれ、俺の絶叫が寮の廊下に木霊する。

「えっ、ごめん……」

帰宅早々俺に怒鳴られたドライズはしゅんと表情を暗くするが今は構っている場合では無い。抜け目ないスライムはこの僅かな隙を見逃さず、ドライズの横を通って室外へと脱走してしまった……!!

46. 5話 『服だけ溶かすスライム』 う!?

俺はすぐに玄関を飛び出す。

「お前も来いっ!!」

咄嗟の判断で、明らかに落ち込んでいたドライズの腕を引いた。

「な、何、なんなのさつきから……?」

二人して寮の廊下を走る。

「アイツを消さないといけないんだ!!」

ドライズの腕を引きながら、もう片方の手で目の前を逃走するピンク色のスライムを指差した。するとドライズは首を傾げる。

「何あれ?」

「『服だけ溶かすスライム』 ツ!!」

「『服だけ溶かすスライム』 う!?!」

ドライズは走りながら、色々悟った様にため息を吐く。

「深夜テンションが高じて作ったは良いものの、冷静になって考えて見たら凄く恥ずかしいモノを作ってしまったと気付いて無かった事にしようとしたら逃げられたんだね」

「さっすがドライズ!! 憎たらしいほど完璧な推察だよ畜生!!」

まだドライズだからダメージは少ないが、それでも僅かに涙ぐむくらい恥ずかしかった。

不意に、俺達の前に人影が現れる。

「ちよつと、あんた達! 休みだからってはしやぎすぎよ!!」

進行方向の先、廊下の奥。リーゼがご立腹な様子で仁王立ちしていた。

——……遂に女子生徒と遭遇してしまったああああ!!

内心で絶叫しつつ。極限まで加速された思考が最速で次の一手を導き出す!!

「わー! リーゼに危険が迫ってるー!! (棒読み)」

ガツンヤアアアン!!

俺の渾身の棒読み台詞が言い終わるとほぼ同時に廊下の窓ガラスがぶち破られた。

そして外から、雨でずぶ濡れになったアイルさんがリーゼの前に割り込み、

「無事かアアリイイイゼエエ!!」

そのままリーゼを庇うようにギュッと抱き締める。

逃走していたスライムは、突然目の前に現れた障害物に動じず、リーゼを庇うアイルさんの背中を器用に踏み台として跳び越えていった。

その際、スライムが触れた部分のアイルさんの服がバツチリ溶解されて穴あきになってしまう。

俺は走りながらすれ違い様に、

「すいません後で弁償します!!」

とだけ伝えてその場を通り過ぎた。

「な、なんなのよ一体……」

状況について行けず、ぽつんと取り残されるリーゼの呟きが遠くに聞こえた気がした。

「ああ畜生!! どうして失敗作に限ってバツチリ仕様通りに動くんだよ!!」

スライムがアイルさんの服を溶解した事を思い返す。

「あ、でも人工知能なんて組み込んでないから意志を持つてるのは仕様外かあ!?!」

「言ってる場合じゃ無いでしょ!?! あんなの放置してたらセクハラと器物損壊で訴えられるよ!?!」

「ソレは俺が一番良く判ってんだよおお!!」

寮の廊下はそこまで長く無い。

スライムは遂に廊下を抜けて、寮のエントランスへと辿り着いてしまった。

スライムはそのまま寮の外へ出てしまう。

「やっば!?!」

ただでさえ不味い状態なのに街中に放ってしまったらもう收拾が付かない!!

俺達も慌てて後を追った。

すると。

スライムはグラウンドの方に出ると、その動きを止める。

「遂に観念したか……!」

焦りから好機到来と気がはやる俺を、ドライズが静止した。

「待つて待つて! あれなんかどんどん大きくなってない!」

「ああ? そんな事あるわけ——」

ドライズの指摘を受けて改めてスライムの様子を伺う。

ざあざあと叩き付ける豪雨の中で。

スライムは明らかに目に見える速度でムクムクと膨張していた。

「雨を吸収してるうっ!!」

もしかしてコイツは初めからこれを狙って外を目指していたとでもいうのか!?

どんどん巨大化していくスライムが、のっそりとこちらに寄ってきた。

既に3メートルくらいの巨体になっている。

もしかしてもしかしてこうやって物量を高めて俺に反逆するつもりだった!!?

スライムの行動を漸く察した俺は、それでもニヤリと悪い笑みを浮かべた。

「所詮は脳みその無い軟体生物だな!! いや生物を作ってたつもりはねえんだけど!!」

俺はドライズをずっと前に引き寄せる。

「逃げられたら困るから慌てていたが……向かってくるなら都合!!」

ドライズ!!」

「な、何?」

『『ルクス・エクラ』で吹き飛ばしてしまえ!!』

「ああ、そのために僕を連れて来たんだね……」

この期に及んで他人頼りなのは忍びないが、この好機を逃す手は無い!」

「ごめんね、スライム君。『強度5、範囲タイプA』」

ドライズが氷の細剣をマテリアライズし、スライムを差す!

『ルクス・エクラ』ッ!!」

刹那、白く眩い光の奔流がスライムを中心にドーム状に広がっていく!

その威力は、本家大本のルクシエラさんが放つモノよりやや劣るが、それでも豪雨をもたらしていた雨雲を吹き飛ばし、ここら一体だけを台風の目のように晴天へと変える程だ。

「さすが主人公ー!」

俺は勝利を確信して拳を握りしめた。

次の瞬間。

収まっていく光の中から、巨大な影が飛び出す!

「はぶうっ!?!」

“破滅の光”の奔流から飛び出して来たスライムはそのままドライズを飲み込んでしまった。

「ドライズウウウ!!」

ドライズを取り込んだスライムはゆらり、とこちらの方を向いて。

「あつ——」

俺の方へ大きく跳躍する。

周囲に影、走っても落下位置から逃れる事は出来ない事を一瞬で悟り。

俺は最早笑うしなくなって潔くスライムに包み込まれた。

視界がピンク色の半液体に染まる。

気道からヌルヌルした物体が侵入してきて気持ち悪い。もつとも、攻撃目的で作っていないので安全性に配慮して呼吸できる仕様だ。

捕まってしまったモノはもうしようが無いので、俺はあぐらを掻いてどうして破滅の光が効かなかったのかを考察する。

そして、スライムの中で手を打った。

このスライムはそもそも“破滅の光”を利用して作り出したマジックアイテムだ。そのため構成魔法陣の中には“破滅の光”制御機構が入っている。宿主に似てじゃじゃ馬な魔力である“破滅の光”を暴走させない為にその機構は想定よりも何倍も丈夫に、耐容量上

限を高く設定してしまったのを思い出して納得した。

ああ、そら効かないわ。

考えている間にも服が溶けていく。

「ばばべべええ!! (助けてええ!!)」

すぐ近くを漂うドライズが半狂乱で叫んでいた。そう言えばドライズは水中恐怖症だった。

とはいえ、俺に出来る事はもう無い。

スライムなので当然水属性だから得意の自爆魔法も相殺されてしまふ。

このまま服を溶かされスライムに取り込まれたまま醜態を晒しつつスライムが暴れ回るのをスライム視点で眺めるしかないのか？

完全に詰んだと思われた、次の瞬間。

凄まじい衝撃と共にスライムの身体が爆ぜ散った。

47話 マジかっけえッス

遠く、視界の隅に一瞬だけ確認した人影。洗練されたスレンダーなシルエットが動く。

そして、微かに聞こえた魔導の名前。

『神風』ッ!!」

ピンク色のゲルが無数の飛沫となって四散する。

ついでに中に取り込まれていた俺とドライズも放り出される。

「ぐべっ」「きやんっ」

変な体勢で放出されたので俺もドライズも受け身をとれずにべしやっとな地面に叩き付けられてしまった。余分なスライムが多少のクッションになったのが幸いだ。

「ふうッ『カーム』……!」

だんっ、と強い音が届く。視線を向けるとそこでは。

血塗れになったナギさんが刀を強く地面に突き立て、片膝をついて休息していた。

『カーム』はナギさんの固有魔法の一つで、緊急自己回復魔法だ。基本的には『サクリファイスの刻印』で酷使しすぎた肉体の修復に利用する。

「はあッ、はあ……ご無事ですか、二人とも!」

数十秒で回復を終えたナギさんが立ち上がり歩み寄って来る。

「無事……では無いかな」

俺は気まずく視線を逸らした。

俺もドライズも、もう完全に服を溶かされてしまってパンツ一枚の状態だ。因みに作っていた時に辛うじて働いた理性のお陰で下着までは溶けない様に設計していた。

「ありがと……ナギさん……」

トラウマを刺激されてドライズはもう瀕死の状態である。大丈夫か主人公。尚、恥ずかしそうに身体を庇っていて中性的な容姿と長い髪に水が滴っているのもあって無駄に艶めかしかった。

「俺からも、ありがとう。でもなんでここに?」

俺の問いかけにナギさんは生き生きとした笑顔で答えた。

「『強者の波動』を感じたのでツ!!」

「便利なセンサー持ってますね」

しかし、駆けつけてくれたのがナギさんだったのは都合が良い。何故なら、戦闘中のナギさんは普段から殆ど服を着ていないに等しい。つまりスライムからはほぼ被害を受けないという事だ!

最も、そのせいで野外だということにここに集まる俺達三人の生徒全員が半裸とかいうアブノーマルな事態に陥ってしまっているが。

さて、ナギさん渾身の奥義『神風』を直撃したスライムだが。爆散した破片がナメクジのように地を這って一点に集まり、再度巨体を形成しようとしていた。

「何者かは知りませんが、私の『神風』を受けて尚立ち上がるとは」
すいません、それ作ったの自分なんです……。

流星に口に出す勇氣は無かったので心の中で謝る。

「え〜いこなくそつ『二連朱槍』ツ!!」

ダメ元でハルベルトをぶん投げてみた。ちびっ子の時は回避していたのだ。それは本能的にこの魔法を危険だと判断したからの筈。

放たれた槍は形を無くし、二つの炎の弾丸となってスライムへと飛んで行き。

ジュツと、少しだけ心地良い音だけ残して消え去った。

俺はポリポリと頭を搔く。

「…………どうすんの、これ?」

最早お手上げだ。

『破滅の光』も効かない。

『神風』ですら少しの時間稼ぎにしかならない。

我ながらなんて化け物を作り出してしまったんだろうか?

これで殺傷能力まであつたら最早クラス3イーヴィル相当である。しかも、環境が悪い。どうにもこのスライムは(何故か)周囲の水分を吸収して巨大化する能力を得ている。

ドライズが魔法の余波で無理矢理晴らしたとは言えついさっきまで記録的な大雨が降っていたのだ。野外は水の宝庫の状態だ。復活

したスライムが、俺よりも脅威とみなしたのかナギさんに向う！

「甘いッ」

ナギさんはスライムの突進を横飛びで華麗に躲し、攻撃後の隙を狙って再び赤い闘気を纏った。

『神風』えッ!!」

嬉々としてナギさんがもう一発『神風』を放つ。

大気を震撼させる程の斬撃で切り裂かれたスライムはまたバラバラになって飛散する。

「くッ、流石に連発は応えますね……」

ナギさんによる足止めも、あと何度できるかも判らない。このままナギさんが戦闘不能になればもうこのスライムを止める事ができる者が居なくなる。

そして障害がなくなったスライムが寮に引き返し流れ込む光景を想像する。洪水の様に寮の中をピンク色の半液体が動き回り、男女平等にあらゆる衣類を消滅させて。

その責任は全て制作者の俺に降り掛かり……。

「社会的に死ぬなあ……」

変態として磔にされて火あぶりの刑に処される自分の姿を幻視して眩暈がした。

三度集うスライム。

気付いてしまったのだが。ナギさんが『神風』でスライムを飛散させると。飛散させた場所にある水たまりから水分を吸収して更に巨大化して戻って来ている気がする。

「心折れそう……」

と、口では言ってみたが。正直もう折れているといっても過言では無い。

そんな、完全に諦めモードに入って居た俺の耳に。

ボソリ、と小さな声が聞こえた。

「……貸し、二つ分」

「えっ?」

俺の右から、一人の少女が前に出た。

紺色のリング状二つ結びにされた髪。薄く開かれた瞳と感情が読み取れない無表情。

「ちよ、レン!!?」

突然現れたレンはスライムの中へ、自ら飛び込んだ!

当然、衣類がすごい勢いで浸食されて溶解していく。

しかしレンは鋭い眼差しを作り、スライムの中で手を振るった。すると、レンの目の前に複雑な魔法陣が展開される!

「あれはッ! 俺がスライムに組み込んだ制御魔法陣!」

レンは冷静沈着に、その魔法陣へと指を伸ばし。

素早い動きで指先を移動させ。

俺はその様子を呆然と眺めていた。

やがて。

スライムの中なのにシャツと鋭く空を斬る音が聞こえて来そうな位力強く指が払われ。

スライムが真っ白な光に包まれる。

「ま、まさか『破滅の光』の制御魔法陣に干渉して耐容量上限を大幅に引き下げたのか!」

そもそもあの魔法陣を作ったのはレンであり、俺はそれを利用、簡単な改造を施したに過ぎない。教員すら凌ぐ魔法陣の知識と技術があるレンなら即興で書き換える事など造作も無いことだろう。

スライムの身体がボコボコと異常な気泡を発生させて。数秒後。

大規模な水飛沫となって内側から破裂した。

スライムが消滅し、レンの身体が宙に放り出されるが彼女は綺麗に地面に着地する。

凄まじい早業だったがそれでも衣類の浸食は激しく、ボロボロの穴あきになって完全に水玉模様の下着が露見してしまっているが。レンはそれを恥じらうことも無く、寧ろ一仕事やりきった渾身のどや顔を浮かべて居て。

ゆっくりこちらに歩いて来るものだから、俺は思わず。

「……あの、これ、どうぞ」

マテリアライズしたコートをスツと差し出した。
するとレンは。

「……ん」

と僅かに頷くと、俺の手からコートをバサアツと大きくはためかせながら受け取り、その勢いのまま羽織る。

そして、

「……任務完了」

と言い残してスタスタと足早に去って行った。

その後ろ姿があまりにも頼もし過ぎて。

「レンさんマジかっけえツス……」

気がついたら、自然に零れ出ていた言葉だった。

こうして、ちよつとした気の迷いが引き起こしたスライム騒動は何とか大事になる前に解決されたのであった。

48話 終わったあ……。

とある昼下がりに。非日常な日常が基本であるこの学園での生活において。その日は珍しく、平和な時間が過ぎていた。

教員側の都合によりこの日の授業は昼までとなり、折角だから部活動で軽くアイテムをいじくって。それもすぐに一段落したので折角午後が空いたのだし最低限の活動もしたからもう自由にしたいです。すから、と寛大なシジアンに許しを貰って。俺は鼻歌交じりに寮へと帰っていた。

その道中。寮は目の前というタイミングで。
事件が起こった……。

「やつすみくやつすみくなあにしよう〜」
積んでるゲームを片付けるか。それともいつそお昼寝をキメこんでしまうか。

この後の計画を気分良く練っていたその時。
強い風が吹き付けた。

「わぷっ」

そして、顔に何かが付く。

視界が遮られ、感じるのは柔らかな感触。

温感はない。すべすべして不快な肌触りでは無かった。

「ん〜？」

何かが飛ばされてきたのだと察し、俺はその物体を手取る。

意外と小さく、布で出来た何かだろうと手触りで察して。

解放された視界で、捉えたその物体は。

「——えっ？」

三角形のシルエット、その底辺中央にちよこんと添えられた小さな可愛らしいリボン。

縁にはレース。優しげなピンク色の布製品……。

どう見ても女性用のパンツだった。

……………。

さーっと血の気が引いていく。

今の状況を客観的に整理してみると、あら不思議。

此処に居るのは、パンツを片手に握り締めて呆然と突き立っている
思春期男子生徒。

断じて。

断じて！

断じて!!

俺自身の意志でこの危険物を手にしている訳では無い。
でも。

傍から見たらそんな事情は判りっこない。

冷や汗が滝のように流れ、心臓の鼓動が早まり吐き気を催す。

落ち着け。落ち着くんた。

ついさつきまで機嫌良く鼻歌混じりに歩いていたが、それは周囲に
人が居ないことを確認していたからだ。この状況、目撃されただけで
アウトである。

「ふうーッ……」

深呼吸。

全ての神経を使って、思考を加速させつつ周囲の気配を探る。

もしも。現時点で誰かに見つかってしまっていたら。

それはもう詰みというヤツである。

見つかった相手が話のわかるヤツである事に最後の望みを駆ける
しか無い。つまり、そのパターンにおいては俺に出来る事は祈る事だ
けだ。

木々のざわめき、遠くに聞こえる鳥の鳴き声、肌を撫でる柔らかな
風。

人の気配は……感じ無い!!

だから、ここから考えるべきは最善のパターン。

一挙一動を無駄には出来ない。

ここは寮の前。人の往来は少なからずある。数秒後に偶然誰かが
通りかかるなんて事は余裕で起こり得るのだ。

この状況を脱する為に俺がしなければならない事、それは「パンツ
の放棄」である。

いや、正確には「パンツを持っていない」風に見えれば良い。
一番手っ取り早い方法は。この、手にしているパンツを思い切り握りしめ圧縮し、ポケットに突っ込んでしまう事だッ!!

俺は五指に力を入れ——ようとしたが、右手の震えがその行為の危険性を警告していて踏みとどまった。

ソレもう言い逃れの出来ないタダの下着泥棒じゃねえかッ!!!

勿論、そのまま着服しようだなんて考えちゃいけない。ほとぼりが冷めたらそつと落とす物箱なりなんなりにリリースすれば良いと思っ

た。

が。
まず、タイミング悪くパンツをポケットに突っ込む瞬間を誰かに目撃されたら。言い訳のしようが無いアウトである。

そしてリリースの時に目撃されることもアウトである。

リスクがッ!! リスクが高いッ!!

完全にギャンブルだ。誰にも見つからない、見つからないという前提であればものの一秒で解決出来る行動だが、見つかった場合の詰みっぷりは現状を遙かに超える。

しかし。

例えばパンツを投げ捨ててその場からとんずらする場合。

まあパンツの飛距離に関しては石をマテリアライズしてパンツでくるんだあと腕力をエンハンス魔法で補強して放り投げれば数十メートルは稼げるだろうが。そんな派手なモーションを取れば人目につく。

今俺は寮から絶妙に離れた位置にいる。仮に寮の一室、窓やベランダから俺の事を目撃しても「手に持っているモノが何か」まで判別するのは難しいだろう。つまり現状において俺がパンツを握りしめていると断定できるキルレンジは極めて短い。

しかし、投擲モーションを取っている姿は離れて居ても明確に補足出来るだろう。

勿論、その姿だけで俺がパンツを取得し、投げ捨てたという行動までは判断出来ないと思うが……。

石をくるんだパンツとか作爲的過ぎて、誰かが意図的に投げたという情報を残してしまう。飛来先に誰かがいた時には飛来した方向から寮方面に投手が居ると割れる。

「寮方面から誰かがパンツを投げた」

「そのタイミングで投擲モーシオンを取っているヤツが居た」

この二つの情報が結びついたとき。

俺は吊し上げられる。さながら、名探偵にトリックを看破された犯人の様に。

それに、パンツが遠くに飛べば飛ぶほど人目につくりスクが上がる。逆に、飛距離が短すぎたら近くに居る俺と結びつけやすくなる。

「ごくり、と生唾を飲み込んだ。」

ここまでの思考は脳を超加速させて大体2秒くらいで済ませられているだろう。

だが、これ以上は余裕が無い。

パンツ片手に固まっている姿を目撃されたら元も子も無いのだ。

ポケットに入れるか。

投げ捨てるか。

どちらかを選ばないといけないッ

どちらも、リスクを孕んだ危ない綱渡りだ。

それでも……俺が取るべき行動は――

ギョツと目を瞑る。

そして。

選択枝を選び、覚悟を決めて。

俺がカツと目を開いた瞬間。

そつと、俺の肩に誰かの手が添えられた。

――……終わったあ……。

心臓が、止まったのかと思った。

49話 忍者かよ

馬鹿な、馬鹿なっ、馬鹿なあッ!!

人の気配なんて無かった筈だッ!!

それが、いつの間に背後を取られていた!?

悔しさに奥歯を噛みしめ。

処刑宣告を待っただけの罪人の気持ちで。

せめて最期に、俺を殺す事になる者の顔を見ようと。

涙ながら、振り返る。

そこに居たのは……。

「お困りですか？ 僕で良ければ力になります」

柔らかく包み込む様な優しい笑顔を浮かべた、黒髪の少年。

クラスメイトのマナトだった。

「っ、く、はーッ、ふーッ」

一瞬で身体力が抜ける。そして呼吸を忘れて居た事を思い出し、貪るように息を吸い込んだ。ひとまずは、即死確定であった女子生徒では無かったのだ。

「脅かすなよマナトッ!!」

と、叫ぶと目立つので小声でマナトに訴える。

「すみません。退っ引きならない様子に見えたので、多少驚かせる事になっても早めに接触するべきだろうと思って」

「はーッ、はーッ、ホントお前ってヤツは……」

四年A組。闇属性専攻、マナト。

人助けが趣味で、毎日ボランティア活動に勤しむ聖人だ。

そして、開口一番俺の事情も聞かずに「力になります」と来たからには。

コイツは敵じゃ無い。地獄にもたらされた、蜘蛛の糸……!

マナトは改めて、俺を見る。

そして視線を俺の手へ移し。

更に寮の方を向いて。

「なるほど。恐らくは、風で飛ばされてきた女子生徒の下着を偶然手

にしてしまい処遇に困っていたという事ですね」

ものの数秒で一切の間違い無く俺の状況を察してくれた。

神か。こいつは。

「百二十点だよ……」

「ありがとうございます」

マナトは基本的に影が薄い——というレベルでは無く、日常的に気配が無い”。

全神経を集中させていたのに俺が背後を取られたのも納得だ。

「でも、すげえ良いタイミングで現れたな……」

ここで出会ったのがマナトでは無かったら。

そう考えると身体が震える。

この偶然の出会いに感動しかけていた俺へ、マナトは笑顔を崩さず答えた。

「”困っている人の波動”を感じたので」

「ホント便利なセンサー持ってんなお前等ツ!？」

なんか、つい最近別のクラスメイトから似たような事を言われた気がする。

「さ、このまま立ち往生していても仕方ありません。本題に移りましょう」

「あ、ああ……」

「モノがモノですので、このまま落とし物ボックスに届けるのはいささか問題があります」

まあ、確かに。

仮に自分のパンツが落とし物ボックスに並び衆目に晒されるといふのは相当気恥ずかしいだろう。更にそこから回収する勇氣は俺にはない。

「ここは、女性方のネットワークに任せる事にしましょう」

「どういうことだ?」

「この下着の持ち主を特定する事自体はそこまで難しくはないのです」

「マジかよ。お前何者だよ」

やっぱり忍者なんじゃないか？

「ですが、それだと僕が下着の持ち主を“知ってしまう”事になるので、やはり異性にこういった情報が漏れる事は女性としては避けたい筈です」

「じゃあどうするんだ？」

「二階以降の適当に選んだ部屋のベランダにこの下着を設置します」

ウチの寮は一階が男子寮、二階より上が女子寮になっている。つまり、適当な女子にこのパンツを見つけさせる事で女性内のやりとりで落とし主へ渡して貰おうという事か。

「でも、どうやるんだよ？ 投げるのか？」

「いえ、僕が壁伝いに登ろうかと」

「忍者かよ」

そういえば前も教室の天井に張り付いていた事があったので遂に言ってみた。

普段気配が無い事も相まって、マナト忍者説が俺の中で産まれるが。

「良く言われますが、忍者ではありませんよ」

良く言われるんだ……。

俺が呆れていると、不意にマナトからある物を手渡された。

「すみません、これで目隠しして貰えますか？」

どうやら即興でマテリアライズしたバンドナ的なモノらしいが、待ってくれ。

「目隠しすんの!？」

「はい。女子寮を覗くわけにはいきませんので」

「でもお前壁登るんだよな!？」

「この辺りの地形は完璧に把握しているので問題ありません」

なんだその台詞。かつこよすぎる。チート系主人公かよ。

マナトの要望通りしつかりときつく目隠しをしてやった。

「では」

準備が整うと、マナトは迷いの無い動きで寮の壁へと近づき、謎の技術で貼り付いて、ヤモリのように壁を登って行く。

しかもこれがまた謎の技術で（恐らく光か闇系統の魔法だろうが）壁の色と同化しておりかなり意識的に目を向けないと姿を捕捉できない。

姿をくらし、隠密に壁をよじ登るその姿は特殊部隊か何かにか見えな。

「やっぱり忍者なんじゃ……」

ともあれ、マナトのお陰でこの一件も無事解決だ。

「一時はどうなるかと思っただぜ……」

あとは壁を登るマナトを見守るだけ。

いやー良かった良かった。

と、安心したその時。

「なッ!？」

マナトがいよいよ二階の壁に手伸ばすと、黄色い魔法陣展開する！

今のマナトは視覚を封じている。俺は思わず声をあげた。

「マナトッ!! 迎撃魔法だッ!!」

マナトの対応は早かった。

俺の声が届くのとほぼ同時に壁を蹴り宙に身体を投げ出す。

対して、魔法陣の方では金属の塊がマテリアライズされていた。

腕のように長い支柱とその先端に銃口を備えた迎撃兵器が、三つ。

「魔導兵器が三つお前を狙ってるッ!!」

空中で身を捻りながらマナトは目隠しを解く。

銃口から一閃、光の線が発射された。

「『グリード』ッ」

マナトの腰から黒い霧のようなモノが発生し、空の一点に集うと浮島のような塊となった。マナトはソレを強く蹴りつけ、空中での軌道を変える。

直前までマナトが居た空間を閃光が通り抜けていった。

「次が来るぞッ!!」

攻撃を回避したマナトを挟み込むように、アームを伸ばした二つの魔導兵器。

それぞれから光線が照射され、交差するようにマナトを狙う！

黒い霧がマナトの足元に集い、マナトは再び跳躍。

更に跳躍した先でもう一度空を蹴り、見事な空中多段ジャンプによって一気に魔導兵器へ距離を詰め。黒い霧が、今度はマナトの両手にそれぞれ集うとそれは二振りの剣を形取った。

『二刀裁断』ッ

振り下ろされる二つの刃。

しかし、その動きとは裏腹に。

三つの魔導兵器に幾つもの筋が走ったかと思うと、次の瞬間にはバラバラの機械片となって爆発した。

そのままマナトの身体は自由落下し、俺の前に着地する。

「警告、ありがとうございます」

「いや、流石の身のこなしだったよ。でも迂闊だったな……まさかあんな魔法が仕掛けてあるなんて」

これではパンツをベランダに設置する事が出来ない。

「別の方法を探すしかないか……」

ため息と共に頭を搔くが、マナトは笑顔で首を横に振るった。

「その必要はありません」

「へ?」

「最初の攻撃を回避する際にあの下着を最寄りのベランダに投げ入れてから離脱しましたから」

「あの一瞬でそんな事までやってたのか!？」

この男、本当に凄まじい。

普段の戦闘においてマナトは基本的にナギさんのサポートに回っている為目立った戦果を上げることが少ない。けれど、今の一連の動きを見ても、ナギさんに匹敵するほどの身のこなしで、相当な戦闘能力を有している事は一目瞭然だった。

ともあれ、一件落着……。

と行くわけもあるまい。

あれだけ派手に騒いだのだから。

50話 ルクシエラさんの椅子だった人

「ほう、私の自慢の防衛機構を撃破するとは。なかなかの腕前なのだな」

「ザツ、という足音と共に寮の玄関から現れる新たな人影が現れた。しかし不法侵入とは感心しないぞ」

小振りな眼鏡の奥に覗く糸のように細い瞳と短く整えられた金色の髪。

女子制服の上から見覚えのある白衣を身に纏い、バッジが示す学年は五年生。

遂に女子生徒に見つかったアーツ!!

と、一瞬驚いたが。

改めて相手の姿を確認して、気付く。俺はこの人と最近会った事がある。

「あ、ルクシエラさんの椅子だった人じゃないですか!」

思わず、つるつと反射的に言ってしまった。

「その覚えられ方は甚だ不本意なのだがっ!!」

ルクシエラさんの椅子にされていた先輩は、髪の毛を逆立てて憤慨する。

「私の名前はイルゼルナだっ! 覚えておくがいい、ファルマ少年!」

「あっ、はい」

反射的に返事をした。

「で、一体何が目的だったのだ? 女子寮にあらぬ幻想でも抱いたのか?」

イルゼルナさんは片腕を腰に当てて俺達に問いかけた。

「言っておくが、そんなに良い所でも無いぞ。特に男子の目が届かない部分というのはおぎなりも良いところだな——」

完全に説教モードになってブツブツ喋っているが、少なくとも俺達の行動を騒ぎ立てるタイプの人間では無い事が伝わってくる。

この人なら真つ当に話を聞いてくれるかもしれない。

「実は——」

俺は正直に一部始終を伝える事にした。

「ハッハッハッ！」

俺の話を聞くなり、イルゼルナさんは声を大にして愉快そうに笑って居た。

「いや、すまない。災難だったな、君も」

「人生終わったかと思いました」

「確かに場合によってはあらぬ容疑をかけられていたかもしれないな」

ひとしきり笑ったあと、イルゼルナさんは目尻に溜まった涙を指先で払い。

「発動した魔導の位置は把握しているから、マナト君が咄嗟に下着を放り込んだ部屋は大体目星がつく。私がアフターフォローを入れておいてやろう」

と、この一件に対して協力的な姿勢を見せてくれる。

「良いんですか？」

「乗りかかった船なのだからな」

「結果論ですが、こうなるのなら初めからイルゼルナ先輩に下着を渡していれば良かったですね。機器を破壊してしまい、申し訳ありません」

マナトは頭を下げるが、イルゼルナさんはニヤリと挑戦的な笑みを浮かべて居た。

「いやいや。防衛機構を突破されたのは私の力不足だ。寧ろ今まで見えなかった弱点が見えて良いデータを得られたよ。感謝するぞ、マナト君」

「そう言っていただけると助かります」

「君の動きは良い検証材料になりそうだ。良ければ今後の調整にも付き合って貰えないだろうか？ 勿論相応の報酬は払うぞ」

俺はマナトとそこまで仲良く無いが、マナトが超弩級のお人好しである事はこの一件でもよくわかって居る。断る筈がない。

「そういう事でお役に立てるのなら、喜んで力をお貸しします」

「うむ。では少年達よ。さらばだッ」

白衣をバサアツとはためかせて、イルゼルナさんは寮へと戻っている。見覚えのある白衣だと思ったが、よく見たらルクシエラさんのモノとお揃いのデザインだ。

「なんつーか、いい人だったな」

あんなまともそうな人が、あの「ルクシエラさんの親友だなんて信じられない。

類は友を呼ぶという言葉は嘘だったのだろうか。

「ともあれ、ああやって笑い話で済んだものマナトのお陰だ。助かったよ」

そもそもイルゼルナさんが現れたのは寮の防衛機構が発動したからであって、あのままマナトに助けて貰えずに一人で行動していたらこんな結果には収まらなかっただろう。

「いえ。お役に立てたのなら幸いです」

きちんとお返しをしなければならぬと考え、俺は閃く。

「お礼に学食でも奢らせてくれないか？」

「ありがとうございます。それでは、お言葉に甘えさせていただきますね」

俺はマナトを連れて学食に向かうことにした。

学食に入ると、俺はちよつとした感動を感じる。賑やかな学食で一人食事を摂ることに抵抗があったのでこれまで意図的に利用を避けてきたからだ。

券売機の前に並んでいると、なんだか凄く学生っぽい気がする。

「んで、何にするんだ？」

気分良く問いかけると、

「では、ショートケーキを」

マナトはそう言つて券売機の一点を指差した。

へえ、ウチの学食ケーキまでおいてあるのか、と感心する。

「俺は……なんか無駄に疲れた気がするしラーメンでも食べよつと」

食券を二枚購入し、カウンターへ。少しだけ待ってから品物を受け取り二人がけの席に着いた。

「いったただつきまゝす」

「いただきます」

勢いよく醤油ラーメンを啜って、驚いた。

普通に美味しい。正直学食の味なんてそこまで期待していなかったのだが。

食レポなんて器用な事は出来ないが、少し濃い目の味付けが好みに合っている。

「へえ、学食も捨てたもんじゃないな」

アリスの一件が解決してから、また昼の食生活が以前のお手軽栄養セツトに戻って居たのでちよつとだけ心が揺さぶられた。

——……ま、結局一人で食べるのは嫌だから使わないだけだ。

他の団体さんとかに気を遣ってテーブルの隅っこに居座る気まぐさは想像するだけで面倒くさい。いつも通り一人でのんびり裏庭の木陰で栄養バーを嚙っていた方が気楽で良い。

「あれっ!? お兄ちゃんが気配を露わにケーキ食べてる!?!」

ふと、下級生が驚いた顔をしてマナトを見ていた。

夕焼け色のフワフワした短めの二つ結びと、くりくりした大きな瞳。バッジから判断出来る学年には一年生だ。

「おや、ユーちゃん。奇遇ですね」

マナトはショートケーキの、手を付けていない部分をフォークで切り取って、

「一口要りますか?」

と、ユーちゃんと呼んだ下級生の方へ差し出した。

「いいの? わーい!」

ユーちゃんはぱくつとフォークに食い付くと幸せそうに緩んだ表情をして。

「おいしー!」

見ているこつちまで顔が綻びそうになるのをぐつとこらえた。

「お前、妹居たんだな」

「ああ、いえ。ユーちゃんは妹というわけでは無く……」

「え?」

俺が戸惑っているとユーちゃんは俺に向けてぺこりと頭を下げた。

「初めまして、ファルマせんぱい」

俺はギョツとして思わず箸を落としそうになる。

「なっ、え、なんで俺の名前を知ってるんだ!？」

見ず知らずの下級生に名前を呼ばれるとは思って居なかった。

「そりゃあ知ってますよ。毎日毎日アーちゃんが——」

何か言おうとしたユーちゃんの言葉が途切る。

何処からか現れたシジアンが彼女を背後から羽交い締めにしたからだ。

「余計な事は言わなくてよろしい」

「あ、アーちゃん、苦しい……」

どうやら二人は面識があるようだ。しかしあの大人しいシジアンが突然パワープレイを見せるモノだから戸惑ってしまう。

「し、シジアン?」

「お食事中にお騒ぎして申し訳ありません。今やっつけるので少々お待ちください」

「やっつける必要性は何処にも無くないか!？」

「でしたらこのまま失礼させていただきます」

シジアンはユーちゃんを学食の奥の方へ引きずって行く。

「ユーちゃんにもお友達が……。ふふ、みんなこちらの国に馴染んで居るようで感慨深いです」

引きずられているユーちゃんへ、マナトは暖かい視線を送っていた。

「妹では無いんだ?」

「はい。あの子は一言で表すと“戦友”の一人です。ただ、仲間内で最も年齢が低く、本人が“妹扱いしてくれ”と言ってああ振る舞っているんですよ」

「へえ……」

マナトとはあまり仲が良いとは言えない。詳しい事情はよく知らないが、ナギさん達と一緒に祖国を出てこの学園にやってきたらしい。

ナギさんは下手したら最上級生に勝るとも劣らない実力を持って

いるがマナトも恐らくは彼女に匹敵する。きっと相応に修羅場をくぐり抜けて来たのだろう。そうで無ければ知り合いの紹介に「戦友」などという言葉を選択はしまい。

人に歴史有りと言うが、きっとマナトもまた「主人公」の一人なんだろうな。

第2部 最弱の八天導師

51話 八天導師を再編する!!

そこには、戦場があつた。

広い部屋に並べられた電子機器とデスク。山積みになった書類。駆け回る職員達は広さの割にとても少ない。

「テラあく。ウチのヨルちゃんが一年の野外実習先でイーヴィルに絡まれて討伐してゐるってえ。あの子次の時間二年生の光魔法基礎の担当だからあ代替して欲しいってえ〜」

「判った、二年の授業にはフォノンを向かわせる」

「ま、マスター!? 私まだ四年生の光魔法応用の小テストを添削しなければならぬのです!!」

横から、ぱつと手が伸びてくる。

「光魔法なら多少知識がある。解答はあるのだろうか? 添削程度ならば問題無いこちらに回せ」

「ユウキ先生大丈夫ですか? 仕事を抱え込みすぎでは……」

「俺に休息は必要無い。振れるモノは全て回せ。だが、流石に身体は一つしか無いからな。限度はあるぞ」

そこへ、鳴り響く電話の音。

「ティアロ様、ルクシエラさんがまた魔法の巻き添えで公共物を消滅させたらしく損害賠償請求が届いています」

「またか!?いつもの手続きでワシの口座から賠償しておいてくれ!!」

「ティアロ様。自治体からクラス3イーヴィル出現の報告と討伐依頼がきています」

「イクスカアイルを向かわせるのじゃ!」

「マスター。お二方とも既に出払っております」

「な!?だ、誰か手が空いている者は居らぬか!」

この学園では日常茶飯事な光景だ。



そんなある日の事。

「……ジン、ティア、ユウキ。決めたぞ」

ふと、両手を組んで、眉間に寄せた皺へ親指を宛がっていたティア口は立ち上がる。

名を呼ばれた三人には、何事かと意識は向けつつも手元の仕事を片付けることに精一杯で視線を送る事はしない。だが……。

「八天導師を再編する!!」

テラが続けざまに発したその言葉が聞こえると同時に、三人の指先がピタリと止まった。

そして、ゆっくりとティアロの方へ顔を向けて。

苦渋の決断の意思が表れた苦い表情のティアロの様子から真剣さを悟り。

——……三人同時に首を傾げた。

「何だ、その八天某とは？」

「聞いた事ありませんが、再編という事は一度組んだのですか？」

「八属性が関係してるのかなあ？」

そんな腹心達の反応をみてティアロはあつと声を漏らし、

「そう言えば以前はお主等の死後に作った組織じゃった……そりゃ知らんわな」

と頭を搔いて。

「八天導師とは、八属性からそれぞれ一名ずつを選出し構成される精鋭魔道士の集団でワシが直轄する魔導管理組織の事じゃ」

「そんな組織作ってたのお？ でもなんで今は居ないのさあ。お仕事すつごい大変でえネコの手も借りたいぐらいなのにい」

ジンが小柄な上体を椅子の上でゆさゆさ揺すって頬を膨らませテラに不満げな視線を送る。

「構成メンバーに問題があつてのう。『学園』という雛形の悪影響がもろに出てしまつておるんじや」

ティアロの言葉を聞いて、ジンは何かを察した様に頷いた。

「あ、判つたあ。要するにいメンバーの殆どが『生徒側』に配役されちゃつてるんだねえ」

「うむ……。生徒に負担をかける事は出来る限り避けたかったじゃが……ジンの言うとおりにネコの手でも借りたい状況じゃ。最早割り切るしかあるまい」

そしてティアロは電子端末を操作するのであった。



その日は休日だった。早朝、携帯端末に学園からメールが届いていて確認してみると文面には「午前十時校長室に訪れるように。重要な案件なので詳細はそこで伝える」というものが。

想像してみたい。そんなメールを朝っぱらから目にした学生の心境を。

「あ、あわわ、あわわわわ」

メールを確認した手が震えていた。だってそうだろう。まさかの休日呼び出し、しかも校長室だ。どう考えても説教とは思えない。しかも、俺はつい最近ちよつとした事件を巻き起こした所。心あたりありまくりなのである。

それだけでも大変なのに。俺の心音はどんどん激しくなっていく。首筋の裏がすうつと寒くなって嫌な汗が止まらない。

何故なら……。俺は前日、酷い夜更かしをした。漸く就寝したのは午前四時。

そう。俺は今、起床したての寝ぼけ眼でメールを確認し。そしてその内容に戦慄し、更に現在時刻に絶望したのだ。

午前九時五十分。

もう、あと十分で指定時間なのである。

「うわああああ!! もっと早く連絡してくれよおお!!」

二段ベッドの下段から転げ落ちるように跳び出す。慌てて制服を身に纏い、もうボタンを絞めるのもめんどくさがって紅いボサボサの寝癖もそのままに寮室を出て。

「着替え最短で五分ツ!! 学校までダツシュで三分!! 校長室は最上階、階段駆け上がってえええつと、だいたい四分くらいって間に合わねえええ!!」

と叫びながら寮の廊下を駆け抜けていった。

仮に、もしこれが俺の危惧しているような説教話なら。

——…いや、そうじゃないにしても教師からの呼び出しを遅刻するのは問題なのだが、説教だとするともう最悪だ。心証悪化というレベルでは無い。教師への宣戦布告、喧嘩を売ってるレベルであろう。ただでさえ一悶着を起こして立場が悪いのにこれ以上追い詰められるわけには行かない。

何より問題なのは、俺の失態でルクシエラさんに迷惑が掛かってしまうことである。ルクシエラさんのコネによって入学した身で問題を重ねればその顔に泥を塗ることになる。

それだけは絶対に避けたかった。起こってしまった事を今更どうにも出来ない。ばれてしまったのならば事件を引き起こしたことは全面的に認めつつ、とにかく頭を下げるしか無いのだ。

上り階段を数段飛ばしで無理矢理よじ登っていく。腕時計に目を落とせば時間は九時五十九分。まだ、まだギリギリ間に合う。学園の時計と腕時計にある数十秒の誤差を考えれば辛うじて遅刻判定は回避出来る筈だ!!

乱れた服で息を切らし、横スライディングで辿り着いた校長室の前。

あからさまに慌てた様子で入室しては、ギリギリでやってきた事がばれてしまう。

俺は深呼吸を数回行い、手ぐしで髪を溶かしつつ制服を整えた。落ち着くと、これから問い詰められるであろうという予想が緊張を掻き立ててくるがもう時間的猶予は無い。

意を決して扉をノックする。

「四年A組、ファルマ。失礼します」

俺は扉を開いた。

そして――

「あら、やっぱり最後は貴方でしたの」

「あ、ファルマも呼ばれたんだ……って、何そのだらしない格好。さてはさつきまで寝てたな?」

聞き慣れた声が二つ。

そして、上級生から下級生まで、計八対の眼光が俺に集中する。

最上級生学園主席、アイルを筆頭に。

最上級生、イクリプス。

最上級生、ルクシエラ。

五年生、イルゼルナ。

同級生、ドライズ。

同級生、レン。

同級生、アーシエ。

下級生、シジアン。

それぞれ、優秀な人材が集まるこの学園の中でも特に秀でた能力を持つ魔道士達。

そんな彼らの視線を感じ、そしてルクシエラさんが零した。最後は貴方”という言葉の意味を即座に解釈し。俺はモノの数秒で結論に至った。

「すいません、部屋間違えました」

52話 人手がツ!! マジで足りんのじゃ!!!

校長室に入ると下級生から最上級生まで、複数人の生徒が集まっていた。そうそうたるメンツでとりあえず優秀な人間が集められている事を直感する。俺がそんな人間に交じって呼び出されるなんて考えられない。

「お邪魔しました」

ペこり、と流れるようにお辞儀をして扉を閉め、

「いや、この部屋で合っている。お前が最後だ。早く中に入って貰わないと困るんだが」

ようとした所に、がっとイクリプスさんの足が扉の間に差し込まれ鋭い視線を向ける。身長差が三十cm近くあるため威圧感が凄い。

「え、ええ……何かの間違いでは……場違い感半端ないんですけど……」

「異議申し立ては後ろに居るテイル爺に直接問うがいい。俺は与えられた指示に従うまでだ」

と言われ、

「へ、後ろ?」

と振り向くと、そこにはこの学園の校長兼理事長、賢者ティアロ先生が立って居た。

「うむ、丁度揃ったようじゃな。ではこれから用件を話す」

「えっ、えっ、えええ……」

結局俺はそのままひょいっと校長の小脇に抱えられ校長室へと連れ込まれたのであった。

八天導師とは。嘗てティアロ校長が世界の適正な魔法使用と運用管理を行う為に創設した私営組織で参加者達は各々が取り持っている研究への設備、材料、費用を援助する代わりにティアロ校長が指示する職務、主に魔法を悪用した魔導の取り締まりや、暴走した古代魔法の削除・討伐を行ってきた。

と、校長が説明する。

「その八天導師を、この学園に改めて開設したいと思ひ皆に声をかけ

たのじや」

話を聞いて、ひとまず胸をなで下ろした。どうやら少し前の事件についての詰問、説教の類では無かったようだ。

「つまり、私達にティル爺が抱えている雑用を押しつけようという魂胆ですわね?」

ルクシエラさんがティアロ校長を糾弾するように視線を突き刺して言う。すると校長は、

「ワシとて生徒に負担をかける事は本意では無い。じゃが——」

俯き、手の平を握り込み、僅かに震える。そして抑圧された感情を放出するように叫ぶ。

「人手がツ!! マジで足りんのじや!!」

「現在、総生徒数70名に対して教員数が十五人。クラス担任だけですらぎりぎりの状況、ですか」

シジアンは、いつも抱えている巨大な本のページを繰りながら補足する。そんな情報まで記載されているとはあの本は一体なんなんだろうか。

「爺さんが気に入った奴ら手当たり次第入学させるからそんな事になるんだぜー?」

「しようがないじやろう!? ワシが知らん間に増えてる生徒も居るのじやぞ?!」

それは管理者として大問題なのではないか? という疑問を誰もが抱いたが年甲斐もなく涙を浮かべている校長の姿に思わず言葉が引っ込んだ。

「ともかく、現状ワシは学園の管理で手が回らん。じゃが、周辺諸国からはイーヴィルの討伐・魔導遺物の調査・魔導不正使用組織の検挙などの依頼が押し寄せているのじや」

魔導師の問題は魔導師しか解決することはできない。だが、優秀な魔導師の多くがこの学園に集まっているため一般人では対応しきれない高度な問題はティアロ校長の元へ依頼としてやってくるのだという。

「今まではワシの弟子であるアイル、イクス、ルーシーの三人に分担し

て対応して貰っていた。じゃが、最近の物量は三人でさばける許容を越えている。再編する八天導師にはこの仕事を引継ぎ、一人当たりの負担を軽減して貰いたいのじゃ」

テラの説明を受け、ルクシエラさんの表情が柔らかくなった。

「つまり八天導師に参加したとしても私としては今までと状況が変わらないどころか負担が減るといふ事ですわね？」

「そういう事じゃ。もちろん、これは本来ワシが片づけるべき任務になる。更に、内容によっては身の危険も十二分に起こり得る。故に、正式な対価として相応の報酬を用意するつもりじゃ。また、任務による欠席は該当時限の出席単位として扱う」

学園の活動とは別に完全に独立した組織として任務が課せられる代わりに、報酬をもらえる上に授業が免除になる、という学生には魅力的な条件が提示される。

だが、その内容に対しておずおずと手の平をゆっくり下から伸ばして発言する者がいた。

「あ、あのう。それでも、私たち学生が高クラスのイーヴィル討伐やその、犯罪者たちの検挙を行うというのは危険なのでは……」

至極真つ当な疑問である。それに対して校長は真剣に、落ち着いた様子で答えた。

「その通り、確かに危険じゃ。じゃが、ここに集めた者達はこの学園の中でも特に優秀で、この案件を任せるに相応しい実力を持つとワシが判断して呼びかけた。君たちならば十二分に役目を果たしうると信頼しておるのじゃ」

学園の長たるティア口に、冗談や建前ではなく真摯に信頼を向けられて、悪い気がする者はそういない。

——……事、この場においては約一名を除いて。

「なるほど、話は分かりました」

うんうん、と腕を組み深く頷く。俺は妙に自信と納得に満ちた態度で言う。

「ここに集められた生徒は九人。八天導師という名称からして校長が優秀な人材として選出なされたのは八名」

そう、イクリップスさん、ルクシエラさん、アイルさん、イルゼルナさん、ドライズ、レン、アーシエさん、シジアン、そして俺とこの場には九人の生徒が居るのだ。

「つまり俺は部外者、別件で呼ばれたと言うことですね。外で待機してます」

と勝手に納得し、流れるように退出しようとしたところを、

「じゃからお主もメンバーじゃと言っておろうが」

むんずと首根っこを校長に捕まれつり下げられる。

「いやいやいや、校長なら俺の成績知ってるでしょう？ 中の下ですよ?? 優秀とかおかしいじゃないですか」

ぶらーんとぶら下がったまま抗議するが。

「紙面の成績だけを基準に選んだ訳ではない。お主がたった一人でクラス3相当のイーヴィルを討伐したこと、ワシが知らぬ訳が無かろう?」

校長のその言葉に、俺は目を丸くし言葉を詰まらせた。

「なっ」

同時に、他の面々がざわつき始める。

「へえー。見かけによらずやるねえー。さすが姐さんのお気に入りだー」

アイルさんが見直すように笑い、

「ふふんっ、もつと誉めてもいいのですよ?」

ルクシエラさんが嬉しそうに無い胸を張って、

「相変わらず親馬鹿ならぬ師匠馬鹿なのだ、君は」

その脇腹をイルゼルナさんがつつき、綺麗にカウンターの関節技を喰らって。

とにかく、俺に注目が集まってしまった。

だが、俺は冷や汗を浮かべる。校長の評は決して「真つ当な真実」とは言えない。一人でイーヴィルと倒した、というのはアリスの一件について言っているに違いないが、俺は自分に出来る全ての魔導を尽くして戦い、完全敗北したのだ。勝負を決めたマジックアイテムは他人の力の集約。即ち、俺の実力ではない。

それをさも俺の手柄のように認知されることは非常に居心地が悪かった。

「ちが、俺はっ——」

思わず反論しようとする俺の口を、校長が押さえ封じる。

「むう!?!」

「今、この場で多くは語るまいて。異議申し立てはきちんとして後で聞き受ける」

校長の言葉に、口を封じられながら俺は顔をしかめる。今この場で訂正しなければ、意味がない。後から校長にだけ真実を伝えようとも、ここに集まった他の生徒達はすでに解散しているだろう。それでは誤解を解く事が難しい。

そうなってしまうえば、ここに集まる「本当に優秀な魔導師」達に「同じく優秀な魔導師」として見られてしまう。

世間からの評価が高いこと、それは喜ぶべき事だろうか？ いや、違う。それが努力や才能に裏付けされた真実の評価ならともかく。単に運や偶然、他人の力だけで達成された結果を誇張されて認知される事はデメリットでしかない。

なぜならそんな張りぼてのような評価などいずれボロが出て真実に気づかれる筈だからだ。自身が本当はそんなに優秀な人間ではないと。

俺の評価が勝手に浮き沈みするだけなら問題はない。だが、それに伴って、ルクシエラさんの評価まで上下してしまう。

ルクシエラさんに余計な迷惑はかけたくない。俺は必死にもがいたがティアロの手をはずす事は出来なかった。

「当然、割り振る任務の内容も留意する。実際、ここに集まった者達は各々単独で相応のイーヴィルと対峙し討伐を果たした経験のある者が大半ではあるが、だからといって平時から単独でクラス3イーヴィルと討伐せよ等といった無理難題を押しつけるつもりは無い。そのあたりは基本的にワシ自身やイクス達の領分として片づけるし、どうしても討伐が必要な場合は三人以上のチームで動いて貰う」

もがく俺を押さえ込みながら、校長は説明を続けた。

「そして、今この場にいる九人じやがイクスは八天導師には数えん。イクスには独立した存在として、別件の仕事を引き受けて貰う。……ややほの暗い内容のな」

「なるほど、今まで私たち三人が押しつけられてきた課題を改めて整理し、比較的簡単なもの、単純なもの等をこちらに、それ以外のちよつとした問題がある者をイクスに任せるといふ事ですわね?」

「その通り。イクスはワシの右腕として、そしてお主等八天導師達はワシの左腕として働いて貰いたい。八天導師全体の統括を行うリーダーにはアイルを指名する。そしてサブリーダーにルーシーを指名。組織の運用方針等は二人で相談し、最終判断はアイルが下すように」
だんつと床を踏みつける音が響いた。

つい先ほどまで穏やかな表情をしていたルクシエラさんが突如苛立たしげに強く床を踏んだのだ。

「ちよ、待ちなさいな!! なんで私がアー坊の下なんですか!? 年功序列じやありませんわ!!」

ティアロの弟子としての遍歴は、ルクシエラさんとイクリップスさんの方が長いらしい。それなのに立場が逆転する事に憤りを覚えたようだ。

が。そんなルクシエラさんの訴えを校長は一蹴する。

「そんなもん理由は簡単じや。お主のようなじやじや馬に権力を与えたら組織を私有化して乗っ取るじやろうが。果てにはワシの任務よりお主個人の研究に人員を裂きかねん」

「うっ、ぐ、それは……」

凶星をつかれたルクシエラさんは半歩のけぞる。

「お主達の負担軽減の為に設立するとは言え、お主の小間使いを増やす為に作る訳ではないのじや。故にリーダーはアイルが相応しい。これにて真面目なやつじやからな」

普段から奇声を発して上空を駆け回る奇行が目につくが、師匠である校長がそう言うのだからアイルさんは真面目な人間なのだろう。

「概要は以上じや。ここからは、組織参加に関する個人面談を行う。何度も繰り返すが決して報酬がいただけるのアルバイト、なんてもので

はない。どうしても危険が付きまとう仕事じゃ。辞退する事を止めはせん。それを含めて、各人の意見を聞きたいと思っている。――まづは、この、言いたいことが多すぎると言わんばかりに口をもぐもぐさせているファルマからの」

校長は俺をつり下げたまま、校長室の扉を開いた。

「面談は横の応接間で行う。順番に呼ぶので待機していてくれ」

そして、俺をつれてすぐ横の応接間に入るのであった。

53話 俺は、弟子じゃ無いです

「ちよつと!! どういう事ですか!!」

応接間に放り込まれるなり、俺は校長に詰め寄った。

「落ち着け、まずは何について意見があるのかをしつかり述べよ」

「俺がイーヴィルを討伐したって話ですよ!! 校長はどこまで知っているんですか!？」

校長は俺にお茶を差し出しつつ、自分自身もティーカップを持ち上げずする。

「無論、一部始終、隅から隅まで把握しておるわ。お主がイーヴィルに狙われた事、そのイーヴィルがアリシアを核として顕現したこと。とどめを刺した魔導が『破滅の光』であつた事、全てな」

「だったら何で!! 俺がイーヴィルを一人で倒したなんてみんなの前で言つたんです!! 俺の切り札の正体まで知ってるなら、それが俺の技術や能力で作られた訳じゃ無いって事も知ってるんでしょ!？」

まくし立てる俺に、校長はもう一度強調するようにティーカップを差し出して。

「落ち着け、と言っておる」

と、今度はやや強く言った。

俺は思わず怯み、そしてバツが悪そうにソファへと座り直してティーカップに手を伸ばす。

「あれは建前じゃ。ワシとて、純粋な実力だけでお主を選出した訳ではない」

「つまりどう言うことですか」

「お主には、成績なんて関係無い面での役割を期待して声をかけたのじゃ。じゃが、お主が自白したとおり成績面では決して優秀ではないお主があの場合に居ると、怪訝に思う者も出るじやろう。故に、建前として『実績』が必要だったのじゃ」

ティアア口様の言葉に、納得出来ない。

「そんな張りぼての『実績』すぐにボロが出てばれるに決まってるじゃないですか! それでルクシエラさんに迷惑が掛かったら——」

「その、ルーシーが問題なのじゃ
「え？」

「改めて、お主に要請する。ワシがあゝの組織にてお主に求める役割。
それは……」

「それは……？」

「ルーシーの手綱を引いてほしいのじゃ」

「ちよつとまってるなに言ってるのこの若じい」

あゝ、傍若無人を擬人化したような人の手綱を引けと？ 改めて、
なにを言っているんだこの人は。

「お主……口の悪さがどんどんルーシーに似てきておらんか……？」

「いやいやいやおかしいでしょう!?! 手綱って、俺にあゝの人の制御が
出来るわけ無いじゃありませんか!!」

まさかそんな事を言い出されると思っていなかった。当然再び取
り乱す。

「いいや。あ奴はお主を溺愛しておるからな。お主の言葉なら多少は
耳を貸すはずじゃ」

「その情報のソースいったい何処から来たんすか……」

「本人からじゃ」
「えっ」

「赤子の頃から世話をしておるのじゃ。それくらい見ただけで判るわ
い」

校長は過去を懐かしむように一瞬虚空へ視線を向ける。

「ヤツは昔から、殊更“身内”というものを大切する子じやつた。そ
してそれはお主やドライブズという“弟子”も例外では無い」

校長の言葉を受けて俺は目を逸らした。

「……俺は、弟子じゃ無いです」

俺にとつてルクシエラさんは大切な先輩だ。いくつも恩義があり、
直接口で言ったりはしないが俺はルクシエラさんの事を本当に尊敬
している。

だからこそ。特別でない自分が彼女の弟子であると認めることが
出来ない。それによって彼女が、平凡で才能のない人間を弟子にとつ

たと。こんな奴があゝの『生ける天災』の弟子なのかと。彼女の評判を下げてしまうから。

だから俺はずっと、何度も否定してきたのだ。

「お主があやつをどういう風に慕おうとそれはお主の自由じゃが。あやつは既に公的な書面にドライズとお主が弟子であると申請しておるぞ。流石にそこは諦めよ」

「初耳なんですけどおっ!!?」

え、何!?! 公的書類に勝手に弟子として登録されちゃってるの俺!?! 「お主は『ルーシーに選ばれた』のじゃ。あやつは、お主を必要としておる」

言われて、胸が詰まった。

——俺が、ルクシエラさんに必要とされている……?!

「今に始まった話では無いぞ。あやつにとつてお主の存在は、決して小さなモノでは無い。ある日突然、嬉しそうにお主を連れて来た日のあやつの顔は今でも忘れられん」

お世話になつてばかりで。今まで色んな迷惑もかけてきて。それでも変わらず笑つて俺を受け入れてくれる。そんな想いに報いたいとずっと思つて居た。

こんな俺でも、あの人の為になんか出来るのだろうか?!

「凡庸な我が身を呪う気持ちも判る。ワシも同じじゃつた」

「校長が凡庸、ですか?」

「ああ。ワシ自身の才能などルーシー達と比べれば十分の一もあるまいて」

「賢者とか言われているのに?」

大地の賢者、ティアロ校長先生が凡庸だなんて想像が付かない。

「長く生きていれば、誰しもそれなりに賢しくなるものじゃ。ワシと同じ時をかけ同じ経験を積みば誰だってワシに並び立つであろう。と、少し話が逸れたな」

校長はティーカップに手を伸ばし、一口含んで。

一呼吸置いてから続けた。

「ルーシーの事だけではない。お主の存在が助けとなる者達は他にも

居る。凡庸でも構わん。お主という存在が支えとなるのじゃ。どうか良く考えて決断して欲しい」

俺はその後言葉を発することは無く。ただ、答えを探し求めるようにティーカップの中身をのぞき込み。ごくりと、一気に飲み干した。

「……まあ、少しは納得しましたよ」

ルクシエラさんの手綱を引く、とまではいかなくとも。確かに俺ならルクシエラさんを多少諫めること位は出来るかもしれない。

そして立ち上がり。出口の方へ数歩進んでから。

「……引き受けます」

と、背中であげた。

内心、まだまだ揺れていた。自分のような人間があの場合に居てもいいのだろうか。けれど、ルクシエラさんやドライズと共に居られるチャンスならば、逃す訳には行かないのではないか。しかし自分のせいで二人に迷惑が掛かるのでは。

悶々と、ぐるぐると、思い悩んでいた。そして、そんな自分ではきつと答えが出せないまま、時間だけが過ぎてゆき結局機会を逃すのだと判っていた。

だから。

“なにもしなかった後悔”はしたくない。せめて、自分で選択した行動の果てに後悔をしたい。そう思い立ち、内心では選びかねていても。

まるで自分自身を追いつめるように、そう答えた。

この葛藤を、この決意を、ティアア口先生へ面と向かってぶつけられないところが、俺の弱さである。

「……協力、感謝する」

校長の返事を確かに確認して、俺は応接室を出ていった。

53. 5話 ストーカーではありませんっ！

「うふふ、えへへ」

寮のとある一室で。ボクはベッドに寝転がり一枚の羽根を見つめてにやけていた。テーブルに座ってパソコンで動画を見ていた同室の女子生徒は呆れた様のため息を吐く。

「アーちゃんよ、また日がな一日中そうやってにやけているつもりか？ それももう何度目になる？ 流石に気持ち悪いぞ」

ふわふわした夕焼け色のツインテールに、室内だと言うのに軍帽を被った少女がキリツと鋭く冷たい視線がボクへ向かう。

ムスツとして言い返した。

「休日は日がな一日中実姉の動画を視てニヤけているユーちゃんに言われたくはありませんが」

ユーちゃんは痛い所を突かれたと言わんばかりに視線を逸らした。言われた通り、今まさにアイドル活動している実の姉のライブ動画をパソコンで眺めていた所だ。

「八天導師、だったか。柄にも無く随分と嬉しそうじゃないか」

ボクが眺めていたのは、八天導師である事を示す勲章だ。真っ黒な羽根飾りは八天導師の一翼、黒天の証である。

「当然です。八天導師は“ボク”を受け入れてくれた——ボクが“ボク”であって良い居場所なのですから。正直この学園にはマナトさんを始め閨属性専攻でボクよりも優秀な魔導士が揃っているのです、ティア口様にまた選んで貰えるとは思って居ませんでした。他のメンバーを見るに、本来の構成員を崩さずに再編した様子ですね」

ニヤけた顔を戻し切れないまま言葉を紡ぐボクの様子に、
「居場所、か。君がそこまで嬉しそうに言うと言う事は……またあの先輩“絡みか？”」

ユーちゃんことユウサリはからかう様にニヤリと笑って問いかけた。
「……相変わらず鋭いですね」

「ハハハッ！ 君の様子を見ていれば私でなくても判るモノさ」

過去を思い返して瞳を閉じる。

「先輩が八天導師であつたからこそ、ボクは『ボク』になれた……八天導師とはボクにとっては先輩と同じくらい大切な『前提』なのです」

ボクは『八天導師』という組織に強い感謝を抱いて居た。嘗て存在した『八天導師』こそ、ボクが『シジアン』という人間になれた切っ掛けを作ってくれたからだ。

「ま、称号や地位に思い入れを持つ気持ちもわからなくも無い。私とて、今や無意味な肩書きだが『魔導將軍』の名に誇りを持っているし、嘗て同じく將軍だつた先輩達との絆は強いモノだと思つている」ふと、ユーちゃんは思い出した様に首を傾げる。

「ところで先輩と言えば、アレはどうしたんだ？ 確か前言つていたよな。『先輩に危機が訪れているから、無礼を承知で本体に登録させて貰つた』と。『異伝』だつたか？ 登録者の日常生活から経験した事まで、全てを自動で記載していく書物。その登録は切つたのか？ もう危機は去つたのだろうか？」

言われて、ボクは自分でも判るくらい露骨に目線を逸らした。

無言の返答にユーちゃんは察する。

「……切つてないな、君」

答えない。

ユーちゃんはジト目で追撃した。

「意味も無くそんな魔法を発動し続けるのは、最早ストーリーカードと同じだぞ？」

「うぐっ」

後ろめたさに思わず呻いてしまった。

「しかも他人の生活を読み耽つて悦に入つて無いだろうか？ そうだともう完全に言い逃れの出来ないストーリーカードだからな？」

「ぐうっ……！」

ボクは先輩が『イーヴィル・アリシア』さんに攻撃されている事を悟つた。けれど一人で戦おうとしている先輩の意志を尊重して影ながらバックアップできるように自身の本体である書物、『異伝』に先

輩を仮登録した。

幸い、ボクの横槍は必要無く先輩はアリシアさんを助ける事に成功したが、その後倒れた二人の救援をスムーズに行えたのもこの魔法によってボクが先輩の動向を常に見張っていたからだ。

だからそこまでは、無意味な発動にはならなかった。

……………が。

今尚その登録を続けて居るのは、完全にボク個人の趣向によるものだ。

元々は危険が無いように監視する為に行った施策だが……手の伸ばせる距離にあるものにはいけないと判つていてもついつい手が伸びてしまうのが人情じゃないですか？

ボクは欲求に負けて、先輩という人間の“人生”を読み始めてしまった。

なんて事は無い、先輩という人物の日常を書物という形でなぞる、それだけで最高の娯楽になったのだ。

“異伝”は現在だけではなく“過去”も記載するからボクが知らない先輩の姿を知る事も出来た。

気がついたら読み耽つていた。だから、ユーちゃんの指摘はズバリ凶星で。ストーカーに片足を突っ込んでいる自覚があった。

「踏ん切りがつかないなら私が監督してやろう。今、切りたまえ」

ユーちゃんが席を立ち、ベッドのシジアンの方へ近寄る。

「い、いや、しかし、先輩は元々無茶をしがちな気風です！ またいつ、突然危機的な状況に陥るか判りませんし、こうして予防線を張っておく事の意味はある筈です！」

食い下がるボクの両頬を、ユーちゃんは引っ張った。

「脆い理論武装は辞めたまえ。本人に許可を得ているならともかく、無断で監視する予防線などただのプライバシー侵害だ。第一、可哀想だとか申し訳無いとか思わないのかね？ 生活の全てを自動で記録するという事は他人に見られたくないような行為も君に筒抜けと言う事じゃ無いか」

「うぐぐぐ……」

「さ、今やるぞ。すぐやるぞ。本を出したまえ」

ユーちゃんに詰め寄られ、観念したボクは渋々両手に抱える程の巨大な本『異伝』を取り出して先輩の——ファルマの登録を抹消した。「まだ最後まで読んで無かったのに……」

名残惜しそうに白紙になったページを力無く繰るシジアン。

「最後まで読む気だったのだな……」

ユウサリはやれやれと肩をすくめた。

「しかしまあ、判らんものだな。そこまで『先輩』に強い好意を持っているのならば告白してしまえば良いじゃ無いか。男女の恋愛とは秘め通すものなのか？」

マナトさん以外男性の居ない国で育ったと聞くユーちゃんには男女の恋愛観があまり良く判らないらしい。だが、ボクが先輩に対して距離を取った姿勢を取るのはボクが特殊なだけだ。

それくらいは自覚している。

「ボクは別に、先輩と恋仲になろうとは思って居ませんから」「何故だ？」

「ボクには先輩を幸せにするだけの器量がありません。もっと相応しい人が先輩の前に現れる筈です。ボクの幸せは先輩の幸せ、その邪魔をするような事などしたくないのですよ」

強い意志を宿した眼差しでそう言い切るボクに、ユーちゃんは苦笑いを浮かべた。

「君も面倒な性格をしているなあ」

そんなユーちゃんの頭上に手を伸ばし、

「帽子一つでコロコロ性格が変わるユーちゃんと言えたことでは無いと思いますがつー！」

素早い手つきでユーちゃんのトレードマークである軍帽を奪い去る。

するとキリツと鋭かった目つきがほんわかまん丸になって。

「あ、ちよ、勝手に取るなあ〜！」

先ほどまでとは別人のような口調でユーちゃんが憤慨する。

「散々弄り倒されたお返しですつー！」

ボクはユーちゃんの両頬を引つ張り返して言った。

「ひよもひよもあーひゃんがふほーはーふるはらひへはひんへひよ!!
(※訳・そもそもアーちゃんがストーカーするからいけないんでしょ!!)」

「ストーカーではありませんっ！ 多分辛うじて!!」

ボク達はベッドの上でじゃれ合うように互いの顔を引つ張りあうのであった。

くだらない喧嘩に見えるかも知れないけれど……同じ年頃の友達とこうやって触れあうというのはボクにとってはとても新鮮で。ユーちゃん——ユウサリは良いルームメイトだと思ってる。

54話 助けてっハル君……!!

夢を見た。

アリスが笑っている。

今まで何度も――

「つてそれはもう良いんだよっ!!」

ガバツと俺は上体を起こして目を覚ました。

「まだアリスの夢見るのか……意識しすぎだろ……」

あれだけ色々あったのにまだアリスに未練を残している事を突き付けられたような気がして胸が苦しくなった。

「……二度寝しよ」

ため息交じりに、俺はもう一度眠りについた。

……。

「アリスが泣いている」……。



突然の事だった。

この日は休日で、彼女は街に出て買い物をしていたのだが。

ふと違和感を感じた。

気がつけば大通りだと言うのに人通りが全く無く。

「何これ、気味が悪いね……」

嫌な予感がする。アリスはキョロキョロと周囲を見渡した。

いつの間にか霧が立ちこめていて遠くがよく見えない。

ゾクゾクと悪寒を感じる。

嫌な予感、良く無い気配を本能が察知する。

「と、とにかく帰らなきゃ……」

学園へ戻る道を進もうとしたその時。

静かで不気味な世界に一つ浮かぶ影を見つけた。

「っー」

霧に隠された影が少しずつ近づいて来る。

自分以外の人間を見つけて、感じ取ったのは――危機感。

アリシアは殆ど直感的に駆け出していた。

その直後だ。

『タイダル・ウェイブ第四水流魔法』

霧の奥から突如津波が発生し、大通りの全てを飲み込む！

「きゃあ!?!」

津波に押し潰されながら、アリシアは驚愕する。第四階級の基礎魔法が詠唱無しで飛んで来たのだ。かつてイーヴィルとして無数の魔導士の願いという膨大な魔力を背負った自分が、『ナイトメア・ダークマインド』の発動下において漸く出来た程の芸当である。

それを、謎の人物は事も無げにやってのけたのだ！

津波が引いていく。アリシアは何とか立ち上がって、とにかく走った。

服が水を吸って重たい。折角買った物も置き去りにしてしまった。どうして突然こんな事になったのか、訳が判らない。

けれど明確に、敵意或いは悪意を感じる！

イーヴィルであった頃のアリシアは、『ナイトメア・ダークマインド』を利用して様々な攻撃魔法を無理矢理使用していたが彼女本来の役割（ロール）はヒーラー兼サポーター、即ちバリバリの後方支援タイプだ。

今のアリシアに直接戦闘は殆ど出来ない。

だからこの状況では逃げる事しか出来なかった。

『アクア・バレット第三水流魔法』

凝縮された水の弾丸が背後から放たれ、頬を掠めていく。

幾つもの弾丸が放たれ、時に地面を、壁を穿つ。

わざと直撃から逸らしているように感じ取れた。

「なんで、なんで!?! どうしてこんな——」

相手の正体も判らないまま、理不尽に攻撃を受け、逃げ惑うしかない。

自分と敵以外に誰も居ない世界、孤独感が恐怖と不安をより強くする。

無意識に身体が震えていた。気がつけば涙が滲んでいる。

遂には足がもつれて転んでしまった。

「あうっ!？」

ダメだ、早く立ち上がらないと追いつかれる!

そう頭で判っていても。いよいよ身体の自由が効かなくなっている。

何とか身体を起こすも、足に力が入らず立ち上がれない。

半ばパニックになりながら振り向くと、追いついた追跡者の姿がハッキリ見えた。

長方形の眼鏡をかけた痩せぎすの四十代程の男性。これと言って外見的特徴は無い。こう言うのもなんだが、何処にでも居そうな容姿だった。しかし彼がアリシアを見下ろすその目つきは冷たく。

「ふむ。ここまで追い詰めても使わないという事はやはりイーヴィルとしての力は完全に失っている様だな」

彼は淡々とそう言っただけで数秒ほど何か考え込む素振りを見せた。

「術式自体はまだ残っている様だが……何かしらの要素が足りないのだろう」

そして、結論が出たように頷くと、呟く。

「施設に連れ帰って解剖でもしてみるか」

その言葉に、アリシアは目を丸くした。この男は、何の躊躇もなく人間を解剖すると言い放つたのだ。狂っているとしか思えない。

「やっ、いやッ来ないでッ!!」

捕まったら殺される。逃げなければと焦るが身体は言う事を聞いてくれない。

距離を取ろうとしても立ち上がれないまま身体を引きずる事しかできず。

がむしやらに、落ちていた石を投げてみるが軽く避けられて、

「暴れるな」

面倒くさそうに一言だけ言って、男が近づいて来る。

「やだっ! やだあっ!!」

アリシアは必死に叫んだ。

ついさつきまで当たり前の日常を過ごしていた筈なのに。

突然正体不明の人物に襲われ、しかも解剖するとまで言われ、怖くて怖くて、もう、どうすれば良いのか判らない。

「助けて……」

最早アリシアには、何かにすがるように助けを求める事しかできなかった。霧に包まれ、人も無く明らかに尋常じゃないの空間で、その言葉にどれ程の意味があるのだろうか。

絶望を受け入れるしか無い様な、そんな状況で。

「助けてっハル君……!!」

気がついたら、彼の名を呼んでいた。

そしていよいよ男の手がアリシアに伸びようとしていた、その時。

『『二連朱槍』ツ!!』

二つの炎弾が男に直撃する！

「む?」

男は一瞬だけ怯み。その隙に小柄な少年がアリシアの元へ駆け寄り。『エンハンス』魔法を発動し筋力を増強させてアリシアを抱きかかえる。

「逃げるぞッアリスッ!!」

ファルマはアリシアを抱いたまま霧の中を走る。アリシアは突然の事に驚きながら、ファルマが助けに来てくれた事を遅れて理解し、その胸に顔を埋めた。

「うわぁぁん!! ハル君っ!! ハル君……っ!!」

さつきまで感じていた恐怖が、孤独が、たった一つの灯火によって打ち払われていく。

「なんで来てくれたの!? どうして判ったの!? ぐすっ、うええん!!」
ファルマは子供の様に泣きじゃくるアリシアに厳しい顔つきで伝える。

「落ち着けアリスッまだ何も解決しちやいねえっ!!」
「でもっ、でもお」

ファルマが言わんとしている事は判る。

相手の正体は不明。ただ、強大な敵である事には違いない。このまま逃げ切れるかどうかまだ判らないが……。それでも、ファルマが現

れただけで、一人じゃ無くなっただけでとても心強かった。

55話 一緒に帰ろう

夢を見たのだ。

最初は、いつもの嫌な夢だと思っていた。

でも二度寝してもまたアリスの姿を夢に見て、そのアリスはいつもの夢を違って泣いていた。泣きながら、何かか必死に逃げていた。不安になって、またすぐ目が覚めた。

「所詮夢の出来事だっと思ってたけど嫌な予感がしたから、殆どダメ元で夢に見た場所、街の大通りに来てみたんだけど」

建物の影に身を隠しつつ、俺はアリスに経緯を伝える。

「特に変わったところも無くて、気にしすぎかと思って帰ろうとしたらアリスの声が聞こえたんだ」

そこでもしやと思い『破魔のルクスエクラ』を発動してみたら空間が割れて霧に包まれた大通りに繋がる入り口が出来た。恐らくアリスの『ナイトメア・ダークマインド』と同じ、異空間系の固有魔法か何かだろう。そして霧の中を搜索していたらアリスを見つけた訳である。

「私の『霧の結界』に侵入してくるとは。流星は八天導師、テラの尖兵と言った所か」

男の声が空間に響く。

ティアロ校長をテラと呼んで居るといふ事はこの男は校長の知り合いなのだろうか。

「だが、お前一人で何が出来る？ 貴様は所詮下っ端だろう、炎天ファルマ？」

どうやら敵はこちらの内情にも詳しいらしい。俺が何者なのかもお見通しという訳か。

八天導師なんてついこの間結成されたばかりだというのに耳の早い事だ。

「貴重な研究サンプルを返して貰おうか」

声が響くと同時に、滝のような轟音が聞こえる。どうやら敵は俺達をあぶり出す為に手当たり次第に『第四水流魔法（タイダル・ウェイ

ブ』を発動したようだ。

「マジかよっ!? 一体何者なんだあいつ!?」

第四階級の魔法を詠唱無しで使用するだけでも尋常じゃ無いのに、同時併用なんて聞いた事も無い!

「飛ぶぞ、アリスッ!!」

「え? きゃっ」

俺はアリスを抱えたまま、強く地面を蹴って跳躍し、屋根へと登った。『エンハンス』で身体能力を強化しているからこそ出来る芸当だ。眼下の大通りが幾つもの大波にのみ込まれ水に浸されて洪水状態となった。

屋根に逃げるしか無かったのだが、それは姿を晒すこと同義、誘い込まれた形だ。

「そこに居たか」

案の定、同じく屋根に登っていた敵がこちらを発見した。

『第三水流魔法（アクア・バレット）』

すかさず、水の弾丸が飛んでくる!

屋根から屋根を跳躍して回避するが、こうしていつまでも耐えられないとは思えない。

「くそっどうするっ!?」

これだけ水属性の魔法を多用しているのだ魔石による発動とは考えにくい。つまり相手の得意属性は間違い無く水属性だろう。

属性相関において、火属性の魔法は水属性の魔法によってかき消されてしまう。つまり、俺の主要攻撃の殆どが無効化されるという事だ。

しかも、元が『夢で見た』なんていう不確かな情報を元にやってきたので、誰かに伝える事もしなかった。せめて一言でもドライズや他の八天導師に相談していれば救援も望めたというのに。

「ハル君……」

抱きかかえたアリスが、胸の中で不安げにこちらを見上げていた。なんと少しでもアリスだけはこの場から離脱させたい……。

「アリス、そろそろ立てそうか?」

「え、う、うん」

「なら『ミラーズ・ミラージュ』で自分の鏡像を作って逃げるんだ。鏡像をバラけさせれば相手も簡単には追えなくなる」

「え、で、でもそれじゃあハル君はどうするの!？」

「――出来る限りアイツの足止めをする」

相性は最悪、相手の力量も底が見えない。

一対一で戦って勝てる見込みは正直ゼロだろう。アリスもそれが判って聞いている様だ。

「大丈夫、意地でも時間は稼ぐからさ。死んでも君だけは逃がしてみせる。だから、行くんだ」

俺は主人公じゃ無い。仲間のピンチに颯爽と現れて、難なく敵を倒して、めでたしめでたし、とはいかない。

分が悪いのも、決死なのも覚悟の上で、それでも……アリスだけは守りたい。

不思議と恐怖は無かった。自分がどうなるかよりも、アリスを失う事の方がよっぽど嫌だった。元より、俺なんてちっぽけな石ころみたいなもんだ。俺がいなくなった所で、世界は変わらず廻り続ける。そんなちっぽけな命を賭ける時が来たのだ。

拳を強く握りしめ、覚悟を決める。

アリスはそんな俺の覚悟を読み取ったのか、ハッと息を呑み。口を結んだ。

そして、俺は抱きかかえていたアリスを下ろし、

即座に反転して向かってくる水の弾丸をハルベルトで叩き落としたりした。

続く弾丸を払い除けながら、叫ぶ。

「行けッアリスッ!!」

捌ききれなかった水弾が四肢に埋まる。

奥歯を噛みしめ痛みをこらえ、反撃にハルベルトを投げ放った。

「『二連朱槍』ッ!!」

二つの炎の弾丸は、やはり敵には届かず。水弾にかき消されてしま

続く水弾が俺の身体を貫こうとした。
しかし。

『ミラーズ・ミラーージュ!!』

銀色の板が俺の前に現れ、水弾を阻む。

「なっ、アリス!?!」

気がつけばアリスが俺の横に並んで立っていた。

「逃げろって言っただろ!?! どうして——」

戸惑う俺の言葉をアリスは遮って、

「やだ、やだよっ!! ハル君を見殺しにするなんて、そんなの嫌だから
ねっ!!」

だだをこねる子供の様に、叫ぶと、アリスは力強く敵を睨み付ける。

「ハル君が来てくれて、嬉しかった。大丈夫、今ならもう、怖く無いよ。
だから、だからね。『死んでも』なんて言わないで。一緒に戦おう?」

アイツを、倒して、一緒に帰ろう?」

「アリス……」

本音を言えば、やはりアリスには逃げて欲しかった。

けれど……!!

「……判った。一緒に戦おう」

二人で戦っても、勝てる保証は何処にも無いのに、それでも。

一人じゃ無い、そう思えるだけで。

勇気が、無限に湧いてくる。アリスもきつと、同じ気持ちだろう。

決死なんかじゃ無い。

アイツを倒すツ!! アリスと一緒に!!

「こうなったらもう、手段は選ばない」

俺は懐に忍ばせていた黄金の魔石を取り出した。

56話 第四の賢者

「アリス、これを」

取りだした黄金の魔石。ソレは、嘗ての大魔導を俺なりに再現したマジックアイテムだ。

「まだ調整中で俺には使えなかったんだけど、多分アリスなら使えると思う」

そう言つてアリスの手に握り込ませた。

「これって……!!」

魔石を受け取った瞬間、この魔導の正体をアリスは察した様だ。

「アリスにとつては嫌な思いをさせるかもしれない。それでも、協力してくれるか？」

「嫌なんかじゃ無いよ！ これなら私にも……ううん、私だからこそ扱えるっ!!」

アリスは魔石を握り締めた。

「詠唱は少し変えてある。いけるか？」

「うんっ大丈夫！」

魔石に記録した情報を読み取り、アリスは大きく頷いた。

そして魔石を掲げる。

「時間は稼ぐツ任せたぞ、アリスッ!!」

言いながらアリスの一步前に出て水弾から彼女を護る。

「任せて、ハル君ッ!!」

アリスは一度深呼吸をして、詠唱を始めた。

『司るは鏡写しの夢』

黄金の魔石が形を無くし、小さな、手の平サイズの翼となってアリスの背に備わる。

『嫌な“現実”を隠してあげるね。良い“夢”を見せてあげるね』
紡がれる言葉は、嘗ての再現。

『夢と現の境界で、私が助けてあげるっ』!!」

黄金に輝く小さな翼が微かに震え。優しい光が溢れ出す！

『ドリーム・デイメンション』!!」

光はアリスを中心に球状に広がってゆき、周囲と共に敵を飲み込んだ。

それは、イーヴイルであったアリス最大の魔導、『ナイトメア・ダークマインド』を再現した魔法。数多の魔道士達の魔力で構成されていたそれと比べてはその規模は非常に小さな物だが、それでも「夢を現実」に「現実を夢に」変える権能は再現されている。

「む?」

異変を感じ取った敵は、優しい光に包まれた黄金の空間を見渡して、ニヤリと笑みを漏らす。

「これは……ふふ、そういう事か。僥倖だな」

意味の判らない事を呟いてにやけている敵に向けて俺は奇襲を仕掛けた。

『虚像・第三閃光魔法（ミラーズ・アルギュロス・レイ）!!』

嘗てのアリスがそうしたように、詠唱や魔法陣と言った補助的な過程の全てを省略し魔法効果を直接発生させる!

空から無数の光条が降り注ぎ、敵に殺到した。

敵は足元に手を付くと魔法陣が展開される。

『浄界』

魔法陣から円柱状の水が壁のように発生し、光条を防ぎ乱反射した。

しかしそれは、今まで攻勢だった相手に、防御を取らせたという事だ!

——ここは押すしか無いツ!!

俺はもう一つ魔石を取りだしてアリスに渡すと、敵に向かって猛進した。

敵が展開していた『霧の結界』とやらに上書きするように『ドリム・デイメンション』を発動したため、黄金の優しい光に包まれている空間は平坦で何も無い地形へと変化している。

「ハル君、使って!! 『ミラーズ・ミラージュ』!!」

アリスが得意の魔法を唱える。『ミラーズ・ミラージュ』はあらゆる物体の鏡像を生成して敵を混乱させる魔法だ。

しかし『ナイトメア・ダークマインド』——もとい、『ドリーム・ディメンション』の支配下においては「実体を持った鏡像」を生成する事が可能になる！

アリスの助けによって、アリスに渡した魔石の複製が数百個、俺の前に出現した。

この魔法の一つ一つは、「破滅の光」を極限にまで希釈した物。逆に言えば、こうやって「数」を揃えて束にすれば完全な「破滅の光」を再現出来るという事だ！

『強度1範囲タイプB』!!」

数を揃えても強度は1が限界だが、例えそれでも絶大な破壊力を誇るこの魔法を受けきれぬものなら受けてみるッ!!

『ルクス・エクラ』ッ!!」

範囲タイプBは直線上に光を放出する、一言で言うなら「極太ビーム」の放出設定だ。

光の氾濫が、水の円柱によって守られた敵を飲み込むッ!!

「消えて無くなれっ!!」

この魔法は、ちっぽけな俺なんかの魔法じゃ無い。

誰よりも強く、誰よりも気高い大魔導士の、

世界に選ばれた真正銘特別な人間の大魔導だ!!

並の人間に防げる筈が無い。

そう確信していた。だからこそ——

氾濫する光の波を、同じく「氾濫する闇の波」が受け止め、驚愕した。

「なっ!?!」

あらゆる魔法・魔導を魔力レベルまで分解する筈の「破滅の光」が、せき止められ、相殺されていく。

「馬鹿なッ!?!」 「原初の魔力」なんだぞ!?! そんな事あり得る筈が無いっ!!」

確かに、属性相関的には光属性の魔法と闇属性の魔法が競合すると互いに相殺し消えさるのが正しい挙動だが「破滅の光」に関しては例外で、「破滅の光」に対して数百倍以上の闇の魔力が無ければ相殺

する事は出来ないはずだ。

それを、対等に、同等に真つ向から相殺するという事は――。

「まさかあれも『原初の魔力』だつて言うのか!？」

『ルクス・エクラ』に乗じて距離を詰め、追撃する予定だったが俺は前進をやめて様子を伺う。相手の正体は不明で底が知れないとは思って居たが、『ルクス・エクラ』が防がれるとは思って居なかったのだ。

やがて光と闇の衝突が収まると、男のため息が聞こえて来た。

「やれやれ。やはり『破滅の光』は厄介だな。一番の障害になるのは間違い無いか」

男は埃を払い、身なりを正す。

「まあいい。目的の物は手に入った。この魔導を施設で解析すれば……」

気がつけば男の手には魔石が握られていた。この戦いの中で何かしらの魔力、或いは魔法を採取したのだろうか。

敵は俺に敵意を込めた視線を送り、言う。

「テラに伝えろ、炎天」

それは、一つの宣戦布告だった。

「私は『第四の賢者』。お前達三賢者を超え究極魔導に至って見せる、とな」

男はそう言うのと踵を返し去って行く。

彼の姿が見えなくなるまで緊張が続いたが、見失って暫くして漸く、ホッと息が漏れた。

「見逃して貰った、のか……?」

『ドリーム・ディメンション』で作られていた黄金の光と、『霧の結界』で作られていた霧と虚像の街並みが消えていく。

景色が徐々に浮き彫りになってきて、気がつけば俺とアリスは大通りのど真ん中に立っていた。周囲では何事も無かったかのように人々が当たり前前の日常を過ごしている。

「……あう」

緊張の糸が切れ、アリスは力無くへたり込んだ。

「あ、アリス!? 大丈夫か!？」

心配して近寄ると、アリスは俺の足にしがみついてきて。

「うえええん!! 怖かったよおおお」

思い出したかのようにアリスはまた泣き出して。

「ちよ、アリス、人目がっ、おーい!!」

注目を集めてしまうが、足にしがみつかれたこの状態で身動きも取れない。

結局俺はアリスが落ち着くまでなだめ続けるしか無かった。

◇ ◇ ◇

後日、俺は『第四の賢者』を名乗る正体不明の男に襲われた事をティアロ校長に報告しに行った。一方的に預けられた言伝を伝える為に。

「『第四の賢者』、じゃと……?」

校長は目を大きく見開いた。

「何か、その者の特徴は無かったか？」

「外見的特徴は正直特にありませんでした。眼鏡をかけたちよつと痩せた普通のおじさん、って印象で。戦闘では水属性の基礎魔法を詠唱無しで連発してました。それから、『浄界』という固有魔法も使っていました」

部屋に居合わせていた三賢者の残り二人、セレスティアル先生とジン先生は納得したように、しかし認めたくないように目を伏せて、言う。

「間違いありません」

「カイ君、だねえ」

ティアロ校長は眉間に指を当てる。

「あやつもこの世界に……。あやつにも未練——『願いがあるか』か」

「それから……強度1ではあるんですがアリスの力を借りて『ルクス・エクラ』を放ったんです。でも謎の闇魔法で相殺されました。そのカイさんって『原初の魔力』を宿していたんですか?」

俺の報告に、校長は信じられないと言わんばかりに身を乗り出す。

「馬鹿な!? そもそもカイは水の単色だった筈じゃ!」

「我々が把握していない原初の魔力まで出現するとは……」

「厄介事が増えたねえ」

三賢者達は一樣に表情を曇らせる。

が、ティアロ先生は少しだけ安心した笑顔を見せて。

「ともかく、あやつの次の動きに警戒せねばなるまい。報告、ご苦労であった。それから、よくアリシアを守ったな。やはりお主を八天導師に選んで正解だったようじゃ」

と、お辞儀をした。

恐れ多くて半歩引きながら応答する。

「いや、見逃して貰えただけですよ。下っ端って言われましたし」

「それでも多くの情報を持ち帰ってくれた。感謝する。今後何が起これとも限らん。十分に警戒しておいてくれ。下がって良いぞ」

「は、はい。失礼しました」

不穏な気配を残したまま、俺は校長室を後にした。

57話 新入部員のアリシアさんです

部活動の時間。

こじんまりしたマジックアイテム工房の中には俺含めて三人の生徒が居た。

一人は部長であり、この部活動をまとめる一年生のシジアン。

もう一人は少し前になし崩し的に入部して、なんやかんやで活動に精力的な俺、ファルマ。

そしてもう一人……。

「紹介します。新入部員のアリシアさんです」

俺と対面に座ったシジアンは、彼女の隣に座るアリスに手を向けて淡々と事務的に事実だけを伝えてきて。

「アリシアって言います。幼馴染みからはアリスって呼ばれています」
知ってる。すっげーよく知ってる事実を伝えられる。

「これからよろしくね!」

アリスがニコツと笑うと、首元で括られた小さな紫色の髪がチラツと可愛らしく揺れた。

俺は一呼吸ついて。

額に指をあてて俯き、目を閉じて。

天井を見上げて瞼を開き。

落ち着いて、もう一度目の前を確認した。

——そして。

「ええええええーッ!」

叫んだ。

二人の方はあらかじめ指先を両の耳に突っ込んで待機していて。

「まあ、想定通りのリアクションですが」

「そうだね」

指耳栓を外して顔を見合わせる。

「アリシアさんはマジックアイテムの製作に関して何一つ予備知識の無い素人になります。是非熟練の先輩として指導してもらえればと」

「いや俺だって始めて数ヶ月とかの素人なんだがッ!」

「先輩の実力は最初からプロ級ですよ。自信をお持ちください」
「突然持ち上げるな!? そんな事はぜってー無いと思うけど!」

だって今までに作ったヤツを思い返してみたら……他人の力を借りまくった『破魔のルクスエクラ』はノーカン。『ドリーム・デイメンション』も『ナイトメア・ダークマインド』の丸パクりだから外して、あとは『原初の魔剣なんたらかんたら』と『不死槍ハルベルト』と『服だけ溶かすスライム』――。

過去の痴態を思い出して頭を抱えた。

「まともなのがハルベルトしかねえ……」

「ハルベルト? ああ、あの魔法凄かったね。『フレアレッド・クラスター』だっけ」

喰らわせた本人が凄いと認めてくれるのは嬉しい半面あの事件をアリスが鮮明に覚えているという証拠を突き付けられているようにで恥ずかしくなる。

というか。

「全然効かなかったけどな?」

「いやいや効いたからね? 四分の一くらい」

「世間一般ではそれを『効いてない』って言うんだよ……」

決戦用に作った魔法も難なく突破されて。そうやって考えて見たら俺、今までまともなアイテム作って無いんじゃないや……。

このままだと落ち込む一方だ。思考を変えよう。

「でも、なんでこの部活に? 確かアリスって普通にスポーツとか好きだったよな?」

俺が問いかけるとアリスは一瞬目を逸らす。

「それは、その、」

そしてもじもじした様子を見せ、一呼吸置いた後改めて俺と目を合わせ。

につこり満面の笑みで微笑んで答えた。

「ハル君と同じ部活動がしたいなって思ってた!」

言われて、言葉を失う。

「な、」

「折角仲直りしたのにクラスが別で朝一緒に登校する以外殆ど会えないでしょ？ もっとハル君と一緒に居たいなって思ったんだよね」
アリスは照れくさそうに頬を掻きまた目を逸らしながら言う。
好意を隠さない、大胆な発言に俺は戸惑うばかりだった。



そんなこんなで部活動の時間。

「アリス、喉渴いてないか？」

ハル君が問いかけると、私は、

「う、うん。少しだけ」

と、やや戸惑いつつも返答し。

「すぐにお茶を淹れるよ」

ハル君はそう言つて三人分のお茶を用意する。

更に、

「冷房、寒くないか？」

「だ、大丈夫」

「欲しいものとか足りない物は無いか？」

「大丈夫だつてばあ……」

と、この日の活動が始まつてからずつとこの調子だ。

「そうか……。判らない事があったらなんでも聞いてくれ」

とハル君は席に着くも。数秒毎にチラチラと私の様子を伺う。

気にかけてくれるのは嬉しいがあまりに過保護過ぎて困惑していた。

すると、

「先輩。アリスさんの活動として杖を作つて貰おうかと思うので、永久の森から檜の枝を幾つか採取してきてくれませんか？」

シジアンちゃんがそう言うのと、

「判つた！ すぐ取つてくるー！」

とハル君は飛び出していつて。

ハル君が居なくなつてから数秒の間を置いて。

緊張の糸が途切れたかのように、私はへたり、と机に突っ伏した。

「うう、ハル君が不自然に優しいよお……」

と、言葉を漏らす。

「先輩はいつでもお優しい方ですよ」

シジアンちゃんはそう言うと、私のコップにお茶を注ぎ足した。

「それはそうだけど……」

私はお茶を一気に飲み干して、

もう一度机にへたり込んだ。

「同じ部活に入ったの失敗だったかなあ……」

机の木目を指先でなぞりながら、苦悶する。

「こうなる事は目に見えていたではありませんか」

「うう……」

シジアンちゃんの言うとおりだ。ハル君は私の一件を酷く後悔しているし、——私に強い負い目を抱いて居る。それは自分自身も理解している所だった。

だから、今は様子見、ハル君の感情に整理がつくまで待つのが定石であったかもしれない。

しかし。それでも私にはここで動くしかない理由があった。

「まあ、確かに少しの時間でも先輩の側に居たいという気持ちは判りますが」

シジアンちゃんはもう一度私のコップにお茶を注ぎ足すが。

「……部長さん」

私はは机で頬を潰しながら視線だけをシジアンちゃんに投げる。

「はい？」

「さっきからさらつと言っちゃってるけど。この際だから確認しておくね」

身体を起こし、訝しげな表情で続けた。

「部長さん、ハル君の事大好きだよね？」

ピクツと、ティーポットを持つシジアンちゃんの指先が固まった。

58話 好きになつちやつたんだからしようが無い

シジアンちゃんは、レンちゃんほどでは無いが常に冷静であるが故に表情の変化に乏しい。だから、固まりつつも動揺を表に出さない振る舞いからは彼女の本心をうかがい知る事は難しい。

「……なるほど。そういう訳ですか」

重い沈黙を破って、シジアンちゃんは口を開く。

「まだ事件のほとぼりも冷めやらぬ状況で、どうしてこの部活に入る事にしたのか疑問でしたが。ボクを牽制する為、という訳ですね」シジアンちゃんの推察に、私は無言の肯定を返す。

私がイーヴィルとして暗躍していた頃、ハル君に近づくためにこの部活動に見学という形で転がり込んだのけど。その時点から、シジアンちゃんがハル君を強く意識して居るといふ事を感じ取っていた。

ただでさえ今の私はハル君との接点が少ない。習慣として朝、本場に僅かな距離を一緒に登校するくらいしか無いのだ。それに対して部活動は一週間のうち半分以上が活動日で、かつ二人っきりの部活動……危機感を感じるのも当然だよな？

多少のリスクを覚悟してでも手を打っておきたかった、っていうのが本音。

「でしたら、ご安心下さい」

けれど、続くシジアンちゃんの言葉は私の予想を裏切るものだった。

「ボクに、貴女の邪魔をするつもりはありませんから」

シジアンちゃんはそう言うのと僅かに微笑む。

「先ほどの貴女の質問には、こう答えさせていただきます」

そして——彼女は、言う。

「ボクにとって先輩は、好きだとか嫌いだとかそういう次元に存在していません」

真つ直ぐで、真摯な瞳が私を貫く。

嘘やほつたり、口車の類などでは無いと、確信させるような重みがあった。

しかし、言葉そのものの意味はいまいち判らない。

「ど、どういう事かな?」

「解釈は自由だ。理解や共感を求めている訳ではないので。ただ一つ、敢えて言うならば。寧ろボクは貴女を応援したいと思います」

「応援ってどうしてそんな……」

困惑するばかりだ。私からしてみれば、シジアンちゃんのハル君に対する好意は底が見えない程だった。それは、不自然な程に。

ハル君から聞いた話では二人は出会って間もない筈なのに、だ。

だからこそその警戒、牽制だったのだけどね。

それだけの何か強い想いを背負っているながら、恋敵となり得る自分を応援する、というのには信じがたい。

「……寧ろ、ボクの方からも確認したいです」

「え?」

「貴女にとって先輩は加害者である筈です。この世界の仕組みが生み出してしまった不可抗力である事を考えても、わだかまりや憤りを感じるものではありませんか?」

「ま、待って! 部長さん一体何処まで知ってるの!」

私がイーヴィルとして暗躍し、ハル君を襲おうとした事、そして私がそんなイーヴィルとなってしまった原因の一端にハル君の「願い」が関わって居た事、私とハル君が交戦し、事件が収束した事。これらの事実はハル君が気を回してくれて公表されていない。

しかしシジアンちゃんの口振りは、明らかに全ての真実を知っている様子だ。

「知ってますよ、全部」

シジアンは机に置いていた巨大な書籍を持ち上げた。彼女がいつも抱えている謎の本だ。

「ボクは『記録する兵器』ですから」

イタズラに本のページを繰りながら、シジアンは不敵に笑う。

自らを『兵器』と称する真意は読めないが。

「……なんて、少し格好付けてみました。ボクの事等どうでも良い

のです。質問に答えて下さい」

と、改めて私を問いたです。

「あれだけの事があって尚、本当に先輩の事が好きだと言えるんですか？」

何が何だか判らない。シジアンちゃんは私が予想していたものよりもずっと大きな「何か」を抱えているのかも知れない。

全てを見通されているような、そんな緊張感の中。

それでも私は揺るぎない思いを伝える為に、首を縦に振る。

「……うん」

「貴女が先輩へ強い好意を向ければ向けるほどに、先輩はもっと深く後悔するでしょう」

「——私もそう思う」

「面倒だとは思いませんか？ 前途は多難です。見切りを付けるなら今しかありませんよ」

そう。切っ掛けから、結末まで。何もかもがねじ曲がってしまった、そんな歪な関係でも。

「……それでも。好きになっちゃったんだからしょうが無いじゃん」

つい先日の記憶が蘇る。

誰も居ない、独りぼっちの霧の中、絶対絶命の窮地に駆けつけてくれた赤い少年の姿が今でもハッキリと脳裏に浮かぶ。我ながら単純かもしれないが、それは間違い無く強い切っ掛けとなった。

元々、イーヴィル化の影響でハル君に対して悪い感情は抱いて居なかったのだ。そこにあんな経験をしてしまえば、もう止まらない。

感情とは、制御出来るモノでは無いんだからね。

シジアンちゃんは私の答えに、満足した様子で。

「左様ですか」

嬉しそうに、何か、幸せを噛みしめるように穏やかな笑顔を浮かべて。

「ならば協力は惜しみません。なんなりと、お使い下さい」

こちらに手を差し伸べる。

シジアンちゃんの目的、意図が読めないまま素直にこの手を取って

も良いのだろうか？

一抹の不安を拭い切れない。けれど、障害だと思つて居た彼女が協力者へと転じるのならその恩恵は計り知れないだろう。

私はおずおずと、しかし決心したように、シジアンちゃんと堅く手を結んだ。

58. 1話 生き恥の様なものを感じています

部活動の時間を使って、俺は一人永久の森に来ていた。

素材の採取の為だ。

「必要とは言え土を袋に詰めて持って帰るの、重いしだるいし、画ヅラも地味だな……」

ぶつくさ言いながらスコップで土嚢に土を詰めていると。

「ん？」

がさつと茂みが揺れる。永久の森には野生動物が住み着いている。加速された独特の気候と魔力に満ちた草木や土を糧に成長した野生動物は明確に異質な進化を遂げており、マジックアイテムの素材としての価値が高い。よくよく考えて見ればかなり危険な環境だと思われるのだが裏で校長や管理者であるジン先生が上手いこと調整しているらしい。

最も、その調整ミスの結果が度重なる植物触手化暴走事件なのだが……もしかしたら今後は異常生物暴走事件が起こる可能性が微粒子レベルで存在しているかもしれない。

「どれどれっと」

ともかく、魔導工作者としては見逃せない案件だ。俺はいつでも回収出来るであろう土嚢を放棄し槍をマテリアライズした。

気配を感じた茂みへ、忍び足ですり寄って。

「へへっ悪いけど——」

呼吸を整え、

「今日、偶然この場所に居合わせた事を後悔するんだなっ!!」

小物くさい台詞と共に茂みに踏み込んだ。

次の瞬間。

びちやつと生暖かい感触が額に広がると共に。

彼の視界は真っ赤に染まった。

「ぎゃあああ!!? 目があああああ!!? 目があああああ!!!」

染みる。その一言に尽きるがそこまで言葉が出てこない。

ただ、必死に顔を拭う中で謎の液体が自身へ大量にぶちまけられた

事だけは判った。

「おや？　これは申し訳ありません」

聞き覚えのある声が近づいてくる。

「どうぞこちらをお使い下さい」

と、わたわた藻掻いている俺の手に柔らかい物が握り込まされた。恐らくはハンカチか何かだろう。

「ああ、さんきゅ。この声、ナギさんだな？　って事はこの真つ赤な視界は……」

「私の血が降り掛かってしまったようで申し訳ありません」

「ですよえええ!!」

ぶつちやけ、突然クラスメイトの血液が顔面に降り掛かってきたらわりかし気持ち悪いのだが、流石にそれを言葉にするのはナギさんに悪い。受け取ったハンカチで血を拭い去ると、今日、偶然この場所に居合わせた事を後悔した。

「で、こんな所で何してんだよ」

ハンカチを返しつつ、周囲を見渡す。現在永久の森の季節は夏。青々と茂った木々が赤黒い飛沫によって血みどろに汚染されている地獄絵図のような光景が広がっていた。

「いえ、新しい技の開発を少々」

「新技？　必要あんの？」

俺が知りうるナギさんの技——固有魔法はどれも強力な代物だ。ナギさんの戦闘能力は俺達八天導師に負けずとも劣らないだろうに。

と、頭を捻っていると。その穏やかな表情を滅多に崩さないナギさんがやや落ち込んでいる風に視線を下方に逸らしていた。

「いえ、その……少しマナトと喧嘩しまして」

続く言葉に、俺は思わず声をあげた。

「はあっ!?　お前等喧嘩とかすんの!?!」

二人の間にただならぬ信頼関係が築かれている事は誰が見ても明らかかな上に二人とも物腰が柔らかく（戦闘中のナギさんはともかく）丁寧に控えめな性格をしているのだ。そんな二人が喧嘩をする理由という物が全く想像出来なかった。

「そんなに驚かなくても。私達だって喧嘩くらいは普通にします」

「でもそれと新技と一体なんの関係が……」

「私の固有魔法、『神風』はご存じですか？」

『神風』。ナギさんが戦闘中に常時展開している『サクリファイスの刻印』というエンハンス魔法の出力を極限まで高め、生命力・魔力を双方一気に放出して放つ一太刀。使用後は四肢が弾けるようにひび割れ血が噴出し、回復が終わるまで一切身動きが取れない程の反動を受けるが、その威力は基礎魔法など比較にもならず、物理的斬撃と魔法的衝撃が組み合わさってあらゆる守りを打ち砕くナギさんの究極奥義だ。

「あのヤベー威力の特攻魔法か」

「はい。あの魔法は私という一人の剣士の終着点であり、本来であればあの魔法は一回限りの代物で使用後は剣を握れなくなる事も、場合によっては命尽き果てる事も厭わぬ覚悟で作りました」

「あの魔法そこまでヤバイヤツなの!？」

「事実、こちらの学園で『回復魔法』というものを習得するまでは私の人生の中でも一度しか披露しませんでしたし、その後は自力で立つ事もままならず前線を退き、車椅子での隠居生活を謳歌していたのですが」

確かに『神風』を使った後のナギさんは血まみれになって、場合によつては倒れてしまう程であったが。

「え、でも、こっちじやナギさんってかなり頻繁『神風』撃ってるよな?」

「はい。こちらでは『回復魔法』がありますので。しばらく多少の後遺症は残りますが逆に言えばその程度で済むのです、出し惜しみなどせずに機を見て放つのが一番だと思ひ使用してきました」

ここまで聞いて、俺には喧嘩の内容が大まかに掴めてきた。元々は心身を酷使する非常に危険な魔法なのだ。いくら回復出来るからと言ってもお人好しのマナトが何も思うところが無い筈が無い。

「ですがどうにも、マナトとしては私が『神風』を繰り返し使う事に抵抗があるようでして。『神風』を使うのは月に一度までにしてくださ

いと言われてしまい」

それだけの負担を強いる魔法だ。ナギさんは回復魔法でどうにか
なると言っているが人体は機械ではない。修理して元通りとはいか
ないはずだ。恐らくは『神風』を使う度に何処か見えない部分で負担
が蓄積していくのは想像も容易い。

「ですが、あの魔法は私の全てであり、誇りでもあります。それを『使
うな』いうのはいくらマナトが相手と言えども納得しかねるのです」
「う、うーん」

個人的な評価をするならば。

マナトの心配の方が全面的に合理的で正しいだろう。だが外野が
どれだけ心配しようと、ナギさんの意志・身体はナギさんの物だ。そ
れをどう使おうとナギさんの勝手であり、いくら仲が良いと入っても
自分が人生をかけて作り上げた代物を他人にとやかく言われる事は
決して良い気分がしないであろうという感情も判らなくは無い。

「私もマナトの言いたい事は判らなくもありません。私もあの技は今
生に悔い無しという覚悟で放つ魔法ですので、その後当たり前の様に
回復し、その上何度も繰り返し使う事に生き恥の様なものを感じてい
ます。マナトが言いたいのはきつとそういう事でしょう」

「俺、マナトとそんなに仲良くねえしアイツの事良く知らねえけど確
実に言える事がある。マナトが言いたい事は絶対にそういうこと
じゃねえ」

生き恥とかいうとんでもないワードが耳に飛び込んで来て、思わず
呆れ果てた表情を隠す事も無く反射的に言葉を漏らした。

「そういう訳なので、『神風』を超える新たな魔法……死して屍拾う
者無し、真なる意味で『決死』の奥義を編み出そうと——」

「まてまてまてまてまてまてまてまてッ!!!」

流星に耐えられなくなった俺は慌ててナギさんの言葉を遮った。

「どうかしましたか?」

「どうかしましたか? じゃねえよっその方針はマナトが求めてる事
と真逆だっ」

いまいちナギさんの価値観がずれているような気がして結局俺は

マナトが何故『神風』と言う魔法を忌避しているのかを、特に仲良くも無いくせに一から解説する。

「——だから、要するに、マナトは“身体がボロボロになるような技を何度もつかって欲しくない”なんだよ！ きつと単純に、君の事が心配で!!」

「……それは、困ります」

「なんで!？」

ナギさんは珍しく表情を暗くする。そして、剥き身だった刀を納刀した。

「話せば少し長くなりますが……」

「——なんかあんのか？ いや、まあ俺なんかで良ければ相談くらいは乗るけども」

「お気遣いに感謝を。折角ですので相応の支度をさせて頂きます」
「支度?」

俺がハテナを浮かべている間に。ナギは回復魔法を発動し身体の傷を癒やす。

そして戦闘用の、最低限胸と下腹部だけが守られた軽鎧のマテリアライズを解除した。その下からは装飾の無い無地の下着が現れ、鬱蒼とした森の中に半裸の女学生が堂々と仁王立ちしているとかいいう謎の光景が広がる。まあナギさんの戦装束は露出が多く元から半裸と言えば半裸なのだが。

「おあ!？」

思わず俺が狼狽しているとナギさんはパチンと指を鳴らした。すると彼女の身の回りに衣類が形成されていく。

「すぐにお掃除致しますのでご容赦を」

一連の出来事に何一つ思う所はない、と言わんばかりそう告げる彼女の服装は制服などでは無く。

「……え?」

慣れた手つきでマテリアライズする、小さなテーブルと椅子。更に近くに放置されていたリュックから水筒を取りだして。

「自分の水分補給用にと用意した物なので余り良い代物ではなく恐縮

ですが」

「これまたマテリアライズしたティーカップに注ぎ、俺へ差し出す。少しばかり、お付き合い願います」

ふわりとしたロングスカートの中裾をつまみ上げ、ぺこりと一礼するその仕草は、普段目にするバーサーカー染みた側面とは対照的で。

俺は半ば呆然としつつも引き出された椅子に腰を下ろしながら、どうしても聞きたかった事を口にした。

「……………え？　なんでメイド服?！」

ナギさんが身に纏った服装は、黒と橙を基調にした落ち着いた雰囲気
気のロングスカートのメイド服だった。

58・2話 君が目指すべき魔導は、『決死の奥義』なんかじゃない

「私達が異国の民である事はご存じかと思えます」

「あ、ああ、うん」

俺はされるがままにテーブルについてお茶を一服貰ったが。ナギさんはそのまま俺の隣に立ったまま話を続ける。

「詳細は省きますが、そこで私は將軍の一人として国の防衛を司っております」

「へ、へえ」

ただ者では無いとは思っていたが、まさかこの歳で一国の將軍だと言われるとは。ナギさんが下らない嘘を付くような人間でない事くらいは理解しているつもりだがそれでもやや理解が追いつかない。が、特別な人間が集まるこの世界ならそういう事もあるのだろう。

「二兵卒として国に——『姫』に仕える事は私の贖罪でもありました。故に私は己を殺し、歴代の戦士達が掲げた一つの目標へ向けて技を磨き研ぎ澄ませる事が生きる意味でした。その答えが『神風』。過去の私の到達点であり、限界です。この魔法を託し、次代の子らが私をも超えて目標へと到達する事を願い、私は剣を置いたのです」

「良くわかんないけど、とにかく君にとって『神風』っていう魔法にただならぬ思い入れがある事だけは伝わったよ」

「ですが、こちらへやってきて、再び剣を握れるようになり。私が心身を賭した祖国も今となつては過去の存在です。ある意味で、自由となった私にマナトは言ったのです。『今度こそ、自分の為に生きて欲しい』と」

ナギさんは視線を落とし、ロングスカートの裾を僅かに摘み上げ続ける。

「この服装も、所詮はメイド達の真似事にすぎません。私が誇れるものは戦いだけなのです。ですから、『自分の為に生きる』ということには私に取っては『戦いの道を極める』事なのです」

「——誇れるもの、か」

俺はお茶を飲み込みながら瞼を閉じた。

誰にも負けないと自負できるような特技なんて俺には無い。だからだろうか。一つの技術に誇りを持っている人間に対して、嫉妬と羨望を抱いてしまう。

『神風』はそんな私の歴史。あの技を否定する事は私の戦い全てを否定する事になります。それだけは……例えマナトの願いが私を想つてのことであっても納得はできないのです」

「——なら、話は簡単だな」

俺はお茶を飲み干すとティーカップをテーブルに置く。

「と、いいいますと?」

「マナトは君に傷ついて欲しくない。君は『神風』を否定したくない。それなら、君が目指すべき魔導は、『決死の奥義』なんかじゃない」

二人の願いを叶える魔法。それは——

「君が傷つかない『神風』を作れば良いんだ」

俺の提案にナギさんは困った顔を作る。

「あの。言っている事は判ります。けれど、それは余りにも理想的と
いいですか、非現実的では? 『神風』を始め、『サクリファイスの刻
印』に起因する戦闘能力は心身を賭し、魂を薪にするからこそ得られ
る力です。代償無しに大きな力を発揮出来る程世の中は甘くありま
せん」

そんなナギさんの指摘に、俺はニツと笑う。

「当然の摂理だな。でもよ、別にその代償を君が払う必要性は何
処にも無いんじゃないか?」

「……え?」

「題して、『サクリファイス・エスケープ』。もしも君が、これから俺が
提示するいくつかの条件を呑めるって言うのなら——共同製作しよ
うぜ。マナトを納得させる『新魔法』をさ」

自分には誇れるものが無いからこそ、かもしれない。嫉妬や羨望の
先に俺は、ただ純粹にナギさんの応援がしたいと思ったのだ。



場所は変わって魔導工作室。狭い部屋内のほぼ全ての体積を占領する長机に。奥の方の定位置で部長のシジアンと、向き合うように座っている部員のアリスが興味深そうに手前へ視線を向けている。その視線の先、入り口のすぐ目の前の座席には三人の人物が座っていた。

「と、言う訳で」

俺は簡単に状況を説明した上で。

「レンさんマジよろしくお願いしますっ!!」

机に額を打ち付けるような勢いで頭を下げた。

「ご協力、お願い致します」

その真横では同じようにナギさんも頭を下げる。

二人と向き合うように無表情で二人の後頭部を見下ろすレン。

「……ふうん」

彼女は相変わらずの言葉の少なさで。ひとまず事態を理解した上で俺が用意した企画書に目を移す。

俺が提示した条件は三つ。

「まず、共同製作の魔導になるから完成した魔導の権利って言うのは関わった人間全員にある。要するに、例えば俺がナギさんの知らないところで新作魔導を勝手に利用するかもしれないって事だな」

「元より技術を独占するつもりはありません。その点は特に問題ないです」

「次に……君の『サクリファイスの刻印』。これの解析を行う。ま、『刻印』の効果を別方面で発揮しようっていう計画だから当然だわな」

「それも大丈夫です。『サクリファイスの刻印』は私達の故郷の秘伝ですがその故郷はもう存在しないので」

「——マジでお前等何があつてどういう訳でこの国来たの？ いや、ごめん、余計なお世話だな。次だ次。最後が最重要だな」

三つ目の条件。それこそがこの状況の原因。

「レンの協力を取り付ける」事だ。

他人の能力を前提にして企画を考えるのもどうかと思うが。今回

の案件、レンならば必ず乗ってくれるはずと言う勝算が俺にはあった。

魔法陣に関して尋常じゃ無い探究心を持っているレンにとって、異国の魔法陣であるナギさんの『サクリファイスの刻印』は垂涎の代物の筈。それを解析、更には組み替えろというのだ。紋章魔導士の血が騒がない訳がない。

「……面白い」

眉、目、頬は固定化されたまま、レンは口元だけを少しだけ伸ばした。

そして俺は内心で拳を握り込む。

『サクリファイスの刻印』は心身の生命力を前借りし、身体機能を大幅に上昇させる魔法であるが、作者不明、異国の固有魔法ともあつてその機序は謎に包まれていた。

それを魔法陣オタクのレンに解析してもらい効果対象を変更する。

「そんな事が可能なのでしょうか？」

計画書を広げて説明する俺にナギさんが視線を向けてくる。

「ま、簡単じゃ無いだろうな。でも、レンなら出来ると思うぜ」

強い信頼感を以て言うのと遠くの席からアリスのツツコミが飛んできた。

「ハル君、それ無茶振りってヤツじゃないかな？」

確かにそうとも言えるだろう。突然異国の魔法陣を解析しろだなんて普通の学生なら面食らって当然だ。

「でも、レンならきつと大丈夫」

レンは魔法陣に並々ならぬ情熱と教員を上回る程の技術を持っている。レンならばやってくれるという全くもって無根拠な自信が俺にはあつた。何せレンは特別な人間が集まるこの学園の中で、更に選りすぐられた“八天導師”の一員なのだから。

「……ふうん。ハル君、レンちゃんの事信頼してるんだね」

ふと、アリスが少し寂しそうな視線を俺に向けていた。

「え？——ああ、言われてみれば確かに」

俺はアリスに言われて始めて、“レンを信頼している”と自覚す

る。それも尋常じゃ無い程に、だ。

確かに部活動の関係で共同制作やらなにやらやる間柄ではあるが、そこまでの信頼感を持っている事に自分自身疑問を抱いた。俺はレシンの事は少し前まで苦手だった筈なのに。

と、黙り込んで考えているといつの間にか部室がシーンとしていく。みんな俺の次の言葉を待っているのだと察して慌てて続けた。

「えっと、レンが新たに開発した魔法陣を取り込んだ鎧型のマジックアイテムを作って、マテリアライズレシピを構成すれば完成って寸法だ」

言い出しつぺのくせに実は俺の仕事はオマケ程度のものなのだが、ともかく俺は計画を説明すると同時に簡単なロードマップを提示するのであった。

58. 3話 ……貴方一体何を企画したんですの？

こうして、余りにもレンに依存した新魔導の製作が始まる。

「じゃ、とりあえず。何はなくともまずはレンに『サクリファイスの刻印』を解析して貰わないとな」

俺の言葉に、レンはコクつと頷くとナギの方をジツと見つめた。表情は全く変化していないが「さあ早く見せてくれ」と言わんばかりの強烈な圧力を感じる。

「ところで、前からずつと気になってたんだけどナギちゃんの『刻印』って何処にあるのかな？ 魔法陣って言う事は身体に描いてあるんだよね？」

アリスが指を頬に当てながら首を傾げると、ナギさんは。

「心臓の真上に当たる皮膚です」

と、けろつと答える。

「え？」「ん？」

アリスと俺が言葉の意味を解釈し考えている間にナギさんは、

「今から解析してもらおう事ですし、実際に見た方が早いのでは？」

という言葉と共に上着に手をかけた所で、

「ちよ、ちよつと待って!?! それって胸だよね!?! 男の子居るのに脱ぐ気なのかな!?!」

アリスが慌てて立ち上がり、ナギさんの方に詰め寄ってその手を押さえる。

「脱がなければ見せられないのでは？」

「だから男の子居るんだってば!!」

「殿方がいらつしやる事に何か問題でも？」

「えええ!?!」

慌てるアリスと、何にそんなに狼狽えているのか全く理解出来て居なさそうなナギさん。思えば、ほぼ全裸に近い半裸のような格好のまま平気で活動できる人間に正常な羞恥心が備わっている訳がなかった。

「あく……えつと、俺外出てるから解析終わったら呼んで……」

俺は気まずそうにそそくさと席を立ち上がる。

部室棟の廊下、魔導工作部の入り口すぐ横の壁に背中を預け。

「あつっ……」

俺は額を拭う。時期は真夏、冷房の効いた部屋を出ただけで汗が噴き出す程だ。

「そういや前マナトがなんか言ってたっけな……たしかナギ達の国って基本的に女性しか居なかったから特に男女間における常識とか価値観が違うから気をつけろって……」

さて。俺の仕事は魔法陣が完成してからだ。つまり暇なわけである。

かといって荷物を部室に置いてきてしまったため端末で手慰みにゲームを、なんてことも出来ない。

「あく……」

暑さに思考が霞んでくる。俺は思わずその場に蹲った。

◇ ◇ ◇

「……あらっ？」

数十分後の事である。小用のために部室棟の廊下を歩いていたルクシエラさんが汗まみれで縮こまっている俺を見つけたのは。

「あのキャラ編成難しいよなあ。チェインさえ出来ればものすっげ強いんだけどそもそも話チェインする為に他のヤツもそれに寄せないといけないけどそうすると素殴りの方が弱くなって結局火力が下がっちゃう。かといってお手軽に火力出せるバースト系はチェインには向かないし。やっぱりとりあえず編成してサンドバッグ殴ってダメージ比較するのが一番手っ取り早いんだけど如何せん端末ねーしぶつぶつぶつ」

『膝を抱えるように屈み込み床に向かって何やら意味の判らない文字列を詠唱しているその姿はまごうこと無き不審者だった』、と後から言われた。

「これは一体何事でしょうか」

キョトンと首を傾げたルクシエラさんが問いかけると、

「うえっ？」

俺が弱々しく顔を上げる。脱水のせいかは判らないが目が虚ろで光が消えていたらしい。

「あ、ルクシエラさん。こんちわ」

「こんにちは、ではありません。この熱い中わざわざ廊下で何してますの?」

「いや、ちよつと部室が取り込み中で……」

「取り込み中?」

「俺の企画で活動しようとしてたんですけど、まあホントに色々あつて」

熱気にやられた今の俺の頭では一連の流れを丁寧に説明してやるだけの能力が無かったので完結にそう説明すると。

ルクシエラさんはややキョトンとした様子で、そのまま視線を魔導工作部の入り口の方に視線を向ける。そして、中の様子を伺おうと一歩踏み出しドアノブに手をかけると。

「やつ、ま、待って、落ち着いてくださ、れ、レンさんっ!! そこは神経に接続してるからびんか——ひゃんっ!?!」

「……ハア! ハア! 何これ興味深すぎる……っ! 好奇心がツ収まらないっ!」

『い、息がくすぐった——あふつ、あつ……』

『……うふふ。大丈夫。……大丈夫だから。私に任せて? 丸裸にしてあげるっ!』

『せ、せめて優しくしてくださいっ——うあっ!?!』

なんて声が微かに漏れ聞こえてきて。ルクシエラさんは思い留まったかのようにそつとドアノブから手を離れた。

そして、なんだか呆れきったジト目を俺に突き刺し。

「……貴方一体何を企画したんですの?」

その視線と言葉から、嫌悪やら軽蔑では無いにしろ決して明るくない生温かな感触を感じ取った俺は首を傾げる。

「普通にマジックアイテムの製作ですけど?」

「それ健全な道具なんですよ?」

「当たり前じゃ無いですか。そんな、校内で不健全なものを作ったり

「しませんよ」

立ち上がって弁明するが。ルクシエラさんは視線をもう少しだけ鋭くして。

「あら。『服だけ溶かすスライム』なんてもの作り出した上に逃げられて大騒ぎを起こしたのは何処のどなただったかしら?」

「ぐぼおふっ!!」

記憶の底に封じ込めていた黒歴史と言う名の言霊を顔面に喰らった俺は汗を散らせながら仰け反り、背中から廊下へ倒れ込んだ。

「男の子ですし別にそういう若さも否定はしませんけれど程ほどにしてくださいまし。もみ消すのも大変なんですから」

「もみ消さないと行けないような事件を俺が起こす前提で話すの辞めて下さい!!」

上半身だけを起こして抗議するが。

「前科者が何言ってますの」

「ひ、被害者は出なかつたじゃないですかあ!」

「巻き込まれたのが身内だったから被害届出さずに済ませて貰っただけでしょうに。他の学年の子を巻き込んでいたら普通に警察沙汰でしたか?」

「あうう……」

ぐうの音もでない正論に黙り込んでしまう。

「合意の上で乳練り合う分には咎めませんが。理由はともあれ女の子を泣かせたら許しませんからね」

「ちッ——!?!? そ、そんな相手居ませんって!! っていうかホントにそういう方向の企画じゃ無いんですよっ!!」

結局俺は一旦頭を冷やしてからルクシエラに発端から一部始終を説明する事になるのであった。尚、頭を冷やすために自習中のドライズが突然召集され冷却魔法を使わされたのは余談である。

58. 4話 ヒーラーってどういうことだよ!?

一週間後。

「マナト、少し良いですか」

放課後の教室で、ナギさんが天井を見上げて声をかける。

「いやいや、何処に向かって声かけてるんだよ」

と、俺がツツコむのとほぼ同時に。

「どうかしましたか?」

しゅたつと天井からマナトが降ってきた。

「おわ!?!」

どうやら天井に貼り付いていたらしい。

「相変わらず忍者みたいだな……」

ともあれ、ナギさんの用件は一つだ。この数日間、レンと一緒に熱中して作り上げた大魔導のお披露目会である。俺は大した事をしていないが製作者の一人として少しワクワクしていた。

——ら。

「貴方に決闘を申し込めます」

続くナギさんの言葉に、俺は。

「……え?」

思わず、耳を疑った。

所変わって舞台は決闘場。魔導決闘部という魔法を使って殴り合う部活動が行われる場所だ。どうもナギさんはその部活のエースらしく、決闘場の使用許可をすんなり貰っていた。

突然の決闘に、マナトは一瞬だけ驚いた様子を見せたがそれでも穏やかな笑顔で了承していた。俺だったらとりあえず色々捲し立てるところなのだが。

俺は決闘場の二階の観覧席から、中心で向かい合う二人に視線を落とす。ナギが決闘を申し込んだ瞬間、耳ざといエクレアがもの凄い勢いで宣伝しまくったせいで観客がそこそこ入って居た。

「なんか、無駄に大事になっちゃったな……」

俺は観客席の手すりに顎を乗せてため息を吐きつつ、横に居るレン

に語りかける。

「……ん」

レンの方は一応返事をしてくれたが。一文字だけの台詞からはその心境が読み取れない。

『あー、テステス』

ふと、スピーカーから聞こえてくる声。

『さあ突如始まる事となった四のA最強決定戦ツ!! 実況のエクレーアちゃんとオ——』

『突然拉致されて “解説よろしく” と言われてマイクを渡されました。ドライブです』

親友の、呆れ果てた様な、達観したような、妙に抑揚の少ない声色で述べられた台詞に俺は思わず苦笑する。

「何やらされてんだあいつ」

主人公は大変だなあと、文字通り高みの見物をしながらニヤニヤドライブに視線を送った。

『まずは選手の紹介! ドラリンよろしくっ!』

『紹介って言われても——え? 資料? あるなら君が読めば良いじゃ無いか。解説の仕事? もう、判ったよ。やれば良いんでしょ、全く——』

ブツブツ文句を言いつつも、ドライブは資料に目を通した。

『先に紹介するのは一条(いちじょう) 凧(なぎ)さん。この決闘の挑戦者側ですね』

ドライブは資料を読み上げていく。

『土属性専攻で、所有する属性は土と風属性。クラス内での役割(ポジション)は回復魔導士(ヒーラー)です』

『異議ありッ!!』

俺は思わず手を上げて抗議した。

「ナギさんは最前線で戦うゴリゴリのアタッカーだろ?! ヒーラーってどういうことだよ!」

声を大にしてドライブに問いかけるが、

『いやでも資料にはヒーラーって書いてあるんだよ』

と、ドライブの方も困惑気味だ。すると、ドライブの元に小柄な緑の影が歩み寄り。

『マイク変わります、四のAリーダーのヴェルリーゼです。ナギにはその卓越した戦闘能力から最前線で戦って貰っていますが、彼女の学園での選択コースは回復魔法専門であり、それに乗っ取った分類をするならばそのポジションはヒーラーで間違いありません』

全身から血を吹き出しながら前衛で敵を全滅させるヒーラーなんて居てたまるか、と叫びたかった。

『と、いう事らしいです』

ドライブはこほん、と咳払いを一つして仕切り直す。

『武器は非マテリアドライブ製の業物、『草薙(クサナギ)』という刀。防面の一切を廃し、攻撃と素早さに特化した戦いを得意とするスピードファイターです』

ドライブは資料のページをめくる。

『続いて、応戦するのは石田(いしだ)愛斗(まなと)君』

慣れてきたのか、ドライブはすらすらと続けていく。

『闇属性専攻で、所有する属性は闇属性単色です。クラス内での役割はサポーター兼サブヒーラーとなります』

マナトは、まあ。基本的に誰かの手助けをする役回りなのでポジションに違和感には無いのだが。

「エクレアは最強決定戦とか謳ってるけどその実ヒーラー同士の決闘って最早意味判らないな……」

でも実際多分クラスの中で戦闘能力を比べたらはナギとマナトの二強になるだろうから間違っではないというのがなんともおかしい。『武器は闇属性の魔法剣、『グリード』。霧の様に変質する事で自由自在に形状を変形出来る臨機応変な対応力を持った剣です。攻撃特化のナギさんに対して、マナトの戦闘スタイルは攻防兼ね備えたバランス型となります』

解説が終わり、俺は視線をナギさん達に移す。

ナギさんはエクレアによって大衆娯楽化されてしまったこの状況にも動じる事無く、すうっと深い呼吸をして。

「多くは語りません。戦いの中で、貴方に伝えたい事があります」
と、マナトに告げる。

「――判りました」

対するマナトも言葉少なく、神妙な面持ちで頷く。

『さあ、準備は整った模様です！ それではあ――デュエル開始イイツ!!』

エクレアの宣言と共に、二人は武器を抜いた。

58. 5話 ……改良の余地、有り

ナギさんは刀を構え、マナトを見据える。

『神威』!!」

そして早速、ナギさんは新作の魔導を発動した。

「おっ出し惜しみ無しか」

『神威』こそレンと協力して新しく制作した魔導だ。露出が激しいナギさんの身体に、細い帯が巻き付いていく。帯は左胸を中心に四肢へと伸びていた。

「いきますっ!!」

ダン、とナギさんは踏み込んだ。

一瞬にしてマナトとの距離を詰め、その胴体目掛けて刀が振るわれる。

「っー!」

マナトは即座に対応し、その刀を黒い剣で受け止めた。

『おおっと!! なっちゃんの先制攻撃だあっ!』

『神威』は資料にない、新しい魔導ですね』

ナギさんは続けて更に攻撃を繰り出す。

『素早さを生かした怒濤の連続攻撃ッ! とつくんは防戦一方かあ!?!』

マナトは冷静に攻撃一つ一つを剣で受けていく。

そして、攻撃の間隔、そのリズムを掴みとり合間の隙を狙って剣を突き出した。

「っー!」

ナギさんはすぐに身を退いて、マナトから一気に距離を取った。

「——なるほど」

マナトはナギさんの身体を改めて観察し、頷く。

『なんという事でしょう! いつもは少し動くだけ血塗れになるなっちゃんも傷一つ負っていません!!』

『これが『神威』という魔法の効果のようですね』

実況解説が目をつけたとおり。俺が考案した『神威』の正体は『サ

クリファイスの刻印』を模倣した帯状の新基軸の鎧だった。あの帯は筋肉を補助する役割があり、レンが改造した『サクリファイスの刻印』による強力な付加効果を得て身体機能を大幅に向上させる。

肉体を直接酷使する訳ではなく、あくまで外部から動作を補助するモノなので今までのように血が噴き出すこともない。

距離を取ったナギさんに、マナトが詰め寄った。

「『グリード』！」

マナトの呼びかけに応えて、黒い剣が霧へと変質しマナトのもう片方の手に集まる。

そしてマナトの両手には2本の小振りな剣が携えられ。

「『二刀裁断』ッ」

二つの剣が振るわれる！

「くっ！」

目で追うことも出来ない無数の斬撃がナギさんを襲う。

ナギさんは一部は刀で受け、身体を捻り、無数の斬撃に対応するが。それでもギン、ギンと高い音が幾つか聞こえて来た。マナトの剣がナギさんの鎧に打ち付けられている音だ。

「あー、やっぱそうなるか」

「……改良の余地、有り」

製作者二人でその様子を見ながらメモを取る。

「一転してとっくんの攻勢だあっ！」

『どうやら『神威』は『サクリファイスの刻印』程の身体能力向上は見込めないようですね。ナギさんの動きのキレが悪いように見えます』

ドライズの指摘の通り、『サクリファイスの刻印』の性能を100%再現はできていない。目測で70%程と言った所か。

加えて、『神威』には大きな欠点がある。これは魔導の構造上どうしても解消できない『神威』の根幹に関わるものだ。

「レン、あと何分だ？」

「……大体2分」

「やっぱ短いよなあ……せめて30分くらいは保たせないと」

『神威』のコンセプトは『サクリファイスの刻印』の代償を“鎧に肩

代わりさせる”事にある。つまり、今までは傷ついていた肉体の代わりに鎧に負担をかけるのだ。当然、そんな負担が続けば鎧にガタが来る。

ピシッとナギさんの身体に巻き付く帯に亀裂が入った。現時点では最大稼働時間は5分程度が限界だろう。

「マナトも容赦ねえな……的確に『神威』そのものを狙って攻撃してやる。いや、その方が参考になるから良いんだけど」

ただでさえ負担が掛かっている鎧に更に攻撃を与えられては本来想定されている時間よりもっと保たないだろう。

俺とレンは二人の攻防を元にメモを取る。

さて、始まって早々だが、ナギさんにはもう残された時間は僅かしかない。

ナギさんは多少強引に、刀を繰り出した。マナトの斬撃がナギさんの頬を掠め、すれ違う様にナギさんの刀がマナトの胸へと伸びる。

しかしその切っ先は黒い霧が変質した小さな板に阻まれた。

『ここで隙を突いたなっちゃんの急所攻撃ッ！　しかしとつくんこれを軽く防御!!』

『やはり『グリード』の変幻自在性は強力ですね。流石“強欲”と銘打たれているだけあります』

因みに魔導決闘においては事前に魔石を保持する事では見えないが身体に二種類の魔導障壁が展開されている。

一つは安全用の障壁で、普通はこの障壁が壊れる事は無い。これが決闘による怪我や事故を防止している。そしてその上から脆いもう一つの障壁が展開していてこれが破壊されると決闘は負けと判定される。

因みにこの魔導障壁はイーヴィルとの実戦でも利用されているが、強度には限界があるのでどんな攻撃でも無傷で勝利、とはいかない。「名残惜しいですがそろそろ時間ですね……っ」

ナギさんは攻撃を辞め、もう一度マナトから距離を取った。

そして、呼吸を整え、刀を構え直す。

『おっとどうした事だっ?!　なっちゃんが身を退いたが、とつくん

は追撃しない!』

『様子を伺っているのでしょうか。お互いに動きは止まりましたが、張が張り詰めています。次の一手で、大勢が決しそうです』
緊

58. 6話 『我が戦いの道は続く——』

『我が戦いの道は続く——』

『ここになつちゃん詠唱だあつ！ 大技の予感ッ！』

ナギさんの身体を包む『神威』の帯が、まるでナギの血液を吸収しているかのように深紅へ染まっていく。

「受けて立ちますー！」

マナトは詠唱の妨害はせず、二つに分離していた剣を元の一つの剣に戻して構える。

『我が研鑽、我が生涯。まだ見ぬ地平を求め——』

溢れる魔力がナギさんの身体から零れて闘気となって立ち上る。そう、この魔導こそ本来『サクリファイスの刻印』を限界まで解放する事で使用されていた『神風』に変わる魔導。

『何処までも進みましょうッ!!』

器にゆつくりと注がれていった水が少しずつ溜まってゆき、やがて満ち溢れ、一気に零れ落ちる様に。

緊張した静寂を切り裂くようにナギさんの刀が振るわれた。

『神薙（かむなぎ）ッ!!』

ごうつと決闘場内の大気が震える。

その一撃は間違い無く、『神風』と遜色ない一撃。

そして、ナギさんの名を踏襲した彼女の新たな襲名魔法。

それを、マナトは真つ向から受ける！

「ぐうっ!!」

魔力と腕力、双方纏った強大な一撃に、マナトの身体がズリズリと少しずつ後方に押されていく。

しかし。

『僕は願う。貪欲に、強欲に——』

ナギさん渾身のその身に受けつつ、マナトは対抗するように詠唱を始めた。

『ただ、この目に映る全てを救いたいッ!!』

マナトが構える黒い剣が、マナトの意志に呼応するように巨大化し

てゆき。

『一刀両断』ツ!!』

力強く刃を振るうと、
ナギさんの刀を押し返して。

真つ黒な巨大な刃が、ナギさんの胴体を捉えた。

ナギさんの身体が吹き飛ばされると同時に、甲高い音が複数鳴り響く。魔法障壁と、『神威』が砕け散った音だ。

『決まったーッ!』

『障壁の破壊を確認、勝者はマナトとなります』

吹き飛ばされたナギさんは、空中で受け身を取って綺麗に着地する。

「神器使いにはまだ、及びませんか……」

敗れた割には彼女は嬉しそうに顔を綻ばせ、呟いた。

「大丈夫ですか?」

マナトが心配そうに歩み寄る。

「問題ありません。きちんと全力で迎え撃ってください、ありがとうございます」

ナギさんは改めて立ち上がると、マナトに深く礼をした。

ナギに大事が無い事を確認すると、安心したのかマナトはホッと一息ついて。

「良い魔法でした。これが、ナギの答えなんですね」

「はい。新しい風が私を導いてくれました。私の道は、まだまだ遠く続くようです」

「応援していますよ。これまでも、これからもずっと」

「ええ。いつか、道の果てに貴方達を越えて見せましょう」



試合が終わり、ギャラリーとエクレア達が去って行く。

俺はレンと二人揃って一階に降りてナギの元へ向かった。

「お疲れさん。まだまだ調整が必要だな」

レンの方は早速ナギさんから魔石を受け取って魔法陣の調整を始めている。

「しかし、予想以上でした。『刻印』を使わずにここまで動けるとは自分でも思っていませんでしたので」

「ま、その点は流石レンの魔導って事だよ」

早速改良に没頭するレンに視線を向けて、俺は言った。

ふと、ナギさんが真っ直ぐに俺の目を見る。

『神風』こそ私という一人の戦士の終着点だと考えて居ました。しかし、新たな世界で、新たな技術と新たな人々に触れて。私もまだまだ捨てたモノでは無いと思えました。力を貸して下さい、本当にありがとうございます」

マナトにしたように、俺にも深く礼をするナギさん。しかし俺は居心地の悪さを感じる。

「いやいや、お礼なら俺よりレンにしてくれよ。俺は大した事してないんだし」

「ですがこの魔導を考案して下さったのはファルマ君ではありませんか」

ナギさんはそう言ってくれるが。

『神威』に関して俺がやった事と言えば最初の設計と、マジックアイテムとしての最終調整くらいだ。これは、マジッククラフトを少しでも嚙った事のあるヤツなら誰でも出来る作業である。『神威』の神髄は異国の大魔導『サクリアイスの刻印』とそれをマジックアイテム様に調整したレンの『紋章』にある。

「俺がやった事なんて誰でも出来る事だよ。本当に凄いのは『刻印』を作った、ナギの国の人とそれを改造したレンの技量さ。俺なんて居なくても成立するんだ。お礼を言われる程の仕事はしてないって」

寧ろ、少ししか関わって居なくせに最初の条件で『神威』の使用権を自分に付与している辺り、我ながら卑しいと思う所だ。

しかし。俺の言葉を聞いたナギさんは少しだけ驚いた様子を見せて。て。

くすり、と笑った。

「貴方はマナトと少し似ていますね」

「え？ いや、俺はあんな聖人じゃ無いぞ？」

「いえ、自虐的、というか自身を過小評価する所が昔のマナトにそっくりなんです」

「過小評価？ 真つ当な自己分析だろ？」

「いいえ。ファルマ君。『神威』は——貴方にしか作れない道具ですよ」

ナギさんにそう言われて、俺は戸惑った。

決してそんな事は無いはずだ。マジッククラフトの技術としては初歩的なモノしか使っていないのだ。誰だってあの魔導を作り得た筈である。そんな俺の心を見抜いているのか、ナギさんは続ける。

「確かに、技術的な面を見れば簡単なモノなのかもしれませんが。ですが事実として。この魔導は今まで存在せず。貴方が力を貸してくれたらこそこの世に生まれ出でたモノではありませんか」

ナギさんはそう言いながら、蹲つて魔法陣の改良に試行錯誤しているレンの方へと近寄った。

「レンさんの『紋章』と私の『刻印』を結び付ける事が出来たのは、貴方が私達の橋渡しをしてくださったからです。私一人ではそんな発想浮かびもしませんでしたから」

俺が、レンとナギさんを結びつけた？

「貴方が私に手を差し伸べてくれたからこそ、この魔導は完成したのです。誰にでもなんて出来ません。貴方だからこそ、為し得たことなんです」

「そんな事言われるとは思っても無かったな」

自分にしか出来ない事なんて無いと思っていた。

「俺が出来る事なんて、特別な才能が集まるこの学園では誰だって出来る筈だよ。だって俺は、特別な才能も、背負うモノもないただの一般人なんだ」

「いいえ。貴方にしか出来ない事は沢山あります。才能や能力だけが全てではありませんよ。ですから、ご謙遜なさらないでください」

ナギさんの言葉を、正面から受け止める事が出来ない。

俺は自分が嫌いだ。

特別になれない自分が。

ちっほけな自分が。

「俺の事買いかぶりすぎだよ」
でも。

「……ありがとう」

「これからも、良いお付き合いが出来ると嬉しいです」

「ああ。乗りかかった船だし、今後調整には付き合いようさ」

俺は俺を認める事が出来ない。

けれど俺を認めてくれる人が居るならば……その信頼には最大限
応えたい。

それが特別になれない石ころの、捨てられない矜持だ。

59話 お、俺も遂に異能力者に……？

朧気な意識の中で。

曖昧な感覚と共に。

なんとなく、判る。ああ、また夢を見ているのだ。

風を感じる。

奥から、手前へ。強い風が吹き付けている。

視線の先には真つ黒な球体。

そう、巨大な何かが空中に浮かんでいた。風は球体に向かって吹いている。

違う。球体が大気を「吸い込んでいる」？

俺は風に飲み込まれないように、槍を碇代わりに地面に突き立てて。

多分、厳しい面持ちで、その黒い塊を見つめていた。

『居るんだろ……？　そこに……！』

心臓が高鳴る。じとりとした冷や汗が首筋を伝い落ちる。

『……ッ！　……ッ！』

何かを——いや、誰かの名前を、叫んだ気がする。

そして俺は——自ら闇の中へと飛び込んだ。

「イイイイイヤツホオオオオオオ!!!　フリーイイダアアアアアツ
ンツムツ!!!」

日の出を告げる先輩の鳴き声が。

「……う、あ?」

俺の意識を現実に取り上げる。

気だるい朝、学校に行くのが億劫だ。

俺は睡眠欲に負けて、二度寝をしようとするが。

『第一氷結魔法（アイス）』

突然、鋭い冷感を頬に感じ。

「冷たッ!?!」

慌てて飛び起きた。

「はいはい、起きた起きた。遅刻しちゃうよ?」
どうやら同室のドライズが氷魔法を使ったらしい。
俺は渋々ベッドから降りて、支度を始める……。

◇ ◇ ◇

部活動の時間、俺は机に突っ伏していた。

「眠そうだね、ハル君」

横からアリスの声が聞こえる。顔だけ動かしてチラリと見てみたが、彼女は優しく微笑んでいた。

「んあ……なんかまた変な夢見て。そのせいか判らないけどスツキリなくて寝不足気味なんだ、ふわあ……」

と、あくび交じりに答えるとアリスは目を丸くした。

「えっ、わ、私まだ何もしてないからねっ!?!」

嘗てアリスはイーヴィルの核に選ばれ、夢を通じて俺に魔法攻撃を仕掛けていた。その事が後ろめたかったのか、アリスは慌てて身の潔白を訴えたようだ。

「判ってるよ、それくらい」

今のアリスにイーヴィルとしての力は残っていないし、疑ってなんか居ない。

しかし、言葉の綾だろうが「まだ」ってなんだ「まだ」って。

「これは推測なのですが」

ふと、窓際のシジアンが手元の巨大な本からこちらに目を移している。

「先輩は以前〃夢に干渉する〃イーヴィルと戦闘しましたね?」

「え、あ、ああ。なんでそれをシジアンが知ってるんだ?」

「その点についてはご想像にお任せしますが」

「待って!?! なんでそんなこっちに丸投げするの!?!」

「その戦闘の際、敵の術中にハマり発動された魔導にほぼ取り込まれかけたと聞いています」

「しかもすっげえ詳しいじゃん!? マジで何で知ってるの!?!」

「もしかしたらその後遺症かもしれません」

俺の疑問をことごとくスルーするシジアン。

シジアンの言うとおり俺には想像するしかない。ティアア口校長も全部知ってたし、八天導師のつながりて報告を聞いたとかだろうか。「うっ……」

もしかしたら自分が原因かもしれないと思ったのかアリスが気まぐすそうに貼り付けた笑顔を浮かべて目を逸らした。

「後遺症？」

「夢とは元々魔導と親和性の高いモノです。古代から夢に関する魔導はいくつも作られてきましたし」

「ああ、確かルクシエラさんもそんな事言ってたな」

「夢に干渉する魔導攻撃を受けた結果先輩の体内で偶発的に魔導の術式が複写、転写された、と考えても不自然ではありません」

「そんなまさか……」

と、言葉では否定してみるが。思い当たる節がある。

アリスに渡した魔石『ドリーム・テイメンション』を作っていた時、術式の構成があり得ない程すんなり行えたのだ。最も、完成した魔石は結局俺には使えず、本来の使い手であるアリス専用のものであったが。

だから『ナイトメア・ダークマインド』が俺に何らかの影響をもたらしている、と言われてもそう突飛には感じない。

「……俺が喰らった魔導は『夢を現実には、現実を夢に変える』ものだ。それが複写されたにしては夢を操ったりできなかつたけどな」

俺の言葉に、シジアンは顎に手を当てて。

「ふむ。何せ偶発的なモノです。複写の課程で術式に歪みや欠落があったのでしょうか。となれば——夢に干渉出来なかつたということ『現実を夢に変える』という部分がキーですかね」

「つまり俺が見た夢が現実に起こっている事ってか？」

「はい。もっと踏み込むならば、夢に関する魔法で最もメジャーなモノが浮かび上がります」

シジアンの少し遠回しな言葉に答え合わせするようにアリスが呟く。

「『予知夢』……だね」

「起こりえる現実を夢としてシミュレーションする魔法。魔導という技術が確立されるよりも前の時代。古来より霊媒師や呪術師と等と名乗る者達が偶発的に会得、発動していた歴史があります。同じ事が先輩に起こったと考えるのも不思議はありません」

「お、俺も遂に異能力者に……?」

偶然とはいえ予知能力を手に入れるとか主人公みたい!

「あくまで情報材料を元に演算される予測結果であって確実にその通りになる訳ではないのでそこまで大仰なものではないかと」

「ですよ」

ぶっちゃけ知ってた。予知と言っても天気予報とかそのレベルだ。

しかしはつきり覚えている訳では無いが、あの夢は決して和やかな雰囲気では無かった。それが予知……つまりは未来の出来事だというのは勘弁願いたいのだが。

「とはいえ、偶発的なモノです。意図的に保存しようとしなければそのうち解消されるのでは無いでしょうか。ただ、後遺症が続いている間は寝てる間も無意識に魔導を発動しつづけてしまうという事なので睡眠の質が下がっているのかと」

「マジかあ……」

俺はあくびをかみ殺しながら頭を搔く。

「ごめんね、ハル君……」

「アリスが謝ることじゃないよ」

アリスがイーヴィルになってしまったあの事件の原因は俺にある。それに伴うどんな事だつてアリスの責任では無い。すべては俺の自業自得、因果応報だ。

「差し出がましいようですが、ボクの知り合いに睡眠について詳しい方がいます。彼女なら後遺症をどうにかできるかもしれません。取り次いでみましょうか?」

「そうなんだ。まあずっと寝不足つても辛いしお願いしてみようかな」

「では、近いうちにコンタクトがあるかと思えます。今日の活動はもう終わりにして結構ですので早めにお休みください」

「ああ、そうする。ありがとな、シジアン」

「お大事にね、ハル君」

その後早めに寮に戻った俺はそのままベッドに飛び込みすぐに眠りに落ちた。

60話 ……あ、社会的に死んだわ

「ふわあ……」

大きくあくびをする。

ダメだ、最近本当に眠い。

睡眠時間は取れているのだが寝ても寝ても眠気が消えてくれない。眠る度にあの夢を見る。黒い謎の球体、あれは一体なんなのだろうか。

現在時間は3限目が終わったところ。次の4限目は自習だ。

「ちよつとずるいけど……許して欲しいな」

俺は教室を抜け出した。

自習時間と、そのまま続く昼休みを利用して昼寝をするつもりだ。

ふらりと向かった場所は、部活に入る前に食事に使っていた裏庭の木陰。

俺は身体を投げ出して、仰向けに寝転ぶ。

「よつと」

時期は晩夏だがまだまだ気温は暑い。そこで俺はポケットから魔石を取り出した。

「じゃじゃーんー！」

誰が居るわけでも無いのに見せびらかすように魔石を掲げる。

「ドライブが寝てる間に盗んだ氷の魔力！」

冷気の放出範囲を俺の周囲に固定して、枕と布団をマテリアライズする。

「枕元に魔石を置いてつと」

そこまでするなら寮に戻って寝れば良いと思うかもしれないが、寮に戻ると寮長に説明するのが面倒だしあえて外で布団と枕を広げるのも中々乙なモノだ。

眠気はずつと襲っているので俺の意識は容易くまどろみの中に落ちていった。

ああ、また夢を見ている。

身体が重い。それは眠りの中にいる気怠さなのか、そういう夢を見ているからなのかは判らない。ひび割れた地面に、真っ黒な空。

周囲には根こそぎ掘り起こされた木々やバラバラになった遊具、電灯、瓦礫、いろいろなモノが浮かんでいる。

視線の先には……白い球体。

——今度は白か……。

その正体はわからない。でも俺は、歯を食いしばってその球体を睨む。

夢だというのに。全身が痛い。特に左肩は痛いを通り超えて感覚が無い。

理由も、状況も全く判らないが。

痛い。辛い。苦しい。

そんな気持ちで心を埋め尽くす。

でも、俺は——

『石ころにも、譲れない意地はあるんだッ!!』

そう言つて、がむしゃらに槍を振るう為に。

右手を、伸ばした——

むに。

「……んあ?」

夢から現実へ、意識が返ってくる。

やはり、奇妙な夢を見たせいであまり熟眠感はない。

とりあえず、状況を確認する。

頭はまだぼんやり。ドライズからパクった氷の魔力で調節された

気温は良好。

夢のせいかな右手は伸ばしていた。そしてなんだから柔らかい感触。

——……柔らかい?

その違和感に気がついた時。

俺は漸く目の前に広がっていた光景を認識した。

「……んあ?」

目の前に——誰か居る!!

ピンク色の短めな髪、あどけなさ残るふつくらした顔つき。瞳は閉

じられ、すうすう安らかな寝息が聞こえてくる。芝生の絨毯にふわりと落ちる制服のスカート。校章が示す学年は一年生。

見知らぬ一年生の女子が、目の前で寝ている!!

そして俺はその一年生女子の胸をおもいつきり触っていた。

「……あ、社会的に死んだわ」

さーっと血の気が引いていくのを感じる。

お、おとおお、落ち着け!!

当人はまだ眠っている!

誰かに見られてない限り、今のうちにそーつと手を離せばセーフだ

!!

——誰も、居ないよな……?」

俺は恐る恐る首だけ動かして周囲の気配を探った。

すると。

「うえっ!」

首を後方へ回しきったところで。今度は金髪の男子生徒が眠っているのを確認する。

校章が示す学年はこちらも一年生。俺の目の前で眠っている少女と輪郭が似ている気がする。

つまり俺は今、見知らぬ男女に挟まれた川の字で寝ているという事か!?

衝撃的な状況に思考回路がフリーズする。

そして……

「むにゃ?」

「あっ」

目の前で眠っていた、ピンク髪の見知らぬ一年生の瞼が、ゆっくりと開かれた。

——終わったあ……。

なんか最近すぐ終わった気になってるような……。

ともかく、俺は慌てて腕を引っ込めた。

「ち、違、これは事故で!!」

顔中からだらだら汗を流しながらわたわた言い訳をする。

俺はビクビクしながら、少女の反応を伺った。
大声でもあげられた日には本当に社会的に死ぬ。

なんとかして許して貰わなければ……と身構えていたのだが。

「ふああ」

ピンク髪の少女は上半身を起こして大きなあくびと共に伸びをした。

まるで何事も無かったように。

そして。

「おはよう、おにーさん」

彼女はまだ眠たそうに瞳を半開きにしたまま、にこりと僅かに微笑んで、俺に挨拶を投げかける。

「え、あ、お、おはようございます……」

もつとこう、騒ぐなり暴れるなりする事を想像していた俺は面食らってしまった。

ひよつとして、寝ぼけていて俺がお手つきしてしまった事に気づいて無いのかもしれない。

ピンク髪の少女は空を見上げ、偶然飛んできた赤いチョウチヨを指先に止めて。

「ん、良い昼下がり。気持ちいい寝起きよ」

と、独白する。

どうやら生活指導沙汰にはならなさそうに感じる。俺はほっと胸をなで下ろした。

すると少女は、

「ところでおにーさん。女の子の身体を勝手に触るのは良くないよ？」

と、腰に手を当てて頬を膨らませてむっとした表情を作って言う。

——全然寝ぼけて無かったーツ!!

普通に糾弾されたので、俺はゼロコンマの速さで姿勢を組み替え、土下座した。

「すいませんでしたーツ!!」

収まっていた胸の鼓動が改めて爆速で高鳴って行く。多分あれだ。

この子は超マイペースなのだ。一つずつ、自分のペースで物事を処理しているから、こんな感じでタイムラグのようなモノが発生するのだろう。

このままではまずい。通報や生活指導だけは勘弁して貰えるように交渉しなければ。

なんて思っている俺の焦りなどどこ吹く風で。

「ん、反省しているのならいいのよ」

と、寛大な言葉が降ってきた。

「え、あ、は、はい……」

あまりにもあっさりと言われてしまって拍子抜けしてしまった。

61話 下級生に哀れまれてる!?

それからしばらく、静かな時間が流れる。

ピンク髪の少女は上半身だけ起こして下半身を投げ出したままぽーつと虚空を眺めては時折やつてくるチョウチヨと戯れていて。

俺はこの、突然現れた正体不明の一年生との距離感が掴めず……というかどう対応すればいいのかが判らずただ黙って少女の次の動きを待っていた。

すると、

「んーっ!」

背後から声。まだ声変わりの来ていない、『男の子』と称するにふさわしい高めの声色が耳に入る。そういえば目の前の少女に気をとられて忘れていたが背後でも見知らぬ一年生が寝ているんだった。

金髪の少年は元気よく、ジャンプするように起き上がって数歩進み、太陽みたいになぶしい笑顔で俺と少女に向けた。

「おはようだよっおねーちゃん、おにーさん!」

ピンク髪の少女は柔らかな笑顔を投げ返す。

「おはよう、キータくん」

そして、キータと呼ばれた少年は、

「んー、寝起きの運動だよっ!!」

と言ってその場でシャドーボクシングを始めた。

俺はその光景を呆然と眺めている。

すると、ピンク髪の少女が大きなあくびを一つして。

「ふわ。なかなかの寝心地だったのよ」

と満足そうに言う。

「え、あ、え?」

「残暑厳しいこの晩夏の野外に、こんな快適空間を作り出してしまっなんて侮れないお昼寝力をもっているのね」

「お昼寝力?」

謎の力を持っている事にされた俺は理解が追いつかずに混乱する。

「でも、寝ているおにーさんとっても苦しそうだっ。折角のお昼寝

力が勿体ないの」

と、少女は残念そうに眉を寄せる。

「あの、お昼寝力は置いといて、君たちは一体何者……」

俺が問いかけると、ピンク髪の少女はその半開きな瞳をハッとぱつちり開いて。

「あれま。そういえばまだ自己紹介してなかったの」

少女は立ち上がり、シャドーボクシングをしているキータの元へ歩み寄って。

「キータくん。あれやるよ」

といってキータが突き出した拳をさらりと外側から包みこむように取って。

「了解だよ！」

キータは構えを解く。

すると二人は繋いだ手と手を高く掲げ流れるように身体を動かして背中合わせにひつついて。

「私はハルカ」

「僕はキータ！」

名乗ったかと思うと弾かれた用に身体を回転させながら互いに距離を取る。

繋いでいた手を離すと同時に二人同時にパチンと指を鳴らして。

二人の手に物体がマテリアライズされる。

「二年B組、光属性専攻。夢と眠りの魔法使い」

ハルカと名乗った少女はふわふわしたナイトキャップを生成し、

「二年A組、光属性専攻！ 星と正義の魔法使い！」

キータの方は赤く細長い帯のようなマフラーを首に巻き、

二人はポーズを決めるとニコツと星が飛ぶような満点のスマイルを作った。

「ええ」

なんか、児童作品の主人公がやる決めポーズみたいな一連の流れを、俺はただただ困惑しながら受け止める。

そしてハルカは自分の頬に指先を当てて、言う。

「リーダーに頼まれたのよ。悪い夢に困っている人がいるって」
「困ってる人を助けるのは、正義の味方のお仕事なんだよ！」

漸く得られた情報をかみ砕く。一年B組のリーダーって確か――
「ってシジアン!? てことは君達がシジアンの言ってた人!？」

確かに夢と眠りの魔法使いという肩書きはまさしくそれだ。

「そうなのよ」

「そうだよ！ 僕はオマケだけどね!!」

名乗りを終えたキータは再びシャドーボクシングに戻る。ハルカの方はのんびり歩み寄ってきて先ほどまで寝転んでいた俺の隣にぽすつと腰を下ろした。

しかし、シジアンが夢に関する魔法使いを紹介してくれるというものだからってつきり、それこそ霊媒師や呪術師みたいな風体の人間が現れると思っていた俺はすっかり面食らってしまう。

「ところでおいーさん。大事な事を忘れてるの」

ハルカは人差し指を立てて真剣な面持ちで言う。

「え」

大事な事と言われてもパツとは思いつかばない。

そんな俺にハルカはヒントと言わんばかりにもう片方の手を持ち上げて。

そちらも人差し指を立てて横を指す。俺からみて左側だ。

それだけではまだ理解できないでいると、ハルカは左を向いていた指先を少しずつゆっくりと上方向へ弧を描いて傾けてゆき、元々上を向けて指していたもう片方と指先とぴったり重ねる。その動きで完全に理解した。これは時計の針のジェスチャーだ！

そして二つの針が上方向で重なるという事は、

「正午?」

「惜しい。もう一步よ。何の時間?」

「え? ……あ、ひよつとしてお昼ご飯!？」

「正解よ」

俺の解答を称賛するようにキラッと二つの指先から小さな星形の光が瞬いた。

そしてハルカは何処から取り出したのか、お弁当箱を膝の上に乗せる。

「キータくんも来るの」

「はいー!」

呼ばれたキータは元気よく返事をして、俺たちの元へやってきて。

「ごっはんごっはん♪」

機嫌良くお弁当箱を取り出した。

マイペースながら無邪気に昼食を楽しもうとする二人の様子に俺は思わず微笑んでしまう。すると、

「……おにーさんは?」

とハルカが不思議そうに首を傾げた。

「え? ああ……」

言われて、俺も昼食を取り出す事を要求されていると察して枕元に置いておいたバッグを探る。そして昼食を並べた。

ぽす、ぽす、とて。

栄養補給三種の神器、カロリーバー、マルチビタミンジュース、ビーフジャーキー!

イーヴィルでなくなったアリスに、俺へお弁当を作る義理はもう無い。あの事件が落ち着いて以降俺の食生活は元の様式に戻っていた。気がつけばハルカがその眠たそうな瞳を大きく開いて呆然としている。キータも驚きが隠せない様子だ。そして二人は無言のままお弁当箱を開いて。ハルカはミニハンバーグを、キータは卵焼きを一つ差し出して。

「あげるよ」

と二人声をそろえて言った。

「下級生に哀れまれてる!?!」

ハルカはお弁当の蓋の上にミニハンバーグと卵焼きを乗せて俺の前に置き。

「それじゃあ、いただきます」

「いっただっきます!」

と二人は手を合わせた。俺もつられて、

「い、いただきます」

と食事を始めたのであった。

ハルカとキータはのんびり黙々と、けれどとても幸せそうにお弁当を食べてゆき。

俺はといえば軽食なので一人すぐに食べ終わってしまった暇をしていた。

幸せそうな二人につられて、少し笑っていたかもしれない。

するとハルカがクスツと笑みを零した。

「おにーさんは、ダメなの」

「はい!？」

突然笑顔でダメだしされて面食らう。

「気持ちのいい眠りは、起きているときに充実しなきゃいけないよ」

ハルカはそう言うと、俺の食事を指さす。

「美味しいモノをおなかいっぱい食べるのは基本なの」

「いや別に不味いと思って食ってる訳じゃないけど……」

「百歩譲って味に満足していたとしても。一人のご飯は味気ないのよ」

「うぐうっ!!」

グサリ、と胸にでかい杭を打ち付けられたような衝撃が走った。

「おにーさん、ただご飯食べてただけなのに私たちを見て笑ってたの」

「そう形容されると俺不審者みたいじゃないかな!？」

慌てるが、ハルカは首を横に振るった。

「悪いことじゃないのよ。おにーさんは誰かの喜びを自分の喜びに出来る人って事なの」

言われて、少し戸惑った。誰かの喜びを自分の喜びに、なんて考えた事も無かったから。

「お昼ご飯、いつもは一人で食べてるんでしょ?」

「な、なんでそれを君が……」

「リーダーが言ってたのよ」

「あーシジアンか……」

シジアンからこの子に相談が行っているのだから、俺の普段の様子

などを伝えられていても全然不思議では無い。

「大好きな人たちと食べるご飯はとっても美味しいのよ。おにーさんにも好きな人、居るでしょ？」

なんの含みも無い、すました顔でハルカが問いかける。『好きな人』という単語に少し気恥ずかしく感じて目を逸らすのが、逸らしたまま頷いた。

「そりやあまあ、人並みには」

「家族。友達、恋人。誰でも良いの。楽しい食卓が、悪夢を追い払ってくれるわ」

言い終わると同時にお弁当を食べ終わったハルカはお弁当箱をしまう。

「そしてもう一つ」

ハルカは立ち上がり、俺の手を引いて。

引っ張られるように俺も立ち上がる。

「ごちそーさまー！」

キータも食べ終わったようで俺のもう片方の手を握り。

「美味しいご飯を食べた後は」「めいっばい遊ぶんだよ！」

二人は俺の両手を引いて、どこかへ歩み出した。

「ちよ、ま、一体何処へ連れてく気なんだ？」

二人は呼吸ぴつたりに進んでいく。

向かった先は「永久の森」だった。

62話 子供の体力、無尽蔵かよ……

今週の「永久の森」は夏の様相。様々な植物が青々と茂り、その豊かな大自然をかき分けてぐいぐい突き進む事十数分。

「とうちやーく、だよー!」「ようこそ、私たちの箱庭へ」

そう言って二人は俺の手を離した。

「な、んこ、んこは……!」

目に飛び込んできた光景に言葉を失う。

木々が大きく切り開かれた空間に、巨大な建造物が建ち並ぶ。

それ等は大きな丸太を積み重ねられて作られていた。

俗にアスレチックと呼ばれる子供用の遊技場だ。

「ひゃっほーい!」

キータが大はしやぎで建造物に駆け寄って、よじ登る。

橋子として組まれた丸太の上にはロープが張られ、キータは器用にロープの上を走り抜ける。思わずヒヤヒヤする光景だが、下方にはネットが広がっていて落ちても危険はなさそうだ。

「永久の森にこんな場所があったなんて……」

「アイルくんが作ってくれたのよ」

「マジかよあの人すげえな」

これだけの設備を、個人が制作したと聞いて更に驚く。

「よっ、とー!」

ふと、アスレチックを駆け回っていたキータが別の方向から降りて来て。

「えい」

ベチャ、と俺の服に何かを付けた。

「はっ!」

「隙だらけだよっ!」

キータはいたずらに笑ってまたアスレチックを登っていく。

「ちよ、なにこのサイケデリックな染み!」

べちやつと擦り付けられたのは何かしらの果実だった様で、俺の赤い制服に七色の染みが広がっていた。

「レインシアの実よ。洗えば簡単に落ちるから心配いらぬの」
と言いつつハルカが俺の手のひらの上にすっぽり収まるサイズの熟れた果実を乗せた。

「その辺に沢山生ってるの。最後に一番綺麗な人が勝ちよ」

ハルカはそう言い残すと、キータとは別の遊具へと駆けていく。

「え、ちよ、ま、」

突然の事に呆然とするが、顔をぶんぶん左右にふるった後深呼吸し、状況を整理する。

「ふ、ふふ、そういう事かよ……」

どうも子供のお遊びに巻き込まれたらしい。そういう事なら、遠慮はしない。

「たくつ、覚悟しろよ！」

俺は啖呵を切つて、ハルカに渡された果実を、アスレチックの上で動き回るキータに向けて投げた。果実は綺麗な軌跡を描いてキータの背中に直撃した。

「わわっ!？」

「良いコントロールね」

ちよこん。と張られたロープに座って揺られながらハルカがパチパチ控えめな拍手を打つ。

「お姉ちゃんだつて高見の見物なんてさせないんだよ！」

キータは木の実をもぎ取ってハルカへ向けて投げる。

が、ハルカは座っていた状態から後ろに倒れ込むように身体を投げ出す事でこれを回避。そのままロープにぶらんとぶら下がると振り子のように身体を揺らして勢いを付け手を離れた。

弧を描いて宙を舞い、やや下方のアスレチックに着地する。

「あつぶな!?! 頼むから落ちるなよ!?!」

俺はぞつとしたが、二人は無邪気にアスレチックを駆け回り、

「えいっ」

「わふっ!?!」

ハルカの投げた木の実を顔面に喰らってしまった。
ねつとりしつこい甘い匂いが鼻につく。

「くそつ高所を取られてるのは不利だ！俺も登らないと……」
俺もアスレチックに足をかけ、急いでよじ登るのであった。

◇ ◇ ◇
「……たはっ！うう、く、」

数十分後。俺は身体を大の字に投げ出し空を仰いで息を切らしていた。

「つ、疲れた……子供の体力、無尽蔵かよ……」

「だらしないのよ」

「おにーさん、まだまだだよー！」

ハルカとキータは俺より上の方のロープにぶら下がりながらクスクス笑っている。

出不精の俺だが、学園の課題やルクシエラさんのお使いで常日頃からイーヴィルと戦闘をこなしている。体力が無いわけではない。

が。それもこれも『エンハンス魔法』の補助によるところが大きかったのだと痛感した。

流石に年下の下級生相手に、遊びでエンハンスまで使うのは大人げないと思ってセルフ縛りをしていたのだが……。

「思った以上に早く体力尽きた……俺の本来の体力ってこんなもんだったのか……」

昼休みいっぱい保たなかった事に少しショックを受ける。

——……いやまて、冷静に考えてみたら魔法使いなんだからそんなもんでも良いのでは？

なんて考えて居たら予鈴が聞こえてくる。

「しゅーりょー！優勝は〜？」

ぴよい、とキータがロープから飛び降りて下方のネットで勢いを殺し、しゅたつと地面に着地する。そのすぐ後ろをハルカが全く同じ動きで付いていった。

勝敗を決するらしいので俺も重い身体を持ち上げて二人の横に並び……。

三人揃って互いの汚れ具合を見て。

「……みんなドロドロでよく判らないのよ」

全員が全員全身に七色の染みを作っていた。

「じゃあ唯一顔が汚れてないおねーちゃんが優勝！」

「雑な判定だなおい!!」

「あはははー！」

「うふふ」

キータとハルカが楽しそうに笑う。

「つたく……ふっ、ははは」

ふたりにつられて、俺も笑みを零していた。

「それじゃあ、今日の所はここまでよ」

ハルカはそう言って俺の前に立つ。

「うん？ どうかしたか？」

俺が首を傾げると、ハルカはぐっとつま先立ちで背伸びをして。

「ていつ」

しゅっと人差し指を突き出して俺のデコを突いた。

「ほわ!？」

突然の不意打ちに思わずよろめき、尻餅をついてしまう。

『『デリシヤス・ドリーム』』

「え？ 何!? 何したの!？」

「悪い夢を、美味しい夢に変えるおまじないよ」

言われて、俺はハツとする。ハルカ達に振り回されたすっかり忘れて居たが当初の目的は魔導が原因と思われる悪夢を改善させる事だった。

「さつきも言ったけど、良い夢は良い現実から生まれるものよ」

ハルカはぼうつとほのかに輝く指先をくるくる回して弄び、続ける。

「よく食べて、よく遊んで、いっぱい笑って、ゆっくり眠るの」

「あ、ああ……」

「それから、おにーさんに宿題よ」

「えっ、宿題!？」

「お友達と楽しいお昼ご飯。一緒に笑って、一緒に食べるの」

「……つまり、ぼっち飯食うなど?」

「平たく言うところですよ」

——宿題感覚ですっげー無理難題言いますね!!

と、奥歯を噛みしめるが助言を求めている立場なので文句は言えない……。

「二人とも〜！ 急がないと午後の授業始まっちゃうんだよ！」

キータが森の出口へ続く道の前でぴよんぴよん飛び跳ねながら俺たちを呼ぶ。

「さ、立っておいにーさん」

ハルカが差し伸べた手を取って俺は立ち上がった。

「ありがとう」

「また明日、次は放課後に遊びましょ」

「あ、ああ」

そして俺は永久の森を後にした……。

数分後。

「つぶねえっ！ ギリギリせーえっふ!!」

俺は教室にスライディングで駆け込む。

「ファルマってば、ギリギリ過ぎ。一体何処で何して——」

ドライズが呆れながらこちらの方を振り向き、

「うわあああ!!? 何!?! どうしたのその格好!?!」

俺の姿を見て絶叫した。

「え?」

言われて自分の身体に視線を落とす。

「あ。」

レインシアの実で付いた汚れは、ハルカ曰く洗えば簡単に落ちるらしい。逆に言うならば。『洗わなければ落ちない』という事だ。

「……」

俺はすっかり七色に染まったワイシャツの胸元を摘み上げて、頭を掻いた。

今日はこの後ずっと汚れたままで、少し恥ずかしかった。

63話 俺は強くないけれど。

夕焼け空の帰り道。

俺はめいっぱい息を吸い込んで。深く、長く吐き出す。

「すっごいため息ね」

隣を歩くアリスが心配そうに俺の顔を覗いていた。

「いやちよつと無理難題な宿題を出されてな……」

「宿題？」

「ああ……」

友達と仲良くお昼ご飯、ねえ。友達居ないんだよなあ……。

この学校に来てから昼食はいつも一人だった。

誰かと一緒に、だなんてイーヴィルだった時のアリスくらいだ。

そこまで考えて。

あ、

と歩みを止める。

「ハル君？」

きよとんとハテナを浮かべながらアリスも立ち止まる。

「……アリス。俺たち、友達だよな？」

「急にどうしたの？」

そう、今の俺はぼっちじゃない。アリスが居るんだ。

思わず視線を逸らしながら、それでもか細い希望にすがるように言

う。

「その、さ。迷惑じゃなければ、の話なんだけど」

「なあに？」

「……」

「ハル君？」

やべえ。すっごい恥ずかしい!!

俺はアリスに散々迷惑をかけまくって、その上頼み事なんて凶々しいと思ってしまう。でも他に頼める人は居ない……。

「本当に、迷惑じゃなければなんだけど」

覚悟を決めて、俺は重い口を開いた。

「うん？」

「……お昼ご飯、また一緒に食べたりとか、できないかな？」

一瞬、アリスの目が大きく見開かれた気がした。

そして、固まる。

驚かせてしまったようだ。やっぱり俺なんか頼み事なんて図々しいにも程があつたか!? ぶわっと汗が噴き出してくる。

「ご、ごめん!! いやほんと、突然迷惑だよな!? 今のは忘れて——」

と、必死に取り繕おうとすると、アリスは。

俺の頬に手を差しのびし。

「へ?」

ペタ、ペタとまるで輪郭をなぞるように俺の顔を何度か触って。

「あ、アリスさん?」

行動の意図がわからず困惑していると、アリスは。

「え、本物のハル君??」

すつごい怪訝な顔で俺の正体を探るようにペタペタ顔を触り続けた。

「どーゆうリアクションですかそれ……」

されるがままになりながら、俺は目を横線にして言う。

「だ、だってハル君がそんなに積極的なこと言うなんて」

「いや、これには深い事情があつて」

「事情?」

俺はハル力達に出された宿題についてアリスに伝えた。

「良い夢は良い現実から生まれる、ね」

「それで、ぼっち飯食うなって怒られちゃって」

「でも、どうして私なのかな?」

「俺他に友達居ないし……」

「ドライズ君はダメなの?」

「あー……。あいつはダメ」

確かにドライズは数少ない友達の一人だが、この一件に関しては

じめから候補から除外していた。

「あいつ、お昼はルクシエラさんの所に食事を届けて、そのまま一緒に食べてるんだ。家族の団欒に俺みたいな部外者が首を突っ込んで水を差したくない」

「部外者って……ハル君もルクシエラさんの弟子じゃないの?」

「……俺は弟子じゃ無いよ。ルクシエラさんが勝手に言ってるだけだ」

俺なんかがあの人の弟子を名乗るなんておこがましい。俺のせいであの人の顔に泥なんて塗りたくはない。

一通り話を聞いて、アリスはうんと納得したように頷いた。

「……そっか、そういう事なら仕方ないね。それじゃあ一緒にご飯食べようか」

「えっ、ホントに良いのか?! いや、マジで迷惑なら断ってくれても――」

「迷惑なんかじゃないよ」

俺の言葉を遮ってきつぱりと、アリスはにっこり笑顔を作ってそう言ってくれる。

今まで数え切れないくらい迷惑をかけてる筈なのに、全てを受け止められるアリスの優しさに、胸が苦しくなる。

「……ホント、ありがとな。アリス。今度絶対お礼するから」

「えへへ、期待してるからね」

アリスの笑顔が眩しかった。



次の日の放課後。

傾いてきた日に照らされながら、俺はまどろみの中にいた。

場所は裏庭の木陰、いつもの場所。

お昼休みには約束通りアリスが付き合ってくれて。しかもわざわざまたお弁当を作ってきていた。『どーせまたデイストピアみたいなご飯なんだよね?』って言われて。

申し訳なさと同時に、嬉しく思ってしまう自分が浅ましく。

でも、やっぱり。

一人で食べるよりも、確かに楽しかった。

放課後、ハルカ達と遊ぶ約束だったけど。教室まで迎えに行くのは少し気恥ずかしくて。

昨日みたい在這裡で待ってれば来てくれる、そんな気がした。

そしてゆったりと、ぼんやりと、意識は夢の世界に落ちていく……。

黒い球体が浮かんでいる。

それは強大な引力を伴って空気を、木々を、あらゆるモノを飲み込んでいく。

俺はその球体と向かい合い、自ら飛び込んで。

景色が変わり、真っ暗な世界が広がった。

夜の闇のような黒い空、明かりは無いのに、何故か視界ははっきりしている。

ひび割れた荒野のような大地に足を付け。

寂しさと、悲しさを感じるこの世界で、俺は白い球体を見つける。

球体の中では、何か塊のようなモノが二つ。遊泳するようにぐるぐる漂っていた。

そして突如。白い球体を、黒い霧が覆っていく。

その光景を見ている夢の中の俺は。恐怖と、無力感に襲われ。足を一歩下げた。

——ああ、俺は主人公じゃ無い。

こんな時、誇らしく、勇ましく、胸を張って戦えるような強さは、俺には無い。

何処までもちっぽけな、石ころだ。

気がつけば、俯いていた。

——やっぱり今日も、悪夢なのかな。

『大丈夫よ。ひとりぼっちは怖くても、おにーさんの周りには、沢山の幸せが溢れてるの』

夢の世界に、優しい声が溶けていく。

ふと、肩に温かさを感じて顔を上げると。

すぐ横でアリスが俺を励ましてくれていた。

びつくりして周囲を見渡すと、シジアンも側に居てくれた。信頼を感じる眼差しがくすぐったい。

二人に支えられ、俺はもう一度闇を纏う白い球体と対峙する。

——そうだ。俺はちっぽけで弱いけど。

熱い炎が、身体の芯を燃やしていく。

刹那、球体を覆う闇が横一文字に切り裂かれ、霧散する。

水色のポニーテールを揺らした親友が、『後は君の仕事だろ?』と言わんばかりに挑発的な笑みを浮かべていた。

俺はその背中を追いかけられるように槍を突き出して。

重い抵抗感に押し返されそうになりながら、それでも。

強く、前へ進む!

ふわりと背中が後押しされる感覚があった。

誰よりも気高く、誰よりも強い真つ白な大魔道士が、『しゃんとしなさいな』と言わんばかりに槍を持つ俺の手に手を重ねてくれる。そうだ。

俺を支えてくれる人達。俺を信じてくれる人達。特別じゃ無い俺を、それでも『特別だ』といって拾い上げてくれる人達が居る。

俺は強くないけれど。

それでも。

みんなが居てくれるなら!

——どんな闇だって怖く無いんだツ!!

突き出した槍の先端から、光がほとぼしり暗い世界を照らしていく



「……ああ」

うつすらと意識が戻ってくる。

「暖かい夢だった」

ハルカのおまじないが効いた証拠だろう。久しぶりに、気持ちの良いい目覚めだ。

上体を起こして伸びをする。

左右からはすうすう安らかな寝息が聞こえていた。

「やっぱり来てくれたんだな」

左手側にはハルカが、右手側にはキータが横になっていた。

「ありがとな、ハルカ。キータ」

眠っているのだ。聞こえちゃいないなんて判っていても言わずには居られなかった。

すると、二人は眠ったままうつすら笑みを浮かべた気がした。

「……よおし、今日は派手に遊ぶか!」

恩返しするような心づもりで。小さな、けれど立派な魔法使い達が目を覚ますのを俺はのんびり待ち続けるのであった。

64話 八天導師の総帥アイル・フリーダムの日

「たのもーっ!!」

ババンツと寮の一室の扉が開かれる。

「ほわああっ!!?」

ビツクウツと身体を跳ねさせて、ファルマは二段ベッドの下段から転がり出たようだ。

「ドラリン借して!!」

単刀直入に僕の名を呼ぶその声の主は、クラスメイトのエクレア。

「待て待て待てツツコミ所が多すぎるわツ!!」

ファルマが立ち上がる気配を感じる。この辺りから騒がしさに意識がはつきりと覚醒してきた。

「夜中の三時に何言い出してんだテメエはツ!! つうか異性の階層に無断で入ってくんな問題になるだろうが!!」

ファルマにしては真つ当な事を言う。

惜しむらくはそれが “真夜中で” “無駄な大声” で無ければ百点だったのだが。

僕は片目をこすりながらベッドの梯子を降りてファルマの後頭部にぺしつとチョップを入れた。

「つて!?!」

「近所迷惑」

「あつ、はい、すんません……」

しゅん、とファルマは萎んでしまった。

「で、僕になんの用だい?」

あくび交じりにエクレアに問いかけると。

「よおし、出発だあ!」

エクレアは僕の手を無理矢理引いて進み出す。

「ちよ、ま、せめて答えてよ!」

もう逃げ出すことは出来ない悟り、僕は腹を括った。

そしてエクレアは漸く目的を教えてください。

「ふっふっふ! 今回のネタはズバリ、 “学園人気NO.1最高学年

主席にして新設された組織、八天導師の総帥アイル・フリーダムの一日に迫る!!」だぜい！」

「あー新聞ね。……それになんで僕が付き合わなきゃいけないのさ」

「人手が足りないから！」

「人手って……他の部員居ないの？ 新聞部」

「全校生徒百人にも満たない学校で新聞部なんてマイナーな文化系部活に人が集まるなんて思わないで欲しいな!!」

無駄に自信満々に返されて、僕は思わずたじろいだ。

「そ、そうですか」

こうして、僕の安眠時間は黄色い悪魔みたいなクラスメイトにぶち壊されたのであった。



「アイル・フリーダムの朝は早い。午前4時には既に起床して、寮の食堂を間借りして料理にいそしんでいる」

「メモメモっと」

「アイルさん、料理できたんですね」

僕も包丁を持ってアイルさんのお手伝いをしながら話しかけた。

「まーな。ちび共も居るし年長者として、これくらいのスキルは身につけとかないとなー」

アイルさんが作っているのは、彼が嘗て所属していた孤児院の仲間達の朝食とお昼のお弁当だ。それなりに人数が居るのでこの時間から作り始めないと間に合わないらしい。

「リーゼのお弁当、アイルさんが作ってたなんて意外です」

「ハハハ！ リーゼは料理下手っぴだからなー。なんつーか、真つ当な食事に興味ねーんだわ。栄養状態が心配になっちまうぜー」

アイルさんは笑いながら調理をしつつ、時々指揮するように指を走らせる。何もその身一つで何人分もの料理を作っている訳では無いのだ。

アイルさんの得意分野は「自立魔導」。予め設定したルーチンに従い動作する魔法の事だ。

今アイルさんはその「自立魔導」を使う事で自分の作業とは別に

包丁やフライパン等を同時に使役している。

料理器具達がまるで透明人間に扱われているかのように勝手に動く様はファンタジックで賑やかだ。

お弁当を作り終えたアイルさんは、箸を片手に寮を出る。

もうすぐ日の出の時間だ。

「んじや、ちよつくら行つてくらー」

「毎朝大変ですね。どうしてこんな事してるんですか？」

「まー老婆心でなー。学園の連中の目覚まし時計代わりにでもなれねえかなってさー」

「毎朝の奇行にはそんな理由が!? ドラリンナイス取材!!」

エクレアが横で熱心にメモを取る。

僕とアイルさんの付き合いは決して短い方では無い。何故ならアイルさんはティアロ校長の弟子、僕の師匠ルクシエラさんやイクリップさんの兄弟弟子だからだ。関わる機会はちよくちよくあった。

でも、思えばアイルさんの事はあまり知らない。

エクレアに無理矢理連れてこられての仕事だけど、アイルさんの事が知れる事はちよつとだけ嬉しかった。

「イイイイイヤツホオオオオオオ!! フリイイイダアアアアツンツムツ!!」

今日もアイルさんはサーフボードにでも乗るかのように箒の上に立ち、奇声を上げて朝焼けの空を駆け回る。きつと、この学園の全ての生徒を想って。



授業がもうすぐ始まる事を告げる鐘の音が聞こえる。

「つと、そろそろ教室に向かわなきゃ。それじゃあ後は頑張つてね」

僕はエクレアにの肩を叩いてその場を立ち去ろうとした。
が。

がしつと僕の後ろ手を思いつきり捕まれた。

「なあに言ってるの! 取材はまだまだこれからだっていうのに」

「いや授業あるし……」

「平気平気! ちゃんとこーちよーには許可貰ったから!」

「そんな馬鹿な」

「はい、許可書」

ペロんと出される一枚の紙。

そこには課外活動の一環としてアイルさんの取材に一日授業を公欠扱いにする旨と、補佐人として八天導師・氷天ドライブを付ける事が書かれていた。

「これも八天導師の仕事だつて言うんですかあああ!!?」

そもそもこれ僕の初仕事なんですけど!!

「困ってる生徒を助けるのが、八天導師だぜー?」

困惑する僕の背中を軽くアイルさんが叩く。

「とうるか、アイルさんは授業無いんですか?」

「六年生は研究がメインだからなー。外に進学する奴らに講義が開かれてつけど学園の単位とは関係ねーんだ」

説明しながら、アイルさんは箒に片足をかけていた。

「あの、どちらに?」

「イーヴィル退治。午前中に片付けちゃうのが日課でなー」

「あつ撮影していいですか!」

「構わねーけど自分の身は自分で守れよー?」

不意にアイルさんに目配せされる。

僕がエクレアの護衛をしろという事か。僕は少し気合いを入れ直した。考えてみればアイルさんは校長の弟子として様々な活動をしている。その取材を行うのだから危険は付きものだ。

最初は戸惑ったが八天導師として僕が付けられた理由が判った。

「あ、僕たち風属性持つて無いのでエンチャントして貰えますか?」

「おや、黄色い子雷専攻だろー? 原色持つてねーの?」

「あ、はい。私転成の単色なのです! えへへ、レアでしよ〜?」

自慢げに胸を張るエクレア。

原色とは四大元素、火・風・土・水属性の事で、転成とは四大元素から生成される転成元素。光・雷・闇・氷属性の事だ。雷属性は風属性から生成される元素なので雷属性のみを宿す人間は珍しい。

「ほーん。じゃ、こいつを貸してやるよー」

パチンとアイルさんが指を鳴らすと何処からとも無く箒が二本空を飛んでやってきた。

「わあ。ちよつと懂れてたんだよね、箒で空を飛ぶの」

僕は少しウキウキしながら箒に跨がった。物質を浮遊させるのは風属性の専売特許なので風属性を持たない魔法使いは基本的に自分の力で空は飛べない。

風属性のマジックアイテムがあれば話は別なのだが人を浮遊させる程の風の魔力は相当高品質な魔石が必要なので簡単に言うところらぼうにコストが高く、使う人は殆ど居ない。

後は火、水、光、雷属性の魔力の持ち主は魔法によって物理的な推力を発生させられるのでそれを上手く利用すれば飛行ができる……けど正直学生が出来る技術じゃ無い。まあ師匠達は学生だけでも学生の範疇に収まる人間では無いので光属性の魔力で飛行とかできるけど。

「私、ルンルンさんの乗り方真似してもいいっすか！」

エクレアはサブボードに乗るように、箒の上に立つ。アイルさんにまた変なあだ名を付けてる事にはもう突っ込まない。

「おうよー。落っこちても自動で拾ってくれるから安心しなよー」

アイルさんが導く風に乗って、僕たちは学校の外へと飛び出した。

65話 流石八天導師総帥っすね!

『我が命(いのち)を以て示すは自由の象徴』

箒の上に仁王立ちして、不適な笑みと共にアイルさんが詠唱する。風の魔力が束ねられてゆき、自由自在に駆け抜ける無数のつむじとなつて空間を引き裂く!

『デザイン・リバテイー』

捉えどころの無い風の刃は、自由気ままにイーヴィル達を切り裂いていった。

「おおっ! ルンルンさんの大技っ 『デザイン・リバテイー』!」

風の刃、その軌道に秩序は無い。けれどそれは決して無差別攻撃などでは無かつた。

「凄い、きちんと僕たちを避けつつイーヴィルだけを狙ってる」

「さっすが『自立魔導』のプロだぜい!」

エクレアは興奮気味に箒を乗り回してシャッターを切る。アイルさんの放った魔法の風はそれこそ自由気ままなエクレアの動きにもきちんと対応して避けてくれてるが見てるこっちはヒヤヒヤしてたまらない。

「ちよつとエクレアはしやぎすぎだつてば!! 万が一があつたらどうするのさ!!」

絶叫系苦手だと言っていた割に無茶な飛行をする。興奮して気がついていないのだろうか?

「平気平気! それよりももつと色んな角度からルンルンさんの勇姿をフィルムに——」

エクレアが更にシャッターを切ろうとしたその時、アイルさんの魔導をなんとか躲した鳥獣型のイーヴィルがエクレアに迫った!

イーヴィルの身体がエクレアの乗る箒にぶつかる!!

「——あ、やっば」

バランスを崩したエクレアの身体が宙に投げ出された。

「ああもう言わんこつちやない!!」

僕は慌ててエクレアよりも下の高度めがけて全速前進する。アイ

ルさんの言葉では落っこちても箒が自動で受け止めてくれるらしいが、攻撃魔導が吹き荒れイーヴィルが混戦する現状で正しく動作するか保証が無かったからだ。

読みは当たって、エクレアが落ちてしまった箒は不安定な待機に煽られ思うように動いていない。僕は滑り込むようにエクレアの落下位置に滑り込むと、彼女の身体をお姫様抱っここの形でキャッチした。「ふう、間に合った。これも八天導師の仕事ってやつかな」

額に滲んだ汗を拭って、一息つく。そしてエクレアに視線を落とす。

「あ、えっと……ありがと」

エクレアは気まずそうに視線を逸らしてぼそつとそう呟いた。普段はふざけているがエクレアも年頃の少女だ。こんな体勢では気恥ずかしいのだろう。

僕は遅れてやってきたエクレアの箒にそつとエクレアの身体を預ける。

「できる限りフォローはするけど、あんまり無茶しちやだめだよ？」

一応注意してみたけど、エクレアの事だから軽く受け流されるかな。

なんて思っていたら。

「……うん、ごめん」

意外に素直に謝って、そのまま離れていった。その時のエクレアの横顔が妙に暗かった様な気がしたが、目を擦ってもう一度見てみると今まで通りに笑っていた。

少し違和感を感じたモノの、大事は無さそうだったので僕は護衛を続けるのであった。

◇ ◇ ◇

お昼前。僕達は学校へ戻る箒の上でお弁当をつづいていた。

「あの量を圧倒いう間にケチらすなんて！ 流石八天導師総帥っすね！」

エクレアは戦利品とも言える写真を扇状に広げて満足そうににまにま笑う。

「落とすよ?」

「データは残ってるからだいじょうぶい!」

「さいですか」

僕はと言えばエクレアと適当に言葉を交わしながら少し早めのお昼ご飯を楽しんでいた。僕自身もイービルと一戦交えたのでお腹が空いていたのだ。

アイルさんの作るお弁当は、なんとというか優しい味がした。栄養バランスが考えられ、刺激は少なくパンチは弱いがじんわりと落ち着くような、そんなお弁当だ。

アイルさんが孤児院の仲間達の為に心を込めて作っている事が伝わってきて、満腹感以上に幸せな気持ち溢れてくる。

「なードライズ。お前ケーキ焼けるか?」

ふと、アイルさんが箸を幅寄せしてくる。

「あ、はい。何度かやった事ありますよ」

「んじやーまた手伝ってくれー。俺はまだちつとばかり慣れなくてなー」

「判りました。一緒に美味しいケーキを作りましょう!」

エクレアに無理矢理連れられて始まった一日だったけど、趣味の料理をする機会が多くて意外と僕自身も楽しんでいた。



「いったただつきまーす! だよ!」「いただきます。よ」

学園の裏庭、一本の大きな木が作った木陰に幾つかの人影が見える。

「悪いな、騒がしくしちまって」

「ううん! 賑やかで楽しいね!」

「ボクまでお邪魔して良かったのでしょうか」

レジャーシートを広げた小さな空間に。見知った赤い髪の生徒が沢山の友達に囲まれて食事をしていた。

「だめだよ、ジシアンくん」「リーダーだってお昼はいつも一人なの。良くないのよ」

シジアンちゃんを挟み込むように座る短い金髪と桃色ショートボブの二人の一年生が、両サイドから顔を寄せる。

「別にいつも一人という訳では……ユーちゃんと食べることもありませんから」

「本当にたまにでしょ。知ってるのよ」

「一緒に美味しいご飯食べるんだよ！ はい、あーん！」

黄色い制服の一年生にお弁当のおかず、たこさんウインナーを差し出され、シジアンは少し頬を染めながらぱくつと口にする。

「あ、む。まあ、先輩が良いと良いのならば構いませんが」

「ははは、二人にかかればシジアンもタジタジだな。俺は全然構わないよ」

ファルマが楽しそうに笑った。

僕はそんな光景を目にして――

「うっ……！」

崩れ落ちた。

「ドラリン!? どうしたの!?!」

視界がぼやける。人差し指で目をこするが涙が溢れて止まらない。

「泣いてんのかー? 大丈夫かー?」

「はい。大丈夫です……」

よよよ、と涙を流しつつ。なんとか立ち上がった。

「どしたの急に?」

「いや。あのファルマが沢山のお友達に囲まれてお昼ご飯を食べてるなんて、嬉しくて。成長したね、ファルマ……」

「おめーは俺のお母さんかよっ」

レジャーシートから離れてやってきたファルマに、ぺしつと頭を小突かれた。

「ひとりぼっちで貧しいご飯を食べてたファルマはもう居ないんだね……！」

「悪かったなぼっちで貧しくて!! つーか知ってたのかよテメー!!」

ファルマは顔を真っ赤にしてまくし立てた。

「そりゃあ知ってるさ」

僕はクスリ、と笑って少し間を置く。

「キミが僕と師匠に気を遣ってくれてる事も」

「なっ!？」

ファルマは僕がその事に気づいていた事が相当衝撃だったみたいで。びっくりした顔のまま一步、二歩と後ずさった。

「なんていうか、気にしないなんだよ君は。僕も師匠も、迷惑だなんて思うわけ無いのにさ」

ファルマは僕から気まずそうに目を逸らし、舌打ちと共に空気を吐いた。

そして今度は、先ほどみたいなふざけ混じりではなく本当に申し訳なさそうに。

「……悪かったな」

と、目をそらしたまま言う。

彼は、何に対して謝って居るのだろうか？ 僕たちはとても長い、そう、兄弟みたいな付き合いなんだけど。それでも相手の心が完全に判る訳じゃ無い。

けれど、きつと僕の知ってるあいつなら……自分の善意が、的外れだったんだって後悔してるのかもな。

こういう事に答えなんて無い。ファルマが僕と師匠の事を大切に想ってくれて、その上で出した答えなんだ。

的外れなんてあるもんか。僕は、僕と師匠、その家族の環の中にファルマも混ざって欲しい。だから、三人でご飯を食べる事だっ一つの理想であり幸福の形だ。

でも、ファルマが僕達の為を想って行動してくれる、それもまた一つの幸福なんだ。

だから僕が言うべき事は、決まってる。

「ううん。……ありがとう、ファルマ」

僕の心からの感謝を、無二の親友は。

「っ、」

一瞬目を合わせたのに恥ずかしそうにまた目を逸らして。

「そうかよ。……なら、よかった」

そう言って、自分の環の中に戻っていった。

66話　ちび共が世話になつてゐてーだから

ボク達はレジャーシートの上に並んで座つてその光景を見ていた。

「見えて居ますか？」

隣に座るアリシアさんに警告するように伝える。

「あれが熟年の技です」

「む、むぐぐ……」

アリシアさんは羨ましそうな視線を先輩とドライブ先輩に向けつつ頬を膨らませてうなる。

「お互いがお互いを思いやり、すれ違いつつもその気持ちに気づき心を交わす……相変わらずですかね、先輩とドライブ先輩は」

僕は一服、持参した先輩の好きなお茶を啜つた。賑やかで和やかなお昼に相応しい優しい味わいが心を満たす。

「ねえ部長さん。本当にあの二人付き合つてないの？」

アリシアさんは頬を膨らませたまま問いかけてきた。

「昔から噂は絶えませんが。少なくとも先輩自身は男性に興味は無いとおっしゃっています」

「でも仲良すぎだよね……友達つていうレベルじゃなくないかな？」

「そうですね。先輩にとってドライブ先輩は普通の友人以上の存在である事は間違い無いでしょう」

初めて出会つた時から、先輩とドライブ先輩はああいう感じだった。互いが互いに依存しているというか、意識しているというか。

「手強いライバルだねえ、はあ」

アリシアさんは膨らませた頬を引っ込めてため息を吐いた。

「何の話してたんだ？」

頭を掻きながら先輩が戻ってくる。

「ハル君ともおーつと仲良くなりたかなくなつて話ー」

アリシアさんはここぞとばかりに、戻ってきた先輩に抱きついた。

「わ、ちよ、アリス!? みんな見てるつて!!」

先輩は顔を真っ赤にして慌てる。

「いいもん、見せつけてるんだもん」

「誰に何の為に!？」

「ハル君は知らなくていいのっ!!」

そう言つてアリシアさんはより一層ぎゆうつと抱きしめる力を強くしたようだ。先輩は頬を染めたまま目をぐるぐる巻きにしてわたたと力ない抵抗を繰り返していた。

「いや、あの、色々当たって、急にどうしたんだよアリスうっ!!」

二人のスキンシップを横目にしながら、ボクは数日前にアリシアさんと交わした会話を思い出していた。

◇ ◇ ◇

『先輩は今、アリシアさんから好意を向けられる事に苦しんでいます』
『私の気持ちは、ハル君が歪めてしまったモノだと思ってるからだね』
『その点をどうするか、ですね』

先輩はいつも言っていた。自分は弱い人間だと。

だからこそ、自分を支えてくれる人たちを大切にしたいと。その言葉の裏側には、『誰かに支えていて欲しい』という願いが見え隠れする。

ボクは先輩に幸せになって欲しい。先輩の事を想い、常に傍らで支えてくれる人こそが先輩を幸せに導いていくのだと考えている。

『好きって伝えれば傷つけちゃう。でも何も言わなければ私の気持ちは伝わらない……。イーヴイルだった頃なんて関係無い。今の私はちゃんと私の気持ちで大好きなんだよって』

そう思い悩む彼女に僕は一つの案を与える。

『もし試してみるならば。押してダメなら——もつと押す事です』

『へ?』

『先輩は存外チョロい性格をしていらっしやいます。アリシアさんに好意を向けられる事に罪悪感を感じていてもそれと同時に好意への嬉しさも感じている筈です』

例え痛みを伴うのだとしても。伝える事を辞めてしまつては何も届かない。

今は、積み重ねの時だ。ここで重なつていく想いを、今の先輩は正

しく受け止められなくても。それを無かった事になんてできはしない。きちんと思いい出して心に刻まれる。

そうすればいつか、先輩の罪悪感が薄れてゆき、アリシアさんの本当の想いが伝わった時。蓄積された想いが一挙に先輩の心を染め上げる筈だ。

『部長さん、なかなかしたたかだね』

『これも全て、先輩の幸せの為ですから』

◇ ◇ ◇

「おーおーいちやつくのは結構なこつたがーちび共の前だ。公許良俗に反しない程度になー」

ふと、大きなお皿に乗ったホールケーキを両手に乗せたアイル先輩がレジヤーシートに入ってくる。

「いちやついてませんよ!!」

先輩は顔を真っ赤にしたまま否定するが、

「嘘っ!? ハル君この程度じゃいちやいちゃだと思ってくれないのかな!？」

アリシアさんは慌てた様に更に強く先輩を引き寄せ抱きしめた。

もうアリシアさんの胸に先輩の顔が埋もれている。

「んー!! んー!!」

先輩は苦しそうにもがいているが、まあああいうのは男の夢だと言うし大丈夫だろう。

「見てるこつちが恥ずかしくなるなー」

「アイル先輩。気にせずご用件をどうぞ」

「そーだった。おらーちび共。おやつの差し入れだぜー」

アイル先輩は両手に一つずつ持ったホールケーキをそれぞれハルカさんとキータさんの前に並べた。

「わあい! ありがとうだよ、アイルくん!」「わあい。ありがとうなのよ、アイルくん」

二人は嬉しそうにケーキを食べ始める。

「二人1ホールってマジかよ……」

なんとかアリシアさんから離れた先輩は息を切らせながらツツコ

んだ。

「お前さんにもあるぜー？」

そんな先輩の目の前に茶色いホールケーキが差し出された。

「なんで!？」

「ちび共が世話になってるみてーだからな。礼だよ、礼ー」

先輩はチョコレートケーキが好きなので好みに合ったチョイスだ。ドライズ先輩がアイル先輩に教えたのだろう。

「いやお世話になってるのは俺の方なんで、そんな礼だなんて」

「一緒に遊んでくれてるだろー？ あいつら位の歳じゃあ、そーゆーのが大事なもんさー」

アイル先輩はぐいっと顔を先輩の耳元に近づける。そしてハルカさんやキータ君に聞こえない様に耳打ちした。

「アレであいつらも昔は不自由したんだ。笑顔で自由に走り回れる、それだけでも俺は幸せなのに、良くしてくれる友達が出来たってんじやー礼の二つや二つしとかないと気がすまねーのさ。ここは一つ俺の顔を立てると思つて、なー？」

アイル先輩のいつにない真面目な言葉を先輩は真摯に受け止めて。

「じゃあ、一口だけ貰つときますよ。食い切れないんで」

といつてケーキを口に運んだ。

「アイルくんも一緒に遊ぼうよ」「アイルくん！ 肩車して欲しいんだよー！」

あつという間にケーキを食べ終えたハルカさんとキータ君がアイル先輩に纏わり付いてじやれる。ハルカさんはぶら下がるように腕を引き、キータ君はその背中をよじ登っていた。

「おーおー。良いぜ良いぜー」

アイル先輩は二人を連れてレジヤースhirtから離れていく。

「不自由、か。あんなに眩しい笑顔からは想像できないな」

先輩はフォークを咥えたまま、アイル先輩と戯れるハルカさんとキータ君を見守っていた。

67話 アイルは強くなったのね

ファルマ達と別れ、時間は午後。アイルさんは箒に跨がり学園の上空をのんびり飛行していた。僕達も借りた箒で併走する。

「これは何の時間ですか？」

「学園の見回りさー。最近物騒だからなー」

眼下に目を配りながらアイルさんは答えてくれた。

たまに下から見上げる生徒達が黄色い声を上げて手を振る。

アイルさんはそれに気づくとこつと笑顔を向けて手を振り替えした。

「さっすが学園人気No. 1! その人気の秘訣は一体!?!」

エクレアがメモ帳片手に箒から身を乗り出してアイルさんに詰め寄るが、

「秘訣ってもなー。俺は自由にしてるだけだからよくわかんねー」

照れ隠しや謙遜などではなく本当に判らないのだろう。眉を寄せた表情から嫌味は感じられない。

「成績優秀で、仲間に優しくしてユーモアもある人だから人気なんじゃない?」

「ふむふむ」

僕の推察をエクレアは熱心にメモする。

その時。

「っ!?!」

アイルさんは突然顔色を変えて急降下していく。

「うわっどうしました!?!」

併走していた僕はアイルさんの勢いに押されて少しバランスを崩した。

体勢を立て直し、アイルさんの進行方向の先へ視線を向ける。

そこでは、何やら大荷物を抱えたリーゼがよたよたと歩いていた。

小柄な彼女の顔が隠れる程箱が積み重ねられていて、前もろくに見えて無さそうだ。

「危ないっ!!」

不意に聞こえる声。咄嗟に注意を向けると、声のした方向から球技用のボールが飛んできている！ その軌跡の先には、えつちらおつちら歩くリーゼの姿が！

「リイイイゼエエエエ!!」

アイルさんは飛来するボールとリーゼの間に割り込んだ。そして渾身の力で飛んで来たボールを殴り返す。

強い衝撃が走り、空気が破裂する音と共にボールは一瞬形を歪ませて。

もの凄い速さで空の向こうへ飛んでいった。

「きらーん、って。すごい。あのボール星になっちゃったぜい」

一部始終をしっかりと撮影していたエクレアが、呆れ気味に空の向こうを見つめていた。

「相変わらずリーゼには過保護だなあ……」

僕はゆっくりと箒の高度を下げて着陸し、リーゼの元へ歩み寄った。

「今アイルの声がした気がするのだけど、何があったの?」

視界が塞がっていたリーゼには状況が掴めて居ないらしい。

「無事かああ!! リイイイゼエエエ!!」

アイルさんは涙を浮かべながらリーゼに抱きつく。その衝撃でリーゼが抱えている荷物がぐらぐらと揺れたので僕は慌てて支えに入った。

「あら? もう、アイルったらまた何かやっちゃったのね?」

「リーゼに飛んで来たボールがぶつかりそうだったんだけどそれを殴り返したんだよ」

状況を掴んできたリーゼに僕が説明すると、

「そしてボールはお星様になったとき、めでたしめでたし」

エクレアが冗談めかして付け足した。

「なるほど。よいしょっと」

概ね理解したリーゼは荷物を横に置いて。

「心配してくれるのは嬉しいけれど、他人の物を無くしちゃったらダメでしょ、アイル」

片手を腰に当ててもう片方の手は人差し指を立ててアイルさんを叱るリーゼ。

「へへへ、わりーわりー。でもリーゼが無事でほっとしたぜー」

「全く貴方って子はいつもそうなんだから。あんまり他の人たちを困らせちゃダメよ?」

アイルさんの方が年上の筈なのに、アイルさんを優しく嗜めるリーゼの姿はさながらお姉さんかお母さんの様だ。

「それより、すげー荷物だなー。手伝うぜー?」

アイルさんがそう言つてパチンと指を鳴らすとリーゼが横に置いた箱の山がふわりと宙に浮かびだす。

「あ、こらー! ストップ!」

それ見た慌ててリーゼが箱の下に移動して。

その数秒後には、宙に浮かび上がった箱がフツと浮力を失つて落下した。

「ありやー?」

箱の一つはリーゼがキャッチしたが残りは地面に落下して中身がぶちまけられてしまった。地面に、赤い鱗や魔石、木炭などが散らばる。

「やっちゃったわね……」

リーゼは額に手を当てて首を横に振った。

「風のエンチャントで浮かせられるなら自分でやってるわ」

「あー火属性の備品だったのかー」

散らばった道具を拾い集めながらアイルさんは頭を下げる。火属性の魔力は風属性の魔力に有利な属性だ。同じ量の魔力同士がぶつかった場合風属性の魔力の大半が消滅してしまう。

「こっち集め終わったよ」

僕は改めて備品を入れ直した箱をリーゼに差し出す。

「ありがとうドライズ、重ねておいてちょうだい」

「しっかしこんなに重い物をあんなに重ねて持てるなんてリンリン意外に力持ちじゃん」

「まあね」

確かに、一箱でも結構な重量だった。いくつも重ねると僕だったら持ち上げる自信が無い。

「つっても無理する事ねーさー」

アイルさんにはかっと笑った。

「そうれ、リベンジ！」

そしてもう一度、パチンと指を鳴らす。

「え、アイルさん!？」

再び箱達が宙に浮かび上がって、そのまま落下する事を想像してしまい僕は思わず目を閉じた。

……が、暫くしてもそんな気配は感じられず、恐る恐る目を開ける。すると驚いた事に、箱は変わらず浮力を保って宙を漂っていた。

「へへっこれでも爺さんの弟子だかなー。属性相性の不利くらいどうにかなるもんさー」

アイルさんは自慢げに語りながら指先をくるくる弄ぶ。その動きに合わせて箱も空中でぐるぐるゆっくり動き回った。

「おおー！ ものすごい力業っすね!!」

同じ量の魔力をぶつけて打ち負けるのならば、圧倒的な物量差で挑めば良い。と言わんばかりに膨大な風の魔力が箱にエンチャントされている。

「どーだ、リーゼ。見直したかー？」

アイルさんは目をキラキラさせてリーゼに視線を向けた。

リーゼはやれやれと肩をすくめた後、優しく微笑んで。

「えらいえらい。アイルは強くなったのね」

と、つま先立ちをしながらアイルさんの頭に手を伸ばしてあやすように撫でる。

「おうよ。もう絶対、みんなを不自由にはさせねー！ 俺が、守ってやるからなー！」

アイルさんは幼子のように屈託の無い笑顔を浮かべている。

「ふふ、仲良いねえ」

僕まで釣られて思わず顔が綻んでいた。

パシヤリ、とシャッターが切られる音が聞こえる。

写真とか新聞には詳しくないけど、これは僕が見ても良い画だと思うからエクレアは興奮してるかもしれないな。

そう思つて横を向くと。

何故かエクレアは、今まで見た事無いような冷たい——いや、寂しそうな表情でぼうつとしていて。

「エクレア?」

咄嗟に声をかけてみると、ハツとした様子でいつもの小生意気な表情を作った。

「なになに、どしたのドラリン?」

「いや、なんか元気無かったみたいだから」

「えー? そんな事ナイナイ。エクレアちゃんはいつだって元気バリバリだぜー!」

彼女にはそう誤魔化されてしまった。

68話 嫌われ者のエクレール

日も落ち時刻は夕食時。アイル先輩は三度キッチンに乱入して仲間達へ夕食を作る。

この一日彼を取材して判った事がある。

彼は一日のタイムスケジュールの殆どを、孤児院の仲間達の為に費やしているのだ。

三食の食事の用意に加えておやつまで手がけたり、料理の為の食材を永久の森で自動栽培していたり、幼い子供達用に遊具を整備したり。

夕食は団欒の時。大勢の仲間達に囲まれて楽しそうに食事をする。そしてその中でその日の出来事や明日の予定を聞き出して。まさに、みんなの保護者と言っても良い。

彼の仲間達は、そんな愛情を素直に受け止めて。

アイル先輩は、孤児院の仲間達を愛しているが。その愛情は決して一方通行では無い。子供達もまた、アイル先輩を愛し、受け入れ、別の形で愛情を返す。

昼間に出会ったピンク髪と金髪の姉弟はケーキのお礼と言って夕食後の後片付けを手伝って。リーゼは一日の活動で解れてしまったアイル先輩の上着を繕っていた。

みんなで、幸せそうに笑っている。暖かい家族が、そこにある。

——…羨ましい。

胸が、苦しくなった。

判ってる。

あの幸せは、私とは無縁な物だ。

私には、手の届かない物だ。

「どうだいエクレーア？ 記事のネタは溜まったかー？」

彼は決して、孤児院の仲間だけを愛する訳じゃ無い。この学園の生徒の事も大切に想っているのが判る。こうやって、私の事だって気にかけてくれる。

「もっちゃん！ へっへっへ、ルンルン先輩の人気、更に爆上げな記事

にしますねっ！」

「俺の人気は別にいいけど。役に立てたんなら光栄だなー」

どうしたらそんなに愛されるの？ どうしたらそんなに受け入れて貰えるの？

人気者の秘密が知りたかった。

私はメモ帳をそつと閉じた。

求めた答えは、臆気ながらも掴めた気がする。

でも……だから何だっというんだろうか。私、何やってるんだろうな。こんな事やったって、彼になれる訳でも無いのに。

私は何処まで行っても私のままだ。

「この後は寝るまで研究データを纏めたり、爺さんから回された書類を片付けたりするんだがつまらないと思うけど付き合うかー？」

「あ、お気遣いありがとうございますっ！ ならここでお開きにしますねっ！」

「僕の仕事も終わるか。結構楽しかったよ」

ドライズ君が伸びをした。今日もまた付き合わせてしまった。

「さんきゅードライン！ 色々助かったぜ！」

「どういたしました。でも出来れば今度からは連れ回すにしてもせめて事前に連絡してからにしてよね」

「はっはっは！ 前向きに検討しとく」

「全く信用できない台詞じゃん……それじゃ、お疲れ様」

ドライズ君は優しいな。あんなに振り回したのに怒りもしないで。

私はもやもやした気持ちを抱えたまま部屋に戻った。



「……ただいま」

「おかえりなさい」

同室のアーシェが迎えてくれる。

「一日、お疲れ様でしたあ。どうでした？」

「……………」

私は答えずに、そのままベッドの方へ進んでゆき。正面から倒れ込むようにベッドに飛び込んだ。

「エクレーア?」

アーシエが心配そうにベッドの上で私の横に座る。

私はうつ伏せでベッドに埋もれたまま、重い口を開いた。

「正直凹んだ」

「あら、どうして?」

アーシエはそつと私の頭に手を当てて、ゆっくりと撫で始める。

「私には無理だなあ、って」

アイルさんの行動を見れば見るほど。自分の矮小さが浮き彫りになるようでイライラした。

「博愛精神っていうの? いっつも、ずっと、誰かの為につてさ」

私には考えられない。私は自分を優先してしまう。

「受け入れられる人には、受け入れられる理由がある。それが判ったのは良かったよ。でも、それって結局、私にはそれが無いって事を証明してるだけで」

今日一日彼がしていた事。そのどれ一つとして私には真似できないだろう。だからきつと、私が彼のように受け入れて貰えるなんて事はない。

「結局私は、ひとりぼっちなんだろうなーって」

「ずるい言葉だ。私は期待して言った。アーシエならきつと否定してくれるって。」

「今は、私が居るじゃないですか」

アーシエはそう言ってなで続けてくれる。私の側に居てくれる。

出会った時から、ずっと、ずっと。

でも。

「……今はね」

アーシエは誓ってくれない。これからもずっと一緒だと。

「未来なんて誰にも判りませんから。いつか別れが来たとしてもおかしくはありません」

アーシエはいつもそう言って、その後抱きしめてくれる。

「でもその時まで。私は貴女の味方ですよ、エクレール」

今日も、ベッドに埋もれる私を上から包みこんで。

ぎゆうつと強く抱きしめて、頭は優しくなで続けて。切なくなつて、アーシエの手の平に自分の手の平を重ねた。

「私を受け入れてくれるのはアーシエだけ……」

私にはアーシエしか居ない。

アーシエと離ればなれになるなんて考えたくも無い。

でも。アーシエは昔からずっと、そんな未来を仄めかす。

判つてる。事故、病気、色んな理由で別れが突然訪れるだろう事は。

「……私は」

けれど、例え未来が不確かな物であるとしても。

その言葉が気休めの口約束に過ぎないとしても。

「私は何があつても、アーシエの味方だよ。アーシエとずっと一緒に居るよ」

言葉にして欲しかった。自分が言つて欲しい言葉だから、自分の口で言つた。

アーシエはきつと判つてる筈。私の気持ち。

それでもやつぱり、言つてはくれない。

「ありがとう、エクレール。貴女に会えて、本当に良かったと思つてます」

その言葉に確かな愛情は感じるけれど、やはり未来は約束してくれない。

「……ひとりぼっちは、もう嫌」

涙が滲んでくる。

「なのに私は変わらない……。嫌われ者のエクレールのまま。本当は判つてる。エクレーアだつて受け入れて貰えない。私は、私じゃダメなのに、私でしかない……」

私を抱きしめたまま撫で続けながら。アーシエは突然こんな事を言つた。

「貴女も恋をしたら、変わるかも知れませんね」

「何よ急に」

「良くも悪くも、恋は人間の心を動かすものだ。今まで沢山見てきましたから」

「……恋、かあ。正直よくわかんない」

私は身体を転がして天井を見上げた。

「命とは果てしなく長いモノ。大丈夫、時間はまだまだたっぷりあります。探り探りでもいいのです。色々な事を試してみましよう。後悔だけはしないように」

そう言っつて。アーシエは私の頬にそつとキスをしてくれた。

69話 ハルカとキータにお礼を用意しよう

俺はふんわり穏やかな気持ちで昼寝をしていた。

悪夢を見なくなり、それまでの寝不足分を取り戻すかのように昼寝ばかりしていた。

そして、目が覚める。

場所はいつもの裏庭の木陰。

あくび交じりに伸びをして、左右を確認すれば。

「すう……すう……」「むにゃ……」

ハルカとキータが心地よさそうに眠っている。すっかり慣れてしまったお馴染みの光景だ。

「ハルカ、キータ。そろそろお昼ご飯だぞ」

と呼びかけてみるが応答は無い。深い眠りに落ちているらしい。

でも二人はお昼寝だけでなく毎日のご飯も楽しみにしているから寝過ぎさせるのもかわいそうだ。俺はふとある事を思い立った。

ハルカとキータはこの場所にお弁当を持ってきて頭の上に置いてから昼寝をしている。

そこで俺は頭の上に置かれたお弁当箱に手を伸ばした。そして蓋を開ける。

ミニハンバーグやミートボール等子供が喜びそうなメニューが詰まった幸せいっぱいのお弁当だ。

それを手に持ったままハルカ達の顔へ近づけ、手で扇いだ。

美味しそうな匂いが風に乗って二人に届くだろう。

すると――、

「およう・」「だよ!？」

パチツと二人同時に目を見開いて、

「美味しそうなご飯の匂いがするのよ」「お腹空いたんだよ!」

と上体を起こした。やっというてなんだが本当に食べ物の匂いで目を覚ますなんてな。

俺は苦笑いを浮かべながら、お弁当をハルカに渡した。

「ほら、時間だぞ。勝手に開けて悪かったな」

「ふわ。おにーさんの快適空間、心地よすぎてつい寝過ぎちゃうよ」「わあい！ お昼ご飯の時間だよー！」

「キータは寝起きから元気だな」
ウキウキした様子でお弁当を広げるキータを見て、微笑ましく思った。

「良いことよ。お腹いっぱいご飯が食べられるのは、とっても幸せなことなの」

柔らかな微笑むハルカ言葉には、妙な重みがあった。アイルさんが言っていた事を思い出す。

——不自由、か。

ハルカとキータに——いや、アイルさん達の過去に何があったのかなんて俺には判らない。けれど、過去なんてどうだっていい。大切なのは、今の彼らはとても幸せそうに笑っているという事だ。

ハルカとキータの眩しい笑顔は、見ているだけで勇気づけられる。俺は一つ思い立った。

「なあ、ハルカ、キータ。お前等、好きなモノってあるか？」

「およ？ 好きなモノ？」

ハルカは頬に人差し指を当てて思案するように空を仰ぐ。

「スイカだよ！」

先にキータが元気よく答えた。そして、

「なら私はトマトよ」

続いてハルカも答え、更に、

「それからリングゴ！」

二人声を揃えて言った。

俺は頭を掻きながら訂正する。

「ごめんごめん、言葉が足りなかった。食べ物じゃ無くてなんか、こう小道具とかの話だ。おもちゃとかでも良いぜ」

自慢では無いのだが、俺は学生にしては懐が潤っている方だ。ルクシエラさんが何かにつけてお小遣いを半強制的に渡してくるから。

全く、田舎のおばあちゃんかよって話で——

「うおあつ!？」

俺は慌てて飛び上がった。そして0コンマ数秒後、俺が座っていた場所に細い光の筋が走り、ジュツと音を立てて地面に黒焦げた小さな孔を開ける。

「わわ、どうしたんだよ!? 敵襲!?!」

キータが慌てるが、

「いや味方襲だから安心してくれ……」

俺は適当に言葉を作って答え、元の場所に座る。言葉にも出してないのに反応して狙撃してくるとか最早地獄耳とか言うレベルじゃない——いやこれ以上は辞めておこう。

「悪夢の件で世話になったからさ。お礼に、用意出来るものならなんでもプレゼントするよ」

そう伝えると、二人は

「……いいの?」「ホントにホント!?!」

目をキラキラして詰めてきて。あまりにも眩しい期待の眼差しに思わずのけぞってしまう。

「あ、ああ。いや、俺に用意できる程度のモノだぞ? 流石に家買えと言われたら無理だからな?」

と、念を押して。すると二人は深く考える様子もなく、こう言った。「なら私は可愛い帽子が欲しいのよ」「僕はかっこいいマフラーがいいんだよ!」

帽子とマフラーと聞いて、二人が名乗りを上げたときの事を思い出す。

「そういえば二人とも自己紹介する時にマテリアライズで取り出していたな」

ハルカはふわふわしたナイトキャップを、キータは真っ赤な細めのマフラーを身につけていた。

「趣味なのよ。帽子集めるの」

「僕はマフラーが好きなんだよ! かっこいいから!」

二人は目をキラキラさせてそう語る。

そういう事なら丁度良い。

「それならとっておきのが用意できそうだ」

身につけるモノならマジッククラフトと相性が良い。

二人に似合う魔法効果を付与した帽子とマフラーを作ってやろう。「わあいやったー！　だよー！」「えへへ。ありがとうなのよ、おにーさん」

キータは飛び跳ねて喜び、ハルカは控えめに微笑んだ。まだまだにわかだが、マジッククラフターの血が騒ぐ。

◇ ◇ ◇

放課後、部室で俺は帽子とマフラーのラフを描いた設計図を広げて顎に手をあて思索していた。

「さて、どんな魔法効果を付与しよう」

二人に丁度良い物は何か無いだろうか。考えていると、アリスがやってきた。

「わ、ハル君もう作業始めてるの？　今日は気合い入ってるね」

「まあな」

「何作る予定なのかな？」

「ハルカとキータにお礼を用意しようと思って。帽子とマフラーがリクエストんだけど付与する魔法効果に悩んでるんだ」

「へえー素敵！　ハル君らしい良い贈り物だね！」

アリスは指先を合わせてにこやかにそう言ってくれた。

「帽子の魔法効果でメジャー所と例えばUVカットバリアとかだけど」

ハルカの様子を思い返す。

日向ぼっこしながら幸せそうに昼寝する子がUVなんて気にするだろうか……。

「お二人の装備でしたら戦闘用効果などはいかがですか？」

シジアンが部室の扉をくぐりながら提言してくれた。話を聞いていたらしい。

「戦闘用効果って、一年生はまだイーヴィルとは戦わねえだろ？」

「確かに授業としては後方支援と戦闘訓練が主で実践は行いませんが、永久の森の獣と戦闘する機会もありますし、お二人は一年生の中でも実技戦闘の成績がトップクラスなのでたまに上級生の人数不足

の際助つ人に呼び出されたりするのです」

「マジかよすげえなあいつ等」

夢について詳しくかったり、助つ人に呼ばれたり。学年は最下級だがあの二人はすつかり一人前の魔法使いみたいだ。

「じゃあ、二人の戦闘スタイルについて詳しく教えてくれないか？」

「ええ、喜んでお手伝いさせていただきます」

シジアンは快く頷いてくれた。すると、

「うう、二人と一緒に作業するなら私仲間はずれになっちゃうね……」

と、アリスが悲しそうに机に指を押しつけていた。

「え、いや、そんなつもりは——」

だん、と力強い音が響いた次の瞬間にはアリスがぐいっと詰め寄って、

「ハル君！ 私にも何か出来る事ないかな!?!」

とやる気まんまんな視線を向けてくる。

アリスとハルカ達は何度か一緒にご飯食べたくらいで殆ど関わりが無いのに手伝って貰うのは少し忍びないがこのまま仲間はずれ扱いにするのも悪い気がするし……。

「じゃ、じゃあ、ハルカに似合う可愛い帽子のデザインとかお願いしてもいいか？ 俺そういうのは疎くて」

「やった、まっかせて！ でもでも、私もハルカちゃんの事良く知らないから部長さん教えて欲しいな」

「はい。構いません。それではみんなで協力して二人の装備を作りましょう」

「悪いな、俺の都合に付き合わせちまって」

「ちつとも悪くないからね！ いかにも部活動って感じで嬉しいな！」

シジアンとアリスのお陰でより良い物が作れそうだ。

ハルカとキータが喜ぶ姿が楽しみである。

70話 随分なご挨拶じゃねーか

オレは今日も箒に乗り、学園の空を飛行していた。目を皿のようにして地上を探る。

「静かで、平和だなー」

口ではそう言いつつも、目は真剣そのものだ。

「ファルマの報告以来、奴さんに何の動きも無いのが気になるぜー」

第四の賢者を名乗る存在、テイル爺の旧友カイ。

突発的に学園の生徒であるアリシアを襲い、ファルマと交戦した後撤退。ファルマの報告によると、戦闘の結果は一方的でありこれといった損害を与える事はできなかったという。即ち、敵はいつでも動ける状態にあるという事だ。

「つたく、不気味なもんだ。一体何を企んでやがるのか是非教えて欲しいもんだぜー」

そう呟いたその時。ぴく、とオレの耳が僅かに動いた。

直後箒の上で跳躍する。

次の瞬間、空中に取り残された箒に暗紫色の魔力が殺到した。

箒はズタズタに引き裂かれ、力なく大地へ落下する。

「おいおい、随分なご挨拶じゃねーか？」

風属性のエンチャントを自分自身にかけ、オレは空中で静止したまま背後に得物を差し向けた。両手持ちの巨大な斧が襲撃者に突きつけられる。

「ふむ、腐ってもテラの弟子か。魔力も気配も完全に遮断していたというのによく気がついたな」

そこには、音も無く現れたのは細く角張ったメガネをかけた痩せぎすの男。無精ヒゲが目立つ男性。年齢は四十代前後、報告通りの容姿。

「おまえさんが『第四の賢者』かー」

その男の周囲には暗紫色の霧が球状に広がり、男は空中に浮遊していた。

テイル爺の話では『第四の賢者』ことカイは水属性の単色の箒。

ファルマの報告によると闇属性の「原初の魔力」と思われる魔導も扱っていたらしいが……。

感じ取れる魔力の気配も、水と闇で間違い無い。

「風属性はなし、他に推力を感じる魔力の気配も無し。どーやってこの土俵に立ってんだか……」

敵の得体が知れない。じとりと冷や汗を流す。

「なに、簡単な理屈だよ。人は、モノは何故地に落ちるのかを考えれば良い。あとはこの魔力でその力を遮断してやるだけの話だ」

暗紫色の魔力を右手の上で球状に放出し、弄ぶ。

——つまりは重力の遮断だどー？ んな魔導聞いた事ねーよ。

オレは巨大な斧を振り上げ、

「まーそっちがその気なら、」

身体を軸に回転させながら遠心力に乗せて投げる！

「こっちもよーしゃしねーぞー！」

追って指先で虚空に軌跡を引いて魔法陣を描く。

『我が命を以て示すは自由の象徴』ツ

空気を切り裂くように素早く指が走り、緑色の光を放って魔法が発動する！

『「デイザイア・リバティー」！』

魔力で作られた風の刃が、不規則な軌道で駆け抜けカイを包囲するように殺到する。

そこへ最初に投げ飛ばした斧も飛来し、全方位から同時に攻撃を仕掛ける。

だがカイは動かない。

手のひらを突き出し、正面から飛んで来る斧を軽々と受け止め。

風の刃は何をするでもなく、ただカイに近づいただけで暗紫色の魔力に阻まれ消え去った。

——ある程度の魔力は簡単に遮断できるってかー？ でもわざわざ手を使ったっつー事はマテリアライズした物質みたいな高密度魔力体までは防げないって所かー。

新しく斧をマテリアライズしながら、状況を分析していた。

対してカイは苦笑いを浮かべる。

「おいおい、物騒だな。そう殺気立たないでくれたまえ。今日は争いに来たわけでは無いのだよ?」

「不意打ちで攻撃仕掛けたヤツがよく言うぜー」

「いやいや。先ほどの攻撃ではない。プレゼントだよ、私なりのね」

カイはクスリと不適に笑って見せた。

「だが。そうだな。少々急いってしまった様だ。失礼した」

彼はわざとらしくお辞儀をした。

「では、こちらの領域に招待させて貰おうじゃないか」

「んだとー?」

「そこでゆっくり確かめて見ると良い。私の『プレゼント』をね……」

続いて、ニタアと、笑顔と呼ぶのもおこがましい程に邪悪で陰湿な表情を浮かべ。彼は指を一つ鳴らした。

『霧の結界』

音が波として広がっていく、その様子が視覚化されているように。

藍色の魔力が波動となってカイを中心に放たれる。

突如として濃霧が立ちこめ、数歩先すら見えない程の白い世界がアイルを取り込んだ。

『第三疾風魔法（ガストウインド）』

一陣の風がオレを中心に吹きすさび、濃霧を打ち払った。すると、学園の上空に居たはずがいつの間にかグラウンドの中心にぽつんと立ち尽くしている。

「報告にあつた空間魔導かー」

アイルは警戒心を高め。周囲の気配を探る。景色はいつもの学園と同じ、けれど人の気配が全くない。数秒を待たずに、空から声が降ってきた。

『ようこそ。ここは私の実験場なのだよ』

「へーそうかい。悪いがこっちは、大人しくあなたのモルモットになつてやるタマじゃあねーぞー!」

オレは再び魔法陣を描く。

『我が命を以て示すは自由の象徴』

今度は詠唱を乗せて、更に強く風の魔力を練り込んで。

『ディザイア・リバティー』!!』

放たれた風の刃は、無作為に四散しつつも索敵するように空間を縦横無尽に駆け抜けていく。そしてオレは深く呼吸をして目を閉じた。

風の鼓動に耳を傾け、大気の震えを肌で感じ取る。

——…読めたッ!!

「そこだあーっ!!」

カツと目を見開き。

強く踏み込み、跳躍する。

一見何も無い虚空に向けて、渾身の一振りをお見舞いした!

キーンと高い音が響く。何も無かった筈の虚空に、腕で斧を防ぐ力イの姿が現れた。

「ふむ、ファーストコンタクトの時もそうだったが。よく判ったな?」
斧の刃を阻むカイの腕には魔力で生成された水が膜のように覆われていた。

「伊達に『風天』を名乗ってる訳じゃねーよ。大気の流れ、風の囁き、そしてお前さんの呼吸。人間が生きている限りその痕跡は必ず空気に現れる」

「名付けるならば、『風読み』と言った所か。面白い」

「余裕ぶってんじゃあ、ねーぞっ!」

オレは斧を引き戻すと同時にカイから距離を取った。

「この程度の魔導、私には通じないと学習しなかったのかね?」

暗紫色の魔力がカイの身体から立ちこめる。

「『この程度』かどうか、味わってみる事だなーッ!」

「む?」

一見無軌道に散開していた様に思えた風の刃。

その軌跡が淡い光の筋となって浮かび上がる。オレは斧を斜め下に構え、再びカイに向かって突き進んだ。

『魔導の深淵、仰ぎ見る果てなき蒼空』ッ

風の刃もまた、そのまま一斉にカイを狙い押し寄せる。

光の軌跡は魔法陣を形成し、強く輝いた。

風の刃と、オレの斧が澄み渡った空のように美しい青色の光を帯びる！

「この魔導は——」

カイは暗紫色の魔力を球状に展開し、自身を包み込んだ。

球状の魔力に姿を隠したカイめがけて、アイルの魔法が発動する。一同に集った風の刃はカイを包囲すると斬り付けながら上昇気流の様に空へと上っていく。一拍遅れて、アイルが青く輝く斧を天へと強く切り上げた。

『セレスティアル』ツ!!」

強力な魔力の奔流が、青い螺旋の塔となって天を貫く。

文字通り、空に孔が穿たれた。

「大気が震え、景色が歪む。」

オレの放った大魔導は、その余波だけで虚構の世界を打ち崩した。

71話 私は遂に “選ばれた” のだ!!

『霧の結界』が破られ、景色は学園上空に戻っていた。

暗紫色の球体は風の魔力にズタズタに切り裂かれ、霧散する。

その内部にカイの姿はない。

「何っ!？」

身構えた時には既に遅かった。アイルの後頭部が鷲掴みにされる。

「ぐッ」

暗紫色の魔力がアイルの四肢に絡みつき、身動きを封じた。

「余波だけで『霧の結界』を破壊し、低密度だったとは言えこの “拒絶の闇” ですら撃ち払う大魔導。流星は我が友、セレナの襲名魔法なだけはある」

「いつの間になッ」

拘束を振り払おうとするアイルだったが、手足がビクとも動かない。

力が入っている感覚はある。しかし纏わり付いた暗紫色の魔力が、鉄の塊の様にその力を阻んでいた。

「しかし、残念だよ」

わざわざアイルに見えるように、ゆったりと彼の前まで移動した上でカイは肩をすくめる。

「テラが跡継ぎに選んだ魔道士が、よもやこの程度の人間だったとは」
侮蔑か、哀れみか。失望を強く表す視線がアイルの胸に突き刺さる。

「んだとオ……い！」

アイルはギリ、と奥歯を噛みこんだ。

「最も。始めから期待はしていなかったがね」

そう言っただけでアイルに詰め寄り。その顎を下から持ち上げだ。
「テラやセレナの猿真似なら誰だって出来るのだよ。所詮は彼らも凡人に過ぎないのだから。それで賢者などと持て囃され、その気になっているのだから愚かな事だ」

アイルは、カイという人間について何も知らなかった。

ただ、学園の生徒を襲撃した危険人物として相対していた。そこに特別な感情は無く、ただ“対処するべき敵”としてだけ認識していた。

しかし。

今、目の前で。自分のみならず師であるティアロを侮辱され。明確な敵意をカイへ向ける。

「昔のダチだか何だか知らねーが——爺さんを侮辱するんじゃないやねえツ!!」

拳を握りしめ、強く睨み付け。更に強くもがく。けれど暗紫色の魔力による拘束は振りほどけない。

「侮辱などしているつもりは無い。ただ事実を述べているのだよ」

カイは何処か憂いげに目を伏せた。

「余裕ぶるな、と君は言ったがね。驕りもしよう。“原初の魔力”も宿さぬ凡人など物の数では無いのだから」

そして突然ぎよろりと目を剥いてアイルの瞳を覗き込む。

「君とて本当は理解している筈だろう?」

その迫力に、アイルは思わず息を呑み冷や汗を流した。

「特別な才能、力を持つ者に。我々凡人は逆立ちしても勝つ事はできない。例え何処まで努力と研鑽を重ねてもそれだけでは“選ばれし者”には届かないツ!!」

「何言ってるんだテメエ」

アイルは最早怒りの感情よりも、突然始まった演説に戸惑いを隠しきれない。

「我々はずっと苦悩してきた。どうすれば優れた人間達に。“天才”達に並べるのかと。そしてテラ達はその苦悶の果てに禁忌を犯し、あと一步で“究極魔導”に手が届く境地にまで至った」

アイルはテラの弟子だ。様々な教えを受けてきた。

しかし師匠であるテラから“究極魔導”なんてもの事は一切聞いていない。カイが何の話をしているのか全く理解できなかった。

「だが、それまでだった。一見“究極魔導”へ至ったかに思えたソレは。淡くも潰え消え去った。テラ達の前に立ちはだかったのは、世界

に選ばれた才能ある人間だった」

カイは頭を抱え、俯く。まるで自分自身が失敗を犯したように、悲しみ、嘆く。

「私はその事実をこの世界で知り、絶望した!! 我々の行ってきた事など初めから無意味だったのだと。無価値だったのだと! 夢の世界に至って尚、非情な現実を突きつけられたのだ!!」

空中で地団駄を踏み頭を掻き毟る中年男性の姿には最早恐怖しか感じない。

「失意の底にあつた私に、世界は応えてくれた」

カイは手のひらを持ち上げる。その上で、暗紫色の魔力が球状に蠢いていて。

「私は遂に “世界から選ばれた” のだ!! そして、理解した。産まれた時から特別である必要など無かったのだ。どのような形であれ “特別な力” を手に入れさえすれば良いのだと!」

蠢いていた暗紫色の魔力を、握りつぶす。

「ここは “願いが叶う” 世界。善悪問わず、強い思いが意味をなす世界。その全てを利用して、私は今一度 “究極魔導” を目指す!! そして世界にこの名を刻み込むのだ!!」

息を荒げ、汗を振りまき、カイは力強く宣言する。狂氣的な熱気を前に、対してアイルの方はすっかり冷め切っていた。

「お前さんが何を言いたいのか、何がしたいのか、これっぽちもわかんねー。ただ一つ言えるのは、アンタは狂ってる。人として大事な何かを見失ってる。放置はできねーって事だけだ」

冷静さを取り戻したアイルは深呼吸し、

「求めるは第三の叡智、督するは光、瞬け閃光、闇を切り裂く白銀の裁き」

詠唱を唱え、光の魔法を自分に向けて放つ。

『第三閃光魔法』
アルギュロス・レイ

白銀の光の筋がアイルを包み込む。

同時にアイルの四肢に纏わり付く暗紫色の魔力が光に照らされ震えて霞む。

「流石にこれだけじゃあ消えねーか。だが――」

アイルは今一度、身体に力を込めた。大きな抵抗感を、それでも押しつけて、霞んだ闇の魔力が振り払われた。

カイを睨み、斧を構える。

「今度はこうはいかねーぞ」

拘束を打ち破ったアイルを見て、カイは何か確信したように続ける。

「君が今してみせた様に。ただ『特別な力』を持っているだけでは足りないのだよ」

「ああん？」

「いかに『原初の魔力』と言えど、物量や小手先の技術で覆される。凡人の努力は、怠惰な天才を凌駕しうる」

カイはアイルを指さした。すると暗紫色の魔力が波の様な形を持ってアイルに襲いかかる。

「『エンチャント・光』^{ライト}！」

アイルは斧に白く輝く光の魔力を乗せて、迫り来る闇の魔力を迎え撃つ。簡単には消えないが、何度も刃を打ち付ける事でどうにか被害を受けること無く闇の魔力を消し去った。

しかしその隙に三度カイが姿を消す。

「何処行つたーッ!?!」

「つい、熱く語りすぎた。招かれざる客が来てしまった様だ」

周囲を見渡すとカイは遠く離れアイルに背を向け、その場を立ち去ろうとしていた。

72話 何者二も縛ラれ又自由ヲ!!



「邪魔が入る前に、要件を済ませてしまおうか」

カイはそう言つて、パチンと指を鳴らした。

「てめつ、好き勝手暴れた挙げ句に逃げる気か!？」

距離を詰めようとした足が、止まる。

「ッ!？」

「言つた筈だ。今日の目的は君にプレゼントを渡す事だと」

遠くから届く、カイの声が揺らいで聞こえる。

「そう。ただ “特別な力” を持つだけではいけないのだ。真に究極に至るには “特別な力” を更に研鑽し、昇華せねばならない」

カイは空中を気ままに歩む。最早自分の事など目もくれない。

「その為に、この世界の理を魔導にした。が、どんなに優れた魔法も、いきなり自分が使うのは億劫だろう? まず臨床試験が必要だ」

カイの歩む先に楕円状に広がる暗紫色の魔力が現れた。

扉か、ゲートを形取っているように見える。

『クラウンド・ダークマター』

魔力の扉をくぐる直前に、カイはこう言い残した。

「君にも “原初の魔力” を使わせてあげよう。その力を存分に振るいたまえ。君の願いを、叶えると良い」

カイが魔力のゲートをくぐると、ゲートは初めから無かったかのようにならなくなった。

「あの野郎、俺に何を……!」

オレはは頭を抱え、膝を折って蹲る。手からこぼれ落ちた大きな斧が、そのまま地面めがけて落下していく。

「無事かッアイル!!」

声が聞こえる。この声は、兄弟弟子の一人。

「い、クス……!」

異変を察知し駆けつけたのは。英雄と称される魔道士。

原初の魔力の一つ、“破滅の光” を継承する双子の弟、イクリプス

だった。

思考がぐちゃぐちゃになる。自分が何をしているのか、何をしたいのかが、

判らなくなっていく。

「敵の呪術か？ 今救護班を呼ぶッ」

イクリプスは携帯端末を取り出し救援を呼ぼうとするが、

「ウアアアッ!!」

オレは頭を抱えたまま、もう片方の手を重たそうに持ち上げ、イクリプスを指さした。すると暗紫色の魔力が指先から迸り、イクリプスに向かう。

「なっ!?!」

咄嗟に身を躲すイクリプス。暗紫色の魔力はイクリプスの携帯端末を撃ち抜き破壊した。

「混乱しているのか？ いや、違うこれは——」

イクリプスは己の武器、太陽を象った装飾を持つ大剣と月を象った装飾を持つ片手剣を抜き、構えた。



苦しむアイルの頭上の空に禍々しい黒い魔力が集まっていく。それは水滴のように歪み、震えながら膨れ上がってゆく!

「この魔力は、まさか——」

俺が確信を持ったのと同時に。

空に集まった黒い魔力の塊が。ぼとり、と落ちていった。

そして直下のアイルにぶつかると、水が地面に触れたときのように弾けて広がる。

「グアアアアアア!!」

掠れる程の音量で、アイルが吠えた。アイルの身体が、弾けて広がった黒い魔力に包み込まれていく。黒い魔力は、マテリアライズのように質量を持って形成される!

俺はその光景を目の当たりにして、言葉を失った。

黒い魔力は肉体へと変貌し。

現れたのは、巨大な魔物。

十字架のような本体に、貼り付けにされ俯くアイル。その身体には、幾重にも幾重にも嚴重に金属の鎖が巻き付けられ。

十字架の左右の先端から、無機質で巨大な腕が伸びる。

十字架の上部先端には西洋鎧の兜のような頭部が存在した。

「イーヴィル……!!」

自分の目を疑う。目の前で兄弟弟子がイーヴィルへと変貌したのだ。簡単には事態を飲み込めない。しかし、戦いに身を置いてきた本能が理性よりも素早く身体を動かす。

月を象った片手用の曲剣を投げ放った。そして太陽を象った大剣を両手で構え、アイルを縛り付ける鎖めがけて強く振り下ろす。だが、鎖に刃がぶつかろうとしたところで暗紫色の魔力が何処からとも無く発生し、イクリプスの剣を阻んだ。

「ちいっ!!」

投げられた曲剣が遅れてやってくる。体勢を立て直し、大剣を振り回すように円を描いて振った。

真っ白な光の魔力を宿して、飛来した曲剣と弧を描く大剣の軌跡が交わって交差する。

「ダイヤモンドリング」ッ!!」

「破滅の光」を乗せた、あらゆる魔導を切り裂く剣技が。

暗紫色の魔力の壁に阻まれ止められた。

「馬鹿なッ!!」

「破滅の光」が通じなかった事など一度も無い。驚愕する心を抑えつけ、冷静さを保つよう心がける。ブーメランのように弧を描きながらイクリプスの元に戻ってきた曲剣を回収し、アイルと距離を取った。

「オオ……」

鎧兜のような頭部の顎が動き、声が漏れる。くぐもっているがそれは紛れもなくアイルの肉声だった。

「司ドルは、傲慢なる自由」

巨大な腕を胴体の前に寄せて、開いた手のひらを向かい合わせる。「渴望セよ! 遍(あまね)ク同胞(はらから)の願いを叶えン」

向かい合わせた手のひらの間に、球状の黒い魔力が発生し巨大化してゆき。

『ノヴァドリーム・ダークソウル』!!」

イーヴィル・アイルは向かい合わせにした巨大な手の平を天へ向けた。

黒い球体が空へと放たれ、無数に分裂する。

そして小さな球体となった黒い魔力は四方八方へと飛散していった。

俺はアイルが放った魔導の効果を探るべく、固唾を呑んで様子を伺う。

数秒後。眼下の学園から悲鳴が聞こえた。

校舎の壁が吹き飛んだ。穿たれた穴から、生徒達が慌てふためいてグラウンドに出て行く。遅れて、のっしのっしと大人の人間より二回り程大きなイーヴィルが現れた。

生徒達はイーヴィルに向けて何か懸命に語りかけている。その内容までは聞き取れない。

しかし、その光景と、先程の詠唱を踏まえて、悟る。

「遍く同胞——まさか、孤児院の子供達までイーヴィル化したのかッ!?!」

返答など無い。しかし鎧兜のような頭部の顎が動いた。

「自由ヲ!! 何者ニも縛ラれヌ自由ヲ!! 何処マデも自由ニ、自由ヲ、自由ガツ」

イーヴィル・アイルは誰に語りかけるでもなく、壊れたレコードのように。

「オレが、自由ニしてやるッ!!」

涙を誘う程に悲痛な叫びをあげていた。

俺は眉間に皺を寄せ、一瞬だけ目を逸らし、しかしアイルに大剣の切っ先を突きつけ見据える。

「大地の賢者ティアロ・サターン、その代行人として。お前をクラス4、特級警戒討伐対象と認定する」

本来3段階である筈のイーヴィルの区分。その最上位、クラス3を

上回る存在として。

俺はティル爺の懐刀としての権限をもって指定した。

片手を天に向けて光の魔法を放つ。

光の玉が空に昇り発破音と共に弾け、赤く輝く。これはイクリップスの身近な者達の間で用いている非常用の連絡灯であり赤は非常警報を示す。

「別に、兄弟弟子だからといって仲良しこよしで生きてきた訳じゃない」

剣を握る拳に力が入る。柄に指が食い込むのでは無いかと言う程に、強く。

「だが。長い時を共に歩んだ者として。お前の、本当の『願い』位理解しているつもりだ」

ここは学園の上空。眼下では、アイルと同じようにイーヴィルとなった生徒とそのクラスメイトや友人達が対峙していた。けれど、生徒達には戸惑いが見受けられる。

更に、この異常事態に引き寄せられてか一般のイーヴィルまで自然発生し始めている。

「この地獄のような光景が、お前の願う『自由』である筈が無いッ」

大剣を片手に持ち替え、右手と左手を掲げて頭上で二つの剣を交差させる。

『我が名は凶兆。『破滅の光』を継ぎし者。この身を以て災いとなさん』

交差された二つの剣の交点から目映い光があふれ出し、俺を照らす。

『トータル・イクリップス』

この背に、目映い光輪が浮かび上がった。同時に、身体から光の魔力が揺らめく炎の様に立ち上る。次の瞬間、俺は文字通り瞬く間にイーヴィル・アイルに接近し、大剣を振り下ろしていた。

それは、光の速さに等しい。

暗紫色の魔力がアイルの身体を守ったが、今度は大剣に切り裂かれ、霧散する。

「普段早朝からやかましいクセに——寝坊しているんじゃないツ
!!」

目で追う事など不可能な、鋭く、目映く、力強い刃を以て俺は訴えかけた。

73話 嫌な風を感じるのよ

ある日のお昼下がりの事だった。

学校は休日。生徒達は思い思いに過ごしている。

「わきゃっ!?!」

ぺち、と柔らかい音を立てて小さな子が顔から倒れ込む。

場所は永久の森、私たちのアスレチック。

幸い地面はふかふかの土なので怪我はしていない。

「ドルチェちゃん、大丈夫?」

そう心配してアスレチックを伝ってくるのは私の弟、わんぱくな一年生キータ。

彼はアスレチックから飛び降りて、転んだ同級生の横に着地した。

「あう、大丈夫っす……」

ドルチェちゃんはオレンジ色のミディアムヘアの女の子で、私とキータ君とは大の仲良し。

彼女は顔や身体に付いた土を払いながら起き上がった。

「ちよこつとどんくさいよね、ドルチェは」

あくび混じりにそう言って二人の元に近寄る。

「うう、そんな事言わないで欲しいです」

ドルチェは恥ずかしそうに二人から顔を背け、髪先をいじくる。

「いじけないの。よしよし、良い子良い子なのよ」

そんなドルチェの頭を私は優しく撫でた。

「はう……」

されるがままに撫でられるドルチェは、心地よさそうな、けれど少し不満げな複雑な表情を作った。

「同い年の筈なのに、ハルカさんお姉ちゃんみたいっす……」

「うん? お姉ちゃんはもとからお姉ちゃんだよ!」

「そういう事ではなくてですね。なんだかちよつと大人っぽいつて事っす」

「そう? 自分ではよくわからないのよ」

「それより、次は何して遊ぶ? 時間はまだまだたっぷりあるんだよ

！」

キータくんはシュツシュとシャドーボクシングしながら、眩しい笑顔を見せていた。

「むう、次は負けないっす！ 自分もいつかお二人みたいな強い魔法使いになってみせるんです！」

ぐつと拳を握り込んで気合いを入れるドルチェ。

私はそんな二人に向かって、真顔のまま、

「でも結局最後に勝つのは私なのよ」

と、当然と言わんばかりに勝利宣言する。

「絶対負けないんだよ！」

「ハルカさんのポーカーフフェイス、崩してやるっす！」

キータくとドルチェは背中に炎が幻視する程にやる気を見せる。

なんてことは無い、私達の微笑ましい日常風景。

のんびり平和な時間が過ぎていく——筈だった。

「！」

突然、違和感を感じて空を見上げる。

そして弾かれた用に駆け出し、凄い勢いでアスレチックを登っていく。

「わう!? ハルカさん急にどうしたっすか!？」

「おねーちゃん?」

二人の声には返答せず、意識を集中させて空を見る。アイル君直伝、『風読み』の技。

その真剣な雰囲気思わず地上のキータとドルチェは黙り込んで息をのんでいた様だ。

しん、と不自然なくらいの静寂。

空を、大気を読むようにじっと顔を上げていた私は、ぽつりと呟いた。

「嫌な風を感じるのよ」

そして、アスレチックのてっぺんから飛び降りて、下方に広がるネットで一度バウンドして勢いを殺し、キータとドルチェの元へ戻る。

「予定変更よ。今日は帰りましょ」

「何かあったっすか？」

「嫌な感じがしたの。今日は風向きが良くないのよ」

「そっかー。お姉ちゃんのそういう勘はよく当たるからね。残念だけど今日の所はここまでにするんだよ」

「わかったっす。それじゃあ早く帰った方が良いつすね。帰り道は競争でもするですー！」

そう言つてドルチェは真っ先に帰り道へと駆けだして。

「お先に失礼するですよー！」

森の出口を目指して駆け出——そうとしたその時。

「うわあっ!?!」

「きゃっ!?!」

突如空から真っ黒な球体が飛来して、私とキータくんにぶつかった。

「へ?」

突然背後から聞こえてきた友達の悲鳴に驚いて、ドルチェが振り向く。

そうしている間にも真っ黒な魔力が私たちの前身を包み、心を蝕んで行くのが判る。

「キータ君、ハルカさん!?!」

ドルチェは思わずこちらに近寄ろうとした。

しかし、

「駄目!・ 逃げるのよ、ドルチェ!!」「駄目だよ! 逃げるんだ、ドルチェ!!」

私たちは同時に叫んだ。

何か、良くないモノが私たちを染め上げようとしている。心の奥底に眠る感情。

脳裏に真っ暗でじっとり湿り、息苦しくい洞窟の光景がノイズのように入る。

——私はその光景を知っている……間違い無い。私の、《思い出》?

自我がドンドン薄れていく。自分がどうにかなってしまっている。そうなる前に、ドルチェには逃げて欲しかった。

けれど、ドルチェは明らかに尋常では無い様子の私たちを置いていくような性格じゃない。

「そ、そんな！ 逃げるって言われてもお二人はどうするっすか!?!」

「ぐ、早くっ……!?!」 「もう、むり、だよ……っ」

真つ黒な魔力は私たちの身体を完全に包み込んでしまった。

「ふ、二人とも、どうしちゃったんすか!?!」

状況が理解できず、ドルチェはわたわたしながら私たちを交互に見る。

すると黒い何かに包まれたキータくんがゆらりと身体を動かして。

「キータ君！ 無事っすか!?!」

ドルチェが思わず駆けつけようとした、その時。

「お腹、空いた……」

「へ？」

ぼそり、とそう呟いた直後。

「お腹が、空いたんだよオオ!!」

キータくんが絶叫し、大口を開けてドルチェに飛びかかる！

「わきゃあっ!!?!」

永久の森に、少女の悲鳴が木霊した。

逆に私は。抗いがたい強い眠気に吞まれて、深い深い眠りに落ちていく——



この感覚は。

また、夢を見ているのか？ ハルカ達のお陰でもうあの悪夢は見なくなつた筈なのに。

頭に浮かぶ映像。景色は暗い。

上も横も下も、壁——いや、岩？

息苦しい……。ここは、洞窟？

言葉が、聞こえてくる。

『おねえ……ちや……ん』

今にも途絶えそうな細い声。弱々しい声。聞いているだけで胸が苦しくなる。

そして——この声には覚えがあった。

『お腹……空い……た……』

気配、感触。声の主は、眼下に居る。土と埃にまみれたドロドロでボロボロな姿。髪の毛は艶が無くボサボサで皮膚には傷が無数に見える。

頬は痩せこけ、ぼろ切れのような衣服からはあばら骨が覗く。

見たことも無い程に痛ましい姿の少年にけれど、ああ。思い当たる。面影があるから。

——キー……タ？

信じられない、というよりは。信じたくない。

脳が、理解することを。特定することを拒もうとする。

——なんなんだ、この夢は……。

『おねえ……ちゃん……？』

キータと思わしき衰弱した少年はゆさゆさと俺の身体を揺すった。違う。俺の身体じゃ無い。俺は今、誰かの身体を借りている？

たまにそういう夢を見る。自分が自分じゃ無い誰かになる夢。

つまり、キータにお姉ちゃんと呼ばれ揺さぶられているこの身体の主は。

——ハルカ？

身体を動かす事はできない。夢の中なのに、意識が今にも途切れそうな程に眠い。

なんとか視線だけは動かせた。自分の——いや、ハルカの身体が見える。キータと同じく泥と埃にまみれボロボロで、骨がどこもかしこも浮き出て痩せこけて。

『起きて……おねえ、ちゃん。起き……て……』

キータは弱々しくも懸命にこの身体を揺する。しかしその力も次第に衰えてゆき。

視界が真つ暗になった。

意識が闇に沈んでゆく……。

「っ!!」



ガバツと。俺は勢いよく上半身を起こした。そして強かに頭を打つ。

「ごあっ!?!」

二段ベッドの下段で寝ているのにこんな起き方したら当然そうなるだろう。

しかし、今は自分の事なんてどうでもよかった。頭を擦りながらも先ほど見た夢の事を考える。

「なんなんだ今の夢。ハルカとキータだよな? なんてあんなボロボロの姿で?」

胸がざわざわする。嫌な汗が噴き出してくる。

俺はいても立ってもいられなくなつて、寮の部屋を飛び出した。

74話 リーダーと同じ “八天導師” つすよね!?

最初に目指したのは、いつもの場所。俺が良く昼寝をする校舎の裏庭だ。

けれどそこに二人の姿は無かった。当然だろう。よく集まるからと言って必ずその場所に居る理由なんて無い。

胸がざわざわした。客観的には、ただ妙な夢を見ただけなのに。不安でたまらない。

ここ最近悪夢を見なくなったというのに、突然あんな不穏な夢を見てしまったのは、悪い予感もするというものだ。

「ここじゃ無いなら——あそこか?」

次に思い当たったのか二人に引つ張られて行つた永久の森の中にあるアスレチックだ。

今日は休日だし、そこで遊んでいる可能性は充分ありえるだろう。

俺は急いで永久の森へ向かった。

永久の森はまだ夏景色だった。青々とした命がうつそうと茂り見通しが悪い。

永久の森を進んでいる道中、空が薄暗くなった気がした。太陽に雲でもかかったのかと空を見上げてみるが、その様子は無い。雲の少ない晴天の筈なのに、何故か青空がくすんで見える。

「何かが起こってる……!」

不安がドンドン膨れ上がっていく。その時だった。

パァン、と破裂音と共に赤い光が空に瞬く。そしてじんわりと赤い残光が漂った。

「なっ非常警報の連絡灯!」

ドクン、と心臓が跳ね上がった。今まではあくまで “嫌な予感” でしかなかったのだ。

けれど、赤い連絡灯が見えた以上それはもう予感では無くなった。連絡灯を打ち上げたのが誰なのか、どういう意味での非常事態なのかまでは判らない。

良くない何かが起こっている。それだけは確かだ。

俺は走る速度を速めた。

——頼む、この先に居てくれッ!

そう願いながら落ち葉をかき分け永久の森を突き進む。

そして、もう少しである遊び場に到着する、というところで。

「わきゃあつ!!?」

悲鳴が聞こえる!

——ッ!!

俺は咄嗟に、身体に『エンハンス魔法』をかけて身体能力を強化し、強く踏み込む。

流れていく景色。見えてくるアスレチック。

そこで、オレンジ色の服装をした少女が、黒い何かに襲われそうになっていた。

咄嗟にマテリアライズしたハルベルトを構え、二人の間に割り込むッ!!

ギインツ!!

甲高い音が響いた。黒い何かは口と思われる部分でハルベルトの柄を思い切り噛みこんでいる。

「あ、あう、あ」

ぺたん、と尻餅をつく音が聞こえた、僅かに首を曲げ後ろを伺うと、オレンジ色の少女が涙を浮かべて震えている。

「立てッ!!」

俺は叱りつけるように言い放った。

「は、はひっ」

少女は震えた足を押さえてなんとか立ち上がる。

その間も俺は黒い何かを押さえ込んでいた。

ギリギリと噛み付かれた槍が少しずつ削られる音が聞こえる。

「嘘だろ、おい……」

目の前の光景が信じられなかった。

俺は見知らぬ少女が、イーヴィルに襲われているものと思って咄嗟に駆けつけた。敵の攻撃を受け止め、それから相手の姿を確認した。

今、俺の槍に齧りついているイーヴィルは。

短く整った金色の髪、幼さ残るふつくらとした頬。日が沈みかけた夜空の様に、青から黒にグラデーションしている瞳。

その特徴は間違い無くキータのモノだった。

その口に、獣のモノと思わしき鋭い牙が立ち並び、爪もナイフの様に鋭く肥大化して。

ふさふさとした毛皮のようなモノに身を包み、背後にあばら骨のような翼が見える点を除けば、だが。

「キータ、なのか……？」

「き、キータ君を知ってるっすか!？」

俺のつぶやきに少女が反応する。しかし、ギチギチといよいよ限界だと言わんばかりにハルベルトが悲鳴をあげた。

「まづいっ!？」

俺は咄嗟にハルベルトごと、キータと思われるイーヴィルを横に受け流した。

キータは槍を咥えたまま、頭から地面に転げる。

「許してくれよ、君っ」

「ふえ？ わきやあ!？」

俺は背後の少女を小脇に抱えて、急いで待避した。アスレチックからそれほど離れていない茂みに潜り込む。

「はあッ、はあッ」

茂みから身体がはみ出ないように蹲るが、いくらエンハンスしていたとはいえ呼吸が乱れる。

「お、お助けいただきありがとうございますっす……」

オレンジ色の少女が、蹲りながらも頭を下げる素振りを見せた。

「礼はいい。それより、話を聞かせてくれ。アレはキータで間違い無いか？」

「は、はい。三人でアスレチックで遊んでいたら、突然空から変なモノが降ってきて。それがキータ君とハルカちゃんにぶつかったかと思うとああなっちゃったんです」

「人間がイーヴィル化するなんて、それじゃあまるでアリスみたいな――」

そこまで眩いて、アリスを襲った謎の人物カイの姿が脳裏をよぎった。

「まさか、あいつが裏で糸を引いて？ いや、突飛過ぎる考えか？」

カイが何の目的を持ってアリスを襲ったのか不明だが、アリスがイーヴィルになってしまった原因を究明し、それを再現したのだとしたら……？ と考えて頭を横に振った。

「今はそんな事考えてる場合じゃねえ!!」

周囲に気配が無い以上、憶測だけでカイの事を考えても仕方が無い。

バリ、ボリ、ゴリ、と鈍い音が聞こえる。体勢を変えて、かがんだ状態になって様子を伺うと、キータがその場で貪るように俺の槍、ハルベルトを咀嚼していた。

「アリスと一緒にだとするならば、『破魔のルクスエクラ』を使えば助けられるかも知れねえけど……」

俺はチラリと、視線を移した。キータはこちらに襲いかかって来たためアスレチックからやや離れた位置で槍を嚙っているが。

アスレチックの側にはもう一体イーヴィルの姿があった。

ふわふわと空中に漂い、眠ったように動かない。もこもこした真っ白い羽毛の様な翼を持ち、その翼と同じようなふわふわした毛を胸や腰、手首や足首に纏うピンク色の髪が印象的なイーヴィル。

「ハルカ……」

キータとは対照的で、その場から一切動かない様子だが。アリスの事を考えると二人とも未知数の戦闘能力を持っているに違いない。一体だけでも勝負になるのか怪しいのに、二体もイーヴィルが居るとても不味い状況だ。

「あ、あのっ！」

ふと、オレンジ色のミディアムヘアの少女が俺に声をかけてくる。

「なんだ？」

「その羽根の形をした勲章、リーダーと同じ『八天導師』つすよね!」

言われて、思わず自分の胸を確認した。制服の胸元に赤い羽根型の勲章が揺れている。〃八天導師〃に任命された時に貰ったモノだ。

「それは――」

「お願いっす!! 二人を、二人を元に戻してくださいっ!!」

涙混じりに彼女は懇願する。

――そんな風に頼られても、俺は……。

思わず弱音を吐きそうになるのをぐっところえ、飲み込んで。

俺は決心した。

75話 俺なんか何ができるのか。細かい事は後で考えるツ!!

改めて、俺はオレンジ色の髪をした生徒に名を尋ねる。

「君、名前は？」

「ふえ？ ど、ドルチェっす」

「ドルチェ。よく聞いて欲しい。大事な事だ」

「は、はいっす！」

ドルチェと名乗る少女は緊張した面持ちになる。

「確かに俺は『八天導師』に選ばれた。でも俺は——強くない」

「へ……？」

俺の告白に、ドルチェはぽかんと口を開いた。失望、までは行かないともがっかりしている事は明白に判る表情だ。

「二人を助けるなんて約束、する事はできない」

「そんな……」

今にも泣き出しそうな程にドルチェの顔が歪んでいく。そんな彼女の肩に手を乗せる。

「しっかりするんだ！ だからこそ、君に重大な任務を託したい」

「に。任務？」

「俺は強くないけど——それでも、あいつらは俺にとって大切な友達で。そんな友達が、あんな姿で暴れているのなら。見て見ぬ振りなんてできない。勝てる見込みが無くても、戦うつもりだ。『二人を絶対に助け出す』、だなんて口が裂けても言えないけど、でも、これだけは誓う」

ドルチェの目を見つめる。決して目を逸らさない。それはある種、自分への戒め。この子に嘘を吐くような人間ではあつてはならないと。

「二人は俺が、ここで食い止めるツ!! 他の誰も傷つけさせやしない。絶対にだ」

ドルチェは静かに、俺の言葉を聞いていた。

「だから君は、学園に戻って。誰でもいいんだ。教員でも、他の八天導師でも、誰でもいい。助けを呼んでくれ。応援が来るまで、絶対に持ちこたえてみせるから。だから、頼めるか？」

俺から言い渡された任務を。ドルチェはきゅつとおびえていた顔を引き締めて、頷いた。身体はまだ震えているが、その表情に憂いや恐怖は無い。

——ああ。強い子だ。きっと将来、俺なんかより凄い魔法使いになるだろうな。

そんな事を想いながら。

「その任務、確かに引き受けたっす……ッ」

「キータが槍を食べ終わったら飛び出す。君は同時に、校舎の方へ走るんだ」

「了解っすー！」

会話を終え、再びキータの方へ視線をやって様子を伺う。槍はもう殆ど食い潰されていた。少しずつ、咀嚼音が聞こえる感覚が長くなっていく。

「数えるぞ。3、2、1——今だッ!!」

俺とドルチェは同時に茂みから飛び出した。

俺は新しくハルベルトをマテリアライズして構える。

「名前も知らない先輩ツどうか、ご武運をッ!!」

遠のいていくドルチェの声を背中で感じながら。

俺はキータに槍を向けた。

「俺なんかは何ができるのか。細かい事は後で考えるッ!!」

俺は主人公じゃ無い。特別な才能も、能力も、何も持たないちっぽけな人間だ。

きっと、考えれば考える程になにも出来なくなるだろう。でも。

ハルカは昏々と眠り続け、キータは苦悶の表情を浮かべて無機物だろうと食らい付く。

二人のあの状況は、どう考えても健全じゃ無い。

大切な友達が。それも、助けて貰った恩義ある友達が大変な目に

遭っているのに。

自分じゃ何もできないから、なんて言っただけで目を背けるような人間には、なりたくない!

ドルチェが応援を呼び行ってくれた。

それまでだ。それまで絶対に耐え抜くツ!!

主人公じゃないとしても、その誓いだけは破れない!!

「いくぞ、ハルカ——キーター!」

覚悟を決めて、俺は二人に対峙する。

「お腹……空いたんだよ……」

キータは獣のように四つん這いでこちらにそろり、そろりと歩み寄って。

「何デモ良い……才腹ツ! 空いたんだツ!!」

キータが上体を起こす。紫色の闇の魔力が、肥大化した爪が光る手のひらに集積していく。ボールを投げるように腕を振ると、闇の魔力が直線的に飛んで来て。

「何だツ!」

闇の魔力は空中をある程度進んだところで静止し。

直後、ごう、と音を立てて周囲のモノを強い引力で吸い寄せていく!!

「これは?! 『第三暗黒魔法（ブラック・ホール）!」?」

仮にも第三階級の基礎魔法を、一年生が詠唱も無しに発動した事に驚きを隠せない。

なんとか踏ん張るが、少しずつ体が闇の球体に引きずられていく。そして、いよいよ球体に触れそうになった瞬間に。

キータが牙を剥き、両腕を広げて爪を振りかぶって飛びかかってきた。

『『ブラックホール・バイト』オオツ!!』

『第三暗黒魔法（ブラックホール）』で身動きを制限された所に、迫り来る牙と爪!

「くっ!」

『第三暗黒魔法（ブラックホール）』を『第三閃光魔法（アルギュロ

スレイ』で相殺できれば話は早いのだが、とても詠唱している暇はない。

——持久戦でいきなりこの手は悪手だけどツ!

判っていても、それ以外の選択肢が咄嗟に浮かばなかった俺は。持っていた槍を思い切り地面に突き立てて。

『ヘヴィ・ブラスター』ツ!!」

爆破させた。

俺の身体は『第三暗黒魔法(ブラックホール)』の引力をも上回る程の爆風に吹き飛ばされる。

「ぐあつ、くう……い！」

少し離れた場所で受け身をとって転がる。

巻き上がった土煙は『第三暗黒魔法(ブラックホール)』があつという間に飲み込んで。黒い球体があつた場所を、黒い球体ごと。

「ガアアツ!!」

獣の様な雄叫びと共に、牙と爪が引き裂いた。

巻き上がり捲かれた地面と土煙、周囲にあつた落ち葉や石ころ。そういった諸々全てを取り込んでいたと思われる黒い球体に齧り付いたキータは。

ゴリゴリ鈍い咀嚼音を立ててその全てを飲み下した。

「この調子で、保つのか……? 俺」

自爆の衝撃でふらつく身体に鞭打って起き上がる。

キータ達との戦闘が、本格的に始まった。

76話 僕達 “八天導師” は個別戦力として遊撃って事か！

その日、僕は定期的に行っている師匠の部屋の掃除をしていた。

「ふう、今日も散らかってるなあ」

慣れた手つきで散乱する資料や道具、ゴミを分別していく。

師匠は魔法の天才で、いい意味でも悪い意味でも注目が集まる魔導士だけ。こと、生活力に関しては壊滅も良いところだ。悪い意味でお嬢様している。

家事全般ほとんど経験が無く、『破滅の光』の影響か空腹、眠気に非常に強力な耐性を持っていて数か月程度なら飲まず食わず休まずでもパフオーマンスに支障が出ない。

オマケに体内からあふれ出す『破滅の光』が滅菌・抗菌にも働いているのか入浴せずとも全身が非常に汚れ難いという最早反則じみた特性まで備えている。結果、お嬢様育ちで生活面の経験が無い上に特に気にとめなくても支障が出ない環境が整ってしまい、今に至る訳だ。

「原初の魔力って何なんだろうなあ……」

その恩恵をめいっぱい利用して好きな事……即ち研究に没頭し放題な師匠の姿は、ある意味人類から抜きん出た存在に感じてしまう程だ。

だからずぼらな師匠に変わって僕が部屋の掃除やご飯の用意、お風呂の世話までしている。因みに師匠は『必要性が無いから』と言う理由で基本は風呂嫌いなのだが、家族の交流は大事にするので家族が一緒ならお風呂に入るといふ面倒くさい行動パターンを持つ。

昔はティアロ様がキツめに促して、イクリプスさんを巻き添えにした上で渋々入浴してたらしいけど。最近はイクリプスさんが一緒にお風呂に入る事を『流石に世間体が悪いだろうが。と言うか単純に嫌なんだが』と拒否し始めた為その役回りが弟子の僕に回る事に……。

なんて事を考えているウチに部屋は綺麗さっぱり！ 僕も弟子と

しての遍歴が長いから、必要なモノと不要なモノの選り分けもなんのその。

「よし、お掃除おしまいっ」

僕はゴミを纏めた袋を抱えて、ルクシエラさんの部屋を後にした。達成感と充実感を胸にえっちらおつちら廊下を歩く。

ファルマとかは掃除なんて面倒くさいって言うけれど。僕は逆で、すつきりするしなんて言うか、人の役に立ってるって思えるから好きなんだ。幸せの形って人によるだろうけど、こうした小さな充実感の積み重ねが生きてるって実感に繋がるんだと僕は思う。

今日も今日とて平和な日常が過ぎていく——筈だった。

何の気なしに歩いていた所へ、突然轟音と共に地面が揺れる。

「わ、わっ!?!」

僕はバランスを崩して尻餅をついてしまい、抱えていたゴミをぶちまけてしまった。

「何、何事?」

頭を掻きながら周囲の様子を探る。ここは階段の踊り場で、正面の窓からグラウンドの様子が見て取れた。するとそこには……。

「なっ、イーヴィル!?!」

グラウンドには無数のイーヴィルの姿と、抗戦する生徒達が見える。

「何この数……イーヴィル避けの結界はどうなってるの!?!」

普通、人里にはイーヴィルの発生を抑制する結界が張られているのでイーヴィルは殆ど発生しない。それでもポツポツ発生したりはするのだが規模は小さく、クラスも低い。そういうイーヴィルを討伐するのが僕らの仕事の一つなんだけど……。

グラウンドで抗戦しているイーヴィルの数は明らかに尋常では無かった。

戸惑っていると、端末が甲高く警報を鳴らす。

そして、端末から強い光が放たれた。

空中に、プラスチックのボードのようなモノが浮かび上がる。

マテリアライズを応用した通信端末の非常用機能、緊急通達の

ポップアップ”だ。

一つは、全生徒に向けた通達。

学園内でイーヴィルが発生している事、孤児院由来の生徒がイーヴィル化している事。この緊急事態に対処するため、学内にいる生徒はクラス毎に集まりイーヴィルと抗戦、可能であるならばイーヴィル化した生徒を無力化する。

戦闘が厳しい下級クラスは保健室、職員室に集まり後方支援の手伝いを行う事。学外にいる生徒はできる限り学園の生徒と合流し複数人で集まって学園へ戻り、戦線に加わる事。負傷者、鎮圧したイーヴィル化した生徒は保健室に集める事などがティア口様の名で指示されている。

「なんだこれ……大事件じゃないか！」

僕は慌てて装備をマテリアライズした。そしてそのままもう一つの通知を確認する。

そちらは、“八天導師”へ特別に宛てられた指令だった。

『この緊急事態に際して、“八天導師”には生徒達とは独立して個人によるイーヴィルとの抗戦を要請する。またその際、混乱している生徒への避難・抗戦指示を求める』

ざっと内容に目を通して、僕は駆けだした。

「つまり、一般生徒はクラス毎に集まって事態に対処、僕達“八天導師”は個別戦力として遊撃って事か！」

目の前の窓に、氷の直剣を突き立てて破壊する！

そして散らばる窓ガラスと共に、階段の踊り場から外へと文字通り飛び出した。

高さは3階と2階の間。身体の防御能力に多少の効果がある氷属性のエンチャントを身に纏っていれば、少し痛いで済む程度の衝撃だ。

僕は地面に着地すると共に前転して衝撃をさらに緩和して勢いのままに立ち上がった。

そしてすぐ近くで破壊された校舎と、そこから逃げてくる下級生徒達を発見する。

「みんなっ落ち着いて！」

僕はレイピアを構えて彼らの元へ駆けつけた。

そして、砂煙の中に発見した巨大な影に剣を振るう。

熊の様な姿をしたイーヴィルが振り下ろした拳を、氷の刀身が受け止めた。

足下では尻餅をついた下級生が涙ぐんで震えている。

「大丈夫かい!？」

イーヴィルの拳を受け止めながら、僕は足下の下級生に語りかけた。

その子はおびえた様子で、震えた声で呟く。

「が、ガストくんが、ガストくんがあんな、姿に……!」

その様子から、僕は察した。

「このイーヴィルはまさか生徒がイーヴィル化したって事かい!？」

下級生は言葉で答える事はできず、ゆっくり首を縦に振る。

「ならっ！」

僕は剣を傾けてイーヴィルの拳を受け流す。そして同時に懐へと潜り込んだ。

イーヴィルの顔面を左手で鷲掴みにして、唱える！

『「アブソリュート・ゼロ」!!』

これは、対象に触れていなければならない代わりに対象を即時的に氷漬けにして動きを封じる魔法だ。熊の様な姿をしたイーヴィルが一瞬にして氷の像に変貌する。

「しっかりするんだッ！」

僕は今だ震える下級生を叱咤した。

「この子を救うには君達の力が必要なんだっ！」

膝を突き、目線の高さを合わせて肩を抱え。僕は訴える。

「クラスの他の子達を集めて、この子を保健室に運ぶんだ。大丈夫、きつと元に戻るから」

「あう……」

「ここで何もしなかったら、何も変わらない。頑張って！ 勇気を出すんだ！」

「……」

僕の言葉を受けて、下級生は涙を飲み込み下唇を噛んで立ち上がった。

「み、みんな、手伝って!! ガストくんを保健室に運ばないと!」

その呼びかけに、遠巻きに避難して様子をうかがっていた他のクラスメイト達とおぼしき下級生達が集まってくる。

「そうだ! 君達は一人じゃ無い! 仲間が居る、大丈夫、君達も戦えるから!」

子供達の目に光が宿っていく。これなら大丈夫だろう。

そう確信した所へ、

「すまないみんなツ!! アーちゃんと街に出ていて遅れてしまった!」

軍帽を被った少女が、夕焼け色のふわふわしたツインテールを揺らして駆けつけてくる。彼女は周囲を見渡して、僕に視線を向ける。

そして更に、僕の胸へと視線を移して。

「〃八天導師!」

キリツと背筋を伸ばして敬礼をした。

「代わりに指揮を執ってくださいだったのでね。ご協力に感謝致します!」

「い、いや指揮なんて言うほど大層な事はしてないよ……」

僕はたじろぎながら、彼女がこのクラスのリーダーであると推察する。

「ドライブ先輩ツ……!?!」

遅れて、モノクルをかけた小柄な黒髪の少女が現れた。

「シジアンちゃん!」

「遅いぞアーちゃん!」

軍帽を被った少女は頬を膨らませる。

「仕方ないでしょう、ボクは文官なんですから……」

膝に手を突き胸を押さえて息を切らすシジアン。

「何を不甲斐ないことをツ! 私だって本来は采配担当の軍師だぞ!」

「大丈夫かい？」

「はい……。なんとか……」

シジアンは呼吸を整えると、

「お手数かけてすみません、ドライブ先輩。下級生はボクとユーちやんで纏めますから」

「うん、任せたよ！」

シジアンは一年生ながら同じ“八天導師”の一員だ。僕はこの場を彼女達に任せて、他に助けが必要な生徒を探しに駆けだした。

77話　こんなものが、キータの『願い』である筈が
無いんだッ!!

強い衝撃と共に身体が宙に放り出される。

「ぐ、うッー」

空中で体勢を立て直し、なんとか受け身を取って着地する。

「ぐるう……足りナイ、足りナイ、」

キータは虚ろな眼差しで譫言のようにそう繰り返し、

「全然足りナイんだよオオオ!!」

悲痛な叫びを上げて、鋭く巨大な爪を備えた両腕を大きく広げる。

暗黒の球体がキータの目前に現れ、強力な引力を発生させて。

木々は頭からしなり、根が抜けそうな程に揺れて、

岩、砂、落ち葉に木の枝、周囲のあらゆる物質が球体に吸い込まれ

球体は肥大化していく。

『ブラックホール・バイト』オオオ!!」

そして、膨れ上がった球体をまるで咀嚼するかのよう。

キータの爪が左右から振り下ろされ、球体を切り刻み。

粉々になった黒い魔力がキータの口の中へ送り込まれては消えて

いく。

俺は槍を礎のように地面に突き立ててその引力からなんとか逃れ
ていた。

「攻撃対象なんてお構いなし、まるで暴食の権化だ……」

バリバリ、ゴリゴリ、異質な音を立ててキータは咀嚼する。

「足りナイ、足りナイ——」

黒い炎の様な魔力に半ばほど覆われた顔面は。それでもはつきり
と見て取れる程にくしゃくしゃだった。乾き、餓え。悲痛な切望の叫
びが胸に突き刺さる。

「……………違う」

俺は力を振り絞って、槍を引き抜く。

「違っただろッ!!」

振りかぶって、槍を投げる!!

『『二連朱槍』!!』

放たれた槍は空中で二つの炎の塊と変化し、キータへと向かう。炎の弾丸がキータの顔と身体に直撃するも、僅かに仰け反ったまででひるまず、キータはひたすらに咀嚼を続けていた。

パラパラと、マテリアライズされた石ころがむなしく転がり落ちる。

かつてイーヴィルと一体になっていたアリスは言った。

『私は人々の願い。数多の願いが私の翼』

イーヴィルが、人々の「願い」によって生まれるとして。

「キータは……! お前はツ!!」

俺は溢れて来る涙をこらえながら、もう一度ハルベルトをマテリアライズして。

「そんなに辛そうに、苦しそうに、するものじゃ無いんだツ!!」

遠心力をかけて、ハルベルトの刃を強く叩き付ける。

ギインと金属の高い音が立ち、キータの爪にハルベルトが受け止められた。

「もつと、見てるこつちまで頬が緩む位に……ツ! 幸せそうに、嬉しそうに、ご飯を食べるんだ。キータは、そういうヤツなんだツ!!」

俺はハルベルトを引き上げて、訴えかける用にキータへ振り下ろす。

『『リア・スラストー』!!』

ハルベルトが備える斧状の刃、その背に当たる部位がボウつと炎を灯す。

炎の推進力を持って、ハルベルトは更に強く大気を駆け抜け、

キータの爪に衝突した。

「こんなものが、キータの『願い』である筈が無いんだツ!!」

イーヴィルとは即ち、「悪しき願い」。

正しい願いでは無いもの。ヒトの思いが、どこかで間違っつて歪んでしまったもの。

俺はそう推察する。

キータのこの姿は、本当の願いでは無い。

そんな想いを胸に。槍を振る続ける。

俺が槍を叩き付ける度に、キータの魔力を吸い取ってマテリアライズされた石ころがぼろぼろと、まるで俺の涙の代わりの様に転げ落ちていく。

「みんなで楽しく笑いながら食べるのが、お前達の食事だったじゃないかッ!!」

ぴしり、とキータの太く鋭利な爪に亀裂が走った。

干渉マテリアライズによる魔力の相殺も、生成した石ころをキータが食べてしまっているのでは何処まで効果があるのか判らない。相手は未知の魔物、イーヴイル。口にして即座に魔力に再変換されているとしても不思議じゃ無い。

やはり、キータを、そしてハルカを元に戻す切り札は――。

俺はもう一度強く槍を叩き付け、その反動を利用して後方へ飛び退く。

キータから問合いを開けて、ウエストポーチに手を突っ込んで中身を探る。

ゴロゴロとした堅い感触が、三つ。

『フェア・クリスタル』

レンの魔法陣と、アーシェの魔石製造技術で作られた特注の魔石。

この中には、ルクシエラさんから分けて貰った原初の魔力、*「破滅の光」*が極限まで希釈され、蓄えられている。

アリスの一件から、*「破滅の光」*を極めて低密度で展開しあらゆる魔法効果を分解する『破魔のルクス・エクラ』ならばイーヴイル化した人間を元に戻す事が出来ると証明されている。だから、この三つの魔石が、唯一の希望だ。

しかし、裏を返せば――この三つしかない。

『フェア・クリスタル』は製造に大変手間のかかる代物で、大量発注はレンとアーシェに迷惑がかかる為控えていたのだ。

『破魔のルクス・エクラ』には欠点がある。それは『破魔のルクス・エクラ』そのものには攻撃能力が全く無いことだ。『破魔のルクス・エ

クラ』はあくまでエンチャントなど「魔法効果」を分解する魔法だからだ。

魔法効果の消失はそれまで支えられていた力がなくなる事で倦怠感、脱力などを生じる。プールから上がった時に身体が重く感じると同じようなイメージだ。

この時、大きく消耗していれば魔法から脱出するのに手間取り、更に魔力が分解されなおさら脱出に必要な力を失っていくと言う循環が作られるが、相手が万全の状態ならば行動を殆ど阻害しない。発動したとしても、簡単に魔法の効果範囲外に脱出されてしまう。

なんとかして、ハルカとキータを消耗させる、或いは抵抗出来ない用に捕縛して『破魔のルクス・エクラ』を当てる必要がある。

俺は深く深呼吸し、乱れていた呼吸を整えた。

相手は未知数の力を持つイーヴィル二体。ハルカは謎の力で空中に浮遊したまま、昏々と眠り続けている。

キータのみと抗戦している現状ですら、劣勢だ。キータの方は疲れや衰えを全く見せていない。

俺が二人を無力化できるのかと聞かれれば……全く自信は無い。

二人の友達の下級生が学園に応援を呼びに行ってくれた。それが希望だ。

もし俺が二人を倒す事が出来なくても。少しでも消耗させ、駆けつけた応援に『フェア・クリスタル』を渡せば二人を助ける事が出来る筈なんだ。

その為には最低一つの『フェア・クリスタル』を残す必要がある。

『二連朱槍』ッ!!』

放たれた槍が二つの炎の塊になってキータを攻撃する。

「足りナイんだッ!!」

キータはヒビの入った爪を振るって、炎の弾丸をかき消して。

「お腹が、空いたんだよオオッ!!」

空に向かって吠えた。

黒い球体がキータが仰ぎ見る空中に発生する。

「一か八かッ!」

三つの切り札、その一つを握り込み。

『破魔のルクス・エクラ』ッ!!』

周囲のあらゆる物質を飲み込もうとする黒い球体がけて投げ込んだ。

78話 少し、昔話を聞いてくれないかしら

氷の刃が、真っ黒な鳥の姿をしたイーヴィルを切り裂く。

「二体一体の質は大した事無いな。やっぱり問題はイーヴィル化したっていう生徒達か」

刃に付着した魔力の残滓を払い飛ばしながら、僕は周囲を見渡した。

ここは学園の中庭に当たる場所、とにかく目に付いたイーヴィルを討伐しながら移動してきたけど。校舎の中、外関わらず他の生徒達が連携してイーヴィルと抗戦している姿を確認する。

未曾有の非常事態だけど、そこは優秀な魔法使いの卵が集まる学園だ。混乱は収束しみんな状況にきちんと対応しているみたいだ。

「これからどうしよう。戦力が不足してるクラスに加勢した方が良かな?」

下級生は救護、バックアップに回ってるから大丈夫としてイーヴィルと抗戦してるのは4年生以上。基本的に学年が高ければ戦闘経験も豊富で場慣れしているから心配なのは4年生だろうか。

「……ん、待てよ」

ここでふと思考が巡る。四年生って、確か――

僕、ファルマ、レン、アーシエ。クラスと独立して遊撃する八天導師が4名。

しかもイーヴィル化してるっていう孤児院由来の生徒と言えばリーゼが筆頭。

アーシエはB組だからまだ良いとしても――

「僕のクラス9人しか居ないのにウチ4人が欠員なんだけどっ!!?」

一番戦力的に不安なの僕のクラスじゃん!!

僕はダッシュで自分の教室を目指した。八天導師は個々の判断で戦って良いって事は僕が4のAの戦線に参加しても良いって事だ。もしレンが同じ判断をしていてクラスと合流しているならそっちに任せれば良いし、まずは様子を見にいこう。

そう思って校舎に足を踏み入れようとした、瞬間。

『ドライブズ』

投げかけられた声は、予想外のものだった。

「リーゼツ!」

咄嗟に振り返るも、走っていた勢いのせいでバランスが崩れる。

なんとか体勢を持ち直して改めて周囲を見渡す。

そこにリーゼの姿は無い。しかし、

「風の魔力の残滓を感じる……気のせいなんかじゃ無い!」

僕は神経を集中させて、魔力を感じた。

煙のようにただよう風の魔力が、尾を引いてどこかへ続いている。

「今の声ってひよつとして風の魔法で届けられた?」

僕は一瞬迷った。孤児院の生徒達がイーヴィル化しているなら

リーゼも例外ではない筈だ。そんな彼女が僕を呼んだ。

考えられるパターンは2つ。リーゼだけ何故かイーヴィル化せず

に済んで、僕に助けを求めている。もう一つは……

「誘われてる……?」

イーヴィルとして、僕に狙いを定めおびき寄せようとしている。

そこまで考えて、僕は風の魔力を追って足を踏み込んだ。

仮に誘われていたとしても、その先にイーヴィル化したリーゼが

待っているなら。呼ばれている僕こそがリーゼを救わなければいけ

ないじゃないか。

どっちに転んでも、優先するべきはリーゼの方だ!

僕は心の中でクラスのみんなに謝った。ごめんね、でもきつとナギ

さんがなんとかしてくれるよねっ!

魔力を辿って走って行くと、道場などが重なっている実習棟に到着

した。

魔力はその屋上へ向かって続いている。

実習棟は学園の建物の中で一番高い建物だ。階段を駆け上がるの

に少し苦戦しつつ、僕は屋上へと足を踏み入れた。

足場の縁に立って、空を見上げる少女の後ろ姿が見える。

視線の先、遠い空の向こうに第二の太陽と見紛う光と、巨大な何か

があった。

「……リーゼ」

呼びかけると、彼女は振り向いて。

「よかった、来てくれたのね」

その顔は鼻を境に半分、仮面のような黒い魔力に覆われていた。

「っ」

僕は剣を構え、息を呑む。殆ど姿は変わって居ないけれど、顔にとりつく黒い魔力はイーヴィルの証拠だ。やっぱり、リーゼだけが無事だった訳じゃ無く誘い込まれたらしい。

けれどリーゼは優しい、慈母のような微笑みを浮かべる。

「そう警戒しないで。私は、大丈夫だから」

そう言われて素直に警戒を解くわけにはいかない。けれど、少なくとも今すぐ襲いかかって来る様子はみられないから。

「どうして僕を呼んだの？」

問いかけてみる。

「私の『願い』には、貴方の助けが必要だったから」

応答が成立した事に僕は少しだけホツとした。

イーヴィルと言えば獣か赤子程度の知能しか持ち合わせていないものだからこうして会話のキャッチボールが成立するという事は人間としての理性を保っているという事だ。

イーヴィルとしては明らかに異質な存在。少なくとも、他のイーヴィルと同じように問答無用に攻撃するのは早計だろう。勿論、不意打ちやだまし討ちの事を考慮しなければならぬが、ひとまず僕はイーヴィルとなつたりリーゼと会話を試みることにした。

「君の『願い』？ どういう意味かな」

「……」

リーゼは少しだけ返答に詰まり、

「言葉にするのは簡単だけど、結論だけ先に言っても上手く理解できないでしょ？」

と言つて、

「——少し、昔話を聞いてくれないかしら」

と、懐かしむように目を細めた。

「いいよ。聞かせて」

「昔々、こことは違う世界に——小さな、けれど幸せに満ちた孤児院がありました」

リーゼは子供に読み聞かせるように、優しく、語り始めた。



その世界では、大きな戦争がありました。全世界を巻き込んだその戦争は、まるで神が人間に下した裁きのような大災害によって幕を下ろします。

世界を引き裂いたとも言われる天変地異が各国を襲ったのです。最早、戦争所ではありませんでした。けれど戦争に、災害に、多くの人が亡くなってしまいました。

そんな時勢だったからこそ。

幸か不幸か、多くの苦難を乗り越え、なんとか生き残った子供達が、世界のあちこちに沢山いました。両親を亡くし、路頭に迷い、それでも強く生きていく子供達。

そんな子供達に救いの手を差し伸べる、優しい人々もたしかに存在して。そんな人たちの助けがあつて、「私達」は孤児院という一つの家で共に過ごす事になります。

私は、その孤児院で一番年上のお姉さんでした。

「勿論、決して裕福な暮らしでは無かったわ。けれど、大人も、子供も、みんなで協力して肩身を寄せ合つて。家事や菜園、小さなお仕事、生きるために必要な事で一生懸命だった。辛くても、苦しくても、みんな笑顔を忘れなかった。私はそんな生活に満足していたわ」

けれど。幸せな日々は突然、奪われてしまいます。

戦争の爪痕と、なおも残る災害の猛威。苦しみの果てに悪事に手を染める人間も、決して少なくは無かったのです。

身寄りの無い子供達なんて、格好の的だったのでしよう。

私達の家は、孤児院は。

盗賊に焼かれました。

院長先生は殺され、私たちは捕らえられどこかの国へ連れて行かれました。

長い、長い旅を経て。私たちは日の光も届かない真つ暗な世界――
鉾山で働く奴隷として売り飛ばされたのです。

79話 今のアイルを救えるのは、貴方だけなの

「そんな……」

僕はギリツと奥歯を噛みこんだ。

孤児院由来の生徒達は皆、洞窟が苦手だ。その理由を、垣間見る。「ありがとう。私たちの為に悲しんでくれて。憤ってくれて。でもね、もう全部終わった事だから。過去は過去。私たちは、現在（いま）を見なければいけない」

「リーゼ……」

「鉱山での生活は、地獄そのものだったわ。初めから、使い捨てるつもりだったのね。ろくな食事も与えられず、けれど作業が滞れば鞭が飛ぶ。そんな環境で、一人、また一人と力尽き倒れていった」

リーゼはふと、僕の目を見据える。

「ドライブ」

「何？」

「これから私が言うことは、きつとすぐには飲み込めないと思うの。だから、前置き」

「えっ、あ。うん判った」

わざわざ前置きまでするなんて、一体どんな展開が待っているのだろうか。

決して明るい話で無い事だけは想像できた。

「……少しずつ減っていく仲間達。私たちはある覚悟を決めたの。実は、私たちの中には魔法を使える子が一人だけ居たのよ。誰から教わった訳でも無い、天性の才能を持っていた魔法使いの卵。そして誰よりも仲間思いで、優しかった男の子」

その子は、盗賊に捕まった時敢えて魔法を使わなかったという。

誰の教えも受けていない付け焼き刃の魔法で、大人に勝てる見込みがなかったから。ここで無駄に手の内を晒すより、来たるべき日に切るジョーカーとして、胸に秘めておくと。今際の際にあった院長先生に諭されたらしい。

そして、鉱山奴隷として働きながら。怒りと悲しみで心を燃やし、

密かに魔法の技術を高めていった。一人でも多くの大人に復讐する為に。あわよくばこの力で仲間達を助け出す為に。

「……『家族』だったから。私達みんな、あの子が考えていた事を判っていたわ。でも、どんなに頑張ったって初歩も知らない独学の魔法で大人に叶う訳がない。それも判っていたから」

リーゼは視線を僕から外して、空を見上げ。

再び、遠い空に浮かぶ異形へ眼差しを送って。

「だから私達は『あの子』に——アイルに希望を託したの」

予想は出来ていた。孤児院由来の生徒の中で最も優れた魔道士であるアイルさんなら、幼少期から天性の才能を持っていたとしても不思議じゃ無い。けれどその場合おかしな点が出てくる。

「待って、君は孤児院で一番上のお姉さんだったんだろう？ アイルさんは君よりも——」

そこまで言った僕の鼻先に、ちよんとリーゼの人差し指が当てられた。

「まずは、最後まで聞いて欲しい」

大人が子供に言い聞かせるように、優しく促され僕は。

「あ、う、うん……」

その包容力に、思わず飲み込まれてしまった。

「アイルは捨て身の復讐をして一矢報いるつもりだったのだけど。私はそれを辞めさせた」

リーゼはアイルさんにこう伝えたという。

『魔法の力は、アイルの切り札は——アイルが生き延びるために使いなさい』

それは、生き残った他の孤児院の子供達全員の願いでもあった。

アイルさん一人で鉱山を取り仕切る大人達を打ち倒し、孤児院の子供達みんなで、脱出——そんな理想は叶わないと判っていたから。

リーゼは、子供達は、『アイルさん一人だけでも生き残る事』を望んだ。

アイルさんは何度も断ったという。仲間を置いて一人で逃げるなんてしたくないと。

でも。

『アイルさえ生きていてくれれば。それこそが私達の生きた証になる。だから、お願い』

何度も、何度も、だだをこねる子供へ言い聞かせるようにリーゼは語りかけ。

アイルさんは仲間達の想いを背負い、旅立ったんだ……。

「残った私たちはアイルの手助けをする為に決死の反乱を起こしたわ。あつという間に鎮圧されちゃったけれど。アイルを逃がす事には成功した。そして——」

リーゼは目を伏せ自分の鼓動を確かめるように胸に手を当てて。

僕の方を向いて、言った。

「アイルを残して、私たちはみんな死んでしまった。反乱の最中始末された子、諦め自ら命を絶った子、衰弱し、疲労と空腹の果てに亡くなった子。みんな、みんな——そう、私も含めて」

僕はその言葉に思わず

「……ふえっ……?」

言葉にならない声を漏らし、目を大きく見開いた。

「そんな、だって、君達はちゃんと、」

死んだ、なんて言われても。現にリーゼ達はこの学校で暮らしている！

「死んでしまったなんて、そんなの、」

「信じられない?」

「……うん」

「でも、それは事実——私も、こうしてイーヴイルになるまでは忘れてたけど」

「じゃあ、今の君達は一体なんだっていうんだい!? 幽霊だともいえるのかい!? 僕は知ってる、リーゼが、血の通った人間だって!」
ずっと一緒に戦って来たんだ。

触れあうことだって有った。リーゼが幽霊な訳無い、それだけは確信をもって言える。

「勿論。『私たちは』生きてるわ」

「どうして……う？」

自然にこぼれ落ちた僕の疑問への答えは。

とても予想だにしないものだった。

「貴方のお陰よ」

「……は？」

僕？ 僕が何をした？ 死者を蘇らせるだなんて大層な事、僕がしたとしても!?

「貴方が願ってくれたから、私たちはこの世界に生きる事ができた」

「僕が願った？」

「そう。そしてそれこそが、貴方を呼んだ理由」

「何も、判らないよ……」

「今はそれでいいわ。ただ、これだけは理解して」

リーゼの眼差しが、険しくなる。重い視線が僕の胸に突き立つ。

「今のアイルを救えるのは、貴方だけなの」

80話 司どるは強欲な日常

「どうして僕だけなんだい？ 僕より凄い魔法使いは沢山居るのに」
「今のアイルを止めるだけなら——ううん。『殺す』だけなら、きつとイクリプスさんやルクシエラさんにも出来る。けど、そんなの、嫌」
リーゼの瞳に涙が浮かんだ。

次の瞬間。

「っ！」

大気が震える。

「ああ……。アイルが、泣いてる……。昔は、泣き虫だったなあ」
遠い空の向こうで、耳障りな、高い金属音のようなモノが鳴り響き。
波打つように、空を黒い魔力が走って行く。
そして、黒紫の魔力がリーゼへと降り注ぐ！

「リーゼッ!!」

僕は思わず手を伸ばしたけど、

「大丈夫」

リーゼは動じず、黒紫の魔力に身を委ねた。

黒紫の魔力はリーゼの身体を包み込み、流れ込んでいく。

「大丈夫って言われても……」

どうみても良くないモノに侵食されているようにしか見えない。

「なら、丁度良いわ。説明の手間が省けるし」

そう言うところでは魔力に包まれながらも自身を指さし、

「私に『ルクス・エクラ』を使つて」

「えっ、そ、そんな事したら！」

「大丈夫だから」

戸惑ったけど、でもどのみちこのまま見ているだけなのもどかしい。

『ルクス・エクラ』、というか『破滅の光』は魔法を分解する魔力だからもしかしたらこの黒い魔力も打ち払えるかもしれない。

『『強度1，範囲タイプB』』

僕は右手の平をリーゼに差し向け、詠唱した。

『ルクス・エクラ』ッ!!」

掌から、水流のように光の魔法がリーゼに放たれる。

しかし――

リーゼを包む黒い魔力が、『ルクス・エクラ』をかき消した。

「嘘だっ!?! 〃原初の魔力〃が阻まれるなんてッ!?!」

リーゼの唇が再び開いた。

「本来なら、イーヴィルとしての力は〃破滅の光〃を当てれば引き剥がす事ができる。でも、この紫の魔力がそれを邪魔してるの」

「じゃあ、この魔力は――」

「きつと、未知の〃原初の魔力〃。これが有る限り〃破滅の光〃は私たちに届かない――うっ!」

突然、リーゼが片膝を突く。

「リーゼ!?!」

僕は思わず手を差し伸べ、リーゼは片目をつむり顔をしかめて僕の手を取った。

「大丈夫、ちよつと気持ち悪いだけ……イーヴィルの魔力は、沢山の人達の願いだから。少し、ぐるぐるして酔いそうになるの――んっ!?!」

語るリーゼの語尾が跳ねた。

目を大きく見開き、胸に手を当て呼吸を荒げ。

そして――

めきめきと音を立てて、リーゼの背から黒い翼が伸びて。

さなぎだった昆虫が羽化するように、黒く透明な二つの翼がリーゼに現れた。

「ああ、そっか。アイルの所へ行きたいって、望んだから……」

異変が収まったのか、あがった呼吸を整えつつ、リーゼが立ち上がる。

「今更だけど、どうしてリーゼは正気を保っているんだい? イーヴィル化した生徒達はみんな、暴れ回ってるみたいなのに」

「それは、私の〃願い〃がそういうものだから」

「〃願い〃?」

「アイルが願ったの。私達、仲間達の〃願い〃を叶える事を。でも、

イーヴィルは人の願いが歪んでしまったモノ。私たちが心に秘めていた、最も強い願いを、歪に引き出してしまった。それは、嘗て苛まれた餓えのからくる飽くなき食欲だったり、あらゆる苦しみから逃避する永遠の休息だったり。理不尽な暴力、大人達への復讐心だったり、色々」

その結果が、暴走した力の行使に繋がっているのか。

「……じゃあ、君は一体何を願ったの？」

「私の願い——ありふれた、けれど。誰よりも強欲な願い」

リーゼは視線を学園へと移す。

「『家族みんなで過ごす、平和な日常』」

その純粹すぎる願いは。リーゼが孤児院の生徒達と、そしてアイルさんと幸せそうに暮らしていた過去の光景が走馬灯のように思い起こされる。

「貴方が見せてくれたこの夢は。この学校での生活は。何よりも失いたくない、かけがえのない宝物——私は、そんな、日々をもう一度、願った」

リーゼが一步踏み込んでくる。涙を振り切り、僕の手を取って。

決意、期待、懇願、追憶、あらゆる感情を一つに込めた、眼差しを送って訴える。

「お願いドライズ、アイルを助けて。私は、また孤児院のみんなと一緒に学校へ通いたい……誰一人、欠けること無く……ッ！」

僕は。

「正直、どうして僕なのかなって思うよ」

リーゼの手を握り返した。イーヴィルになっても、変わらず小さく、暖かな手だ。

「でもね。そんな事、今はどうでも良いよね」

理由なんて、後から考えれば良い。

「僕じゃなきゃいけないのなら。僕がやる」

僕は自分が特別だなんて思った事は一度も無い。

けれど、こんな僕を『主人公』だなんて呼んで、信頼してくれるヤツが居る。

求めてくれるのなら、信じてくれるのなら、その期待には応えなければならぬと思う。

それは、あいつだけじゃなくて……。

師匠や、クラスのみんな、僕と繋がる全ての絆に、応えたい。

「僕にできる全てをやるよ」

無二の友の言葉と、彼が作ってくれた剣を構え直して、柄を強く握る。

大丈夫、僕はもう、一人じゃ無い。

「ありがとう、ドライブズ……」

リーゼが安堵したように目を細めるけど、

「お礼なら、全部終わってから。アイルさんのところへ、連れて行ってくれるかい？」

「ええ。少し雑だけれど、許してね」

リーゼの黒く透き通った翼が、羽ばたく。

『司どるは強欲な日常——私は願う。かけがえのない日々、夢幻の幸福をもう一度』

詠唱と共に、風の魔力が逆巻くようにリーゼの元へ集まっていく。

『きせきの夢』

彼女の背に現れた黒く透明な翼が輝きに包まれて。より大きく、そして鮮やかな翡翠色の翼へと変化した。巨大化した翼は、重さを一切感じさせない軽やかな動きで空気の塊をおしのけて、彼女の体が浮かび上がる。目で追うと十分な高さに到達したところで頭から落下しつつ体を捻って、僕の背後に回った。

僕の両肩に、彼女の手が添えられる。

「いくよ、ドライブズ」

「うんッ！」

ふわり、と浮遊感。

「飛ばすから……っ！」

その言葉が聞こえたかと思うと、景色が一瞬にして無数の線へと変わっていた、

81話 第二の切り札

「ブラックホール・バイト」オオツ!!」

あらゆるモノを飲み込む黒い球体を咀嚼するようにキータの爪が交差する。

「どわっ」

引力に取り込まれそうになったオレは咄嗟に自分の目の前を爆破して、反動を使って距離を取り何を逃れた。

「くっそ、当てが外れた!」

キータが口になっている物量は明らかにキータの身体に収まる量では無い。従って、ブラックホール・バイトやキータが食している物体は亜空間あるいは異空間のような別口に取り込まれ蓄積していると考えた。

そこで『破魔のルクスエクラ』を発動させた『フェア・クリスタル』を敢えて食べさせて、様子を伺っていたのだが。一向に効果が現れる様子が無い。食べさせたあの一個はもう無駄になったと考えた方が良さだろう。

「才腹が空いたんだよオオツ!!」

キータの爪が振り上げられる。

「っ!」

咄嗟に槍を横に構えて防ぐが、

「アアアアッ!!」

咆哮と共に槍にかかる重圧がドンドン増していく。

やがて、ミシツと金属が軋む音が聞こえた。

——やられるっ!

槍ごと爪に切り裂かれる光景を予感した俺は咄嗟に槍を爆破する

!

「『ヘビィ・ブラスター』!!」

「がッ!」

槍の爆風でキータは弾き飛ばされ、俺も軽く吹き飛ばされた。

受け身を取ってすぐに立ち上がる。

「はあ……はあ……！」

息が上がる。キータの攻撃を見切つてなんとか致命傷を避けるのが精一杯だ。

その回避方法も結局自爆が殆どでダメージは蓄積していく。

このままでは結局じり貧になる事は明らかだ。

「……切り札、抱え落ちするのが一番みつもねえよな」

出来れば、もう少し温存しておきたかった。

『破魔のルクスエクラ』に次ぐ、第二の切り札。

この魔導には時間制限がある。だから、ここぞという場面で使用するべきだと思つて温存していたが。このままでは結局何も出来ずにやられてしまう。

こうなつたら一か八か、ここで全力をぶつけ、一挙にキータとハルカを拘束する!!

「ふう……」

目を閉じ俺は呼吸を整え、

「いくぞキータ!!」

爆発させて失つた槍を改めてマテリアライズし、キータに差し向けて。

その魔導を発動する!

『神威』!!」

金属質の帯のようなモノがマテリアライズされ、俺の四肢に絡みつく。異質な鎧、あるいは衣と形容できるこの魔導はナギが持つ固有魔導『サクリファイズの刻印』を改造した身体能力向上魔法!

「狙うは、そこだっ!!」

槍を振り上げ強く踏み込むと、驚くほど軽やかに身体が動く。

四肢に纏う金属の帯が仮想の筋肉として運動を補助してくれる。

『リア・スラストー』!

ハルベルトの背から炎が噴出する。

『神威』で強化された腕力と、炎の推進力を伴ったハルベルトが、キータの爪に叩き付けられる!

「グッ!」

あまりの重圧に、ひるむキータ。攻撃するチャンスは今しか無い！
「魔道士って言うには脳筋過ぎるけどっ」

俺はハルベルトを何度も、何度もキータの爪に叩き付ける！

「まずは厄介なそいつを、無力化させてもらおうっ!!」

ピシッと爪に走る亀裂が広がり、破片が散る。

「ぶっ壊れるおっ!!」

トドメと言わんばかりに、渾身の力を込めてハルベルトを叩き付け。

バキンと心地よい音を立てて、キータの爪が一つ、砕け散った。

「グるうッ、ガアッ!!」

爪に痛覚などはないのだろう。大した動揺は見せず、反対の手に備わる爪を俺に差し向けるキータ。

「焦らなくても——」

俺は軽く跳躍してその斬撃を躲し、

「そんな似合わないねえモン、残りも全部叩き割ってやるよっ!!」

空中でハルベルトの背部から炎を噴出させる！

すると俺の身体は槍に引っ張られて横回転し、遠心力が槍に籠もる。

何周か回って十分に力が溜まったところで、ダメ押しと言わんばかりに一段の強く炎を噴出させて、強烈な一撃を振り下ろした。

「グアアアアッ!!」

キータの爪がはじけ飛ぶ。だが同時に、ピシリと俺が纏う『神威』にも亀裂が走った。

——ただだつ、手を休めるな!! 『神威』が生きている間に、爪は全部破壊する！

『ブラックホール・バイト』は見たところ、『第三暗黒魔法（ブラック・ホール）』で周囲の物体を引き寄せた所を爪で切り裂き、分解した対象を喰らう魔法だ。爪さえ壊せば後半の動作を封じられる。

元々、第三階級の基礎魔法なんて一年生であるキータの許容範囲を大きく超えた魔法だ。前半動作の『第三暗黒魔法（ブラック・ホール）』の規模は小さく、それ単体ではそこまで脅威になりえない。

「これで、最後ッ!!」

連続攻撃と締めと言わんばかりに、ぎゅつと力を込めて振り下ろした刃がキータの持つ最後の爪を粉碎する。

「悪い、許せよツキータ!!」

更にオマケに槍を大きく横に薙いで、刃の無い棒状の部分でキータの腹をとらえ。

打撃によって大きく吹き飛ばした。

「げ、あっ……!!」

遠くの樹木に背中を打ち付け、がくりとキータがうなだれると同時に、『神威』もはじけ飛び役目を終える。

——やっぱ短え! まだまだ改良の余地ありまくりだ……!!

できればハルカとの戦闘に持ち越したかったが、贅沢は言えない。

「次はお前だ、ハルカ!!」

改めて、謎の力でふわふわと宙に浮かび昏々と眠っていたハルカの方へ視線を向けた。

が……。

そこに居た筈の、ハルカの姿は無かった。

82話 可愛そうなキータ君

「なっ!？」

この戦いが始まってからずっと、ふわふわと空中に漂い昏々と眠っていたハルカの姿が、消えている。俺は慌てて周囲の気配を探った。そして。

ドクン、と心臓が強くなる。冷や汗がにじみ出て、バクバク脈拍が加速していく。

本能が危険を知らせる、強大なプレッシャーを感じ取り。

俺は恐る恐るそちらへ目をやった。

立っていたのは、薄めを開けて、眠そうに瞼を擦るハルカの姿。ハルカはのんびり、マイペースに。吹き飛ばされたキータの元へ向かっててくてく歩いていった。ただ、それだけなのに。

恐怖が心と体を支配する。戦慄、とはこの事なのだろうか。

項垂れるキータの元へたどり着き、手を差し伸べようとしていたハルカに向けて。

俺は殆ど無意識に、魔法を発動していた。

『強度N、範囲タイプB』ツ『破魔のルクスエクラ』!!』

『フェア・クリスタル』を右手に握り込み左手を二人に向けて。掌から直線上に光の奔流が放たれた。この光に、破壊的な攻撃力は無い。しかし、この光の中では魔法が魔力へと分解され効力を失う。

ほんの少しでも、ハルカの力を削げれば御の字。本命は、気を失っているキータだ。

仮にハルカがこの魔法から逃れても、逃げる事のできないキータには直撃する。

そうすればキータからイーヴィルの魔力を消し去って、敵を一人減らせる上に、その後気付けに成功すれば味方が増え、一気に形勢逆転となるはずだ。

そんな青写真は。

『『ダークネス・デイセンション』』

気だるげにハルカが放った魔法によって、儂く打ち砕かれる。

紫色の魔力が迸り、壁のようにハルカの前に広がって。殺到する光の奔流を堰き止めた。

「馬鹿なッ!」

その光景が、信じられない。

「『原初の魔力』なんだぞ?! ちっぽけな俺なんかの魔導じゃ無い! 世界に選ばれた、真正銘特別な人間の力なのにつ!!」

『破滅の光』が防がれる事なんてあってはならない筈だ。いくら希釈しているとはいえ、それでも相当な工夫を凝らさねば魔石にも込められないようなじやじや馬な魔力なのだ。

物理的に遮光されるならまだしも、『魔法』で防がれる事なんてあり得ないのに。

『フェア・クリスタル』に蓄積された魔力が無くなり、光の奔流が打ち止めになっても。

壁のように展開された紫色の魔力は悠々と漂い、ハルカとキータを包んでいた。

気配は、闇属性の魔力そのもの。『破滅の光』が『原初の魔力』である事を度外視すれば、光属性と闇属性の魔力は相殺し互いに打ち消し合うのは正しい挙動だが……。こと『破滅の光』に関しては、そんな属性相関すらも覆して、闇属性の魔法も無力化する代物だ。それが防がれるなんて……。

——まさか、アレも『原初の魔力』だって言うのか!?

そこまで考えて、俺は漸く思い出した。

そうだ、初めてじや無い。『破滅の光』が防がれたのは!

テラ校長の旧友、『第四の賢者』カイが確かに『破滅の光』を防いでいた!

俺がこうして、ルクシエラさんから『破滅の光』を借りている様に。ハルカもまた、カイから『原初の魔力』を譲渡されていると考えれば、辻褄があう。

「やっぱりあいつの仕業かよッ」

事件の黒幕が見えてきたが、今はそれどころではない。

「可愛そうなキータ君。イジメられちゃたのよ」

ハルカが口を開いた。

キータと比べると、普段と変わらない調子だ。

「いっぱい食べて、いっぱい眠るのよ。たったそれだけの『願い』を、どうして邪魔するのよ」

糾弾するようなきつい視線が俺の胸に突き刺さる。非難めいた表情は、どこか切なげで。苦しんでいるようにも見えた。

「違うっ!! こんな、お前達の願いである筈が無い!!」

「それを決めるのは私たちよ」

ハルカはそう言うと、キータに手をかざした。

「私たちの幸せを邪魔する人は——許さないのよ」

キータの身体が紫色の魔力に包まれ、ふわり、と浮かび上がった。

「はあっ!?!」

風属性の気配は全く感じない。あの紫色の魔力は闇属性である筈なのに、包み込まれたキータは重力を無視して。

「『デッドリー・ドロップ』」

ハルカの指先が俺を差す。

浮遊しているキータが蹲った体勢でこちらめがけて飛来する!

「うわっ!?!」

咄嗟に身を躲すと、キータは強い衝撃音を立てて地面に衝突した。

「お前もキータをイジメてるじゃないか!?!」

あまりに酷い攻撃方法に思わず抗議するが、

「私だけはキータ君をイジメていいのよ」

と真顔で返されてしまった。

「歪んだ愛情だな……ッ!」

言って、走る。

既にキータの身体は再び浮かび上がり俺を狙っている。

攻撃の速度自体はそこまで早くない。回避は可能だが。

紫色の魔力に包まれたキータの身体は隕石か何かのように地面をめぐり取る程の破壊力を秘めていた。もう俺の手札も殆ど残って居ない。ハルカをどうすれば倒せる?!

——……俺の手札が無いなら、相手の手札を使つてやる!!

考えがまとまった俺は、逃げることを辞める。

そして、ハルベルトを横に構えて飛来するキータの方へ自ら突っ込んだ。

「ウオオオ!!」

槍を盾代わりに、キータの身体を正面から受け止める!

甲高い金属音が響く。紫色の魔力は形定まらず漂っているのに、まるで鋼鉄の膜かのような強い抵抗感があった。

——これならいけるッ!

俺は槍を傾け、正面からの重圧をある方向へ逃がす。

それと同時に、魔法を発動した。

『リア・スラスター』ッ!!」

これは、ハルベルトの背後から炎を噴出させて威力を増加させていた魔法だが媒体はハルベルトである必要は無い。何らかの物体の背部から炎を噴出させる魔法だ。

勢いをいなししたキータの身体は、斜め下に向かって進む。そのままではまた地面に埋まり込むがそこで俺の魔法が発動した。

強烈な炎の噴射が、キータの身体をもう一度浮上させる。

「えっ——」

勢いを逃がした先は、ハルカの方角! 本来ならハルカの目の前に落下する所を、落下ベクトルを相殺した形だ。その結果、キータの身体が、まっすぐハルカへ迫る!

83話 『エンデオブ・ダークゼロ』

「ぎゃあっー!」

ハルカの元に、猛スピードでキータが飛来し、ハルカは咄嗟に腕を構えて身体をかばう。その動きに同調するように、紫色の魔力が壁のように広がってハルカを守った。

キータは紫色の魔力に衝突し、魔力が爆発する。

「うわっ!?!」

身体を持って行かれるほどの突風が発生し俺は思わず槍を礎のように地面に突き立てて踏ん張った。

「ああ、キータ君……」

俺の目論見は外れ、ハルカは無傷だ。しかし、強烈な衝撃をその一身に受け止めてしまったキータの身体が、かまいたちに引き裂かれた様にボロボロになっている。

「ひどいのよ……」

涙を零しながら、ハルカは力なく横たわるキータの側に座り。

「こんなにボロボロになって、まるであの頃みたい……」

慰めるようにキータの頭や頬を撫でるハルカ。

「あんな悪夢はもう要らないのよ。私たちはもう、何者にも縛られない」

まさかこんな結果になるとは思ってたので心が痛む。

その時、

大気が震え、遠く彼方から金属が軋むような音が聞こえてきた。

俺もハルカも空を見上げる。

「アイルくんが泣いているのよ……」

ハルカがそう漏らすと、空から黒い魔力がハルカとキータへ、木漏れ日のように差し込む。

「アイルくんが言ってるのよ。望むままの自由をくれるって」

「っ!」

二人から感じられる魔力、そしてプレッシャーがどんどん強く、大きくなっていく。

「う、グ、」

キータが呻き、薄目を開いた。まるで糸引かれる操り人形の様によりと起き上がり、

「キータくん……二人だけの世界を作るのよ」

ハルカは愛おしげにそんなキータの顔を覗き込み、その唇を奪った。

「あ、ウ、」

キータの目が少しずつつ開いていく。

「うん、お姉ちゃん」

理性を無くした獣の様な声ではなく。明確に、キータとして。彼は言葉を返した。

二人は手と手を合わせ、唇を結び、軽やかに身体を動かし始める。

お互いが、お互いと交わり、心を、身体を、全てを共有していく事を確認するように、ステップを踏み、時に離れ、すぐに肌身を寄せ合い、何度も口づけを交わしながら、舞い踊る。

それと共に、二人に向かつて風が——否。引力が発生していく。二人のダンスに呼応して黒い闇が一点に集中して球体を形どり、

ドクン、ドクンと心臓の鼓動の如く脈動しながら、球体は少しずつ大きくなってゆき。

二人の踊りが、ピタリ、と止まった。

同時に、時間まで静止してしまっただかのように。引力も、球体の蠢きも、全てが微動だにしなくなつて。

不気味さと虚しさを感じる静寂が世界を支配したかと思うと、二人の口が開いた。

「『司るは——』」

重なる声に続き、

「『暴食の渴望』」

「『怠惰なる切望』」

二人の声が交互に刻まれ。

「『静かな世界でただ一人（ふたり）』」

何一つ示し合わせる事無く、リズムカルに、

『何もかも喰い尽くし』』

『安らかな、眠りに落ちるの』』

その詠唱が紡がれていった。

『『エンデオブ・ダークゼロ』』

刹那、止まっていた時間が動き出したかのように。

あるいは、力を押さえていた堰が崩壊したかのように。

黒い球体が爆発するように、急激に巨大化していく！

二人の身体も、球体に飲み込まれて消えていった。

「う、ああああ!!」

球体は強烈な引力を伴って、周囲のあらゆるモノを「喰らい尽くす

”ように取り込んでゆく。その力は凄まじく、俺は地面に突き立てた

槍にしがみ付いて耐えるが下半身が浮かび上がる程だ。

「くうっ！」

ハルベルトをもう一本マテリアライズし、交互に地面に突き刺して

身体を支え這うように引力から逃れる。

「ぜえ、ぜえ……」

暫く足掻いて、なんとか自立できる程度まで引力の影響の少ない範

囲へと離れた俺はいきを切らせつつ立ち上がった。

「なんだこれ……」

改めて、二人が放った魔導を確認し呆然と漏らす。

黒い球体は建造物ほどの大きさにまで巨大化している。強烈な引

力は尚も働き続け、直下の地面がごっそり、すり鉢状に抉れ取られて

いた。

先程と比べれば緩やかになったモノの、まだまだ巨大化を続けてい

る。

「これじゃあ最早災害じゃないか……」

イーヴィルのクラス分けで、災害級の被害をもたらすモノをクラス

3とするが。これは誰がどう見ても異論無くクラス3に認定される

だろう。

このまま放っておけば、球体が何処まで巨大化し、何を飲み込むの

か……。

もうダメだ。クラス3のイーヴィルなんて俺の手には余る。お手上げだ。

本能がそう告げていた。

なのに――。

「居るんだろ……？　そこに……！」

固唾を飲み込み、冷や汗を拭って。俺は一步、黒い球体へにじり寄った。それだけでも引力の影響が強くなり、身体が持つて行かれそうになる。

やめろ、下がれ。お前に何ができるんだ。

本能が告げる警鐘が、胸の鼓動と鳴って拍動する。

「約束――したんだ!!」

自分に言い聞かせるように。或いは、自分自身を追い立てる様に。

俺は拳を握りしめた。

キータと、ハルカの友達に俺は誓った。

「お前達に、他の誰も傷つけさせやしない……！」

胸の、赤い羽根型の勲章が揺らめく。

この大魔導の正体は掴めないが、なんとしてでもここで押さえ込まなければ未曾有の被害が想定される。八天導師として、看過はできない。あの球体に、強烈な引力に巻き込まれて無事である根拠なんて無い。

それでも。
「今だけは、貴女に勇気を借りる事を許してください――師匠」

お守りのように、残った切り札、最後の一つである『フェア・クリスタル』を握り込み。

普段なら絶対に認められない、その肩書きを自分自身に課す。

八天導師として、ルクシエラさんの弟子として。

ちっぽけな自分自身を、張りぼての責任感で欺いて。

「ハルカツ!! キータツ!!　――今、そっちに行く」

俺は大きく踏み出した。

84話 良いですか!? 良いですよね!!

「これで大まかなクラスメイトの誘導は済みましたが……」

ボクはボクの半身である巨大な書物を見開き、指でなぞってその文章を読む。

そこには、ボクが経験した事の全てが客観的に書かれている。誰と出会い、何をして、どう感じたのかなどが事細かく。この履歴を確認することで記憶違いや思い違いをせずに情報を整理できる。

「イーヴィルとなつてしまった孤児院の方々はともかく、まだ合流できていない子達が心配です」

突然の異常事態だ。ボク自身ユーちゃんと外出していた先の出来事だったので合流が遅れてしまった。孤立した状態でイーヴィルと接敵してしまつて居ないだろうか。

八天導師であるボクや、元々軍人だったユーちゃんのように一年生ながら上級生にも劣らない戦闘力を持つ魔法使いはそれなりに居るもののあくまで少数派だ。

多くはまだまだ魔導の基礎を学んでいる段階、クラス1程度ならともかくクラス2以上のイーヴィルとの戦闘は危ういだろう。

と、戦場となつているグラウンドを見渡しながら思索しているところへ。

ボクの携帯端末がけたたましくアラームを鳴らす。

「ッ！ 救難信号!?!」

それはクラスメイトからクラスのリーダーへ向けた非常用の通知だった。

「ドルチエさんからですか!」

合流できていないクラスメイトの一人からの信号だ。ボクは慌てて信号の発信方向へと駆けた。



救難信号の発信元はリーダーに表示される。その表示に従ってすすむとたどり着いたのは。

「『永久の森』!」

魔導によって独自の時間が過ぎる管理された魔境。魔力資源が豊富故にイーヴィル以外の魔物や野生動物も住み着く学園の採取地だ。普段ならば危険な存在は魔導が自動的に排除したり、教員が処理してくれるので安全なのだがこの非常事態に何処まで機能しているかは判らない。

不運にもこのタイミングで採取、あるいは遊んで居たのだろう。信号は何かに阻まれる事無くまっすぐ出口であるこちらに向かっている。ボクも永久の森に侵入し、発信源の方へと進んだ。

お互いがお互いに近づく方向に進んでいるだけあって、あつという間にその主と合流する。

「リーダーダー!!」

「ドルチェさんつよくぞご無事で!」

涙混じりに飛びついてくるドルチェさんをボクは抱きとめた。

これでボクのクラスメイトの中で状況を把握できていないのはハルカさんだけだ。ハルカさんは孤児院由来の生徒、おそらくはイーヴィルになつてどこかで暴れているのだろう。

「二年生は後方支援を任されています。ボクが護衛しますので保健室に向かいますよう」

ともかく、まずはドルチェさんを無事に安全圏に送り届けるのが先決だ。

と、彼女の手を引き永久の森を後にしようとした所――

「ま、待ってリーダー!」

ドルチェさんが踏ん張つてボクを引き留める。

「どうかなさいましたか?」

「大変、大変なんです!」

止めどなく溢れる涙を振り切り、強く訴えかけてくる。

「ハルカちゃんとキータくと遊んでたつす、そしたら、二人が突然黒い光に覆われて、イーヴィルになっちゃって、」

やはりハルカさんとキータくんもイーヴィルになっていたのか。

「私、私何も出来なくて……っ、やられちゃいそうになつてた所を、助けて貰つたんつす。リーダーと同じ、羽根の勲章を付けてる人――赤

い八天導師さんに！」

——赤い八天導師!?

「先輩が二人と交戦しているんですかッ!？」

「うん……でも、勝てないって……だから、私、頼まれたっす。誰でもいいから、応援を呼んで欲しいって。それまでは絶対に持ちこたえてみせるからって！」

じとりと冷や汗が浮かぶ。呼吸と脈拍が乱れるのを感じるがドルチェさんに気取られては不安を与えてしまう。

「早くしないと、あの先輩食べられちゃうっす!!」

ボクは平静を装い、そっとドルチェさんの頭を撫でた。

「重要事項の伝達、ご苦労様です。ありがとうございます」

かつて、右も左も判らなかつた頃に先輩がそうしてくれたように、優しく、なんども彼女の頭を撫でてなだめる。

「まずは貴女の避難が優先です」

「でも——」

「大丈夫。先輩はお強い人です。そして——決して約束を破るような事はしませんから」

最大限の信頼を込めて言う。そうだ。先輩が簡単にやられてしまう訳がない。そう、ボク自身にも言い聞かせるように。

ドルチェさんは涙を呑んでこくりと頷いてくれた。

「いきましよう！ ドルチェさんは前を。背中にはボクが守りますから！」

「了解ッす！」

ドルチェさんを先頭に立たせ、後ろ髪を引かれる思いでボクは永久の森を後にした。

◇ ◇ ◇

ドルチェさんを保健室に送り届けた後。ボクは全速力で駆け出した。

向かう先はグラウンドで交戦している上級生の一角、4年B組！

「皆さんに、豊穰なる大地の祝福を——」

4年B組の委員長にして八天導師の一角、地面に届くかと言うほど

に長い三つ編みを下げた少女アーシエの姿を捉える。

『アース・ブレス』!!」

黄金の魔力が拡散し、交戦している学生達に降り注ぐ。直後、彼らの動きが素人目で見ても判る程明確に、一段階レベルアップした。

体力・魔力双方の補充に加えて強力なエンハンス効果、アーシエの襲名魔法だ。

後方から戦況を分析し、適切に援護を行っているアーシエに。

「アーシエツ!!」

ボクは問答無用で詰め寄った。

「ほわあっ?! し、シジアンさん!」

アーシエは突然の来客に目を白黒させて驚いているようだが、今はそんな事気にしている時間はない。

「アリシアさんを借りますッ! 良いですか?! 良いですよね!!」

強引に要件を伝えると、アーシエはあわあわ言いつつも冷静に、

「うえ!? ま、待ってください! アリスさんはこのクラスの生命線ですうっ! 私じゃ手の回らない細やかな回復を担って貰っているのに、居なくなったら戦況が瓦解しかねませんよう!」

と、至極真つ当に訴えて。

「先輩のピンチなんですッ! 申し訳ありませんが問答している暇はありません、これでなんとかしてくださいッ」

と、ボクは端末を一つアーシエの豊満な胸に押しつけて、

「あの一、今名前呼ばれなかったかな? って、部長さん?」

ひよこつと顔を出したアリシアさんの手をぶんどるように握り。

「ふえっ!」

「先輩を助けにいきますっ! 貴女の支援が必要です!!」

と有無を言わずに手を引いて、

——ドルチェさんの護衛に、4年B組との接触、時間は相当かかってしまってる。どうか無事で居てください……先輩!!

はやる気持ちを抑え、永久の森へと駆けた。



「ええ!? 救援が必要なのは判りましたが、困りますよう!!」

取り残された私は困り切ってキョロキョロ周囲を見渡す。

「ええっと、アリスさんが居なくなつた分魔法の出力を上げないと——でもでも、あんまり力を入れすぎると副作用があ！」

『アース・ブレス』は回復も強化も出来る強力なエンハンス魔法なのだが、適正容量がありそれを超えると副作用が発生してしまう。そのため、細かな傷の回復にいちいち使っていると副作用の発現の危険性があるのだ。

文字通り頭を抱えて嘆く私に元へ。

「心配ありません」

「えっ!？」

音も無く現れたのは半裸のバーサーカー——もとい、4年A組のナギさんだ。

——は、半裸のバーサーカー扱いしてご、ごめんなさいい!

私は咄嗟に頭の中に浮かんだ単語を振り払って心の中で謝罪した。

「シジアン殿から要請を受け取りましたこれより4年A組はB組の指揮下に加わります」

と、シジアン先輩から渡された端末を指さした後には敬礼する。どうやらシジアン先輩は端末でナギに要請を駆けた上で位置情報を発信していたようだ。

「ありがたい申し出ですが、そんな突然構わないんですか?」

「ええ。A組は元々欠員が多い上にリーダー不在でして。経験から私が代理で指揮していた状況です。B組の皆さんと合流できた方がこちらもありがたい」

と、A組の状況を伝えてくれる。確かに数えて見ればA組は八天導師とイーヴィル化した生徒、要警護対象であるユウさんの離脱で半数以上欠員が出ている。

「わ、判りました!」

状況を理解した私は首を大きく縦に振りかぶった。

「私は後方で回復支援に徹しますが、想定外の事態が起こって攻め手が必要になった場合は指示してください——2秒で片付けますので」

「は、はい……」

恐ろしくも頼もしい宣言に、ゾクリと悪寒が走るけど。気を取り直してA組と合流する旨をクラスメイトへ発信した。

85話 譲れない、たった一つの意地

俺は……どうなった？

暗い。何も見えない。

浮遊感。

そうだ、感覚はある。

意識もある。

なんだろう。

もやもやする。

心が……悲しい。辛い。

お腹、空いたな——。眠い、な——。

「ああ、そっか」

きつとこれが、ハルカとキータの苦しみだ……。歯を食いしばって自分の頬を叩く。何も見えないし、何も聞こえないけど自我を確かにはつきりと持つ。

この闇の中のどこかに二人が居る筈なんだ。

『大変な事態になったものだ』

声が、いや。言葉が心に直接伝わってきた。

「誰だ!？」

『路傍の雑草にも等しい私の事など今はどうでもよかろう』

謎の意志は俺の言葉に、明確に返答してくる。

『よもやここまでとは想定していなかった』

「想定？ あんた、何を知っているんだ」

『知っている、と言うよりは考察なのだが。それでも良いのならば教えよう』

どうやら敵対的な意志では無い様子だ。俺は静かに、心に響いてくる言葉を待った。

『「クラウド・ダークマター」、これは人間を故意にイーヴル化する魔法であるのだがその大本となったのは少女アリシアを支配していたイーヴルだ』

「アリスの一件が関係あるのか？」

どうやらハルカとキータは、おそらく第四の賢者カイが発動した、クラウンド・ダークマター」という魔法のせいでイーヴィルになってしまったらしい。

『テラはかのイーヴィルを、サキユバス』と名付けた。恋心、色欲、人間の本能からこぼれ落ち淀んで生まれたイーヴィルに相応しい名だろう』

「それとハルカ達と一体なんの関係があるって言うんだ？」

『人々は生きている限り様々な願いを抱く。この世界は、そんな願いを叶える為に生み出された優しく、美しい世界だ。だが、清濁併せ持つのが人間というモノ。イーヴィルとは即ち、『悪しき願い』。人々が持つ願いのうち、秩序を乱すもの、或いは社会という営みの中で抑圧しなければならぬ感情。不特定多数の人間が心の片隅に抱えている心の闇。それが集まり、魔物として顕現した存在である』

イーヴィルであった頃のアリスは言っていた。『私は人々の願い』だと。今聞かされた考察はその言葉を裏付けるに足りるだろう。

『言ってしまうえば、イーヴィルは人の欲望そのものなのだ。だからこそ、かの少年少女達は『クラウンド・ダークマター』という魔法と殊更相性が悪かった。——いや、表現としては、相性が『良かった』と言うべきか』

漸く、心に届く声は核心に迫る。

『イーヴィル『サキユバス』が司っていたのは恋心や色欲という人間の根源的欲求——即ち三大欲求の一つ、『性欲』だ。三大欲求は人間が生きていく限り決して逃れることは出来ず、誰しもが抱く強く、大きな願いだ。ほぼ全ての人間が持っている。故に強大なイーヴィルとなった。ここまで伝えれば、もう判るであろう？』

「ハルカとキータが抱いた願いは眠りと食事——三大欲求、睡眠欲と食欲!」

『正解だ。流石、テラが選んだ魔道士だな』

「じゃあハルカとキータはアリスの時と同じくらい強大なイーヴィルになってしまったっていう事なのか!」

『残念ながら、そこは不正解だ。イーヴィル『サキユバス』との決定

的な違いを、君は見ているだろうか?』

言われて、ハツとする。そうだ、アリスと戦った時とは決定的に違う点があった!

「『原初の魔力』……!』」

『そうだ。『拒絶の闇』が、目を付けてしまった』

「つまり、ハルカとキータはアリスを支配していたイーヴルよりも更に強大だっけ言うのか……」

『正解だ。さて、ここで君に聞きたい。この先に待っているのは、それほど存在だ。どう考えても君の手には余るだろう。瞬く間に、命を失うかもしれない。それでも——進むと言うのかね?』

その問いかけに。俺は。

咄嗟に答える事が出来なかった。

俺は決して強くない。ここまでだましましたまし戦ってきたが、もう万策尽きかけている。

俺に残されているのはたった一つの輝石——『フェアクリスタル』だけだ。

俺なんかには何ができる?

このまま闇の中で漂って、助けが来るのを待った方がよほど賢明だ。

そう、きつと……それが正しい選択、なんだろうな。

「進むよ」

でも、これが俺の意志だ。

『何故?』

「ハルカとキータが、もっとヤバい存在になろうとしてるっていうのなら。俺はそれを少しでも食い止めなきゃいけない。幸い、残ったのは一個だけだけれどルクシエラさんに借りた『破滅の光』もある。勝てなくても、一矢報いる位はできる筈だ」

『一矢報いた結果、君が命を落としてもいいと?』

「そりゃ、死ぬのは怖いよ。でもさ——俺、『八天導師』なんだ」

手探りで胸をまさぐる。そこには確かにあった。羽根状の勲章、八天導師の証が。

「なんでだろうな。ついこの間入ったばかりの組織なんだけどさ。俺、〃八天導師〃である事に恥じない人間でありたいって思う」

俺は弱い。

それなのに八天導師になった。

選んで、貰った。

ティアロ校長が俺を必要だと言ってくれたから。

ルクシエラさんとドライブの助けになれると思ったから。

実力も無いのに、受け入れた。

それは俺のわがままにも等しくて。

「この戦いが始まる直前にさ、下級生が安心した目で俺を見たんだ。

〃八天導師〃だからきつとハルカ達を助けてくれるって。でも、俺にそんな力は無いって伝えたら、やっぱりがっかりして。当然だよな、周りから見たら、関係無いんだ。俺も、ルクシエラさんも、ドライブも、そして他のみんなもみんな同じ〃八天導師〃——強い、魔法使いに見える」

俺が弱い事なんて、助けを求めていたあの子には関係無い。

学園の秩序を守る事が〃八天導師〃の勤めならば。

誰かを助ける事が〃八天導師〃の責務ならば。

逃げる事は、できない。

「ちっぽけで、弱くて、どうしようにもない俺だけど——こんな俺でも、認めてくれた人達が居る。こんな俺でも、期待してくれた子が居る。その気持ちを裏切りたく無い」

それが俺の正直な心。

ちっぽけな石ころの——譲れない、たった一つの意地。

「俺に出来る全てをやる」

その果てに広がる光景が暗闇でも、後悔するのは全部出し切って、やりきってからで良い。ああ、やっぱり俺には無理だった、って後になってから思えば良いんだ。

「挑みもしないで責務から逃げて、自分だけでも助かろうだなんて、そんなの、俺の大好きな人達に顔向けできないからさ」

決意を込めて、ありのままの気持ちを俺は伝えた。

86話 君は十二分に“特別”だと私は思うよ

『それが君の答えか、炎天』

謎の意志は納得した様子だった。

次の瞬間。

真っ暗だった世界に、青い奔流が現れる。それは水属性の魔法のようだった。

青い奔流が闇を上書きし、やがて中心を境に割れていく。

何処かで見かけた、海が割れる絵に近い光景だ。

そして自分の姿が、はつきりと視認できるようになった。

『道は開いた。その先に、彼女たちは居る』

「案内してくれるのか？」

『ああ。だが私如きにできるのはそこまでだ』

『どうして助けてくれるんだ？——あんた“第四の賢者”だろ？』

半分は直感だった。心に直接届く言葉に声色は無い。ティアロ校長をテラと呼んだ事、全体的な口調から推察して問う。

『ふむ。その問いには不正解、と答えよう』

「なんだ、外れか」

予想が外れて、ちよつと恥ずかしい。

『私は賢者などでは無い。言っただろう？ 路傍の雑草だと』

「なんか、親近感湧くな」

俺は自分の事を石ころだと思つて居るから、この謎の意志とは気が合うかも知れない。

『私もだ。故に君にコンタクトを取つた』

俺は開けた道を進む。

「残念だな。もう少し時間があれば仲良くなれそうなのに」

これから向かう先は死地に等しいと念押しされている。きつとこの謎の意志とのやりとりはこれが最後になるだろう。

『ならば。この一件が落ち着いたらまた話そう』

「死ぬかもしれないなんて脅して置いて、それを言うのかよ」

『ああ。何せ私は——君を応援しているからね』

闇の中をぐんぐん進んでいく。

『現在の状況を整理して教えよう。事の発端は、風天アイルを対象として、クラウド・ダークマターが発動された事による。彼の願いは、彼が愛する者達の願いを叶える事だった。しかしイーヴィルは歪んだ悪しき願いの具現化だ。結果として彼は、クラウド・ダークマターと同じ効果を持つ魔法を仲間達にばら撒く事となった』
「なっ、アイルさんがイーヴィル化したのが発端なのか!？」

不穏な気配から、ハルカとキータだけの問題ではないとは薄々思っ
て居たがまさか強い魔道士であるアイルさんまでもが事件の渦中に
巻き込まれていたなんて。

『当然ながら素体となった魔道士の魔力と能力が高ければ高いほどよ
り強大なイーヴィルとなる。テラの弟子であり八天導師の総帥であ
る風天アイルのイーヴィル化はこの先に居る双子の一件とは逆のパ
ターンとなる』

「イーヴィルは人々の願いからこぼれ落ちて生まれる魔物、多くの
人々が持つている願いが核となっている程に強大になる、と言うのが
ハルカ達のパターンだよな。その逆、てーとアイルさん自身の願いは
それ強い訳じゃないのか？」

俺の質問に謎の意志は答えてくれる。

『強い訳ではない、というより限定的だった。特定の孤児院に
由来する者達の願いを叶える。だなんて願い、孤児院の当事者でもな
ければ抱かないからな。が、〃願い〃としての性質は弱くとも、アイ
ル本体の能力の高さ故に〃ソレ単体でも並みのクラス3イーヴィル
を超える力を秘めていた。そこに加えて原初の魔力、〃拒絶の闇〃ま
で付与された結果生まれたイーヴィルⅡアイルは未曾有の脅威と化
している。英雄イクリプスはイーヴィルⅡアイルをクラス3をも遥
かに超えるイレギュラー、クラス4イーヴィルとして認定した』

どうやら外では俺が思っている以上に重大な事態が発生している
らしい。

『現在、イーヴィルⅡアイルは英雄イクリプスが足止めをし、戦況は膠
着状態にある。加えて、世界の中心たる氷天ドライズが対処に向かっ

た。到着すれば戦況は八天導師側に傾くだろう。そうなればイーヴィルⅡアイルはいずれ討伐される。——が、今すぐにはいかない』

ドライズがアイルさんを止めに向かっていると聞いて、安心した。あいつなら大丈夫な筈だ。

『問題はこちらなのだ。イーヴィルⅡアイルは彼にちなんだ子供達をイーヴィルと化したがここまで述べた通り、少女ハルカと少年キータが複合したこのイーヴィルは他の子供達のイーヴィルとは訳が違う。人の根源たる願いを糧にし目覚めつつある。始末の悪いことに悪辣な“拒絶の闇”は彼女たちにまで目を付けてしまった。もしもこのイーヴィルが完全に目覚めた場合その危険度はイーヴィルⅡアイルに勝るとも劣らない存在、即ち同じくクラス4のイーヴィルとなるだろう』

想定外の存在、クラス4という階級の重圧にゴクリ、と思わず生唾を飲み込む。

『想定外たるクラス4イーヴィルとはただ単体で存在するだけで世界そのものを壊し兼ねない脅威だ。それが二体も同時に出現してしまった場合——それだけでこの世界が崩壊する事も考えられる』

「なんだって!？」

つまりハルカとキータがクラス4イーヴィルとして完全に目覚めてしまった時、アイルさんがまだイーヴィルのままだったら世界そのものが崩壊するって事じゃないか!？」

『正解だ。そういった観点から見れば、例え力及ばずとも一秒でも二秒でも彼女たちの覚醒を阻止しようとする君の判断は正解だったな』

「待ってくれよ! それじゃあまるで俺の戦いに世界の運命までかかってるみたいじゃないか!!」

勘弁してくれ!! 俺は主人公じゃ無い。世界を守るとか、世界を救うとか、そんな器じゃ無いんだ。ただ、ハルカとキータを助けたくて、あいつらに罪を背負わせたくなくて、戦うんだ。友達として、八天導師として。

なのに、そんな事を言われたら——

嫌な汗が流れ出す。心臓の音が意識しなくても頭の奥に響いてくる。

『怯えているな。緊張しているな——なのに君は“走る”のだな』

そうだ。俺は走り出していた。さっきまではこの意志から情報を得ながら、闇の中を悠長に歩いていたのだがそれほどまでに切迫した状況であるならば急ぎ足にもなるだろう。

「だってドライズの為に少しでも時間稼ぎが必要なんだろう!」

『良いことを教えてやろう』

「こんな時にまだなんかあんのか!!」

『こういう時 “普通は” 足を止めて怖じ気づくものだぞ。私ならそうする』

更に爆弾情報が放り込まれると思つて居た中、思つたよりもどうでも良い事を言われて思わず俺はちよこつとだけキレた。

「俺だってそうしたいのはやまやまだけどそういう場合じゃねえってあんたが言ったじゃ無いですかねえ!!」

俺がちよこつとだけキレ散らかしているうちに、視線の先に僅かな光が見え始める。

世界の存亡とか、そういうのは主人公（ドライズ）の管轄だ。あいつがアイルさんを可及的速やかになんとかしてくれろと信じて、俺はハル力達を差し違えてでも食い止める!

『では健闘を祈る、炎天ファルマ』

やがて視界が開けていく。

『力は無くとも、希有な才能は無くとも、君は十二分に“特別”だと私は思うよ』

その言葉を最後に謎の意志の気配は感じなくなった。

87話 お前が “拒絶の闇” の正体か!?

闇を抜けた先には、異様な空間が広がっていた。

足下は乾いてひび割れて茶色い大地。

空は絵の具をぐちゃぐちゃに混ぜたように蠢く混沌色。

キータが食べたと思われる、アイルさんお手製アスレチックや木々、木の葉、土塊、折れたハルベルトがふわふわと所在なく漂って。淀んだ空からはぽつり、ぽつりと木が根こそぎ一本現れては漂う。きつと今なお外の黒い球体が永久の森を喰らいつつ膨張しているのだろう。

表現するなら——飢えた世界だった。

「アリスの『ナイトメア・ダークマインド』に似ている……」

夢を現実にする空間を展開する魔法『ナイトメア・ダークマインド』に取り込まれた時の事を思い出していた。今のハルカとキータはアリスにとりついていていたイーヴィルに近い存在であると謎の意志が言っていたのでこの空間——『エンデオブ・ダークゼロ』も似たような形式の魔法になっているのだろう。

空間の中心に、巨大な白い球体があった。

「ハルカツ！キータツ!!」

球体の中では二人が目を閉じ眠ったまま、向かい合わせに蹲って漂っている。

その白い球体を、撫でるように、舐めるように、黒紫色の魔力が覆っていた。

間違い無い。あの魔力は“破滅の光”を阻んだ、原初の魔力——謎の意志が言っていた “拒絶の闇”！

あれをどうにかしない事には、二人に干渉出来ない。

ハルベルトをマテリアライズする。そして、思った。

——謎の意志さん!! 応援してるとか健闘を祈るとか言うならまず “拒絶の闇” の特性教えてくれませんかね!!? うっかりっすか!!?

あれが原初の魔力であるならば、“破滅の光”と同様に魔力そのものになんらかの特性がある筈だ。

が、情報が無い以上そちらの件は考えるだけ無駄だ。今優先するべき事はハルカとキータの融合を少しでも阻止する事……。

——……えっ、どうやって？

チーンと、高い鐘の音が頭の中に響いた気がした。

八天導師として、ドライズやルクシエラさんに恥じない魔道士である為にとけななしの勇氣と張りぼての自信を持ってここまで来たが。

今、この場で、自分に何ができるのか判らなかつた。

「と、とりあえず『フレアレッド・クラスター』撃つてみるか……」

『フレアレッド・クラスター』は五芒星状の炎に対象を閉じ込め、対象の魔力を薪にする。事で燃え続ける大魔法だ。この魔法は炎による攻撃よりも、相手の魔力を枯らせる。事を目的としている。炎を消す事ができない限り、永続的に相手の魔力を奪い続ける、自分で作っておいてなんだが結構掠め手でないやらしい魔法である。

ただ、発動に必要な魔力量がかなり多い。俺自身の魔力では全然足りない。

アリスの時はアリスの魔力を干涉マテリアライズで大量に物質化して、それを燃料にして漸く発動出来た。

「まずは燃料を集めない」と

幸い、ここが『ナイトメア・ダークマインド』と同じような形式の魔法空間であるなら、空間自体が魔力の塊そのもの。適当に干涉マテリアライズするだけで良いはずだ。

ひび割れた地面に手を付き、集中する。

『マテリアラ——』

その瞬間だつた。

なんでだろ。俺、結構勘がいいのかもしれない。咄嗟の判断で横に転がって受け身を取る。ドスリ、と鈍い音と共に暗紫色の槍のようなモノがさつきまで俺が居た位置に突き立っていた。

——明確な攻撃ッ!! ハルカ達か!?

すぐさま体勢を立て直し、視線を上げる。

巨大な光る球体の中で、蹲るハルカ達。それを覆い包む暗紫色の魔力。

その魔力の一部が尾を引いて居た。線となった魔力の先にあつたのは。

暗紫色の人影

魔力が人の形を取っている。片腕がこちらに差し向けられていた。この人影が敵の正体である事は間違い無い。

「何者だツ!!」

問う。槍を構え、相手の拳動を観察する事へ神経を注ぐ。

体格は小さい。暗紫色一色の身体なので細部のパーツはよく判別がつかない。

『何者？ んー名前答えればいい？』

先程の意志の様に、声では無い、音では無い、心に直接言葉が伝わってくる。

『トーラちゃんはトーラって言うんだよ！ よろしくね』

暗紫色の人影は両腕を万歳のようにあげてそう名乗った。

——誰だよ!!? こっちは「第四の賢者」の出現だけでも手えいっばいなのに!!

新たな敵対存在に冷や汗が滲んで奥歯を噛みしめる。

けれど、この極限状態の中、頭の中で思考が高速回転する。

状況から考えて、暗紫色の魔力が原初の魔力の「拒絶の闇」である事はほぼ間違い無い。その魔力が人の形を取っていると考えるならば、

「お前が「拒絶の闇」の正体か!？」

謎の意志は「拒絶の闇」を「悪辣」と表現していた筈だ。それは即ち「拒絶の闇」には意志がある可能性を示す。

『せいかりい。あ、あの人の口癖移っちゃった。てへ☆』

無邪気であざとい口調だ。まるで、悪意の一つも感じ取れないほどに。

「ハルカとキータを解放しろツ!!」

白い球体の中で眠るハルカ達、暗紫色の魔力はその球体に覆い被さって拘束、閉じ込めているように見える。それはきつとこいつの意志だ。

『やーだよ。君ってば、二人の願いの邪魔をしに来たんでしょ？ 悪い人だー』

悪い人だ、と言われて眉をしかめた。

「は？ 俺の何が悪いって言うんだよ」

『折角順調にみんなの願いが叶おうとしてるんだよー？ 邪魔なんてしちや可愛そう』

トーラは。『拒絶の闇』は。二人がイーヴイルとして融合する事を肯定している。

「ふぎけるなっイーヴイルは歪んだ願いだ!! あつてはならない願いだっ!!」

『えーそんな事ないよー。キミ達がイーヴイルって呼んでる存在だって人間の心の欠片。尊重するべきだとトーラちゃんは思いまーす。なんでこの子達が大きな願いの塊になろうとしてるか知ってる?』

俺は謎の意志に教えられた考察をそのまま答える。

「ハルカとキータが抱えた願いが、食欲と睡眠欲——誰しもが持つ願いだからだろ」

『せいかりい。つまり、この子達の願いが叶うって事はそれを望んだ人達——飢えたり、眠れなかったりした人たちの願いが叶うって事でーす』

「その結果がああ災害みたいな魔法なんだぞ!? 人を、自然を、多くのモノを飲み込み、傷つけて、それで叶う願いが良いものな訳あるか!!」
そんな俺の訴えを。『拒絶の闇』は不思議そうに伝えてきた。

『えーキミ何言ってるの？ ちよー矛盾してるー』

「はあ?」

『キミ、何も食べてないの？ 何も傷つけてないの?』

トーラと名乗る『拒絶の闇』は語り始めた。

88話 ちがいます。トーラちゃんが正しいのでーす

『人が生きるって言うことは、何かを犠牲にするって事でーす』

言葉が詰まった。

『何かを食べたら、食べられたモノは死んじゃいます。お家を建てれば、そこにあつた木や石、土は壊されまーす』

トーラと名乗った“拒絶の闇”の言葉が胸に突き刺さる。誰もが無意識に行ってきた事、その行為の真理をトーラは述べる。

『この子達が、キミ達の呼ぶイーヴィルという存在として目覚めて、その願いを叶えたとして。その時多くのモノを犠牲にするとして。それって普通に生きているのと何が違うのかなー？』

確かに命が命である以上、常に他の何かを犠牲にして成り立っている。言われるまで気付かなかった。意識しなかった。

『トーラちゃんは人の営みを見るのが大好きでーす。人間が生きて殺して、死んで生まれて、作って壊して。トーラちゃん達はそんな人の営みを守る為に存在してまーす』

『イーヴィルは人を襲う！ 世界を傷つける！ そんな存在を育む事の何処が“人の営みを守る”っていうんだ!』

『そう、トーラちゃんが気にしているのはまさしくそこなのでーす。キミの悪い所もそこでーす』

「はっ。」

予想だにしていなかった点を注意され、思わず言葉がこぼれる。そんな俺に、トーラは語り続けた。

『現代（いま）を生きる人達って、ちよこおつと価値観が歪んでるよー。言つた筈でーす。生きることとは何かを犠牲にする事。何かを殺すこと、傷つけること、それは決して“悪い”事ではない筈でーす。なのに現代（いま）を生きる人達は殺すこと、傷つけることを忌避してしまつていまーす』

何を、言っているんだろうか。この存在は。

『自分がやりたい事の為に他人を襲うことは何も悪い事ではありませーん。生きる事の延長線上でーす。でも、そんな『悪く無い行為』を現代の人たちが間違っつて『悪い行為』だと思っつてしまっているから、叶えられなかつた願いが吹きだまりになつて淀んでしまっているのでーす。それが、キミ達の言う『イーヴィル』でーす』

違う。

『トーラちゃんが現役だった時代はもつとシンプルでしたー。食べ物がないから沢山持つてる人を襲う。勝つた人はお腹いっぱい幸せー。死んじゃつた人は、新しい命になつてやりなおしー。やりなおした先で、今度は勝つのか負けるのか、精一杯生きていきまーす。そうやって、人の営みは巡つていくものなのでーす』

そんなの、大昔の話だ。漸く社会が営まれ、人が漸く人として生きるようになり始めた頃の話だ。

「ズレてるのは……歪んでるのは、アンタだ……」

『ちがいまーす。トーラちゃんが正しいのでーす。欲望には素直になつていいのでーす。殺したいなら殺しちやえば良いのでーす。奪いたいなら奪えば良いのでーす。犯したいなら犯せばいいのでーす』

この意志とは、価値観に絶望的なまでの隔たりがある。——わかり合えそうもない。

『ここは人の願いを叶える世界でーす。とつても素敵だと思いまーす。でもそんな世界で本当なら『叶えられるべき願い』であるものが『悪しき願い』だなんて呼ばれて、否定されて、消されてしまう事が——とおつても残念でーす。だからトーラちゃんは、『叶えられるべき願い』さん達の事を『悪しき願い』とは呼びませーん』

一体この意志は。トーラと名乗る『拒絶の闇』は。ここまでの話をどんな顔をして話していたのだろうか。狂つてる。しかし……多分、きつと、このヒトは笑顔で語っているのだろうか……。

『殺し合う事は全然良いことですよー？ 弱肉強食は世界のルールでーす。だから『叶えられるべき願い』が戦い、負けちやつて消えちやう事自体は仕方ないでーす。でも、ずーつと負けてばっかりで、

消されてばかりで、かわいそうじゃないですかー。だからトーラちゃんは「叶えられるべき願い」さん達の方に力を貸してあげようかなーっと思っただけです」

トーラの言っている事は、主張は。その根源にあるモノは理解出来た。

人が生きるという事は何かを殺し、傷つける事。それは悪い事では無い。だからこそ、俺たちが「悪しき願い」と呼んでいる魔物達……人が抑圧してきた欲望のような願いにも、叶う権利があると。

『トーラちゃん的には、キミ達が「悪しき願い」って呼んでる子達も人間と対等な存在なのでーす。だって、人間の心の欠片なんですよー？ 否定してばかりは可愛そうでーす』

そんなの、間違ってる。

イーヴィルは人を傷つける。俺が願ってしまった「悪しき願い」は、無関係だったアリスを巻き込んだ。そしてアリスの心まで歪めてしまい、イーヴィルとしての魔力を消し去って尚偽りの恋心を刻み込んでしまった。

人が生きる為に何かを犠牲にする事。それは仕方の無いことだろう。悪い事などではないのだろう。だが、だからといって「人を傷つける行為全て」を容認するのは話が飛躍しすぎている。

俺は——イーヴィルという存在を認めない。

「今クラス4イーヴィルが二体現れたらそれだけで世界が壊れるかもしれないんだぞー！ それなのにイーヴィルを育む事の何処が「人の営みを守る」だ!？」

『トーラちゃん言いませんでしたかー？ 人の営みとは生きて殺して、生まれて死んでを人同士で繰り返していく事です。人が人を殺す事は、トーラちゃんが大好きな人の営みの一部です。もしおつきな「叶えられるべき願い」さん達が二つ完成して世界が壊れても。そのせいで多くの人が死んだとしても、それは人同士の営み、全然OKだと思いまーす』

やっぱりだめだ。この人の価値観は根本的におかしい。

俺はハルベルトをトーラに向けた。

『あらら、長話はお終いですかー？ 折角イイ感じに時間稼ぎが出来ていたのにー』

どうやら今までつらつらトーラの価値観を説明していたのは、ハルカ達がイーヴィルとして融合するための時間稼ぎだったようだ。まんまとやられた。

『と、言っても——トーラちゃん、歴戦の勇者なのでー判っちゃいます』

全身暗紫色に塗りつぶされていて、表情なんて判らない。かろうじて、身振りだけが判断できるが……きつと今のトーラは可愛そうなモノを見るような目をしていると思う。

『キミは弱い。ちっぽけでーす。メインの魔力は風の魔法使いさんに送ってしまったんですが、キミ程度ならこっちのトーラちゃんでも十分でーす』

暗紫色の魔力が棒——いや、槍の形となって幾つも作られる。

『やっぱり意見が対立しちゃった時は、ぱわープレイが一番でーす』

槍の雨が、俺に差し向けられ降り注いだ。

「うわああああ!!!」

走り回り、マテリアライズで壁を作り、槍の雨を防ぐ。が、防ぎきれない。

『弱肉強食。トーラちゃんが現役だった時代(ころ)は、これが普通でしたー。現代(いま)の子達は争わなすぎでーす』

なんとか力を神経を集中させて致命傷だけは回避する。四肢、肩、脇が暗紫色の魔力に削れていく。

『人が死ぬ事は決して悪い事じゃないんですよー？ 寧ろ適度に死んでくれないと生まれてばかりじゃあ人が増えすぎて資源が無くなっちゃいます。トーラちゃん、人間の営みが大好きなのでそれで人類絶滅ーだなんて嫌でーす』

「『二連朱槍』ッ!」

暗紫色の槍の雨を掻い潜って、俺はハルベルトを投げる。しかし暗紫色の魔力が薄い板のようになって俺の魔法を阻んだ。

『大丈夫、トーラちゃん達はずっと世界を見守ってきています。今

の世界には人間の営みを邪魔する連中がいませーん。生きて、死んでを繰り返して、人生を楽しんでくださーい。次の人生では、幸せを勝ち取れる方の人になれるといいですねー』

暗紫色の魔力が、大きな鎌の形を取る。

全てを断絶する闇で構成された大鎌は俺の首を狙って一閃された。

89話 この状況で匂いどうこうが判るのおかしいんじゃないかなあつ!!?

「部長さんっ走りながらだけど聞いていいかな!？」

永久の森を目指すボクの背中へ、アリシアさんの声が飛んで来る。「構いません、どうぞ」

「ハル君に救援が必要なのは判ったんだけど、どうして私なのかな!? 先生とかに頼った方が良いんじゃないの!？」

永久の森まではまだそれなりに距離がある。戦いで冷静さを欠いてはいけない。アリシアさんの問いかけに答えれば、少し落ち着けるかもしれない。

「まず現在の学園全体の戦況ですが、膠着状態にあります」

孤児院由来の生徒のイーヴィル化と、不自然なイーヴィルの大量発生、この対処に学園の生徒と教員全員が動員されているが現状では戦力が拮抗している。

「孤児院の子供がイーヴィル化したイーヴィルが強力であり教員か八天導師を交えなければ対応できない事、クラスは低くとも無制限に発生しているイーヴィルも数が多すぎて討伐速度と拮抗している事などが挙げられます」

「う、うんそれはなんとなく判ってる」

「戦力的にはカツカツなのです。特にイーヴィル化した生徒の制圧に高い戦力が必要になります」

討伐と制圧は違う。ただ倒すだけならばもつと簡単な話なのだが、イーヴィル化した生徒をそのまま殺す事などできない。テラ様の方針もそうだ。

「イーヴィル化した生徒一人に教員か八天導師一人をあてがって更に4年生以上の生徒達の戦闘支援を含めてギリギリ採算がとれている状態です。先輩が交戦しているのはハルカさんとキータさん二人、計算上は八天導師であるボクが救援に向かう事でバランスがとれ、悪い言い方をすればそれ以上の戦力は回せない状態です」

「つまり追加の救援は一般生徒の私じゃないとダメなんだね!!」
アリシアさんが嬉しそうに言う。先輩の力になれる事が喜ばしいのだろう。

が、ボクは本当の事を彼女に伝える。

「と、言うのは全て建前ですがッ!!」

「えええええ!!」

そう、今述べたのは全部建前だ。

「もっともらしい理屈を並べて、貴女を引き抜いてきました!」

「ど、どどど、どうして??」

「貴女自身は自覚していませんが先輩が新しく開発した貴女の魔法『ドリーム・デイメンション』はとても強力な魔法です」

「そ、そうかな? 流石に先生や八天導師の人たちが使う魔法と比べれば劣ると思うんだけど……」

疑問符を浮かべているアリシアさんに提示する。

「ご自分で言っただけじゃありませんか? 『ドリーム・デイメンション』を作ったのが誰なのか」

「あつ!! “八天導師”のハル君だ!!」

「先輩はまだ自覚していませんが、マジッククラフトに関しては一般のプロフェッショナルと同等の技術を持っています! 技術というのは記憶では無く指先が覚えているものなので! 加えて、先輩を取り巻く環境——即ち。マジッククラフトの原料たる魔力・魔法陣・魔石等素材も八天導師が絡み一流を超えるモノが揃えられています! なんならボクが厳選しています!」

つまり、一般プロの先輩の技術で八天導師由来の素材を組み合わせて作られるマジックアイテム——先輩が作るモノは“八天導師”の名を背負うに恥じない性能を持っている。

『ドリーム・デイメンション』には『ナイトメア・ダークマインド』程の権能はありません。比べれば大きく弱体化しています。が、それは『ナイトメア・ダークマインド』が規格外だっただけです」

「って言っても現実に出来る夢ってそんなに多く無いよ? せいぜい『ミラーズ・ミラージュ』の鏡像に実態を持たせるとか第三階級の基礎

魔法の行程を無視するくらいしか……。逆に現実を夢にして無かった事にする方の効果はホントにちよこつとの事しかできないし」

と、『ドリーム・デイメンション』の権能を自身で確認するアリシアさんの言葉を訂正した。

「いいえ、その認識が違います」

「え、そうなの？」

「どちらの効果を使う場合でも現実と夢のギャップがある程、必要な魔力が多くなる他適応可能な最大効果範囲は大幅に縮小しています」

例えば『ナイトメア・ダークマインド』ではアリシアさんが所持していない属性の第四階級の基礎魔法を発動できたりもしたが、『ドリーム・デイメンション』ではそこまではできない。

「そんな状態で尚、高性能で引き出せる効果があります」

「わかんないよおく！ 部長さん、もつとヒント欲しいな！」

「現実とギャップが少ない魔法ならば、『ナイトメア・ダークマインド』の様に貴女自身の魔力や才能を遥かに凌駕する魔法が発動できるということですよ」

「現実とのギャップが少ない魔法？ でも私、回復魔道士（ヒーラー）だから使える魔法なんて回復——えっ？ ええっ!!? そういう事なのかな!?!」

漸く、アリシアさんは理解した様だ。

「理解したみたいですね。そうです『ドリーム・デイメンション』は『回復魔法』に関してだけは『ナイトメア・ダークマインド』と同等のポテンシャルをもつて効果を発動できるのです!!」

「ちよ、待って、それ凄すぎない!? だって『ナイトメア・ダークマインド』って夢だからって言ってるわいかし何でも出来る魔法だったんだよ!?! 回復魔法限定とはいえそれがそのまま『ドリーム・デイメンション』にも適応できるなら——」

それが先輩が模倣し、作り出した大魔導『ドリーム・デイメンション』の真価。

「はい。現在貴女も、周囲の誰も認知してませんが。今の貴女は間違いない、八天導師よりも、教員よりも遥かに抜きん出た学園で、最

強の回復魔道士”になっっていますッ!!」

「うそお!!?」

恐らく後方ではアリシアさんが目を点にしているだろう。

いきなり自分が最強クラスの能力を持っているだなんて宣言されれば無理も無いか。

「先輩は自身の事を過小評価していますが、本当はお強い方です。あまり良くない事を掘り返してしまつて申し訳ありませんが、実際に戦つた貴女にも判りますよね?」

「う、うん」

「その先輩が、救援を求めています! 恐らく歴戦の直感が働いたのでしよう。ハルカさんとキータさんは想定外の強さを持ったイーヴイルになつてる可能性が高いです!」

「だから私の回復魔法が必要なんだね?」

「はいッ! 正直ボク自身も計算と勘が半分半分くらいです! 学園の貴重な生命線を独断で先輩の為だけに引き抜いて来た事はほんのちよこつとだけ反省しています、が用心に超した事は無いと思うのです」

先輩が簡単にやられる訳がないとは思いつつも、先輩はいつも無茶をして戦う人だから心配にもなる。

「それから、いくら何でもアリに近い回復魔法が可能とは言え流石に死人の蘇生は出来ないとされますから、急ぎましょう!」

話しているウチに永久の森に到着したが、その様子は明らかに先程までと変わっていた。

ゴオウと低いうなり声の様な音が深部から聞こえてきて、風が常に永久の森の奥へとながれていつている。

「何これ、奥で何かが起こつてるっ部長さん!!」
「っ」

尋常じゃ無い気配を察したボクもアリシアさんも息を呑んだ。

「走るのはやめて、警戒しつつ早足で歩きましょう」

「了解したかな!」

二人で警戒しつつ、森の奥へと進んでゆく。

進めば進む程に、森の奥へ向かう風が強くなっているのを感じた。
そして――

「な、何これえッ!!?」

ボク達の視界に入ったのは、視界を覆い尽くす程に強大な暗黒の球体――『第三暗黒魔法（ブラックホール）』に似た何かだった。

風は球体に向かって吹いている。漸く判った。これは風では無く
“引力”だ。

周囲の木々、土、あらゆるモノをこの球体が吸い込んでいる。

「先輩ッ!!」

ボクは思わず飛び出した、が。

「ちよ、部長さんストオップ!!」

アリシアさんに背中の中の服を掴まれて止められた。

「明らかにヤバいのにいきなり飛び込むのは不味くないかな!? ハル君があの中に居る保証も無いよね!? どこかに逃げてる可能性も――」

「先輩はあの中にいますッ!!」

ボクはアリシアさんの方を向いてその目を見つめ力強く断言する。

「なんでそこまで断言できるの?」

「あの中から先輩の匂いがあるからですッ!!」

「この状況で匂いどうこうが判るのおかしいんじゃないかなあッ!!?」

「そんな事無いと思います! ボクは先輩が0.1秒でも通りがかった場所なら先輩の匂いを感じ取る自信がありますから!」

「部長さん、今は緊急事態だからスルーしてあげるけどかなりヤバイ事言ってるからね!!?」

ボクは一旦深呼吸して、改めて巨大な黒い球体を見る。

「アリシアさん。ボクは八天導師の一翼 “黒天” です。そして貴女は、まだ戸惑っているかもしれませんがこの学園で “最強の回復魔道士” です」

「う、うん」

「不測の事態もある程度は対処出来る筈です! ここは臆さずに進みましょう、これだけの規模で問題が発生しているのは大きな計算外、

「先輩の安否が心配です!!」

流石にハルカさんとキータくんのイーヴルがここまで強大だというのは考えて無かった。何か良くない事が起こっている気がする。

「……判った。腹は括ったからね。一緒にハル君を助けよう、部長さん」

アリシアさんは覚悟を決めた様子だ。ボクを信頼してくれている様だし、ボクと同じように先輩が心配な気持ちもあるだろう。

ボク達は意を決して、黒い球体の中へと飛び込んだ。

90話 『最弱の八天導師』

——俺は、生きているのか？

意識が朦朧としている。それを微かにつなぎ止めるのは左肩に走る激痛。

ぼやける視界の隅に、俺の『左腕』だったモノが見えた。

『ふーん。結構本気の攻撃だったのですがー。咄嗟に急所は躲しましたかー』

ははっ、情けないな……。何が一矢くらい報いることができる、だよ。

荒れた、ひび割れた大地に、無力に転がる石ころ。それが今の俺だ……。

『前言撤回しまーす。キミ結構強い、というか場数を踏んでるみたいでーす。魔力の量は少ないですけどー経験が豊富なんですわねー。最初の奇襲を避けられた事にも納得しましたー』

トーラの言葉が胸に響く……。場数？ 別に俺、そんなゴリゴリ戦ってる訳でもないんだけどな……。

『けど、即死は免れたただけでもう瀕死ですわねー』

そうだ。俺は結局何も出来なかった。ハルカやキータの為に、ドライズやルクシエラさんの為に、戦うって。出来る全てをやるって言った筈なのに……。

『トーラちゃんは人間の全てが大好きでーす。人間が喜ぶのも、苦しむのも、どっちもみてたのしーです。だから今ちよこつとだけ悩んでまーす』

ケタケタ笑い声のようなモノが心を揺さぶる。

『どうせほつといっても死ぬと思うのでー。そのまま弱っていくのを見るのめたのしーと思いまーす。でもでも、可愛そうなのでひと思いに殺してあげるのもアリだと思いまーす。どっちでも楽しめてしまうので、悩んじゃいまーす』

人が喜ぶのも、苦しむのも見てて楽しい、か。

この人の言う『大好き』はなんて歪んでいるんだろう。でも、判る。

伝わって来る言葉は嘘偽りの無い本心だ。そしてこの人にはきつと『悪意』は一切無い……。

『結論が出ましたー。トーラちゃんはやさしい女の子なのでーキミ自身の気持ちを尊重してあげたいと思いまーす』

暗紫色の魔力が形どる人影が、片腕を切り飛ばされ倒れ伏す俺へと歩み寄る。

そして両膝を突いて俺の前に座り、俺の顔を持ち上げて。

暗紫色一色でパーツ一つ判らない顔を俺に向かい合わせて、心に語りかける。

『キミはどーしたいですかー？ さっくり死んで、次の人生を始めますかー？ それとも、無駄に足掻いてみますかー？』

俺、このまま死ぬのか。何も出来ず、何も為せず。

痛い。

苦しい。

辛い。

もう、目を閉じたい。

全部投げ出して、楽になりたい……。

それが俺の、心――

「……………ろ……………も」

『うーん？ 聞こえないですーす。もつとはつきり喋ってくださいーい。』

あ、それとももうそんな力も残って無いですかー？ それじゃあ見守りコースですー』

トーラは抱え上げた俺の顔を地面に戻して、離れていく。

『えつとーこの子達はー。あれあれー？ 成長が思ってたよりずっと遅いですねー。何か余計なモノでも混入しているのでしょーか？』

トーラはハルカとキータが眠る白い球体を見上げて、そう独り言を零した。

その背中に。

俺は残された右腕で拾い上げたハルベルトを、突き立てた。

空を切るような感触。殆ど抵抗がなかった。

判る。

“一切効いていない”

だとしてもツ!!

「石ころにも……譲れない意地は……あるんだ……!」

『……』

ハルベルトに身体を貫かれたまま、くるりとトーラが俺の方を向く。

そして――

多分、笑っていた。

『すごい、すごい! へえ、こんじょーありますねキミー!』

俺の心は悲鳴を上げていた。

なんで立ち上がるんだ?

なんで戦うんだ?

勝てるような相手ではない、そう直感しているのに。

俺なんかじゃ何もできないって判りきってるのに。

もう耐えられないくらい辛いのに、苦しいのに。

それでもなんで、戦うんだ……?

――決まってる。

全身を槍で刻まれ、左腕を切り飛ばされ、ズタボロになった身体でも。

俺の胸には、まだ、確かに。

赤い羽根の勲章が輝いていた。

「俺は、 “八天導師” ……前言撤回なんてしないでいいさ。間違い無い。俺は “最弱の八天導師” だ」

決意なんてもう済ませていた。

闇の中で漂っていた時、謎の意志に見せた、その心こそが俺の本当の意志。

目先の痛みも、苦しみも、全部、全部――

俺の大好きな人たちの笑顔を思い浮かべれば、忘れられるツ!!

「アンタは今の社会に、俺たちの世界に、相応しくない」

『それは現代（いま）の子達が間違えてるんですってばー』

「原初の魔力——『拒絶の闇』 トーラよ！」

ハルベルトを引き戻す。大地を踏みしめ、倒すべき敵を見据える。「魔導を管理する八天導師が一翼として。炎天ファルマが、お前を討伐対象として認定するッ!!」

『見る限り限界じゃないですかー。何処にそんな啖呵を切る元気が残ってるんですかー?』

今の俺を動かしているのは、ちっぽけなプライドと張りぼての義務感だけだ。

俺はまだ、生きています。

あの言葉を、嘘にはしたくない。

「俺に出来る全てをやるんだッ!!」

楽だからって諦めて死ぬなんて、そんなの、みんなに、顔向け出来ない。

『トーラちゃん、生きてはいないんですけど長い時間を見てきたのでー。こーんな考え方がもあるのも知ってまーす。』しっこい男は嫌われる。だそーでーす』

突然、暗紫色の人影に、色が付いていく。

アメジストのような透き通った紫色の髪が靡く。肩まで伸びた二つ結びで天然パーマ。一見するとキャミソールのように簡素なひらひらしてお腹の部分が開けたワンピース状の上着とスパッツなのかショートパンツなのかよくわからないがかなりシンプルな服装だ。人影の時点で小柄に見えたが、色が付き姿形がはつきりする事で本当に、子供のように小柄である事が判った。

『それも数ある人間の考え方なのでひてーはしませーん。でもでも、トーラちゃんは逆でーす』

表情は俺が想像していたとおり。

何の迷いも、疑問も、憂いも無い。

まさしく、屈託の無い、

狂気的な満面の笑顔だった。

『苦しみながらしっこく抗うキミの姿はーとおっても人間的でかわいーとおもいまーす』

暗紫色の魔力が、俺の左腕を斬り飛ばした大鎌の形を取る。

『トーラちゃん、キミの事好きです。ファルマくん、名前覚えましたがよーだからファルマ君も、トーラちゃんの事、覚えてくれると嬉しーです』

「あんたの “好き” は歪んでるから俺は嬉しくないなッ」

俺はきっぱりそう断って、ハルベルトを真上に投げた。

そして開いた右腕で懐から最後の切り札を取り出し、握りつぶす。

『強度N範囲タイプE』

投げたハルベルトを右腕で受け止めると同時に、その魔法を発動した。

『破魔のルクスエクラ』ツ!!』

全身を暖かい光が覆う。範囲タイプEは自分自身と装備、全身の表面への展開だ。

『あ、それゲーテちゃんの “破滅の光” ですねー。まだ持っていましたかー。トーラちゃん、天敵です』

天敵と言いつつもトーラの笑顔は崩れない。

『でも、そーんなうっすいうっすい量じゃトーラちゃんには全然効きませんよー』

トーラが大鎌を振り上げた。俺も、片腕でハルベルトを振るう。

けたたましい金属音が飢えた世界に響き渡った。

91話 アンタの愛し方は、歪が過ぎるよツ!!

何度も何度も、鋭い金属音が走る。

俺はハルベルトを乱暴に振り回している。ただ、それだけだった。片腕ではまともに扱う事もできない。トーラは笑顔で、楽しそうに俺の攻撃を大鎌で弾き返す。

『ほらほら、がんばれがんばれー。トーラちゃん、ファルマくんの事応援しまーす』

弄ばれているのか。それとも、彼女なりの歪んだ善意か。

トーラは攻撃をして来ない。

『かっこいいーです。自分より強い存在に立ち向かう姿、現役だった頃のトーラちゃん達を思い出しちゃいまーす』

動く度に、左肩の切断面から血がこぼれ落ちる。

ああ、そうか。

トーラは言った。人の全てが大好きだと。人が喜ぶのも苦しむのも楽しいと。

トーラが俺を好きだと言ったのも、嘘偽りの無い本心ならば。

トーラは——勝てないと判っていて足掻く俺を見て、楽しんでいる。

苦しむ俺の姿を、それでも抗う俺の姿を、純粹に、楽しんでいるんだ。

このまま闇雲に暴れていても、どうせ力尽きて死ぬ。

それが判っているから、もう攻撃する必要は無い。あとはただ、目の前に居る俺を。子供が、新しいおもちゃで飽きるまで遊ぶみたいに、楽しんでいるんだ。

きつとこれが、この人なりの“人間の愛し方”——。

「アンタ、時々“トーラちゃん達”って言うよな。仲間とか……友達
が居たのか?」

『居ましたよー。とおっても仲が良かった子達が、三にーん』

ハルベルトの刃を押しつけて、トーラは大鎌の柄で刃を防ぎ、競り合って。

「その誰か一人にでも “性悪” だって言われなかつたかッ!？」

トーラの顔に迫り、投げかけた言葉に。

彼女は。

相変わず、どこまでも屈託の無い笑顔で答えた。

『はい。言い方は色々ですがー三人みんなに言われましたー。面白いですよー』

それを聞いて、少し安心した。過去の人間だから価値観がおかしいというだけではない。

やっぱり根本的に、この人自体が狂っているんだ。

『トーラちゃん時々悪者扱いされる事がありまーす。人間の営みを守っているのに、ちよつとかなしーでーす。でもそうやって憎んだりとか恨んだりとか、どろどろした心が見えるのも人間の面白い所だと思うので、それはそれでたのしーでーす』

「アンタの愛し方は、歪が過ぎるよッ!!」

『あははーさつきも似たような事言っちゃましたねー。実は色んな人達にもよく言われましたーファルマくん凄いでーすトーラちゃんのことよく判ってくれてまーす』

俺じゃ無くて、判る事だろうよ。俺は特別でも、なんでも無いんだから。

ハルベルトが、重く感じる。

虚勢と威勢だけで支えられていた身体が、グラつく。

『おや、そろそろおしまいですかー? よーくがんばりましたねー!』

「俺は……まだ……」

『それじゃあ、ここまで頑張ったご褒美に、キミの事ぎゅーってあげまーす。ファルマくんは、とおつてもかわいらしくて、いじらしい男の子でしたー』

大鎌状になっていた魔力が霧散する。

トーラの腕が俺へと伸びる。攻撃の意志ではない。この人なりの歪んだ愛情。自分が殺した人間への愛で方。なのかもしれない。

この抱擁を受け入れたら、お終いだ。判ってる。わかつている、けど

もう、げんかい——

「そんな事、させないからねッ!!」

その声に、意識が引きずり起こされる。

気がつけば、飢えた世界に黄金色の光が満ちていた。

俺へと伸びていたトーラの腕を、銀色の鏡が遮る。

——どうして、キミなんだ？ 俺なんかの為に、来てくれたっていうのか……？

『『這い寄れ、影の蛇』ッ!!』

また一つ、なじみ深い声が聞こえる。

次の瞬間、体中に何か絡みつく感触がした。同時に強く引き寄せられる。

『おやおやー？ こーんな所に、新しーお客さんだなんてめずらしーですねー』

トーラの視線が、俺から外れる。

——やめろ。その子達に、

「しっかりと、ハル君しっかりとッ!! こんな現実、私が否定してあげるからッ!!」

言葉と共に、ぬくもりを感じる。強く抱き締められていた。

「先輩。少しだけお力をお借りします。『異伝の23章、魔導断ち切る冥府の騎士』」

俺の身体に纏われた、『破魔のルクスエクラ』が再び『フェア・クリスタル』の形となってシジアンの手元へ現れる。

『お仲間、ですかー。うふふ。かわいいー子達ですねー。ファルマ君、案外隅に置けないじゃないですかー』

あの、狂った笑顔を。歪んだ愛が滲む眼差しを、トーラは駆けつけてくれた仲間へ——アリスと、シジアンに向ける。

——その目を、その歪んだ愛を、その子達に向けるな……!」

「彼女はボクが抑えますー! アリシアさんはその隙に治療を!!」

『フェア・クリスタル』が強く輝き、同時にシジアンの持つ巨大な書物がパラパラと捲れて行く。

『異伝の39章、理想郷の輝き』ツ!!」

優しい光が、カーテンのように揺らめき、降り立って。トーラと俺達との間を阻む。

『破滅の光』を壁にするつもりですかー？ でもそんなうっすいちっぽけな量でいつまで耐えられるのでしょーか?』

トーラが手を翳し、暗紫色の魔力が無数の槍となって降り注ぐ!!

「いつまで耐えられる、ですか?」

優しい光の壁が、シジアンの意志に呼応するかのように強く輝く。

「いつまでだって耐えてみせるツ!! 先輩が活路を開く、その瞬間までツ!!」

未だかつて聞いた事の無い程力強く、信念の籠もった叫びが木霊した。

——やめてくれよ、シジアン……。俺はそんなに、強くない……。

「『悪しき願い』でも、私のわがままでも、なんでもいいツ!! お願い、お願いだからっつハル君を助けてツ『リバーズ・リアリティ』ツ!!」

止めどなく涙溢れる瞳をきゅつと結び、アリスが俺を強く、強く抱きしめる。アリシアの背に、小さな、掌サイズで金色の翼が四つ見えた。力を振り絞る様に、ふるふるると震えて、1枚ずつ、さらさらと砂の様に消えていく。

——アリス……。いつぱい迷惑かけたのに。それでも、俺の為に泣いてくれるのか……?」

痛みが、すうーつと引いていく。切断された左腕が、その事実など無かったかのように再生する。潰えそうだった意識が、鮮明に戻る。

こんな俺の為に、必死になってくれる人達が居る。

まだ。

まだだ。

寝てる場合じゃない。まだ俺は、全てをやりつくしていない……ツ!!

「アリス、もう大丈夫だ」

俺はアリスの背を軽く撫でて。

「ハル君……っ良かった、良かったよお……」

抱きしめられていた腕が解かれ、アリスはこぼれ落ちる涙を必死に拭った。

俺は、立ち上がる。

「あつ、ま、待つてハル君、動いちやだめ！ まだ安静にしてなきやつ失血の量が多すぎるのっそれにこの魔法で何処まで治療できているのか私自身でも判つて無いんだからね!？」

服の裾を引き、もう一度寝かせようとするアリスに。

視線を合わせ、俺は、最大限の感謝と。そして、揺るぎない決意を持って。ただ、伝えた。

「来てくれて、助けてくれて、本当にありがとう」

視線をトーラの方へ変え、あいつの凶悪な笑顔からかばうように、アリスの前へと立った。

92話 どんな闇だつて怖く無いんだツ!!

尚背中 of 裾を掴んで俺を引き留めようとするアリスに、伝える。

「今は、もう少しだけ無茶させてくれ」

「どうしてっ!? ハル君は十分がんばったよ!! ここは一旦逃げよう? もっと沢山、仲間を呼んで、それで——」

「ダメだ。あいつは。トーラは。一秒でも早く倒さなきゃいけない」

俺は強くない。弱くて、ちっぽけな石ころだ。

事実、強大な闇であるトーラを前にして、何も出来ずに倒れ伏した。

俺に出来る事なんて、そう多くは無い——。

だとしても。

「——俺は “八天導師” だから」

こんな俺でも助けてくれる人達が居る。

「策はあるツアリスはこのまま『ドリーム・デイメンション』を使って

“破滅の光” をできる限り増幅してくれッ」

返事は聞かなかった。掴まれていた服の裾から、手が離れるのを感じたから。

俺は、走る。

「シジアンツ! まだ耐えられるかツ!?

シジアンは俺よりもアリスよりも前に立ち、光の壁を展開してトーラの攻撃を一身に受けていた。暗紫色の魔力でできた槍を阻む度に、彼女の額に汗が滲み彼女が持つ本のページが端から少しずつちぎれていく。

「はいっ先輩ツ!!」

『一体、何をするつもりでしょーか? ファルマ君は見ていて飽きませんねー。でもトーラちゃん的には今回 “叶えられるべき願い” さん達を全力で応援したいと思って居るので、邪魔させてもらいまーす』

暗紫色の槍の雨が、明確に俺を狙って降り注ぐ。

「させるものかツ!!」

それを、シジアンが光の壁で全て防いでくれる。

こんな俺でも、支えてくれる人達が居る。

『マテリアライズ』

俺は、この飢えた世界に漂う土塊と木々を無理矢理材料にして、小さな、一人乗りの船を作り出した。マテリアライズとマジッククラフトの応用だ。誰にでも、真似できるだろう。

「名付けるなら——『星の方舟』」

俺は船に乗り込む。船には『リア・スラスター』を発動してある。背面から強く炎が吹き出し、船が空へと飛び出す！

『あはは、これでもけっこう本気なんですけどねー。魔力、風の魔法使いさんの方に回し過ぎちゃいましたかー。破滅の光”、なーんか元の量より増えてませーん？ 面白い魔法を使う娘がいらっしやるよーうでー』

トーラの狂った笑顔は何処まで行っても崩れない。

『シジアンちゃんに、アリスちゃんって呼ばれてましたねー？ キミ達もとーっても可愛くて面白いでーす。こーんなにたのしー気持ちは何千年ぶりでしょーか？』

船は凄まじい速度で空を駆けぬけて。向かう先は、ハルカとキータが眠る白い球体!!

『と、言う訳でー。ここからはほんとーの本気でーす。もつと、もおーと、トーラちゃんを楽しませてくださーい』

トーラの身体からぶわりと、更に暗紫色の魔力が溢れ出す！

もう一歩でハルカ達が眠る白い球体に手が届く、その直前で壁となつて俺の道を阻んだ。

「先輩ッ!？」

そんな俺をサポートしようとシジアンは“破滅の光”で出来た壁を俺の方へ送ろうとするが。

『させませーん』

トーラから溢れる“拒絶の闇”が行く手を阻む。

『星の方舟』と“拒絶の闇”は強くぶつかり。

「あと少し、ほんの少しなんだッ!!」

俺は持てる魔力を全て注ぎ込むつもりで『リア・スラスター』の炎

を強く、強く焚いていく。

『すごい、すごい！ いくら片手間とはいえ“破滅の光”無しでトーラちゃんの“拒絶の闇”に対抗しますかー！ 面白い、たのしー、くふっ、うふふふっ！』

トーラの笑い声が心に伝わって来る。人の生死がかかっているのに。世界の崩壊がかかっているのに。この人は本当に、まるで、ゲームで競い合う事を楽しむかのように今の状況を受け入れ笑っている。そんなヤツに、負ける訳には、いかない。

俺は主人公じゃ無い。

こんな時、かつこ良く敵を倒してしまえるような、そんな、眩しい生き方は出来ない。

それでも。こんな俺でも、信じてくれる人達が居る。

「頼むッ届いてくれッ」

船の上で立ち、手を伸ばす。拒絶の闇が鋼鉄の壁のように堅く立ちはだかる。

強烈な競り合いの末、船が少しずつ、外郭から崩れていく。

俺の腕も“拒絶の闇”に刻まれ、一筋、また一筋と傷ついていく。

適わない、届かない。

そんな事、判ってるッ!!

だとしてもッ!!

諦める事なんてできない。これはもう、俺一人の戦いなんかじゃないんだ。

主人公になれなくても。

“最弱の八天導師”であるとしても。

俺は、戦わなければいけないッ!!

その瞬間だった。

俺を阻んでいた“拒絶の闇”が。

蜘蛛の子を散らす様に、退いた。

このとき、初めて。

『あうっ!? 痛たーあっちの方もけっこーやりますねー。現代(いま)の子達、ちよこーっただけ舐めてましたー』

笑顔だったトーラの顔が、一瞬だけ歪んだ。

それだけで、俺は全てを察する。

——あいつもツ主人公も戦^{ドライズ}ってるツ!!

アリスは俺を助けてくれた。

シジアンは俺を支えてくれた。

ドライズはいつだって、誰かの為に戦ってる。

“破滅の光”は、ルクシエラさんはいつだって俺の為に力を貸してくれる。

俺はちっぽけで弱いけど。

みんなが居てくれるから——特別じゃ無い俺をそれでも『特別だ』
と言って、拾い上げて、受け入れてくれる人たちが居るからツ!!

「どんな闇だって怖く無いんだツ!!」

突き出した俺の拳が、白い球体の中へと届いた。

93話 いつもみたいに、笑ってくれよ

紅くて小さい、丸い光が掌から放たれた。

それは白い球体の中を漂って、眠るハルカとキータの元へ届く。

同時に「拒絶の闇」が勢いを取り戻し、再び俺と白い球体の間を阻んで、押し返す。

『星の方舟』が、完全に砕け散った。俺は宙に投げ出され、吹き飛んでいく。

「先輩ツ!!」「ハル君ツ!!」

強かに地面に叩き付けられ、身体が跳ねる。痛いとか苦しいとか、もう感覚がマヒしてきた。折角アリスに治して貰ったのに、もう一瞬でボロボロだ。

だけど、戦いはまだ終わっていない。

よろめきながら、何とが、必死に、立ち上がる。

『何をしよーとしたのかは判りませんがー、惜しかったですねー』

トーラは勝ち誇った様に言うが。

「いや、十分だったさ」

俺はもう、役目を果たしていた。

『え?』

トーラの目が点になった。俺の言葉に戸惑った、というだけでは無いのだろう。自称歴戦の勇者らしいから、状況の変化を敏感に察知したのだと思われる。

「俺は主人公じゃない」

白く輝く球体を。輝きがどんどん増していく球体を見上げて、一人、呟いて居た。

「誰かを救うとか、世界を守るとか、そんな事、できるような器じゃ無い」

いつだって、俺が出来る事なんて本当にちっぽけなんだ。

ハルカ達が眠る白い球体に手を伸ばした俺は、たった一つだけ『マテリアライズ』した。

紅くて丸い果実を一つ。

果実は蹲り向かい合って眠るハルカとキータの元へ、漂う様に近づいていった。

「お前達にどんな過去があったのか。お前達がどんな闇を抱えていたのか、俺には判らないし、きつと救ってやる事なんでできない。——でもさ」

俺が見てきたハルカとキータは。

過去の闇なんて感じさせない位、どこまでも、どこまでも眩しく笑っていた。

「本当は俺なんかの助けなんて、要らなかったんだ。お前達の笑顔に、曇りなんてなかったんだ。今はただ『悪い夢』を見ているだけなんだ」

眠り、蹲ったまま。ハルカとキータと手がリングの上で重なった。

「二人とも、好きだって言ってたよな。もう十分眠ったろ？ よく寝たら、次はご飯の時間だろ？ 早く起きろよ。そして——」

二人を包みこんでいた白い球体が、限界に達したように、弾けた。

「いつもみたいに、笑ってくれよ」

強烈な閃光と、魔力の嵐が吹き荒れる。二人を捕らえていた暗紫色の魔力『拒絶の闇』が切り裂かれ、払われる。

『どういう事ですかー!? なんて、トौरাちゃんの『拒絶の闇』が——あっ!!』

漸くトौरアは気付いた様子だった。

『フェア・クリスタル』は——『破滅の光』は、この空間にもう一つだけある」

いや、初めから『あった』んだ。

この空間、『エンデオブ・ダークゼロ』は黒い魔力が引力と共に世界を囓りとする様に飲み込んでいく魔法だが、この空間に漂う物体にはアイルさんのアスレチックなど『エンデオブ・ダークゼロ』が発動する前にキータが食べたモノも混じっていた。

俺はキータに『フェア・クリスタル』を一つ食べさせていた。

『破魔のルクスエクラ』は限界まで希釈した「破滅の光」。トーラによって対抗する原初の魔力である「拒絶の闇」を付与されてしまっていた二人を、それ単体で救う事はできなかった。

でも、無駄じゃ無かった。

トーラ曰く、ハルカとキータの融合は予想よりも緩やかだった。余計なモノが混入している、と。その言葉でピンときた。

二人の融合を食い止めていた余計なモノの正体が『フェア・クリスタル』であると。

やがて目映い光が収束してゆく。

二人はそこに、立っていた。

ハルカは一口嚙ったリングを、キータに手渡す。

「甘くて、美味しいよ」

キータはリングを受け取り、嚙る。

「力が、勇気が、湧いてくるんだよっ!」

あのリングは一種の契約魔術だ。

二人を包む「拒絶の闇」、原初の魔力によって阻まれていた『ドリーム・ディメンション』の効果も二人にも適用させる為の、きっかけに過ぎない。それにあの二人は——好きな食べ物の匂いで、目覚めてくれると思っただけからさ。

ほんのささやかな、橋渡し。

俺に出来る事なんてその程度だけだ。

こんな時に言うのも無駄かもしれないが、マテリアライズで作った食べ物なんて味の保証は出来ないんだけど。

それでも二人は——

笑ってくれた。

「ありがとう、おにーさん」「ありがとうだよっおにーさんっ!」

いつもの、眩しい笑顔を浮かべる二人へ。

俺が出来る最後の事。

「受け取れッハルカ、キータッ!!」

解放された二人に向かってピンクと黄色、星形の魔石を二つ投げつける。

言わずとも判ってくれたようだ。ピンクの星をハルカが、黄色の星をキータが受け止め。

発動する！

元々二人にプレゼントする予定で作っていた、二人の新しい装備。ハルカの頭に、先の折れた夜空色の三角帽子が現れる。帽子の正面と先の折れた先端には、星の飾り。そして、同じく星の意匠が凝らされた魔法のステッキ。

キータの首に、紅いマフラーが現れる。金色の、王冠をイメージした刺繍が小さく輝いて。彼の四肢には龍の頭をイメージした紅い腕甲と脚甲が装着される。

『トリプル・スターライト』『ドラゴンズ・クラウン』。お前達への、お返しだ！

淀んだ空が晴れていく。

『エンデオブ・ダークゼロ』が。飢えた空間が壊れようとしている。

残る敵は、ただ一人。

「やるよ、キータくん」

「いつでもいけるんだよっお姉ちゃん！」

幼くも凜々しい双子の魔法使いが煌めく。

キータは駆け出し、ハルカはステッキを振るう。

『星のキセキは、春風と共に』

ハルカの纏う装備に取り付けられた三つの星が、それぞれ強く輝いて。

『シューティング・スターライズ』っ！

真っ白で巨大な星形の魔力弾が放たれた。

星形の魔力は走るキータの背に追いついて、キータは小さくジャンプする。

星の魔力に乗ったキータは拳を引いて。

『星の息吹は、北風のように』ッ！

龍の頭部を模したキータの腕甲に光の魔力が集まっていく。

キータを乗せた星の魔力は、一直線にトーラに向かい。

キータはトーラの目前でジャンプした。華麗なバック宙により

乗っていた星形の魔力がキータの前に出る。そして拳を、星形の魔力へと叩き付けるッ！

『スマツシュ・スターライズ』ッ!!』

ハルカとキータ、二人の魔法が合わさって星形の魔力弾は更に強く輝きトーラを襲う！

『くっ、まだまだー！ トーラちゃんは、諦めの悪さと執念深さには定評があるのでーす!』

トーラは『拒絶の闇』の全てをかき集め、放ち迎え撃つ。

暗紫色の魔力の塊と、真っ白な星形の魔力の塊が衝突した。

94話 だいい、だいい、だあああああ好きでえすつ!!

暗紫色の強大な魔力、原初の魔力が一つ “拒絶の闇” と。

『ドリーム・デイメンション』によつて増幅された “破滅の光” がぶつかり合い、拮抗する。どちらも一歩も退かない、せめぎ合いだ。

「諦めが悪いだの執念深いだの、胸を張つて言い張る事じゃねえーんだよっ!!」

俺は最後の力を振り絞つてハルベルトを投げた。

『ヒーローズ・ハイロー』ツ

ハルベルトは光の粒子へと分解され、キータの身体に取り込まれていった。そしてキータの頭上に光輪が現れる。対象の身体能力を上昇させる、ちよつとした『エンハンス魔法』だ。効果は光属性が司る破壊と速さ。ハルベルトを触媒に発動する事で詠唱などを省略しているだけで、内容自体は基礎魔法の『第一光属性強化魔法（エンハンス・ライト）』と大して変わらない。

少しでも、キータ達の力になればそれでいい。

「援護しますッ 『異伝の39章外伝、勝利への希望』ツ!!」

シジアンが本のページを一枚めくる。壁状に展開され、攻撃を防いでいた “破滅の光” がキータの背を押す翼となる。

「私も、全力で応援するからね！ 限界まで輝いてッ 『ドリーム・デイメンション』！」

壊れていく飢えた世界を消し去るように、黄金色の優しい光に包まれた夢の世界が広がっていく。

みんなの思いを乗せた星の輝きは。

暗紫色の魔力を少しずつ、少しずつ押し返してゆき。

『うぐぐ、まさか、そんなんっ』

一線を、超えた。

拮抗していた力が、一気に傾く。

星の輝きが瞬く。

『う、わあーっ!!?』

“破滅の光” は、悪辣な “拒絶の闇” を撃ち払った。

暗紫色の魔力が光に吞まれて消えていく。

阻むモノの無くなった星型の魔力がトーラの身体を飲み込んだ。

同時に『エンデオブ・ダークゼロ』が構築していた世界がひび割れ、完全に壊れて消えた。『ドリーム・ディメンション』も限界を迎えた様で、黄金色の光も消えてゆき周囲の景色はすり鉢状に抉り取られた。永久の森”へと戻っている。

やがて星形の魔力が弾けて、消えた。

キータは真下の地面に着地する。

俺たち全員の視線が、トーラに集まる。

身体が半透明になり、ノイズのようなモノが走り。

足先から少しずつ、黒い粒子になって崩壊していた。

『ああ……ああ……』

仰け反り、空を見上げるトーラの、弱々しい声が――。

『ああっ！ くふふ、あはははははッ!!』

狂気的な笑い声で上書きされた。

『すごい、すごい、すごおおいッ!!』

最早質量も存在しないのか音はしないが、パチパチ拍手をしながら。

屈託の無い、けれど寒気を感じる凶悪な笑顔で俺達を見下ろしていた。

『負けるつもりなんてゼーんぜんありませんでしたー。あっちもこっちも、大敗北でーす』

未練も、後悔も、執着も無さそうに、楽しげな口調で続ける。

『心と心のぶつかり合い。命と命のせめぎ合い。くふふ、あはははッ！ まさに人間の営みそのものッ!! とおおおつても、楽しかったでーす!!』

トーラは俺達一人一人へと視線を移していった。

『“世界の中心”、でしたかー？ あの子がそこそこやれるのはまあ想定内だったのですがー。いやいや、現代（いま）を生きる他の皆さんも素晴らしーですね！ こんな人間の営みを視られるなんて人類を守ってきた甲斐があると言うモノでーす』

もう下半身が完全に消滅し、腹から上へとどンドン崩壊していく。

『みんな、みんな、かわいいーしかっこよかったです。でも——』
笑顔によって細められていた目を見開いて。

そのおぞましい視線が俺へと刺さった。

『やっぱり一番は君です。ちっぽけな魔力しか持ってないクセに、何度も傷つき、ボロボロになっても立ち上がるその姿！ 人と人を結びつけ、絆を紡ぐその姿ッ！ 見蕩れずにはいられませんでしたー』
トーラは残された両手を頬にあてて。恐らく、身体が残っていたら
もじもじと腰をくねらせて居たのだろうなと思えるような動きで頭を揺らし。

『トーラちゃん、ファルマくんの事を好きだと言いましたがー。また
また前言撤回しちやいまーす』

頬を赤らめ、恍惚で恐ろしい笑顔を向けて言い放つ。

『ファルマくんの事、だい、だい、だああああいい好きでえすっ!!』
「なッ!?」「ちよつと何言ってるのかなッ!?!」

シジアンとアリスが仰天して一歩後ずさった。

俺は頭を抱えて、答える。

「言っただろ。アンタの“好き”は、歪み過ぎてて嬉しくねーよ……
悪いけど他をあたってくれ」

『まーまー、そんな事言わずにー。えっへへへー!』

きつぱり断ってるのに聞く耳を持ちやしない。諦めの悪さと執念
には定評があるとは本人の談だが……。

『トーラちゃんの目的は変わりませーん。これからも“叶えられるベ
き願い”さん達に力を貸していきまーす。きつと皆さんとはまた、戦
う事になるでしょーね。次は負けませんよー』

遊び終わった友達でも相手にしているかの様に、トーラは気楽に手
を振って。

『ファルマくん、キミの事——ずうううつと、見てますからねえー？

もつともおつと可愛くて、いじらしくて、かっこ良くて、素敵な所、
みせてくださーい』

と言うだけ言っつて。

「はあッ!? ふざけんな、おいッ!!」

『それでは今回はこの辺でー。ばいばーい』

トーラの姿は完全に消えて無くなった。

永久の森に降りた静寂が、戦いの終わりを教えてくれる。

その余韻を破ったのはシジアンだった。

「全く！ 一体なんなんですかあの捨て台詞は！」

大層機嫌が悪そうに頬を膨らませている。いつも冷静沈着で凜々しいシジアンにしては年相応で可愛らしい表情だった。

「完全にストーリーカーじゃないですか！ 先輩っ 今後は身辺に気をつけてくださいー！」

「お、おう……」

今まで戦って来たトーラ有能力や口ぶりを見る限り、気をつけて“どうにかなるモノなのかは甚だ疑問なのだが……”

「……部長さんがそれ言うんだね」

何故かアリスはシジアンに呆れた視線を送っていた。
そして。

「まあ、これで漸く——あれ？」

視界が揺れる。四肢から、力が抜ける。

「ハル君っ!?!」

崩れ落ちる俺を慌ててアリスが受け止めてくれた。

「ご、めん、アリス、また迷惑——」

呂律が、うまく回らない。

「ハル君ッ！ しっかりして、ハル君っ！ やっぱり無茶だったんだあつ！ 身体左半分ちぎれてたんだからね!?!」

「もしもし、ジン先生ですかッ!? そちらの状況はどうですか!? 重症患者を一名、早急に救援を要請したいのですがッはい、よろしくお願いますッ!!」

緊張が解けたせいなのか。

俺の意識は一気に深く沈んでいった。

外伝94・1話 俺はお前の為にも。そしてお前が愛する者の為にも——お前を殺す

俺は焦っていた。

奥歯を噛みしめ、剣の柄をぐつと乱暴に握る。

決して、『苦戦しているから』ではない。

「クソがッ!!」

太陽を象った紋章の浮かぶ大剣を、彼は軽々と片腕で振るう。

対峙するのは兄弟弟子であり、長い付き合いの友人がイーヴィルと化した存在。

巨大な鎧のような金属質の腕が、俺の剣を受け止める。

グランディ・ソル太陽の大剣は俺の為に作られた特別な剣だ。

全ての魔法を魔力レベルまで分解し、無効化してしまう特異体質、原初の魔力が一つ「破滅の光」を宿して尚朽ちることも、錆びる事もない。オリハルコンという金属で作られた神器にも等しい剣である。

俺が発動した魔法、『トータル・イクリップス』は自分自身に「破滅の光」をエンチャントし光の速さでの攻撃・移動。そして手にする武器へも「破滅の光」を付与させる。

あらゆる魔法を切り裂き無効化する力がある。

そんな俺の剣が。二度の人生の中で今、初めて、受け止められていた。

イーヴィルⅡアイルには常に大量の暗紫色の闇属性と思われる魔力が蛇のように絡みついており、その魔力が「破滅の光」を妨げている。

「ッ」

大剣を受け止められた瞬間だった。この混乱に乗じてか。それとも、イーヴィルⅡアイルが発動した魔法の副作用か。

クラス2以下相当のイーヴィルが自然発生しては学園の生徒を襲っていた。それは、事件の中心であるこの決戦場。学園の上空であつても変わらない。

巨大な鳥の姿を化け物が生まれ、漁夫の利を狙うようにアイルと撃ち合うイクリップスに突撃する。

しかし。

「失せろ」

苛立たしげに呟いて、迫り来るイーヴィルを睨んだ。

ただ、それだけで。

イーヴィルは白い光の爆発に飲み込まれて、蒸発するように消えてしまう。

圧倒的な破壊の力。それだけの能力を、イクリップスは有している。

——ダメだ。これ以上は……！

だからこそ。俺は焦る心を抑えられない。

『トータル・イクリップス』は発動後、全身を白い光が包み背後に真っ白な円の形をした魔力が発生する。これは『トータル・イクリップス』という魔法の出力レベルを可視化したモノだ。この白い円が徐々に黒い円に侵食されてゆき、残った白い部分の輝きがより強くなっていく。その名の通り「皆既日食」をモデルにした演出である。

この演出には二つの意図がある。一つ目は、仲間への警告。「破滅の光」は強力な魔力であり、出力の場合によっては周囲一帯を更地にしかねない危険な力だ。

現在の出力レベルを可視化する事で仲間に向けて「破滅の光」の余波に巻き込まれないように警告する意図がある。同時に、敵に自身がどれほどの力を出しているのかを見せつける事になるがこれが二つ目の目的だ。最も、結果的に利点になっていただけなのだ。

「破滅の光」は膨大すぎる魔力だ。例えばこの状況に置いても俺は本当の意味での全力は出していない。現在『トータル・イクリップス』は白い円のうち1/4も浸食されていない。それだけ、「手を抜いている」という事である。この事実が、敵対者を畏怖・威圧させる。「破滅の光」という底なしの魔力が、どれほど脅威であるのかを見せつけられるのだ。

しかし——

イーヴィルの様な知能の低い相手にはこの威圧効果も意味が無い。

そして、俺が焦る理由。それは…… “破滅の光” の使い勝手の悪さのせいだ。

『才前の自由ヲ否定しヨウ』

巨大な鎧の塊、その頭部がカタカタ動き、くぐもったアイルの音が響く。

『エア・バインド』

暗紫色の魔力と風の魔力が、無数の縄のように伸びてイクリプスに絡みつこうとする。

「エアだと……う？」

ささくれ立った心を更に刺激され己の表情がもつと歪んでいくのを感じる。

四肢を胴体を、縛り付けるように近づく風と闇の魔力を。

俺は怒りのままに切り伏せた。

風の魔力はあつという間に消し去り、緑色の粒子となって霧散していく。しかし闇の魔力はイクリプスの刃にしつこく纏わり付き、何度も剣を振るうことで漸く振りほどけた。

「イーヴィルの分際で、襲名魔法のつもりか？ アイルの名で。アイルの声で。自由を否定する魔法を使うだど？」

襲名魔法とは、昔からの風習で己の代表作にあたる魔法を開発したとき自身の名前をもじった名前を付けたモノだ。俺ならば、『トータル・イクリプス』が襲名魔法である。

アイルという名は、“Air” 空気という単語から付けられたのだとアイル自身が言っていた。だがアイルは中々自身の納得のいく魔法を開発できず、固有魔法を作成はすれど襲名魔法とする事は避けてきた。

焦りと怒りが、かつて無いほどイクリプスの心を揺さぶっていた。これほど焦燥した経験など一度も無い。

「ふざけるのも大概にしろッ!!」

俺は人付き合いが苦手だ。誰かと仲良く、親しく語り合う事などしないタイプの人間だ。だがな、俺だって一人の間人である事には変わらないんだ。

人並みに誰かを愛し、俺なりの方法でその愛を表現する。俺にとってはその手段が「過干渉しない事」であり、交流は少なくとも兄弟弟子で弟分であるアイルを心底大切に想っていたつもりだ。

だからこそ、許せない。

アイルの純粋な願いを、こんな歪んだ形で暴走させ、顕現させた「第四の賢者」を。

アイルが常に主張する「自由」を否定するような魔法を、イーヴィルとなったアイルが使う事を。

怒りで『トータル・イクリプス』の出力レベルが一段階上がりそうになるのを、奥歯を噛みしめて堪えた。

——これ以上は加減が効かないツ!!

現在戦闘は拮抗状態にある。俺の振るう「破滅の光」を未知の原初の魔力がかき消してしまふからだ。

ならば「破滅の光」の出力を上げれば良いだけの話——とはいかないのだ。

名前の通り、何もかも全てを破壊する「破滅の光」は、本来の光属性の魔力と比べものにならない程扱いづらい魔力だ。普通の魔法使いなら魔力を、1, 2, 3, 4と段階を経て出力を上げていける。しかし、俺にはそれができない。

「破滅の光」は、1, 10, 100, 1000と一段階出力を上げるだけで大幅に破壊能力が上がってしまうのだ。相手が、ただのイーヴィルであれば何の問題も無かった。未知の原初の魔力を超えるほどの「破滅の光」を叩き付け、それでお終いだ。

だが……。現段階で拮抗状態である今。一段階出力を上げてしまえばイーヴィル⇨アイルを倒す事は可能だろう。

——塵一つ、残さずに。

事実上アイル自身を人質に取られた形で戦闘している。それが大きな足かせとなっていた。

——どうする、イクリプス？

怒りを、焦りを堪え、考えを巡らせる。多くの戦いを経験してきた。その手を何度も血に染めてきた。俺だってアイルは救いたい。

けれど――

――この地獄絵図の様な光景を、アイルが本心から願っている筈などない事は判りきっている。

眼下の学園ではイーヴィルと生徒達が交戦している。そのイーヴィルの中には、アイルが愛した彼と同じ孤児院に所属していた生徒がイーヴィル化してしまった者も居てクラス2と3の中間ほどの力をもって暴れている。

――アイルならば……きつと、こう結論を出すだろう。

目を閉じすうつと深呼吸をした。怒り、焦り、迷いが霧を払うかのように消えていく。

――今まで、何度だって汚れ仕事を引き受けてきた。俺は、俺が愛する人達が幸せであるならば憎まれようが、蔑まれようが、構わない。嫌われ役は、慣れている。

昏い覚悟を宿した光を灯して瞼を開く。

「アイル。お前の本当の願いくらい、俺は判っているつもりなんだ。許せとは言わない。だが俺はお前の為にも。そしてお前が愛する者の為にも――お前を殺す」

『トータル・イクリップス』の出力を示す白い円。それを浸食していく黒い影が、広がろうとしたその時。

「ダメエエエッ!!!」

少女の悲痛な叫びが、俺の魔法を中断させた。

外伝94. 2話　こんなの、そよ風のウチにも入らな
いわッ!

リーゼの悲痛な叫びが、イクリプスさんの動きを止めた。『トータ
ル・イクリプス』の出力レベルを表す黒い影が、一瞬だけ広がりそう
になって元に戻る。

「お願いッ！　辞めてッ！　アイルを殺さないでエッ！」

魔法で僕を飛行させながら、涙をポタポタしたたらせて。リーゼは
かつて無い程に感情を露わに叫んでいた。

「イクリプスさんッ！　僕からもお願いします！」

同時に僕も声を伝える事で、僕達の存在をイクリプスさんに認知さ
せる。

戦いに慣れたイクリプスさんは、背後から迫る僕達へ目を向けよう
とはしない。あくまで視線は、敵であるアイルさんへと向けられてい
た。

「その声、ヴェルリーゼとドライズか!?　ヴェルリーゼは孤児院の生
徒だろう、無事なのか!？」

イクリプスさんは疑問の言葉を浮かべつつも、振り下ろされたアイ
ルさんの、鎧のような金属質の巨大な腕を大剣で受け止めた。

更に、機を伺うように周囲を漂っていた鳥獣の姿を取るイーヴィル
が何体かイクリプスさんに向かってくるが、イクリプスさんの周囲
を回転する刃が駆ける。月を模したナツクルガードが特徴的な片手
用の曲剣、三日月ルナノブレスの曲剣だ。

三日月の曲剣は基本的に宙に放たれており、イクリプスさんの意志
や設定に呼応して空を駆け敵を切り裂く、名前や意匠の様にまさしく
“衛星”のような武器である。当然、直接手にして二刀流の形で戦う
事も出来る。

「リーゼもイーヴィルになってますが、僕達の味方ですッ！」
漸くイクリプスさんの元にたどり着いた僕達は、その横に肩を並べ
た。

僕の言葉に、イクリップスさんは数秒にも満たない程ほんの一瞬だけ目を閉じ何かを思索し、

「——なるほど、そういう『願い』か」

と、納得した様子を見せた。どうやらイクリップスさんは僕よりも『イーヴィル』について理解しているらしい。

「ならば簡潔に状況を説明する。戦いながら聞けッ！」

光の速さで、イクリップスさんの大剣が振るわれる。

僕達の方も、周囲に発生していくイーヴィルが獲物と認識して襲ってきた。

光の剣を振りかざし、応戦する。

「ドライズ、援護は要る!？」

「僕は風の魔力を持ってない。ここで戦うには君の魔法が必要不可欠だ。リーゼはそっちに集中して！」

「判ったわッ！ でも、自分の身くらいは自分で守るからッだからお願い、なんとかアイルを助けてあげて！」

リーゼと共に、空を駆ける。

柄のみしか存在しない剣。ファルマが僕の為だけに制作し、調整した僕の愛剣。僕が扱える属性の魔力を直接刀身とする事が出来る『氷燐剣（略称）』。破滅の光を刀身として、僕は押し寄せるイーヴィルと周囲を漂う暗紫色の魔力を叩き切る。

「見ての通り、アイル、及びこの周囲には恐らく闇属性と思われる未知の『原初の魔力』が満ちている！ おそらく特性は『あらゆる力の遮断』！ 交戦中、鎧としても刃としても用いられ、『破滅の光』でなければ対抗出来ない！」

アイルさんが振り下ろす金属質の巨大な腕を、大剣で軽く弾き返しつつイクリップスさんは説明を続ける。

「現時点で俺の『破滅の光』と拮抗している！ 知つての通り、俺は加減が出来ない。だが、嫌味な事に向こうはそうでも無いらしい。こちら側の出力に合わせて魔力の量を調節している。問題は相手の総魔力量が未知数である事だ」

師匠、イクリップスさん、僕と当代において『破滅の光』を扱える魔

法使いは三人。

その中でもイクリプスさんは特に強く魔力を受け継いだ様で、師匠以上に魔力の加減が効かないらしい。現時点で拮抗状態、イクリプスさんが一段階出力を上げれば現在の魔力量から十数倍の「破滅の光」が放たれる。

もし、あの暗紫色の魔力がその光の奔流に対応できるなら厄介ではあるもののそれはそれで良い。問題は、暗紫色の魔力量が「破滅の光」よりも大幅に少なかった場合だ。

そうなれば、アイルさんごとイーヴィルを討伐してしまう事になるだろう。

「ドライズツ！ お前の「破滅の光」はまだ未熟、故に調節が利く！俺はこの出力でサポートに回る。アイルを救いたいならば少しづつ魔力を解放し、相手の魔力量の限界ギリギリを見定めろ！」

柄を握る拳にきゅっと力が入る。そうだ。僕の「破滅の光」は師匠やイクリプスさん程強力じゃ無い。最大出力量なんて全然比べものにならないし、出力レベル一段階毎の魔力量も師匠達ほど顕著に差があるわけではない。それがある意味、現状況に適している。

——リーゼが、僕でなければいけないと言ったのはそういう事なのかな？

「まずは一発、やってみますツ！」

剣の切っ先をアイルさんに向ける。

「合わせろツ！——『ダイヤモンド・リング』ツ！」

先陣を切って、イクリプスさんの大剣が振るわれた。同時に、反対方向から曲剣が回転しつつ迫る。二つの斬撃が交わると同時に、破滅の光が強く瞬くツ！

『強度1 範囲タイプB』

イクリプスさんが放った「破滅の光」に重ねるように、僕も魔法を放つ！

『ルクス・エクラ』ツ!!』

真っ白な魔力の奔流を、暗紫色の魔力が迎え撃つように阻んだ。

「ツ！」

僕も、イクリプスさんも、いきなり成功、だなんて都合のいい事を考えて居る訳でも無い。

「次だッ！」

「はいッ」

改めて、光の魔力を束ねる。

しかし――

「何人にも阻まれぬ自由ヲ!! 『セレス・ティアル』ッ」

西洋鎧の兜のような頭部がカタカタ動き、くぐもったアイルさんの声が聞こえた。

『『セレス・ティアル』!? セレナ先生の名前――襲名魔法ッ!?』

僕達のクラス、4年A組担任。セレナ先生はティアロ校長の奥方にして三賢者の一人だ。そんな大魔道士の襲名魔法ッ!!

ゾクリと寒気がした。

鮮やかな蒼い輝きが竜巻となって迫り来る!

「防ぐな、躲せッドライブス! 『破滅の光』を温存するんだッ!」

イクリプスさんの指示。

『破滅の光』なら相手の魔法を分解する事で無力化出来るが当然大魔法ほど消費する魔力の量が大きくなる。ここで『セレス・ティアル』を防ぐ為に使う訳にはいかない。

けどッ!

「リーゼツ大丈夫かいッ!?!」

今僕が空中で戦ってるのはリーゼが魔法で支えてくれているからだ。躲せと言われても僕に出来る事は少ない。

「これもアイルを助ける為――こんなの、そよ風のウチにも入らないわッ!」

僕を支えながら、リーゼは高速で飛行し蒼い竜巻から逃れる。

しかし。相手はあの三賢者が一人の名を冠した魔法だ。

リーゼは必死に空を駆けるが、竜巻を中心に無数の小さな風の刃が放たれ襲ってくる。

「いッ」

避けきれなかった一つの刃が、リーゼの頬を掠めた。

「リーゼッ!!」

紅い滴が頬を伝い、そのまま下にいる僕の肩へと落ちてくる。
心配して見上げた、けれど。

「私の『願い』を——何よりも強欲な想いを、舐めないでッ!!」

リーゼは鋭い眼差しは何処までも真っ直ぐで、歪まない。

空で戦って居る今、僕の命は彼女の飛行魔法に委ねられている。だが、心配なんて必要なかった。僕は、僕がすべき事に集中しなければ!

僕は視線をアイルさんへと戻した。

外伝94・3話 面白い娘

「あーっ！ 暇ですわあー!!」

学園の保健室にて、椅子の背もたれに身体を預け両の腕を大きく広げて私（わたくし）はぼやいた。

「ご、ごめんなさい。私なんかの護衛の為に迷惑を——」

そう言っただけなのは、空から降ってきたという記憶喪失の少女、ユウ。ドライズのクラスメイトだ。

「あら。勘違いなさらないで。貴女の護衛をする事を決めたのは私自身の判断です。謝る必要なんてありませんわ。ただ、それはそれとして事実暇なだけなのです」

と私はユウの白から黒にグラデーションしている彗星の尾の様に美しく長い髪を乱暴になで回した。

「ふえああ、」

そんなに力を入れているつもりはないが、ユウは頭をそのまま揺さぶられ、目を回す。

「八天導師は各自の判断での行動。第一にこの乱戦状態では私の魔法は味方を巻き込みかねません。第二に、上空から感じる巨大な闇と光の魔力。恐らくイクスが敵の親玉とやりあっているのでしょう。なれば、私は別の役割に準ずるべき。そして最後に。こうした混乱状態でこそ、最も警戒しなければならぬのが陽動作戦の可能性。この学園には資財秘宝は数あれど——世界の鍵を握る貴女を上回る程大切な存在はありません。イクスが戦闘に出ている今、残った学園最高戦力である私が貴女を護衛するのは至極真つ当な判断ですわ」

「そ、そう、なんですかあ……」

「ここは学園の中で最も安全な空間。医療設備完備、防犯、敵対魔導対策も完璧。その上で学園最強の魔道士たる私が居るのです。ここで大人しくしてれば、仮に敵の狙いが貴女であったとしても手出しはできません」

ユウは目をぐるぐる巻きにしてふらふらしながら呟いた。私の話を何処まで理解出来たのかも怪しい。

「暇つて言うんならあ、こっちのお手伝いして欲しいんだけどお？」
間延びした語尾が特徴的な、優しい声が聞こえる。

ピンク色の髪を二つ結びにした、十代の子供よりも更に小柄な人物。学園のトップを司る三賢者の一人、ジン先生がダボダボの白衣の袖を振るう。

「そうしたいのはやまやまですが……なーぜーかー私、家族にも、弟子達にも、『頼むから余計な事はしないでくれ』と懇願されて、救援、医療行為を辞めさせられるんですよねえ。本当に何故かしら」

在りし日の事、家族達全員に身体を取り押さえられてどうどうとなだめられたのを思い返す。まるで人をじゃじゃ馬のように扱って！

「ああ、そう言えば君はそういう子だったねえ。ファルマ君の時も、じきに目が覚めるって言ってるのにウン百万もする医療器具引つ張り出して説明書も資格も無しに利用しようとしたりい。やっぱり大人しくしててえ」

ジン先生は何処か遠い目をしてそう言った。

「良い治療の為に良い道具を用意する事の何がいけないのか判りませんわ」

「医療つて、そんな単純じゃあないんだよお」

ジン先生は保健室に運び込まれる怪我人の手当と部下への指導をしながらルクシエラと言葉を交わす。

「怪我した一般生徒はこっちい。制圧、拘束したイーヴィル化した生徒はあっちにおねがぁーい」

戦いが常の学園だ。保健室は一般的な学校に備わっているモノよりも数十倍の規模を持っている。保健室というか、医療棟と言ってもいいレベルだ。

「人間がイーヴィル化、ですか。あり得るかも、なんて思っていました
が本当に起こると大変なモノですわ」

頬杖を突いて、ため息を吐いた。

「本当に、なんて事に。こんなの、誰も望んでない筈なのに……」

酔いが冷めたらしいユウが、悲しげに涙を滲ませる。

「テラの報告書によればあ適度に加減した量の『破滅の光』を当てる事であ元に戻せるらしいけどお？」

と、ジン先生はチラリと視線がこちらを向く。

そんな視線を、私はスンッと振り払って。

「言っておきますけど、私はそのような繊細でまどろっこしい真似は出来ませんからね。これが証明です」

そう言っって人差し指で天井を指した。

『第一照明魔法（プチライト）』

魔法を唱えると、指先から細い光の筋が放たれ。ジュツと音を立てて天井を焦がす。『第一照明魔法（プチライト）』は本来、指先に僅かな光の魔力を集めて手元を照らし、夜間の鍵開けなどを補助する照明魔法である。

それが、私の魔力で放つと最早それだけで熱戦のレーザーと変わらない威力を持つてしまう。

「いっちばん階級が低い照明魔法でそれかあ。生徒達に向けるのは危険だねえ」

「そういう事ですわ」

自分自身にあきれ果てて、私は少し不機嫌に椅子に座り直した。

私だっって私なりに、己の力に思うところはある。

そんな時。

「——あ！ ひよっとして今のって『証明』と『照明』をかけた言葉遊びですか？ 面白いですー！」

とユウは手を叩いてにっこり笑う。

「はっ」「んん？」

私とジン先生は一瞬意味がわからずキョトンとして。

「……ああ、そういう？」

数秒後に、意味を理解したジンは苦笑いを浮かべた。

対して。

「あっはっは！ 貴女、面白い事を言いますわねー！」

私の方は一瞬だけ浮かべた我ながららしくない考えを吹き飛ばす、豪快な笑い声をあげる。

「はえ？ 面白い事を言ったのはルクシエラさんでは……」

ユウが目を点にしていると、その背中をバンと叩いて。

「ふにゃっ!?!」

「貴女、気に入りましたわ。ドライズと懇意にしていると聞いていますけれど。実際問題どれくらい親しいのかしら?」

「懇意? すみません、言葉が難しくくて。親しい……のかはよく判らないですけど、とってお世話になっていて、すっごく感謝していて、何より——あの人の夢見る願いは、私にとってもとても素敵なモノで。だから、私ドライズ君の事大好きです!」

ユウは屈託の無い笑顔を浮かべる。

その言葉に、ジン先生は優しい笑顔を。私はは少しつまらない気分で内心舌打ちをする。

「ふむ。まだ少し情緒が幼いようですね。これはドライズの甲斐性が試されますわ」

「ごらごらあ。こういう事に親が首を突っ込んででも碌な事にならないよお。第一、ドライズ君の気持ちも大事でしょお」

ジン先生が嗜めるように言ってきた。

「それもそうですわね。もつとも——こんなに純粹に慕ってくれる娘の想いに気付かない程鈍感な子ではなくってよ。簡単に壊れそうなくらいに、繊細で、敏感で、それでもなんでも受け入れてしまいたいそうなくらいに透き通った、氷みたいな子なんですから」

私はそう言って、再び椅子に戻ろうとする。

その時だった。

「ドライズ君ッ!?!」

突然、ユウが声を上げる。

反射的に、私とジンがバツと身を翻し視線をユウに移す。和やかな日常から、一瞬にして警戒状態へ。いつでも、何が起こっても戦えるような構えでユウを見守る。

ユウの目が虚に。焦点の定まらない眼差しが窓の外、空へと向かう。

保健室の窓から、ドライズの姿なんて見えない。けれど今のユウに

は。

まるで、何かが見えている様だった。

「大丈夫、焦らないで。ドライブ君の願いは、みんなを幸せにしてくれる。君が願う限り、私もがんばって応えるから。だから、挫けないで」
ユウの胸元に小さな光が輝いた。青白い光の球。それを両手ですくい上げるように持ち上げて。

「気付いて。この世界ならドライブ君は、何でも出来る。少しだけ、お手伝いするよ」

窓を開け、すくい上げた光の球を。ユウは優しく、空へ放った。

青白い光の球は真っ直ぐに、何にも阻まれる事なく流星の如く一直線に飛んでいく。

ルクシエラとジンはユウの異様な状態をただ、静観していた。

そして――

「……あれ？ 私、今何してたんだっけ？」

キョトン、といつもの、少し抜けた少女の雰囲気に戻ったユウの姿を確認してから。

ふうーっと私とジンは同時に長い息を吐いて、警戒態勢を解いた。

「本当に、面白い娘……」

私はにやにやと、嫌らしい笑みをユウに向ける。

好意、興味、疑問、研究者としての好奇心。様々な心を乗せて。

外伝94・4話 僕は、何も出来ないのか？

『強度5 範囲タイプB——ルクス・エクラ』ッ!!』

滴る汗を振り払って。

焦る心を押さえ込んで。

奥歯を噛みしめ、眉間に皺を寄せて。僕に出せる最大の出力で『ルクス・エクラ』を放つ。

『ダイヤモンドリング』ッ!!』

イクリップスさんも併せて『破滅の光』を放ってくれる。けれど。

暗紫色の魔力はこちらの『破滅の光』の量に合わせて、ぶわりとその物量を増大させ、魔法を阻む。

僕達の光は、アイルさんに届かない——

『エア・バインド』『セレス・テリアル』

アイルさんのイーヴィル。アイルさん自身が巨大な十字架に貼り付けられ、太く重質な鎖にがんじがらめに拘束されて。

十字架の左右先端からは強大な西洋鎧の腕甲の様な金属質の腕。十字架の頭部先端には西洋鎧の兜の様な頭部があり、その口元のカバー部分が可カタカタ動いてくぐもったアイルさんの声で魔法が唱えられる。

相手は当然、無抵抗などでは無い。

『エア・バインド』は風と暗紫色の魔力をこちらの身体に絡みつかせて束縛する魔法。

『セレス・テリアル』は空の賢者、セレナ先生の襲名魔法で蒼色の竜巻を発生させ、更に竜巻から風の刃を無数に放って攻撃する強大な風属性魔法だ。

『セレス・テリアル』はリーゼが必死に上空を飛行する事でなんとか致命傷を避けて回避しているモノの、使用される度に着実に、リーゼにも僕にも小さな風の刃が傷を残していく。

そこへ、逃がさないと言わんばかりに『エア・バインド』による妨害。これは暗紫色、未知の原初の魔力を含む魔法であるため『破滅の

光”を使わなければ対処できない。

僕に残された“破滅の光”はもう底を尽きかけている。この『エア・バインド』は防げない……!」

そう判断し拘束される事前提で、追撃の『セレス・ティアル』如何に凌ぐかを思案していた所に、三日月の曲剣が空を裂き、『エア・バインド』の暗紫色の魔力を切り払ってくれた。

「ありがとうございます、イクリプスさんッ」

反射的にお礼を言うが、僕は焦燥を抑えられないでいた。

「礼は後で良い! それよりも、ドライブ——もう限界だろう?」

悲嘆の声色でイクリプスさんの言葉が耳に届く。

「ッ」

思わず言葉が詰まったが、すぐに否定する。

「まだ、まだやれます!!」

「だが、お前の最大出力、5をもってしてもあの闇は払えなかった!

これ以上策はあるまい!? 『セレス・ティアル』を放たれる度に、お前達二人が傷つき消耗しているのは明白だ! これ以上は——看過できません」

イクリプスさんの言葉の意味。理解出来ない訳が無い。

僕の“破滅の光”を併せて尚、あの闇は払えなかった。もう残された手は。

イクリプスさんの『トータル・イクリプス』の段階を一つあげ、現段階の十数倍にもなる“破滅の光”をぶつける事だけ——。

「お前達はよく戦った! ここまで相手が“破滅の光”に耐えられるのは寧ろ喜ばしい想定外だ! これならもしかしたら、もう一段階出力を上げた俺の“破滅の光”にも耐えられるかもしれない!」

未知の原初の魔力。暗紫色の闇はまだまだ余裕と言わんばかりにアイルさんの周囲で大量に漂っている。

いくら師匠やイクリプスさんに劣るとはいえ僕の“破滅の光”だって十分にじゃじゃ馬で、膨大な魔力なんだ。それを凌ぎきったと言う事は、イクリプスさんの言う言葉にも一理あるかもしれない。

けれど。——確定では無い。

僕達が「破滅の光」を消耗しているように、相手も魔力を消耗しているはず。

本当に、アイルさんのイーヴィルが。あの暗紫色の魔力が。イクリプスさんの膨大な魔力に耐えられるなんて保証は、何処にも無い。

「いやあッやめてッ!!」

リーゼが悲痛な叫びを上げる。

「情報を得られた事で、アイルが生き残る一か八かの賭けできる事が判ったんだ！ お前達の戦いは無駄では無かった。お前達は十二分に奮闘した！ ここで無茶を通してお前達まで失う事態になれば、それこそアイルの本意では無い筈だ！ ——全ての責任は、俺がとる。賭けるぞッ裏目が出たら、俺を憎め!」

イクリプスさんはそう言つて、三日月の曲剣を手元へと呼び戻し。太陽の大剣と共に二振りの剣を両手に持つ。

一か八かの賭け？

裏目が出たら？

そうしたらアイルさんが——居なくなる？

イクリプスさんの言葉が胸の中に染みるように広がり、心をじくじく蝕む。

イクリプスさんが、太陽の大剣と三日月の曲剣を交差させ掲げ、

『トータル・イクリプス』——」

その魔力を、解放しようとする。

本当に、もうこれしか道は無いのか？

「ヤダヤダヤダッ!! 辞めてッ！ お願いつ！ 失敗したらアイルが死ぬなんて、そんなの、そんなの耐えられないわッ!!」

僕を上から支えるリーゼの涙がボタボタこぼれ落ちてくる。

いつも気丈で、僕達のクラスの頼れるリーダーであるリーゼが。子供みたくに取り乱しして、悲しみ、苦しんでいる。

こんな選択肢が、正しいとも言えるのか？

ギユツと、僕は悔しさに剣の柄を強く握りしめた。

賭けに出なければ仲間一人救う事すらできない。

賭けに勝つ可能性も、決して高いとは言えない。

そんな事しかできない。

僕は何の為にココに来た？　こんな結末を、こんな結果を導き出すために戦って居たのか？

何が、主人公だ——？

悔しい。

どうしようにも無く悔しい。

この学園から、誰かが居なくなるかもしれない。そんなの、絶対に嫌だ。

僕は、そんな世界——願っていないッ!!

心がぐちゃぐちゃになる。時間感覚が無くなっていく。イクリップスさんが強硬手段に出るまで、あとどれくらいだ？　僕は、何も出来ないのか？　未来がああ暗紫色の闇に閉ざされていく。そんな錯覚が見えた、その瞬間。

「ッ何事だ!？」

イクリップスさんが驚きの声を発する。

その声に引きずられて僕の思考も、目の前の現実を引き戻される。気がつけば青白い光の球が一直線に。僕の胸めがけて何処からか飛んで来ていた。

「えっ——」

あまりに突然の事態に、避ける事なんてできない。青白い光の球は僕の胸にぶつかり、そして、優しく——溶けていった。

「ドライズッ!?　敵の攻撃か!?　味方の支援か!?　無事かッドライズ!!」

魔法を中断させ、第一に僕の安否を確かめようとするイクリップスさんの声が遠くに聞こえる。

でも、僕には。

全く違う光景が。全く違う言葉が、聞こえていた。

外伝94・5話 僕に出来る全てをやる

まるで、今この瞬間体感しているかの様に鮮明に。

その光景は、僕の脳裏に広がっていく。

目の前には半魚人の姿をした水属性と思われる魔物。そして並び立つのは、今よりももっと背が低い赤髪の親友、ファルマ。今だって童顔だけど、ここにいるファルマは更に丸みがかった顔立ちで、幼い。

そう、これは——過去の記憶。

「いつくぞおっ! 『第一^フ火炎^{レイ}魔法^ム』 ツ!」

幼いファルマは、今とは全然違う、子供っぽい口調で炎の魔法を半魚人の魔物へと放った。それを見た僕は——心底幻滅、軽蔑した気持ちで、ファルマを叱りつける。

「バカかッ!」

この時の僕は荒れていて、口調も今と違って荒々しく、ファルマに對しても心を開いていなかった。

小さな火球は半魚人の魔物にぶつかり、しゅんつとその大きさをもっと小さくしてしまう。それでも本当に小さな火の粉が魔物に降りかかったが、魔物は少しひるんだだけでダメージなんて与えられちやいない。僕は本当に腹立たしく、ファルマの尻拭いをするつもりで、その隙を突いて魔法を放つ準備をする。

半魚人の魔物は、大した傷を負わずともひるんだ事が不快だったのか。ファルマを睨み付けて、突撃してくる。

「うわあああつ! 助けてドライブズうっ!!」

そう叫び僕の後ろへ隠れたファルマを放っておいて、僕は準備が終わった魔法を放った。

『第二^フ氷結^ザ魔法^ド』!」

小さな氷の刃を伴った吹雪が半魚人の魔物を刻みつけ、凍てつかせる。

魔物はそれだけで傷つき、弱り、よろめく。

「さんきゅー! じゃーこれでトドメッ!」

ファルマは漁夫の利を得るように槍で魔物首を貫き、トドメを差し

た。



魔物を解体し、素材を採取する作業を行いながら。

「ドライブズってもう第二階級の基礎魔法が使えるんだね、すごいやー！」
軽口を言つて僕をおだてるファルマに対して。僕は本当に、本当にイライラして暴言で返す。

「そう言うお前は大馬鹿者だな。火は風に強く、風は土に強く、土は水に強く、水は火に強い。四大元素の四すくみ。こんなもの、入学試験レベルの常識だぞ。そんな事も判らないようなバカとどうして組まないといけないんだ」

この時の僕は、空回っていた。

「ルクシエラ師匠の養子にして弟子である」。その責任感に追い詰められて、必死に、限界を超えて勉強と修行に打ち込んでいた。何度も倒れて、何度保健室のお世話になった事か。

だから、他の事に気を回す余裕なんて無かった。しつこく声をかけてくるクラスメイトのファルマはただただ、邪魔で鬱陶しい存在だった。

なのに。どういう事なのかファルマは師匠に取り入って、気に入られ。僕とファルマは二人で組んで修業やそれを兼ね備えた魔物の退治、素材調達などの課題をさせられていた。

突然の出来事に戸惑い、でも師匠の指示だから逆らえず、嫌々一緒に行動している。そんなある日の出来事だったのだ。

「失礼だなー。流石に僕だつてそれくらい判ってるよ。ドライブズの言うとおりに入学試験レベルの常識なんだよ？ 知らなかったらあの学校に入ってるなんて」

言われて、少しだけ頭が冷える。

この頃の僕達はまだ入学したての初等生だった。みんな魔法の基礎の勉強中。ある程度優秀な子は自分の属性の第一階級の基礎魔法が使えて、少し遅れてる子はまず第一階級の基礎魔法が使えるように勉強と修練、そして魔法絡みの知識を授業で受ける、と言った段階だ。

僕は無茶をして勉強していたから、本来なら数年先での習得が目標

となる第二階級の基礎魔法を既に会得していた。だから、ファルマを馬鹿者だと決めつけてしまったが。現時点で第一階級の基礎魔法が使える時点でファルマが決して悪い成績では無い事は明らかだった。「……ならなんであんな無駄な事をしたんだ」

ファルマの真意を確かめるべく、僕は手を動かしながら問いただす。

「無駄なんかじゃ無かったさ」

「なんだと？」

「確かに火属性は水属性に相性が悪い。習ってた通りだ。でも、相性が悪い”って具体的にはどういうこと？ 100の魔法が50になるの？ それとも0、全く効かないの？ そこまではまだ習ってない。だから、試してみた。結果は、まあ25くらいになってたかな？ ちよこつとだけひるんだでしょ。経験も得られたし、次のドライブの魔法に繋がった。得るものはあったと思うけど？」

つらつら述べるファルマの言い分を僕は半信半疑で聞き流す。ファルマは無邪気で明るく、悪く言えば年齢以上に子供っぽい。今適当に考えた屁理屈にしか聞こえなかった。

「詭弁だな。『教科書に書いてある通りの事が事実かどうかなど自分の目で確かめてみなければ判らない』、なんてありきたりな説教でもしたいのか？」

僕はそう切り返すとファルマは少しだけはにかむ。

「いやだなー。僕がそんな高尚な事を考えて生きてるように思える？」

その笑顔に、腹が立った。

「全く思わない。だから詭弁だって言うんだよ。どうせ適当に戦って、その言い訳をつらつら今思いつきで並べ立てているだけだろ」

僕はそう言い捨てた。

すると、ファルマは笑顔を消す。これだけ塩対応を繰り返しているのだ、怒ったって当然だ。寧ろ、そうやって僕を嫌いになれ。とっとと離れていってくれ。そんな風に思っているのに。ファルマは怒ったりはせず、ただ真っ直ぐな眼差しを僕へと向けていた。

「適当なんかじゃ無かったよ。僕は真剣に戦った」
「っ」

普段の無邪気さとのギャップに、思わず返す言葉を失った。ファルマに対してどんなに悪い印象を持っていた当時の僕でも。ファルマのこの言葉が本心である事が伝わる程に、真摯な眼差しだったから。「教科書通りとか、詭弁とか、そんな、難しい話じゃ無いんだよ。もっとシンプルで、もっと情けない理由だって」

少しだけファルマの口元が綻ぶ。だけど、目は変わらず「本気の日」をしていた。

「水属性に火属性は相性が悪い。判りきっていた事だった。でもさ。今の僕には『第一火炎魔法』しか使え無いんだ。他に切れるカードなんて持って無い」

ファルマは僕に向けていた視線を落とし、魔物の解体作業を続けながら言葉を繋ぐ。それは、僕から目を逸らすというよりはまるで、自分自身から目を逸らすような、落ち込んでうつむき地面を見つめるときのような仕草に見えた。

「僕の魔法はきつと効かない。判ってた。でも、だからって何もしないで諦めるのは嫌だった。効かないって判っていても、それでも、もしかしたらって思ってたカードを切って。それでダメだったらそれで良い。諦めるのはその後でも遅くない。でもほんの少しでも何か得られるモノがあれば……その行動は無駄にはならない筈だ。そうすれば、あの時あしておけばよかった」なんて後悔、もう二度としなくて済む」

今考えた、適当な言葉なんかには聞こえなかった。確かな重みを、感じた。

「僕に出来る全てをやる」

この後、何度も耳にする事になる、ファルマの口癖を聞いたのはこの時が初めてだった。

「そうじゃないといけないんだ。そうじゃないと、きつと、また、後悔し続ける。同じ失敗を、繰り返したくない」

ファルマは取り分けた素材を整頓し、顔を上げた。

「シンプルって言ったのに無駄に長くなっちゃたね。要するに効かないのは判ってけど、あの時僕に出来る事はそれしか無かった。だからやった”。それだけの事なんだよ」

その言葉を最後に、僕の意識は現実へと引き戻されていく――

外伝94・6話 あいつの思い描く『主人公』であつて見せようッ！

それは、瞬く間の出来事だったみたいだ。

何年前かも判らない過去の記憶。思い返して見れば、ほんの一瞬だ。

「無事か、ドライブズッ！」

心配したイクリップスさんの声が聞こえ、空を駆けて寄ってくる。今ココで僕が答えるべき言葉は。

「はい。問題ありません。そして、イクリップスさん。最後のチャンスを下さい」

イクリップスさんの前に手を出して、待って下さい、と手振り伝える。

「最後の、チャンスだと？」

「まだ、一つだけ。試してない事がありました」

そうだ。あの青白い光が何だったのかは判らない。でも垣間見た記憶は、確かに僕のモノ。大切な、思い出。

「待て、なんの事だ!? お前の『破滅の光』はもう殆ど残って居ないはず——」

イクリップスさんの言葉を遮って、さっきまでとは全く逆の気持ちで剣の柄を強く握りしめて言い放つ。

「確かにその通りです。でも、僕はルクシエラさんの弟子である前に、『破滅の光』の継承者である前に——八天導師が一翼。氷の魔導を管理し司る者、『氷天』ドライブズッ!!」

ファルマが僕のために作ってくれた剣。『氷燐剣（中略）』、正しくは『原初の魔剣ギヤラクシーライト氷燐飾剣零式（ひょうりんかざりつるぎぜろしき）』。変な名前だけど、でも、大事な、僕の相棒。

「リーゼッ！ アイルさんの元へ突撃して欲しいッ！」

僕の要請に、リーゼも、イクリップスさんもぎよつとした様子で答える。

「ドライズツ!? 何をするつもりだッ接近してもあの暗紫色の魔力に阻まれ、刻まれるだけだぞッ!」

「ドライズ、何か閃いたの!?」

二人の言葉への答えは、ただ一つ。

「僕はまだ『僕に出来る全て』をやっていない。諦めるのは。賭けに出るのは、その後でも遅くない。違いますか、イクリプスさん?」

「何を言う!? 今のお前に何が出来るというのだ!?」

「イクリプスさんの言うとおり、もう僕には『破滅の光』が殆ど残って居ません。でも——氷の魔力は、一切使って無い!! 全力を以て扱えます!!」

親友に貰った愛剣。『破滅の光』を刀身としていたその刃を、僕の氷の魔力へと切り替える。この剣の略称が『氷燐剣』である事、その由来は。僕が扱える属性が光と氷だから。氷はそのまま、燐は光を表す言葉だ。

「正気かッ!? 相手は未知の原初の魔力、通常の魔法が通じるとは考えにくいぞ!!」

「でも、まだ試していませんッ!! やれる事があるのに、やりもしないで諦めるんですか!? 諦めるのは、やってみてからでも遅くない——僕の相棒はいつもそう言っていました!!」

あいつは。ファルマは。僕を『主人公』と呼ぶ。

重い過去を背負っているから? それでも必死に努力して、生きているから?

師匠に恵まれ、仲間にも恵まれ、色んな功績を残したから?

何だか、昔から、僕が何かをやる度にそれにかこつけて『さすが主人公』なんて言われてきた気がする。僕はただ、目の前の事に必死だっただけで。

もう二度と、大切なモノを失いたくなかっただけで。がむしやらに生きてきただけなのに。

だから自分が、特別な存在だなんて考えた事は無い。

でも、ファルマが僕を『主人公』と呼ぶのは、あいつなりの最大限の祝福であり、信頼であり、憧れである事は判ってる。

その想いに、応えたい。

僕は、ファルマと出会えたから前を向けたんだ。

僕は、ファルマが居てくれるから戦えるんだ。

あいつが僕を『主人公』だと呼ぶのなら。

あいつの思い描く『主人公』であって見せようッ！

それが、僕を支え続けてくれるファルマへの——せめてもの恩返しだ。

「こんな時、最後まで諦めないのが『主人公』なんですッ!!」

僕の決意に呼応するように、胸に溶けていった筈の青白い光が再び輝き出す！

「ドライズ……?」

「これは——イーヴィルとは真逆の、暖かい、優しい願い……」

ああ。力が漲ってくる。僕の想いに、世界が応えてくれている。

「ドライズ、貴方、気付いたの……?」

気付いた? 何のことだろうか。そう言えばリーゼは「僕のお陰」とか「僕じゃなきゃいけない」って言ってたっけ。

「ううん。何も。リーゼがどうして僕を特別視してくれるのか。この光、この力がなんなのか全然判らない。でも——できる気がする。大丈夫だって、誰かが応援してくれてる気がする! だから、行くよ、リーゼ!!」

氷の刀身を最大限まで巨大にして、構える。

リーゼは見蕩れるように少しだけ間を置いて、答えた。

「最高速度で駆け抜けるッ! ドライズをアイルの所へ連れて行くんじゃない。お願い、ドライズ。私をアイルの所へ導いて!! 邪魔するモノを、切り開いて!!」

言葉と共に、ギユンと身体に重みを感じ、風景が無数の線へと変化する!

「待ってッ二人ともッ!」

僕達の後ろを、イクリップスさんが付いてくる。これなら、もししくじっても大丈夫だ。

「ダメだったその時こそは、イクリップスさんに任せます! これが僕

の、最後のあがきだッ!!」

背中ではイクリプスさんに伝えると、イクリプスさんは――。

「ッ、良いだろう見届けてやる。やれるだけやってみろッ氷天ドライズッ!!」

背中から、応援してくれた。

目の前に、巨大な十字架に磔にされた上に鎖に縛られるアイルさんの身体が迫ってくる。そして、僕達の邪魔をするように暗紫色の魔力が立ちはだかった。

「負けるもんかッ! 助けられる“かもしれない”なんて許さない――」

僕は氷の剣を大きく振り上げて、全身全霊の魔力を剣に託す。

――力を、勇気を貸してッファルマッ!!

この剣を作ってくれた親友への想いを乗せて。

「絶対に助け出すッ!! “誰一人欠けることの無い学園生活”、リ―ゼのその願いを、叶えて見せる!!」

ファルマが望む、『主人公』として。

僕は多くの願いが託された剣を振り上げた。

外伝94・7話　これが『世界の中心たる者』の力か

僕は剣を振るうと同時に、自分の意志とは関係無く口が勝手にその詠唱を唱え始め。

『人智の氷は、あらゆる原初を受け入れる——全て凍て付けッ!!』
その魔法を放った。

『明鏡雪華』ッ!!」

目の前に立ちはだかった暗紫色の魔力へと、巨大な氷の刃を振り下ろす。

いかなるモノをも阻む筈の暗紫色の魔力が。

まるで、霧を晴らすかのように綺麗に、鮮やかに。

氷の刃に切り裂かれた。

僕達を阻み続けた暗紫色の魔力の壁はあっけなく両断される。

ダメで元々のつもりで試した氷の魔力だったのに思っていた以上に上手くいつて寧ろ拍子抜けしてしまう位だった。

そして、チラリと闇を切り払った氷の刀身に目を向けてみると、よく見れば透明だった刀身に染み渡る様に暗紫色の魔力が流れ込んで来ている。切り裂いたと言うより、吸い取ったと言うべきか。

そして、切り口から透明な氷がピシピシと音を立てて広がってゆき、暗紫色の魔力を包み込むように凍らせていく!!

アイルさんと僕達を阻むモノはもう、存在しない。

「何もかも阻む闇の魔力。鎧にも——刃にもなるんだっけ?」

完全に暗紫色に染まった氷の刀身を見て、僕はニヤリと不適な笑みを浮かべて。

もう一度、今度は暗紫色の刀身となった剣を振り下ろす。

『明鏡暗夜』ッ!!」

氷の刀身がアイルさんをごんじがらめに縛り付ける重々しい金属質の鎖にぶつかると同時に甲高い音を立てて碎け散る。

すると、中に吸い込まれていた黒紫色の魔力が新たな刀身として顔

を出し。あらゆるモノを遮断する闇の魔力が、アイルさんを束縛する鎖を切り裂き、断ち切った。

アイルさんを縛っていた鎖が解けて落下していく。磔にされた十字架から、アイルさんの身体が放り出され。

「アイルツ!!」

リーゼが優しく、受け止めた。

「う、あ、リー……ゼ……?」

寝起きの様なアイルさんの虚な瞳がリーゼの顔を見上げた。

「これが『世界の中心たる者』の力か——」

一部始終を見届けていたイクリプスさんが感嘆の言葉を漏らす。そして。

「二人——いや、三人共離れる。後は俺の仕事だ」

改めて、イクリプスさんは太陽と大剣と三日月の曲剣を構える。

「リーゼツよろしくツ!!」

「ええツ!!」

リーゼはアイルを抱き締めたまま、僕と共にこの空を離れていく。空に残ったのは、氷漬けになって固まってしまった暗紫色の魔力と、アイルさんという核をなくした巨大な十字架と西洋鎧が組み合わせたようなイーヴィルの抜けがらと。

それを見据える、イクリプスさんだけだ。

「ああ。ここまで感情が揺さぶられたのは久しぶりだ。本当に、今日はなんて日なんだろうか。最悪だ。姉貴じゃ無いが、少々、八つ当たりでもしなければやってられない」

遠のいていくイクリプスさんの声は、らしくも無く怒りに震えていた。

「いや、そもそも元凶はお前なのだから、八つ当たりでは無いな。——
正当な抗議だ」

イクリプスさんの背に浮かぶ日食を模した白円。そして、その陰となる黒円が。

丁度円の半分を埋める程まで広がった。

今まで、円の四分の一程しか影は差して居なかったのだ。これは、

一段階所では無い。イクリプスさんは『数段階』 “破滅の光” の出力を上げていた。

「ここが空中で良かった。空へ向けければ、他の誰も巻き込まないッ!!」
明確な憤怒の心を燃やしたイクリプスさんの強い言葉に呼応する様に、強大な “破滅の光” を更に増幅していく!

「——消えて無くなれ。何もかも」

最後に冷たく、そう言い残して。

イクリプスさんは三日月の曲剣を投げ放った。

『我が名は凶兆。破滅を告げる厄災の剣』

この “破滅の光” の出力で、更に唱えられる詠唱。

それは紛れもなく、破滅の力そのものであり。

生ける天災——厄災の剣と呼ぶに相応しい一撃。

投げ放たれた三日月の曲剣が弧を描き十字架の中心を切り裂き駆け抜ける!

それと反対方向から、イクリプスさんは両手で構えた太陽を大剣を大きく振るうッ!

『ダイヤモンドリング』ッ!!」

二つの斬撃が交差すると同時に、暴力的なまでに目映い光が青空を白一色に染め上げた。

光の暴力は、氷付けになった暗紫色の魔力も、十字架を模したアイルさんのイーヴィルも何もかも飲み込み、崩壊させてゆく。

光の奔流は天空を貫き、闇の広がる最果てまで届き、その光景はまるで、宇宙空間に白い光の巨塔が突如として現れた様だった、と天体観測者は後に記録した。

光に照らされた一面の白い空なんて異様な光景、誰が見たことがあるのか。

それは、眼下の学園で戦う生徒達がみな、嫌でも照らされ気付いてしまう程の光の暴力だった。

直視なんて出来ない。幸い、戦って居た者達は皆目の前の敵に集中していたのでその時空を仰ぎ見ていた者は居なかったらしいが。もし仮にこの “白空” を直視していたら、網膜が焼かれていた可能性が

高い。

後に珍しくイクリップスさんがティアロ校長先生に「やり過ぎだ」と叱られてしまったらしい。そういう所は流星は僕の師匠である、ルクシエラの双子の弟だなど少し面白かった。

空は暫く真つ白に照らされ続けた。空から地上の様子を見る。事件の元凶となったイーヴィル・アイルさんが解放された事で、イーヴィルの発生が止まったらしい。膠着状態だった学園の戦況が、優勢へと傾く。

更に、まだ鎮圧出来ていなかったイーヴィル化してしまった孤児院の生徒もイーヴィル・アイルさんという力の供給源を断たれ、クラスで言えば1段階下がった位に弱体化し、動きが鈍っていた。

この事件はもう、大丈夫だ。

リーゼの飛行速度も少しずつ遅くなっている。

「リーゼ、大丈夫かい？」

イーヴィルとしてのリーゼの魔力も尽きかけているだろう。

「平気よ。貴方達を送り届けるだけの力は残ってる。それに多分、他の子達も弱ってるだけで手加減した『破滅の光』を当てないと元には戻らないと思うわ」

「そっか。なら、まだ僕達の力が必要だね」

僕とアイルさんを運んでくれたリーゼは、学校の屋上に着陸する。

そして、アイルさんを寝かせた。

「リーゼ……俺、何してた……？」

アイルさんは弱々しくも意識があるらしい。その問いかけにリーゼは慈母のように優しい笑顔で答える。

「少しだけ、悪い夢を見ていたのよ。優しいけど不器用な、貴方らしい悪夢を」

「ははは……ひよつとして、なんか……やらかしたか……？」

弱々しくアイルさんが顔を歪める。リーゼは首を縦に振りしかし、子供を寝かしつけるようにアイルさんの頭を優しくなで始めた。

「そうね。すっごくやらかしたわ。でも、ドライブと、イクリップスさんが助けてくれた。学園のみんなも、頑張つて戦つてたわ。大丈夫、今

回は何も、失わずに済んだから、だから今は少しだけ、眠りなさい」
「そっか……後で……謝らないとなー……」

アイルさんの瞼が、ゆっくり閉じていく。

「でも……その前に……ドライズ、イクス……ありがと…………」

言葉はそこで途切れて、アイルさんは深い眠りに落ちたのであった。



その後は半日も経たずして事件は収束した。

学園内に発生したイーヴィルは全て討伐され、イーヴィル化してしまった孤児院の生徒達も全員無事に身柄を確保。

あとは、ファルマの設計したマジックアイテム『フェア・クリスタル』をレンとアーシエが数日ばかりで生産して。

次に破滅の光を持つルクシエラさん、イクリプスさん、僕が、『フェア・クリスタル』へ『破滅の光』を注ぐ。

希釈された『破滅の光』、ファルマが開発した魔法『破魔のルクスエクラ』によって孤児院の生徒達は無事に元の姿に戻る事ができた。

「少し時間がかかったけど、やっと全部終わったよ。ファルマ」

僕は保健室のベットで眠り続ける、ファルマの傍らに花を添えながら伝える。

「お見舞い、遅れてごめんね」

アイルさんを救出し、保健室へ連れて行った時。同時にファルマも保健室に担ぎ込まれていた。真っ青な表情で心配していたシジアンちゃんとアリシアさんの顔が忘れられない。

それから数日間、アイルさんは目を覚ましたけれどファルマは未だに目を覚まさない。

「やっぱり君も、戦ってたんだね。大活躍だったらしいじゃないか」

心配じゃない訳がない。腕を斬り飛ばされたと。かなり無茶をしたとシジアンちゃんとアリシアさんから聞いた。もう二度と目を覚まさないかもしれない、なんて不安な気持ちもある。

けれど。今眠っているファルマの寝顔は。全てをやりきったとでも言いたそうなとても安らかなモノだった。だからきつと、今は少し

疲れてるだけ。

「自慢って訳じゃ無いけどさ。僕も頑張ったよ。君がくれた剣と、思
い出を蘇らせてくれた不思議な光のお陰だったけど——少しは、『主
人公』らしい事できたかな？」

僕はファルマの病床から離れ、カーテンを閉めた。

??話1 昔の記憶

夢を、見ている。

最近、色んな夢を見てる気がするな。

理想的な悪夢だったり。

絶望的な正夢だったり。

夢見が悪いつたらありやしない。

今見てる夢は……。

——ああ、昔の記憶か……。

◇ ◇ ◇

どくん、どくん。緊張で胸が鳴っていた。

新品の赤いローブに袖を通して。

カチコチに固まった身体をギクシャクさせながら「僕」はその人に会いに行く。

ノックを三回、トビラを開けて待っていたのは。

白いローブの上に更に白衣を纏った、自信に満ちあふれた表情が眩しい大魔道士。

「あらっ！ とーっても良く似合ってますわ！」

ルクシエラさんは両手を合わせて、大層嬉しそうに微笑む。控えめな胸に輝く白い羽根の勲章が揺れた。

「本当に、良いんでしょうか……僕なんか「八天導師」だなんて」

僕は喜ぶルクシエラさんの視線から逃げるように、気まずく目を逸らして俯く。

「今更なあと行ってますの。及第点ギリギリとはいえ試験は合格しているのですし、テイル爺の弟子である私が推薦したのです。何処に文句の付けようがあると言いますの？」

「いや、でも、僕、そもそも一般家庭で魔法使いの血脈ですら無いですし、凡人だし、」

指先と指先を重ねてまごつく僕の腕を、その人は無理矢理ぐいと引っ張った。

「うだうだうるせえですわ！ そんな事より、早く他の皆さんにお披

露目に行きましよう！」

そう言つて、僕を引きずるように廊下へ飛び出し駆けていく。

「八天導師もこれで七人、後一人で揃いますわ！」

迷っているのは本当だった。

自分なんかで良いのか？ この人と同じ場所に居て良いのか？

自分の胸の上で紅い羽根の勲章が揺れる度に不安になってしまふ。

でも、この人はそんな僕の悩みなんてお構いなしに。

わがままに、けれど最大限の愛を持って僕を引っ張っていつてくれ

るから。

だから。

この人に、ついて行こう。この人の想いに応えられる人間であらうって。

八天導師に入ったこの日から、ずっと想ってる。

◇ ◇ ◇

ドバーンツ、と開かれたドアが勢い余つて壁にめり込む強さでルクシエラさんは会議室のトビラをこじ開けた。

部屋全体が揺れるが、中に居た四人は特に驚きもせず。寧ろ全員が同時にため息を吐く。

「何故トビラを開けるだけで壁にヒビを入れるのじゃ、お主は……」

部屋に置かれた円卓の中央正面に座るこの組織の主、白髪の老人ティアロ様が皺の多いその顔に更に皺を増やして、最早諦めきつた空虚な眼差しを明後日の方向に差し向けながら呟く。

「二番弟子の晴れ姿！ 一刻も早くお披露目したいからに決まってるわッ!!」

両手を腰に当ててふんす、と胸を張るルクシエラさんに対して僕の方はと言えば緊張で声も出ない。自然な流れで、部屋に居た四人の視線が僕に向いた。

その中の一人が歩み寄ってきて。

僕より頭一つ分くらい背が高く、水色の長いポニーテールが印象的な僕の親友。

氷天ドライズが、中性的で凛々しく美しい表情を僅かに崩して、言

う。

「待ちくたびれたぞ、ファルマ」

少しだけ緊張がほぐれて、僕は。

「先に行っちゃったのはそっちの方だろうか？」

ちよつと拗ね気味に僕は答える。ドライブとは同じ魔法学校に通っていたのだが、在学中に数々の実績を残したドライブは学校を本来の期間よりも一年早く卒業し、八天導師の仲間入りをしていた。

「キミのせいで僕、一年間ぼっち生活だったんですけどー」

露骨に頬を膨らませて文句を言う。

「なんだ。新しく友達作らなかつたのか？」

ドライブが意外そうな顔を向けてきた。

「キミにカロリー使いすぎてもうそんな気力残って無かつたやい！

大体、ラスト一年とかもう既に人間関係完成してる所に割り込める訳ないだろー！」

「お前がそんな事を気にするなんてな。『無理矢理』俺に絡んできた、あのお前が」

『無理矢理』を一文字ずつ抑揚を付けて強調してからかうようにドライブはにやついた。

「アレは若気の至りだったのツ!! それでもう体力も精神力も使い果たしたんだよ!!」

恥ずかしい記憶を掘り起こされて、僕は顔を真っ赤にしながら服の裾を握りしめた。

「ソレは悪かつたな。だが、ここではそうもいかんぞ。ほら、先輩方に挨拶してこい」

ドライブは僕の背に回ってトンつと押し込んだ。思わずつんのめって、なんとかバランスを取り直す。でもそれで一步先輩達の方に近づいてしまった。忘れて居た緊張が戻ってくる。

目の前に立つのは二人の人物。

ルクシエラさんと同じティアア口様の弟子、風天アイルさんとルクシエラさんの親友雷天イルゼルナさん。

二人とも、初対面と言う訳では無い。ルクシエラさんのお手伝いを

していた時に何度か顔を合わせた事があるが——だからこそ、もつと緊張する。この二人が凄い魔法使いだと言う事を、よく判っていたから。

この二人の胸に輝く羽根の勲章と同じモノを、自分も付けていると意識してしまうから。

「その、アイルさん、イルゼルナさん、よろしくお願いします……」

「おーす、ドライブと違ってお前さんは変わらねーなーファルマ」

アイルさんがにこにこ笑いながら僕の頭をくしゃくしゃなで回した。

「ちよ、どういう意味ですか？」

「いやさー。ドライブのヤツ2，3年見なかっただけで身長爆伸びしてんじゃん。最初別人かと思ったわ」

「それ暗に僕がちっさいままなのデイスってません？」

ちよこつとムカついた。実は12歳から身長が全然変わってない。

「わりーわりーそんなつもりじゃねーよ。今後ともよろしくなー」

アイルさんは少しだけ申し訳なさそうな笑みを浮かべて、席に戻っていく。

「ファルマ君。改めてよろしく、といった所だな」

続いて、雷天イルゼルナさんが手を差し出してくる。

「えっ、あつ、よ、よろしくお願いします……」

新しい職場の先輩とはいえ、異性の手を握った経験は少ない。ドギマギしながら握手に応じた。

ら。

がしつと僕の手はイルゼルナさんの両手でがちりホールドされた。

「ルーシーに振り回されている者同士、仲良くやっていこうじゃないかっ!!」

いつも通り目は糸のように細く閉じられたまま、切実そうにつり上がっている。

「でもその距離の詰め方はルクシエラさんと被ってますよ」

「な、そうなのか!？」

「はい、いきなり手をがちりホールドされました」

ルクシエラさんと初めて出会った時はその逃げられなくなった状態で色々畳み掛けられたっけ。イルゼルナさんは恥ずかしそうに、バツと手を離す。

「申し訳ないっ」

「いえ、気になさらないでください。——お互い、苦勞が絶えないのは本当でしょうし、今度色々お話しましょう」

「ああ、是非そうしよう。ではな」

アイルさんも、イルゼルナさんも。僕の事を「ルクシエラさんの弟子」として見ている。

その事が誇らしくもあり、不安でもあった。

僕の評価はそのままルクシエラさんの評価に直結してしまう……。

恩義のあるルクシエラさんの顔に泥を塗るような事だけはしないようにしないと。

僕は両手でパチンと頬を叩いて気合いを入れ直した。

??話2 ドライズとルクシエラさんが、来いって言うてくれたから。

僕は最後に、ティアロ様の座る席へ向かう。円卓になっているから正面には立てない。横まで行つて、頭を下げた。

「これから、よろしくお願いします!」

ティアロ様は僕の師匠であるルクシエラさんの更に師匠。大地の賢者と呼ばれる超凄い魔法使いだ。いくらコネ入社とはいえそんな人が直轄する組織に入れて貰えたなんて今でも信じられない。

「そう肩肘を張らずとも良いぞ。今まで通り、ルーシーを支えてくれればそれで十分じゃ」

「はいっ」

今まで通りで良い。その言葉を聞いて少し安心した。

「ところでティル爺。今日はもう一人加入して七人になるんじゃないやありませんでした?」

ルクシエラさんが頬に指を当てて首を傾げる。この場に居るのは六人。あと一人足りない。というか今日加入するって事は——僕と同期の人が居る!?

ルクシエラさんの言葉に、ティアロ様は苦笑いを浮かべて答えた。「もうすぐそこまで来ておるぞ。お主がトビラをぶち壊したせいで廊下が筒抜けじゃからな」

自然と視線が廊下に向かう。

廊下の中央と、つかつかと歩く少女の姿が見えた。

二つのリング状に結ばれた藍色の長い髪、海のように鮮やかな青色のローブを纏い、短めでフリフリしたスカートが揺れる。全体的に、可愛らしさを感じる服装なのに、対照的に表情は仮面の様な無表情で少し不気味だった。

彼女はぶち壊れたドアの事などお構いなしに会議室に入ってきて。

そのままペこり、と無言でお辞儀をした。

「水天レン・ウエルテクス。ドライズとファルマと同じ年齢じゃ」

同期の八天導師がどんな人間がわくわくしていたが、その振る舞いやティアロ様の説明を聞いて少し悲しくなった。

—— 同年代の女子……ッ！ もう6年くらいまともに会話してない……。

魔法学校に編入する前に、初恋がらみで大失敗をやらかしたせいで僕は同年代の女性と会話をするのが怖くなっていった。ルクシエラさんやイルゼルナさんみたいに明らかに年上の人だったり、逆に年齢の低い子供相手なら普通に会話出来るんだけど……。

折角の同期、仲良くなれそうな人だったら良いなと思ったんだけど一気にハードルが高くなった様に感じられる。

「レンは生まれつき声を出せぬ。魔法によって会話は出来るが簡単なモノでは無いらしくてな。言葉数が少なくなりがちだが、気を遣ってやって欲しい」

『……よろしくお願いします』

ティアロ様の言葉を肯定する様に、不思議な音が聞こえてきた。確かに僕達の使っている言語なのだが、少しだけ抑揚やアクセントに違和感を覚える、「作られた声」。レンさん自身の口元は一切動いていない。

そして、ここに居る全員が驚いただろう。「声の出せない魔法使い」という存在に。

それは即ち、魔法を発動するための「詠唱」が出来ないということ。

簡単に例えるのならば、魔法を使う時に唱える詠唱は算術をするときの「計算機」みたいなモノだ。いちいち自分の頭の中で構成するのが面倒な計算を省略してくれる便利な代物。

それ無しで魔法を発動するという事は即ち、算術で例えるなら暗算できるレベルの簡単な術式であるか——「計算機」無しで高度な計算が出来る程の才能を持っているか、のどちらかである。

そしてこの組織が「八天導師」——ティアロ様を選びすぐりの魔法使いを集めた組織である以上、レンさんは後者に違いない。

「姐さんもティル爺も、おもしろー子ばっか集めてくんじやん」

アイルさんは興味深そうに、或いはレンさんを値踏みするようにやけて笑う。

「ウエルテクス——名家の姓ではないか。良くもまあこんな大雑把な組織に引き抜けたものだな」

イルゼルナさんも感心していた。どうやら魔法使いの間では有名な家柄みたいだ。僕は一般家庭の出だから、その辺の常識に疎い。

……いや、そもそも社会情勢とかに興味無いから魔法使いとか一般とか関係なしに有名人とか全然知らなかったや。ルクシエラさんですらネットで検索するまで、「どつかで聞いた事あるな」程度の認識だったし。

「なんじゃイズナ、その言い方じゃとまるでワシが無理矢理レンを連れてきたようではないか。ここに居るのはきちんと本人の意志じゃぞ」

困った顔を作ったティアロ様の言葉を肯定するように、レンさんは無表情のままコクリと頷いた。

『……研究援助、凄く魅力的』

硬い表情の中、僅かに口の端が伸びている気がする。

「納得ですわ。ティル爺、お金だけは腐る程持っていますものね」

「だけとはなんじゃ、だけとは。さて、新たな仲間も揃ったところで改めて。〃八天導師〃がどのような組織か確認する。ファルマとレンは正面の席へ。他のメンバーは定位置に着け」

言われて、僕達は円卓に座った。

〃八天導師〃はティアロ様が立ち上げた個人事業だ。世界にとって良くない〃悪しき魔導〃を取り締まったり、魔導を悪用する魔法使いを摘発したり、人間社会を著しく脅かす魔物を討伐する事が主な業務になる。

「活動内容はあくまでワシ個人の思想によるモノだ。諸外国の政府と正式に繋がってもいないし、〃悪しき魔導〃というモノの判断もあくまでメンバーの採決によって決定する独善的なものである。我々は決して〃正義の味方〃などではない」

立場的には自警団が近いだろうか。明確に権力を持っている訳で

はない。

「我々の活動に友好的な国もあれば、強く反発する国もある。敵は数多い。そんな組織だ、身の危険は常に付き纏う。その事を改めて認識して欲しい」

ティアロ様の視線が、新人である僕とレンを真っ直ぐ貫いていた。「そんなワシのわががまに付き合っつて貰う対価として払えるものは、研究援助”だけじゃ”」

“八天導師”として働く事の報酬、それは莫大な給与と研究財産の提供だ。

ティアロ様は長い時を生きた大地の賢者。資金も、資源も、数多くの権利を持っている。その強大な後ろ盾を以て自分の好きな研究をしてもいい。それが“八天導師”に与えられる特権である。

「敢えて、悪い言い方をする。“八天導師”に参加すると言う事は、金の為だけにワシに命を預けると言っている様なものだ。それでも尚、お主達はワシの力になってくれるだろうか？」

最終確認として、ティアロさまは僕とレンさんへとそれぞれ目を合わせた。

『……問題無し』

レンさんは表情一つ変えず、そう返答する。

「僕は研究とかお金どうこうより、単にドライズとルクシエラさんの力になりたいだけなので……例え援助とかが無くても、命を賭けるって約束できますよ」

ちよこつとだけ声を震えさせながら、言った。

僕みたいなちっぽけな人間に何が出来るのか。僕なんかがこの組織で何の役に立つのか。存在意義が全く見出せないけど。

ドライズとルクシエラさんが、来いって言ってくれたから。

こんな僕でも、必要としてくれたから。だから僕は戦える。

命を賭けるって、比喩とか冗談じゃ無い。

僕は本気で、二人の為なら死んでも良いと思ってる。

何にも持っていないなかった僕に出来た、特別な絆——世界で一番大切

なモノが、ここには有るから。

「協力、感謝する。歓迎しよう。炎天ファルマ、水天レンよ」
最後にティアロ様は、深々と頭を下げた。

??話3 ドライズ。ファルマ。私の弟子になってくれて、ありがとうございます

その日は、新人歓迎会が執り行われた。料理はドライズとアイルさんお手製の豪華なラインナップが並ぶ。食材は三つ星、料理人の腕前はプロと遜色ない。そこら辺の飲食店より遥かに美味しい、贅沢なパーティだった。

……正直、贅沢すぎて食べる程に気が重くなっていった。

僕はその辺に転がる石ころだ。特別な才能も、能力も何も無い。

それがたまたま通りがかったルクシエラさんに拾われて、今、ここに居る。

こんなに歓迎されると、自分の存在に期待がかかっているように感じられてしまう。

そんな期待に応えられるほど、僕は強く無いのに。

対してレンさんは会議中は無表情に近かった表情を、ギリギリ笑顔と認識できる位までには緩めて、食事を楽しんでいる。きつと、レンさんはこの場に居るに相応しい魔法使いで。その自信もしっかり持っているんだろうな。

なんて、思いながら。僕は窓辺から夜空を見上げてジューズを口に含んだ。

すると、高い人影が横に並ぶ。

「お前の好物ばかり用意しておいたぞ。口にあったか？」

ドライズが何かを期待するような目で僕を見下ろしていた。

「キミの料理が不味いわけ無いだろ。美味しかったさ、いつも通り。一年ぶりに、満足した」

ドライズは僕の言葉を聞くと満足げに目を閉じて。

もう一度目を開くと今度は心配そうな視線を送ってきた。

「長い付き合いだ。嘘も世辞も無いとは判る。……が、憂鬱そうじゃないか」

「そうかな？ 楽しいし嬉しいよ」

嘘は吐いてない。嬉しさ3割、不安7割って感じだったから。

「お前は時々、星を眺めるよな」

「そうなの？ 自覚はしてなかったかな。星座とか全然わかんないし」

久しい友人との、適当な会話。

内容なんて大した事無いけどたったこれだけのやりとりで、少し心が軽くなった。

「俺も、お前が来てくれて嬉しかったぞ」

ドライズはそう言って笑った。

当たり前に喜び、当たり前に笑うドライズの姿が、少しだけ面白い。僕はからかうようににまにまにやけて、言う。

「出会った頃はあんなにツンツンしてたクセに。もうデレデレだね」

大きな隈を作った虚ろな眼差しで勉強机に張り付いて。声をかけても「悪いがお前に付き合う余裕なんてない」って突っぱねられた事を思い返せば、おかしくも感じる。

「お前がそうさせたんだろ？」

「キミがいつの間にか勝手に変わったんだよ。僕はただ、ルクシエラさんに引つ張り回されながら適当に過ごしてただけだもん」

「無自覚なヤツだな……」

ドライズはクスリと苦笑いを浮かべて、自分のジュースを飲んだ。

そんな僕達二人の間に、ガバツと割って入ってくる人が。

「二人とも。呑んでいますかあ!？」

白い肌を紅く染めて、上機嫌に笑いながら僕とドライズの肩へ両腕を預けるルクシエラさん。

「学園は卒業しましたけど僕達未成年ですよ、ルクシエラさん」

「師匠、すっかりできあがってるな……」

「何回か見たことあるけど、〃生ける天災〃もお酒には酔うんだね」

僕とドライズは同時に呆れた表情を作る。

「気分次第で酔う、酔わないを決められるらしいぞ」

「何それ便利過ぎじゃん」

「本当に、謎だらけだな 〃原初の魔力〃というものは」

「二人ともお……飲み会が終わっはら着いてきださい。連れへ行ひはい場所がありません」

回らない呂律でルクシエラさんが言う。

「連れて行きたい場所？」

「ああ、あそこですか……」

僕はイマイチピンと来なかったが、ドライブには思い当たる場所があるらしい。

歓迎会が終わった後、コホンと咳払いを一つして一瞬にして頬の紅みが抜けたルクシエラさんが俺とドライブの前に行く。

「こちらです」

本当に気分一つで酔いを覚ますのだから驚かされる。

八天導師の拠点である屋敷を出て、少しだけ歩いた。

暗い夜道をドライブが光で灯して進んでいく。光天であるルクシエラさんがそれをしないのは、ルクシエラさんの場合ただの照明魔法ですら破壊的な威力になってしまうからだ。

屋敷の近くにあった林、少しだけ傾斜のキツイ坂道を登っていくと。

景色が開けた。

街を一望できる高原の真ん中に、×印に突き立つ二振りの剣。一つは、太陽を象つた紋章を持つ大剣、もう一つは三日月を象つたナツクルガードを備える片手用の曲剣。

剣の突き立つ地面には石碑が埋め込まれている。

ルクシエラさんの後を追ひ、その目の前までやってきて並んだ。

石碑には、〃イクリプス〃とだけ書かれている。

多くの情報がある訳では無いが、それが〃お墓〃であるとするぐに気がついた。

「これ、誰の？」

ドライブに小声で聞いたつもりだったが、普通にルクシエラさんにも聞こえていたらしい。

「私の双子の弟ですわ」

と、返事が返ってきた。

「弟さんが、居たんですね……」

僕はこの時、初めて知った。

ルクシエラさんはお墓に、酒瓶を一本供える。

「ほら、ヴィンテージモノの高級品ですわ。ありがたく呑みなさい」

恩着せがましくお墓にそう語りかけ、

「ちよつと前までは子供だった弟子達が、気がつけば二人とももう大人になりました。私、きちんと師匠をやっていますのよ。褒めなさいな」

そこに居るはずの「イクリップス」さんに向けて言葉を投げ続ける。

「いやまだ未成年って言ってるじゃないですか」

と僕がツツコむも、

「16をとつくに過ぎてる時点でれつきとした大人ですわ。12から成人だった時代もあったくらいです」

との事だ。

「ファルマを連れてくるのは初めてです。漸く弟子だって認めてくれましたわ」

「あはは……」

僕はちよつと気まづくなってお墓から視線を逸らした。

八天導師への内定が決まるまで、僕はルクシエラさんの弟子である事を否定してきた。道ばたの石ころでしか無い僕が、ルクシエラさんみたいな特別な人の弟子であるだなんて自分自身を許せなかったのだ。

でも、同じ八天導師として戦える事になって。

少しだけ、自分が許せるようになった。

「近況報告はこれくらいです。せいぜい高見の見物でもしてなさいな。私は貴方みたいに良い人間ではありませんので、これからも自分のやりたいように、生きたいように生きます」

ルクシエラさんはそう言って、黙禱をする。

数秒の間。

祈りを捧げ終わったルクシエラさんは、僕達へ語りかけてきた。

「ドライブ。ファルマ。私の弟子になってくれて、ありがとうござい

ます」

突然の事に、僕もドライブも目を見開いた。

「感謝するのはこっちの方です、師匠」

「僕だって……！　まだ、何の役にも立ってないのに……」

そんな僕達を、ルクシエラさんは。

両腕で纏めて抱きしめる。

「ぐっ」「ちよ、」

ドライブと密着した状態で、ルクシエラさんの腕に締め付けられるのは何とというか、変な気分だった。

「ただ、側に居てくれるだけで。私は幸せですわ」

いつも自信満々で、我が道を行くルクシエラさんにしては珍しく、しおらしい様子が戸惑ってしまう。

「テイル爺も言っていましたが大天導師の職務には危険なモノもあります。なので、これだけは肝に銘じてください」

ぎゅうつと、抱きしめる力が更に強くなる。それだけの思いを込めて、僕達の師匠は言う。

「他の人間なんて、どうでも良い。世界だつてどうでもいい。本当に危なくなったら、逃げなさい。『英雄』なんかにならなくて良いから、どうか、生きていてください……」

肩にぽた、ぽたと暖かいモノを感じた。

ルクシエラさんが泣いている所なんて、今日、初めて見た……。

??話4 ホント、親子揃ってむちやくちや言うなあ
……

僕は、ルクシエラさんの為なら命を賭けられる。

ちつぽけな僕には命を賭けても足りないくらい、力が無い。

だから、戸惑った。

生きていて、って言われてもな。貴女の為に死ぬるなら本望ですよって今言ったら、張り倒されるだろうな。

「イクスは多くの命を救いました。それはきつと誇るべき事なのでしよう。それはきつと、喜ばしい事なのでしよう。だけど私は、知らない何千万、何億人の命より。イクス一人が生きていて欲しかった……」

ルクシエラさんの言葉が、胸に突き刺さる。

でも僕には、僕に差し出せるモノなんて、それくらいしか無いんですよ。

貴女やドライブズみたいに、特別な才能がある訳じゃない。

何にも持っていない石ころが、それでも星みたいに輝くには、命を燃やすしか無いんですよ。

その言葉を、飲み込む。

「私の弟子になった以上、私より先に死ぬ事なんて許しませんから。それが私から弟子達へ課す、唯一無二の掟です」

ルクシエラさんはわがままな人だ。自分が正しいと信じた道を迷わず進む強い人だ。

だからこそ惹かれたし、憧れた。

僕が何を言っても、うるせえの一言でねじ伏せられてしまうだろうな。

「無茶、言わないでくださいよ。ルクシエラさん、百歳とか余裕で超えてるんでしょ？」
「破滅の光」を継承してるドライブズはともかく、僕は一般人なんですから。普通に寿命で七、八十年で死んじやいますって」

少し冗談めかしてそう答える僕に、ルクシエラさんは大真面目にこう言った。

「そのときはどんな手段を用いても延命して差し上げますわ」

「ルクシエラさん、DNA R って言葉知ってます??？」

Do Not Attempt Resuscitation.

超簡単に意識すれば「必要以上の延命処置は苦しいだけだからしないでいいですよ」という意思表示の事だ。

「うるせえですわ。それから、レディーに年齢の話を切り込むのはお行儀が悪くつてよ」

うるせえの一言でねじ伏せられた。

「これでも、大真面目に貴方達の師匠をやってきたつもりです。だから、ファルマが今何を考えているのかも判ってるつもりです」
「っ」

どきん、と胸が一つ鳴って身体が硬直する。

全部、お見通しという訳か。

「だとしても、私は貴方達に生きていて欲しいです。他には何も求めません。好きなように生きてください。どうか——生きてください」
生きる事を強調するように繰り返し、ルクシエラさんは腕を解いた。

「まあ、善処はしますよ」

僕はルクシエラさんから目を逸らして言う。

「嘘を吐くにしてもせめて目を見て言うって貰えるかしら?」

さつきまで抱きしめられていたハズなのに、気がついたら関節技を決められていた。

「痛い痛い痛いッ！ 今死ぬ、今まさに死にますって!!」

「大げさな。ちゃんと加減してますわ」

勢い余って会議室の大トビラをぶち開け壁にめり込ませた人の言葉に信用なんて無い。

「ギブギブギブッ!」

「いいえ誓うまで離しませんッ！ 言いなさいッ！ 絶対に死なな
いって言いなさい!!」

「間接キメながらそんな脅迫する人なんて聞いた事無いですよッ!!」
ルクシエラさんの事は尊敬してるし大好きだが、こういう、力でねじ伏せようとする癖は直して欲しいと思う今日この頃。

あとルクシエラさんって美人だとは思うけど胸だけは皆無だから、こんなに密着しててもあんまりありがたみとか無いんだよね……。

「今ッ！ とてつもなく失礼な事をッ！ 考えませんでしたかッ!!」
「考えてません考えてませんっ!!」

僕は助けを求めて、ドライブに話を振った。

「ていうか、さつきから黙ってるけどドライブの方はどうなのさっ！」
視線を向けると、ドライブは。

顎に手を当て、俯いていた。

「ドライブ?」「どうなさいました?」

ルクシエラさんも驚いたようで、思わず関節技を緩めてしまったようだ。

その隙に拘束から抜け出させて貰う。作戦自体は成功だ。

ドライブは神妙な面持ちで顔を上げて、言った。

「俺も、師匠と全く同じ気持ちです」

「え?」「はい?」

ルクシエラさんと同じ気持ち、とはどういうことだろうか。

「ファルマにも、師匠にも、先に死んで欲しくないです。ずっと、生きてて欲しいです」

「ドライブ、それ僕はともかくルクシエラさんと無限ループが発生する」

ルクシエラさんは自分より先に弟子が死んで欲しくない。

ドライブは自分より先にルクシエラさんと僕が死んで欲しくない。

どっちが先に死んでも、必ずどちらかが納得出来ない。

「判ってる。判ってる、言ってる」

その矛盾を理解した上で、ドライブは言う。

「俺は一度、全てを失いました。臆気な記憶に残るのは、頭の中で続く嫌な残響と波の音。師匠に拾われ無ければ、俺はきつとあのまま死んでいました」

ドライブは物心ついた頃、何らかの事故に遭って砂浜に打ち上げられていたと言う。偶然通りがかったルクシエラさんがそんなドライブを救い、そのまま養子として迎え入れたそうだ。

「もう、本当の故郷も親の顔も何一つ思い出せません。今の俺にとって大切な家族は、師匠とファルマだけです」

「さらっと家族に入れられたけど僕別に君と親類でもなんでも無いからね？」

その愛情は正直嬉しいけどさ。でも、本当はただの他人なのにそこまで愛着持たれると申し訳なく感じちゃうよ。僕、そんな大層な人間じゃ無いんだから。

「兄弟弟子は家族みたいなもんですわ」

完全に僕の心を見透かして、ルクシエラさんがドライブの援護をする。

僕とルクシエラさんのやりとりに苦笑いを浮かべながら、ドライブは続ける。

「今ある『幸せ』が暖かければ暖かい程に……失う事を恐れてしまいます。またひとりぼっちになるのが、怖いんです。だから、二人には俺よりもずっと生きていて欲しいです」

「ホント、親子揃ってむちゃくちゃ言うなあ……」

弟子は師匠に似るものなのかな。そこまで言われたら、考えちゃうじゃ無いか。

もし僕が死んだとき、ドライブとルクシエラさんがどうなるのか。

——泣いて、くれるかな？ ——泣いて、くれるんだろうな。僕なんかの為に。

「ホント、善処はするよ。僕だって死ぬのは怖いし」

今度は二人の目をちゃんと見て言った。

「もういつそ『不死の究極魔導』の研究でも始めます？ 昔ティル爺の友人がやってたらしいですわよ」

「不死かぁ。人類の夢ですね。でも叶うとどう考えても絶望的な未来が待ってる、難儀な夢ですよ」

まあぶっちゃけ数百年単位で生きてるらしいティアロ様やルクシ

エラさんを見ていると今にも手が届きそうな世界である気はするから恐ろしい。

「或いは。一緒に死ぬか、だな」

「怖いこと言わないでくれる!? 心中とかどう転んでも悲劇にしかないじゃないじゃん!」

「じゃあ私が死ぬ時二人を道連れにすればOKですわね」

「ルクシエラさんはそれで良いんですかツ!」

「良いわけ無いでしょう。が、可愛い弟子の要望なのです。折衷案くらいは出しますわ」

「その答えが師弟心中って笑えないんですよツ!! ルクシエラさんならやるって言ったらホントにやるでしょ!!」

お墓の前で、何を話しているんだか。流石に、心中というのはドライズもルクシエラさんも冗談だったみたいで二人してクスクス笑っていた。

「さ、帰りますわよ」

ルクシエラさんは俺とドライブズの手を引いて、帰路を進む。

「未来がどうなるかなんて知ったこっちゃありません。ただ、死ぬ気で死なないように生きなさい。可愛い弟子達」

母のように優しい微笑みが、胸に染みだ。

「良い事言った風にしてますけど意味不明ですよ……」

死ぬ気で死なないように生きる、かあ。

……ホント、善処はするけどね。

??話5 間違い無い。今まで見てきた魔法陣の中で、世界一すごい魔法陣だ……。

その日、僕は会議室に呼び出されていた。

円卓の中央正面にはティアロ様が、そして向かい合うように僕と、その横にレンさんが座っている。

「お主達に初仕事を命じる。二人で協力して対応して欲しい」
……。

カンベンシテホシインデスガ。

なんて、初仕事そうそうストライキとか出来ない。

でも、ホントに、マジで勘弁して欲しい。同年代の女子とは6年くらい喋って無いんだって。別に女性恐怖症って訳じゃ無いけどさ、その普通に怖いんだよ！ 自分で言ってるなんか矛盾してる気がする。僕は笑顔を引きつらせたまま、話を聞く。

「レンの描く魔法陣『紋章』は一般的に普及している魔法陣とは規格が異なる独自の技術じゃ。そのままではレンのみにしか運用できない」

独自規格の魔法陣!?

魔法陣は詠唱と同じで、算術で例えるなら「計算機」とか「公式」みたいなモノ。それを自分で作ってるなんて凄すぎる。

「今回はその『紋章』をマジックアイテムに組み込む実験を行って欲しい」

「ああ、なるほど……」

僕が得意な魔法はマジッククラフト。魔力や魔法を込めた道具を作る魔法だ。

消費する事で詠唱・魔法陣などの課程を省略して魔法を発動させる触媒としてのアイテムや、単純に魔法的加護が付与されたお守りとか、後は魔法陣を転写しておく事で描かずにいつでもその魔法陣を発動できるようにするアイテムなどが作れる。

「レンの『紋章』をマジックアイテム化できれば、非常に優れた効果をもつレンの『紋章』を八天導師内で共有できる。それは大きな戦力に

なるであろう。逆に、マジックアイテム化が困難な場合はそれはそれでよい。レンに振る仕事内容の参考になる」

必ずしも成功を目指す事だけが実験では無い。失敗という結果も、何らかの糧になる。

「期日は、そうじゃな。新しい試みじゃ。余裕を持って一ヶ月としよう。では、頼むぞ」

「承りました！」

『……承知』

と、承認したはいいもの……。

会議室を出て、レンさんと並んで歩く。常識的に考えて、すぐにも打ち合わせを始めるべきなんだろうけど……。

ど、どどど、どどど、どうする!?! 僕から提案するべきかな!?! 無理だよ! 話しかけるの怖いよっ! ていうかレンさん無表情だからもっとハードル高いよ!

なんて心の叫びをかみ潰しながら廊下を歩く事、数分。

不意にレンさんが顔をこちらに向ける。

ひえっと悲鳴を上げそうになるのをぐっと堪えて。

恐らく何か続くであろう言葉を待った。が、レンさんは歩きながらこちらをじいつと見つめるばかりで何も喋らない。

この人は何を考えて居るんだろうか……。

いや、そうだった。レンさんは声が出せない。発している合成言語は決して簡単な魔法じゃないらしいし、レンさんにとって会話は大変なものなんだ。

——……僕から、切り込むべきだ。気付くのが遅すぎる。

「えっと、打ち合わせ、しましょうか?」

声が震えているのを必死にごまかして作り笑いを浮かべてみた。レンさんは何も答えず、ただこくりと一つ頷く。

「えっと、今すぐ用意できる『紋章』のサンプルってありますか?」

こくり、とレンさんはまた一つ頷いた。

「じゃあ、それを持って工房に来て下さい。そこで簡単に予定を決めましょう。あ、工房の場所は判りますか?」

ふるふる、とレンさんは顔を横に振った。

「えっと、この建物の一階の——」

工房の場所を説明し、別れる。

レンさんが廊下を曲がってその姿が見えなくなった後。

僕はへにやり、とその場に崩れ落ちた。

「き、緊張したあ……」

ただ、会話——いや会話してないな、僕が一方的に話かけてただけだ。けど、それだけでこんなに緊張するとは……童貞かよ。いや童貞だけだ。

と、こんなところでへにやってる場合じゃない。僕も必要な道具を持って工房に行かないと。

工房には僕が先に着いた。12畳くらいのスペースに大きな作業台が一つ。あとは材料や工具が入った棚が並ぶ。

暫くして、レンさんがやってくる。

そして作業台に1枚の紙を広げた。

「っ」

僕は、息を呑む。

目の前に提示された魔法陣は——言葉を失う程に美しかった。

一般的な魔法陣の三倍は濃密に記号と線が並べられている。僕も魔法使いの端くれだ、普通の魔法陣ならちらつと見ればどんな魔法の魔法陣なのか位は判る。でも、レンさんの魔法陣は一目みただけですれが何を意味した記号なのか、式なのか、全く判らない。

なのに、整合性がとれている。究極の機能美と造形美。

間違い無い。今まで見てきた魔法陣の中で、世界一すごい魔法陣だ……。

レンさんもまた、特別な魔法使いであるという事実が目の前に突きつけられ胸が苦しくなる。思わず無言で呆けてしまった僕に戸惑うように、レンさんが首を傾げた。

「ご、ごめん。あんまりにも凄い魔法陣だったから、つい見蕩れちゃった」

僕の反応に、無表情なレンさんの口の端が僅かに伸びた気がした。

「これをマジックアイテムに、か——」

僕は頭を仕事モードにして考察する。目測で3倍濃密な魔法陣。アイテムへの魔法陣の転写は縮小して行われるけど、この密度だと倍率によっては線と式が潰れかねない。

かといってこの大きさのままアイテムにしてもアイテムとしての利便性は損なわれてしまう。と、いか所もそんなに凄い魔法陣を僕なんか転写できるのかあやしい。

……けど、まずはやってみるしかない。

僕の心の奥底で密かに炎が灯る。

「とりあえず一週間頂戴。それで、試作品を作ってみる」

レンさんはこくり、と頷いた。

「その間レンさんはできるだけ色々なパターン魔法陣のサンプルを用意して貰えるかな。攻撃系、支援系、生活系、高度なモノ、簡単なモノ、色々。ティアロ様の意向を考えれば、レンさんの『紋章』のうち、アイテム化できるモノと出来ないモノの区別はしつかり報告するべきだと思うから」

『……判った』

頷きつつ、レンさんは言葉を発した。

今までは頷きただけだったのに、どうして急に返事してくれたんだろ？ まあ、細かいことは良いか。僕女心とかよくわかんないし。

そして一週間後——

テーブルの上には試作品の腕輪が一個、寂しげに置いてある。

向かいに立つレンさんはその試作品へ怪訝な眼差しを下していた。それもそうだろう。これは失敗作なのだから。

「その、腕輪のサイズならぎりぎり転写しても魔法陣が潰れないかなと思って作ってみたんだけど——全然だめでした……。うんともすんとも言わない……」

完成した腕輪を装着して魔力を流してみたがなんの効果も現れなかった。

この一週間レンさんから貰った紋章とにらめっこして試行錯誤を繰り返したのだ。

「正直レンさんの紋章を100%正確に転写出来たとは思って無いよ。でも、流石に一切反応が無いのは想定外だったな……ごめんね」魔法陣の記載を間違えた場合、魔法効果が正しく現れない事が想定される。例えば前に炎を放つ魔法陣なら炎は出るが前では無く四方八方に火が飛び散る、等だ。

逆に言えばある程度魔法陣のコピーに成功していれば仮に失敗していたとしても何らかの動作は示す筈なのである。なのに何も起らないと言うことは、僕はレンさんの紋章を一ミリも再現できなかったという事に他ならない。

自分の無能さに死にたくなっていると、レンさんは腕輪に手を翳した。

すると、ぶわんと腕輪の上部に長方形の光が板のように展開する。長方形の中には僕が転写したレンさんの紋章が映っていた。これはマジックアイテムに刻みこんだ魔法陣を確認する魔法である。

レンさんは僕が転写した紋章を、眉間に皺を寄せてまじまじと見つめて。

ふう、と一息吐いた後。

その無表情な瞳を僕に向けて言った。

『……60点』

「微妙ッ!!? ……って、え、60? そんなにくれるの?」

何も効果が発動しないのだから僕としては0点のデキだと考えて居ただけに驚いた。

??話6 僕は君の魔法陣を見て——君の才能に嫉妬した

レンさんは腕輪をはめて見せた。

そして、工房の、開けたスペースを指さす。

すると腕輪が青く輝き、水の弾丸が放たれた。

「えっ!? 『第三水流魔法（アクア・バレット）!?!」

発動された魔法は水属性第三階級基礎魔法だ。

ただし、一般的な規模の1/3程度の水流だった。

「そっか、この魔法陣『第三水流魔法』を詠唱無しで使う為のモノだったんだ……。そりゃ水属性を持って無い僕が使っても効果無い筈だ」

レンさんの紋章を一ミリも再現出来なかつたモノと思つて居たので、一応は形になつていゝ事を教えられ、少しホツとする。

「でも、本来の『第三水流魔法』より大分しよぼいよ? なんで60点もくれるの?」

再現度で言えば30点が妥当な所だろう。これだったら『第二水流魔法』を使った方がマシンなレベルだ。

そんな僕の疑問に、レンさんは。

『……初めて』

少しだけ、ほんの少しだけ柔らかい表情を浮かべて、言った。

『……私の“紋章”、他の人が描いて、きちんと動作したの』

「え?」

その、次の瞬間!

『……確かに本来想定される機能を殆ど再現出来てないのは問題だけど他の人はそもそも起動すらしない。というか普通の魔法使いは私の“紋章”の必要性を否定する。こんなに複雑な魔法陣を描かなくたって、一般的に普及されている魔法陣を描いて、“詠唱”をすれば第三階級の基礎魔法なんていっばしの魔法使いなら誰にでも使えるモノだから』

突如、レンさんが早口——魔法で喋っているので早口という言い回

しが正しいのかは判らないが、もの凄い速度で捲し立ててきた。

『貴方はそもそもこの魔法陣の効果を理解していなかった。それはつまり、式としてでは無く絵・図形として私の魔法陣を認識して、見た通りに転写したという事。中身を理解してないから、一つ一つ、丁寧に、綺麗に真似したという事。目の下、隈出来てる。どうしてそこまですべて死になって写したの？ ティアロ様は言っていた。アイテム化できないならそれはそれで良いって。頑張る必要なんて無かった。意味のわからない図形を、必要性の無い行為を、なんでそんなに頑張ったの？』

レンさんの表情は一般的な人と比べると決して明るいと呼べるモノでは無い。ほんの少しだけ、口の端が伸びたり、眉間に皺ができたリ、よく見ないと判らないくらい、無表情な人だ。

なのになんでそんな細かい違いが判るかって？ それはそれが判るくらいまで顔面が接近してるからです!!

変な汗が噴き出してくる。こんな至近距離で同じ年代の女子の顔見たこと無い！ 勘弁してよ！ 免疫無いんだって!!

「と、とりあえず、落ち着いて、離れて欲しいかな」

僕は目を逸らしながら震えた声で言うが。

『答えて』

レンさんは離れてくれない。硬い表情の中で唯一、そのアイオリイトみたいな深い藍色の瞳が熱を帯びて輝いているように見えた。

「……」

レンさんは口数が少なくて、表情変化にも乏しくて、何を考えているのか判りづらい人物だ。でも、今だけは彼女が何を考え、何を思っているのか、少しだけ判る気がする。

『紋章』の必要性を否定されたと、彼女は言った。

レンさんの天才的なこの魔法陣は。確かに、見方によっては無意味な遠回りなのかもしれない。誰にも理解されない、自分だけの式・記号を組み合わせて、無理矢理魔法陣だけで魔法を発動できるようにしたところで、『魔法陣と詠唱を合わせれば良い。無駄な労力だ』と斬って捨てる人間がいても不思議じゃない。

だからきつと、自分の魔法陣を受け入れられる事が嬉しいのと同時に、疑っているんだ。

僕が本当にレンさんの魔法陣を認めたのかどうか、確かめたいのだろう。

なら、僕は。心の内を全て明かそう。それが一番誠実な気がする。

「一番始めに。キミの魔法陣を見て、僕は言葉を失った。あの時は見蕩れたからって言ったけど、アレは半分嘘をついたんだ。僕は君の魔法陣を見て——君の才能に嫉妬した」

『……嫉妬?』

「あんなに綺麗で凄い魔法陣を0から自分で作り出すなんて事、僕には絶対出来ない。その才能に、見苦しいくらいに嫉妬した。天才と凡人の差をありありと見せつけられた様で。悔しかった。悔しくて、苦しくて、でもそんな気持ちと同じくらい君の事を尊敬した」

僕には特別な才能なんて無い。僕にしか出来ない事なんてこの世には存在しないだろう。

その人にしかない、その人にしか出来ないような才能を目の当たりにすると嫉妬するし、自分には出来ない事だから凄く、凄く羨ましくて、尊敬する。

——……自分も、真似してみたいと思ってしまう。

「君の『紋章』を僕も使ってみたかった。僕がマジックアイテムを作るのは、僕には才能が、能力が無いからなんだ。でもアイテムは平等だ。天才が使っても、凡人が使っても、同じアイテムなら同じ効果がある。悪い言い方をすれば他人の才能を、僕みたいな凡人でも真似する事ができる。そんな風に……君の才能に憧れた。だから必死に写したんだよ」

それが、僕がマジッククラフトを習得すると決めた理由だった。

『……才能、か。貴方は私の『紋章』を無意味だつて言わないのね』

「僕はレンさんの魔法陣を見て、『世界一凄い魔法陣だ』って思ったよ。そんな世界一の魔法陣を僕にも使えれば……僕も、少しは役に立つ魔法使いになれるんじゃないかなって思ってた。だから、ティア口様の指令だからとか、そんなの忘れてさ、一個人として君の魔法陣をマ

ジックアイテムにしてみたかったんだ」

僕の答えに満足したのか、レンさんは漸く離れてくれた。

「こんなに凄い魔法陣を、無意味だって言う人が居るんだね。正直その人魔法使いのセンス無いんじゃないの？」

僕がそう零すと、レンさんは。

「……ハヒュツ、クスクスッ！」

はつきりと、笑顔を浮かべて息を漏らした。

魔法で合成された音声じゃない。レンさん本人の声が初めて聞こえた。言葉は話せないみたいだけど、笑うと声が漏れるみたいだ。何がツボに入ったのか、レンさんは涙を浮かべて大笑いし続けた。

僕は呆然と、その様子を眺める。

暫くして、漸く落ち着いたレンさんは、またあの魔法で作られた声で言う。

『……私の実家、これでも結構有名なの』

「え、あ、そ、そうみたいだね」

イルゼルナさんが名家の姓だって言ってたっけ。

『……私の“紋章”を否定したのは、私の家族よ。認めたくは無いですけど、みんな一流の魔法使い。私はその中の落ちこぼれ。“詠唱も出来ない”魔法使いの出来損ない』

「なっ……！」

レンさんの才能を否定したのは他ならぬ彼女の家族だと言うのか。そんな悲しい事があって良いのか？ 家族なら他の誰よりも深く、この才能を認めて受け入れてあげるべきだろうに。

『……なのに貴方は、そんなあの人達を“センスが無い”なんて言い捨てるのね。凄い度胸。流石は八天導師の一翼、かしら？』

まだ少しにやついた表情で、レンさんは続けた。

「えっ、いや、ごめんっ！ 君の家族をけなすつもりは無かったよ!」

『……なんで謝るの？ 私は嬉しいのよ。凄くスカツとした。あんな連中もう他人以下の存在よ。私、家出してきたから』

「家出!？」

『……貴方、気に入った。私の“紋章”を使いたいって言ったわね。その言葉が嘘じゃ無いなら——たつき込んであげる。私の“紋章”その読み方、組み方、使い方。全部』

レンさんはギラついた視線を僕に向けた。この、何か得体の知れないモノに縛り付けられてしまうような圧力を感じるその感覚には覚えがあった。

「ま、待ってレンさん！ 僕、凡人だから！ 限界ってモノが合ってる!?! レンさんみたいな天才と同じレベルで考えて欲しくないっていうか過度な期待はしないで欲しいっていうか!」

『……大丈夫。現に貴方は私の紋章を何のヒントもなしに真似して見せた。見込みがあるわ。教えてあげる、私の全て——魔法陣の深淵を』

この人ルクシエラさんが無茶ぶりする時と同じ目をしてるよおツ!!

『……後3週間。何処までモノに出来るのか、楽しみね♪』

気がつけば僕はレンさんに腕を引っ張られ、彼女の私室へと連れ去られていた。



「——で？」

「情報の洪水で死ぬかと思いました……」

「何というか、ワシから指示をしておいてなんじゃが、その、ご苦労様だったのう」

三週間後、僕は立っているのも辛いくらい疲弊した状態でティアロ様に事態の報告をしていた。

「現時点で、レンさんの扱う紋章の内、比較的構造が簡単なモノなら8割くらいの精度でマジックアイテム化できる様になりました。逆に構造が難しい複雑なものは超頑張っても5割くらいの精度です。レンさん曰くずっと転写してればその内精度は上がって行くらしいですが、今貰ってる点数は平均的に見て75点だそうです」

「そ、そうか。十分な成果じゃ。よく頑張ったな」

「ティアロ様にそう言っていただけなら、報われます——そろそろ寝て良いですか?」

「……まともに寝かせて貰えなかったのじゃな。うむ、暫く休むが良い。下がれ」

「はい。ありがとうございます」

僕は重たい身体を引きずって、ほぼ一ヶ月ぶりに自分の部屋に戻ってベッドにダイブした。

??話7 性癖歪み過ぎてて流石に私でも引く……

それは、ある日の八天導師の任務だった。僕やレンさんは本来後方支援。拠点に籠もってアイテムや魔法陣を用意して、現地で問題を解決するドライズ達の手伝うのが基本的な業務である。

けど、八天導師という名とは裏腹に、実際にはまだ7人しか居ない組織。しかもティアア口様の個人事業で他に従業員はいない。

まあぶつちやけ、超人手不足なのだ。

だからたまに、こうやって。本来後方支援の僕も――

『二連朱槍』ツ！』

目標の巨大なイノシシみたいな魔物めがけて槍を投げる。こんな感じで、前線に駆り出される事もままあった。投げた槍は二つの炎の弾丸へと変化して魔物の皮膚を焦がした。ひるんだ隙を突いて、ドライズが前に出る。

『雪月華』ツ！！』

氷と光の魔力が組み合わさった斬撃が魔物を切り裂く。

巨大なイノシシのような魔物の顔面にぱっくりと大きな溝を開いて。しかし凍てつき血は出さない。代わりに魔物の目から精気が消えていく。

『さっすがドライズッ！』

僕は勝利を確信して、ドライズに歩み寄った。八天導師に入る前から、こうやってドライズと組んで魔物と戦う事は多かった。その時はまだ学生で子供だったからこんな大きな魔物を相手にしたのは初めてだけど、やっぱり長年のコンビネーションは変わらない。

ドライズも同じ事を感じていたようで、

「ああ。良いフォローだった」

と言って拳を差し出す。

僕はそれに応じるように拳をコツンと当てようとした、その時だ。

今にも息絶えようとしていた魔物目に、僅かに光が灯る！

「ツ！！ まだだドライズッ」

その事にいち早く気付いた僕はドライズを突き飛ばした。

そして――

イノシシ型の魔物はその姿の通り、僕に突進してきた。巨大な物量の暴力。

鈍痛と共に身体が宙を舞う。

「ファルマアアッ!!」

ドライズの声が、遠くに聞こえる。だけど、地面に叩き付けられたところで、僕の意識は途絶えてしまった。

◇ ◇ ◇

次に目が覚めた時には、自室のベッドで寝ていた。横にはドライズが居て、僕が起きるなりガタツと立ち上がる。

「目を覚ましたかッ!? 痛みは!? 調子はどうか!? 異常は無いか!?!」

と捲し立ててくる。

「調子は、まあまあ。体中痛い……」

「お前、受け身をとって無かっただろ!? 学園で習った筈だぞ!」

と、ドライズに責められるが、

「あんな咄嗟に、しかも空中に放り出されて受け身なんて取れないよッ!! 痛っつ!?!」

と反論すると同時に、全身に軋むような痛みが走った。

「っ、すまん。とりみだした。あれは仕留め損なった俺のミスだ。お前を責めるのは間違いだっただな。……ただ、心配だったんだ。許してくれ」

「許すに決まってるだろ。あれを喰らったのは僕の意志なんだから。あーでも危なかった。やっぱ僕、前に出るの向いてないな」

情けなさを誤魔化すように僕は頭を搔くが、ドライズは不安げに続けた。

「……だが、マジックアイテムを使ったファルマの戦闘能力はティア口様も高く評価している。恐らく、今後お前は前衛・後衛状況に応じて使い分けられる駒として仕事が割り振られるぞ」

「うげえ、マジか……」

レンさんに白状したとおり、僕が作るマジックアイテムは大体他人

の才能の模倣だ。

勿論、オリジナルだつて幾つかはあるけどそういうのは大した事無い。レンさんの紋章を真似たアイテムやルクシエラさんの「破滅の光」をなんとかアイテム化したモノもあり、それらを使用すれば僕みたいな凡人でも平均以上に戦える。

「俺と組む時はできる限りフォローする。安全が確認出来るまでは前に出ようとするな。お前を失つては、師匠に顔向けが出来ないし、俺はもう、二度と立ち直れなくなる自信がある……」

ドライズの悲壮な表情が、胸に刺さる。

「いや、大事に思ってくれるのは嬉しいけど、僕なんかそこまで執着しなくても——」

「執着するに決まつてるだろ?! お前は俺の、初めての友人で、ここまですつと一緒に戦つて来たかけがえのない兄弟弟子だ!」

ドライズは僕に詰め寄つて訴えかける。中性的で美しい凜々しい顔が勿体なくなるくらい、今にも泣きそうで悲痛な表情だった。

「……ああ、そっか。僕、弟子だつて認めちゃつたっけ」

「死なせはしない……ッ! 絶対にッ!!」

ドライズは強い、本当に強い決心をを宿した瞳を僕に向ける。

「……ありがとう、ドライズ。頼りにしてるよ。今はちよつと休ませ」

「ああ。何かあったら何でもいえよ。お前の好物で、滋養強壮に効く料理を作つてやる」

そう言つてドライズは僕の部屋を離れていった。

僕は後方支援タイプだが、それでも、今後前に出る機会が増えていく可能性が高い。

アイテムに頼り切つた戦闘能力は、身体能力、技術の低さが明確な弱点となる。

攻撃を受けてたつた一撃で戦闘不能になるなんて、足手まといも良い所だ。

ドライズが決心したように、僕もまた決心した。

「……『受け』の模擬演習をしよう」

◇ ◇ ◇

と、言う訳で後日。業務が落ち着いてる所を見計らって廊下を歩くレンさんに話かけた。

「レンさん！ ちょっとお願いがあるんだけど、話だけでも聞いてくれないかな？」

レンさんは呼ばれて、ピタッと立ち止まり。

くるっとその無表情な顔をこちらに向ける。そして。

『……レンで良い』

と、魔法で合成された音声で答えた。

「え、で、でも」

同年代の女性を名前呼び捨てで呼ぶことに慣れていないため戸惑うモノの、レンさんは。

『……要件は？』

とそんなこちらの心情お構いなしに早く用事を伝えろ、と言外の圧を放つ。

「あーえっと、その。ドライブに迷惑かけたくなくてさ。『受け』の練習がしたいんだ」

まだ少し取り乱しつつ、頭の中で情報を整理して、レンさんに伝える。

すると。

『……』

レンさんは珍しく判りやすくきよとん、とした表情を作り。

視線を宙へ向け、何かを思案したかと思うと、小首を傾げて、言う。

『『受け』に練習とか無い』

と、きつぱり答えた。

「えっ、いや、そんな事無いと思うけど!?!」

事実学園では受け身の授業とかあったし、十分練習で習得できる技能の筈だ。

『『攻め』のありのままを受け入れてあげればいい』

ややにやけた表情でレンさんはそういうのが、それはおかしい。

「いやありのままを受けたら血まみれのズタボロなんだけど!」

レンさんは僕の言葉が、まるで理解できない様子で、

『ちゃんとほぐせば血はでない筈』

と言うが。

「ほぐす!? 柔軟体操どうこうでどうにかなる話じゃないよね!」

意味のわからない疑問符が尽きない。するとレンさんも、

『柔軟体操?!』

と、疑問符を浮かべ。どうやら会話が噛み合って無い事を僕は悟った。

「なんか、話が噛み合って無いみたいだからもう一回整理するよ」

レンさんはコクリと頷く。

「僕は、ドライブに迷惑かけたくないから “受け” の練習がしたいんだ。それで、お願いできるのがレンさんくらいだから、レンさんに色んな攻撃をして欲しいんだよ。物理でも魔法でも何でも良いから!」

と、僕の要望をきちんと伝えた。

すると――

『……』

レンさんは、 “うわあ……” と言いたげな嫌悪感マックスの表情で半歩後ずさった。

僕はそのリアクションに戸惑う。

「えっ、なんでそんな引いてるの!」

『ドライブと言うモノがありながら私で練習? 見境無いの? しかも、攻撃って真性のマゾヒスト? 性癖歪み過ぎてて流石に私でも引く……良いビジネスパートナーになれそうだったのに、気持ち悪い……』

とレンさんらしからぬ早口で捲し立てられて罵られてしまった。

「マゾヒスト!? 性癖!? 違う違うツ! やっぱりなんか誤解してるって!」

僕は少しずつ距離を離そうと後ずさっていくレンさんに必死に詰め寄って、改めて事の成り行きを今度は一から十までちゃんと説明した。

外伝94・8話 哀れな存在でした。『初代異伝』は

先輩は今日も、安らかに眠ったままだ。

あの事件から既に一週間が経過している。事後処理は大体終わり、学園はいつもの平穏を取り戻しつつあった。イーヴィル化していた生徒達も回復は早く。戦闘で負傷した生徒達も先輩以外は既に全員学園に復帰している。

……あの時、先輩は無茶と無謀を重ねて戦って居た。駆けつけるのが遅すぎたのだ。

やはり、先輩の『異伝』への登録を切るべきでは無かった。先輩はこういう非常事態の時、自分の命より仲間や友達の命を優先する人間なんだ。だからこそ、そんな先輩を仲間であるボク達が支えてあげる事でお互いを守り合う事ができる。先輩に教わった、大切な教訓の一つ……。

シヤランと保健室のベッドを包むカーテンが明けられる。

「あつ部長さん……」

アリシアさんがお見舞いに来たみたいだ。両手には新しい花が見えた。

「毎日、お疲れ様です」

「それはお互い様じゃないかな？ 部長さんだって毎日、ずっとここに居るよね？」

ファルマ先輩が倒れてから数日間は八天導師として事件の事後処理などの業務に追われて中々お見舞いできなかつたが。こうして落ち着いてからはボクもアリシアさんも毎日先輩の元に訪れていた。

アリシアさんは花瓶の花を入れ替えて、ボクの隣へ椅子を寄せて座る。

「うなされては、無いね。……すつきりした寝顔。きっと、大丈夫だよね？」

アリシアさんは昏々と眠る先輩を心配そうに見つめて、零す。

「ジン様曰く、外傷は生命活動に全く問題が無いほど完璧に治癒しているそうです。それもこれも、『ドリーム・デイメンション』及び『リ

「パス・リアリティ』の効能によるところが大きいと」

「うん。やっぱり、凄いやね、ハル君は。こんな魔法を作っちゃうんだから」

「それでも眠ったままなのは、精神的な消耗が異常に大きかったからだどジン様は推察していました。友人のイーヴィル化、想定外の存在
“拒絶の闇” そのものの人格。そして、腕を跳ね飛ばされて尚立ち上がった胆力——そういった、戦いで限界を超えて使った気力、精神力を取り戻そうと、休息されている様です」

「心の問題、かあ……。もう一度『ドリーム・デイメンション』が使えたら、それも治せたのかな？ あの戦闘で魔石が壊れちゃったよ。ハル君じゃなきゃ、直せない。折角こんなに凄い力を貰ったのに。折角ハル君を助けられたのに、結局私、無力だね……」

「アリシアさんはポケットからヒビの入った黄金の魔石を取り出して、嘆いた。

その姿を見て、思う。同時に、言葉にも出る。

「先輩は常々、『僕にしかできない事なんて無い。僕が出来る事はみんなができる事。僕には誰かの真似をするしか、背中を追いかける事しかできないんだ』と、おっしゃっていました。ですが——現に、今まさに、先輩にしかできない事がここにあるんです。先輩、どうかお気づきください。貴方は貴方が思っている程平凡ではありません」

届かないと判っていても、伝えたくなくなってしまふ。

気がつけば僕は自分の両手を差しのばし先輩の手を握りしめていた。

「目を覚ましてください、先輩。ルクシエラ先輩がずっと不機嫌です。イーヴィル討伐の巻き添えで公共物を破壊しつくしています。八つ当たりです、多分。ドライブ先輩は顔には出しませんが元気がありません。レン先輩も、紋章の制作がはかどらないとおっしゃっていました。ボクも、アリシアさんも、ずっと待っています」

らしく、無いかもしれない。

こんなに不安な気持ちちは初めてだ。ボクの知ってる先輩は確かに無茶ばかりだったけれど、十分に成熟していて、ここまで昏睡する

程では無かった。だから、怖くて仕方ない。

「先輩……貴方が居てくれないと、ボクは——ボクでいられなくなつてしまいます」

不安定な心を揺さぶる声が、胸の奥から聞こえてくる。『そんなくだらない人間に執着するのは辞めろ』『ここは新章の宝庫じゃないか』。普段は意にも介さない、そんな必要も無い煩わしい声が、頭の中に響く。

「部長さん、大丈夫？ 顔が真っ青だよ？」

アリシアさんに言われて、ハッと我に帰った。

「すみません。先輩が居ないと、ボクも不調になってしまふんです。これはその、そういう仕組みに近いというか、仕方の無い事にして」

つい咄嗟に出した言葉に、我ながら苦笑した。

何も知らない人間が聞いたら、意味がわからないだろう。ボク自身やはり、かなり参ってるな……。

アリシアさんは心配そうな顔のまま、ボクの顔を覗き込んで尋ねて来た。

「部長さん。そろそろ教えてくれないかな？」

「何を、ですか？」

「部長さんとハル君の関係。部長さんがどうしてそこまでハル君の事が好きなのか。ううん。好きを通り超えて——依存してるのか。やっぱり、気になっちゃうよ」

言われて、少し迷った。正直な所教えるのは構わないが常人には理解しがたい複雑な事情があったからだ。しかし、アリシアさんは違う。

「アイル先輩やイーヴイル化した一部の生徒達の報告から、イーヴイルになると多くの人々の願い、心を身に宿す結果様々な情報が勝手に脳裏に焼き付いてしまうと伺いました。その結果、この世界の事実を知る事にもなる、と」

ボクは先輩の手を離し、アリシアさんと目を合わせる。

「貴女もそうですね？ この世界について、理解しているという解釈で間違いありませんか？」

するとアリシアさんは少し驚いた表情を作って、しかし、覚悟を決めた様子で頷いた。

「うん。全部知ってる。ここが何なのか。私が、何なのか」

「ならば説明の大部分を省けます。……貴女に知っておいて貰うのも悪くないでしょう。一応、事情を知らない生徒が耳にしたら混乱を招きます部室へ行きましようか」

「判った。ありがとう、部長さん」

ボクはアリシアさんを連れて保健室を去り、狭くてもの寂しい部室へと向かった。

◇ ◇ ◇

部室の机で向かい合わせに座って、ボクは語り出す。

「貴女になら言うまでもありませんが。それでも、一応。リーゼさんになぞらえてこう切り出しましょう」

ボクはそう言って、改めて口を開いた。

「昔々、ここでは無い別の世界でひとつの兵器が開発されました」

その兵器の名は『不朽型魔導兵器：異伝』。巨大な本の形態を取り、人間の記憶、経験を『章』として記録しつづける兵器。

『不朽型魔導兵器』は、不老不死を研究していたジン博士の技術を元に作られた、〃存在し続ける〃事が目的の兵器。更に踏み込んだ目的としては、〃究極魔導〃として最有力であった『幻想型魔導兵器』の寿命を延ばすための実験兵器です」

「えーと、早速専門用語だらけで頭がこんがらがってきちゃった……」

アリシアさんは目を回しそうになるが、ボクは付け加えた。

「この辺りの事情は、まあ知らなくても問題ありません。一応、伝えただけです。大切なのは、要するに『異伝』にとつて、〃自分自身が存在し続けること〃がその存在意義であり、その為なら何でも行う。例えばそれが、別の兵器の為の実験データでしか無い行為であったとしても。ただひたすらに〃存在し続ける〃事だけを目的とする……」

「……なんだか、悲しいね」

「ええ。哀れな存在でした。『初代異伝』は」

『異伝』の本体はボクが常に抱える巨大な書物だが、それだけはただ

の本。実際に活動して記録を集める存在——依り代が必要だった。

『初代異伝』の人生は『異伝の第一章・記録を司る門番』として記録され、そしてその意志が『異伝』そのモノの意志となる。そして意志を持つ書物となった『異伝』は自身が存在し続ける為にある行動を繰り返します。

「一つは、『新章の継ぎ足し』。『異伝』は記録する兵器であり、面白い・希有な人生を送った人間の記憶・経験を新章として継ぎ足す事とその能力を奪い、自分のモノにできます」

これには数段階の過程があり、まずはその者のそれまでの人生とそれからの人生を客観的に記録していく『仮登録』そしてその者の人生を『異伝』が『新章に相応しい』と判断された時にされる『真登録』、そして『新章完成』の三段階だ。

「『仮登録』時点ではプライバシーが全て流出していると言う一点を除けば本人に実害は無く生活に何ら支障をきたしません。その人の人生を見極めるための期間ですから。しかし『真登録』すると兵器としての『異伝』が牙をむき始めます。少しずつ、少しずつ、その人間の記憶・経験を過去から遡って吸収してゆき、そして最終段階、『新章完成』まで到達する事でその人間の魂——要するに魔力ですね。を全て奪い去り、その人間の命を奪った上で記憶・経験・能力全てを『異伝の新章』として登録し、いつでも使えるようにできます」

「まるで寄生生物みたいで怖いよ……」
「実際、その表現が正しいでしょう。他人の人生を啜って存在し続ける兵器。それが『異伝』の正体であり、それを永遠に繰り返す事が『初代異伝』の意志でした」

そしてここからが、本題だ——
ボクがボクに。『シジアン』になる前だった頃の話が始まる。

「最初に述べた通り、『異伝』の本体はあくまでこの書物です。なので、この書物を持ち歩き、人々を観察し、次なる新章を探す肉体——傀儡となる依り代が必要でした」

「えっ」

「本という兵器としての『異伝』は不朽でも、活動体である依り代は普

通の人間です。寿命があります。『初代異伝』は適当な人間を依り代に選び、その魔力で心身共に支配し己の肉体として操作する事で幾星霜の時間を活動してきました」

そう。ここままで言えばもう明白だろう。ボクが何者だったのか。その回答は――

何者でも無かった。

??話8 弟子は、師匠に似るものじやのう……

八天導師としてティアロ様から時々出される指令をこなしつつルクシエラさんの研究を手伝う日々が続くこと数年。合間を縫って、誤解が解けたレンさんに防御、回避など「受け」の戦闘訓練もしてもらい八天導師として漸く勝手に慣れ始めた頃。

僕は短期出張に出かけていた。

ティアロ様の元に魔道士の不審な失踪案件が持ち込まれた。その調査支援を八天導師に求めるといふモノで、支援要員として選ばれたのが僕だった。

理由は二つ。一つは、現在手の空いている人員が僕とルクシエラさんしか居なかった事。今回の目的はあくまで原因・或いは犯人の究明であり、戦闘能力よりも情報処理などの能力が求められた事が理由として挙げられる。

もし判明した原因、もしくはは犯人の戦闘能力が強大だった場合追加の支援要因を八天導師に支援する手はずだった。

そんなこんなで魔道士の失踪事件を追いかける事数週間。

僕は遂にその犯人を見つけ出し、役目を終えて漸く八天導師の拠点へと帰ってきたのだ。

コンコンコン、と3回ノックして会議室のトビラを開ける。

「炎天ファルマ、命じられた任務よりただいま帰投しました」

会議室の円卓、トビラの正面の席に座るティアロ様が安心した笑みを浮かべていた。

「うむ。よく戻った。報告書には目を通しておる。犯人の究明に成功したそうじゃな——って、どうしたその姿ッ!？」

ティアロ様の笑みが突如消えて、仰天する。

僕は今戦闘でボロボロになったローブを羽織っており生傷もそこそこ残って居るので驚いたのだろう。

「いやあ、最後の方ちよつとした戦闘になりました。でも致命傷は避けましたし目立ってるだけでどれもかすり傷みたいなものだったの。で向こうで治してから帰るよりこっちに戻ってから治療してもらっ

「の方が楽かなと思ひまして」

「戦闘じゃと!? 報告書には無かつたぞ?！」

「すみません。本当はそれなりに強大な古代魔導兵器が原因だったので支援要請を送るつもりだったんですが、その、どうしてもやりたい事があつたのでソレをしてから、と考えて行動したら——なんかそのノリで原因だつた古代魔導の沈静化に成功しまして」

「はあっ!?」

「本当なら追つて報告するべきだつたとは思うのですが、すぐに戻りたい事情が出来てしまったので事後報告という形になってしまいました、申し訳ありません」

「すぐに戻りたい事情? 何があつたのじゃ?」

「僕はティアア口様に説明するために。」

今までずっと、僕の背中に隠れてボロボロのローブの裾をぎゅつと握りしめていた少女の頭を撫でて。

「大丈夫、怖い人じゃ無いから、安心して。出ておいで」

そう言つて、促す。

艶のある黒い髪、背丈は僕よりやや低いくらいで巨大な本を胸に抱えた小さな少女が。

おずおずと不安そうに顔をしかめて、僕の足にすがりつきつつも横に並ぶ。

「女の子、拾っちゃいました。身寄りが無いので暫くこの拠点で面倒を見たいと思つていますが許可をいただけませんか?」

「……」

「ほかーんと、ティアア口様は口を開いたまま固まってしまった。」

「あの、ティアア口様?」

数十秒の間の後。

ティアア口様はハツと我に返つた様に身体を跳ねさせ。

改めて、僕が連れて来た少女へと視線を移し。

頭を抱えて、言った。

「弟子は、師匠に似るものじゃのう……」

どうやら女の子を拾つてきた僕の姿が、幼い頃のドライブを拾つて

きたルクシエラさんと重なったらしい。



「要約すると、その娘は古代魔導兵器、『不朽型・異伝』の依り代とであつたと。そして『異伝』の正体はその巨大な本状のマジックアイテムであり現在はその娘の意志によつて沈静化され制御下にある、と言ふ訳じやな」

「はい。ですがこの娘は生まれてからずっと『異伝』の傀儡として自我を持たずに活動させられていました。漸く自我に目覚めた今のこの子は赤子までとは行かずとも本来十四歳程度である肉体の年齢よりも遥かに拙い自我しか持ち合わせておりません」

この身の上で身寄りが無いものだから、誰かが保護しなければならぬ。

「その上、沈静化したとは言え大規模な事件を起こした原因を抱えている訳ですし、現地の人達にとっては『異伝』ではなくこの子自身が犯人に見えてしまいます。なので事件のあつた区域からできる限り速やかに退散したかつたのと、『異伝』がきちんと制御下にあり、再び暴走しないかの監視・経過観察も含めてこの拠点で暫く生活して貰おうと考えたのです。ここなら、いざ『異伝』が再度暴走しても他の八天導師の皆さんが簡単に処理できると思っていますし」

「ふむ……お主の言いは判つた」

ティアア口様は眉間に皺を寄せてため息交じりに頭を搔く。

「言ひ分は判つたが——せめて先に報告してくれ。出張先からここへ戻るまで数日かかる筈じや。移動しながらでも報告書は用意できたろうし、なんだつたら緊急回線を繋いで口頭で連絡が取れたじやろうが」

言われて、僕はハツとした。

「あつ!? すみません……この娘を助けられた事や事件が解決した事で全部やり終わった気持ちになつててそこまで頭が回りませんでした。以後気をつけます……」

と、頭を下げる。

すると、僕の足にしがみ付いていた少女——シジアンが悲しげに目

を潤ませた。

「ボクは迷惑をおかけしてしまったのでしようか？」

そんな彼女の頭を、子供をあやすようになでて、

「違うよ、迷惑なんかじゃない。単に僕が失敗しちやっただけ。君は悪く無いよ」

するとシジアンはまた、ぎゅつと僕の足にしがみ付いて涙の浮かぶ顔を押しつけた。

「……ここでの娘を匿って経過観察するのは良いが。お主がきちんと面倒をみるのじゃぞ」

「はい、当然そのつもりです。彼女の自我がしっかりと成長して、きちんと自分の意志で歩けるようになるまでは、僕がお世話をします——けど、僕人生経験少ないし孤児を指導する自信がないので他の八天導師のみんなにも少しは手伝って欲しいんですけど、ダメですかね？」

少し目を逸らしつつティアロ様に伺ってみる。

「この事情を聞いてダメと言うような奴は採用しておらん。それはお主も判っておるじゃろう？」

「そうですね……八天導師のみなさんはみんないい人です」

この子の——シジアンの事を蔑ろにするような人なんて居ない。そんな信頼感と安心感が胸に広がった。

「ただ、新しい部屋の準備が出来ておらん。空き部屋はあるが放置しっぱなしで荒れ放題じゃ。住めるようになるまではお主の部屋で

——あーいや、いくらお主が面倒を見るとはいえ年頃の男女を同室にするのはカドが立つか？ ルーシーかイズナ、レンの部屋にでも——」

とティアロ様が言いかけたところで。

「っ、い、一緒に良いですッ！ 離れたく、ありません……」

シジアンは声を張り上げて、それでもおぼろおぼろと、震えながら、自信を無くすように少しずつ声量を落としつつ、主張する。

「……えーと」

僕は言葉を探していた。今まで魔導兵器のせいで押さえつけられていた自我が漸く目覚めたのだ。世間、他人に対する不安や恐怖で

いっぱいなのは仕方ないだろう。でもティアア様の言うとおり、僕と同室で生活させるのは流石に問題があるんじゃないかと考えていたが。

「その様子じゃとまだ、難しそうじゃな。仕方有るまい。お主の部屋で面倒をみよ」

ティアア様はそう判断した。

「は、はい」

自分が撒いた種だし、流石にティアア様に命じられては断れない。僕は戸惑いつつも了承する。

「もう下がってもよいぞ。じゃが——」

ティアア様は最後に、不安そうに眉間に皺を寄せて言った。

「お主のことを信頼していない訳では無いが——その、手は出すなよ？」

「しませんよそんな事!!!」

そりゃ、その、そういう事に興味津々な歳盛りではあるけどさ！

こんなに不憫な女の子の弱みにつけ込んでどうしようだなんて外道な事考えちゃいない。

「いや、本当に、信頼していない訳では無いのだが……三大欲求は中々自制が効かないものじゃからな。ふとした拍子にタガが外れる事がままあるのが人間じゃ。でなければ痴情のもつれで面倒ないざこざが起こる事など無い」

それは、そうかもしれない。

実際シジアンは凄く可愛いし肉体年齢的には大体3.4歳差だから十分恋愛対象範囲内とも言える。……けど、僕は初恋がらみで失敗してるから恋愛には暫く興味が無いというか、及び腰だ。

「ホント、大丈夫ですから心配しないでください……」

とだけ僕は答えて、会議室を後にした。

外伝94. 9話 君の名前は“シジアン”だ

ただ、『初代異伝』が活動する為の肉人形。

「ボクは『初代異伝』に選ばれた傀儡の一人。傀儡は自我も無く、心も無く、ただ『初代遺伝』の意のままに世界を渡り、人を観察し、『新章』に相応しい人間を探す。それを繰り返すだけの名前も無い人形。そして『初代異伝』が気に入った人間を『新章』として継ぎ足していく。『異伝』が数多の人生を記録した書物とするならば、僕達傀儡は章と章の狭間に存在する空白の1ページ。何の意味も無い。誰にも見向きもされない。そんな存在が、ボクでした」

ボクの言葉に、アリシアさんは涙を浮かべた。

「そんなの、悲しすぎる。何の意味も無いなんて、そんな事、あるわけ無い。生きてるんだもん。ちゃんと、その命には意味がある筈だよ……」

「はい。ですからボクは今、『シジアン』になれたのです」
「え？」

僕が“シジアン”という名をいただいた、その経緯をアリシアさんに伝える。

「長い時を経て『古代魔導』となった『異伝』はそれでも貪欲に『新章』たり得る人物を探していました。しかし『初代異伝』は食傷気味でした。長い時を経て、厳選して集めた100人の人生。計百章の物語。これに追加するに相応しい人間が見つからなくなっていたのです」

「そうだよ。凄い才能や、珍しい経験をした人なんてめったに居ない。それも、大昔から選り抜いて100人分そんな記録を集めていたら、もつと珍しい人間なんてなかなかみつからなくなっちゃう」

「しかしそこで異伝が入手した情報が、『八天導師』の存在でした」
漸く聞き慣れた単語が出てきて、アリシアさんの表情が少し明るくなる。

「『八天導師』！」

「当時の『八天導師』はできたばかりの新しい組織で人数も揃って居

ませんでした。がその構成員は賢者と呼ばれたる大魔道士、ティアア口様
が選りすぐった人材。『初代異伝』にとつては垂涎の情報です」

異伝は「八天導師」に接触する為に、一芝居を打つ。「八天導師」
は人に害なす悪しき魔導を討伐し、世界の魔導を公正に管理する組
織。事件を起こす『古代魔導』の討伐もその業務に含まれていた。

『初代異伝』はある街で敢えて事件を起こします。影ながら人々を襲
い、しかし魔力の残滓を残す事で「正体不明の魔導が暴走している」
という状況を作り上げ「八天導師」を釣り上げる。そうして、事態究
明に派遣された「八天導師」が――」

「ハル君だったんだね！」

アリシアさんは嬉しそうに手を合わせて答えた。

「はい。ですがそれは『初代異伝』にとつて期待外れの出来事でした。
まだまだ幼さの残る当時14歳であったボクの肉体を利用し、被害者
の関係者として先輩に接触しどきくさに紛れて「仮登録」を行いそ
の人生を垣間見て――くだらない、と判断したのです」

逆に、それはそれで良かったのかもしれない。

『初代異伝』が先輩の人生をくだらないなんてバカな判断をしてく
れたお陰で「仮登録」で済み、先輩の記憶や魂を蝕まずに済んだのだ
から。

「しかし先輩の記憶の中に登場する人物達、即ち他の「八天導師」達
には興味を示しました」

大地の賢者の後継。「破滅の光」の継承者。独自の魔導技術を生
み出す者。どれもこれも、魅力的な新章候補です。『初代異伝』は先輩
に取り入る事で「八天導師」の住処へと侵入し、その人々を喰らおう
と考え、自作自演で先輩の捜査に協力を行いました。

「でも、ハル君はそこまでバカじゃ無い。今、部長さんが『初代異伝』
なんかじゃない。シジアンちゃんだって言う事は、そういう事だよね
？」

「はい。それなりの捜査期間はかかりましたがマジッククラフトのプ
ロフェッショナルであった先輩は、マジックアイテムにも詳しく、『異
伝』の正体がこの書物である事を突き止めました。『初代異伝』は愚か

者です。先輩という人間の人生を垣間見ておきながら、その能力を軽んじた結果がそうなのですから」

正体を見破られた『初代異伝』は開き直って先輩に襲いかかった。当然だ。取るに足らない人間だと判断した魔法使いくらい簡単に倒せると、そう考えた。

実際戦闘が始まってみれば『初代異伝』の圧倒的優勢だった。10人分の経験と、その魔法。如何に先輩が優れた魔法使いであったとしても一人で相手をするには分が悪すぎる。

それは先輩も理解していて、『初代異伝』の戦闘能力などの情報をある程度集めたらルクシエラ先輩達へ救援依頼を出すつもりだったらしい。

「けれど先輩は、その前に、一つだけやるべき事があると。やらなければならぬ事があると言って、『初代異伝』に立ち向かいました」

「それって？」

「傀儡たる、〝ボク〟を助ける事、です」

「えっ!? ハル君は部長さんが『初代異伝』の傀儡である事にまで気付いてたんだ!」

「後から聞いた話ですが、『初代異伝』はあくまで兵器としての心しか持っていませんでした。しかし〝ボク〟の肉体が生身の人間である以上、食事など生命に必要な活動は行います。そのとき――〝ボク〟の僅かな表情の変化や『初代異伝』が猫を被って接していた時とのギャップを感じていたそうです」

曰く、『レンと組むようになってからそう言うのにちよこつとだけ敏感になっちゃったんだよね』との事。

「……ここでレンちゃんの名前出てくるのちよつとやだなー」

「まあ、そう言わずに。こちらの先輩とは別のお方なのですから」

「そうだけどねー。乙女心は複雑なの」

「そうして、せめてボクだけでも『初代異伝』の支配から救い出し、その後ルクシエラ先輩達に『初代異伝』を倒して貰おうと考えて居た先輩は〝ボク〟に必死に話しかけます」

それが僕にとって全ての始まりだった。



「気がついて！ 君の命は、君だけのモノだ！ そんなポンコツの狂った道具なんかのモノじゃない！」

その声は、確かにこの耳に届いていた。

『何を言い出すかと思えば、くだらん。我が活動する為だけに存在する肉体を哀れむか？ 滑稽だな。そんな愚か者だから貴様の人生など『新章』たり得ぬのだ』

「君には君の笑顔があつた！ 君には君の涙があつた！ 偽物なんかじゃない、操られてるだけじゃない！ 君は君なんだ!!」

その想いは、確かにこの胸に届いていた。

『うるさいッ!! 耳障りだ……もう消えろ。記録する価値のない人間め』

『初代異伝』はその人の言葉を無視して、トドメの魔法を放とうとする。けれどその人は決して『初代異伝から』——いや、この肉体から目を逸らさない。

「もしも君が、君自身の意志でそいつの力になろうっていうのなら、それは止めない。君の人生だ。でも、少しでも！ そいつなんかの言いなりになるのはごめんだって思う気持ちがあるのなら、僕はこの手を差し伸べる！」

その手は——この身体に届くのだろうか？ 『初代異伝』は今にも魔力の塊を放とうとしている。このままなら、あの人は魔力の塊に押しつぶされて——死ぬ。

『ファーストナンバー：メモリーズガーディアンツ!!』

四つの暗黒の魔力が巨大な玉となって浮遊し、あとは標的に向かって指さすだけだった。

——嫌だ。

それは初めて思った、自分の心。

『!? 何故だッ身体が動かぬッ!!』

「当たり前だろ……それはお前なんかの身体じゃない。その子の身体なんだから」

『黙れッ！ そんな事あるはずが無いッ！ 今まで、何百と繰り返し

てきた！ 傀儡に心など、意志など存在しない！ ただの我が手足だッ！」

「お前こそ黙ってるよッ！ 僕は、今、その子に話かけているんだッ！！」

——何で？ 何でそんなに自分を、想ってくれる？

それは初めて浮かんだ、自分の感情。

——自分？ 自分って何？

『動けッ役立たずがッ！ 白紙の1ページの分際で、我が傀儡の分際で刃向かう等ッ——』

『初代異伝』の言葉を遮って、

「わか、らない……」

それは初めて発した、自分の言葉。

「ッ！ 届いた！ やっぱり、ちゃんと、君は君なんだ!!」

その人は嬉しそうに笑うけど。判らない。自分ってなんだ？ 君ってなんだ？

「自分は、誰？ 君って、誰？ 自分は……うう……」

頭が痛い。内側からガンガンうるさい声が響いてくる。黙れとか、動けとか、耳障りな声が。ずっと当たり前だった筈なのに、それを今は明確に、不快だと感じている。

「そうか……君には、名前が無いのか……。なら！」

その人は更に一步、この身体に近づいた。

「僕が君に名前を付けようッ！ それが、君が君である証になるというのならッ！ それで、君が君として生きれるのならッ!!」

魔力の玉を浮遊させ今にも攻撃しようとしている筈のこの身体に、ドンドン歩み寄り。

最後には槍を投げ捨てて、この身体を抱きしめてその人は言った。

「君の名前は、シジアン」だ。黒曜石みたいで、綺麗な髪をしている。さあ、自分で言うってごらん、シジアン」

その人はこの身体にそう促す。

——我は、違う、自分は、違う、私？ 俺？ 違う、違う、きつと、これだ……。

それは、ひな鳥が親鳥の鳴き方を真似するかのよう。

その口は、こう言った。

「――『ボク』は、シジアン」

もう一度、確かめるように、ハッキリと口にする！

「他の誰でも無い。ボクは、シジアンだツ!!」

その瞬間、解放されていた全ての魔力が、巨大な本の中へ吸い込まれていく。

『バカなツ!? ふざけるなツ!! 傀儡の分際で、我が魔力をツ!!』

口が勝手に動き、言葉を発するが。もう、そんな事許さない。

「黙ってるよッ! ボクは、いま、その人とお話してるんだツ!!」

それも。その人の真似だったけど。

そうして『ボク』は。シジアンの名を与えられ。『初代異伝』の意志から解放された。

??話9 お父様、でよろしいですか？

「ふう、とりあえずベッドの増設は出来たつと」

僕は腕をぐるぐる回して肩をほぐす。空き部屋のベッドを、自分の部屋まで引きずって来たので中々に疲れた。

「家具とかをポンツて出したり消したり出来るような魔法があれば良いのになあ」

と愚痴を零しつつ、散らかっていた部屋を片付けていく。

「あの、お手伝いしても……良いですか？」

おずおずとシジアンが震えた声と共に見上げてくる。

「えっ、いや——」

思わず断ろうとしたんだけど……困ったような、申し訳なさそうなシジアンの顔を見て考えが変わった。僕に苦勞をかけていると勘違いしているそうだ。作業をする事で気が晴れるならその方がこの子の為になる気がする。

「それじゃあ、小物を拾って1カ所に集めてくれるかな？ あとで僕が整理するから」

「はい」

シジアンは黙々と掃除を手伝ってくれる。お陰で片付けがあつという間に終わってくれた。

「それじゃあお約束のラインを引こうかな」

僕はビニールテープを取り出す。

「お約束のラインとは何でしょうか？」

「同室でプライベート空間を保持するための線の事。線からこっちは僕の部屋、線からあっちはシジアンの部屋、みたいな感じ。必要な時以外はお互いにその線を越えないようにする事でプライバシーを確保するの」

シジアンに説明しつつ僕は床にテープを貼ろうとするが。

「あの、それって、どうしてもしなきゃ……ダメですか？」

テープを伸ばして床に付けようとした瞬間に、シジアンが寂しげな声を漏らす。

「え、いや、えーと、うーん」

どうやらシジアンはこの線引きに乗り気では無いようだ。僕の側に寄ってきて服の裾をきゅつと掴み潤んだ瞳で見上げてくる。そんな表情をされると、どうしても必要かと言われれば疑問が湧いてくるけれど、ダメダメ、流されちゃいけない。

「でも、ティアロ様も言っただけで何か間違いがあったらいけないから……」

「間違いって何ですか？」

「あー、えーつと……」

シジアンの純粹な質問が胸に刺さる。

こんな純朴な子に『僕が君を襲っちゃうかもしれないって事だよ』だなんて言えない。

「あの……ボクはいずれ個室が与えられるという認識で間違っていないか？」

「うん、そうだね。今のところ君の精神がどれくらい成熟してるのか判らないし、古代魔導兵器の暴走を監視する事も兼ねての同室だから、何週間、何ヶ月かは判らないけど君が年相応の心を取り戻して、古代魔導兵器も安定化していれば個室で暮らす事になると思うよ。今の君の様子を見る限り、自立するまでに年単位の時間はかからなさそうに見えるし」

「でしたら……この部屋に居る間は、その、できる限り貴方の側に居たいです」

シジアンは申し訳なさそうに、そしてとても不安そうに視線を逸らして、けれど身体は僕にぎゅつと押しつけて離れようとしなない。

「わがままを言っただけ、ごめんなさい……本当に世話になりっぱなしで、ごめんなさい。でも、ボクが『ボク』である為には……貴方が必要です。貴方を見ている時だけ、ボクは自分を『ボク』だと——シジアンだと、確認出来ますから」

何度も謝るシジアンの頭を、僕は優しく撫でた。

「謝らなくて良いんだよ。君は何も悪い事なんてしてないんだから。判った、僕なんかで良ければ側に居てあげるよ。君が、自分一人で歩

けるようになるその日までは」

「……ごめんなさい」

「謝らなくて良いんだってば。そこは『ありがとう』、だよ」
「はい。ありがとうございます——あ」

ホツと落ち着いた様子を見せたシジアンが、声を漏らす。

そして僕の顔へと視線を向けて、首を傾げる。

「あの、貴方の事、なんとお呼びしたらよろしいでしょうか？」
「え？」

突然の言葉に僕も意味をよく理解できないまま、シジアンは続けた。

「お父様、でよろしいですか？」

「ぐっふっ!？」

何故か。ものすごく、お腹に響いた言葉だった。

思わず仰け反った僕を見てシジアンはぎよっとする。

「あつ、す、すみません！ お父様は問題がありましたか!？」

「い、いや、えつと、なんていうか、その、」

動揺して感情をうまく言葉に表せない。なんか自分がもの凄く老けこんだ気持ちになつてしまふ。

「では、お兄様はどうでしょうか？」

あせあせと慌てながら代案を出すシジアン。今度はさつきみみたいな鈍痛とはまた違った感覚が胸を打った。

「……ごめん。それは辞めよう」

「何故でしょうか？」

「なんて言うか、君みたいに純粋な子にお兄様なんて呼ばせるの、罪悪感が凄い……」

自分が連れ込んだ子に無理矢理お兄様と呼ばせてるみたいな感じがして、凄く嫌だ。

なまじシジアンが可愛らしいから尚更破壊力がある。

「な、ならばどうお呼びすれば……」

困り果てるシジアンをなだめる為に。僕は膝を折って彼女と視線を合わせる。

「いいかい、シジアン。よく聞いておくれ。確かに僕は君に『シジアン』という名前を付けた。でもね、それだけなんだよ」

シジアンには、彼女には名前が無かった。

巨大な本の形態をとる古代魔導兵器、『不朽型・異伝』が地上で活動するための運び手たる傀儡人形として生み出された少女だったからだ。だから彼女に自我はなく『異伝の第一章、記憶を司る門番』の意志によって操作されていた。

僕はそんな『異伝の第一章』と交戦する中で、シジアンが決して人形のような存在では無い事を感じ取り、彼女に自我を見つけさせるきっかけとして。艶やかな黒髪を黒曜石に例えてオブシディアンをもじって『シジアン』と名付けた。

名付けられたシジアンは『異伝の第一章』の支配下から抗い、漸く自分の意志を見つける事になる。結果として立場が逆転し古代魔導兵器『不朽型・異伝』はシジアンの制御下に置かれる事となって事件は解決した。

ティア口様にはノリで解決してしまったと説明したが、比喻でもなんでも無かったのだ。『不朽型・異伝』及び『異伝の第一章』は強大な魔導兵器であり、僕なんかじゃとても太刀打ち出来るような存在じゃ無かった。

だからせめて、そんな魔導兵器の傀儡にされていた哀れな少女に、少しだけでも手を差し伸べたかった。彼女を魔導兵器から分断し、救助した後に魔導兵器は別途他の八天導師に討伐して貰う算段だった。

それが、シジアンの強い意志によって『不朽型・異伝』の沈静化にまで至った訳だ。

「僕は君を産んだ訳でも、育んだ訳でも無い。君は初めから君だったんだ。僕が与えた名前はただのきっかけに過ぎない。だから、僕を肉親みたいと思う必要は無いんだよ。君は、君自身の意志で自由を手に入れたんだから」

僕の言葉をシジアンは受け止め、悲しげに目を伏せる。

「すみません。貴方の言っている事が、今のボクにはあまり理解できません。ボクにとって貴方は存在の前提であり、貴方がシジアンと名

付けてくれたからこそ今のボクがあります。初めからボクだった……という感覚は無いのです」

「うーん。でも、なあ。慕ってくれるのは嬉しいけれど僕だってまだ未成年の若造だ。誰かを育てたり導いたり出来るような器じゃない。君の親代わりには、なれないよ」

ここでルクシエラさんみたいにこの子の親として胸を張れるだけの器量が僕にあればよかったんだけど。残念ながら、僕はそんなに立派な人間じゃ無い。

「勿論、勝手に手を差し伸べて置いて後は好きにしろーなんて無責任な事は言わないよ。だからここに連れてたんだもん。僕に出来る事は、ちよこつとだけど人生の先輩として——」

なんとか自分の中でも整理しつつ言葉を並べている内に、自分が発した言葉を自分自身で認識し、ハツとする。

「そうだ。うん。これで良い！」

「と、申しますと？」

「僕の事は『先輩』って呼んでくれればそれで良いよ。親兄弟ほど親しくなく、けれど君を導き、生きる事のお手伝いをする存在。友達以上家族未満、丁度良い関係性だ」

自分で言って、しつくりきたモノだから勝手に納得してしまう。

「って、勝手に色々言つてごめんね。君の意志を尊重しないとね。結局の所は君の選択に任せるよ。どう呼んで貰っても構わない。君は、どれを選ぶ？」

と、シジアンに確認すると。シジアンは少しだけ気まずそうに目を逸らして。

「ボクは貴方に迷惑をかけたリ不快な思いをさせたくありません。なので、貴方が嫌がる呼び方はしたくありません。貴方がソレで納得して、不快な思いをせずに済むのでしたら——『先輩』と呼ばせていただきます」

と、まだ少しだけぎこちない笑顔を見せて答えてくれた。

「そっか。優しい子だね、君は」

僕はシジアンの笑顔に応えるように頭を撫でてあげた。

??話10 シジアンひよつとしてもう既に僕より有能なんじゃね？

シジアンと暮らし始めてから、最初の数日間。彼女は時折僕のお手伝いをして、それ以外の時間はずっと、その手に抱える巨大な本を読みふけていた。

古代魔導兵器『不朽型：異伝』。それは、魔法使いの一生を書物として記録しその能力や魔力を取り込む兵器だ。幾つか段階を経るそうだが、完全にこの本に取り込まれた魔法使いは最終的に魂を抜かれる事となり死んでしまう。

古代より現代に至るまで、様々な年代の魔法使いがこの兵器の餌食となっていた。その数はシジアン曰く1000章もあるそうだ。

古代から活動している魔導兵器にしては1000章、つまり1000人の人生は少ないのでは無いかと思われるかもしれないが、これは元々の『不朽型：異伝』を支配し、活動していた初代の魔道士『異伝』の第一章、記憶を司る門番』の意向によるモノだ。

例えば、『異伝の第一章』曰く、僕みたいな凡人には興味が無い。手当たり次第に人を襲ってはその人生を閲覧し、特別な人生、特別な才能を持つ者だけを新章として継ぎ足していった結果がこれなのだという。

あの巨大な書物には1000人の魔法使いの人生が、1から10まで記されている。どのように生まれ、何を感じ、どう生きて、どう死んで行ったのか。客観的に、事細やかに。

一朝一夕で読み切れる文章量では無いが、しかし。今のシジアンとしてはとても重要な行為だった。

突然自我を手に入れたシジアンにとって、14年間の人生は空白に等しい。夢、希望、後悔、挫折、感謝、憤怒、恋愛、親愛。本来人が経験するべきだった様々な心の変化を彼女は経験していない。しかし『不朽型：異伝』を読む事で異伝に記されている人物の人生を追体験する事が出来る。『異伝』のせいで空白な人生を送ってしまったシ

ジアンにとって、皮肉にも『異伝』が読む事はとても効果的な行為だった。

更に元々、シジアン元来の本質が根がしっかりとっていて純真無垢だが落ち着いた性格だ。

一日、また一日と経つ毎に彼女の心は目に見えて素早く成長し、成熟していった。

その結果――

「先輩。ティアア口様から先輩に割り振られた仕事に関する書類の整理ができました。要点に目印を付けている為その他は読み飛ばしていただいても構いません。それからマジッククラフト用の備品で不足しているモノを発注しました。最後に、レン先輩から新しい『紋章』を組み込んだマジックアイテム制作依頼が来ています」

と、書類の束を僕の机に置いて。

「それでは、何かご入り用でしたらなんなりとお申し付けください」

と言つて自分の机に座つて『異伝』の続きを読む敏腕秘書みたいな後輩が誕生していた。

「……あれ、シジアンひよつとしてもう既に僕より有能なんじゃね？」

と、自分の矮小さを感じる今日この頃。

お陰で仕事が凄く楽ちん。普段の半分以下の労力で済んでしまう。結果として自由な時間も増える訳で、その時間を使ってシジアンを街に連れて行ったり、他の八天導師のお仕事を見学させて貰ったりしているんだけど……。

正直、もう僕必要ない気がしてきた。

思つてたの5倍くらいシジアンの心の成長が目覚ましい。シジアンとの生活も2週間ほど過ぎた頃、切り出してみる。

僕は自分のベッドに座った状態で、机に向かって『異伝』を読み進めるシジアンへと声をかけた。

「ねえ、シジアン」

「はい、何かご用ですか。先輩」

彼女はすぐに読書を辞めて、椅子をくるりと反転させてこちらを向く。

「いや、用事って訳じゃ無いんだけどね。一日毎に、君がどんどん成長していくものだから、ちよこつとしんみりしちゃった」

「成長、ですか？ 自分ではよくわかりません。ボクは先輩の真似をしているだけですから」

「僕そんなに有能じゃ無いよ!!」

と、叫びそうになるのを堪える。僕の実態はともかくシジアンは僕の事を凄く尊敬しているみたいで、心が成長している今の時期で夢を壊してしまうのは教育に悪い気がする。

「真似、か。そっか」

僕そんなにテキパキ働いて無いし大した事してないんだけどなあ……。

「少し、聞いてみてもいいかな？」

「なんなりと。どんなご質問にもお答えします」

「そんなにかしこまらなくていいよ。あのね、シジアン。君はこれから——どうしたい？」

自分で、僕はシジアンの親類なんかじゃ無いなんて言っておきながら。

たった2週間やそこらだけしか触れあってない癖に。僕は、気がつけば親離れしていく子供を見るような気持ちでシジアンと接していた。

「どう、とは？ すみません。質問の意味が、よくわかりません」

「んーと、将来の夢とか、かな。何をして生きていきたい？ 仕事にしたい事や、好きな遊び、行ってみたい場所、なんでも良いんだけどそういう事、考えたりしないかな？」

「……」

いずれシジアンはこの部屋を——いや、この八天導師の館を出て行くだろう。

そして、漸く自分の人生を歩むことが出来るようになる。

もしシジアンにやりたい事——夢があるなら、僕は全力で応援したい。

そう思って聞いてみた。

シジアンは顎に手を当てて目を細め、考え込む。

「考えた事、ありませんでした」

「そっか。それじゃあ、これから考えていこう！ 君が君らしい人生を送るために、必要な事だから」

「は、はいッ！ がんばって考えます！」

シジアンは少し焦ったような、緊張したようなこわばった表情でそう言うけど。

「堅くならないで。ゆるーく考えて良いんだよ。君はまだまだ若くて、時間はたっぷりあるんだから——つて、未成年の僕が言うのもおかしい話だけどね」

「ボクが、やりたい事……」

生真面目な基質のシジアンは珍しく頭を抱えて唸る。

唸りながら……。立ち上がって。

おずおずと僕の側に近づいてきて。

僕の横に座ると、ポストと肩に頭を預けてきた。

「し、シジアン？」

びっくりして思わず声が震えそうになるのを我慢する。

「その、未来とか将来とか、まだよくわからないですけど……。今は、まだ暫く、こうしていたい、です……」

シジアンは申し訳無きように、目を逸らしたまま、そう言った。

「ご——」「迷惑なんかじゃないよ。好きなだけ、そうして良い。君が、望むなら」

きつとシジアンは『ご迷惑をおかけして申し訳ありません』なんて言いそうだなって思ったから。その言葉を遮って、その頭を撫でる。

「……こういう時は『ありがとうございます』、でした。すみません」

「あはは、結局謝っちゃってるよ」

「あつ、うう……」

シジアンは気恥ずかしげに頬を染めて目をつむる。

もの凄い勢いで成長してるなって感じてたけれど……やっぱり、まだまだ僕なんかでも支えになれるみたいだ。シジアンがもう一人でも大丈夫だって言える様になるまでは、もう少し『出来る先輩』つぽ

く頑張らないといけないな……。

??話1-1 これが、ボクの見つけた答えです

シジアンと出会ってから、半年が経過した。シジアンの自我はよりはつきりと、しつかりシジアンという人格に根付いて。冷静沈着な分析家、けれど人の優しさを持ち合わせた文官として成長した。

数ヶ月前には僕の部屋を出て、シジアンは個室で生活を始め自立の練習をしていた。

そして今日。

コンコンコンと三つ鳴らされたノックに応じる。

「どうぞ〜」

「失礼します、先輩」

入ってきたのはシジアンだ。ボクは作業を中断して、椅子を反転させてシジアンの方へ身体を向ける。

「いらつしゃい、シジアン。こうしてこの部屋に来るのも久しぶりだね」

「はい。沢山お世話になりました。先輩が居なければボクはボクとして生きる事はできませんでした」

「そんな事はないって。君は強い子だ。僕はちよこつとだけ手を差し伸べたにすぎない」

半年経つてもシジアンの僕への幻想というか、傾倒ぶりは変わることも無かった。それだけが少し心配になって、苦笑いを浮かべる。けれどシジアンは嬉しそうに笑った。

「ふふ」

「どうかした?」

「いえ。まだ、それほど長い時間とは言えませんが。先輩と一緒に暮らして来て、判りました。先輩は——自己評価が低すぎます達成している実績と、自分自身の評価が釣り合っています。それは謙虚とも言えますが……もう少し、自信を持たれてもよろしいかと」

と、なんだか説教をされてしまう。

「え、あ、す、すみません」

思わずシジアンに頭を上げるが、シジアンはあわあわと慌てふため

き、

「そ、そんな、頭をお上げください！　こちらこそ説教臭くなってますみません！　ボクはただ、先輩は先輩が思っているよりも凄い人なんだって伝えたかっただけなんです！」

と今度はシジアンの方が頭を下げた。

「えー。そんな事は無いと思うけどなあ……」

シジアンは優秀な子だ。この半年間で、ボクが先輩として頑張ってた張りぼての見栄なんかとつくに見透かしてるだろうに。

「ボクは、先輩に感謝しています。――ですから、先輩。ボクは見つけました。ボクがしたいこと。ボクが生きていく意味を」

シジアンは真剣な表情を作って、真っ直ぐに僕の日を見つめる。

「ああ、遂に見つけたんだね」

随分前に、シジアンに提案した事。自分がやりたい事を見つけて欲しい。その僕の言葉を覚えていてくれたようだ。

「ティアロ様からも許可をいただきました。明日から僕は、自分自身の為に生きていこうと思います」

「そっか、やっと、君の人生が始まるんだ」

明日から、か。急な話だとは思わなかった。シジアンの成長を見ていれば、いつココを巣立っていつてもおかしくないと思っ居たら。

「今回は、その。それを先輩に報告したくて、来ちゃいました。作業中に、貴重なお時間を拝借してしまいすみません」

「いやいや、大丈夫大丈夫。僕の事よりも、シジアンが成長してくれた事が判って。シジアンがやっと一歩踏み出せることが判って、嬉しかったよ。教えてくれてありがとう」

目の奥が、熱くなった。

何、泣きそうになってるんだろう。たかだか半年、面倒見ただけじゃないか。親にでもなったつもりか？　僕がしたことなんて大した事無い。何度も自分に言い聞かせたじゃないか。

涙は見せない。シジアンに、余計な心配をかけちゃいけない。僕は先輩として、最後の意地を張ってなんとかこみ上げる感情を抑える。

「それでは、先輩。今日はこの辺りで失礼します。明日以降の為に色々と手続きがありますから」

「そっか。うん。頑張れ、シジアン」

「はい。先輩。——これからのボクを。ボクの人生を、どうか見守っていてください。大切な、ボクの『大先輩』、ファルマ様……」

シジアンは最後にそう言って、僕の部屋を後にした。

扉が閉ざされ、足音が離れていく。

心配が感じられなくなったのを確認してから。僕は椅子を蹴飛ばして、すぐ側のベッドに飛び込んだ。

「元気でね、シジアン。見守ってる。応援してるよ——ぐすっ」

今生の別れじゃ無いなんて判りきっていても。自分で『親や兄弟みたいに思わなくて良い』なって言っておいても、やっぱり。巢立っていく娘を見ている気持ちになっちゃって。

僕は暫く、枕を濡らし続けた。

◇ ◇ ◇

次の日。緊急で八天導師が全員集められた。

円卓の会議室、それぞれ決められた席に座る7人。他の6人に向けて、ティアロ様が言う。

「皆、喜んで欲しい。『八天導師』最後のメンバーが決まった。これで当初の目的である8属性それぞれを司る魔道士が揃う事となる」

「やれやれ、漸く揃ったか。と言っても一人増えたところで忙しきは大きく変わらないだろうが、まあ名前通り八人になれた事は喜ばしいな」

イズナ博士は肩をすくめながら言う。

「漸くと言う程かしら？ ほんの数年でしよう。私にとってはあつという間、寧ろ丁度良い頃合いだと思いますわ」

長生きしてるせいで時間感覚が狂ってきているルクシエラさんがそう言うのと、全く同じ事を思ったのかアイルさんがため息を吐いた。「人間って、長く生きるほど体感時間が短くなっていくって言うよな。姐さんほど長生きならそうなるもんか」

その言葉に、ルクシエラさんはピクツと眉を動かす。

「アー坊。後でオシオキですわ」

ぴしゃり、と言い放つ。アイルさんは慌てて、

「っ!? いや、良い意味でだぜー!? そんな、決して、ババアとか年増とか思ってる訳じゃなくてだなー!?」

とドンドン口を滑らせていくアイルさん。比例してルクシエラさんの顔がどんどんにこやかな笑顔になっていく。額の端に、青筋を浮かべながら。

「あの、師匠、アイルさん、話が逸れてます。新規メンバーという事なら通例に従えば時期にこちらへ来られるのですよね? 出迎える準備をしておかなければならないのでは」

真面目なドライズが、二人をなだめて。

レンはどーでも良さそうにぼーっと虚空を眺めていた。きつと新しい魔法陣でも考えて居るのだろう。そして、もし新人が入るなら魔法陣に理解ある人だと良いなー程度の興味しか無いとみた。

「ドライズの言うとおりじゃ。ほら、やってきたぞ」

遠くから聞こえてくる小刻みな足音。歩幅が、狭いのかな?

その足音は会議室の扉の前でピタリと止まる。

「最も、今回ワシから紹介する事は無い。みなも納得して受け入れてくれると思ってる」

「え?」

思わず、僕は声を漏らした。それはつまり、新しく入る最後の一人は既に八天導師のみんなが知っている人物であると言う事。

そして、昨日体験した出来事を思い出す。

他のみんなも、僕と同じように、察した様子だった。

「ああ、そういう事ですよ」

ルクシエラさんがやりと、少しいやらしい笑みを僕へ向けた。

「さあ、入るが良い。八天導師最後の一翼、黒天の称号を授かる者よ!」

ぎい、会議室の巨大な扉が開かれる。

八天導師の制服、新品の漆黒のローブを身に纏い。片目にはモノクル。少し短めの髪に、ぴよこんと跳ねたアホ毛が一本。体格は小さ

く、まだまだ幼さを感じるがその表情は凜々しく迷いが無い。冷静沈着で、強かな意志を感じさせる眼差し。

「今日から黒天の称号を賜ります！ 自己紹介など今更不要かと思いますが、ひとつだけ。ボクの名はシジアン！ 先輩にいただいた、大切な名前ですッ!!」

シジアンは立派な大人の振る舞いで、胸を張り、そう宣言する。「なっ、シジアン、どうして!?!」

ボクはガタツと椅子を跳ね飛ばし、立ち上がって困惑するが、シジアンは僕に笑顔を向けて答えた。

「これが、ボクの見つけた答えです、先輩。ボクがしたいこと——先輩の側に居たいです。先輩を支えてあげたいです。先輩と、一緒に生きていきたいです。だから、自分の意志でこの場所を選びました」

予想はできていた。けれどやっぱり、その衝撃は避けられない。僕はただ呆然と、立ち尽くしたまま事の成り行きを見守る。

「シジアンは幼くも、古代魔導兵器『異伝』を制御し『八天導師』の一員として恥じぬ能力を持つ。特に『異伝』を活かした情報収集、解析、整理能力が優れている事はここに居るみなも理解しておろう。誰もがこの半年間で幾度となく世話になった筈じゃ」

ティアロ様の言葉が右から左へ突き抜けていく。

「司る属性も、偶然ながら空席であつた闇属性。ファルマが彼女を連れて来た事は最早運命と言っても過言では無い」

続くティアロ様の言葉を、ルクシエラさんは否定した。

「あら！ 運命なんて考え方、私は嫌いですわッ！ この子は、ファルマが自分の意志とその行動によつて『八天導師』へ導いた存在——ファルマの大切な後輩ですわ!」

「ちよ、ルクシエラさん、辞めてくださいッ！ 恥ずかしいです!」
運命では無く僕が導いたのだと強調するルクシエラさんの言葉があまりにも恥ずかしくて僕は顔を紅く染める。

「これからよろしくお願いします、ティアロ様、アイル先輩、ルクシエラ先輩、イルゼルナ先輩、レン先輩、ドライブ先輩そして——先輩。ファルマ先輩。僕の大切な、大先輩」

「シジアンも僕だけを強調しないで!? 恥ずかしいッ! すっごい恥ずかしいよ!?!」

気がつけば他の八天導師の誰もがにやにや生暖かく笑っていた。

95話 ふあ、へ、は、ハル君!?

ああ。長い、とても長い夢を見ていた気がする。

身体が重い。けど、そろそろ起きなければ。

みんな、心配してるだろうな。——心配、してくれてるよね？

ちよつと不安だ。案外、平気な顔してたりして。

だって俺は。特別な人間じゃ無い。俺なんか居なくなつたって世界は変わらず、回つていくんだ。

……でも、なんか。手が暖かつた気がする。

聞こえないけど、沢山言葉が投げかけられた気がする。

……うん。もう大丈夫だよ。起きるからさ。

「う、あ……」

俺は重たい瞼を開いた。

「懐かしい夢だったな……八天導師に入つてすぐの事だから……10

何年前? だっけか……」

寝起きでぼーつとする頭で滑り出る言葉。ぼんやりと周囲の様子

を確認する。

部屋はほの暗い。僅かに明かりが付いているがあれは保健室の役

員さん達の為のモノ。恐らく、夜。いや、夜中だ。俺は寝返りを打つ

て周囲をさぐる。

携帯端末、どこだろうか。きつと誰かが側に置いてくれる筈

だ。探すと、ベッドの横にあるテーブルとか棚とかを兼用している台

に俺のポーチがそのまま乗せてあつた。

身を取り出してポーチを取り出す。身体が重い。だるい。どれく

らい寝ていたのだろうか。形態端末を取り出して、日付と時刻を確認

する。

夜中の1時……二度寝したらまた朝に起きれる時間ではあるな。

日付は——え、マジで?!

ひい、ふう、みい、と俺が最後に覚えてる日付から指折り数えてみ

て。

「俺——13日も眠つてたのか!?!」

思わず、叫んでしまった。すると、シヤランとカーテンが開き。「やーやーファルマくうん。おはよお。その様子だと平気そうだねえ」

現れたのは初等部の生徒よりも更に小柄な桜色の髪をツインテールにし、だぼだぼの白衣を引きずる回復魔道士兼保険医兼この学園の最高権力とされる三賢者が一人、ジン先生だ。

「お、おはようございます……」

「これでみんな、漸く安心できるねえ。色んな人が、君の事お心配してたよお」

「そうですか……」

みんなに心配をかけた事に申し訳なきを感じつつも、心配してくれた事に少し嬉しさを感じてしまった。

「シジャンちゃんから大体のお話は聞いているけどお、大変だったみたいだねえ」

「ははは、俺は殆ど何もできませんでしたけどね」

「またまたあ。君が居たから『拒絶の闇』を追い払えたでしょお？シジャンちゃんは、そう報告してたよお」

「――『拒絶の闇』」

その単語が、脳裏に引つかかる。あの戦いのあと、何か、大変な事になったような。

「トーラ、って名乗ってたんだっけえ？ まさか『原初の魔力』に人格があるなんてねえ」

ジン先生の言葉に、俺の記憶は鮮明に蘇っていく。

――そして、思い出した。

「――ジン先生。俺、体調多分大丈夫です」

「ん？ うんー。そうみたいだねえ。でも念の為に検査を――」

その言葉を遮って。

「いや。大丈夫なので。明日から学校、復帰させてください。お願いします」

「えっ、いや、流石に数日はあ様子見をお――」

「約二週間も遅れをとってるんですッ！ 検査なら今すぐ受けますか

ら！ お願いしますッ！」

俺は頭を下げて懇願する。

「——悪いけど、君はあ、そんなに熱心な生徒じゃ無かったよねえ？
なのに、どうしたのお？」

ジン先生は困ったように、そして俺の心の内を見定めるように首を傾げた。

「無駄な時間を、生きる訳にはいなくなっただけです。だから……お願います」

「……これはあ、重症だねえ。でもお、カウンセリングは専門外だあ。仕方ないしい、いいよお。検査してあげるう。後は君なりにい、やりたいようにやっごらん」

ジン先生は俺が何かを抱え込んでしまった事を確認して、要望を受け入れてくれた。



僕はその日も、中々寝付けない夜を過ごしていた。そして漸く寝付いたと思ったら。

ガチャガチャと何が玄関から音が聞こえる気がする。

こんな夜中に、誰だろう。でも部屋に入って来れるって事は、先生か、師匠とか、それか……ファルマ？

ぼんやりと、夢とうつつの境目でそんな事を考えながら。

「ごそごそ、がさがさ聞こえる物音。でもそれは、生活的で。そして僕が起きないように最小限に配慮されているように感じた。」

誰かな……ファルマな訳、無いよね。あいつが起きたとしても数日は保健室で経過観察だろうし。師匠がこんな心配りするかな？ つて、流石に失礼か……。でも、多分、敵じゃない。大丈夫……寝よう……。

僕はそんな風に思って、睡魔に身を委ねまどろんでいった。

次の日の朝。

日の出前、いつもの時間に目が覚める。

「んーっ、快眠とはいかないけど。いつも通りの——え？」

朝を迎えたと思って居た。電気を付けようとしたら。

下の方で明かりが灯っている。僕は二段ベッドの上段から身体を乗り出し、下をみおろした。するとそこでは。

「えっ」

ファルマが、スタンドライトだけを照らして机に向かって勉強している姿があった。

「えええッ!? ファルマ!?!」

「ああ、ドライズ。おはよう。もうお前が起きる時間か」

ファルマは背中中、何事も無かったかのように答える。

「いや、おはようはこつちの台詞って、何してるの!?!」

「見たら判るだろ? 二週間近く寝込んでたんだぞ。遅れる授業範囲の確認だよ」

「ええッ!? なんで!?! 病み上がりな上に勉強嫌いの君が、どうして!?!」

「俺の事はいいから、早く支度しろよ。弁当とか作ってるんだろ?」

間に合わなくなるぞ」

ファルマは僕の疑問をことごとくスルーして、当たり前のように勉強を続ける。

確かにファルマの言うとおおり、いつも通り活動しないと、時間がずれてしまう……。僕は釈然としない気持ちのまま、いつも学校に行くとおりの準備を始めた。

それから数時間後。お弁当の用意もできたし、朝ご飯も食べた。制服にも着替えた。普段は朝ご飯は食わずにギリギリまで寝ているファルマにも、今日ばかりは朝ご飯を渡してみたら、勉強しながら食べていた。

そして、僕が出発する時間。僕はいつも、ファルマより先に寮をでて師匠の部屋の掃除や、早めに教室について自習などを行っている。

そして。

「あ、出るのか。じゃあ俺も」

と、ファルマも立ち上がる。ファルマは勉強中既に制服だったから、普段持ち歩いているポーチを携えて、開いていた教科書をリュックにしまい背負うだけで準備完了だ。

「え、あ、一緒に出るの?」

「早いに超した事は無いだろ? 時は金なり、だぜ」

ファルマらしくない事を言う。いつものファルマなら、だからこそ睡眠時間は何よりも大事なんだ!!” って言ってギリギリまで寝るのに。

二人で並んで歩きながら、寮の玄関に着くと。ファルマはそこで立ち止まった。

「どうしたの?」

「ああ、いや。こっちの用事だよ。お前は先に行つてて良いぞ」

と言われたモノの。今日のファルマは様子が明らかにおかしい。

「用事って? ていうか本当にもう動いて大丈夫なの?」

と、ついつい尋問みたいに聞いただしてしまう。

「大した事じゃ——あ、来た来た」

詰め寄る僕からファルマは視線を背けた。

「ふわぁ」

視線の先では眠そうに大きなあくびをしていたアリシアさんの姿があった。

「おはよう、アリス。眠そうだな」

「ほわぁっ!!」

ファルマがアリシアさんに語りかけると、アリシアさんは目を白黒させて飛び上がるほど驚く。

当然だ。だって昨日まで昏睡していた人間が突然朝っぱらから元気そうに語りかけてくるのだから。しかもそれが普段の素行が悪いファルマ!

2度、3度驚いても仕方が無い。

「ふぁ、へ、は、ハル君!? 本物だよね!? 夢じゃないよね!」

アリシアさんはわたたしなながら慌てて身なりを整える。

「お、おはようアリシアさん。多分、本物だと思うよ」

僕はアリシアさんの方に寄り添って、語りかけた。

「にしても、アリスってばいつもこんなに早くから起きてるのか? 俺が登校する時間より随分早いけど」

「いや、だって一応、ハル君がいつ起きるか判らないから早めに起きてきた時の為にできるだけ早く——じゃなくて！　ここしばらくはハル君が居なかったから、その、一緒に学校に行けないのが寂しくて、早く教室に行っちゃおうって——でも無くてツ!!　ああっ私何言っちゃやるんだろう!?!　今すつごく恥ずかしい事言わなかった!?　ていうかあくび見られたあ!」

アリシアさんは表情をコロコロ変えながらわたたと戸惑うばかりだ。

「見られて恥ずかしいものだったのか？　それは、ごめん。無神経だった」

「いや、そりゃ女の子は異性にあくびしてる所なんて見られたくないでしょ。ファルマ、相変わらずデリカシーなさ過ぎだよ」

「だから悪かったって」

「ああ、ドライブ君とのそのやりとり、やっぱり本物のハル君……!?!」
未だ混乱が収まらないアリシアさんを微笑ましく見つめ、ファルマは僕達より一歩前に入る。

「ま、みんな揃ったんだし登校しようか」

「ファルマの用事ってアリシアさんの事だったの?」

「ああ。いつも待って貰ってる側だったからたまには待つ側をやってみたくてさ。まさかこんなに早く来るとは思わなかったけど。でも、嬉しいな。久しぶりにアリスと一緒に登校できるなんてさ」

と、普段なら恥ずかしがって絶対言わないというか言うまでにだいぶんもじもじするような台詞をすらすら吐く。

「……ドライブ君、これ、ホントにホントのハル君?」

「……僕も、自信無くなって来た」

明るいファルマをよそに、僕とアリシアさんはお互い、眉をひそめて向き合っていた。

外伝95・2話 様子がおかしい、という事ですか

ボクはそわそわとチラチラ時計へ目を向ける。

先輩が目を覚ました、その情報は朝のウチにボクの耳に届いていた。けれど、ボクは八天導師であり更に一年生とはいえB組の委員長を務める。休み時間もそれなりに仕事があつて、先輩の元へ行くことができなかった。

しかし、昼休みは別だ。この為に今日の仕事は全て終わらせた。早く、早く4限目が終わって欲しい。時計の針が少しずつ進んでいくのを待ち続ける。先生はボクのその様子に気付いている様だが、まあ八天導師だし普段の成績が良いので不問にしてくれているみたいだった。

そして鳴り響く昼休み開始のチャイム。

ボクは椅子を蹴飛ばして教室を飛び出した。

息を切らして階段を駆け上がり、先輩の居る4年生の階へ。そして、4のAの教室目の前まで来て。立ち止まった。

何故なら。

教室の入り口から、こっそり中の様子を伺うようにドライズ先輩とアリシアさんがドアの端っこに張り付いて居たからだ。

「お二方とも、どうなされましたか？」

ボクが声をかけると、

「シジアンちゃん！ アレを見て」

とドライズ先輩に促される。指さされた先に居るのは、ボクの大切な人。

大先輩、ファルマ様。ファルマ先輩が——昼休みが始まったばかりだというのに教科書を広げて勉強をしていた。同時に、カロリーバーを嚙りながら食事もしている。

「様子がおかしい、という事ですか」

ボクはドライズ先輩とアリシアさんが遠くからファルマを見つめていた理由を悟った。

「部長さんもそう思うよね？ あのハル君が昼休みですら勉強してる

なんて！」

「こんなのあり得ない！ あいつ宿題も半分しかやらないくせに！」

ドライズ先輩もアリシアさんも、心配そうに述べる。

「二週間近く眠っていたのです。いくら体調に問題が無いとは言え数日は様子見の入院が続くはず。それを押しのけて、ああして勉強しているという事になります」

ボクは改めて、先輩の状況を整理する。

「ボク達を知る先輩ならその数日間を存分に楽しみ、学園へは足を引きずるように登校するはず。それが、アレですか」

二人が不安に思うのも仕方ない。

ボクも不安だった。今の先輩からは元来の無茶しがちな気質が見て取れる。病み上がりなのだ。あそこまで集中して勉強するのは身体に悪い。

「話かけても生返事なんだ。『やらないといけない事が沢山ある』。『気にしないでくれ』って言うばかりで、何も教えてくれない」

ドライズ先輩は悲しげに俯いた。

「あつハル君が立ったよ！」

アリシアさんの言葉に、ボクとドライズ先輩はもう一度ファルマ先輩へと視線を向ける。

すると、教室内に残って居る他の生徒達も少しだけざわめいた。どうやら先輩の異常に不安を覚えているのは僕達だけじゃ無いらしい。先輩はすぐ隣のレン先輩の席へ赴き、何か語りかける。声は、届いてこない。

「レンちゃんに、何のお話なんだろ……うう、気になるけど、流石に聞き耳を立てるのは良くないよね」

アリシアさんが苦悶の表情を浮かべたのでボクは――

『レン。休んでいた間に作ったのに試せなかった魔法陣が沢山あるだろ？ 全部渡してくれ。一日で、とはいかないけどすぐにアイテム化するからさ』

と、ファルマ先輩の言葉を口ずさむ。

「ちよ、シジアンちゃん!?!」「この距離で聞こえるの!?!」

ドライブ先輩もアリシアさんも驚いた表情をするが。

「いえ、先輩ならこう言うだろうな、とアテレコしてるだけです。端的に言えば、ボクの妄想に過ぎませんが」

と伝えると二人とも、

「そ、そっか……」 「部長さん……」

と、哀れむような、少し距離を置くような、遠い目をしていて。とりあえず、続ける。

『……それはそう。でも、病み上がり。大丈夫?』

「レンさんの台詞まで判るのかい!？」

「あくまで、推察によるものです。細部は異なると思いますが、あの二人の会話なら身振りだけでも見れば大体判断できます」

「部長さんその、本当に、ハル君の事よく知ってるっていうか……知りすぎてるね……」

二人のやりとりは続く。

『ああ、見ての通りなんの問題も無い。それどころか寧ろ調子が良いくらいだぜ』

『……嘘。ファルマが勉強とか頭おかしい。ちよつと気持ち悪い』

『なんで勉強してるだけでそんなに罵倒されなきゃならんのだ!?! ひどすぎるぞ!!』

『……ごめん。失言。一応、渡す。でも、無茶は良くない』

『判ってるって。とりあえず今日の部活でできる分だけは作るから。待ってて』

腕をぐるぐる回したり、がーんと仰け反ったりする先輩の動きを元に会話内容をそう推察して、ドライブ先輩とアリシアさんに伝える。そして先輩は自分の席に戻ると、ぐいっとビタミンジュースを飲み干し、勉強の続きを始めた。

「恐らく、9割方あっているかと」

「あ、ありがとうシジアンちゃん……」

ドライブ先輩はそうお礼は言うモノの、ちよつと顔が引きつっていた。

「先輩は何らかの理由によって、精神的に追い込まれています。その

理由は、流石にボクでも今すぐには想像が付きません。聞いても教えてくれないのならば、このまま暫く様子を見ましようか」

ドライズ先輩とアリシアさんの間に挟まって、三人で教室のドアに張り付いて頭だけをひよっこり出して縦に並べる。

その状態で、昼休みは終わった。

そして、午後の授業を上の方で受ける。そもそもボクに初等部レベルの授業など必要無いのだが、クラスの委員長でありリーダーであるボクが授業をサボってしまうとクラスメイトとの信頼関係に問題が生じる。だから体面上、椅子には座ってなければいけない。

最も、普段は授業を受ける振りをして『異伝』を読み進めているだけで良いのだが。

今日ほど授業の時間が長く感じた日は無い。

漸く、授業が終わり、部活動の時間となった。

ボクは駆け足で部室に向かう。すると、部屋の前でぼったりアリシアさんと出会った。同じ部員なのだから当たり前だろうが、ボクが走って来てその上でアリシアさんと鉢合わせると言う事はつまり、彼女も走って来たという事だ。

二人で顔を見合わせ、考えることは同じだなと無言で頷く。

そして。妙な緊張感を持って、ボク達は部室の扉を開けた。

部屋の中では。

先輩が設計図を山積みにして既に作業を始めていた。

「なんでッ!? 私たち全力疾走してきたんだけどね、それでなんでハル君が先に部室にいるのかな!?!」

アリシアさんが仰天して問うと、先輩は作業を続けながら。

「ああ、先の戦いで『拒絶の闇』が一部採取できたから、ルクシエラさんに渡してみたんだよ。そしたらレンの転移魔法陣を『物理的距離という概念を遮断する』だったかなんだかの理屈で、空を飛ばんじや無くて直接移動させる転移魔法陣が試作できたんだってさ。だから今、俺が臨床試験中って事」

先輩は左腕をあげた。普段身につけていなかった白黒模様の腕輪が光る。

「これが通行手形みたいな感じで、これを持つてると魔法陣が使える。今は安全確認中だから安全性が確保されたらみんなにも作ってあげるよ」

と、作業の片手間に語ってくれた。

「まってまって!?! ルクシエラさんに “拒絶の闇” のサンプルを渡して魔法陣を改良したって何時の話!?! 私たち今朝から——あ、えつと、お昼休みハル君ずっと自習してたよね?」

アリシアさんが朝から見張っていた、という危うげな言葉を咄嗟に飲み込む。

「昨日の夜中だよ。ルクシエラさんは睡眠の必要性が無いから夜はずっと研究してるからさ。起きてすぐに会いに行つたんだ。そして一晩で試作品を作るんだからホント天才だよな、あの人」

そこまで言つて、先輩は背筋を伸ばした。

「ふーっ! とりあえず、ドライズの “氷燐剣なんかかんとか” の修理完了つと。あいつ一体何したんだか。これにも “拒絶の闇” が染みついてら。氷燐闇剣にでも改名するか? あ、でもこれでギヤラクシー要素ができたな——と、とにかく次のアイテムつと」

先輩はペラペラ独り言を零しながら設計図を一枚取り出し、更にアイテムの制作必要な道具を並べる。

その動作の中で、ふと気がついたようにこちらをみた。

「アリス、シジアン。いつまで入り口で突っ立ってるんだ?」

と、少し困った様子で。

「具合でも悪いのか?」

なんて言つて。

『それはごっちの台詞ですがッ!!』と叫びたくなつたが、ぐつと堪えた。横を見ればアリシアさんも同じような感情を示すようにぎゅつとしかめつ面になつていた。

外伝95・4話　ボクがこの世界で“願う”事は。
“フアルマ先輩の幸せな生活”ただ一つ

部活動の時間、普段なら先輩はアイテム一つの制作に着手して大体時間の半分を目安に作業を切り上げて、残りの時間はボク達と適当なお話をしたりして過ごす。

しかし今日の先輩は違った。額に汗を滲ませながら、マジックアイテムを2つ、3つと作り上げ。そして活動時間が残り半刻になったところ。

「あーッ疲れたっ！　流石レンの魔法陣、一筋縄じゃアイテム化できねえよ」

と少しだけ目減りした山積みの設計図の束を撫でるように触りながら言う。

そして。

「ごめんシジアン、今日の活動はここで切り上げて、帰っても良いか？　他にやりたい用事があるんだ」

と切り出してきた。ボクは即座に答える。

「はい。今日もお疲れ様です先輩。ですが病み上がりですので、あまり無茶な事はしないでください」

と、無難な受け答えをして。

「ああ、判ってるよ。俺にできる範囲で、できる限りの事をやるだけや」

部室を去って行く先輩の背中を見送った。

数秒の間。

ボクは、もう今日何度目かも判らないが椅子を蹴り飛ばして立ち上がった。

「追いますッー！」

と言って先輩の後に続くこうとするボクのローブをアリシアさんが摘まんで止める。

「ま、まって部長さん！」

「何故止めるのですか!？」

「確かにハル君の様子がおかしいのは気になるけど、保健の先生も許してる事なんだし、これ以上詮索するのは、なんていうか、私たちがトーカーになっちゃおうよ……。ハル君にはハル君の考えがあるみたいだし、暫くそつとしてあげるのも一つの道じゃないかな?」

アリシアさんは迷うように目を逸らしながら言う。

ボクは一旦深呼吸して、

「ボクの目を見て下さい、アリシアさん」

と、言った。アリシアさんはおどおどしながら、目を合わせてくれる。

「アリシアさんだって本心では心配しているんでしよう? 何が正しい行動なのか判断できないから、迷って、目を逸らした。違いますか?」

「それは、そうだけど……」

凶星だったようでアリシアさんの目が泳ぐ。

「なら、ボクは行かせていただきます。アリシアさんがどういう選択をするのかは自由です。が、少し前にお話した事、忘れてる訳ありませんよね?」

「勿論、覚えてる。部長さんにとってハル君がすごく大切な人だっという事は」

「以前に伝えた言葉に付け加えます。ボクにとって先輩は、好きだとか嫌いだとかそう言う次元に存在していません。『シジアン』という存在の前提なのです。先輩はボクの父であり、兄であり、仲間であり、先輩なのです。ボクにとっての幸せは——ボクがこの世界で『願う』事は。『ファルマ先輩の幸せな生活』ただ一つ」

例え、この世界に居るファルマ先輩が、ボクの記憶の中にいるファルマ先輩と違う存在であるとしても。あの人が『ファルマ』という人間である限り。ボクはあの人の幸せを『願い』続ける。

「今の先輩の状況は明らかに健全ではありません。口ではできる範囲でなんて言っていますがあの様子では本当にできる限り、力尽き倒れるまで何かをやり続けます。そんなモノ、幸せである筈がありません」

ん。ボク達の知らない何かがある、先輩を縛り付けています。ボクはそれを解明し、先輩を救う。この意志は、堅く、真つ直ぐなモノだと自負しています。迷いのある言葉で引き留められるだなんて思わないでください」

と、アリシアさんに伝えた。

「……ごめんね、部長さん。私が悪かった。ハル君が何をするのも、部長さんが何をするのも、二人の自由だよ」

「その通りです。先輩はいつも言っていました。ルクシエラ先輩の受け売りで、自分がしたい事をやってこそその人生」との事です。アリシアさんも、迷っているのなら。答えを考えてみて下さい。周囲や他人など余計な事を一切省いた、自分の素直な気持ち」を」

アリシアさんは自分の心と向き合うように目を閉じた。

そして、数秒も経たないうちに。

再び開かれたその瞳からは、迷いが消えていた。

「私だってハル君が心配なんだからねッ！ 私もついて行く、良いよね、部長さん！」

「はい。すぐに先輩の後を追いましょ！」

ボク達は二人揃って、部室を後にした。

先輩の匂いを辿って行き先を推察する。先輩は学園の校門に立っていた。ボクとアリシアさんは先輩に気付かれないように近くの茂みに身を隠す。すると、

「あつ」

「えつ」

「……考えることは皆同じ、ですか」

と、水色のポニーテールを揺らす中性的な顔立ちの先輩。ドライブ先輩と鉢合わせた。

「い、いやこれは別に、部活の時間なのにファルマが外に居るのを見かけて気になっただけであって、決まってるぞき見とか監視とかそういう意味じゃなくてだね、ただ朝から様子がおかしいからなんだろうなって——」

慌てて言い訳を連ねるドライブ先輩の肩にボクは手を乗せる。

「ドライブ先輩。言い訳など無用です。ボク達みんな、同じ気持ちですから」

暖かい表情を作ってそう伝えると、

「えっ、あ……そっか」

ドライブ先輩は戸惑いつつも、納得した様子を見せた。

ボクの横ではアリシアさんが気まずそうに余所を向いている。

「同じ穴の貉ってヤツだよね……」

と、一言だけこぼした。

ボク達はお昼休みの時の様に三人頭を並べて、先輩の動向を探る。すると、校門から学園内にある人物が入ってくる。

「ん。ファルマ、起きたのか。そんなところで何をしている？ まだ休んでおくべきだとおもうがな」

それは、この学園で最も強い魔法使い。『破滅の光』の継承者にして『英雄』と呼ばれる存在。イクリプス様だ。

「いえ、ジン先生から許可は貰っています。それよりイクリプスさん、お待ちしていました。一つだけ、お願い事があるのですが、聞いて貰えませんか？」

先輩は緊張した様子で、やや声を震えさせながら言う。

先輩に取ってイクリプス様は『特別な存在』そのものだ。ルクシエラ先輩とは長い付き合いがあるからこそ砕けたやりとりができるモノの、付き合いの薄いイクリプス様を相手にすると気が引けてしまうのだろう。

「お前が、姉貴ではなく俺にか？ 珍しいな。耳を貸そう」

イクリプスさんがそう答えたのを確認して。先輩は即座に――

「俺に、槍術――いえ武術を教えて下さいッ!!」

と素早く慣れた身のこなしで土下座した。

「……ハル君ってば私以外にもするんだね、土下座」

「あいつは何かあるととりあえず土下座するよ」

と、語る両脇の二人はおいておいて。イクリプス様は先輩の言葉に。

ため息を零して、先輩から目を離す。視線が、ボク達のかくれる茂

みへ移った。

「っ!？」

アリシアさんがドキツとしたように胸に手を当てる。

「ありやーバレてるな、これ。後で怒られるかも」

ドライズ先輩の言うとおりでらう。イクリップス様はボク達が先輩を見張っている事に気付いて。その上で。何かを思案し、答える。

「悪いが、他を当たれ」

それがイクリップス様の解答だった。

「やはり、迷惑ですよね——ですが、俺にも引けない理由があるんです。そこは無理を通してでも、どうか、お願いします!」

先輩は土下座したまま、再度希うが。

「そういう話では無い。百聞は一見にしかず、だな。顔を上げろ。そして見ていろ」

イクリップス様はそう言うと、近場の樹木へと近寄る。先輩は言われたとおり、土下座したまま顔を上げてイクリップス様の行動を見ていた。

イクリップス様は手頃な太さ長さの枝を選び、一言「悪いな」と言っ
て簡単に手折る。

そして折れた枝の棒を握って、その木から距離を取り。

構えを作り、一振り、木の枝で一閃した。

すると。その軌跡は白い尾を引き、木の枝を振るっただけなのに
“元々枝が付いていた木を、そのまま。幹からまるっと一刀両断して
しまった。

「見ての通りだ」

その有り余る破壊の力に、先輩も、そしてボク達三人も口を開けて
呆然とする。

「日常生活の行動は問題無い。だがな、俺は少しでも“戦闘態勢”を取
取ってしまうえば力の加減が効かなくなる。これはもう、戦い続けてた
結果染みついてしまった癖だ。今更どうにもできん。これでは、訓練
用の木刀ですらお前の腕を切り飛ばしかねん。お前も、一月のウチに
二度も腕を飛ばされたくは無いだらう?」

と、先輩に歩み寄りながら、イクリップス様は語った。
「そ、そうっすね……」

先輩は冷や汗をたらし、真に“特別な存在”の圧力を知らしめられた様に困惑していた。

外伝95・6話 “永久の森” へ向かいましたよ!!

イクリップス様は土下座したままのファルマ先輩に手を差しのばす。

「立て、ファルマ」

「は、はい」

先輩はイクリップス様の手を取って立ち上がった。

「勘違いはするな。俺は、お前が強くなるうとしてしている事には賛成だ」
「え？」

「お前が寝込んでいる間、姉貴がどれだけ不機嫌だった事か、寝ていたお前には判るまい。無茶無謀も結構だが、せめて寝込まない程度には加減してくれ」

「す、すみません」

「故に“他を当たれ”だ。丁度適任が居るだろう。お前の身近に一人、な」

「え、適任ですか？ 誰だろ……」

イクリップス様の言葉に首を傾げる先輩。イクリップス様はその様子を見てまたため息を吐いた。

「全く、無自覚なヤツだな。ここは魔導の学園だ。魔法使いは基本的に中、遠距離武器を持つのが望ましい。魔法を剣に宿して戦う、あるいは自身を魔法で強化し武術で戦うタイプの魔法使いは珍しい」

「えーそうですか？ 俺の学年、俺含めて剣とか槍とか斧とか振り回す奴らばかりですけど」

「それはお前の学年がおかしいだけだ。4年生は“世界の中心”ドライズが属する学年。他の学年と比べものにならない程特殊な魔道士が集められているからな」

イクリップス様はそう言いつつ、更に付け足す。

「自分で言っていて、まだ気付かないか？ 最近お前と交流があつて、この学園に置いて俺の次と言って良いほど武術に長けた存在——クラスメイトに」

そこまで言われて、漸く先輩は気がついたようだ。

「ひよっとしてナギさんですか？」

「そうだ。あいつは三日月列島由来の人間で、あの大陸は魔導の発達が遅れていた代わりに機械技術や武術に優れていた。ナギが具体的に三日月のどの地方出身かまでは追えなかったが一国の将軍を務め、更に役職としては『近衛大将』、城及び城主を守る最終防衛ラインとして城に留まる存在だったと聞く。故に緊急時以外は主に新兵の教官としても働いていたそうだ。俺などよりよほど教え慣れているだろうな」

とイクリプスはすらすらとナギさんの情報を喋るが、先輩は目を点にして驚いた。

「ええっ!? イクリプスさんなんでそんな事まで知ってるんですか!? というか俺とナギさんの交流が最近始まったってのも知ってるし――」

という先輩の疑問に、イクリプス様はこう答えた。

「俺はこの学園とこの世界を影から支える者。特に汚れ仕事が俺の役回りだ。学園の全ての生徒がもつあらゆる個人情報、交流関係を必要限り把握しているだけだ」

「そ、そうなんです…」

「ナギの居場所は俺よりお前の方が詳しいだろう? 行ってみると良い。恩人の頼みを断る人柄でもあるまい」

イクリプス様にそう促され、先輩はすぐに、

「はいっありがとうございます!!」

と駆けだして行った。そして、その姿が見えなくなったあと、イクリプス様は独り言にしては大きな声で言う。

「行き先は『永久の森』だな。修練、鍛錬には最適の場所だ。今週は冬だから防寒対策が必要だが、ファルマは火属性を持っているから関係無い。が、火属性を持たない生徒が防寒着を忘れて迷い込まなければいいのだがな」

と、明らかにボク達の方に視線を向けて言い残し、その場を去って行った。

「皆さん、防寒具の装備はありますか!?!」

ボクが尋ねると、二人とも魔石を取り出して、

「あるよ」「確認良し、だね！」

とにこやかに答え、

「ボクも確認しました。『永久の森』へ向かいましょう!!」

三人で、『永久の森』へと向かった。

◇ ◇ ◇

外界と異なり、独自の季節感を持つ『永久の森』。今週は雪が積もった真冬の様相をしめしている。ボク達は少し離れた場所から、枯れた木の陰などに身を隠しつつ後を追った。

そして、森の一角、開けた場所に到着する。

その中央で、訓練用の木刀を振るい、技を磨く人物の姿。雪景色であろうとも、相変わらず胸と局部以外装甲の無い、素早さに特化した装備で鍛錬しているナギさんだ。基本的に八天導師由来の人間が集まるこの学園で、思い当たる八天導師の関係者が浮かばない人々、マナトさんを中心にしたグループの一人だ。

三日月列島という、別の大陸からやってきた事だけはボクも知っていた。その剣術はイクリップス様も一目をおく程のモノであり、戦闘能力も八天導師に負けずとも劣らない。

「ナギさんー！」

先輩の声が、開けた雪原によく通る。

「ファルマ君?」

ナギさんは素振りを辞めて先輩の方を向き。

先輩は走りながら飛び上がり、その勢いを使って土下座した。

「頼みがあるツ!! 聞いてくれ!!」

その姿に、ナギさんはぽかんとした表情を作り。

「また私以外の人に土下座してる……この複雑な感情は一体なにかな? 土下座なんてそんな執着するような行為じゃない筈なのにね?」

とアリシアさんは未知の感情に戸惑っていた。

「ファルマ君のお願いならばどんな要望でも伺いますけれど、その前に一つ逆にこちらからお願いしても良いですか?」

「え? 何?」

「私の事はどうか『ナギ』とお呼び下さい。ファルマ君はレンさんや

リリースさんなど気を許したお方は呼び捨てになさりますよね？

ファルマ君は私へ新しい風を運び、道の続きを見せてくれた恩人で
す。気軽に接して欲しいと思ひまして」

「えっ、でも、いや、それがナギさんの——じゃなかった、ナギの願
いなら判った」

先輩は戸惑いつつ頷く。

「それでは、私は恩人に恩を返す為に貴方をお願いを聞こうと思いま
す。どうかお立ち下さい。土下座などされては、私も、気後れしてし
まいます」

「ご、ごめんなさい……」

ナギさんに優しく諭された先輩は気まずそうに立ち上がった。

「それで、ご用件は？」

「実は——」

先輩は、武術の鍛錬がしたいこと、イクリプスさんにナギさんを薦
められた事を伝える。

話を聞いて、ナギさんは顎に手を当てて、何かを思案した。更に、枯
れた木の陰に隠れているボク達の方へチラリと視線を向ける。

「……これ、僕達またバレてない？」

「この学園怖い人多いね……」

ドライズ先輩とアリシアさんは顔を合わせて苦笑いを浮かべてい
た。

そして数秒の間を置いた後。

「了解しました。それが貴方の頼みとあらば、喜んで指南役になつて
見せましょう」

と、ナギさんは笑顔で答えた。ショートカットの栗色の髪が僅かに
揺れる。ボクにその笑顔に、含みを感じた。

「本当か！　ありがとう!!」

先輩の方は素直に喜んでいる。

「その様子だと今すぐにでも教えを請いたいように思えます。早速、
始めますか？」

と提案するナギさん。そして先輩も。

「マジでありがてえ話だ！　まずは何すれば良い!？」

と興奮気味に答え。

ナギさんは先輩に木刀の切っ先を差し向けて、言った。

「まずはファルマ君の実力が知りたいです。模擬戦としましょう。私はこの木刀で対応します。勿論『サクリファイスの刻印』も『神威』も使いません。ファルマ君はいつもの得物で攻撃して来て下さい」

その言葉に、先輩はぎよっとした。

「は!?!　ナギは木刀なのに俺は真剣——ってというか槍だけど、それで戦うって!?!」

「はい」

「危ないだろ!?!　練習用の槍を——」

ナギさんは先輩の言葉を遮り、言う。

「問題ありません。素人の槍など一太刀も喰らうつもりはありませんので」

明らかに、挑発していた。

「ッ」

先輩も、流石に癪に障ったらしく少し表情を歪める。

「こっちからお願ひしておいて悪いけど——」

そして先輩は『不死槍ハルベルト』をマテリアライズし、

「流石に舐めすぎだろッ!!」

ナギさんめがけて振るう。

しかし、

ナギさんはこれを軽く数歩動くだけで回避。カウンターで即座に木刀を振るった。

「チッ!!」

先輩は咄嗟に槍を傾け、ナギさんの木刀を受け止める。しかし先輩がナギさんの木刀の衝撃に震えている頃には二の太刀が繰り出され

「くそッー」

先輩は咄嗟にスライディングの動きを取ってその攻撃を回避する。そして起き抜けに槍をナギさんへ突き立てようとした、その時に

は。

「ッ！」

ナギさんの木刀の切っ先が先輩の目前数センチで止まっていた。いつでも、何処でも斬れる間合いだ。

「まずはこれで一本、です」

先輩は悔しそうに歯がみする。それもそうだろう。いくらナギさんが武術に長けているとは言え先輩として我流ながら数々の修羅場をくぐり抜けてきた。この先輩にその記憶は無いとしても“技術”は身体が覚えていっているモノだ。

「嘘、だろ……？ そりゃあ『刻印』や『神威』を使うナギに勝てるだなんて思ってたけど……何もエンハンスされてない状態で、負けるのか？ 俺、弱すぎだろ」

先輩は目は悲しそうにナギさんから逸らされた。

しかし、

「これで終わりですか？ 私は何度でもお相手しますよ。可能な限り打ち込んで来て下さい。それで貴方の今の能力、体力、全てを測ってさしあげます」

と言ってまた少し距離を取って、木刀を構える。

「——ッならもう一回だっ!!」

先輩はすぐに立ち上がって、改めてナギさんへ槍を振るった。

外伝95・8話 “先輩を見守る会” です。因みに
ですが会長の席は譲りません

夕暮れから気がつけば日は落ちきって。真っ暗な森を照明が照らす。ナギさんは普段から夜まで鍛錬していた様で、予め照明が用意されていた。

「一体、何回目だろうね」

ナギさんに必死に槍を向ける先輩を見て、アリシアさんが悲しげに零す。

「57戦目です」

夕方から、日が落ちるまでの二時間弱。先輩はひたすらナギさんと模擬戦を繰り返し。

繰り返しては――

「クソッ!! はあッ、はあッ、また負けたッ!!」

回数を重ねる毎に、悔しそうに、足下の雪を踏みしめる。

「次だッ……! あ……れ……?」

先輩が58戦目を開始しようとしたその瞬間。先輩の身体がよろめく。

思わず飛び出していきそうになったドライブ先輩とアリシアさんのローブをボクは両手で引っ張って引き留めた。そして二人に耳打ちする。

「恐らくナギさんは何かしら考えがあって行動しています。この場は静観し、ナギさんに任せましょう」

そう伝えると二人は渋々、といった表情で木の陰に戻る。

「休みも無く連続で57戦、ですね。貴方の限界は」

雪原に沈む先輩を見下ろして、ナギさんは言う。

「いやッまだだ! まだ、やれる……ッ!」

そう言っ先輩は重そうな身体を無理矢理引っ張り上げるように立ち上がるが。手足が震えていた。本当に、もう立っているのもやっ
とだろう。

「本当の意味での限界を迎えては察に戻れませんよ。貴方の意志、覚悟、そして能力全て理解しました」

ナギさんはそう言つて、木刀を消す。どうやらあの木刀はマテリアライズ製品だった様だ。

「結局ツ一本も取れなかったツ……！ 知つてたよツ！ 俺が、弱いつて事くらいずっと前から、判つてたツ！ それでも、何もできないなんてツ……！」

先輩はボロボロと大粒の涙を零して言う。そんな先輩に、ナギさんは近寄る訳でも無く一定の距離と保つたまま、伝えた。

「ファルマ君が鍛錬をしたいと。その師として私を選んでくれたと。その事実は受け止めます。ですが今までの模擬戦で理解した事がありません」

「なんだ、それ？」

涙を拭つて先輩が問いかけるが、ナギさんの返答は思いもよらないモノだった。

「それは、刃を以て語りたいと思います」

ナギさんは先輩から離れてゆき、少し離れた場所に置いていた刀袋を持ち上げ、中身を取り出す。

「へ、どういう事？」

先輩はナギさんの言葉の意味が理解できていない様だった。

するとナギさんは取り出した刀を鞘から抜いて、先程までの木刀と同じように。

先輩に差し向けて、続けた。

「貴方のお願いはなんでも聞くと云つた手前申し訳無いのですが。一つだけ条件を付けます。三日後、この地にて。今度はお互いに『真剣勝負』を行いましよう。この決闘を承諾してくださる事が、今後続けて貴方に武術を教える条件とします」

「な、なんだって!？」

ナギさんは突然、文字通り真剣を向けて先輩に宣戦布告した。

「勿論、競技決闘と同じように二重の防護壁は用います。それに、勝敗は問いません。ただ、私は不器用なので。伝えたいことは、戦いを通

して伝えたいのです」

「でも木刀ですら歯が立たなかつたのに『真剣勝負』なんてしても、もっと酷い結果になるだけじゃ……」

と、先輩は乗り気じゃなさそうだが。ナギさんは続けて言う。

「果たしてそうでしょうか？　今までの模擬戦はあくまで模擬戦の域を超えませんでした。ですが、三日後の決闘、私は久しぶりに『サクリファイスの刻印』を使用します」

その言葉に先輩だけで無く事を見守っていた僕達も目を剥いて驚いた。

ナギさんは先輩と共同開発した『神威』を使う事により『サクリファイスの刻印』を封印し、あれ以来使つてこなかつたのだ。その禁を破るのだと言う。

「待て待て待て!?! 『刻印』は禁じ手だろ!?! そんなの使われたら為す術なんてないよ!」

先輩の講義に、ナギさんはこう答えた。

「その通り、私は『禁じ手』を使つてでも貴方と戦います。ですから貴方も存分に『禁じ手』をお使いください。先程の模擬戦で使わなかつた、数々の魔法道具を。それが、『真剣勝負』と言うモノです」
先輩は呆然とする。『禁じ手』を使うからそちらも『禁じ手』を使つて良い。

確かにそれは『真剣勝負』——防護壁が無ければ、生きるか死ぬか、というレベルの決闘だ。

「私は、本気で貴方を殺すつもりで戦います。いくら防護壁があるとはいえ、過信してはいけません。有名な話ではイクリップス殿などは二枚目の安全用防護壁を貫いてアイル殿に怪我を負わせて以降競技決闘を行わないようになった、など耳にしました」

夕方毎に見た光景を鮮明に思い出す。木の枝一本で木を幹から両断する程の破壊の力があれば、あり得る話だ。

「ですからファルマ君も、私を殺すつもりで——あらゆる手を尽くして戦う事です。恩人を救うため、手伝う為に持ちかけた決闘でその恩人を殺してしまつては、私も悔やみきれませんから」

ナギさんは言い終えると刀を鞘と刀袋に戻し、背負って。

「ま、待つてくれよ、俺はまだ納得した訳じゃ——」

この地を去ろうとするナギさんの背中に先輩は呼びかけるが、

「今日は週末です。明日、明後日の二日間は休日。明日は全力で休息し、そして明後日は三日後の決闘に向けて可能な限り準備をしておく事です。——貴方の本当の全力を、私に示してください」

と、冷たく言い残して。歩を進める。

最後に、確認、或いは——ボク達へ向けてと言わんばかりに。

「決闘は三日後、今日と同時刻、この地にて、ですよ」

と声を張り上げ、ナギさんは去って行った。

ぼつんと一人取り残された先輩は、数十秒間固まったままで。

そのまま、後ろにばたんと倒れた。地面は模擬戦で踏み固められたとは言え柔らかい雪と土なので衝撃は無い。

「意味わかんね……でも、やらなきゃ教えてくれないってんなら、やるしかない」

先輩は夜空を見上げて呼吸を整え、休息しつつ、独白する。

「星、綺麗だな。石ころは星になんてなれないんだ。それでも——石ころの意地を、見せてやる」

ぱつと、先程までの疲れなど無かったかのように、飛び上がるように起き上がって。

「まずは明日ッ！ もうへトへトだ、一日中寝てやるッ！ んで明後日！ 用意するさ、対『刻印』用のマジックアイテムを!!」

と意気込み「永久の森」を駆け抜けていった。

最後に、先輩が去ったのを確認して本当に取り残されたボク達三人は木陰から出る。

「なんか、凄い事になっちゃってるね……」

「ナギさんの『真剣勝負』、か。僕ですら勝てる自信ないよ」

「ですが、その中に。ナギさんが見つけた答えがあるそうです」

三人で顔を見合わせて、確認する。

「三日後、今日と同時刻。わざわざボク達にも聞こえるように言ったのです。見に来い、との事でしょう」

「だよね。こつちの事気付いてたもんね」

「じゃあ、僕達もまた三日後にこの場所で」

「明日、明後日も先輩は決闘の準備のために本気で休息と対策をする筈です。今日のような無茶な行動もとらない筈。今回はここで解散しましょう」

「うん。じゃあ、またね。ドライブくん、部長さん」

と、解散した。

――が。

「……って、みんな同じ寮に帰るんだから結局三人揃って同じ道を歩く事になるよ、うん」

とドライブ先輩ははにかみながら言った。

「解散って言ったのに、何だか面白いね」

「ボク達は同じ穴の貉――いえ、もっと良い表現を。同志です。解散して尚、一緒でもいいでしょう」

「同志って、なんの？」

「先輩を見守る会」です。因みにですが会長の席は譲りません」

「わーん、気がついたら成り行きで変な会に入会させられちゃったあ！ けど、それもまたいいかもね！」

と他愛ない会話をしながら、みんなで寮に帰った。



三日後、授業が終わり夕焼けが空を暖かく染める日暮れ。週を跨いだことで、「永久の森」は春の様相を示していた。

「永久の森」の象徴たる万年桜は季節に関係無く咲き誇るが、春の週の「永久の森」は普通の桜の木が品種毎に少しずつズレた周期で咲いては散るを順番に繰り返す。その美しさが人気で、春の週に「永久の森」へ遊びにくる生徒は非常に多い。

そんな、美しく穏やかな世界の片隅で。

文字通り「真剣」を構えて立ち会う二人。

そして相変わらず木陰から二人を守るボク達三人。

「どうしてナギさんは決闘なんて言い出したんだろうね？」

アリシアさんは小声で疑問を浮かべ首を傾げる。

「ナギさんは確かに実戦であれ競技であれ戦闘は大好きな人だけだ。あれは楽しむ人の目じゃない。本気の『相手を殺す』人間の目だ」

ドライブ先輩はナギさんの眼差しをそう捉えたようだ。

「ボクは、今日までの二日間で今までの先輩の行動と、ナギさんの真意その全てを繋ぐ仮説を立てました」

その言葉に、二人はバツと顔をこちらにむける。

「本当かい!」「教えて、部長さんツ!!」

二人の問いかけに、ボクは少しだけ答える事にした。

「先輩が目を覚ましてすぐに無茶な勉強、部活、武術などを行っていた理由。それは、『見られている』という事を意識してしまったからだと思われます」

その言葉に、二人はドキツとした顔で少し仰け反った。

「えっ、私たちのせい……?」

「いいえ違います。我々が監視を始めた頃には既に先輩は無茶を始めていたでしょう? 先輩を見ている人間がもう一人居る事を、二週間前の記憶を遡って発見しました」

「二週間前って、事件があった日——あっ!!」

アリシアさんはそこで、思い出したようだ。逆に、当事者でないドライブ先輩はハテナマークを浮かべている。

「何々、どういうこと?」

「僕達は先輩が眠っている二週間、事件の事後処理に追われて忙しい日々を過ごしていました。それに目が覚めない先輩を心配し、気が気でなかった。そのせいで記憶が薄れ、曖昧になっていました。——それは、眠っていた先輩にとっては『眠る直前』の話。どれだけ長い時間眠ろうとも、体感時間というものはそれほど変わりません。つまり先輩にとっては『昨日の今日の話』として、二週間前の事件が記憶されているのです」

その体感時間の違いが、ボク達と先輩の間で意識の違いを生み出した。

「あの事件でファルマは僕達が戦って居る裏で『拒絶の闇』と戦ってたって聞いたけど、それが関係するのかい?」

「その通りです。『拒絶の闇』 トーラは。最後にこう言い残して去りました。曰く、『君の事ずつとみてますからね』と。そしてそれが妄言の類いでは無く実現できる程に、常識を超越した存在である事は戦った我々も身に染みて理解しています」

「ハル君はトーラに自分の人生が見られてる事を気にしてたんだ!!」
「はい。先輩は自分を過小評価されるお方です。自分の歩んできた人生に自信なんて持って無いでしょう。そんな自分の人生が、常に誰かに見張られているなんて考えたら——」

ドライブ先輩はほんの一瞬だけ思索して、全てに納得がいったように目を伏せた。

「……少しでも、恥ずかしく無いように。少しでも後悔しないように。どんな無茶をしても、『頑張ってる』姿を見せようとするだろうね、あいつなら」

それが、先輩を心理的に追い詰め、焦らせる原因だと仮定した。

「じゃあ、ナギちゃんの『真剣勝負』の理由は？」

「それは、事の成り行きを最後まで見守れば判るか。間接的とはいえわざわざボク達にも来るように言ったのですから、ボク達が見る必要性もあると言う事でしょうか。ボク自身素直にこの戦いの結末を見届けたいです」

「そっか……そうだね」「頑張れ、ファルマ」

アリシアさんとドライブ先輩は先輩に応援の眼差しを送る。

そしてボクも、先輩を見据えて。

決戦の火蓋が、切られた。

96話 名付けて、『神殺（かみごろし）』 ツ!!

俺は星にはなれない石ころだ。そんな俺なんかでも “八天導師” に入った以上はその職務を全うしなければいけない。その義務感、責任感がどこから来るモノなのかよく思い出せないけれど。俺は “八天導師” という組織が大好きだ。

ついこの間できたばかりなのに、何故か。

だから。 “八天導師” である事に恥じない為に。強くならなきゃいけない。トーラは俺を常に見ていると言った。このちっぽけな俺の、くだらない人生を見続けると。

もう、無駄な時間なんて過ごせない。俺は俺に出来る全ての事をやる。見られてるっていうのなら、尚更。 “八天導師” の名に。そして俺を支えてくれる人達の顔に泥を塗る事なんてできない。俺は “立派な人間の人生” をトーラに見せつけてやらなければいけないんだ。

『二連朱槍ッ』!!

挨拶代わりに繰り出す、俺の得意技。ハルベルトを投げて、二つの火炎弾に変換し攻撃する魔法だ。

『刻印よ。我が命、魂を薪とし、炎を灯して燃え上がれ。この身朽ち果てるまで、その炎に風を送り続けましょう』

胸と局部にしか装甲の無い半裸の装備であるナギ。その左胸側が胸のプレートを突き破る程に目映い鮮血の様な紅い輝きを放つ!

『サクリファイスの刻印』

言葉と共に、ナギの四肢に血管の紅い筋が浮かぶ。次の瞬間には、目に追えない速さで

火炎弾を回避する。気がつけば一気に間合いを詰められていた。

——想定通りッ!!

『刻印』を使用したナギの強さなんてクラスメイトの誰もが認める所だ。初撃が躲される事も、一瞬で間合いが詰められることも、折り込み済み。

その上で——賭けに出る。

序盤も序盤、始まったばかりで賭けなきやいけないなんて、俺の弱

さが浮き彫りになってしまおうが。ここで賭けにすら負けるようなら。運にすら見放される程度であるならば。

俺の人生なんて結局その程度のモノだ!!

辛うじて見えた刀の軌跡は、右から俺の首へ真っ直ぐ向かってきていた。

——なら、左だッ!

理屈も、根拠も無い。ただの勘。これが、賭けだ。俺は白い石で出来た盾を左側面に構えて防御を固める。

ナギが目を剥くのが見えた。何故ならその瞬間に。ナギの刃は“左から”俺の首を狙って振られていたからだ。

フェイント攻撃である。右からの斬撃に見せかけ、途中で柄を手放す。そして下方に構えた左手で刀の柄を“逆手に”握り、左から逆手で斬りかかる。

人間元来の筋力で逆手を以て刃を振るう事は非効率的とされるが『刻印』によって強化されたナギの力なら、多少威力が落ちても十二分に致死的な一撃になり得る。

それを、凌いだ。

盾は鈍い音を立てて一瞬で砕け散る。そう設計した。砕け散る事で斬撃の威力を分散させる。『刻印』付きのナギさんなら“盾ごと首を”切り兼ねないと考えたからだ。

同時に。俺へ向けられた渾身の一撃、その力を利用する。

盾が砕けると共に俺は左から右へ大きく吹き飛ばされた。踏ん張ることも、立ち向かうことも無く、ナギの力に身を任せたからだ。宙を舞いながら、唱える。

『破魔のルクスエクラ』ッ!!

盾に使った石。それは贅沢にも巨大な『フェア・クリスタル』である。それがバラバラになってナギの周囲に舞ったのだ。範囲や強度の指定なんて要らない。ただ適当に希釈した破滅の光を放出するだけで。バラバラになった石の一粒一粒が白い光の球を広げていく。流星のナギも光の速度からは逃れられない!

『破魔のルクスエクラ』には攻撃力が無く、代わりにエンハンスやエン

チャントと言った。魔力を付与する事で効果を發揮する魔法”を分解し、無効化する。ナギの左胸で紅く輝いていた『刻印』がその効力を失い、曇る！

「ッ『神威』!!」

『刻印』が使い物にならなくなったと判断したナギは即座に二の矢、『神威』を発動する。これは胸を中心に四肢へと筋が伸びていく、鎧と呼ぶにはあまりにも特殊な形状をした具足に『刻印』を応用した魔法陣が埋め込まれたマジックアイテム。

鎧としての物理的質量の奥に『刻印』を改良した魔法陣が刻まれ、内側から鎧に強力な筋力補助能力をもつ『神威』は『破魔のルクスエクラ』単体だと鎧そのものに阻まれて内部の魔法陣まで光が届かない。故に、『破魔のルクスエクラ』だけでは失活する事が出来ない。

——だとしても！

『刻印』が切れたら『神威』を発動する事は判っていた。『刻印』だけでなく『神威』の対策まで、俺は考えて居た。

理屈は単純。薄い光が届かないなら、濃くしてやれば良いだけの事。光は、反射と屈折によって、同じ量であったとしても一点に集中させる事が出来る!!

「『ミラーズ・ミラージュ・リフレクション』ッ!!」

これは、アリスの魔法の改造版。本来は鏡を生み出し鏡に映った鏡像を幻影として出現させ相手を惑わせ、鏡そのもので攻撃も防御も出来る。それを逆に「鏡」としての性能に振り切った魔法。

ナギの周囲ではバラバラに砕けた『フェア・クリスタル』が個々に球状に光を展開して、その光の多重結界にナギは取り込まれている状態だ。その結界の八方に「鏡」を出現させる。するとどうなるか。個々に輝く希釈された「破滅の光」が、8枚の鏡によって反射され、中央のナギへと向かう。単体の『破魔のルクスエクラ』では届かない物理的な壁も、8倍以上に一点集中された光の棘なら突き刺さる!!

「名付けて、『神殺』ッ!! 対『神威』だけを考えて作った、それだけの魔法だッ！」

俺は今なお空中で吹き飛ばされつつも指先では魔法陣を描き始めつつ伝えた。

ナギは膨大な光の球と反射する光の棘に刺され、『神威』がボロボロと崩れ落ちる。

それでも、

「ハアッ!!」

刀の一振りですら8枚のウチ目の前を塞ぐ一枚の鏡を叩き割った。ナギが光の結界から飛び出すのが、もう遅い!

一度失活した『刻印』も『神威』も再利用するにはしばらくの時間がかかる。少なくとも今の戦闘が数時間にも及ばない限りは二度目は無い。

たとえば『刻印』や『神威』が無くとも、身体能力で俺はナギに負けている。三日前に嫌というほど思い知らされた。だから、この“距離感”が大切だった。ナギが吹き飛ばしてくれたお陰でおれは今彼女の間合いに居ない。

そんな空中で魔法陣を描き、詠唱を唱える。

『求めるは第四の叡智、督するは炎。原初の炎を宿す者。擬えうるは人智の極致。蜷局を巻きて悉くを滅却せよ』

それは、俺が使える魔法のなかでもっとも威力が高く、射程も長いモノ。

槍、ローブ、魔石、そしてこの身体全てを触媒にして、めいっばい背伸びして習得した、本来なら「プロ級」の魔法使い達が扱う『第四階級』の基礎魔法!

『ルーブ・プロミネンス第四火炎魔法』ツ!!」

炎で構成された龍が、蜷局を撒いて俺の周囲に現れ、ナギめがけて一直線に空を駆け抜ける!

これは常識だ。火は風に強く、風は土に強く、土は水に強く、水は火に強い。四大元素の四すくみ。

ナギが持つ属性は風と土。土属性は堅さと癒やしを司る属性。ナギがクラスに置いて土属性専攻なのはその癒やしの性質を応用した『回復魔法』を習得する為だ。故にナギの土属性の魔力は攻撃として

は考慮しなくて良い。そもそも土魔法は基礎魔法も岩石による物理的攻撃を目的としているせいで射程が短く、これだけ離れていれば問題無い。

そして、度々口にしたり、使っているように。ナギが本来得意とする攻撃属性は「風」属性だ。俺の火属性魔法との相性は最悪である。

賭けに勝った。メタも貼って、『刻印』も『神威』も封じた。

そして、相性に勝る俺の最大限の火力を放った。

——勝てるツ!! 他人の力、魔法ばかりだけど、それでも、ナギに! 特別な才能を持つ星に、並ぶ事が出来るツ!!

俺は全ての炎の魔力を『第四火炎魔法』ループ・プロミネンスに乗せる。例えば属性相性が悪くても、その4, 5倍を超える物量で向かい打てばその魔法を受け止める事は出来る。でもナギの専門は『強化魔法』エンハンスで肉体を強化してから持ち前の武術を活かした接近戦。

攻撃として扱う風の魔法は『鎌鼬』かまいたちなどがあるが魔力、規模は俺の『二連朱槍』と同レベル、つまり二階級の基礎魔法と三階級の基礎魔法の間くらいだ。

ナギに相性不利の第四階級基礎魔法を打ち破る術など無い。炎の龍の規模は大きく、躲すことも出来ない。

けれど——

向かってくる炎の暴力に対してナギは。冷静に見つめて刀を構えていた。

「っ!」

——ああ、そうだ。俺は、やっぱり強く無い。どうして、こんなに簡単な事に気がつかなかったのだろうか。俺は散々、ナギが使う『刻印』や『神威』にメタを貼る——対策を講じて、戦ってきた。

相手の手の内を知っていたからこそだ。

なのにどうして——

「ナギが火属性魔法への対策を持っていない」

と決めつけてしまったのだろうか。俺がクラスで火属性専攻である事。ナギ自身がその属性の相性が悪いこと。それを知った上で向こうから決闘なんて仕掛けて来たのだ。

——ナギだつて、火属性にメタを貼つていて当たり前じゃ無いか
……。

97話 その何処が、張りぼての強さなのですか

ナギは向かってくる炎の龍に向けて、刃を振るう。

『風前の灯火』ッ!!』

特に何か魔力を感じた訳でも無い。ただ、炎の龍を構成する魔力が薄い点、弱点を見出し刀は振るわれた。

炎の光を反射したナギの刀が紅く揺らめいた輝きを見せた。そして、俺の中の知識が脳裏に浮かぶ。

——東洋のオリハルコン、緋緋色金（ひひいろかね）。不朽不変にて、あらゆる魔法や呪術を受け付けない伝説的と呼ばれる金属。

ナギの刀によって炎の龍は真つ二つに両断される。そして軌道が逸れて明後日の方向へと向かっていく。

ここは森だから、安全対策に予め決闘のフィールド範囲を設定しておき見えない防護壁を展開していたから山火事になる事はない。だが、俺の渾身の一撃、切り札が凌がれてしまった事は事実だった。

吹き飛ばされていた俺の背中に、衝撃が走る。

「ぐはッ!!」

俺自身も、吹き飛ばされた事でフィールドの防護壁に衝突したのだ。

そのまま落下して。

でも。それでもッ!!

諦めない。俺は立ち上がった。この一連の動作で、既にナギは間合いを詰めている。

『神威』返しだッ!!』

ナギの『神威』を失活させて置いて、俺は『神威』を纏って応戦する。そこまでしてやっと、なんのバフ——強化魔法も付与されていないナギの武術に並ぶ。

「だアッ!」

武術を教えるて欲しいなんてお願いしてる位だ。何の知識も無い、がむしやらに振るわれる槍。

「くっ、ハアッ!!」

ナギも、身体を蝕むデメリットを受けた上で無効化されてしまった『刻印』、二の矢である『神威』を封じられ、ここまでの対応に十分消耗している。

切り札は効かなかったが、それでもツ！

「まだ、勝ち目はあるツ!! 諦めない、最後まで、限界まで！ 俺は俺に出来る全てをやるんだアツ!!」

素人のがむしやらかな槍さばきも、『神威』で身体能力を補助してやればナギも手こずるようだ。幾度となく剣と槍が交差し、衝突し、けたましい音が「永久の森」響く。

やがて――

「ハアツ、ハアツ！ これで、終いです!!」

ナギがそう言うって俺の槍を弾いた。当然すぐに対応するつもりだったが共同開発したとはいえ『神威』は本来ナギの魔法だ。

その使い勝手、その効果時間。全てを把握している。

ナギは――『神威』が制限時間を迎え、砕け散る瞬間を狙ってその一撃を放った。

そう。槍を弾かれると同時に俺を支えていた『神威』もひび割れ、砕けて無くなった。

もうナギの身体能力について行く事は出来ない。槍は無残に宙を舞い、無防備になった俺の目の前でナギの瞳が獲物を狩る狼の如く鋭く輝き。

『神刺』^{かんざし}ツ!!」

俺の左胸に向けて一直線に刀が突き出される。俺はそれを。

咄嗟に身躲して左の二の腕で受けた。

回避までは、出来なかった。

強い鈍痛と共に、バリンと決闘の勝敗を決める障壁が碎ける音が聞こえる。

俺は突かれた左二の腕に身体を持って行かれ、地面に叩き付けられた。

――やっぱり……ダメだったじゃないか……。

「ぜえ、ハア、ハア、私の、勝利です」

息も絶え絶えに、ナギは勝利宣言をする。

俺は無力感に打ちひしがれ、溢れる涙を止める事も出来ず、大の字になって青空を仰ぎ見る。全力を出し尽くした。本気で、ナギを倒すつもりで。何重にもメタを貼って。賭けにも出て。それで、負けた——やっぱり、石ころは星になれない。並べない。

その残酷な事実を叩き付けられた。

「……結局、何が伝えたかったんだよ。俺なんか、どう足掻いたって特別にはなれないって思い知らせたかったのか？」

涙を零しながら、起き上がる気力も残って居らず言葉だけでナギに問いかける。

ナギの答えは——

「ハア、ハア、真逆、です」

意外なモノだった。

「ファルマ君は、私の事を、強いと言ってくれましたね？」

未だ息を切らせつつもナギは言う。

「ああ。誰だつて知ってる事じゃ無いか。ナギは強い。俺は、本当に全部出し切った。その上で負けた。俺なんかよりよっぽど、ナギの方が「八天導師」に相応しい……」

そんな悲嘆に暮れる俺へ、ナギは。強く。とても強く叫ぶ。

「その私が認めますッ!! ファルマ君は、強いッ!!」

涙が、一瞬止まる。暫く呆然として、でも、そんな事はある得ないと思ひ、言う。

「敗者に余計な情けはかけないでくれ。事実俺は負けたんだ。俺は弱い。お世辞なんて言われても、困るだけだ」

俺のその言葉に。ナギは珍しく苛立たしげに、

「この、私がッ」

と、強く、強く。大層不服そうに言う。

「戦いに人生を懸けてきた私がッ!! 戦いこそが生きる道だと決めた私がッ!! 嘘や世辞で「強い」という言葉を投げかけると、本気で思っているのですかッ!?!」

言われて、俺はドキッとしてしまう。冷や汗がこみ上げてきた。

「ご、ごめん！ ナギの事を愚弄するつもりは無かったツ！ すまない!!」

大切な友人であり、これから俺の師になろうとしている人を侮辱して傷つけてしまったと思い必死に謝る。

「ふう、やっと、落ち着いてきました……」

ナギは漸く息が整ってきた用だ。

「私はお世辞で戦った相手を『強い』なんて言ったりしません。事実、ギリギリの勝利でした。息が上がる程まで追い詰められたのは久しぶりです。ファルマ君は十分、私と渡り合った。それを強いと評さずしてどうするのです?」

ナギの言葉を、それでも俺は素直に受け入れる事ができない。

「でも。俺が使った魔法は。俺が使うアイテムは。全部他人の力だ。俺自身の才能なんかじゃない。全部、他人の力や才能だ。それを使って、張りぼての強さで君に並んだところで、俺自身が弱い事には変わらないじゃないか」

ナギはそんな俺の価値観を。

「その何処が、張りぼての強さなのですか」

根本から破壊した。

「他人の力? 他人の才能? では逆に聞きます。私の強さとは何ですか?」

俺は未だに身体を起こすことが出来ない。だから、ナギの姿を見れないけれど。

「私の刀は父より賜ったモノ、私が打った訳ではありません。私の武術は私の師に教わったモノ、私が編み出した訳ではありません。私の『刻印』は今は無き国に根付いていたモノ、私が開発した訳ではありません。最後に『神威』は。ファルマ君とレンさんが作ってくれたモノです。これは全部、貴方の言う他人の力ではありませんか?」

一言一言、ナギが語っていくナギが持つモノが頭に思い浮かんでくる。

言葉に、詰まった。それ等はナギという一人の人間の強さの象徴だ。

でもそれ等は全て——他人から授かったモノだと、彼女は言う。

「私がしてきた事は、そうやって授けられた力を。モノを。自分なりに、磨き上げ、研ぎ澄まし、より洗練していった。自分が使いやすいように、戦えるように。そんな私と、数々の魔法を魔法道具という貴方なりの方法で扱い、研鑽している貴方と、何処に差があるのですか？」

また、涙が溢れてくる。

今度は、さつきみたいなの悔し涙じゃ無い。胸に染み渡る、暖かい涙だった。

「そんな事、言ってくれるのか？ 俺が、借り物でしか無いと思ってた力が。張りぼてでしかないと思ってた力が。俺の強さだって、伝えなかったのか」

ナギが戦いを通して伝えたかった事。その真意を、ようやく悟った。

「口で言ったところで、ファルマ君は納得しないでしよう。実際に戦って、私と渡り合つてこそ、この言葉を飲み込める筈だと。そう考えて決闘を提案しました」

唐突な決闘の意味を、理解する。

「俺のこと、そこまで考えてくれたのか……ありがとう、ナギ」

「これでも、数々の新兵を育てて来たのです。多少は、心得があるもので」

ナギはこちらに歩み寄ってきて。

「本当に、ギリギリでした。立ちっぱなしは疲れます。横、よろしいですか？」

空を見上げて大の字に寝そべる俺の顔の真上に顔を出して聞く。

「当然。駄目な理由なんて無いよ」

「では、失礼します」

ナギはそういって、俺の横に座ったらしい。

98話 貴方の作る道具は、貴方にしか作れない物です

大の字で倒れる俺の横に座ったナギは言葉を続けてくれる。

「それでは、本題といきましょう」

「えっ今までのが全部導入だったの!？」

力尽きて身振りのリアクションは出来ないが俺は思いっきりびつくりした声で言った。

「貴方の強さを踏まえた上で——果たして武術が必要なのか？ それ
が私の考えた事です」

「なんで？ 曲がりなりにも槍を握ってるんだ。習得するに超した事は無いだろ」

「果たしてそうですか？ 貴方の戦い方は、基本的に魔法道具を駆使して貴方に繋がる人達の力を借り、時と場合に応じて使い分ける臨機応変なモノ。そして、攻撃手段はその場によって決めます」

「まあ、確かにそうだけど」

「この決闘の最後、気付きませんでしたか？ 貴方は『神威』を纏って、
槍術としてはデタラメな槍の振るい方をしました」

自分でやった事だ。忘れる訳も無い。

「ああ」

「あれは、実は私のように『型にはまった人間』を相手にする程効く行為なのです。素人が見よう見まねで『型』をなぞるより、ただ力任せに、がむしやらの攻撃した方が『型』が存在しない為攻撃が読みにくい。『型』を習うという事は同時に『その型の弱点』も身につけてしまいます。そこまでして正式な武術を覚える必要性が貴方にあるのか、甚だ疑問です」

「そういう、もん……なのかな？ 武道には詳しく無いから、俺には理解できないけど」

頭がこんがらがってくる。強くなるために、武術——槍術を覚えるべきだと思っただが、ナギはその必要性に疑問を感じているとの事だ。

「これは、ファルマ君が特殊なのです。何故なら、貴方は——圧倒的に攻撃への対応能力、『受け』が上手い。それはもう、武術を嗜んだ事のない人間としては異常な程に」

『『受け』……?』

何だか、何処か、遠い昔の記憶に同じ言葉を使った気がする。

「模擬戦も含めて、私が何度貴方の急所を狙って攻撃したか判りますか?」

「ええ、ナギって基本的に急所狙ってくるだろ。首とか心臓とか肝臓とか。回数なんて判らないよ」

「その通りです。私は『全て人体の急所』を狙って攻撃しました。これは、私達はこの国の人々と違い魔物では無く人間同士で戦を行っていた為に付いた癖です。そして貴方はそんな私の急所攻撃を、ほぼ全て『受けきって』います。そして『受けきれなかった』としても反射的に『致命傷を避ける』レベルです。決闘の最後、私の『神刺(かんざし)』は心臓を狙って放ちましたが貴方が受けたのは左の二の腕。急所は外れ、もし実戦であれば腕は跳ねられてもまだ、命は残ります。魔法使いならば片腕でも魔法で戦えますし逃走も狙える。実に理に適った『受け方』です」

言われて、思い出す。

そう言えばトーラとの戦いもそうだった。トーラ曰く『結構本気の攻撃』で俺の首を狙ったところ、俺は身躲してなんとか致命傷を避けて腕だけの被害で済ませたのだ。無意識のうちに同じ事をナギとの決闘でもやっていたのか。

「特定の流派に属さず、このような『受け方』を身につけているという事は——恐らく、あなたは我流で長い時を経てその技を磨いていったものだと思います」

「それ、少し前に別のヤツにも言われたけど身に覚えは無いんだがな……」

トーラも言っていた。俺は場数を踏んでいるから弱く無いと。でも実戦で戦っている回数なんて他の生徒とそこまで大した差は無いはずだ。

「その辺りはこの学園、というかこの国に生きる人々全てに言える事なので、あまり深く考えなくても良いでしょう。ともかく、ファルマ君という一人の戦士は臨機応変な攻撃能力と、十二分に備わった防御能力を兼ねた存在である、と私は判断しています」

「自分の事、そうやって評価されるの照れくさいな……俺は、俺の事弱いと思ってたし」

なんとか腕だけを動かして頬を掻く。

「それから、私が新兵にいつも言っていた事は『まずは何でもできる様になれ。出来ない事を減らしていけ』です。兵士に求められるのは孤立した状態でも生きて行ける能力。それは戦闘能力だけではなく最低限のサバイバル知識や医療知識なども含めてあらゆる能力が求められるので」

ナギの、教官としての一面と。そして。苛酷な“戦乱の世界”で新兵を指導するナギの姿が思い浮かぶ。

「しかし新兵を卒業し、一兵士に昇格した後は逆に“個性を伸ばす”事が求められます」

「どういう事だ？」

「生き残る為にはあらゆる能力が必要で、まずは平均的に。なんでもできる様に教育する。それが終わった後は、個々の適正を伸ばし、それらを組み合わせる部隊を組めます」

「へー、そういうもんなんだ」

俺は知らない知識に感心して零すが、

「他人事の様に言っていますがファルマ君——というかこの学校の四年生以上の生徒は授業の一部として実戦で戦っていますし座学や訓練などで生存の為の基礎知識もしっかり身につけており新兵のレベルには無いと見受けられます。その上で、果たしてファルマ君の個性を考えて。戦闘において攻撃も、防御も十分に能力を備えている今のファルマ君に武術が必要なのか。ファルマ君が目指すモノが武術の先にあるのならば、それも一つの道かと思いますが、どうですか？」

ナギの問いかけに、俺は素直に答えた。

「何にも考えて無かったよ。ただ、槍を握ってるから槍術も覚えるべ

きなんじやないかって漠然と」

「でしよう。で、あるならば。武術は貴方に不要かと。ヘタに新しい分野に手を伸ばすのでは無く貴方の得意分野を伸ばすべきだと考えます」

そこまで言われて、本当に、本当に、ナギが俺という一人の人間を見てくれて。俺に寄り添い、何が俺に適切な行為なのが全て考え尽くされて居た事に気付くことが出来た。

「ありがとう、ナギ。俺の為に、そこまで考えてくれて。ここまで、付き合ってくれて」

まずは感謝を伝えなければと思った。

「いえ。こちらこそ。いつか恩を返したいと思って居たので、お力になれて何よりですよ」

いつの間にか夜になってしまっていた空は、満天の星が広がっていた。

一つ一つが綺麗に煌めく満天の星空。

その星空に手を伸ばして。

「俺の得意なこと——マジッククラフト、か」

そう言ってみたら。

「クスッ」

ナギに笑われてしまった。

「え、なんで笑うの？」

「いえ、すみません。悪気は無いのです許して下さい」

「いや全然怒っては無いけどさ」

ナギは俺を諭すように言う。

「魔法道具の制作技術も確かに貴方の得意分野ですし、結果的にそれも伸ばす事になりますが——それよりもっと大切な。貴方が守り、育むべきものがあるでしょうっ？」

「……え、なにソレ知らない」

言われて、考えてみても思いつかなかった。マジッククラフトに関しては触って数ヶ月しか経ってないのにシジアンにはプロ級って言われたし確かなんとなくなれた感覚があるから得意だと思ってた

のだが。それよりも大切なもの？

ナギさんは俺が答えにたどり着けなさそうな事を予感して、言った。

「貴方が。『仲間』と呼ぶ人々との絆ですよ。貴方の魔法道具は、そんな人々が貴方に『力を貸してくれる』から作り上げる事ができるのでしょうか？ 貴方が私とレンさんを引き合わせ、繋げる事で『神威』を作った様に。ファルマ君はファルマ君自身と、誰かと繋がり、その誰かの『力を借りる』。そうやって『借りた力』を魔法道具という形にする事で自分を強くする。それがファルマ君のスタイルで、得意分野です」

……今日で、もう、何度目だろうか。

また、俺は大粒の涙を流していた。脳裏にはドライズ、ルクシエラさん、アリス、シジアン、レン、それだけじゃ無い。次から次に、俺に関わって。俺に力を貸してくれて。俺のマジックアイテムを作る事に協力してくれる人達の顔が浮かび上がってくる。

「最後に、あの時言った言葉をもう一度ファルマ君にお伝えしましょう。今日こそは素直に受け止めてくださいますよね？」

ナギはそうやって前置きした後、あの日。ナギが言ってくれた言葉を繰り返してくれた。

「貴方の作る道具は、貴方にしか作れない物です」

嘗て言われて目を背けたその言葉は。俺の胸の中に溶けてゆき、暖かさが全身に広がっていった。

99話 俺は、十分に特別だったのか……

その暖かい心地とは裏腹に。

「う、ぐすつ、あ、うあああああッ!!!」

もう耐えられなくなつて。感情がぐちゃぐちゃになつて。涙だけじゃ無くて声まで漏らして俺は泣きじゃくる。でもそれは、決して嫌な感情なんかじゃ無い。

俺は無価値な存在だと思つて居た。そんな俺がたまたまルクシエラさんと出会つて、コネだけでこんな特別な世界へ放り込まれて。凄く、居心地が悪かつた。石ころでしか無い自分と、煌めく星々に見える特別な才能を持つ他の人達とを比べて、日々劣等感に苛まれていた。

けれど――

そんな俺なのに、手を差し伸べてくれる人達が居た。こんな俺を支え続けてくれる人達が居た。だから俺はそんな人達の気持ちに応えたくて戦つて来たし、“八天導師”にも入つた。そんな人達――俺が“仲間”と呼べる人達との絆があるからこそ。俺は戦える。

そして俺のマジックアイテムは、そんな“仲間”達が居るからこそ作る事が出来る。

この場所に居るのは他の誰であつても良かったのかも知れない。けれど、現に今、この場所に居るのは、みんなと繋がっているのは俺なんだ。

だから、俺が作る道具は。俺に繋がってくれた人達との絆は。俺だけのモノなんだ。

「ああ……すんつ……あ、う……」

俺はこの日、初めて――

「俺は、十分に特別だったのか……」

自分が“特別な存在”である事を知つた。

「ええ。それはもう」

「……でもそれは、俺なんかを“特別だ”つて言つてくれる人達が居るから成り立ってる。だからやつぱり、俺は主人公じゃ無い」

主人公は初めから特別なんだ。

そう、ドライブが初めから非凡な存在であった様に。

俺みたいに、必死に背伸びして、色んな人の力を借りて、無茶や無謀を通してなんとか戦う訳じゃ無く。自分自身の力で人を、世界を救ってしまえる様な。そんなドライブこそが“主人公”であると思は思う。

だけど。

「……それでも。そんな俺を。ただの石ころでしかない俺を拾い上げて“特別だ”って言ってくれる人達が居るから。俺は、俺の人生は、無価値なんかじゃ無かったんだな」

「当たり前じゃないですか。価値のない命などありません」

漸く、それに気付くことが出来た。

「俺がするべき事は、俺を大切だと、“特別だ”と想ってくれる気持ちに出来る事。ドライブや、ルクシエラさん、アリスやシジアン、ああ、並べたらキリが無い。俺の大好きな、大切な仲間達との絆をより深めること。そして、仲間達が貸してくれる力を“俺なりのアイテムにする”事。それが、俺の目指すべき強さなんだな？」

俺が出した解答は。

「ふふ。答えはファルマ君の中にあります。自分の人生なのです、結局最後に決めるのは自分でなくては。なので、私に答えを求める必要はありません」

と言ってくれた。つまり、“それで良い”という事だ。

「ありが、とう……ナ……ギ……」

戦い疲れて、泣き疲れて、本当に限界が来てしまった。俺の意識は暖かいまどろみの中に溶けていく。意識が途切れる直前、丁度、無数の桜の花びらが俺の身体に降りかかっている事に気がついた。



一部始終を見届けていたボク達の方を向いて、ナギさんは言う。
「眠ってしまわれました。もう出てきて良いですよ」

アリシアさんとドライブ先輩の二人はものすごく気恥ずかしさを感じていそうだ。

「……名指して大好きって言われちゃったね」

「流石に僕も、照れるな」

「お疲れ様した、先輩。そしてナギさん」

ボクはぺこりとナギさんに深くお辞儀をする。

「いえ。私もファルマ君に恩返しがしたかったですし、これからも良
いお付き合いをしていきたくかったので。ですが一つだけ言わせて貰
います」

ナギさんはそう言うと、立ち上がって上半身を突き出して人差し指
を立てて、言う。

「ファルマ君が学校に復帰してから様子がおかしかった事も、それを
心配に思う気持ちも判りますが。のぞき見はよくないですよ、皆さ
ん」

と怒られてしまった。

「あうう、ごめんなさあい！」

「ご、ごめん」

とアリシアさんとドライブ先輩は素直に謝るが、ボクは。

「悪いとは思って居ますが反省はしません。ボクは先輩の幸せの為な
らどんな事だってします。今回はナギさんが解決してくださいませ
ましたが、時と場合によってはボクが動かなければならない時もあるで
しょう。その為に先輩の動向を探るのは必然です」

八天導師由来の人物では無い以上ボクはナギさんという人間につ
いて詳しくは無い。けれど、先輩との一連のやりとりを見る限りやや
不器用だが真摯で誠実な人間だと感じた。故にボクはボクの本心を
ぶつける。

「ちよ、部長さん！ ちょっとは悪びれなよ!？」

アリシアさんはボクを嗜めるが。

「クスクスツ、流石、ファルマ君のご友人です。信念を持って、悪だと
理解した上でそれでも貫き通すと言うのなら私は私も文句は言いませ
ん。が、その行為をファルマ君がどう捉えるか、知ったときどう思う
のかは考えないのですか？」

とナギさんはボクを問いたですが。

「ボクは先輩が幸せなら、ボク自身が先輩に嫌われようと構いません。先輩が、元気に、健全に、生きている。その事実だけが大切です。その上で、先輩がボクを慕って下さるのは無上の喜びではあるモノの、嫌われようとそれは十二つが十一つに減るだけの事。結局、ボクにとっての幸せは揺るぎません」

ときつぱり答えると。

「左様ですか。試すような事を言っつてしまい、差し出がましかつたです。フアルマ君は驚きこそすれど、嫌ったり等はししないでしよう。彼は友好的な人間——「仲間」に特段甘い性格をしていますので」と、ナギさんは述べて立ち上がる。

この人は本当に、侮れない。本気の本気を出した先輩とギリギリまで渡り合つて、勝つた者。恐らく他の八天導師と比べてもルクシエラ先輩やアイル先輩と言つた上級生組でなければ彼女には敵わないと考えられる。

しかし、先輩が仲間として認めた人間の一人であり、事実、空回りしていた先輩に対して真摯に対応してくれた。だからボクは、この人を信用する。

「あなた方は私が呼んだ事にしておきます。後は任せました。殿方の扱いは慣れていないもので」

ナギさんは気持ちよさそうに伸びをしつつ、言った。あれだけの戦闘をした、その疲れももう回復してしまつたらしい。

「それでは、お先に失礼します」

ナギさんは悠々と、春の桜舞い散る永久の森を去って行く。

「それじゃあ、僕達は——」

「改めてハル君を——」

「保健室に連れて行きましょうか」

と、〃先輩を見守る会〃 みんなで、先輩を保健室へと連れて行つた。

100話 平凡な俺の非凡な日常（コメディ）はこれからも続いていく——。

結局。次に目が覚めた時俺は保健室に転がされていた。今度こそ数日間の検査入院との事だ。でも、今の俺には目覚めた時の様な焦燥感は無かった。

全部、ナギのお陰だ。ナギは恩返しだなんて言ってたけれど、『神威』は俺も利用している魔法だ。『神威』の開発と改良は俺にもメリツトのある行為である。なのに恩返しなんてされては——恩返し返しをしないといけないな。

俺は安静に寝てろと言われていたのでベッドに寝転んでずっとそんな事を考えて居た。

ナギだけじゃない。ルクシエラさんや、アリス、シジアン、レン、勿論、ドライズ。俺を助けてくれる、支えてくれる人達の絆を大切にする為に。

もつと、色々なアイテムを作ろう。俺は天才じゃ無いから、画期的な新発明なんてできないけれど。日常生活のささやかな助けになるような、そんな便利なモノを作れば少しは喜んでくれるかも知れない。

「あ、でもその前にレンから貰った魔法陣全部アイテム化しなかったな。結局部活は当面忙しいままか」

なんて、自分で言って笑ってみる。

そして数日の検査期間を経て。まあ元々元気に決闘なんてできる程完全復活していたのでマジでただ寝かされていただけなんだけど。

俺は改めて、学校に復帰した。

もう、無茶な勉強なんてしない。とはいえ、「八天導師」になった以上は最低限の努力はする。普通の授業はサボらない。サボるのは自習だけだ。

いや自習も頑張れよツ！ て言われたら返す言葉も無いけれど。

復帰1日目の授業はあつという間に過ぎていった。

自習時間を跨いだ昼休みに、いつも通り木陰でお昼寝をする。目が覚めた時にはまた、いつも通り俺を挟んでハルカとキータが眠っていた。

あれだけの事件があったのに、この二人は気持ちよさそうにお昼寝をしている。

そんなありふれた光景を見るだけで。

ああ、幸せだな。

って、思えるようになった。

俺が今まで、無価値だと思っていたモノ。俺が今までずっと直視できなかつた光に、漸く足を踏み入れることが出来た気がする。

ここは、優しい世界だ――。

だからこそ、守りたい。

俺の胸では紅い羽根の勲章が今も輝いている。

“第四の賢者”はこの幸せな時間を、優しい世界を、めちやくちやにする。

看過することは出来ない。

ナギは俺を強いつて言ってくれたけど。イクリプスさんが言ったとおり戦う度に寝込んでばかりじゃいざつて時に困るだろう。前回寝込んだのがたしか3日。今回が13日。これだと次は23日くらい寝込むかもしれない。そうなったらもう、ルクシエラさんが何をしでかすか判らない。くわばらくわばら。

俺は強くなる。ならなきやいけない。その意志は変わらない。ただ、もう手段は間違えない。

復帰二日目の朝。

「ファルマー僕はもう行くよー？ 病み上がりで無茶するのも良くないけど、ソレを言い訳にだらけるのも良くないからねー？」

と言って早い時間に出ていく相棒に。

「うあー」

と適当な返事を返して二度寝する。

そして時間ギリギリになってから速攻で着替えて、寮の玄関へ。入り口では、いつも通りアリスが待っていてくれた。

「おはよう、ハル君！ 昨日も今日も、いつものハル君で安心しちやっただ！」

とアリスは笑ってくれた。

「ああ。もうあんな無茶はしないよ」

そして二人で、短い道のり、僅かな時間を並んで歩く。アリスとの関係性も、一旦整理しなきゃいけないな。

俺は友達としてやり直そうって言ったけどアリスの態度は相変わらず思わせぶりで、植え付けてしまった偽りの恋心は多分そのままだ。いつか、清算しなければならぬ。だというのに、この登校時間すら愛おしく思ってしまう俺は、相変わらず意志が弱いな。

だって俺は未だにアリスの事好きだからさあ……嬉しいか嬉しくないかで聞かれれば嬉しいに決まってる。けど、それは醜い自作自演。アリスにしてしまった行為への罪滅ぼしは、アリスが正気に戻るまで永遠に続く。今はただ、その時になるまで。嬉しい気持ちと罪悪感に挟まれながら、耐えるしか無い。

楽しいのも、苦しいのも。全部含めて俺の人生なんだ。

その時だった。

快晴だった空、丁度太陽を雲が遮って影が差す。少しだけ昏くなった世界で。

俺はふと、足を止めた。

「ごめん、アリス。時間ギリギリだけど少し待っててくれるか？」

「え、良いけどどうしたの、突然」

「いや。あいつに少し、言っただろうと思ってさ。アリスは先に行っただけ良いぜ？」

俺は少しだけ後ろに下がりがつつ、そう言ってみるが。

「ううん。待ってる。だめかな？」

と、アリスは付き合ってくれみたいだった。なら、仕方ない。アリスにも聞かれるのは少し恥ずかしいけれど、でも。大事な事だ。

俺は影が差した空を見上げて、声を張り上げて言った。

「今も見てるんだろ、トーラッ!!」

アリスは驚いた様子で、口元に指を当てる。

「起きてからの数日、俺が悩んだり泣いたり、笑ったり、全部見て、楽しんでたんだろ?」

返答なんて無い。でも判ってる。あいつは。トーラは。歪んだ価値観を持っているが「嘘」は吐かなかった。だから、俺を好きだと言った言葉も、ずっと見てるって言葉も真実に違いない。だから、返事なんてなくても、続ける。

「あなたの好きは歪んでるから嬉しくないって、前には言ったけどさ。俺も、前言撤回してやるよ」

トーラが使っていた言葉を借りて、俺は俺の意志を示す。

「俺なんかの人生を、見ててそれでも『楽しい』ものだって思ってたのなら。それはそれで喜んで受け止める。見たいなら、好きだけ見てくれればいい。それで楽しんでくれるなら、それはそれで嬉しく思うよ」

「ハル君!」

アリスは俺の言葉に戸惑うが、もう心の中で整理を付けた事だ。問題は無い。

「だってそれは、道ばたの石ころでしかない俺を拾い上げて『特別だ』って思ってくれたって事なんだろ? 俺に、俺の人生に、価値を見いだしてくれたって事だ」

俺はもう、自分や、自分の人生を無価値なモノだなんて思わない。

ナギが気付かせてくれた。俺を「特別扱い」してくれる人が居る限り、俺はその人にとっての「特別な存在」なんだ。例えその実態が、何の変哲もない石ころであるとしても。

だから。

「俺は、俺を受け入れてくれる人を、認めてくれる人を、『特別だ』って言ってくれる人を、拒まない。その気持ちを、大切にする。その気持ちに、応えたいと思う」

例えトーラの考え方や愛し方が歪んでいるのだとしても。俺なんかを「大好き」だといってくれた言葉が本心なら、その気持ちには応

えなければならぬ。

「だけどツ！ お前がまた、俺達の前に敵として現れるのなら。イーヴィルを育み、平穏を壊そうとするのなら。俺は『八天導師』の一翼としてお前と戦う」

俺はこの優しい世界と、平和で、楽しい学園を守ってみせる。ドライズ達と、肩をならべて。俺なりの力で、俺なりの強さで。

「悩んだり、迷ったり、空回ったり、苦しんだり。俺は主人公じゃ無いから色々回り道をするかもしれない。だとしても俺はいつだって――」

ギョツと拳に力を込めて。

太陽を隠し影を作る雲へ向けて、俺はいつの間にか口癖になっていた言葉を言った。

「俺に出来る全てをやるだけだツ!!」

俺が叫んだ言葉は、木霊となって消えていく。

最初から最後まで、返事が返ってくる事は無かった。

やがて。雲は流れ、影は消えて再び太陽が顔を出す。

「……それだけだ」

俺は空を見上げていた頭を戻して、アリスの横にならんだ。

「時間取らせちゃってごめん。行こう、アリス」

「ううん。良い言葉だったね。私ちよつと感激しちやった。ハル君、立派になったね……」

「アリスは俺の親なの?？」

「ちよつと！ 女の子を子持ち扱いするのは失礼なんだけどね!？」

「ごめんごめんっ！ 早く学校へ行こう！ 遅刻するって！」

俺はアリスの手を引いて、学校へ駆けだした。

何よりも優しく、楽しいこの世界で。

平凡な俺の非凡な日常（コメディ）はこれからも続いていく――。

幕間 戻って来た一時の日常

101話 それじゃあ——クサさん、で良いっすか？

体調が回復した、次の日の夜だった。

夢の中で、語りかける声が聞こえる。

『炎天よ。今、時間はあるだろうか？』

いや、声では無い。言葉——言語が頭に直接伝わって来る。

だから、声色は判らない。

「寝てる状態を暇と評するかどうかは悩み所っすね」

夢か現か。俺はそう答えた。

『では問いを変えよう。——少しばかり、話がしたい。付き合って、貰えるだろうか』

この口調。覚えがある。闇の中、俺に語りかけてきた謎の意志。

「……そういや、約束してましたね」

事件が落ち着いたら、話そうと言われていたか。

『約束と言うよりは、私の一方的な願望だったが。ひとまずは、おめでとう。無事に生還できて何よりだ』

その言葉に、俺は少し視線を逸らした。相手が何処に居るのかも判らないのだ。視線を逸らしたところで、何の意味も無いのだが身体に染みついた癖である。

「無事、って言って良いのやら。二週間くらい寝込む重体。俺がやったことなんて些細な事。ひとまずは生き残れてラッキー、位ですよ」
結局俺が出来た事なんて大した事は無かった。トーラを退けたのは仲間達が来てくれたからに過ぎない。

『それで、十分じゃ無いかね。私は正直、十中八九君はここまでだと思ってる』

ほぼ死ぬと思われていたと言う事か。けれど否定はしない。

「俺も、まあ死ぬだろうなって思っていましたよ」

『それでも生きて帰って来た。君は“特別”だよ。少なくとも、私の様な路傍の雑草とは訳が違う』

言われて、ふと思う。この謎の意志の事を俺はどう呼べば良いのか判らない。

「俺、貴方の事なんて呼んだら良いですか？ 声色は判らないけど、落ち着いた物腰、理路整然とした言葉選び。多分年上、ですよね？」
「……口調だけでも、年上と思われるのかね。老けている、という事なのか。少々、悔しいな』

言葉の主はやや悔しげな様子だった。

「いやあ。そのしゃべり方と落ち着き様で年下って言われたら逆に自分が子供過ぎて怖くなりますよ」

『そういう、ものかね。いや、事実ではあるのだから致し方ない事なのだが。それで、呼び名だったかな。名乗っても良いのかもしれないが、混乱を招く恐れがある。ひとまずは好きに呼んでくれて構わない』

名前を明かすと、俺が混乱するらしい。どういう事だろうか。

「よくわかんないっすけど、それじゃあ——クサさん、で良いっすか？」

この意志は「路傍の雑草」を自称している。それをそのままとってきた。

反応が、少し遅かった。

『くくっ』

恐らく、笑い声と思われる言葉が頭に響き、

『そうだな。実に私らしい呼び名だ。そう、呼んでくれたまえ』

どうやら気に入って貰えた様子だ。

「じゃあ俺の事は「炎天」じゃなくて「イシ」でいいですよ」

『ふむ？ 君の名は知っている。肩書きで呼ばれるのが気に入らないのなら実名で呼ぶつもりだがわざわざ「イシ」を名乗る理由はなんだね？』

「クサさんが「路傍の雑草」なら俺は「そのへんの石ころ」なんで。なんつーか、シンパシー感じるんですよ。良いじゃ無いっすか、あだ名で呼び合う仲って」

伝えると、すん、と鼻で笑う様な音が聞こえた気がした。伝わって

くるのは言葉そのものだから、気のせいかもしれないが。

『こうして言葉を交わすのもまだ二度目だというのに、あだ名で呼び合うか。不思議な関係であるな。だが、私は構わない』

クサさんは一度そう言った後、数秒後に。

『いや、違うな。取り消そう』

と言い、

『私も“良い”と思える。雑草と石ころの戯れだ。実にくだらないが、そのくだらなさが——』

「俺達らしい、って思えますよ」

俺がクサさんの言葉に続けて言う。

そこで二人とも暫くクスクス慎ましやかに笑い合った。

『しかし親近感、か。私からすれば君は石は石でも——玉石のように眩しいよ』

玉石、と呼ばれて照れる。

玉石、つまり宝石は魔法使いにとって“特別”なモノだ。魔石の媒介となる鉱石は、実は何でも良い。どんな石ころでもティアロ校長が編み出した魔法を使えば魔石として利用できる。しかし、宝石にはある利点があるのだ。

魔法はこの世界を巡る自然のエネルギー“魔力”を精神によって制御し、利用する技術である。その為術者の精神状況等が大きく作用するのだが不特定多数の心が同じモノを思い描いていた時、それは魔法的意味を持つことになる。魔法使い達が有意識・無意識問わず“同じ心を持つ”事でそれは一つの魔法たり得るのだ。

光り輝く宝石は、多くの人々が価値を見出しある種の“信仰”を持っている。具体的には『ダイヤモンドは最も有名な宝石の王様である』という意識。それを魔法使い達が皆共有している。その為ダイヤモンドには初めからある程度の魔力が籠もっている。それ単体で微弱な魔法的な効果を持つ程に。

宝石は、多くの人々が“特別だ”と言ってその輝きに焦がれ、求めるからこそ高値で取引され、それ故“信仰”が産まれ、魔力をも含む。宝石の多くが“パワーストーン”と呼ばれ微弱な魔法的効果を示す

とされるがその大本は「不特定多数の魔法使い達が無意識のうちに共有した精神」が自然の魔力を宝石に集め、「偶発的補助魔法」が効能として現れているのだ。

なんの「信仰」もない石ころに魔力は宿らない。魔力が宿っていない石ころと、魔力を宿した石ころ、どちらが魔石の素材として上質たり得るかは考えるまでも無いだろう。

「玉石なんてそりゃあ買いかぶりすぎですって。仮に宝石でも俺なんて良いとこいって一欠片ワンコインくらいじゃないっすか？」

空に輝く「星」程では無いにしても、「宝石」はマジックアイテムを扱う俺にとって身近な存在で、憧れの一つでもある。俺なんか「宝石」程の価値があるとは思えない。

『イシくん。それが人であれ物であれ価値を決めるのは当人ではないのだよ。価値とは「周りの者達が決める」のだ。君が、君自身を石ころと評そうとも。私は君に「玉石としての価値を見出ししている」。私だけじゃ無い。君に連なる、多くの人々がそうであるように』

言われて、胸が温かく感じた。同じような事をつい最近言われたばかりだから。その言葉の解釈は簡単だ。

「クサさんも俺の事を「特別だ」って拾い上げてくれてるって事っすね」

『そういう事だ』

「ありがとうございます。その気持ち、ちっぽけな俺に、それでも炎を灯しつづけられる力になる」

夢と現の狭間、曖昧な感覚で俺は胸元に手を当てて、ギュツと拳を握り絞めた。

『テラは君を「焚火」と称していたよ。薪が無くなればあつという間に消えてしまう灯火。けれど、薪と風を送り込み続ける限り、何処までも燃え上がる炎である』

「ティアロ校長、俺の事そんな風に思ってるんだ」

言い得て妙だ。今まさに、俺の心は強く炎を炊き上げている。

俺を支えてくれる人達に報いれるような人間でありたい。俺を「特別だ」と拾い上げてくれた、その期待に応えられる価値を示した

いと、魂を燃やして応えようとしている。

『今日は、話せて良かった。君が良ければいずれまた、言葉を交わそう』

頭の中。あるいは心の中に響くクサさんの言葉が遠のいていく。

「ええ。俺は、俺を“特別だ”って思ってくれる人の気持ちには応えたと決めましたから。クサさんが俺なんかと言葉を交わして、それを“有意義だ”と思ってくれるなら、いつでも、いくらでも大歓迎します」

視界は真つ暗。五感は曖昧。

それでも俺は、気配が遠のいていくクサさんへ向けて大きく手を振りつづけた。

102話 マジすんませんでしたアツー!!

学園全体を巻き込んだあの事件が収束して3週間。

目を覚ました後も一悶着あった俺が落ち着きをとりもどすのを待っていたかのように。

クサさんと言葉を交わしたその日の昼に、八天導師は全員校長室に集められていた。

「うむ、漸く皆揃ったな」

ティアロ校長は、割と広い校長室内に並ぶ俺達八天導師と、部屋の隅っこの方で壁に背中を預けて目を閉じているイクリップスさんへと順に目をやり、頷く。

校長先生の両サイドには俺のクラス担任であり三賢者の一人であるセレナ先生と同じく三賢者の一人であるジン先生が寄り添っていた。

「事件から暫く、『第四の賢者』の動きは無い。ひとまずは現状で知り得た情報を八天導師とイクス達、そして我々三賢者で共有したいと思つて集まつて貰つた」

と、言つた後校長先生はコホンと咳払いを一つして。

「が、その前に。どうしても一言、言いたいという者が居るので聞いてやつて欲しい」

とアイルさんに目配せをする。

するとアイルさんは並んで立っていた俺達の列から踏み出し前に出て。

真剣な眼差しをぐるりと俺達や、先生達に向けた後。

すう、と大きく息を吸い込んで――

「マジすんませんでしたアツー!!」

と豪快に土下座をした。その勢いたるやぶわりと風が部屋の下から突き上げる程だ。

その場に居た大半の者達は苦笑いを浮かべてアイルさんを見下ろしている。俺はと言えばこの土下座参考になるなと思つて居た。

すると、そんなアイルさんの目の前にルクシエラさんが仁王立ちし

て。

「全く。まんまと敵の術中に嵌まるとは情けない事ですわっ」

と、悪い笑顔を浮かべると。靴を脱いで土下座するイルさんの頭の上に片足を乗せた。

「ちよ、や、やり過ぎじゃないですかあ……!?」

真面目なアーシエがあわあわと取り乱して、止めようとするが。

「なあに、気にすることは無い。あれはルーシーなりの気遣いだ」

と、イルゼルナさんがぽんつと肩に手を乗せ嗜める。

あの事件の中心にイーヴィルと化したイルさんが居た事は聞いている。が、聞く限りそれは「第四の賢者」による謀略の結果だ。

イルさんは自身が原因で学園全体を巻き込む大事件を起こした事を悔やんでいる様子だが本当に悪いのは「第四の賢者」である。それは本人が一番よくわかっている筈。それでも尚こうして頭を下げるのは、自分自身を許せないという気持ち。負い目が残って居るからだろう。……その気持ちは、俺にも覚えがある。

そんな中。ルクシエラさんは事件そのものでは無く「敵の術中に嵌まった」事を責めた。

そうやってイルさんが背負い込んでしまったモノを半ば強引に削りとったのだ。

「八天導師総帥の名が泣いてますわ！ けれど、相手は生意気にもテイル爺達と同格、「賢者」を名乗る存在。口先だけではないようですわね」

イルさんの頭に片足を乗つけたままルクシエラさんは続ける。そう。「決して踏みつけては居ない」。ただ、乗せているだけだ。

「これに懲りたら、今後一人で交戦するような真似はしない事です」

言い切ると、足をどかし靴を履きなおして。ルクシエラさんは元の位置に戻る。

「姉貴の言うとおり、相手が悪かったただけだ。そう思い詰める必要は無いと思うがな」

部屋の隅から、目を閉じたままイクリップスさんがそう付け足した。ルクシエラさんとイクリップスさん、そしてイルさんはティア口校

長先生を師とする兄弟弟子だ。

負い目を感じているところを、ただ言葉だけで許されたとしても自分自身を許せない事がある。絵面は酷いモノだったがルクシエラさんはああやって「見せかけの罰」を与える事でその気持ちを少しでも晴そうとしたのだろう。

相変わらず、不器用な人だ。

「今回の一件、アイルに落ち度は無かったと他の皆も納得してくれるな？」

ティアロ様の言葉に、その場に居た全員が頷き肯定した。

「と、言う訳じゃ。気は済んだか、アイル？」

校長先生の言葉を受けて、アイルさんは少しだけ黙り込んだが。

「みんなが、そう言ってくれるなら……」

と、立ち上がり、俺達の元へ戻ってくれた。完全に吹っ切れた様には見えないが、少しは心が軽くなったように見えた。

「会議を始める前に、もう一件だけ付き合っただけ欲しい」

このまま会議が始まるモノかと思っただけ居たら校長先生がそういうモノだから驚く。

「ドライブ、ファルマ。前に出て貰えぬか」

そこから更に、名指しされたモノだから俺もドライブも、

「ふえっ!? あ、は、はい!」「うゝえ!?!」

と変な声を出してしまった。ただ、呼ばれた以上は前に入るしか無い。

突然の事なのでこれから何を言われるのか判らず、ドキドキして緊張の汗が滴る。

チラリと視線だけ送ってみるとそれはドライブも同じようだ。

そして、今度はティアロ校長先生が土下座までとは行かずとも、深々と頭を下げた。

「事件の収束に大いに貢献してくれた事、誠に感謝する。お陰で生徒の全てを守る事が出来た。学園を管理する者として改めて礼を言わせて欲しい」

その言葉に俺は半歩ずりさがって、当惑した。

「そんな、ドライブはともかく俺何もしてないっすよ!! 腕斬り飛ばされて眠り込んでただけなんすけど!?!」

そんな俺に、ティアロ先生は頭を上げて真摯な瞳を向け。

「シジアンから仔細報告を受けて居る。お主が未知なる原初の魔力〃拒絶の闇〃と交戦し、更なるイーヴィルの顕現を食い止めた、とな」
「アレは俺じゃ無くてシジアンやアリス、ハルカやキータ達が頑張ったからで——」

「じゃが、その中心に居たのも。その皆を率い、導いたのもお主であると〃拒絶の闇〃自身が言ったのであろう?」

トーラに言われた言葉とナギに教えられた事を思いだして俺は反論の言葉を失う。

「他ならぬ、相手がそう認めたのじゃ。誇れ。これはお主の功績である」

ただ、やはりまだ俺は校長先生の顔を直視できなかつた。やっぱり、俺としては大した事が出来なかつたと思つて居るから。

でも、ナギのお陰で俺はほんの少しだけ、進めた気がするんだ。

俺の強さ——大切な仲間や、友達との繋がりを大切にすつて決めたらから。

「あ、ありがとうございます。でも、その言葉は俺個人では無く、一緒にトーラと戦つたみんなのモノとして受け取らせて頂きます」

と、お辞儀を返した。

「やれやれ。礼を言うのはこちらだと言つておるのに、ままならんヤツじゃ」

ティアロ様は俺のそんな態度をクスリと笑い、

「ドライブは素直に受け止めてくれるな?」

と視線をドライブに移す。

「え、えー、その、この流れで振られるのはもう、言外の強制では」

俺はまだ詳しくは知らないがドライブの方も色々あつたようだ。トーラとの戦いの最中〃拒絶の闇〃が一度だけ振り払われ、トーラが退いた瞬間があつた。俺はあれをドライブの成果だと考えていたがやはり間違いでは無かつたようだ。

「トドメを差したのはイクリプスさんですけど……」

ドライブは視線を部屋の隅にいるイクリプスさんに向けるが、
「お前が居なければ俺はアレをアイルごと斬っていた。アイルを守れたのはお前が居たからだ」

と、イクリプスさんが補足する。どうやらアイルさんは人質のような状態になっていた所をドライブが救い出したらしい。

「なんだ、やっぱりやる事やってんじゃねえか。流石『主人公』」

俺はにやつと、いたずらに笑ってドライブをからかった。

「イクリプスさん!? ファアルマまで!」

逃げ場がないと悟ったドライブは恥ずかしそうに呼吸を整えて。

「ティアロ様のお言葉、確かに受け取りました……」

と、お辞儀した。

「うむ。それでは、会議を始めるとしよう。立ち話もなんじゃ。ファアルマ、円卓を作ってくれぬか?」

「あ、はい」

ティアロ校長先生が突然指示を出してくるが、その手の無茶ぶりはルクシエラさんでなれているので。俺は手持ちの魔石を使って、校長室の中心に大きな円卓と座席をマテリアライズする。

あつという間に終わらせられる仕事だったので何も考えて居なかつたが。

「うむ。良い手腕じゃ。ファアルマ、この規模と速度のマテリアライズは学生の領分を外れている事を自覚しておけよ? お主の武器の一つじゃからな」

と、校長先生に褒められて俺はまたもや、

「うえ?!」

と変な声を上げてしまった。

103話 究極のイーヴイル”を産み出す!?

八天導師と三賢者が円卓を囲う。イクリップスさんだけは依然として部屋の片隅の壁に背中を預けたままだ。

いざ会議が始まるといふ雰囲気には俺はハツとなって手を上げた。

「あ、あの！ そういえば俺、トローラに見張られてるんですけど会議とか参加しても大丈夫なんですかね？ 敵に情報が筒抜けになっちゃうんじゃない？」

俺の言葉に、ティアロ先生は落ち着いた様子で答えた。

「その件についてもシジアンより聞き及んでおる。厄介な事ではあるが、だからといって八天導師内でお主だけ情報を共有しない訳にもいくまい」

更に、部屋の片隅から。

「『拒絶の闇』が超常的な存在である事は戦ったお前が一番よく判っているだろう？ お前に限らずとも相手は常にこちらの動向を捉える事ができる可能性は捨てられない。ならば、『相手に傍受されている事を前提に』 会議をすれば良いだけだ」

とイクリップスさんが語った。

「のぞき見している輩がいると言うのなら見せつけてやれば良いのですわ！」

続くルクシエラさんの言葉。

そして、

「今後に関してはイクスの言う方針で行く。こちら側の戦力、武器、作戦は全てカイに把握されている前提で、最大限の警戒を行い対応をする。最も恐ろしいことは不意を突かれる事じゃ。初めから判っている事であればある程度の対処はできる筈じゃ」

というティアロ先生の言葉に、アーシエがおずおずと

「え、えっとお、つまり、相手がこちらの弱点を把握しているのならその弱点を庇うような行動を心がければ良い、という事ですね？」

と言って話を纏めてくれた。

「うむ。それでは会議を始める。今回は主に、各々手に入った情報の

共有が目的じゃ。シジアン、後は任せる」

名指しされたシジアンは落ち着いた様子ですくりと立ち上がった、「皆様から提供して頂いた情報を整理しました。まずはそれをこの場で共有します」

シジアンはモノクルをキラリと輝かせいつも抱えている巨大な本を開いて堂々と語り始める。

「まず第一の情報です。『第四の賢者』こと敵対魔道士カイの目的が推察されました。彼は人を故意にイーヴィル化させる魔法、『クラウンド・ダークマター』によってアイル先輩をイーヴィルへと変じさせ、更に『拒絶の闇』を付与する事で既存のイーヴィルの枠組みをほみ出した脅威、『クラス4』のイーヴィルを発生させました」

慣れた様子でその手に抱える巨大な本の、ページをめくった。とても最年少とは思えない貫禄だ。

「アイル先輩の記憶から聴取した情報により『第四の賢者』カイの発言を整理した結果、彼の目的は『究極魔導』を作り出す事である、という結論に至りました」

「ふむ、なんだその『究極魔導』とは？ 言葉の通り受け取るのならば最も優れた魔導、なのだろうが大の大人が使う表現としては随分と単純というか、稚拙に感じるな」

イルゼルナ先輩が何気なくそう首を傾げた瞬間。

「「うぐうツ!!」」

三つのうめき声が重なって校長室に響いた。思わず、シジアン以外の俺を含めた八天導師皆が驚いてざわめく。何事かと思ひ円卓に座る面々を見渡すと、胸に手を当て苦悶の表情を浮かべていたのは、この学園のトップたる三賢者達だった。

「ちよ、先生達大丈夫ですかッ!?!」

びつくりした様子でドライズがガタツと立ち上がるが、

「ふ、古傷が痛んだだけです。気にしないでください」

『究極魔導』の事は、追々伝える、今はカイの目的を聞いてくれ……」

「誰だつてえ若い頃はあ色々やらかすものなのさあ〜」

と三者三様に目を泳がせていた。

こほん、とシジアンが咳払いをひとつした。それで皆一息吐いて乱れた場の空気が整えられる。

「『第四の賢者』カイが目指す『究極魔導』とは、即ち『究極のイーヴイル』を産み出す事である、というものがボクと三賢者の皆様の見解になります」

「『究極のイーヴイル』を産み出す!?! なんじゃそりや!!」

俺は思わず口をあんどぐり開けてしまう。

「驚くのも無理は無い。ワシ等とてそう仮定して尚信じられぬ気持ちもある。が、カイがアイルにした事、そして一連の行為を『臨床試験』と称している事からそうとしか考えられぬのじゃ」

校長先生も、腑に落ちて居なさそうな様子だ。

改めて考えてみてもやはり、意味がわからない。『究極のイーヴイル』なんて作り出して、一体どうするつもりだというのか。

「『究極のイーヴイル』を産み出す、ねえ。私も研究者の端くれですけど、まるで意味が判りませんわ。そんな事をして、なんのメリットがあるのだから」

「……同意。意味不明。あんなの何の役に立つの?」

「ルーシー達の言うとおりで。しかも『第四の賢者』はそれを『究極魔導』などと称するつもりなのだろう? 魔導とは魔力を持つて人の世を良くしていくものだというに。イーヴイルなどは真逆の存在ではないか」

ルクシエラさん、レン、イルゼルナさん達が首を傾げて言葉を交わしていた。

「イーヴイルを育むだなんて、それじゃあまるで——」

いつの間にか口に出ていた俺の言葉に、シジアンが重ねて言う。

「はい。先輩の『』想像の通りです」

「そうか、そういう事か!!」

『究極のイーヴイル』を産み出す事そのものの意味は判らない。しかし一つだけはつきりと見えてきたモノがあった。

「だからトーラは『第四の賢者』に自分の原初の魔力、『拒絶の闇』を貸し与えているのか!!」

確信を持った俺の言葉に、自然と視線が集まる。そして、

「ファルマ。一人で納得してないでどういう事か説明してくれない？」

とドライブズに言われる。

「『第四の賢者』の思惑は全く判りませんが、俺はトーラと戦って、言葉を交わして、あいつの考えてる事なら嫌って言うほど判るようになりました」

俺は立ち上がってみんなに説明をした。

トーラはイーヴィルの様な人の心の欠片からこぼれ落ちた醜く歪んだ願いであつても「叶う権利がある」「人間と対等である」としてイーヴィルを育てていた。

「トーラは人間の全てが大好きなんです。良い所も、悪い所も、本当に、全てが。俺達がイーヴィルと呼んでいる魔物は、トーラ曰く「叶えられなかった人の願いが吹きだまりになって淀んでしまい産まれる存在」だそうです。簡単に言ってしまうえば、人間の負の感情そのもので、本来ならば認めてはいけない存在——でもトーラはそんな「人の醜さ」すら愛するが故に、俺達が「悪」だと思つて切り捨ててしまった感情も報われるべきだと主張していました」

俺の言葉に、シジアンが付け加えた。

「だからこそ『第四の賢者』の目的が『究極のイーヴィル』を産み出す事ならば、それはそのままトーラが『第四の賢者』に力を与える理由になります。『第四の賢者』カイが何を考えて居るかまでは当人にしか知り得ません。ですが、カイとトーラの結びつきを見いだす事ができました」

もつと踏み込めば、『第四の賢者』がこうやって争いの火種を産み出している事実そのものがトーラにとつては最高の娯楽である。人の営みそのものだ。トーラは俺達と『第四の賢者』との戦いを俯瞰して、楽しんでるに違いない。

「カイとトーラの関係性は不明です。正式に契約を取り交わし結託しているのか、それともトーラが気まぐれに『拒絶の闇』を貸し与えているだけなのか、この辺りは追って情報を集めるべきでしょう。ひと

まずは、一つ目の情報はここまでです」

「ご苦勞であった、シジアン」

ティアロ先生がそう言うのと、シジアンは軽くお辞儀をして席につく。

「それでは、一旦休憩と致しましょう」

セレナ先生がそう言うつて端末を取り出し指を数回動かす。
すると。

「お疲れ様です。マスターそして八天導師の皆様方。お茶とお茶請けをお持ちしました」

と、校長室に数段の棚の中に人数分の食器やティーポット、クッキーなどが乗せられたカートを押して白と紺色のスーツを着た男性が一人入ってくる。確か、高学年を担当している教員の一人だ。

俺は紅茶とクッキーを受け取って、一口に放り込んだ。

104話　そしてもう一つは――

東の間のティーブレイクを挟み、会議は再開される。

「それでは、第二の情報になります。議題は『原初の魔力』についてです、『新発見された原初の魔力』に加えて現状把握されている『原初の魔力』の特徴についての再確認を行います」

改めてシジアンが巨大な本のページを繰りながら話を始めた。

「聞くまでもねえな。新たな原初の魔力――『拒絶の闇』。最悪なヤツが敵に回った」

俺は眉間に皺を寄せて言った。

「我々は交戦しなかったのだが、やはりそれ程までに厄介だったのか、その『拒絶の闇』というものは」

イルゼルナさんが興味深そうにその細く閉じられた視線を送る。閉じられた瞳の隙間からうっすら、キラリと輝く光が幾つか見えた気がした。

しかしそこで、

「申し訳ありませんが皆様、情報の整理には順番が肝要です。まずは『現状我々が把握していた原初の魔力』についての知識を共有したいと思います」

とシジアンが議論の方向性を修正する。

「あ、ごめん。邪魔して悪かった」

「私も、すまない。つい、知的好奇心が湧いてしまった」

俺とイズナさんが頭を掻きながら慌てて目を逸らす。

「いえ先輩、イルゼルナ先輩もお気にならさずに」

謝る俺達にシジアンは小さなお辞儀を返して、続ける。

「事件発生に至るまで我々がその存在を把握、認知していた『原初の魔力』は『二つ』です」

――え？

シジアンの言葉に、俺は疑問符を浮かべた。しかしそれを言葉に出すよりも先に、同じように驚き、その仕草を示してくれる人物が現れる。

「二つですかあ!？」

こういつた場では大人しいアーシエが声を上げて驚いたのだ。無茶ぶりをさせられて涙目で取り乱す事は多くても、会議や会話中のアーシエは委員長らしく終始落ち着いているイメージがあつたため意外だ。

しかし、その疑問を持ったのはアーシエだけではない。俺やレン、ドライズ。主に中学年の八天導師達が驚いていた。

「ああ、貴方達は知りませんでしたの」

ルクシエラさんやイルゼルナさん、アイルさん達高学年組や三賢者の先生方は常識、と言わんばかりの様子だ。

「続けます。この事件に至るまで現在我々が把握していた『原初の魔力』、その一つは言うまでも無いでしょう」

シジアンの言葉を受けて会議室皆の視線が、ルクシエラさんに集まった。

「『破滅の光』——あらゆる魔法を『魔力へと分解』し、無効化する上に、それそのものが本来の光属性の魔力の領分を超えた大きなエネルギーを持つ魔力……」

アーシエは、半ば恐れるような、感嘆するような、少し昏い声色で零す。

「それで、もう一つって?」

俺はシジアンに顔を向けると、シジアンは窓の外を指さした。

「第二の原初の魔力。それは『豊穡の大地』と三賢者の皆様は定義しました。それが『永久の森』を支える魔力の根源です」

「はあっ!?!」「え!?!」「……っ」

俺やドライズ、レン、皆が同時に驚きの声を上げる。

「『原初の魔力』って人間以外にも宿るんですか!?!」

俺達を代表するようにドライズが問うと、ティアロ校長が答えた。

「うむ。現に『永久の森』は本来の地域とは一線を画した超常的空間であろう? 通常の十二倍のサイクルで営まれていく命の循環は『豊穡の土』の力——他の魔力と融合し、その魔力へと変化する事で

賦活化する“事によるものじゃ”

更に、付け加えるようにアーシェが口を開いた。

「この世界は、火・風・土・水の四大元素により土台のようなもの構成
せれていて、そうして組み上がった世界の中で光・雷・闇・氷の転成
元素が産まれる事で今の世界が存在していると言われています。
ですから、“四大元素の原初の魔力”が大地や空など“自然に根付く
モノ”だと仮定できるのかもしれませんが……」

アーシェは“原初の魔力”が既に二つ既知である事に驚きを示し
ていたが、それが人以外にも宿りうる、という点には疑問を持たない
様子だった。

「それでは話を戻します。今回の事件の情報を整理し、新たに認知さ
れた“原初の魔力”の情報を共有しましょう」

シジアンの言葉を受けて、俺達は一呼吸を置く。

そうだ。今大事なのはそっちの要件。新たな原初の魔力、“拒絶の
闇”がどんな存在なのかを実際に対面しなかった八天導師のみんな
に共有する事なんだ。

そう思っていたら。

シジアンの口から、再び驚きを隠せない言葉が放たれた。

「今回新たに認知された“原初の魔力”もまた、二つになります」

「ええええええッ!!」

俺はガタツと椅子を蹴り飛ばし飛び上がった。

「ファルマくうん、流星にうるさいよお」

目を×印にして頭をくらくらさせながらジン先生が言う。見渡す
と、他の八天導師のみんなや先生達も頭に手を当てたり耳に指栓をし
たりしていた、

「あつ、す、すんません……」

ものすごく恥ずかしくなって、俺はすごすごと席に着く。

しかし、驚く心は変わらない。今回の事件で、まさか“拒絶の闇”
以外の原初の魔力が見つかったなんて。

一体、何処で、誰が——あるいは何に宿っていたと言うのだろうか。
「その二つとは。第一は“第四の賢者”カイと“原初の魔力そのもの

人格” トーラが操る闇の魔力 “拒絶の闇”」

それは判る。俺は気になるもう一つの原初の魔力の説明を待った。
「そしてもう一つは——」

シジアン、更に三賢者の先生達の視線がドライズへと向く。釣られて、俺や他のみんなの視線もドライズへと誘導された。

「氷天、ドライズ先輩が宿し続け、今に至るまで気付かれる事の無かった氷の魔力です」

「……へ？」

ドライズはその言葉を、キョトンとした様子で受け取り。

「我々三賢者はシジアンから得た情報を元に、ドライズが宿す氷の魔力を第四の原初の魔力—— “明鏡の氷” と定義した」

ティアロ校長先生がドライズの瞳を見据えて、言い切った。

「僕が、 “破滅の光” じゃない原初の魔力を宿してる……？」

当のドライズ自身も自覚が無かった様子で、呆然としていた。

105話 僕の何かしらの権利が侵害されてる気がする

自分が「破滅の光」以外の原初の魔力を宿していると知らされ困惑するドライブズに、セレナ先生が告げる。

「それが、そもそもの勘違いの始まり。盲点だったのです」

「どういう事ですか!？」

「ドライブズ君が「破滅の光」を宿している事は事実。けれどそれは正式な「継承」では無かった。だからこそドライブズ君の「破滅の光」は正式な継承者であるルクシエラさんやイクリプスさんの持つモノよりも規模が小さく、制御が効きやすい状態だったのです」

「それってつまり……」

ティアロ先生がセレナ先生に続く。

「ドライブズの宿す原初の魔力、「明鏡の氷」の特性とは即ち「他の原初の魔力をその身に宿し、扱う事」だと我々は判断・認定した」

校長先生の言葉に、校長室は一瞬だけシンと静かになった。みな、視線はドライブズに向いているそして同時に、これまでのドライブズの功績や戦いを思い返しているのだろう。

「情報の整理により、ドライブズ先輩自身は自身の氷の魔力を行使した前後の記憶が曖昧であると聞いていますが記録を確認させていただいた結果『明鏡雪華』『明鏡暗夜』といったそれまでドライブズ先輩が使用した事のない魔法の発動を確認しました。「明鏡の氷」という名前はそれを参考に付けられたものです」

沈黙を破るシジアンが情報を受けて俺はドライブズに問いかける。

「お前、そんな魔法使ったのか?」

「みたい、なんだ。正直あのときは目の前の事に精一杯で細かい所を覚えてないんだけど、イクリプスさんとリーゼの証言、それからシジアンちゃん的能力から確認されてるんだ」

ドライブズの言葉を裏付けるように、部屋の隅から低い声が聞こえてくる。

「俺は今まで、ドライブの『破滅の光』が俺やルーシーに及ばないのはまだ未熟だからと捉えていた。しかしそれが『別の原初の魔力の効果による模倣』であったとすれば、『明鏡の氷』が、『対象の原初の魔力を100%模倣出来るわけでは無い』とすれば、説明が付く」
イクリップス先輩の考察は非常に興味深い。

……が。正直、ずっと思ってた事が気になって仕方ない。
今更かも知れないし、空気を読めてないかも知れないけれど。
俺は遂に言ってみた。

「あの、イクリップス先輩。ここまで本格的に会議に参加するんならそんな部屋の隅じゃ無くて円卓に着いてはどうかなあ、なんて？」
校長室の片隅、様は角つこで壁に背を預け腕を組み目を閉じ俯きながらちよいちよい会議に口を挟

むイクリップスさんの姿は、その、何というか。かつこいいんだけど、何か凄く違和感がある。

「……」

ひえっ!! 俺の言葉に、閉じられていたイクリップスさんの片目が開き、眉間に皺を寄せて視線が俺に飛んで来る。やっぱり余計な事を言ったかもしれない!

けれど、イクリップスさんは。

「良い機会だ。他の皆にも知っておいて欲しい」

と言つて壁に預けていた背を離し、真っ直ぐ立って円卓を見渡した。

「俺は、姉貴とは真逆だ」

「ふんっ」

突然引き合いに出されたルクシエラさんは、続く言葉を理解しているようで不機嫌そうにそっぽを向く。

「大切なモノほど、遠くに置いておきたい。輪の中に入るなんて、柄じゃ無い。だからこの場はここで良い。姉貴やアイルは切つても切り離せない以上の繋がりがあるからな、そこは半ば諦めているが。他の八天導師の皆は俺の事は仲間だとは考えないでくれ。ただ、偶然目的が一致している他人が同席している、そう受け取って欲しい」

レンほどでは無いにしろ口数が少ないイクリプスさんにしては饒舌に、その胸のウチを言葉にしてくれた。

「それって、つまり私たちの事を『大切に想ってくれている』という事でしょうか……?」

おずおずとアーシエが確認すると、

「……好きに解釈しろ」

イクリプスさんはぷいっとそっぽを向き、元の部屋の角っこに戻って壁に背中を預けた。こういう細かい仕草がルクシエラさんにそっくりで流石は双子だと思う。

そんなイクリプスさんの姿を見つめるアーシエの瞳には何処か憂いを感じられた。アーシエは生真面目な性格だから、仲間は仲間としてきちんと輪を作って行動したいのかもしれない。

「……話を元に戻すぞ。シジアン、頼む」

ティアロ先生の呆れた声が聞こえてきてハツとした。

「情報を整理した結果『明鏡の氷』の効果は現時点では『他の原初の魔力をその内に宿す代わりに効力をやや低下させる』モノだと考えられて居ます。根拠は、ドライズ先輩が『破滅の光』を最大出力で扱えない事の他、先輩が開発した『フェア・クリスタル』の材料となっている事が挙げられます」

言われてみて、俺は納得がいったが、ドライズの方はバツと俺の方へ顔を向けて。

「待ってッ!? ファルマが倒れてる間に実際に使ったから『フェア・クリスタル』っていうマジックアイテムは知ってるけど僕の魔力が関わってるなんて初耳なんですけど!!」

と、捲し立てる。

「あーっと。『フェア・クリスタル』は『破滅の光』を限界に希釈する為に作った器だ。でもソレ単体だと『ただの器』だろ? 『希釈する』っていう事は『薄めるために同時に入れる魔力』が必要になる。それで手持ちの魔力で色々試してみたら、お前の氷の魔力を足している事でドンドン『破滅の光』が薄まっていく事を発見したんだ」

と、説明してみたら。

「手持ちの魔力って何!? 僕、君に氷の魔力を直接手渡した記憶無いんだけどなんでそんなモノ持つてるの!! いつ、どうやって採取したの!? ねえっ!!」

とドライズは凄く驚いた様子をみせるものの。

「話が逸れてきていますので、続いて『拒絶の闇』の情報共有に移りましょう」

と、シジアンが口を挟み。

「まってっ!! これ、僕の何かしらの権利が侵害されてる気がするから流さないで欲しいんだけど!!」

と、納得のいかない様子のドライズに。

「……痴話喧嘩は後で」

とレンが少しだけ口元をにやけさせながら言った。

「痴話喧嘩!? これ痴話喧嘩なの!? 違くない!!?」

と、ドライズは納得いかない様子だったが会議は次の情報へと移行した。

106話 僕にも人権はあるんだからね!?

シジアンはこほん、と咳払いを一つして。

「次は新たに発見され、明確に敵陣営が扱う原初の魔力『拒絶の闇』についてです」

はらり、と巨大な本をまたページめくるシジアン。

「その効力は『あらゆる存在の遮断』であると考えられます」

「『遮断』、か。それだけ聞けば大した効果では無いように思えるが。対峙した者達の目つきが違うな。改めて教えて欲しい。具体的にはどのような脅威なのだ?」

イルゼルナさんはニヤニヤと好奇心を抑えきれない様子だ。

「まず第一に戦闘面において。原初の魔力、或いは光属性の魔力以外から構成された魔法を完全に遮断してしまいます。そしてそれは魔法だけに留まらず高密度魔力体である物理的物質をも阻むのです」

シジアンの説明に、イルゼルナさんは顎に手を当て、

「ふむ。『光属性・或いは原初の魔力』が無ければ魔法攻撃も物理攻撃も防がれてしまうのか」

「そして厄介なのが『物理的質量の遮断』の延長として『全てを切り裂く刃になる』点です」

この世界で物体や肉体とは沢山の魔力がギュツと高密度に凝縮して構成されている。だから、ある意味では物理的物質は『魔法の一段階上の魔力体』と考える事が出来る。

「ルクシエラさん達の『破滅の光』が、出力を上げる事で魔法の分解だけに留まらず物体や肉体の分解まで行うのと同じような原理で、『高密度魔力の結びつきを遮断する』事が切断攻撃に発展するんです」
シジアンを補足するように俺が説明すると、

「……攻防一体、厄介」

イルゼルナさんと同じく実際に『拒絶の闇』とは交戦していないレンもまた興味深げに頷いていた。

「更にこれはイクスの証言に照らし合わせて研究した結果ですわ。魔法や物質に限らず、『拒絶の闇』が遮断できる概念は数多く、『重力

を遮断”する事で空中浮遊が、“物理的距離と経過時間を遮断”する事で長距離移動が可能である事が判明しています」

ルクシエラさんの言葉を聞きながら俺は右腕を挙げた。

手首には白と黒が縞模様になっている腕輪がぶら下がっている。

「現在マジッククラフト工房では戦闘によつて採取された“拒絶の闇”を利用して、その“物理的距離の遮断”を利用した『新型転移魔法陣』の臨床試験中です。今のところ問題無く利用できているので、最終安全確認が出来たら八天導師内で設備として共有する方針です」

レンが最近開発した『転移魔法陣』はあくまで高速移動の延長であつた。そのため、まず野外で無ければ利用できず、移動進路の安全確保、移動中想定外生物・物質との衝突回避などかなり複雑な魔法陣によつて制御されている。

しかし“拒絶の闇”を利用した移動は“存在”と“時間”という概念を無視する。“拒絶の闇”の魔力を筒状、チューブの様に“道”繋げその出入り口を設定するだけで一瞬で入り口から出口へと抜ける“瞬間移動”が可能なのだ。最初に“道”を繋げる際に他のモノを巻き込まない様に注意すればそれ以降は基本的に外からの干渉を受けない。

体面上“道”となつた空間は“存在しない”形になる。これに干渉できるのはやはり、他の属性の原初の魔力だけだ。

——と、ついでに『新型転移魔法陣』の仕組みについて俺はルクシエラさんとレンの代わりに説明した。

「敵に回れば厄介な代物であるが、戦闘後の残滓だけでもそれだけの応用が利くのか。ありがたい反面、確かに危険極まりない力だ」

イルゼルナさんは口ではそう、戒めるように言っているが顔がうずうずしていた。“早く私も使ってみたい!!”と書いてある様だ。

「……ん、とても危険。細心の注意を払つて利用するべき」

あの無表情なレンですら顔がにやけていた。だつてそうだろう。俺だつて“拒絶の闇”が偶然採取出来ている事に気付いた時には、数々思い浮かぶアイテムへの応用方法にときめいたモノだ。レンに至つては魔法陣だけ作つて、安全確認の為のお預け期間中な訳で、早

く自分の新しい魔法陣のデキを確かめたくて仕方ないだろう。

敵としては厄介極まりないが手元になれば幅広く応用の利く「拒絶の闇」も、手に入ったのは僥倖であった事が判った。

「それもこれも、全部ドライズの『明鏡の氷』のお陰だったって事だな」

「どういう事？」

俺の言葉にドライズはハテナマークを浮かべた。

「トーラは戦闘中に魔力の採取なんてやってられる程余裕のある敵じゃ無かった。そっちもそうだったんだろ？ それでも『拒絶の闇』の一部が俺達の手元に残ったのは丁度『破滅の光』を吐き出した『フェア・クリスタル』に『拒絶の闇』が入り込んでいたからなんだ。あとお前の氷燐剣（中略）にもな」

原初の魔力の器として設計した『フェア・クリスタル』はともかくどうしてドライズの剣にまで『拒絶の闇』が染みついていたのか謎だったのだが、それがドライズの原初の魔力による効果だと判れば腑に落ちる話である。

「ドライズ先輩の『明鏡の氷』の補足事項として、ドライズ先輩自身が体内に他の原初の魔力を宿した場合、本来の魔力と同じように回復・補充が出来る事が『破滅の光』で実証されています。今後は採取された『拒絶の闇』を増幅していただければ、こちら側の戦力増強に繋がるでしょう」

シジアンの言葉にドライズはビクツと反応を示す。

「えっ、待って。それひよつとして僕に『拒絶の闇生産工場になれ』って言ってる?！」

ドライズは自分の身体を抱きしめ、身震いする。なまじ中性的な容姿をしているので無駄に色っぽい。

「悪い言い方をすればそうなりますが、普段通り適度な休息を行って、魔力が貯まったら『フェア・クリスタル』に移してもらっただけで結構ですので、気を張る必要は無いかと」

シジアンは淡々とそう言うが、

「いや、圧!! 早く沢山生産しろ」って言外の圧が多方面から突き

刺さってくるんだけど!!」

当のドライズはそれどころでは無いらしい。何しろルクシエラさんやイルゼルナさん、レン、あとついでに俺。八天導師の中で「研究・開発」方面に携わっている面々から期待が最大限に込められた生々しいねつとりずつしり重い視線が集まっているのだから。

「主人公体質は大変だな」

俺はからかうように言っただけだ。

「必要なのは判ってるから善処はするけどさ!! 僕にも人権はあるんだからね!」

ふと、ねつとりとした視線の送り主の一人、レンがぼそりと言った。

「……大丈夫。一日5回くらいは出せる筈」

「何を根拠に言ってるんだい!」

確かに、魔力が回復、生成される具体的な回数なんて何を根拠に割り出しているのだろうか。レンは間違い無く天才肌なので考えている事が判らない事が時々ある。

「そ、そんなペースで出されても『フェア・クリスタル』の生産の方が間に合いませんよう……! ついこの前ファルマ君にめちやくちやな発注を受けたばかりで素材不足が深刻ですう!!」

ドライズだけでなくアーシエの方も涙目になっている。

「あー……」

俺は数日前にナギさんとの決闘に持ち出した特大『フェア・クリスタル』製の盾の事を思い出して申し訳ない気持ちになった。何が申し訳無いって「敵と戦う為に使った」訳ではなく「身内の模擬戦」でそんな贅沢なモノを使ってしまった事だ。

「まあみな落ち着け。ドライズだけに頼らずとも今後「第四の賢者」カイを追っていれば戦闘に発展するのは目に見えている。その戦闘後にもまた採取が見込めるだろう。ともかく、ドライズにもアーシエにも、あまり負担はかけてやるなよ」

ティアロ様が困った表情で頭を掻きながら言うと、ドライズにねつとりした視線を送っていたみんなは同時に

「「「はい」」」

と、棒のような返事をして視線をシジアンへと戻した。

107話 この学園は僕も大好きなんです、絶対守つて見せます！

「それでは、今回の会議で共有する最後の情報です」

説明しっぱなしで流石に疲れてきたのかシジアンは額に汗が滲んでいる。シジアンは袖で汗を拭い巨大な本のページをめくった。俺はその様子を、何故か保護者みたいな気持ちで、あとちょっと頑張れ!!”って思っていた。なんで？ 我ながら何様だよ。

「“世界の鍵を握る者” ユウさんについてです」

記憶喪失の少女、ユウ。

ドライズ曰く、突然空から降ってきた記憶喪失の女の子。白から黒へとグラデーションしている彗星の尾の様に長く美しい髪が印象的で、神秘的な見た目とは裏腹に子供っぽい、あどけなさの残る無邪気な性格……くらいが俺の知っている情報だ。クラスメイトの詳細を殆ど把握していない俺にしては頑張っている方だと思ふ。

「私、彼女の護衛をしていたのですけれどイクスとドライズがイーヴイル化していたアー坊と交戦していたと思われるタイムミングで、突然別人の様になって青白い謎の魔力を空へ放ちましたわ。その一連の行動を本人は覚えていない様子でした」

ルクシエラさんの言葉で、ドライズとイクリップスさんがハツとした。

「あの光はユウ由来のモノだったのか。なるほどな……」

「あの光景はユウさんが見せてくれたんだ……」

どうやらユウさんの行動がドライズ達に影響を与えたらしい。

「ドライズ先輩の記録・証言によればユウさんの放った青白い魔力はドライズ先輩に “過去” の記憶を垣間見せた様です。それが結果としてドライズ先輩が氷の魔力を使用するきっかけ。ひいては “明鏡の氷” を宿していると自覚するきっかけになりました」

「“過去の記憶”？」

このメンバーの中でドライズと特に付き合いが長いのは間違い無

く俺とルクシエラさんだ。気になって聞いてみると。

「うん。ファルマが水性魔物に『第一火炎魔法（フレイム）』を撃ってほぼ無効化されて泣きついてきた時の記憶」

ガンツと俺は円卓に頭をぶつけた。

「何時の話だよ!! 突然人の黒歴史を掘り返すな!!」

「僕も何年前かなんて覚えてないよ。でもお陰で、諦めなくて済んだ」
ドライブは嬉しそうにニコニコ笑っていた。

「あのとき、あの子は、ドライブが願う限りこの世界ではなんでもできる」とおっしゃってましたわ。あとは「頑張つて応える」とも」

ルクシエラさんの言葉に俺は目を丸くした。

「え、ドライブ何でも出来るの？ マジかよドンドン主人公になっていくな」

と、我ながら羨望と期待を込めた眼差しを送るが。

「なんて言葉で言われても、全然思ったとおりにならないからね？ 情報整理の過程で色々試してみたけど別に「存在しないモノ産み出す」とかそんなのは出来なかった。ユウさんの言葉の意味は僕にも判らないよ」

と言つてドライブはおれの視線を振り払った。

「……そもそも、ユウは何者？」

ここで、レンが至極真つ当な謎を提示する。

「それが判っていたらこうして話し合いなどしていませんわ」

ルクシエラさんがフツと少し楽しそうに苦笑する。あれは「面白い研究対象」を見つけた時のリアクションだ。

「情報の共有は以上です。後はティアアロ様、よろしく願います」

シジアンはふう、と一息ついて。丁寧な仕草で席に座った。最年少、一年生の八天導師というのが大きいのかもしれないが俺は娘の授業参観に来ている親みたいな気持ちで、「よく頑張った!!」なんて気持ちを持っていた。ホントなんなんだこの感覚は。

「ユウはこの世界を左右するだけの強大な可能性、謎を秘めている事だけは確かじゃ。そして、今までそれをカイが知っていたのかどうかは判らぬが、こうしてトーラの監視下で議題に挙げた以上カイにも気

取られた前提で行動する必要がある」

ティアロ先生の言葉に、うっと居心地が悪くなった。俺がトーラに監視されているせいで情報が筒抜けになってしまっているのが申し訳無い。

「ユウは最優先警護対象として常にイクスカルーシーを付けておく。そこで申し訳無いのじゃが、これまで近隣諸国に発生していたイーヴィルの討伐をイクス達に変わって八天導師の皆に手がけて貰いたい」

そう言えば元々この八天導師はティアロ先生の弟子だけでは手が回らないイーヴィルの討伐や魔法悪用者の摘発などを補佐する目的で設立された事を思い出す。

「流石に、クラス3イーヴィルの討伐はワシ等や配下の教員達で行う。ドライズを中心として、中学年組の八天導師にはクラス2のイーヴィル討伐を要請しようと考えて居る」

「第四の賢者」カイのせいで新たに「クラス4」という新たななくくりが生まれてしまったが。本来のイーヴィルの階級分けは三つ。

クラス1は4学年以上の学生が実習兼地域貢献で討伐する、イタズラ程度の被害しか起こさない小物。クラス2は主に6年生が対応する人間社会における軽犯罪程度の被害を起こしうる存在。そしてクラス3は基本的に教員やその地域の自警魔法団、年齢に対して例外的な戦力を持つティアロ様直属の弟子であるルクシエラさん達が対応する「災害」規模の被害を出すイーヴィルだ。

俺達は四年生なので本来戦うのはクラス1が適正なのだが「八天導師」として特別な戦力として見いだされている為クラス2の討伐を引き受けて欲しい、との事である。

「勿論、引き受けさせていただきます」

ドライズは迷い無く答えた。流石主人公だ。

「……特別労働手当」

レンがぼそつと言うと。

「無論出す」

とティアロ先生が即座に答え、

「……百体でも倒してみせる!!」

レンは目をキラキラさせて、今まで見せたことの無いような嬉しき満開の笑顔を作った。

魔法陣の開発に、そのアイテム化、その際の材料費は共同開発と言う事でレンも少なからず負担している。魔法陣の研究が大好きなレンにとって追加報酬というのはそれだけ魅力的なのだろう。

「流石に一人は不安なんですけど相方は付きますよね?」

俺は不安を込めて問いかけるが。

「判っておる。基本的には2人以上のチームを組んで貰うつもりじゃ。ここでこの学園最高戦力である“八天導師”に無茶をさせて何かあつては“第四の賢者”カイとの戦いにも支障がでるからもう。希望があれば“八天導師”外からの救援も認める。言うまでも無いがこの任務の危険性を十分に説明した上で了承を得るように」

つまりクラスメイトも一緒に戦って良いとの事だ。

良かった。それならこっちはチート級戦略兵器並みの戦闘力を持つナギさんを誘える。彼女と同じくらい強いマナトも居る。二人とも、この事情を聞いて断るような人柄でも無いし一安心だ。

円卓の上に置いてあつた飲み物を一気に飲み干して、付け加えるようにシジアンが再び口を開いた。

「事件収束から一ヶ月が経過しようとしています、現時点で“第四の賢者”側からの目立った動きはありません。事件を経て手に入れたデータの解析、研究などを行っている可能性が高いです」

そして、ティアロ先生が続ける。

「あくまで、一時ではあるが向こうも手が離せない状況にあると見た。この束の間の平穏を維持しつつ、次の出方を探って行きたい。当然、この期間がブラフである可能性も考えられる。ワシからはただ頭を下げる事と対価を与える事しかできぬが皆、学園を守る為に尽力して欲しい」

と、ティアロ先生は立ち上がり、深々と頭を下げた。

「はいっ任せて下さい!! この学園は僕も大好きなんです、絶対守つて見せますー!」

俺達、他の八天導師を代表するように。

ドライズは主人公らしく頼もしい返事をし、俺達は同調するように領いて今日の会議は幕を下ろした。



会議が終わった後、三賢者とシジアン、イクリップス、アイルが部屋に残って居た。

会議中、最初に謝罪をして以降一切口を挟まなかったアイルが長くぶりに口を開く。

「なあ、ティル爺。ホントにあの事は伝えなくて良かったのかー？」
アイルの言葉にティアロではなくイクリップスが応えた。

「混乱を招くだけだ。今はまだ、知っている者だけが知っていれば良い」

続いて、シジアンもまた、

「はい。ただでさえ『第四の賢者』の騒動とその対応で皆さん苦労なされています。その上で『この世界の真実』に関する情報まで共有するのは少々リスクを伴うかと。我々は大丈夫でしたが人によつては己のアイデンティティに苦しむ可能性があります」

シジアンは顔色を変えずにそう言ったが、

「シジアンちゃん、完全にいファルマくんの事言ってるよねえ」

と、ジンに指摘されて頬を染め、視線を泳がせた。

「と、言う訳じゃ。アイル。お主がイーヴィルとなった事で知ったー
ーいや、『思い出した』事実はまだ、胸の中に秘めていてくれ」

ティアロがそうなだめるとアイルは。

「ティル爺がそう言うなら。……俺も、今回の失態した分を取り戻さねーとな！」

とアイルは気合いを入れ直し、校長室を後にした。

108話 ドライズのモノでもねえよツ!!!

「やああああっとおわったああああ!!」

俺は背筋を逸らすように伸ばし万歳をして叫んだ。

「お疲れ様だね、ハル君!」

アリスは手元でさきやかにパチパチ拍手してくれる。

「お茶を煎れました。よろおしければお茶菓子と共に、どうぞ」

シジアンは俺が好きなお茶と苦いお茶に合う濃厚な甘みを持った茶菓子を出してくれた。

「さんきゅーシジアン」

甘いあまーいお菓子を口に含んで。そのねっとりとした甘みと口腔から鼻に抜ける穏やかな風味を楽しみ、少しだけ苦いお茶を飲む。

「あー生き返る……」

甘みと苦みのハーモニーが疲れを癒やしてくれた。

「……納品確認。よく頑張ってくれた。ありがとう」

ふと、部室の隅で落書きのように魔法陣を描きながら待っていたレンがいつの間にか俺の制作したアイテムを一つ一つ精査しており、頷いている。

「お、おう……」

俺が少しだけ戸惑いを見せると、レンはいつもの無表情のまま首を傾げた。

「……何?」

「え、あ、いや、なんか、レンが褒めてくれるなんて珍しいなって」

言った後から割と失礼な発言であった事に気付くが、既にレンは僅かに眉間に皺をよせていた。

「……失礼な」

「ご、ごめんごめん! なんていうか、俺達お互い無茶ぶりしあって当然みたいな流れができてたからつい」

きっかけは俺が『フェア・クリスタル』の魔法陣制作を依頼した時。アレを契機にレンからも俺に数日以内の納品依頼をふっかけてくる事も、また俺から数日以内の無茶ぶり注文する事が当たり前になって

きて、お互い前回の納品が次回の報酬みたいな状況が続いていた。

「……魔法陣は描いてるだけじゃ意味無い。だから。私の魔法陣使ってくれるの、いつだって感謝してる」

レンは珍しく判りやすく照れた様子で、少し目を逸らしながらそう言った。

「そ、そんな改まってお礼を言われると……照れるんだけど」

と、俺まで照れくさくなってレンから視線を逸らし。目線を逸らした先で——何故かアリスが頬を膨らませていた。

「え、アリス？　どうかした？」

「べつつにいー？　何でも無いけどね？」

明らかに含みを持って返されるが……。アリスはイーヴルになつたせいで俺に偽りの恋心を抱いている。嫉妬心を刺激してしまったのだろうか。

アリスに根付いてしまった偽りの恋心、なんとかしなくちゃとずっと思ってるけど具体的な方法が浮かばないまま時間ばかりが過ぎている気がする。

が、それはそれとして。

俺とレンの関係はまた別だ。自分で言うのもんじゃないかもしれないけれど、嫉妬される感じじゃない。俺はレンを恋愛対象として見てないし、レンだって同じだろう。

確認するために。いつそのこと本人に聞いてみる。

「なあ、レン。ぶしつけな質問なんだけどいいか？」

レンは逸らしていた目線をこちらに戻し、首を傾げた。

俺はそれを、了承の動作だと認識して、問う。

「俺の事、異性として何点だと思ってる？」

「なっ、ハル君突然何聞いて——」

突然の言葉にアリスの身体がガタツと跳ねるが、それとほぼ同時に。

「0点」

喋る前に一拍おく癖のあるあのレンがノータイムで答えるものだから、

「レンちゃんそれは流石に辛辣じゃないかなっ!？」

「あ、思ってたより高かった」

「0点で高い!? ハル君マイナス想定だったの!？」

アリスは忙しそうに俺とレンの顔を見比べていた。

「この2人はそう言う方々ですよ、アリシアさん」

シジアンが落ち着けと言わんばかりにアリスの前にもお茶とお茶菓子を出しつつ言う。

「……ビジネスパートナーとしては信頼してるけど、異性としてはちよつと」

レンが申し訳なさそうに、けれどマジで無理そうな虚無の目をして言うも。

「まあ、仕事仲間としてだけでも信頼されてるだけ嬉しいよ」

思って居たより点数が高かった俺としては素直に思った言葉を返した。

そして、レンの視線がアリスへ向いて。

「……だから、特に心配しなくていい」

と、少しだけ口の端を伸ばして言った。アレはレンなりの笑顔だ。

「な、し、心配ってなんのことかな!？」

アリスは顔を赤く染めて、逃げるようにお茶と茶菓子を口に突っ込んでいく。

「……泥棒猫にはならない」

「ど、泥棒も何もハル君は誰のモノでも無いからね?」

飲み干したお茶のカップを、そつとややコースターからズレた位置に置くアリス。あからさまに動揺してるなあ。

するとそこでレンは不思議そうに、

「……ん? 誰のモノでも無い? 同志では無かった?」
と零し。

次の瞬間、特大の爆弾を落としてきた。

「……ファルマはドライズのモノ。蜜月の関係」

「ドライズのモノでもねえよツ!!？」

俺の全身全霊の否定も、レンには届かない。

「……照れ隠し」

「違えよ!？」

更に、今度はアリスが今にも泣き出しそうな様子で、

「ハル君、やっぱりドライズ君がイイの……?」

とうるうるした瞳を向けて、

「だから違いますってば!？」

と、俺は必死に弁明した。

「みなさんおかわりどうぞ」

シジアンは何も変わらぬ様子で、みんなのお茶を注ぎ足していく。

「同性愛を否定はしねえけどツ！俺はアリ——じ、女子が好きだよ!!」

切り込んだのは自分だったとはいえ話が思わぬ方向へ進んでいつている事に戸惑ってうっかり口を滑らせそうになった所をお茶を啜って誤魔化した。

が。アリスの耳がピクンと跳ねて、悲しげな表情を一転させる。

「い、今ハル君アリスって言おうと——」

「し、してないっ!!」

「……む。浮気は良くない」

「そもそもまだ誰とも付き合った事ねえよツ!!」

ただでさえ俺の失態のせいで拗れていたアリスとの関係だが、レンのせいで更に無駄に拗れてしまい事態の収拾までに小一時間ほどかかった——。

109話 今度こそ向き合う時が来たのだろうか

「……残念。噂は噂だった」

なんとか俺とドライブに意味深な関係はないとレンに理解して貰ったが何故残念勝手居るのかは理解出来ない。

「ていうか噂って何だよ」

「……四年に咲く『丹青の薔薇』」

「OK、碌な噂じゃねえ事だけはなんとなく判った」

俺は漫画とかゲームとかそれなりに嗜んでいるので『薔薇』の意味は理解している。そして丹青は——赤と青だ。

「一体誰が流したんだそんな噂……」

頭を抱えると、

「……我ながら良いセンスと思ったのに」

「お前かーいッ!!」

出所がすぐ側について思わずツッコんだ。

「噂もクソもマッチポンプだろそれ!!」

「……違う。噂は元々あった。『破滅の光』、『生ける天災』その弟子二人の信頼関係は全ての学年にある程度知れ渡っている。私は噂に名前を付けただけ」

ずずーっとお茶を飲みながらレンはいつもより口数多めで説明してくる。

「俺は初耳なんですけど!!」

「まあ、そういうのって当事者は意外と気付かなかつたりするよね……。でもハル君とドライブ君の噂、私だって知ってたからね?」

アリスは物憂げに言った。

「……ルクシエラさんは有名人。調べれば弟子が誰かなんてすぐ判る」

「ああ……そういえばルクシエラさんが勝手に俺の事公的文書に弟子として登録したってティアロ先生から聞いた気がする……」

「……ルクシエラさん自身がことある毎に弟子自慢で公言してるのも要因」

「ルクシエラさーんツ!!」

もう、詳しく言われなくてもあの人嬉しそうに誰彼構わずドライズや俺の自慢をしている姿がありありと浮かんでくる。

「……少しでも興味を持って調べてみれば。美少年、ドライズの顔が出てくる時点でそれなりの人数が釣れる」

「まああいつは顔立ちが整ってるから目立つよな……」

「……で、その片割れがこのファルマだから妄想が捗る」

「どういう事だつてばよ!?!」

この「ファルマ」ってどの俺だよ!!

「こちらがその証明写真になります」

スツと机の上に写真を一枚出すシジアン。そこには、

ムスツとした不機嫌そうな表情でポケットに手をつ込み空を見上げる赤髪短髪の姿が。

「俺、柄悪く無い!?!」

なんか、自分のめっちゃ不良っぽい写真が出回っている事に戦慄した。

「……? いつも通り」

「ハル君一人の時はこんな顔してるよね」

「先輩はさみしがり屋なので一人でいる時に表情に出てしまうのでしよう」

「嘘でしょ!?!」

今まで全く自覚が無かっただけに女子達に一斉指摘されて驚いてしまう。

そしてレンはお茶とお茶菓子を更に口に含み、十分味わって飲み込んだ後に。

「……優等生美少年と不良男子の凸凹コンビ。そんな二人が大親友。これはもう捗るしか無い」

と満足そうに微笑みを浮かべて言う。普段無表情の癖に。

「何が捗ってるのか、聞きたくないね……」

なんだか、そう呟くアリスの表情がどんどん曇っていつている気がする。

「ていうかこの写真何時、誰が撮ったんだよ!？」

「アングルの隠し撮りでしょうから、ルクシエラさんがプロの方に依頼したのでは?」

「写真のプロと隠し撮りのプロは訳が違うんだが!!」

ゾゾツと今になって悪寒を感じる。

「俺、トーラに見張られるよりずっと前からプライベートとか言う概念存在してなかったのかな……」

過ぎたことを騒ぎ立てても仕方が無い。ただただ呆然と俺は力なく呟いた。

そこへ、改めてレンが顎に手を当てて言う。

「……冷静に考えたらドライブとファルマが意味深なのは変わらな
い」

ピクツとアリスの肩が跳ねた。

「待って、レンちゃんそれどういう意味?」

声を震わせて、アリスがレンへと問いかける。どこか、焦りが感じられた。

「……未だ咲かずとも、その蕾みは尚も膨らんでいる。開花を待つのも、悪くは無い」

レンがまた余計な妄想を始めたところ。

「そんなもん咲——ツ」

俺が言おうとした否定の言葉を。

「そ、そんなの咲かせないからツ」

俺よりも先に、遮ったのは顔を真っ赤にして叫ぶアリスだった。

俺を含めて三人。みんなの視線が自然とアリスに集まる。

しばしの沈黙。レンの表情が僅かに変わった。探るような、試すような、少しだけ嫌らしい目つきになって、言う。

「……ドライブもファルマもフリーなのは事実。事の成り行き、部外者が止める権利は無い」

と挑発するように言う。部外者がありもしない未来を期待するのもおかしい”とやってやれたかったがレンは完全にアリスしか見ていない。俺が何を言っても聞く耳をもたなさそうだ。

そしてそんな事を言われたアリスは。

「ぶ、部外者じゃないもん」

小刻みに震えながら、頬を紅潮させ、目尻に涙を浮かべて、意を決したように言う。

「私は私の気持ちをハル君に伝える権利くらいあるもんツ!!」

俺は。止めようとした。

待ってくれ、それ以上言ったら引き返せなくなる。

でも。——気持ちを伝える事を止める権利なんて誰にもない。

「は、ハル君ツ！ 私、今でもハル君の事好きだよツ。だから、その、変な噂立つのが嫌なら、付き合っちゃわらないかな!？」

その気持ちは。偽物の筈だ。

受け入れてはいけないモノの筈だ。

だけど俺の全てを懸けて償うと決めた。

だから俺にはアリスが望むことを拒絶する権利なんて無い筈だ。

俺は——どうしたら良い？

「あ、アリス、落ち着けて。確かに変な噂されるのはいい気はしないけど、こんな場の勢いだけでそんな大事な事決める訳には——」

それは逃げの言葉だった。けれど。ここでまさかの人物が逃げ道を塞ぐ。

「この場だけの話では無いかと。アリシアさんの気持ちなら、先輩は誰よりも良く判っている筈です。今こそ、向き合う時が来たのでは？」

「シジアン!？」

突然俺の退路を断ったシジアンに困惑を隠せない。

え、俺今ひよつとして孤立無援なの？

「……やっぱり、そういう？ ふーん」

んで。着火元のレンはと言えばイタズラな笑みを浮かべてお茶菓子を食べている。今日のレンはいつも以上に本当に何を考えてるのか判らない!

「ハル君……迷惑、かな？」

アリスの潤んだ瞳に、俺は。

目を背けそうになって、だけど。

「——迷惑なんかじゃない。でも、やっぱり少しだけ時間をくれ」
俺は観念して、そう答えた、大きな葛藤と苦しみを抱きながら。
これは俺の罪。

シジアンの言う通りかも知れない。

今度こそ向き合う時が来たのだろう。

アリスの気持ちなんて、ずっと前から判っている。

——答えを、見つけなくてはいけない。

外伝109. 5話 相談、乗ろうか？

その日は平和だった。僕はいつも通り師匠の部屋のお掃除や、勉強に取り組んだりして、充実した学園生活を送っていて。束の間とはいえないものの日常が戻って来た喜びを噛みしめながら午後の自習時間を過ごしていた。

そして、部活動・自習時間終了の鐘が鳴る。

僕は大きく伸びをして、

「よし、夕飯の支度するか」

とノートを閉じてキッチンへと向かった。

そして料理を始めて少しして。

玄関の扉がゆっくり開かれる。

「おかえり、ファルマ。ごめんね、ご飯もう少し時間かかるかも」

気持ちの良い一日に興が乗ってしまい少し手間のかかるメニューにしてしまったせいだ。ふとそこで、気になる。

「って、今日は早かったね？」

最近のファルマは部活動が忙しいのか学園で指定されている部活動の時間が来ても、居残って作業をして日が暮れてから帰ってくる事が多かった。

それにしても、まだ夕暮れ。部活動が定刻通りに終わったという事か。

「ファルマ〜？」

僕の言葉に返事が無い事に不安を覚え、呼びかけるがやはり返事は無く。しかし重たい心配だけは近寄ってきて。キッチンを通り過ぎ二段ベッドの下段へと倒れるように飛び込んだ。

僕はびっくりしつつも、手元から目を離すわけにはいかない。

とりあえず様子を伺っていると、

「悪い、ドライズ。今日はあんまし喰えねえかも」

とだけ返ってきて。

「悩み事、か。了解」

僕は夕食の作業を途中で変更し日持ちのするように方針転換しな

がら答えた。

ファルマは強く思い悩んだ時、食欲が無くなり眠り込む癖がある。僕が夕食を作り終えるまで、ファルマはベッドに埋もれたままだった。

ファルマの夕食は一口程度により分けて残りを明日用に冷蔵庫に入れて。

僕達は静かな夕食を過ごす。

影が差す重たい表情でも一口だけは食事を摂って。

「美味しいな。いつもより凝ってる。何か良いことでもあつたのか？」

とファルマは下手くそな作り笑いを浮かべた。

「今日は一日、平和だったからね。久しぶりに戦いとか考えずに過ごせて、つい」

僕はそう答えつつ自分の食事をすすめる。

「そう、か。そう、だな。平和だからこそ、だよな——」

ファルマは少ない食事を早々に終えて、頭を抱え込んだ。

◇ ◇ ◇

「ごちそうさま」

しばらくして僕は食器を片付けて、洗浄する。

そして作業しながら、言ってみた。

「相談、乗ろうか？」

返事は遅い。ある程度の悩みならすぐに相談してくれるから、どうにも深刻な問題みたいだ。

「……俺が答えを出さなきゃ、見つけなきゃいけない問題なんだ」

随分と遅れて、そう返ってくる。僕は食器を洗浄しながら、答えた。

「でも、そのヒントや材料を見つける為に行動する事は許されるんじゃないかな」

食器洗浄を終えて。

僕は未だに食卓で頭を抱えるファルマの前に座って。

「僕は答えを与えない。ただ、君の言葉を聞いて、幾つか問いかけたリ、確認するだけ。それじゃダメ？」

と。思い悩む友人へと微笑みかけた。

数十秒の間を以て。

彼の重たい口が開かれる。

「本当に、醜くて情けない話だ。それでも、聞いてくれるか？」

「うん」

どんな話だつて受け止めるに決まってるのに。そんな前置きなんて必要無いよ。なんて言葉は飲み込む。僕はただ、続くファルマに耳を傾けた。

「アリスに、告白された」

僕は一瞬拍子抜けする。アリシアさんがファルマに好意を持っている事なんて、この学校に転入してきた時から誰が見ても明らかだ。それは好意を向けられている本人であるファルマこそ一番よくわかってる筈。告白なんて時間の問題だっただろう。

ならばこそ。

「どうしてそんなに苦しそうなんだい？」

また、重たい沈黙があった。

けれど意を決したように。

「――俺は、罪を犯したんだ」

ファルマはそう、口にする。僕は続く彼の独白へただ静かに耳を傾けた。

学園に転入してきたアリシアさんはファルマの「悪しき願い」が顕現したイーヴィルに取り憑かれていた事。そのせいでアリシアさんにファルマへの偽りの恋心を植え付けてしまったこと。

イーヴィルとしての力を消し去って尚、その心が変わる事は無かった事。

ファルマとアリシアさんが突然イーヴィルに襲われて、救急搬送されたあの日。裏で何があったのかを。ファルマは漸く、教えてくれた。

「アリスは、俺に悪意は無かったと許してくれた。でも、俺自身は俺を許せない。アリスが俺を振った過去は事実だ。だから、アリスに残ってしまった恋心が偽物なのは明らかかな筈だ。――俺は、人の心を。人生を狂わせてしまったんだ。例えばそれが、無意識であったとしても」

それが、ファルマの抱える罪――

「イーヴィルは人々が抑圧してきた『悪しき願い』が歪み、よどみ、勝手に魔物になってしまったものだって、この前の会議で言ってたよね」

「ああ。トーラからは、そう聞いた」

「誰だって後ろめたい心は持っているものだ。僕にだって醜い願望や欲求はある。それを無くす事なんてできない。アリシアさんは言ったんでしょ？ ファルマの『悪しき願い』がイーヴィルになったのも、アリシアさんが依り代になったのも、全部偶然――ううん」

いつだったか、異邦の不審者達が言い始め。ティアロ様やイクリップスさん達が呼ぶようになった。僕は『世界の中心』だと。ファルマの話ではファルマの『悪しき願い』が叶ってしまったのは『世界の中心』にたまたま近かったから。

それなら――

「『世界の中心』である僕に近かったから、そのせいだっていうのなら、寧ろ悪いのは僕じゃないかな？」

「そんな筈あるか！ お前が悪い訳がない！ お前は、何もしてないだろ!？」

僕の言葉を、ファルマは喰い気味に否定する。

「その台詞を、そっくりそのままお返しするよ。君は何もしていないんだから、悪く無い」

僕も即座に切り返した。ファルマは一瞬納得しかけて、けれど。

「でも、俺は『悪しき願い』を――醜い願望を捨てきれなかった。抱え込んでいたせいでこうなったんだ。過去を清算して、前を向けなかった俺に落ち度が全く無かっただなんて思えない」

「……そっか」

ファルマがどうやったって自分を許せないくらいに思い詰めてる事は判った。なら、その気持ちはもうテコでも動かないだろう。ファルマはそう言うヤツだ。

「それじゃあ、もう一つ聞かせて。君は今『何を悩んでいる』んだい？」

その問いかけへの答えは早かった。

「何をもってそんなの、アリスの告白を受け入れるかどうか」に決まってるじゃないか」

「うん。だから。どうしてその答えに迷っているのかを教えて欲しいんだ」

僕に言われて、ファルマは自分自身と向き合うように一度目をつむる。

暫くして、その心の内を言葉にしてくれた。

「俺は、アリスをあんな事件に巻き込んでしまつて後悔している。アリスが許してくれるって言つても。ドライブが俺は悪く無いって言つてくれても。俺は俺を許せない」

「うん」

「だから、俺は俺に出来る全てを懸けて、アリスに償い続けると決めた。アリスが望むことを受け入れ、アリスを脅かすモノから守る。それが、アリスの人生を変えてしまった者の責任だと思つてる」

「そつか。でも、それなら——」

「ああ。俺は、アリスの気持ちに答えなくちゃいけない。アリスが俺を未だに好きだと言うのなら、アリスの全てを受け入れるのが責任だ。というのなら、アリスの求めに応えるべきだと、思う」

「そうだね。でも、君は素直に受け入れる事ができない。何故なら君とアリシアさんが付き合う事は——ある日君が抱いた、悪しき願い。そのものだから」

僕の推理を肯定するようにファルマは大きく頷いた。

「アリスの求めに応じて、付き合つたとして。結局それは、俺が得をしている。だけじゃないか？ 償いだとか、責任だとかどうこう言つておいて、結果だけみれば俺にとって都合の良い状況になるんじゃないか？」

ファルマが思い悩む理由が、判つた。

ファルマはアリシアさんへの償いの為に、彼女の心を尊重したい。でもアリシアさんと付き合う事はファルマの「悪しき願い」が叶う事になる。自分が得をしてしまつては、償いにならないと、そう思い

悩んでいるんだ。

「……もう一つ大事な事を確認したいな。いい？」

「答えるよ、なんでも」

僕はこの一件で最も大切な事を、ファルマに聞いた。

「君は今でもアリシアさんの事が好きなのかい？」

返事は早かった。

「好きだからこそ、これだけ悩んでるんだっ!!」

力強く言い放たれる言葉。僕としては、もうそれが答えなんだと思うんだけど。でも、ファルマ自身が言ったようにその答えにはファルマが気付かなければいけない。僕は確認と質問しかしない。

「アリシアさんは、いつまでに返事が欲しいって言ってたの？」

「いつまでだって待ってるって。でも、言葉の通り何時までも待たせる訳にはいかない。それだけ、アリスの時間を奪ってしまう事になる。結論は、急ぎたい……」

「——判った」

僕はそう言つて、席から立った。

「何が判つたんだ、ドライブス？」

ファルマが疑問に顔を上げるので、答える。

「時間が必要なんだろ？ 君の心の整理をする時間が。それも、できるだけ多く、そして早く。なら暫くは。僕はその時間を作る手伝いをするよ」

「手伝いって、具体的になんだよ」

「半分はいつも通り。ご飯を作つてあげたり、部屋の掃除をしてあげたり。君が自分の事に集中できる様に環境を整える。もう半分は——単位や八天導師としての世間体があるからサボらせる事まではできないけれど、ノートとかは君用に写しておいてあげるし先生にも根回ししておくからさ。君はその間、ずっと自分の問題と向き合えば良い。八天導師としての任務も引き受けておくよ」

「んなっ!? そりゃありがたいけど、無関係のお前にそこまで負担をかける訳には——」

“無関係”というファルマの言葉を僕は断つた。

「聞く限り無関係なんかじゃ無いよ。君は悪く無いって言ったけど、僕が“世界の中心”である事もこの一件に関わっているんなら、僕だって僕に出来る限りの事をしたって思う」

「ドライブ……」

「答えを見つけるのは君じゃなきゃいけない。だから、好きだけ悩んで、迷って良いんだよ。そうじゃなきゃ、誰よりも君自身が納得できないうから」

そう言っつて、僕は二段ベットの梯子を登る。

「さ、そうと決まれば今日は早く寝ちやおう！　まずはゆっくり休んで、それから考え直せばいいさ」

と言っつて僕は部屋の電気を常夜灯に変えた。食卓に居座るファルマをベッドへ誘導するために。

「……いつもありがとな」

ファルマはそう呟いて、二段ベットの下に入っつていった。

110話 ——あの頃のハル君も、こんな気持ちだったのかな

その日、部活動の時間が終わるとハル君はいつもより早く寮へ帰って行った。逃げるように、なんて言い方は失礼だ。凄く重たい足取りで、凄く思い詰めた表情で、悩み、頭を抱え続けていたから。

私はハル君が居なくなった部室で、机に突っ伏していた。

「どうして、どうして……こんな筈じゃ無かったのに!!」

悔やんでも悔やみきれない。

「もつとハル君の気持ちが悪く落ちてから……もつとじっくり、少しずつって思ってた筈だったのに、何で私は、あんな事言っちゃったのかな……」

後悔ばかり口にする私に、気まずそうな声が降ってきた。

「……ごめん。そんなに深刻な話だと思つて無かつた」

「ううん。いいの。いつかは向き合えないといけない問題だつていうのは判つてたから。私もごめんね。レンちゃんを巻き込んでしまつて……」

「……口は災いの元。私、初めてかもしれない。反省、してる」

と、レンちゃんも悲しげに言つた。

レンちゃんに悪気は無かつた。ハル君とドライブ君が仲良しでも、私がハル君を好きな事は一生懸命アピールしてきたから、学年の中ではとつくに付き合つてるモノとして考えられていたみたい。

その上で、レンちゃんは男の子同士の恋愛が好きだから実際の関係性なんてお構いなく妄想してたんだつて。

『浮気は良くない』なんて言葉も、ホントは付き合つてると思つていた私とハル君をからかいたかっただけ。その後私を煽るような事を言つたのはいぎ蓋を開けてみたらまだ付き合つて無かつた事に驚いて、あれだけ判りやすく両思いなんだからさっさと付き合えば良いのに”、なんて軽く背中を押すつもりで言つたみたい。

……つて、部長さんがレンちゃんとお話して、説明してくれた。

同時に、私のハル君の関係——昔振った幼なじみだった事とイーヴイルになって恋をした事。そのあと改めてハル君の事を好きになつた事を、八天導師だけの秘密としてシジアンちゃんが説明してくれた。

「……空想の恋愛は簡単で楽しいけど。現実はとても難しい」

一連の流れを聞いて、レンちゃんはそう言っていた。

「ですが。やや時期尚早であつた感はあるものいつかはハッキリさせないといけない問題でした。今後『第四の賢者』が活動を活発にすれば色恋沙汰所ではなくなります。決して悪いタイミングでは無かつたとボクは判断しました」

シジアンちゃんとしては『第四の賢者』さんの動向が落ち着いている今のうちに解決するべきだと思つて居るみたいだった。

「だとしても今日じゃ無かつたと思う……。あんな勢い任せの、しかも、ドライズ君との噂を盾にした告白なんて、全然、ダメ……」

もつと準備をして、ハル君の誤解を解いて、雰囲気を作つて。

そうして、告白しようつて思つたのに。口が、身体が勝手に動いてしまった。やっぱり私は、私が思っている以上に焦つていたんだ……。

この学園は女子生徒の割合の方が多い。だから仕方の無いこと。学園生活をする上で、ハル君が他の女の子と達と行動をする事が多くなるのも当たり前なんだ。

ルクシエラさん、ナギちゃん、レンちゃん、ハルカちゃんに……私の味方をしてはくれてるけど部長さん。最近のハル君はいつも女の子に囲まれてるから、だから、心のどこかで焦りが少しずつ積もつていたんだ。みんな、ただの仲間や友達。お互い全然そんな意識してないって頭では判っていた筈なのに、それでも。

やっぱり不安だった。

ハル君は、まだ私の事を好きでいてくれるのだろうか？

私のせいで悩んで、苦しんで、嫌気が差してないのだろうか？

他の女の子に、移り気してないだろうか？

そんな気持ちは拭えなかつた。

だから。

『俺はアリ——じ、女子が好きだよ!!』

その言葉に思わず舞い上がってしまったんだ。

——バカだよ。言いかけただけ、その先に続いた言葉が本当に私の名前だった確証なんて無いのに。

そしてハル君は時間が欲しいって言った。私は「いつまでも待ってる」と答えた。

今日はひとまずそれで丸く収まったけど……。

でも。

「怖い。怖いよ。ハル君の事だから、悩めば悩むほど自分を責める筈。ハル君はまだ私の本当の気持ちに気付いてない。『自分にそんな資格は無い』とか『君の心を歪めてしまつてごめん』とか言つて、きつと振られちゃう……」

想像しただけで胸が苦しくなる。

「……私、どうしよう。こうなった原因だから、何かしたい。でも、部外者が口出しする問題でも無さそう」

レンちゃんもオロオロした様子で困つてるみたい。

「ここまで来たら当人達の問題です。ボク達ができるのは見守るか、少しばかり助言するかくらいでしょう」

シジアンちゃんがレンちゃんにそう語りかけているのが聞こえた。

「……助言」

レンちゃんがそう言つて、悩むようにうなる。

そして数十秒後、

「……難しい問題。いつでも相談、のるから」

と、レンちゃんはちよこつとだけ恥ずかしそうに視線を逸らして。

「……良ければ、連絡先——頂戴」

と、携帯端末を差し出してきた。

「うん、ありがとう。レンちゃん」

私は笑顔を作つて、レンちゃんと連絡先を交換した

◇ ◇ ◇

次の日。私は日が昇り始めてすぐに寮を出た。いつもはもう少し

だけ遅く出て、ハル君が起きてくるのをのんびり玄関で待つんだけど……。

今日ばかりは、そんな勇気が湧かなかった。

昨日の今日の話、ハル君はきつと、ずっと悩み続けてる筈。そしてそれは私も同じ。そんな状態でハル君にどんな顔をして会えばいいのか判らなかつたから。

告白をするってこんなに怖いことだったなんて知らなかつた。

「——あの頃のハル君も、こんな気持ちだつたのかな」

昔、ハル君が私に告白をして。私はそれを断つた後。ハル君は私と目を合わせてくれなくなつて口も聞いてくれなくなつた。最初は戸惑つて、最後には、振つた私を恨んでるモノだと思つて私の方からもハル君を避けるようになったけど。イーヴィルになつた時、ハル君の心が、後悔が流れ込んで来て。ハル君に負けたとき、ハル君が何度も後悔を言葉にして謝つてくれて。全部誤解だと気がついた。

いつだつて他人の本当の気持ちなんて判らない。

だから、怖くなつてしまふんだ。

「私、悪い子だ……。ハル君が謝つてくれた事、後悔していた事を今度は私がハル君にしようとしてる……」

罪悪感がのしかかる。

でも、今は、今はまだ来るべきタイミングを待つべきだと思つて。

だから、まずはお互いゆっくり、心の整理が付くまで待つて——それで、落ち着いてきたタイミング且つハル君が私を振る直前に行動する。

そう決めた。

いつも通りハル君と学校に登校出来ないのは寂しいし、部活動も暫くは気まずくて顔も出せないかもしれない。

でも、最後の最後で、絶対に向き合う！　そこが唯一の逆転のチャンス、それをただ待つんだ——

そう思つて寮の玄関に出た時。

「おはよう、アリス。待つてたよ」

あまりにも早すぎる朝、他には誰も居ない玄関に一人。

ハル君はいつもの優しい笑顔を私に向けてくれた。

111話 違うもんツ!!

おはよう、なんて俺には合っていない言葉だったかもしれない。何せ
“一睡もしていない”のだから。

「なっ、えっ、」

アリスは驚きのあまりにポテッと学生鞆を落とす。俺はそれを拾い上げて、

「今度は逃げないって決めたから。でも、アリスはきつとあの頃の俺と同じみたい、俺が怖くなるかもしれないって思ったから。待ってたよ」

と鞆をアリスに差し出す。

すると。アリスは――

「……うう、ぐすっ」

急に涙ぐんで。

「あ、アリス!？」

俺は戸惑った。やっぱり、朝っぱらから迷惑だっただろうか？ アリスだってまだ心の整理が付いていなかったのだろう。だけど、俺はこの問題を先延ばしにしたく無かった。

「ご、ごめん。困らせちゃったな……」

思わず逸らしそうになる目線を必死にアリスに向け続ける。文字通り一晩中俺が悩んでまず最初に出した一つ目の答え。

“アリスから目を背けない”。昨日の今日の話だ。気まずいし、正直俺はアリスの顔を見るだけでも辛い。アリスに告白なんてさせてしまった事、過去の清算が未だに出来ない事、その現実を突きつけられるから。でもその苦しさから目を逸らすのは過去の繰り返しにしかないから。

だから、まずはアリスと向き合う事を決めた。

「……困って、ない、からね。びっくりした、だけ」

アリスは俯き、涙を拭いながら、学生鞆を受け取った。

「――そっか」

アリスが落ち着くのを待つ。やがて、

「ありがとう、ハル君」

涙を浮かべながら、アリスはそう言つて笑顔を作る。いつも通りとはいかないけれど、何か胸のつかえが取れたような自然な笑顔だ。そんなアリスの様子を見て、改めて決心する。

「アリス——〃大事な話がしたい〃」

「!!」

こうやって切り出すのも、もう三度目になるか。

アリスの笑顔は崩れ、驚きに目を見開いた。ふるふると唇が震えている。

「誰にも邪魔されないとここで、な」

アリスは半歩引き下がり、唇を噛みしめる。心理学者でなくても怯えているのが一目瞭然だった。その姿を見るだけで、罪悪感がこみ上げってくる。

けれど、俺だつて引き下がる訳にはいかない。

向き合おうと、清算すると決めただ。うやむやには出来ない。

「君をこれ以上傷つけたくない。だから、どうしても聞いて欲しい」

辛そうなアリスの姿なんて見てられない。その原因が俺自身なんだから尚更目を背けたくもなる。でも俺は必死にアリスから視線を外さずに、言葉を投げかけた。

アリスは一度俯き、また顔を上げた時には今にも泣き出しそうな顔を浮かべていた。

「——いいよ」

それでもアリスは、頷いてくれる。アリスの強さに、俺は感服するしか無い。

「なら、部室にでも行こうか。文化系棟この時間なら邪魔は入らないだろ」

俺はそう言つて、校舎の方へ行こうとした。

その時。

暖かい感触が、左手を包んだ。

思わず振り向けば、

「手、繋いじゃ——だめ？」

と、アリスが上目遣いで懇願している。その姿はいじらしく、可愛らしい。ドクンと胸が一瞬高鳴った。けれど、そんな気持ちを抱くほどに自分自身への憎悪が増していく。

表情には出していないつもりだった。実際は判らない。昏い心を必死に握りつぶして、俺は答える。

「アリスが、望むなら」

そうして俺達はまだ授業も遠い明け方に “マジッククラフト工房” へと向かった。

◇ ◇ ◇

部室にて、俺はティーカップを二つ並べ。

「ごめん、初めて煎れるから美味しくないかも知れないけど」

アリスと向かい合わせてに座る。

するとアリスは、

「いただきます」

とすぐにカップを手に取り、熱そうにフーフー息を吹きかけながら一口含んで。

「……えへへ。ちよつと濃いよ、ハル君」

と、笑った。

「そ、そうか？ ごめん」

自分でも飲んでみたが自分としては丁度良い塩梅に感じたので少し反省する。

お茶を飲んでから、少しの間無言が続いた。

俺はどう話を切りだろうか悩んでいたから。きっと、俺の言葉を聞けばアリスは傷つく。できる限り穏便に、今度こそ後悔しないような終わらせ方をしたい。

そう頭を抱えていたら。

「——昨日の、お返事だよね？」

アリスの方から、核心に触れて来た。テーブルの下で、俺は握りこぶしを強く握りしめる。結局、後手じゃないか。アリスに気を遣わせ

てどうする。

「ああ」

これ以上どれだけアリスに迷惑をかければ気が済むんだ？

意を決して、俺は言った。

「君の気持ちに、応える事はできない。君が抱くその感情が、俺が植え付けてしまった『偽物の恋心』だから」

イーヴィルに取り憑かれる前のアリスの事は判らない。けれどあのイーヴィル化のせいでアリスが俺に恋心を抱いてしまった事や、イーヴィルを倒して尚その気持ちが残り続けてしまった事を俺はずっと後悔していた。

「アリスはあの時、『感情は揺れ動いていくモノだからいつか俺を好きじゃ無くなる事があるかもしれない』と言った。でも、そんな日は訪れないまま、昨日のような事態を招いてしまった。俺がアリスに植え付けてしまった『呪い』は、俺が思っ居た以上に根深いものだったのだろう」

続く言葉の先に見える未来が、怖くて仕方なかった。けれど、これは俺が果たすべき責務。俺はなけなしの勇気を振り絞って。

「だから——ッ」

だからこそ、受け入れるわけにはいかない。好きな人に振られるのは——怖い。その怖さは俺だってよくわかつている。きつとアリスは深く傷つく。アリスは優しいから、俺を恨んだり憎んだりはしないかもしれない。でももう、今までの関係性は終わりを迎えるだろう。それでも。ねじ曲がった感情を押し通す事なんてさせてはいけない。

ここでその場凌ぎにアリスと付き合ってしまったえばそれは結局俺の『悪しき願い』だ！

そんなの、認めるわけにはいかない。

そんな気持ちを言葉にしようとしたのに。

「違うもんッ!!」

ドンツと強く机が叩かれ。俺が言葉を紡ぐより前に、アリスが珍しく声を張り上げて遮ってしまった。まだまだ残っ居た紅茶が僅

かばかりに飛沫を上げる。

「な、アリス、俺の話を聞いてくれ！」

俺は思わずそう言うが、

「ハル君こそ、私の話を聞いてッ」

アリスは机から身を乗り出して、ただただ悲しそうに涙を浮かべている。

俺は遂に言葉を詰まらせてしまい続く言葉を待つばかりだった。

112話 ハル君——大好きだよ

人の居ない部室棟全体に響くかと思うほど力強く、アリスは言う。「偽物」なんかじゃない——「呪い」なんかじゃないッ！ 私は、本当にハル君の事が好きなんだからねッ!!」

迷いの無いあまりにも真っ直ぐなその言葉に、戸惑うばかりだ。

「そ、そんな筈無いだろ!? 本当のアリスは確かに俺を振ったじゃないか! そしてこの学校で出会った後も、俺は何度も、何度もアリスに迷惑をかけてばかりで、アリスは優しいから許してくれるだけで、俺は君にいくら謝ったって許され無いくらいの罪を背負っているのに……ッ!!」

なのに。アリスの気持ちが「本物」の筈が無い。俺はそう考えて居た。

でも——

涙を振り切ってアリスの表情が変わる。悲愴的なものでなく、それは俺を捉える真剣で真摯な表情。眉間に僅かな皺を寄せつつも、済んだ瞳の視線が俺を貫いて居た。

「ハル君。私の気持ちを決めるのは、私だからね? いくらハル君でも、勝手に私の気持ちを決めつけないで。私が好きだって言ってるんなら、それが私の本当の気持ちだからねッ!」

アリスは自分の心をそのまま取りだそうとでもしているかのように自分の胸に手を当てて、

「あれから。ハル君が私の翼を消してくれてから——もう随分経つたよね? それでも私の気持ちは変わらなかったからね。それどころか、ずっとずっと、ハル君の事好きになったからね」

アリスはいつになく声を張り上げて主張する。

「その気持ちを、私の心を、「偽物」だなんて決めつけることは、例えばハル君であっても許さないから……ッ!!」

俺は、言葉を失った。

どうして?

迷惑しかかけてないと思って居たのに。

「『偽物』……じゃない？ 信じ、られないよ……」

漸く絞り出せた言葉は、あまりにも弱々しかった。

アリスにはお世話になってばかりで。トーラとの戦いだって、命を救われて、心配させて、そのお詫びだって出来てないのに。

アリスはどうしてそこまで、力強く言えるんだ？

俺なんかの事を——好きだなんて。

アリスは俺を諭すように、続ける。

「ハル君、私の事……『第四の賢者』から守ってくれたよね？」

「アレは、人として、八天導師として当たり前前の事をしただけで俺じゃ無くてそうした筈——」

「でも、助けに来てくれたのはハル君だったツ!!」

今日のアリスは、いつもと違った。

不思議な感覚だ。アリスがこんな感情を露わに訴えかけてくるなんて。

普段——いいや、昔から怒ったりする事なんて全然見た事も無かったのに。

だけど、そんな姿を見せてまで訴えるからこそ、その言葉の一つ一つが俺の胸を貫いていく。

「他に誰も居なかった。側に居てくれたのは。私を庇ってくれたのは、命を懸けて守ってくれたのは——ハル君だけだった……それだけじゃ、ダメなのかな？」

他の誰でも良かったのかも知れない。たまたま俺が、あの場に駆けつけただけで。

そうだとしても——

「あの時からハル君は間違い無く、私にとって『特別』な人になった……」

ちっぽけで何処にでもあるただの石ころでしかない俺を。アリスもまた、『特別』だって拾い上げてくれたのか……？

「ごめんね、ハル君……」

そしてアリスは俺から目を逸らして唇を噛んだ。

「なんでアリスが謝る必要があるんだ……？」

俺はもう、俺の中の価値観や感情がバキバキに破壊されて呆然とするばかりだった。

アリスは自分の胸に当てていた手を机に下ろして。

「私、判ってたんだ。私がハル君の事好きだって伝えれば伝えるほどに、ハル君が苦しんでる事。後悔してる事。それでもね、ハル君の周りには女の子が多かったからそうやって牽制していいいと落ち着けなかった。本当は真っ先に、私の気持ちを伝えるべきだったんだ……」

悔しそうに、握り絞める。小さくて、白い壊れそうなくらいに綺麗な手が。ふるふると震えているのは見えていて痛ましかった。

「そんなの……君が謝る必要なんて何処にも無い……」

今までアリスが見せてきた好意も、全部、全部、偽物じゃなかった？

「ハル君が私の事で悩んでる事、気に病んでること、判ってたから。ハル君の気持ちの整理が付くまでは、そうやって小さな積み重ねをしていこうって。いつかハル君の罪悪感が薄れてきた時の為にとって打算的に考えてた。そう、考えてたのに——昨日はそんなの全部忘れちゃって、気がついたら口が勝手に動いてた」

ポタポタとアリスの涙が机に滴り落ちる。

罪を犯したのは俺の方だった筈だ。

なのになんでアリスが悔やんでいる？

アリスを——泣かせている……ッ!?

頭の中がぐちゃぐちゃになって。

“偽物の恋心”とか “アリスの本当の気持ち”とか、訳が判らなくなっ

て。身体は固まるし、言葉も失うけれど。

目の前で涙を滴らせる好きな女の子の姿が、一つだけ俺に行動を起

こさせた。

「やっぱり、謝るのは俺の方だ」

ハンカチをマテリアライズして。俺もまた、机から身を乗り出して俺はアリスの頬を拭った。

そして拭い終わって離れようとした俺の手をアリスはパツと取り。すがるように頬に押し当てて。

ドクン、と心臓が一つなり、自分の顔が熱くなっていくのを感じた。「ぐすつ、ありがとう。ハル君……」

また、アリスの目尻から涙がこぼれる。俺はもう一度その涙を拭いて。

漸く、核心した。

全てが間違いであった事に。

「君の気持ち、勝手に決めつけていた。結局、罪だ罰だなんて言うて、俺は自分の事しか考えて無かった、愚か者だった」

つくづく自分に嫌気が差す。

どうして失敗してからじゃないと気づけないのだろうか？

どうしてもっと上手く生きる事ができないのだろうか？

どうして——主人公みたいに鮮やかに、アリスに涙なんて流させないで、その心に寄り添ってあげられないのだろうか？

——やっぱり俺は、主人公になれない。

俺の事をこんなに慕ってくれている人が、ずっと、ずっと側に居たのに。その本当の気持ちにも気づく事が出来なくて。

その挙げ句、何度も泣かせてしまうなんて……。

「アリス。俺はやっぱり、自分が良い人間だなんて思えない。俺なんかには価値があるだなんて思えない」

俺なんか、アリスの側に居続けても良いのだろうか？ そんな資格はあるのか？

その気持ちは今だって消えない。だけど。

「それでも——ある人が言ってくれた。『価値を決めるのは、自分じゃ無くて他人』だって。こんなに愚かな俺でも、それでもまだ君は『好き』だって言ってくれるのかい？」

例えそれがどんな形で、相手が誰であろうとも。俺を『特別』だと想ってくれる気持ちに必ず応えようと、ナギさんと戦ったあの日誓ったから。

「当たり前だからね……、ハル君、もう一度言わせて。そして、もう一度答えを聞かせてね……？」

アリスは最後の希望を託すように。

両手で俺の手を包み込む。

切実で、そしてそれだけ本気だと判る程に真剣な眼差しを涙ながらに俺へと向ける。

自然と鼓動が高鳴っていった、心臓が飛び出しそうな気持ちを感じながら。

「ハル君。昔の事も、イーヴィルの事も関係無い。私の気持ちは今の私のモノだから。だから、ね……今の私を見て！ ハル君——大好きだよ。私と、付き合って……」

アリスはもう一度、俺に告白をした。

俺は幾度となく過ちを繰り返す。今だっつと大きな勘違いと失敗を繰り返してきた。それをずっと側で見続けてきて。俺の駄目な所なんて判りきってる筈なのにずっと支えてくれて、好きだと言ってくれる人が居る。

そんな幸せに、漸く気がつく。

「……ありがとう、アリス。こんな俺を、好きになってくれて。こんな俺の為に、泣いてくれて」

惚れた女を泣かせる男なんて最低だったと言われるのに。それじゃあ現在進行形で最低じゃないか。

俺の片手を包み込むアリスの手に俺は更にもう片方の手を重ねて。

「俺も——ずっと昔から好きだった。いつかこんな風に、君に好きだっつて言われる未来を期待していた。でも俺は、それを『悪しき願い』だと思っ込んでいた」

「悪しき願い」なんて、もう何処にも残って居ない。目の前に居るのは、ありのままのアリスだと言うのなら。

「俺で良ければ、いつまでだって側に居る。頼りないかも知れないけれど、また何度も失敗して、回り道して、悩んだりするかもしれないけど、君の想いに応えたい。君を幸せにしてあげたい。心の底から、そう思うよ」

昨日考え込んだ筈の答えはいつの間にか、真逆のモノに変わって居た。

113話 いや、この一晩で何があったし

私は憂いていた。『口は災いの元』という言葉があるがそれを体験したのは産まれて初めてだ。私が余計な事を口走ったせいでファルマとアリシアの関係性に亀裂を走らせてしまった。あんないちやいちやベタベタしていた二人が、そんな薄氷の上で関係性を築いていたなんて知らなかった。

昨日、ファルマは迷い悩んだ重い足取りで部室を去った。アリシアはずっと泣いていた。

全部私のせいだ。

私は。別にファルマが嫌いじゃない。恋愛対象としては0点だけど、仲間として、ビジネスパートナーとしては120点を付けても良いくらいだ。

私の独自の魔法陣、『紋章』を理解し、利用し、褒めてくれるのはファルマくらいだ。

初めて私の落書きを解説された時。私は心底驚いていた。私の『紋章』は私以外の誰にも理解出来る筈がない。一般的に普及している記号、公式を私個人の勝手な趣向で一文字の記号に纏めてしまったら、オリジナルの公式を利用して『紋章』は作られている。

だから、私の『紋章』を他人が見ても理解出来る筈がない。ピースの形すら判らない状態でパズルを解くようなものなのだから。

でもファルマは、それが出来た。

あのとき、ものすごく驚いたけれど。何故か嫌悪感を感じなかった。普通、私しか知らない事を他人が知っていたらドン引きするモノなんだけど。

部活動で合同活動するようになってからも、ファルマは凄かった。私の『紋章』は普通の魔法陣の三倍は濃密だから、ただ単にマジッククラフトの技術を用いてアイテムに転写しても記号や公式が潰れてしまう。

でもファルマはそんなのお構いなしに私の『紋章』をアイテムに取り入れ、活用してくれる。あり得ない話だと思う。都合が良すぎる

話だと思う。けれど、本当に不思議な事に違和感は全く無かった。

まるでずっと昔から、何年もそうしていたかのように、フアルマなら私の紋章を使ってくれる”という謎の信頼感の元、活動してきた。

話が脱線したかもしれない。

とにかく、私はフアルマの事を信頼しているし決して蔑ろにしているつもりはないと言う事。人並みに心配するし、申し訳無いと感じている事、それが私の心だ。

「……心配」

そんな膨大で複雑な心を、私は言葉にできない。何故だろうか。考えて居る事、伝えたい事は頭の中に沢山ある筈なのに。『言葉として声に出す』事がとても苦手だ。

同時に、『言葉として声を出す』行為に非常に憧れるし凄く楽しい。お喋りをもっと上手になりたいと願う。

……また話がそれた、

ともかく、今回は私のそんな願いの空回りもあつてか余計な事を『口走りすぎた』。言葉数が少ないのがコンプレックスだというのに喋りすぎで大切な友人を苦しめる事になるなんて思いもしなかった。

今回の一件、どう転ぶだろうか。アリシアはフアルマに振られると考えて居る様子だった。シジアンから聞いた話でその根拠に納得する。元はと言えば振ったのはアリシアの方。その後イーヴィルだのなんだのごちゃついて恋をしたと言うがフアルマからすれば掌返しにしか見えない。

そしてその”掌返しをさせてしまったのはフアルマ自身”だという自責の念があるのならば、フアルマの性格上絶対にアリシアの好意を肯定する筈が無い。

フアルマは不器用だけど義理堅く、もつと言えば”頭が固い”。一度”自分のせいだ”と思えばその考えを覆すのは至難の業だろう。

それをあの場に居た全員が理解していたからこそアリシアは悲観的に泣いていたのだ。

私はアリシアと殆ど接点が無い。部活動でたまに顔を合わせる程

度、なんか気がついたらファルマといちゃいちゃしてるファルマの幼なじみという認識だった。

ファルマにはドライブという最愛のパートナーが居るから最初は少しもやっとしたものの、アリシアの眼差しに真剣さを感じた事と、別に妄想するだけなら個人の自由だから実際のファルマが誰とどういう関係になるうがどうでもいいか、という結論で落ち着いていた。

思えば、あのいちやつきも全ては「自分のせいだ」と思い込むファルマの心を解きほぐす為の一手だったのであろう。少しづつ、解きほぐす様にファルマの罪悪感を薄れさせていく作戦だったに違いない。私はそれを、この口で台無しにしてしまった。

ファルマにもアリシアにも迷惑をかけてしまった。

だからなんとかして力になりたいと思う。思うけど……妄想とかは良くするけれど実際の恋愛経験が無い私にどこまで力になれるのか。事実昨日の時点では何も妙案を出すことが出来なかった。

授業が始まる五分前の予鈴が鳴る。

ファルマはいつも時間ギリギリに登校してくるが、未だに姿をみせない。やっぱり昨日の件が尾を引いて居るのか。もしかしたら悩みすぎて倒れたのかもしれない。だとすれば尚更私の罪悪感が募る……。

そう心配していたら。授業開始三分前くらいのホントにギリギリで。

「……………うっす……………」

目元に大きな隈を作って、猫背になり疲れ切った表情のファルマが登校してきた。

もうそれだけでファルマがどれほど一晩悩み、苦しんできたのかがよくわかる。

ファルマは言葉少なく——と言っても元からドライブ以外とはあまり喋らない方だけど、引きずるような足取りで私の隣の席に座り。

「……………もう、ダメ……………」

バタン、と倒れ込むように机に突っ伏した。

ああ、もうこれ手遅れなヤツじゃない？ ファルマ生きてる？

私はかける言葉が見つからない。悩みすぎて精神が摩耗してしまったのだろう。

もう死にかけにしか見えないファルマは、私が迷いでちよっと目を離した隙に目を閉じスースー寝息を立てていた。授業これから始まるっていうのに。これは本当に一晩一睡も出来ずに悩み続けたに違いない。

続いて、教室にセレスティアル先生が入ってくる。

どうしよう。原因は私にある。フォローするのが筋だろうか。適当に理由をでっち上げて保健室にでも搬入させるべきか。このままだと開始一分で説教コースだ。

オロオロと迷っているとヴィーと懐からバイブレーションを感じた。

携帯端末を取り出し確認すると、昨日結成したシジアンとアリシアの三人グループチャットにから新着が来ている。

ファルマは死にかけの今、アリシアの方はどうなっているのかそのまま名前の項目から目を滑らせてメッセージを読んだ。

『お騒がせしましたが、無事ハル君と正式にお付き合いまする事になりました／＼』

——は？

私は一瞬、自分の目がおかしくなったのかと思って目を擦り、正式にチャット欄を開いて改めて一言一句を確認する。

『おめでとうございます。無事丸く収まって何よりです』

とシジアンはすんなり状況を受け入れているが、私はもう一度隣の席にいるファルマに目を向け。死んだように疲れ果てた様子で眠っている姿を確認し、混乱した。

『いや、この一晩で何があったし』

気がつけばそう返信していた。

「授業始めますよー」

返信すると同時に先生の声が聞こえて、慌てて携帯端末をポケット

に戻す。何がなんだか判らないが詳しいことは昼休みにでも集まってアリシア本人から聞いた方が良さだろう。と結論づけた。

そして、ファルマが開幕居眠りしてる事実に変更して気づき、危機感を覚える。

先生の視線がこちらへ向き、明らかにファルマを視認した。私がフォローする隙も無かった。

もうこれダメだ。哀れファルマ、私のせいで怒られる事になってごめん。そう心の中で謝ってみたが。先生はやれやれ、と言わんばかりに目を伏せて授業を始める。

——本当に、何が起こってる？

判らない。何にも判らない。

でもとりあえず……悪い事態には向かっていない様子だった。

114話 ……デートとか、行かないの？

そしてお昼休み。私はシジアンとアリシアを私の魔法陣研究会の部室に招いていた。

ファルマの方は授業中ずっと居眠りしていて、それでも先生に怒られる事もなく。昼休みの今もきつとどこかで眠っているだろう。

「……何がどうなってそうなった？」

私はさっさと昼食のおにぎりを食べ終わってアリシアに問いかけた。

対して。

「えへへえハル君がね、ハル君がねえ〜、いつまでも側に居たい”って言ってくれたんだあ。それでね、それでね！」

アリシアは頬を染め蕩けきっただらしない表情で幸せそうに続ける。

『君の想いに応えたい。君を幸せにしてあげたい』って言ってくれたんだよね！ もう私、嬉しくて嬉しくて夢じゃないのかなって！』

昨日のあの絶望的な雰囲気は何処へ行ったんだと言わんばかりに怒濤の惚気が飛んで来る。別に惚気自体は気にしないけど、ギャップというか事態の急変ぶりに驚きを隠せない。

『ご心配なさらずとも、全て現実ですから』

と、シジアンがカロリーバーを嚙りビタミンジュースを飲みながら、妙に確信を持って言う。

「って部長さんなんでハル君のデイストピア飯になってるのかな!？」
アリシアがパツと現実に戻って来て驚くが、

「先輩にとっての一大事に自分の事へあまり時間をかけたくなかったですから。最初に見たときは驚きましたが、いざ試してみると食事の時間も短く栄養もバランス良く取れて悪くないです、これ」

「ぶ、部長さんが良いならそれでいいけどね……」

話が全然前に進まない……。

ともあれ、何があつたかは判らないけれどアリシアはなんとか大逆転勝利を掴み取った事だけは判った。あの頑固なファルマをよく口

説き落としたものだど素直に驚く。

それで。結局相談に乗る前に問題が解決してしまつて私としては少々消化不良だ。折角良い方に話が向かっているのなら、そちらの方面で手助けできないだろうかと思う。

「……で、これからどうする？」

私の問いかけにアリシアはキョトンとした。

「へ？　これから？」

どうやら、今の幸せで胸がいっぱいな様子でそつから先の事を考えて居ないらしい。年頃の男女が付き合うとなればやる事は色々あるだろうに。

例えば――

「……デートとか、行かないの？」

その言葉を投げかけると、アリシアは桜色に染めていた頬をポツと一気に真っ赤に変えて。

「そ、そこそ、そんな、付き合つていきなりデートなんて……！　ちよつとがつつき過ぎじゃ無いかな!?　ハル君に引かれちゃうかもしれないよね!？」

とあわあわしながら目を泳がせるが。

「いえ、普通だったら個人のやり方にもよりますけれど、付き合う前からデートなどを通してお互いを知つて関係性を進めるモノだと思ひますが」

とシジアンが補足する。

その通り、デートくらい付き合う前から繰り返すアベックだつている。というかデートを繰り返してから告白とかの定番ではなからうか。以前からあれだけいちやいちやいていたのだから今更デート一つに恥じ入らなくても良いものを、と色々感情が頭に浮かんでくるが言葉に出来ない。

「……気にしすぎ」

その一言が今の私の限界だつた。

「そうかなあ……？」

真っ赤な顔の口元を手で隠し、目線を斜め下にむけるアリシア。本

心では行きたくて仕方が無いのだろう。

そして、恥ずかしそうに、

「じゃ、じゃあ例えばなんだけどね……初デートってどういう所がオススメかな？」

と、聞いてきた。漸く、力になれそうだ。

「……難易度順に、買い物、映画館、遊園地、温泉、等」

「後半の難易度高すぎないかな!? 温泉なんて最早大人のデートだよね!?! っていうか旅行だよね!?!」

戸惑うアリシアに補足する。

「……ファルマの財力ならイケる」

「ハル君そんなにお金持ちなの!? だとしても奢って貰うには申し訳ないし折半するには私の方が辛いよ!?!」

ファルマはかなり懐が潤っている。

大金持ちのルクシエラさんの弟子で、何かにつけてルクシエラさんからお小遣いという名の札束を一方的に渡されているからだ。明らかに学生が貰うような金額じゃない枚数を突きつけられて困っている様子を何度見た事か。

「難易度的にはお買い物が良いかな……」

アリシアはそう言うが、そこで待ったをかけたのはシジアンだった。

「買い物は辞めておきましょう。よく言われるお話ですが男性と女性では買い物への価値観が違います。男性はウインドウショッピングが苦手な方が多いです。そして先輩は間違い無くそちらに分類されます」

そう言えばそんな話を聞いたことがあるような。男子は、買う物が定まらずにお店に向かう事自体に疑問を抱く人も居るとかなんとか。「先輩の事ですからアリシアさんに合わせて不平不満などは零さないと思われませんが本人には退屈をさせてしまうでしょう。それは本意じゃありませんよね?」

「う、うん。出来れば一緒に楽しんで欲しいね……」

と、アリシアは言う。そこで私はこれという答えを選び出した。

「……じゃあ遊園地で」

「あれっ!? 一段階難易度飛ばなかったかな!? 映画館は!?」

アリシアは驚いているがシジアンの方は納得している様子だ。

「映画の場合観るモノに困るでしょう。先輩は主にゲームや漫画、アニメが好みなのでアニメ映画なら楽しめると思いますがその場合アリシアさんが楽しめないでしょう?」

「うっ……確かにハル君が好きならアニメとか漫画とかゲームは判らない……昔はハル君と良く交換したりしてたけどハル君と交流が途絶えてからぶつとりと、かな……」

と、一瞬憂いを見せたが、パツつと表情を変えて、

「で、でも! 世間で流行ってるのは押さえてるよっ! それならどうかな?」

「先輩は逆に流行モノは流行が終わってから手を出すタイプですが」

シジアンのその言葉に私は思わず、

「……高二病めんどくさ」

と漏らしていた。今回は自分の感情を上手く言葉に出来て満足だ。

「あうっ……」

アリシアはデコピンを喰らった様に仰け反った。

「遊園地ならお互い楽しめるでしょうし、費用的負担もそこまでではありません。悪く無いと思います?」

「な、難易度高いけどね……」

アリシアは尻込みするが、私は思う。今まで、もう学年内ではすでに付き合っていると認識されてるくらい猛烈アタックしてるんだから今更引き下がってどうする、と。

「……いけるいける」

そう言っただけ私はずーっとお茶を啜った。

「先輩もきつとお喜びになられると思いますから、是非提案してみましよう」

シジアンがそう言って嬉しそうにアリシアを応援していた。

そう言えば、シジアンもファルマの事大好きなのが見え見えなんだけど恋敵の応援するんだな、と今更疑問に思う。

頭の中に、とある光景が浮かぶ。

なんてことは無い廊下を歩くファルマに、べつたりくつついてその後ろをちよこちよこついて行くシジヤンの姿。それが少しずつ、後ろから離れていって、やがて横に並び立ち、笑い合う二人の姿。

そんな光景が脳裏に映り込み、疑問を感じた。

——知らない記憶だ。でも、違和感がない。なんだったんだろ今の。

自分は男子同士の絡みを妄想したりするが男女の恋愛はこうやって首を突っ込んだりはすれど妄想まではしない。

アリシアの惚気に当てられて妄想癖が変な方向に傾いたか？

私はもう一度お茶を啜って、とりあえずアリシアに助言が出来て多少罪滅ぼしできたのではないのかな、と満足した。

115話　「アリスと付き合い始めた」 という事実

俺はその日、夕方まで完全に居眠りを決め込んでいた。夜に眠れなかった分を補うためだ。宣言通りドライズが口利きしてくれたのか先生達に咎められる事は無かった。そして。

放課後の時間。たつぷり眠った俺は完全とは言わずとも立ち直り、あくびと共に部活動に行こうとする。教室の隅に試作転移魔法陣を作っているので移動も楽ちんだ。

俺はまだ寝ぼけた回らない頭で魔法陣に乗って。一瞬だけ全てが闇に包まれたかと思うと部屋に移動していた。

それから定位置に着いて。今日製作するアイテムの事を考えながら資料、材料などを用意しつつ……。

準備万端、さあ、部活動を始めようか！　と思ったそのとき。がちやり、と部屋の扉が開く。自然と視線がそちらに向き。

「あつ」

入室者、アリスと目が合って同時に声を漏らした。これまた同時にぱつと視線を逸らす。

「お、お疲れ様、ハル君……」

アリスは緊張した声色だが、対する俺も。

「あ、ああ、アリスも、おつかれ……」

アリスの顔を見ることが出来ず、机に視線を落とすまま答えた。アリスがいつもの席、俺の隣に近づいてくる気配を感じるが、普段よりゆっくりで。

ゴツ、ガツとどこかに身体をぶつける音が聞こえてきて思わず、

「だ、大丈夫か!？」

と横を横を向くと、

「こ、これくらい大丈夫だからね！　ごめんね、騒がしくして」

アリスは顔を真っ赤にして、目を逸らしながら笑って誤魔化していた。

「そ、そうか……」

俺は心配しつつも、本人が大丈夫と言っているのだからこれ以上踏み込むのは無粋かと思ひ視線を手元に戻す。

その後、そーつと俺の隣の席が引かれ、これまたゆっくりと椅子に座る気配が感じられた。

手は癖になっっているのか作業は進みつつも、気持ちの方は落ち着かない。

アリスも、何を言うでもなく静かに、けれどどこかそわそわした雰囲気です。

緊張感のある沈黙が部室内を支配していた。

そんな空気感に耐えられなくなって、俺は、言ってみる。

「そ、そういういえばシジヤンの姿がみえないな。いつもなら来てる時間なのに」

すると、アリスが、

「あ、えっと、ね。部長さん、今日はお休みするってお昼休みに言っただ」

と、答えてくれる。

「そうなんだ。珍しい、体調でも崩したのかな？ 悪くならなければ良いんだけど」

俺はシジヤンの事を心配しつつも、つまり今日はこのまま部室でアリスと二人つきりになるという事実には震えていた。

ドクドク心臓が高鳴って行く。

今朝、俺はアリスと言葉を交わし、想いを交わし、迷い、最終的にアリスと付き合う事になった。

その場はその事に必死で、その後は寝不足の回復に気をとられて、今更になって実感してしまう。

“アリスと付き合い始めた”という事実を。

嘗て、夢にまで見た関係。普通の恋愛とは違って、ぐっちやぐっちやに拗れてねじれ曲がって、漸く辿り着いた結果。

率直に今の気持ちを言葉にすれば。

めちやくちや緊張するし、めちやくちや恥ずかしい！

いつも通りに過ごすという事が凄く難しい。な、何を話せば良いのだろうか？

俺はもうこれ以上アリスに迷惑をかけたくない！！

折角彼氏になったのだから出来るだけ理想の彼氏になりたい！！

でも「理想の彼氏」って何!?!?

「女心」なんて一つも判らないよツ!!

心の叫びをかみ殺す。

少なくともそんな感情表に出すような男が良い彼氏だとは思えない。

本当は頭を掻き篦りたいくらいだが、そんなダサい姿見せる訳にも
いかない。幸い手慰みにマジッククラフトが出来ているのが救い――

なんて考えていたら。

「あつ」

一つ、アイテムが完成してしまった。

俺が思わず漏らした言葉に反応したのか、アリスの視線がこちらを
向いて。

俺の手元にあるラベンダー柄の腕輪を見て、言う。

「も、もしかして完成したのかな？ お疲れ様だね！」

につこり微笑むアリスだが、声が少しだけ震えていた。多分、向こ
うも向こうで緊張しているのだろう。

そう気付いた時。俺は自分を殴りたくなった。

――アリスも同じ気持ちだとしたら、緊張を解いてあげるのが俺の
勤めじゃないのか!?

ただ、嵐が過ぎ去るのを待つようにこの状況を作業で誤魔化してた
なんて最悪だ！

とはいえアリスの目の前で自分をぶん殴る訳にもいかない。

俺は深く深呼吸を一回して。

丁度話題の種になるモノが出来たんだ！俺がこの空気を変えるんだ！

そして。意を決してアリスの顔を見て、言う！

「なあ、アリス！」「ねえ、ハル君！」

すると偶然、俺とアリスの台詞が被ってしまった……。

「えっ、あつ、」

「あれ、ご、ごめんね!？」

お互い戸惑い、一瞬視線を逸らす。

「俺こそ、邪魔してごめん！ えっと、先に良いよ」

「ううん！ 私こそごめん！ えと、私も後で良いよ……?」

と、お互い遠慮するお約束の流れ。ここでお互い譲り合って話が進まない——なんて所まではお約束をなぞる必要も無い。ここは俺が先に要件を伝えた。

「じゃあ、その、これ！ あ、アリスについて思って……」

俺はやや挙動不審になりつつもおおざと今完成した腕輪を差し出す。

「えっ、これ、私が貰って良いの？」

「この前言った、転移魔法陣の通行手形に付属効果を付けてみたんだ。軽い攻撃なら『拒絶の闇』が自動でガードしてくれる筈だ」

と、淡い紫色の中でワンポイントに黒く輝く宝石を見せて説明する。

「その、デザインのセンスは自信無いけど、後衛のアリスには防御系のアイテムがあると良いかなって思ってた！」

これで、アリスが微妙な表情をしていたらどうしようと思ひ必死に言い訳するように視線をあっちこっちへ向けつつやや早口で言っていた。

「わあ、早速付けて良い？」

アリスの嬉しそうな声に俺は恐る恐る視線を向けるとそこには花咲くような笑顔があった。

「も、勿論！」

アリスは腕輪を付けて、質感を確かめるように腕をフリフリして。

「すつごく嬉しい！　ありがとね、ハル君!!」

お世辞なんかじゃないって自然と胸に伝わって来る声で応えてくれた。

俺はその様子にホツとする。

「よかった……。それじゃあ次はアリスの要件だな」

ひとまず喜んで貰えた事に安心して、そう言う。

「あ、私は、その……」

「ん？」

アリスは少しだけ言葉を詰まらせて。不思議に思っていたら。

「は、ハル君っ！」

「う、うん、どうした？」

突然声を張り上げるモノだからびっくりする。ついでにぐいっと上半身を前のめりにさせて距離が近づき胸の鼓動が速くなっていく。

「そ、その、今度のお休みとか……ハル君が暇な時で良いんだけどね、遊園地とか行ってみたいなーって思ってる。付き合って貰えないかな？」

と、アリスは遠慮がちに言った。どうやら、遊園地で遊びたいけど付き添いが欲しい様だ。ああいう賑やかな場に一人でいくのは少し寂しい気持ちはわかる。

「ああ！　それくらいお安いご用だ。予定空けとく！」

困ってるアリスの為になるならば、と俺は二つ返事で了承した。

「ホントに!?!　良かったあ……」

アリスは直前の俺と似たようなリアクションを見せて、少し面白かった。

116話 それってデートのお誘いだよね？

部活動の時間が終わるチャイムの音が聞こえる。

「あ、もうこんな時間だね……」

アリスは夜の帳が降りた窓の外を眺める。

そして、こちらの方は向かずに続けた。

「それじゃあ、次のお休み楽しみにしてるね」

アリスはまだこの街に来て数ヶ月しか経っていない。三賢者が鎮座し、世界のあらゆる魔導が集う都市、大都会スターズコア。俺とアリスの出身は田舎の方だから遊園地も規模が全然違う。きっと、都会の遊園地に期待を膨らませて居るのだろう。

「ああ。俺なんかでよければ、いくらでも案内するよ」

まだ週の初めの方だ。学園の休みは数日後になる。

「八天導師の任務があるから、暫く部活動に顔は出せないけど、学園の休みに合わせて休暇を貰うように申請しておく。次に会うのは当日になりそうだな」

俺はあまり外出する方では無いがそんな俺でも知っている位有名な遊園地が存在する。

「場所は、星都ハッピーランドでいいかな？」

「う、うん！ 丁度私もそこに行ってみたいと思ってたんだ！」

アリスは何故かこっちの方を向かずに答えた。

「田舎の出の俺達がびっくりするような乗り物が沢山あるって噂だ。

当日、楽しんでくれると幸いです」

俺はそう言っただけで席を立つ。

「それじゃあ、次の休みにー！」

俺はそれまでの数日間しつかり八天導師の任務をこなそうと気合を入れつつ部室を後にした。



寮に戻ると、ドライズが夕食を用意して待っていた。

「お帰り、ファルマ」

「ただいま。なあ、ドライズ、一つ頼みがあるんだけど」

俺は早速、次の学園の休みに併せて休暇を取るべく、八天導師としての任務をドライブズに変わって貰えないか交渉をしようとする。

「うん？ いいけど、とりあえずご飯食べなよ」

「え、ああ。そうだな」

ひとまず食卓に着き、夕食を味わう。相変わらずドライブズの作る料理はそこらのレストランと勝るとも劣らない出来だ。

「それで、頼みって？」

食事を終えて、食器を洗いながらドライブズが言った。

「ああ、今週末の事なんだけど。用事が出来たから八天導師の任務、代わって貰えないか？」

最近の八天導師は主にクラス2以下のイーヴィルを討伐しつつ、第四の賢者の動向を探る任務が与えられている。それをドライブズに肩代わりして貰いたいのだ。

「勿論埋め合わせはするからさ」

「君の頼みなんだ。無下にするつもりは無いよ。——理由が、ゲームのイベント期間がギリギリだから、とかじゃ無い限りは」

ドライブズは冗談めかして言うが、俺は真面目に返答した。

「違う違う！ ちゃんとした理由があるんだ！ ていうか、お前には真っ先に伝えるべきだったな」

そして、アリスと正式に付き合う事になった事を告げる。

「そっか。こんなにも早く答えが見つかって良かったね」

「俺が思ってたのとは全然違う展開になったけどな……。それで、俺はアリスの為に出来る限りの事をしてやりたいんだ」

「うんうん」

ドライブズは機嫌が良さそうに頷く。

「それでアリスに、こっちの遊園地に興味があるから付き添って欲しいって頼まれたんだ」

「……うん？」

「出不精の俺だけど遊園地の案内くらいならできる。早速アリスが頼ってくれたんだ。しっかり下調べしないと」

俺は携帯端末を弄って遊園地の公式サイトへアクセスしつつドライズに語る。

そんな俺へ。

「ねえファアルマ」

「ん？」

携帯端末から顔を上げるとドライズがきよんとした表情で。

「それってデートのお誘いだよね？」

と。一言。

その言葉に俺は。

「……………え？」

思わず硬直してしまった。

ポテつと携帯端末が絨毯の上に落ちる。

「そのリアクション、ホントに気付いて無かったみたいだね……」

ドライズはやれやれ、と首を振った。

「や、ま、ち、ちち、違うって！ アリスは単に都会の遊園地で遊びただけで、でも一人で行くのは気まずいから俺を頼りに——」

「いや、それなら友達と一緒に行くでしょ。他に誰か誘うとか言ってた？」

ドライズに言われて、動画を巻き戻す様に記憶をたぐり寄せアリスの言葉を必死に思い返す。

「……………言ってない」

「ならやつぱりデートじゃん」

ドライズはきつぱりそう言っつて、食洗機を起動させた。

「初デートに遊園地かあ。良いんじゃない？ 仕事は僕に任せて一緒に楽しんで来なよ」

家事を終わらせたドライズが結んでいた髪を解きながらニヤニヤ生暖かい眼差しを送ってくる。

「えっ、いやっ、嘘だろ!？」

暫く思考回路が停止してしまっていた俺は取り乱した。

「で、でで、デートなんてそんな、空想上のイベントじゃないのか!?!」
「いや、全然普通に現実のイベントだよ何言ってるの」

「で、でも! 確かに他に誰かを誘うとは言って無かったけど、アリスは『デート』だとも言ってないぞ!」

「正式にお付き合ひする事になって、そのまま二人つきりでお出かけなんでわざわざ言葉にしなくてもデートだって判りきってるじゃないか」

ふわあ、とドライズは眠たそうに大きなあくびをする。

「そ、そんなのお前の憶測に過ぎない!! これがデートだって言う証拠が無いだろ!」

「いやなんで推理小説で追い詰められた犯人みたいな事言ってるのさ。デートの証拠って何なの」

ドライズは、混乱する俺をほっぽいて二段ベッドの梯子を上がって行く。

「ま、待てよ!! もし、万が一これがデートだとしたら——俺はどうすればいいんだ!?!」

ベッドに登るドライズを見上げて必死に叫ぶが。

「だから、普通に楽しんで来れば良いって言ってるじゃ無いか。仕事の方は僕がちゃんと引き継ぐから」

と、言い残してドライズは布団の中に入ってしまふ。

「待てって! 寝る態勢に入るなあ!! で、デートなんて何処にも確証は無いんだぞ!! やっぱり遊園地が気になってるだけだってオチだったらどうするんだよ!?!」

「朝から付き合う付き合わないの話をしてるんだから九分九厘デートだと思っけどなあ」

「デートなんて何着ていけば良いんだよお!!」

「好きなの着ていけば良いでしょ……。あ、でも謎の英単語が綴られたTシャツとかはやめておいた方が良くもね」

「んなもんとつくに卒業しとるわっ!! っていうかお前俺の服も勝手に洗濯してるから知ってるだろ!!」

ドライズは俺の分まで含めて家事や炊事を行っている。これは俺

が頼んでいる訳では無くドライブが「趣味」として楽しんでいるからだ。

だからドライブは、この事実も知っている筈である。

「基本学園から出ないんだから今の俺、制服か部屋着しか持ってねえんだぞ!!?」

街へ出るにしてもちよつとしたお使い程度の事だ。ファッションに疎い俺は、休日でも深く考えなくても良い制服で過ごしていた。

「当日までに用意するか、いつも通り制服で良いんじゃないの? それはもう個人の趣向の問題じゃん。僕には関係ありません」

と言つてドライブは部屋の明かりを常夜灯に切り替える。

「ドライブズウウ!!」

怨嗟めいた俺の言葉を無視して、無二の友人は安らかな寝息を立て始めるのであった。

117話 〃普段通り〃

アリスのお誘いは果たしてデートなのかそうじゃないのか？

そんな疑問が晴れないまま次の日を迎えてしまった。

悶々として寝付きが良くなかった。連日の寝不足にふらつきながらもいつも通りの支度をして寮室を出ると。

「おはようだね、ハル君ー」

いつも通りアリスが元気に挨拶してくれる。

「お、おはよう、アリス」

俺は少し目線を逸らしながら答えた。俺は休日の予定がもしかしたらデートなのかもしれない、と思いい混乱の渦中に居る。

恐る恐る、視線をアリスの顔に向けて。

そこにあるのはいつも通りの花咲く笑顔。

緊張、焦燥と言った様子は一切感じ取られない。

そして、思う。

——あのお誘いがデートなら、アリスだって緊張する筈じゃないか？
だって初デートだぞ？

いつもと代わらぬアリスの様子から、やっぱりデートでは無いんじゃないかと言う疑問が拭えない。

流石に俺も、『遊園地に行くのってひよつとしてデートなのか？』なんてアリス本人に問いただすような無粋な事はしない。アリスにその気があっても無くても気まずくなるだけなのは判ってる。

「ハル君、固まっちゃってどうかしたのかな？ 急がないと遅刻しちゃうよね？」

アリスが困ったように言った。

「あ、ご、ごめん。ちよつと考え事してた」

俺はそう言っつて、校舎に向けて歩き出す。

「そっか。それなら良いんだけど」

俺に歩調を合わせてアリスが横を歩く。

「最近暑いねー」

何気ないアリスの言葉に、気軽に返事をする。

「夏が始まったって感じがするよな」

アリスが学園にきて一ヶ月と少し、季節は初夏からうつりすっかり夏真っ盛りだ。アリスと正式に付き合う事になったけれど。アリスとの再会してからは波乱の連続で。めまぐるしく、そしてぐちゃぐちゃに曲がりくねった道を歩んできた。

——ホントに、色々あったな……。

その末に特別な関係になって。

こうして寮から校舎までの本当に短い時間に言葉を交わすいつもと変わらない日常が、そこにある。

——やっぱり、考えすぎなのかも知れない。

アリスと正式に付き合う事になって、恋人になったって意識するようになってても。このほんの少しでも確かに幸せだと感じられる時間は揺るがない。

——もう少し落ち着いて考えてみよう。まだ、時間はある。

俺達は10分にも満たない時間を共に過ごし、教室の前で手を振り別れた。

そして——

「考えてる間に休日が来てしまったアアアツ!!!」

週末の朝、俺は部屋で叫んでいた。

この数日、結局俺は結論を出すことが出来ないで居た。何故なら、アリスがあまりにも「普段通り」だったからだ。付き合う事になったその日こそギクシャクしてしまったが遊園地に行く約束を取り付けてからはいつも通りのアリスに戻っていて。

アリスと付き合い始めてまだ数日。俺は言わずもがな初恋初彼女な訳で、何をするにも不安や緊張が走りアリスの様子を伺ってしまっていた。

けれど登下校の僅かな時間、お昼ご飯に部活動、アリスは変わりない笑顔を浮かべ続けていた。幸せそうで何よりだが逆にそれ以外の感情を読み取れない。

「当たり前前の日常が当たり前前に過ぎていっただけだった……」

けれど、それは決して嫌な時間では無かった。付き合い始めたのだ

からといって、焦る必要は無い、急に何かが変わる事が無い、と感じたのだ。

「ここまで普段通りなら、やっぱり今日のは普通に遊園地で遊びたいだけなんじゃないかな……」

付き合いたての彼女との初デートなんて色恋に疎い俺ですら意識してしまうシチュエーションだ。こうして数日かけて悩むくらいには。でもアリスは意識なんて全くしてない様子なのだから。

「……よし」

俺は漸く答えを導き出して。

普段通り、制服に袖を通した。

「これで良い筈だ」

アリスが単に遊園地を楽しみたいだけなら、デートだなんだなんて勝手に意識して緊張したり狼狽えたりしては迷惑でしかないだろう。

俺はただ、平静にアリスと一緒に遊園地を楽しめば良い。

当日になって漸く落ち着いた気持ちを取り戻し、俺は寮室を出る。

そして、寮を出て校門前でアリスを待った。

と、言うのも。今の今まで悩みまくっていたので全然眠れず約束の時間より数時間早く目が覚めてしまっていたからだ。

夏真っ盛りとは言え流石に早朝はそこまで暑くないので少しくらい待つのも苦では無い。

アリスを待ちながら、携帯端末で最後にもう一度遊園地のアトラクションを調べてみる。

「アリスって絶叫系大丈夫なのかな？ ジェットコースターに乗るのか、避けるかパターン考えておくか」

本来なら遅すぎる計画だてだが、それだけ狼狽えていたのだから許して欲しい。

そんなこんなで小一時間ほど時間が過ぎて。

「おはよう、良い天気だねハル君！」

聞き慣れた声。ああ、こんな挨拶一つですら。朗らかないつものアリス”を感じる。

俺は端末から顔を上げた。

「おはよ——う？」

そして。言葉を失う。

普段は首元で結んである少し長めの髪は解かれ風に靡いて。小ぶりの白いカチューシャが目を引く。それに大胆に肩を出したトップスと、ふわふわした可愛いミニスカート。

桜色の小さなポーチを片手に、満面の笑顔を浮かべたアリスがそこにいた。

その衣装の何もかもが、始めて目にするものばかり。

——全ッ然ッ普段通りじゃなくねッ!!?

心の中で叫んだ。

118話 わからない!! デートなのかデートじゃ無いのか!?

何度かアリスの私服を目にした事はあるが普段はもっと露出の少ない大人しい服装をしていた筈だ。解決したはずの疑問が再び湧き上がる。

「ハル君ってば。まだ約束の時間より30分も早いよね? 遊園地、そんなに楽しみだったのかな?」

アリスはニヤニヤして俺をからかおうとするが俺はそれどころでは無い。

「え、あ、いや、まあ、う、うん」

と、しどろもどろな返事をしてしまう。

「んーどうかしたの、ハル君?」

アリスはなんて事ない風に聞いてくるがツ! 今の俺は大絶賛混乱中で思考回路が働かない!

「いや、えっと、」

うわ、うわ、頭が回らない! 言葉が出ない!

ドキドキする。

アリスが。

アリスがいつも以上に可愛いツ!!

顔が熱くなっていく。

何か、何か言わなければ! 今の俺は挙動不審だ!

「ご、ごめん、見慣れない服装だったから、その、びっくりして」

なんとかひねり出した言葉。

「あ、そうだね。私もこの組み合わせは初めてだよ。ちよつと気合い入れちゃった」

アリスは少しだけ照れ笑いを浮かべた。

俺は「気合いを入れた」という言葉に戸惑ってしまう。

「そ、そうなんだ。その、凄く似合っているとします……」

「ありがとう! でもなんで敬語なのかな?」

なんで敬語なのかって？

——やっぱりデートなんじゃないのかアアアアア!!?

って心の中で叫びながら後悔してるからだよ!!

とは本人には言えない。

初デートに制服で来る彼氏……うっ、自己嫌悪がこみ上げる。

気付いたら頭を抱えていた。

すると。

「えへへ。実は私ね、《遊園地》自体すっごく久しぶりなんだ！ 本
当に小さかった頃以来だから楽しみでね。気合い、入れ過ぎちゃった
かも」

とアリスは頭を掻きながら苦笑いを浮かべた。

——……え？

「似合ってるって言ってくれてありがとね！」

と、アリスはにこやかにそう言った。

——気合いを入れたのは《遊園地が楽しみ》だったから？

また、情報が俺の頭の中をかき乱す。

——ひよっとして、やっぱりアリスにデートのつもりは無い……？

「まだ時間に余裕あるね。のんびり歩こうか」

「あ、ああ」

うきうきとした様子でアリスが一步先を歩き出す。

本当に楽しそうだ。俺の格好に不満を見せたり、逆に気を遣ったり

する様子は無い。

——わからない!! デートなのかデートじゃ無いのか!?

結局俺の疑問は振り出しに戻っていた。

移動中。

「ほんつとうに楽しみだねえ。どんなアトラクションがあるんだろう
?」

「それなんだけどアリスって絶叫系大丈夫？」

「んー……正直、乗ったこと無いから判らないや。でもちよこつとだ
け——興味あるかも？」

と当たり障りの無い会話をしながらも俺の頭の中は大混乱。

アリスは服装こそいつもより大胆だが振る舞いは自然体、相変わらず緊張した様子もない。

よくよく考えたら恋人同士が二人だけで遊びに行くならそれだけでデート確定なのでは？

と思う心もあれば。

アリスと復縁してからは登下校含め、部活の買い出し、素材集めなどで二人つきりで行動する事が少なからずあった。

アリスが今回の事をその延長線上と考えてる可能性も捨てきれないと思ってしまう。

それに、「デートかそうじゃないか悩んで色々調べている時、遊園には初デートに向かない」なんて情報を目にもした。そもそも初デートって買い物とか映画とかそういうのが多い感触だったのもある。

だから余計に、悩む。

結局アリスは今日の事をどう扱っているのか？

そんなこんなで到着する遊園地。

流石に都会と言うだけあって、大型連休でもないただの週末だがそれなりに人は多かった。

「わあ……！ 賑やかだね！」

そんな人々を見渡してアリスが楽しそうに言う。それもそうだろう。俺達の故郷なんて田舎そのものだ。

お祭り時ぐらいいしか人が大勢集まるような事は無い。アミューズメント施設が無いわけでは無いが比較してしまえばやはり客の数もアトラクションの量も遥かに差がある。

「想像以上だねえ……」

「ギリギリ夏休みシーズンからズレてるからこんなもんだけど、もう少し遅かったら遊ぶどころじゃ無いくらい人で溢れる……らしいぜ」感慨にふけるアリス。

数ヶ月前まではこんな光景テレビ越しでしか見れない立場だったのだから、テレビの中にも入ったような気分かもしれない。

ぶっちゃけ、俺も都会の遊園地なんて初めてなのでニュースなどで

聞いた話くらいしがないんだ。

「それで、何処から回ろうか」

「んーそれじゃあまずアレにしようかな!」

ビシッとアリスが指差したのは。

シンプルな山なり直線コースをもつすごい速度で上下するジェットコースターだった。

「え、マジで?」

「今ならまだ並んでる人少ないね、早く行こ!」

アリスに手を引かれ、景色が流れていく。

「いやでもアリス! あれ確か国内最速最怖とかがうたい文句だった筈——」

「いいね! 挑みがいがあるかな!」

謳い文句に物怖じする事無くアリスは突き進み、あつという間にジェットコースターの列へ。俺の

方は違う意味で不安を覚えていた。

「なあ、初の絶叫アトラクションなんだろう? いきなり最怖はハードル高すぎ無いか?」

並びながら、アリスに問いかける。

「おやおやあ? ハル君ひよつとしてビビってるのかな?」

帰ってきたのはニヤニヤした煽り顔。俺は少しだけむっとなつて言い返す。

「これくらいじゃビビらねえよ!」

「おお、頼もしい返事だね」

「ちゃんと安全装置が付いてる時点で、不安要素なんて何処にもない」「安全装置に対する信頼感半端ないね」

え、そこ? そこ気にするの? みたいに意表を突かれた表情を作るアリスに俺は。

「……布団で簀巻きにされて当人のさじ加減で放り投げられるのと比べたらよっぽど安心出来る」

今まで何度かルクシエラさんに高速もとい拘束移動させられた思い出を振り返ってため息を吐いた。

「あ、ああ……ハル君なかなかハードな日常送ってるもんね……」

アリスは納得したように苦笑いを浮かべた。

そう。ルクシエラさんに物理的にも振り回されている俺にとって絶叫系アトラクションなんて何も怖いところが無い。

非日常的なスピード感を素直に楽しもうと思える。

でも、アリスは違う。

普通の人間は布団で簀巻きにされて射出される経験は無いはずだ。だからこそ心配なのだが――。

「あ、前のグループが終わったみたいだね」

一周回ってきたコースターから人が降りていく。暫くして列が動き始め、俺達もコースターの階段を上って。

カツンと金属質の音が小さく聞こえた。

「あつ――」

「おっと！」

咄嗟にアリスの背中に腕を回して、転び落ちそうになった彼女を支える。

「ご、ごめんね。ありがとう、ハル君」

「いや、それは良いんだけど――めちやくちや震えてるじゃないか!？」

アリスの身体を支えた事で、気付いた。

身体も足も判りやすくガクブルしている。そりや階段にも蹴躓くだろう。

「アリス！ ホントはめちやくちや怖いんだろ!？」

「あ、あはは、バレた？」

119話 これでもう何も怖くないよね……ッ!?

「バレた?」じゃねえよ! 怖いなら素直に辞めとこうぜ、折角遊びに来たんだからさ!」

そう論すが。アリスは首を横に振う。

「え、へへへ……。ダメだよハル君。今更引き返すのは後ろの人の迷惑になっちゃうもんね」

言われて、気付く。

狭いとは言わないが人が二人横に並べる程度の階段にずらりと人が列を成しているのだ。ここを逆行してやっぱり乗らない、なんて出来る雰囲気じゃ無い。

「初めから退路なんてないんだ! 私に乗る、乗るからね!!」

台詞は勇ましいが表情は捨てられた子犬のように怯えていた。

「何が君をそうまでこのアトラクションに固執させているんだ!」
そこまで自分を追い込む意味が判らなかつた。

◇ ◇ ◇

結局流れに身を任せ、俺達はジェットコースターに並んで座った。程なくして、ゆっくりジェットコースターが動き始める。

「いいかな、ハル君。このコースターが一番怖いつて事は他のアトラクションは全部これより怖くないんだよね」

「え、ああ、まあ、そうなるな」

「つ、つまりこのコースターさえ突破してしまえば後は気軽に楽しめるって寸法なんだよねえ!」

「絶叫系初めての人が立てる理論じゃねえよツ!!」

言っている言葉の意味は判るが……。

「大丈夫、大丈夫……だってここは遊園地。楽しむ為の場所だもん——」

安全装置にきゅっとしがみつき全然大丈夫じゃなさそうな様子でアリスが自己暗示をかけるようにつぶやき続けている。

本当に、なんでそこまで無茶な事をしてこのアトラクションを選んだのだろうか。

ジェットコースターは少しずつレールを上っていく。

勢いよく走り出す前のこの穏やかさがドキドキと恐怖を駆り立てると言うが。恐怖を微塵も感じていない俺としてはアリスが心配でドキドキしてしまう。

ゆっくりした時間の中でアリスの行動が思い返される。最初はあんなに勢いよく俺の手を引いてきたのに――。

――……手を引いてツ!!?

不意に、その事を思い出してドクンと心臓が跳ねた。

今まで完全に意識の外にあったが、俺、いつのまにかアリスと手を繋いでいた?!?

それどころかアリスは俺の肩に縋ってきて……あれ!?

なんかめちやくちや恋人っぽくないか!?

さつきまでと違う意味で胸がドキドキしてくる。

――え、デート? やっぱりデートなのか!?

いつの間にか忘れて居た疑問がぶわっと勢いよく湧き上がってきた。

バツと思わずアリスの方を確認するが、相変わらず不安げに自己暗示を続けている。その様子からは、俺との交流よりもアトラクションと真摯に向き合っている様に見える。

――結局どっちだ!?

疑問が膨らみ意識を持って行かれて丁度油断したところで――

強烈な浮遊感と共に猛スピードで景色が流れていく!

「きゃあああああ!」「おわああああ!」

流石に不意打ちで急加速されると俺もびっくりして声をあげてしまった。

――数分後

「おつかれさまでしたー」

安全装置さんのお陰で無事生還した俺達。ただ、

「あのー大丈夫ですか?」

と係員さんに声をかけられ。

「ハッ!？」

俺はスピード感と疑問でかき混ぜられ飛んでいた意識を取り戻し。

「アリス! 終わったぞ! 生きてるか!？」

と隣に座るアリスの肩を揺する。

するとアリスは――

「これで――」

ゆっくりとジェットコースターを降りて。

ギュツと握りこぶしを作って。

「これでもう何も怖くないよね……ッ!？」

と、目尻に涙を溜めて笑顔で小さくガッツポーズをとった。

――ジェットコースターに真摯過ぎる!!

その姿はまさに、大きな壁を一つ乗り越えた様子。

「さあ、次のアトラクションを探そうね!」

そして再び俺の手を引いて前を行く。

――やっぱりアリス、遊園地にガチってないか？

俺としては手を繋いでるといふ状況を意識してしまってから動悸が収まらないのだがアリスはその辺全く気にしているようには見えない。

――ダメだダメだ! アリスが真面目に楽しもうとしてるのに変な意識して邪魔しちやいけない!

アリスの気持ちに水を差すわけにはいかない。

俺は雑念を振り払って、事前に調べておいたアトラクションを紹介してみる。

「室内系になるんだけどVRで面白そうなヤツがあったぞ」

「おお、VR! 私経験したこと無い!」

俺はパンフレットの地図を指で示しつつ説明する。

「色んなシチュエーションが楽しめるんだけど、バトル系が良いんじゃないかと思うんだ」

「あーハル君好きそうだねえ。良いよ、1個目は私が選んじやったから次はハル君がやりたい事やろう!」

とそのままVRゲームが楽しめる施設へ向かった。

——VRと言えば非現実感が醍醐味……アリス、楽しんでくれるかな？

なんて、密かにある事を計画しながら。

到着した施設で俺はアリスがVRについて簡単な説明を受けている隙にゲームの設定を係員の人に伝える。

そして準備が整い、二人でいざヴァーチャル世界へと。

視界に広がるのはゲームではお約束でも現実では見た事無いレンガ造りにたいまつで照らされたダンジョン。

「わあ、凄い！ 本当にゲームの中に入ったみたい！」

そんな非日常な世界を堪能するアリスは、ダンジョンの床やら壁やらをきよろきよろ興味津々に見渡していて、まだ気付いていない。

「それじゃアリス、頑張ってくれよ」

俺の言葉にアリスは首を傾げた。

「え、どういう事？ 二人で攻略するゲームだね。ハル君何もしないの？」

「そういう事じゃ無くて——」

その問いかけに俺はパーティの詳細画面を表示させながら、伝えた。

1P アリシア 勇者 2P ファルマ 僧侶

「今回の主人公はキミだ」

120話 非日常を楽しもうぜ

「主人公!? 勇者!? どういう事かな!」

ウインドウを覗き込み、驚くアリスに伝える。

「折角ゲームなんだから、普段と前衛後衛入れ替えた方が面白いと思ってる。だから俺は僧侶」

俺は手にした杖を見下ろす。

VRだから重量は無いが普段と違う得物に少しわくわく。

そしてゲーム開始を告げるファンファーレと共にダンジョンを進めと表示され。

「さ、非日常を楽しもうぜ」

いつもの調子でアリスの前に出たところ。

「つて僧侶が前にでちゃダメなんじゃないかな!」

と慌ててアリスが追い越して行って、頭を掻いた。

「おっとっと。自分で設定したのにやっぱ癖になってるな。気をつけないと」

アリスより前に出ないように、斜め後ろを歩く事数歩。

突如、怪しげなBGMが猛々しいBGMへと切り替わる!

「えっ、何!? 何かな!」

「エンカウントだ! ほら、剣を抜いて!」

レンガ造りの通路を阻む様に現われる人骨型の敵とスライム型の敵を指さしてアリスを急かす。

「抜くって、あ、このボタンで——出来た! 私剣なんて使ったことないけどね!」

「大丈夫大丈夫、所詮ゲームだし適当に振ってればダメージ入るよ」

「こ、こうかな? ええいつ!」

アリスがぎこちない動きでスライムに剣を振り下ろすと、エフェクトと効果音が発生しダメージが表示された。

「やったね! ちゃんと攻撃出来てる!」

手応えを感じたのかアリスはそのままザックザックとスライムを斬り付け。

「アリスー！ 後ろ後ろ!!」

「え？ ——わわっなんかブルブルってした!？」

「スケルトンに殴られてるんだよ！ ヒール！」

「あ、ありがとね！」

「とりあえず移動して！ 挟まれてるから！」

「わかった！」

アリスがスライムとスケルトンの間を抜けて、陣形を立て直す。

「どうしよう、ハル君」

「こういう時は各個撃破が基本！ 折角最初に殴ったんだ、まずはスライムを倒そう！」

「了解！」

アリスは頷き、改めてスライムへと斬りかかり。

「今度は挟まれないようにな！」

「うんっ大丈夫ッ！」

慣れてきたのか、スケルトンの攻撃はきっちり身躲して、

「まずは、トドメッ」

スライムが両断され、消えていく。勢いそのままにスケルトンにも攻撃！

「てえい！」

一際派手なエフェクトと効果音が鳴り、数倍のダメージが表示された。

「ナイス！ クリティカルだ！」

「こつちもくおしまいっ!!」

アリスは反撃より先に二の太刀を繰り出してスケルトンも撃破した。

「はーっ、はーっ……こ、これで良かったのかな？」

戦闘勝利のBGMが鳴る。

「うん、良いと思うよ」

「前衛さんってこんな感じなんだね……緊張したあ」

ぐっと伸びをしてリラックスするアリスだが、

「和んでる所悪いんだけどこれ普通のゲームじゃ無くてアトラクショ

「んだからさ」

「うん？　それがどうかしたのかな？」

「いや、多分こつちじゃなくて運営のペースで展開が進むと思うから――」

と、説明しようとした言葉の途中でBGMが戦闘用に切り替わった。

「えー!?　エンカウント!?　歩いてないんだけどね!!?」

「まあそこは大人の事情ってヤツで。次いつてみよう！」

「大人の事情かあ世知辛いねえ……」

アリスが剣を構え直すと、今度は無数のスライムが群れを成し、俺達を囲む様に現われた。

「つて多過ぎなんだけど!?!」

「しかもこの状態からスタートつて……んー俺は回復魔法しかリストに無いしな。アリス、なんか魔法使え無いか？　右手のボタンでリストが確認出来るから」

「え？　えーと……あつた！　つて、サンダーストーム？　なんで雷属性の第四階級基礎魔法なのかな？」

「勇者は雷を操るもんなんだよ」

理由は不明だが勇者にはそういうイメージがある。

「そう、なんだ？」

「それよりさつきからずっとヒールしてるんだけど、早く使ってくれないと流石に回復が間に合わなくなるぞ」

アリスが魔法を確認している時からずっと、スライムの群れは俺達を攻撃していた。併せて俺もヒールを連打している。

「ああつそうだった囲まれてるんだったね、攻撃されてもちよつとした振動しか感じ無いから忘れてたよー！」

アリスは剣を天井に掲げて、

「えつと、このままボタンを押せば良いのかな？　えいつサンダーストーム!!」

彼女が入力すると剣の切っ先から黄色い稲妻が迸りスライムの群れを焼き払った。

「……ダンジョンの中っていう設定のせいなんだろうけど、第四階級にしちゃしょぼい演出だったな」

「サンダーस्टームっていうか第二階級のサンダーみたいだったね。でも、普段使え無い属性の魔法が使えるのちよつと楽しい！」

「楽しんで貰えてるなら何より。……正直、いくらアトラクション用の簡易ゲームだからってヒールしか使え無い僧侶はどうなんだって思うけどな」

ゲーム的にはもつとこう、『身体強化魔法（エンハンス）』とか所謂バフ系魔法くらい欲しかった。

そしてまたも勝手に始まる戦闘用BGM。

「またエンカウントしちゃった!? 動いて無いのにい〜!」

「まーまー。勝手は判ったろ? この調子で攻略しちゃおうぜ」
俺達はその後十数分、VRゲームを楽しんだ。

◇ ◇ ◇

「お疲れ様でしたー」

ゴーグルを外して、スタッフさんに手渡す。

「いやあ、焦ったな。流石VR」

俺はアリスから目を逸らしつつ言う。

「焦ったのは私だからね!」

『第四雷撃魔法（サンダー・ストーム）』の演出がショボかったので完全に油断していたのだが、流石アトラクションの一つにしているだけあってボス戦は演出が派手だった。

お陰で臨場感が半端なく、いつもの調子でアリスを攻撃から庇い、先に倒れてしまったのだ。

「最後アリスが上手い事必殺技を使ってなかったら負けてたな」

「操作方法判らなくてすっごく大変だったけどね!」

最終的に雷を剣に宿したアリスの斬撃がボスを倒して、無事アトラクションは終了した。

「でも、どうだったかな。勝手に設定しちゃったけど、楽しめたかい?」

「それは——勿論、楽しかった。ハル君の言うとおり、いつもと違う戦

「い方って新鮮で面白かったね」

「そっか。ありがとう、わがままに付き合ってくれて」

「わたしこそ、ありがとう。普段ハル君がどんな目線で戦ってるのか
ちよこっただけ判って、嬉しかった」

こうして無事、VRゲームで非日常作戦は成功した。

121話 “k o k a”

「それじゃあ次は私の番だね」

「いつの間にかターン制みたいになってるのな」

「次は、アレに入りたいかな！」

選ばれたアトラクションの名は『悲劇の病棟』。

廃病院の中を巡るといふ設定のお化け屋敷だった。

「アリスはなんでそう怖い系ばかり選ぶんだ？」

「文字通り、怖い物見たさ——ってヤツかな」

何故かキメ顔で答えられる。

「アリスが楽しいならそれでいいけど」

「因みにハル君はお化け屋敷って大丈夫なのかな？」

「全然平気だな。お化けなんかよりトラの方がよっぽど怖い」

「そ、それはそうだね」

何処か彼方でトラが抗議の声を上げている気がした。

「それじゃあ並ぼうか」

そしてお化け屋敷へと向かった。



お化け屋敷では、なんとというか、案の定及び腰になったアリスが、「きやあっ!!」

と仕掛けに驚き継り付いてくるなんてお約束の展開が繰り広げられ、

——このイベントってフィクションじゃ無かったのか!?

と、謎の感動を覚えつつもまた俺の心は揺さぶられる。

ただ、仕掛けに逐一びっくりしつつも進み続けるアリスは見ていると微笑ましく、やはりデートかどうかなんて気にするのは水を差すように悪い気がした。

お化け屋敷の後も、色々なアトラクションを巡った。

俺のお気に入りは大砲を使った射的ゲームだ。

勿論大砲と言っても遊戯用の簡単なモノではあるが普段触るような代物でもなく、豪快な発射音が心地よかった。

そして、いつの間にかデートかどうかの疑惑より「楽しい」という気持ちが大きくなっていて。

気がつけばアリスと二人、時間を忘れて遊園地を楽しんでいた。「あつという間——楽しかったね、ハル君」

空がオレンジ色に染まる中、観覧車の籠に揺られながらアリスが呟く。

男女二人つきりで観覧車。

デートだったら何かしらイベントが起こりそうなシチュエーションだが、アリスは眼下に広がる遊園地を感慨深げに眺めている。

流石にここまでくると俺も落ち着いていて、アリスは全然意識なんてしていないだろうと判断していた。

「ああ、楽しかった。一人で来るような場所じゃないからな、誘ってくれて嬉しかったよ」

と、純粹に遊園地で楽しんだ今日という日を噛みしめて、礼を言う。

「私こそ。案内してくれてありがとうね、ハル君」

眩しい笑顔を返してくれるアリス。けれど、そこまでだ。

それ以上の特別な進展はなく観覧車は頂点を超えて下っていった。



名残惜しくも、遊園地を後のした帰り道。

「沢山遊んだからかお腹空いちやったね。何処かで食べて帰らない？」

と言うアリスの言葉で、フツと頭の中に見慣れた光景が浮かび上がる。

「だったら、この辺に丁度いい喫茶店があるんだ。どうだろう？」

「うん、いいよ！ ハル君のオススメなら期待しちゃうね！」

強く頷いてくれたアリスを先導して、俺は最近たまに通う喫茶店へと案内した。

店の名前は「k o k a」そのまま「こうか」と読むらしい。

「マスター。今日は二人なんだけど、空いてる？」

店に入るなり、友達に話しかける感覚で俺は確認する。

「いらっしやい少年。席が埋まっているように見えるか？」

店の主人の方も、軽い口ぶりで返してきて。

「貸し切り状態だ。好きな席へどうぞ」

との事だった。

「だつてさ、アリス。それじゃあこの席にしようぜ」

と、出入り口から近い二人用の席へアリスを案内する。

「わあ、優しい雰囲気のお店だね」

アリスは目を輝かせながら対面に座った。

「少し前に見つけたお気に入りのお店なんだ」

「そうなんだね。ふむふむ、ハンバーグにオムライス——親しみ易いメニューだね。ハル君のオススメはなにかな？」

「ん？ ー季節外れなだけ——このビーフシチューは絶品だぜ。世界一美味しいと思う」

「それじゃあそれにしようかな」

「判った。マスター！ ーいつもの”二人前よろしく」

「かしこまりました」

俺が注文を済ませると、アリスがはにかんでいた。

「ハル君つてばすっかり常連さんなんだね。 ーいつもの”なんて注文できるお店、すこし憧れちゃうなー」

「言つてもホントに最近見つけたお店だけだな。マスターと話が妙に合うもんでドライブが忙しい時はもっぱらここのお世話になるようになったんだ」

「そうなんだね。そう言われてみればマスターさんとハル君の雰囲気
が少し似てるね」

言われて、マスターの方を見る。えんじ色の長い髪を料理の邪魔にならないように後頭部で折り重ね、赤いシャツの上に黒のジャケットを羽織った、30代半ばの男性。

「……色だけで判断してないか？」

「いやいや、そんな訳ないって」

なんてくだらない話をしている間に、

「お待たせしました。まだお熱いので気をつけてください」

と、二人分のビーフシチューとパンがテーブルに並べられる。

「それじゃあ、ハル君絶賛のビーフシチュー。いざ、いただきますーす！」

とアリスは大きなスプーンでシチューをすくい上げ口へ運び。

「——ん〜！ 美味しいっ!!」

ぱあつと花が咲くエフェクトでも見えそうな明るい表情を作った。そしてもう一口、もう一口と食べていく。

「お野菜もお肉もほろほろで口の中で溶けてるみたい！ コクも深くて口の中に残る余韻も幸せ……ハル君の言うとおり世界一美味しいかもね！」

「よかった、アリスの口にも合って」

「ところでハル君は食べないの？」

スプーンをくわえたまま小首を傾げるアリス。

何故だか少し気まずくなって俺は目を逸らしつつ。

「……猫舌なんだ。まだ熱すぎて食べられない」

と、答えるや否や。

「くふっ」

とアリスが可愛らしく笑った。

「火属性なのに熱いモノが苦手ってなんだか面白いね」

「ほっといてくれ」

他の人間に言われたら小憎たらしく思えそうな言葉も、アリスだと許せてしまう。これが惚れた弱みというものなのか。



「あー、美味しかったね！ ごちそうさま」

「ごちそうさまでしたっ」と

二人でビーフシチューを堪能し、落ち着いたところで不意に。

テーブルの上に大きめのフルーツパフェが置かれる。

「え、あの注文してませんけど」

と、俺が戸惑っていると。

「少年が折角ガールフレンドを連れて来たんだ。少しくらいサービスせねばと思ってな。俺の奢りだ」

とマスターは言い残し。

「ちよ、マスター!？」

俺の声を無視してマスターはカウンターの方へと戻っていった。

「わあ、サービス精神旺盛でいい人だね！」

アリスは喜んでいるが、大きめのパフエー一つに対してスプーンが二つだ。

——これ、完全にカップルとかで食べる事を想定してるヤツ……ッ!

「あ、桃も乗ってる。ハル君好きだったよね、そっち側あげるね」

アリスの方は何の気なしにパフエのグラスを回して俺の前にカツトされた桃を向ける。

折角の好意を無下には出来ないし食べ物を粗末にも出来ない。

俺は消えかけていたデート疑惑が再燃するのを感じながらパフエをすくった。

122話 ズルいぜ、アリス……

「甘くて、冷たくて、美味しく！ 最高のデザートだね！」

アリスは嬉しそうにパフェを食べ進めて行く。

一方俺と言えば、「一つのパフェを食べ合っている以上どうやっても間接キスになる部分が生まれるのでは」とか「遊園地の事がデートでなかったとしてもこのパフェ一つでデート案件なのは!?!」とかなんとか考えつつ、我ながらギクシャクした動きでパフェを食べる。

アリスが食べる場所を予測して出来るだけ触れないように、なんて考えていると爆弾を解体している気分だ。

——って、俺はこんなに意識してるのにアリスの方は全然気にしてないんだよな……。

今日一日ずっとそんな調子だった。

デートか？ デートじゃ無いのか？

変に意識して、考え込んで、ドギマギしてるのは俺だけで。

アリスはただ、何事も純粹に楽しんでいるように見えた。

今更パフェ一つで悩むことでは無いと、自分に言い聞かせる。

——……でも、やっぱり意識しないなんて無理だよ、思春期男子には。

と、どれだけ頭の中で結論を出しても胸の鼓動は高鳴る一方だった。

結局、何事も無いままパフェも食べ終わる。

「ごちそうさまでした〜！」

「ごちそうさま。また来るよ、マスター」

「ああ。いつでも歓迎するぞ、少年」

マスターに別れを告げて帰路に戻る。

日はすっかり落ちて星が夜空を飾っていた。

そして学園の敷地に入って、俺はホツとした。

「ねーねーハル君。少し疲れちゃったからあそこで休憩して良いかな？」

とアリスが指さすそれは、学園の所々に設置されているベンチの一つ。

時間も時間で周囲に他の学生の姿は無い。

あともう少し歩けば寮に着くのだが、色々なことがあった。

「判った。少し休もうか」

俺はアリスと共にベンチに座る。

電灯が薄く俺達を照らす。

アリスと俺の間には、少しだけ距離があった。

慣れたカップルならもっと寄り添ったりするモノなのかもしれない。

——そうだ、これくらいで丁度良い。まだ、始まったばかりなんだから。

今日という一日が終わる。アリスは終始楽しそうだった。

俺はデートかどうかなんて気持ちに振り回され続けたが、この距離感が最後に答えを教えてくれた気がした。

——余計な熱が、引いていく。

デートじゃなかったとしても。

楽しそうなアリスと過ごせて久しぶりに充実した一日だった気がする。

「楽しかった」

言葉が零れ落ちる。

「良かった。私も楽しかったからね」

アリスも満足してくれたみたいだ。

終わり良ければ全て良し。

そう考えて居たところで。

ふと。

「月が綺麗だね」

アリスがそう囁いた。

言われて視線を上げれば大きな満月が優しく煌めいていて。

思わず見蕩れてしまった。
その瞬間。

頬に暖かな感覚があった。
頭が真っ白になる。

少し遅れて振り向くが、既にアリスはベンチに居ない。
いつの間にか、寮の方へと進む背中が見えた。

何が起こったのか理解できず熱を感じた頬に手を当てて呆然とアリスの背中を見つめ。

少ししたところでアリスは立ち止まり。

すうーっと深呼吸をしてから、くるりとこちらを向く。
距離を取りつつも俺達はしっかりと目と目を合わせて。

「今日はありがとね」

彼女は桜色に染まった笑顔を見せて。

「また、デート」しようねっ！」

ハッキリそう言い残すと、逃げるように寮の方へ駆けていった。

取り残された俺は。

最後の最後で突きつけられた決定的な現実を前に。

震え、思わず顔を隠して。

——やっぱりデートだったああああ!!?

心の中で絶叫した。

冷めた筈の熱が、何倍にも膨れ上がって全身に巡る。

心臓が高鳴り、緊張感や気恥ずかしさが後払いのように襲ってくる。

——デートだった? デートだった!? デートだった!!

今更取り繕うことは出来ない。

俺はただ、混沌とした感情の暴走を受け入れるしか無い。

——全然そんな素振り見せなかったのにッ! こんな、不意打ち

にッ！

完全に一本取られた。

きつとアリスには判っていたんだ。俺が、「デート」を意識してしまえばこうやって緊張して、ともすれば空回ったりして、上手く楽しめなくなるかもしれないと。

だからそんな気は無さそうな素振りを見せ続けて、俺に余計な力を抜かせた。

「ズルいぜ、アリス……」

したたかな少女が仕掛けたささやかな駆け引きは俺の心をよりいっそう強く惹き付けて。

満月の輝きが、より一層強く目映く感じられた。

122・5話 きつとこういう感覚が——幸せって言うんだろう。

私は自室のベッドで枕に顔を埋めていた。

——言っちゃった！ やっちゃった!!

恥ずかしさから足をバタバタさせて悶える。

頬とは言え勢いでキスマまでしてしまった自分に自分で驚きを隠せない。

ピコンと端末に反応。

『そろそろ予定していた時間だと思えますが首尾はいかがでしたか？』

と部長さんからメッセージが届いていた。

『計画通りにいきました／＼／』

と返信する。

すると同じグループに居るレンちゃんからも、

『それは何より』

とメッセージが届いた。

そう、それは約一週間前のお話——



『救援要請っ！』

ハル君を遊園地に誘ったその日の晩に、私は部長さんとレンちゃんにメッセージを送っていた。

そして、私の部屋に二人が集まってくれる。

「何事ですか？」

「その、勇気を出してハル君を遊園地に誘ったんだけどね」

「……やるじゃん」

「いや、それが——ハル君、多分デートのお誘いだって気付いて無いみたいなんだよね……」

私の言葉に二人の表情が固まった。

数秒後、部長さんは顎に指を当てレンちゃんはやれやれと言った風

に肩をすくめる。

「……ファルマなら、あり得る」

「うう、私どうしたら良いんだろうね……」

「確認なのですがアリシアさんはどうなる事が理想なのですか？」

「そりゃ、折角の初デートなんだから良い思い出を作りたいと思ってるよ。でもわざわざデートだって念押しするのも、恥ずかしいしね……」

「——でしたら、こんな案はどうでしょうか」

困り果てた私に、部長さんはある「策」を教えてくれた。

曰く、

「先輩の性格から考えて、初デートだと気付いた場合緊張や萎縮して、その日を「楽しむ」という事が出来なくなるでしょう。そうなるよりは現時点のデートだと気付いていない状態を維持した方がお互いに楽しい時間を過ごせると考えられます」

「……でも、折角の記念すべき初デート」

「レンちゃんの言うとおり、出来ればハル君にはその——デートだつて意識して欲しいかな」

お互い初めての恋人と、初めてのデートなのだ。「ただの楽しい一日」じゃなくて「恋人との楽しい一日」として思い出に残して欲しいし、残したい。

「そこで、少し工夫を加えましょうか。アリシアさんはデートが終わる直前までは平静に、普段通りの振る舞いを努めて貰います。そうすれば先輩はその一日がデートとは考えず、ありのままの先輩としてアリシアさんをエスコートしてくださいさる筈です。そして、遊び終え帰路に付いた所で——仕掛けます」

「仕掛けるって、どういう事かな？」

「何をするかはアリシアさんにお任せしますが、何か、「恋人らしい特別な事」をするのです。そして先輩に、「またデートに行こう」とその日がデートであった事を伝えて去ります。そうすれば先輩の中で「普段通りの一日」が一気に「恋人と過ごした一日」に塗り替えられる筈です」

最後の最後で「特別な日」へと一気にひっくり返す。
それが部長さんの提案した策だった。



結果としては大成功、といって良いだろう。
鈍感なハル君も顔を真っ赤にして呆然としていた所までは確認した。

デートとして、恋人として、意識してくれたに違いない。
多分、私も人の事言えないくらい顔が赤くなっていたと思うけど。
因みに、帰り道のあの通りでハル君を食事に誘うように提案してくれたのも部長さんだ。ハル君が最近通うようになった喫茶店がある事を知っていたみたい。

ピコンと、更にメッセージが届く。レンちゃんからだ。

『それで、最後は何をしたの?』

『それを聞くのは野暮ではないかと……』

『気になるモノは気になる。どうしても嫌なら別に良いけど』

と続く二人のメッセージに返信。

『えっと、大丈夫。その、ほっぺにキスしました／＼』

するとピコンと音がなって、レンちゃんから可愛らしいキャラクターと「いいね!」という文字の描かれたスタンプが送られてきた。

私は自分で自分の行動を思い出し、

恥ずかしくなって再び、顔を枕へ。

—— や、やっぱりキスは行きすぎだったかな!? 明日からどんな顔してハル君に会えば良いんだろうね!?

また足をバタバタさせた後、高ぶる気持ちを誤魔化すように追記する。

『その前に、〴〵月が綺麗だね〴〵って言ったけどそっちの方はハル君には伝わらなかったみたい』

私の言葉を受けて素直に月を見上げたハル君の様子から、ハル君はあの言葉に秘められた意味を知らなかったのだろうと思った。

ピコン、とレンちゃんから今度はキャラクターがずっこけているスタンプが届く。

『先輩らしいです』

部長さんは携帯端末の向こう側でクスリと笑っている気がした。

『お陰様で初デートは多分、成功しました。協力してくれてありがとうございます』

と改めてお礼を伝える。

『お二人の力になれたのならば光栄です』

『ごちそうさま』

二人の返信を見届けて、私は携帯端末を手放した。

枕を抱えて天井を見上げる。

頭がぼーっとして、今日過ごした時間が早回しの映像のように流れていく。

——部長さんの作戦……私にも効果あるんだね……。

私もまた、ハル君と同じように。

最後の瞬間、ハル君が明らかに“恋人として意識してくれた”お陰で。

ただでさえ楽しかった一日が、より色鮮やかに上書きされた。

ああ。

きつとこういう感覚が——幸せって言うんだろう。

そうだよね？

123話 俺は“最弱の八天導師”だけど

「いらっしやい、少年。なんだ、今日は一人か」

ある日、俺はまた喫茶店に来ていた。

「またデートならサービスでもと思ったんだが」

マスターに言われて、数日前の出来事が思い起こされる。

「勘弁して下さいよ。あの時はびっくりしたんですから」

俺は恥ずかきで視線を逸らしつつ、カウンターに座った。

「ははは。だが、悪くは無かっただろう？」

「それは、まあ、……はい」

恥ずかしかつたし緊張したがアリスには好評だったし文句は言えない。

「それで、注文は？」

「いつもの”で」

「ふむ。気に入って貰えているのはありがたいがたまには他のメニューに興味は湧かないのか？」

「いやーやっぱりあの味からは逃げられません。なんて言うか、俺の好みにぴったりハマってる感じがするっていうか」

「そうか」

マスターは少し嬉しそうに目を伏した。

暫くして、至高のビーフシチューと食べやすい小さなパンが並べられる。

が。例にもよってすぐには食べられない。シチューが冷めるまでマスターと適当な雑談をするのがお約束になっていた。

「最近、学園はどうだ？」

「突然、父親みたいな事聞いてきますね」

「ちよつとした興味本位さ。何しろあの学園は特別だろ？」

「確かに、特別ですね」

俺はシチューをかき混ぜ熱を飛ばしつつ、話す。

「最近は——楽しい、ですね。楽しんでばかりじゃいけない事情もありはするんですが」

「その口ぶりだと、以前は楽しく無かったのか？」

「正直、息苦しかったです。あの特別な空間に居る事が身分不相応に感じられて」

「意外、だな。キミはそういう事に囚われない明るさを持っていると思っていた」

「それはマスターと出会ったのが最近だからですよ。最近、友だち達のお陰で大分前向きになれた気がするんです」

「漸く食べられる温度になったビーフシチューをスプーンですくい上げ、一口食べる。」

芳醇な香りと濃厚な味わいが幸せを運んでくれた。

「何にせよ、楽しめているのなら何よりだ」

「ホントに、話題に困ったお父さんみたいになつてるじゃないですか」

俺はからかい混じりに笑うが、マスターはフツと苦笑すると真面目な顔を作る。

「大切な事だ。他の生徒達の様子はどうなんだ？」

「そうですね。生徒全員を知ってる訳じゃないですけど——」

自分の思うままにその道を探求するルクシエラさんやレン、ナギ。

楽しそうに遊び、笑うキータやハルカ達の姿が脳裏に浮かぶ。

「俺の知ってる限りではみんな自分なりに楽しんでいるように見えません」

「そうか。それなら、なによりだ」

「でも、変わった事を気にするんですね。まるで校長先生みたいだ」

「はは。言つただろ？ だだの興味さ……」

マスターはそう言うのと虚空を見上げた。

「俺にとって『学園生活』というモノは決して楽しいモノでは無かった。必死にしがみついて、もがいて、足掻いて、そんな苦しい思い出ばかりの場所だった」

「そうだったんですか」

脳裏に懐かしい記憶がよぎる。嘗てそんな形容が出来るヤツが居た。

「だから、正直に言えば羨ましいよ」

視線が降りてきて、俺の胸に向けられる。

そこには、紅い羽根の勲章があった。

「キミは『八天導師』だ。そんな楽しい学園を、しっかり守らないとな？」

スプーンを咥えて、続く言葉に耳を傾ける。

「『八天導師』はそれだけ期待と信頼されている。学園だけにとどまらず、イーヴィルや悪しき魔法使いと戦いこの世界の秩序を保っているのだから」

最後の丁度一口を食べ終え、紙ナプキンで口を拭ってマスターと目を合わせた。

「やっぱり世間の人には、『八天導師』ってそんな風に映りますよね」

「重荷かい？」

「少し前までの俺なら、そう考えて居たと思います」

「そうか。——前へ進んでいるんだな、キミは」

「そのつもりです」

特別な学園の中でも更に特別な才能を持つ者達が集まる『八天導師』。

選ばれたときは、『どうして自分なんかが』と思った。

けれど、先の戦いで俺は『八天導師』である事に『使命感』と『誇り』を感じていた。

それに、教えて貰った。俺は弱い。でも、強くなれると。

今の俺に迷いは無い。

俺は『最弱の八天導師』だけど、八天導師の責務から逃げたくは無
いと思った。

俺なんかでも守れるモノがあると知ったから。

俺なんかでも期待し、信頼してくれる人達が居るから。

「マスター。これはここだけのお話です」

「なんだい？」

「マスターの言葉を借りるなら、『悪しき魔法使い』が暗躍しています。少し前に学園を中心にイーヴィルが大量発生した事件もそいつの仕業です」

「ふむ」

「あと、俺は今ものすごく質の悪い奴に四六時中目を付けられています」

「それは大変だな」

「この前派手に動いた分、今は大きな動きを見せていませんがまたいずれ、奴らはこの世界の平穩を脅かそうとするでしょう」

俺は胸の勲章に手を当てて、誓う。

「だけど、好き勝手にはさせません。この勲章に誓って、俺達〃八天導師〃がなんとかしてみせます」

「――判った。信じているぞ、少年」

マスターは俺の決意を受け止めてくれた。

「ならば、これは先行投資みたいなものだな。大した物じゃあ無いが英気を養ってくれ」

とマスターはフルーツシャーベットを差し出す。夏場には嬉しいデザートだ。

「ささやか過ぎる応援だが、俺からはこれ以上の事はできない」

「その気持ちだけで、十分ですよ。ありがたくいただきます」

俺はシャーベットを口へ放り込んだ。

冷たい爽やかな甘みを堪能する。

学園の外にも、こうやって俺を信頼し支えてくれる人が居る。

俺は改めて気を引き締めるのであった。

第二部完結と休載のお知らせ

ここまでご拝読ありがとうございます。

先行公開していたなろうに追いついた事と、

身の回りの環境変化により現在執筆を休止しているため第三部の公開は延期させていただきます。

改めまして、この物語にお付き合いしていただきありがとうございます。

また次の機会でもお付き合いしていただければ、

その時、ほんの一秒でも「楽しい」と感じていただけたら幸いです。

最後に、キャラクターのおさらいをちよつぴり書いて置きます。

メイン

・ 八天導師

炎天ファルマ

主人公じゃ無いと言い張っている、物語の主要視点人物。何の才能も無いと考えて居たが第二部までの戦いを通して自分が「他人の力を借りる力」を持っている事を自覚する。

また、こちらは自覚が無いがマジッククラフトの腕前は一般人のレベルと同レベル。

氷天ドライズ

ファルマが主人公として推している古馴染み。「世界の中心」と呼ばれる事も。

原初の魔力、「破滅の光」を継承していると思われていたが実態は新たに発見された原初の魔力、「明鏡の氷」を宿していた。

複数の原初の魔力を使い分け、ファルマが思い描く「主人公らしさを貫き世界を守っている」。

光天ルクシエラ

ファルマとドライズの師匠。原初の魔力、「破滅の光」の正当な後継者の一人。

その膨大で強力な魔力から畏怖されている。
傍若無人で尊大な性格をしているが身内にはかなり甘い。
力も富も持ち合わせて居るが胸のサイズだけは持ち合わせて居ない。

黒天シジアン

嘗て、物語の舞台とは違う世界でファルマによって名付けられた『不朽型魔導兵器【異伝】』の依り代。

名付け親であり、人生の先輩であるファルマに心酔しきっており、時折ストーカーまがいの行動をしてしまう事も。

古代兵器として情報処理能力に長け、ファルマの幸せこそが自分の幸せであると奔走する健気な少女。

水天レン

極度の魔法陣オタク。独自規格の魔法陣である『紋章』を操り、その構造の精密さや発動される魔法の内容は通常の魔法陣と比して三倍を超える。

ファルマは嘗て、物語の舞台とは違う世界でこの『紋章』を叩き込まれて居る為世界で唯一レンの『紋章』を理解し応用する事ができる。ただし本人達にその記憶は残っていないため不思議がつて居る。

風天アイル

八天導師総帥。自由をこよなく愛し、毎朝定刻に学園の空を箒で駆け回り奇声を発する学園のモーニングコール。最高学園主席の成績を誇り、大地の賢者ティアロの三番弟子であり後継者。

自身が所属していた孤児院のメンバーを愛していたがその思いを利用されイーヴイルとなってしまう。

突飛な行動に目が行きがちだが根は真面目な優等生。

雷天イルゼルナ

ルクシエラの永遠のライバルにして永遠の2番手。

古くからルクシエラを超えるべき壁として認識し、競い合っては敗れてきた。

ルクシエラにとっては数少ない“歩み寄ってきた者”であり、いつ

の間にか友人扱いされ、それを満更でも無いように受け取っていた腐れ縁。

雷の魔力を動力とする魔法機械を専門とし、ファルマに何処か親近感を抱いている。

地天アーシエ

あまり目立たない4年B組の委員長。回復魔法と支援魔法を得意とする後方支援型であり、ティアロが作り出した魔石技術を得意としその能力をティアロに見出されて八天導師に入った。

争いを好まない温厚な性格な為何かと損な役回りを押しつけられがち。

変人奇人が集まる八天導師の中で数少ない常識人枠だが実は洞窟でお昼寝するのが好きという変わった趣味がある。

英雄イクリプス

八天導師では無いが八天導師の補佐などを行い、ほの暗い内容の任務を請け負っている。ルクシエラの双子の弟であり、より強く“破滅の光”を継承している現時点最強の剣士。自分勝手なルクシエラとは真逆で、膨大な魔力である“破滅の光”を世界と人々の為に使う様滅私奉公を心がけている。

・三賢者

大地の賢者ティアロ

学園の校長兼理事長でありイクリプス、ルクシエラ、アイルの師匠。そして八天導師を組織した人物。通称テラ。魔法の適正管理を掲げ、魔法の悪用を摘発したり悪しき魔力の象徴であるイーヴィルの討伐を行っている。その功績によって世界中に“賢者”として名を轟かせている。

天空の賢者セレスティアル

ドライブとファルマの担任教師でありティアロの妻。通称セレナ。夫であるティアロを支えるべく教鞭を手に取り雑務を処理している。

嘗て戦闘用の魔法を大量に開発した経緯を持ち、その功績から“賢者”の称号を与えられている。

人間の賢者ジン

学園の保険医。間延びした口調が特徴で、とても体格が小さな桜色ツインテールの合法ロリな姿をしているが実は元男性であり肉体改造の結果そうなった。

ティアロとセレスティアルの親友であり、二人の活動を支援している。

不老不死の研究をしていて、数多くの回復魔法、医療魔法を開発した功績から「賢者」の称号を与えられている。

・一般生徒

アリシア

元、三大欲求「性欲」を司るイーヴィルの核だった少女。ファルマの幼なじみでかつてはファルマを振ったが紆余曲折の果てにファルマの恋人になった。

幻影を産み出す魔法や回復魔法を得意とする後方支援タイプ。

八天導師として任務に勤しむファルマに対して、力になれない事を気にしている。

ユウ

ドライブズの元へ空から降ってきたとされる記憶喪失の少女。イーヴィルの発生に何らかの関与が疑われたり、ドライブズの秘められた力を目覚めさせたりと明らかに異質かつ重要な人物であるため、三賢者達に手厚く保護されている。

年齢に対してやや情緒が幼め。

ナギ（一条 凧）

元、半裸のバーサーカー。戦いの道を己の生き方と決め、魔法を交えた武道を極めんと日々刀を振う外来人。八天導師に匹敵する戦闘能力を持つがこの世界の問題について一歩引いた立場から一生徒として過ごしていたもののファルマによって「世界の中心」近くに引き込まれてしまった。

ハルカ&キータ

孤児院の年少組の双子の姉弟にして、元、三大欲求“睡眠欲”と“食欲”を司るイーヴィルの核。ファルマの尽力により本来の姿を取り戻し、事件後はまた楽しく学園生活を送っている。

一年生の中でも“経験豊富な方”であり、時々上級生のお手伝いとして戦闘に駆り出される事もある。

・敵対勢力

第四の賢者カイ

嘗てティアアの友人であった男性。第四の賢者を名乗り、原初の魔力、“拒絶の闇”を操り暗躍する。

その目的をティアア達は“究極のイーヴィルを産み出す事”と考えて居るがはたして。

拒絶の闇トロー

原初の魔力、“拒絶の闇”の人格そのもの。

人間の清濁合わせた全てを愛しておりその愛の形はあまりにも歪。

この世界において否定され討伐される人間の“悪しき願い”たるイーヴィルに肩入れする事で人間の善性と悪性双方を愛でようとしている。

また、一般人に過ぎなかった筈のファルマとの戦いの中でその生き方に彼女の愛する人間性を感じ取り、強い興味と執着を持つ様になる。

今では第四の賢者に力を貸しつつも世界のどこかから常にファルマの生き方を“見続けている”。